

茨城県協和町文化財調査報告書第1集

スプリングフィルズゴルフクラブ造成に伴う

小栗地内遺跡群発掘調査報告書

丑塚古墳群

寺山古墳群

裏山遺跡

1986年3月

協和町小栗地内遺跡調査会

茨城県協和町文化財調査報告書

小栗地内遺跡群発掘調査報告書

協和町小栗地内遺跡調査会



圭頭大刀(金剛裝)



鉄器と農工具・雑他



馬具と銅劍・耳環



装身具各種

序 文

さきに久地楽長町地内から、東日本ではじめてと言われた新治庵寺関連遺跡と思われる銅の製錬用のかまどが発見され、大きな話題を呼んだ。

この度は、また小栗地内のゴルフ場造成にともない、六世紀から八世紀頃の古墳が発見された。また、この付近からは剥片石器や縄文・弥生時代の遺物及び鎌倉時代の五輪塔などが発掘され、複合遺跡として古代から中世にかけての遺跡を研究する上からも、町の歴史を解明するためにも極めて貴重なものであり意義深いものがあります。又、町が現在進めております、歴史のふるさとづくり事業にとっても明るい見通しがつき、誠によろこばしいことであります。

もともとこの地域は、古墳や埋蔵文化財が非常に多い地域であります。このたびのゴルフ場造成は、総武都市開発株式会社との話し合いにより文化財関係の約70%は、コースよりはらずされ緑地帯として自然のままに保存されることになり、その一部が発掘されたわけですが、この発掘にあられました調査主任の瀬谷さんをはじめ、御指導を仰いだ県歴史館の阿久津先生、長い間ご協力をいただきました地域の皆さん方に心からお礼を申し上げまして発刊のことばと致します。

61年3月1日

協和町長

浦井 亀三

発刊によせて

小栗山内地遺跡群の発掘調査は、昭和59年12月から昭和60年4月までの5か月余に亘って行なわれた。この調査は、総武都市開発株式会社が小栗山内地内のゴルフ場造成に伴って行なわれたものである。この地区は、数多くの古墳が点在する文化財包蔵地として古くから知られており、文化財保護の立場から慎重に行なわれた。

発掘調査に当っては、浦井亀三町長を会長とする小栗山内地遺跡発掘調査会を組織して調査にあたった。この発掘調査によって弥生時代の住居跡や古墳が検出され、土器・装身具・馬具や刀剣など数多く出土し、この地域に於ける古代の人々の生活の一端を知る上で極めて貴重な資料が得られた。

この調査に当っては、終始県文化課や関係機関諸先生方のご指導と発掘調査会の方々のご協力を頂き、又この間総武都市開発株式会社の深いご理解とご協力を得、またこの調査の中心となってお骨折りを頂きました現地調査員の方々に始め文化財審議委員の皆さんや直接調査の作業に当って頂いた地元作業員の献身的なお骨折りに対し、心から厚くお礼申し上げます。

この報告書が郷土を知り郷土を愛する貴重な資料として、永くご活用頂けますようご期待いたします。

61年3月1日

協和町教育長

大久保 弥 作

例 言

- 1 本書は、茨城県真壁郡協和町小栗字丑塚 6,823、6,835、6,841-1、同字丸山 6,754、6,759、同字浦山 6,567、6,654-1、同字高山西 6,507-2、6,517-18 におけるゴルフ場造成工事に伴う遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和 59 年 12 月 10 日より昭和 60 年 4 月 30 日にかけて総面積 12,570.5 m²を実施したものである。
- 3 調査は、協和町遺跡調査会(会長・橋井亀三郎和町長)が行ない、瀬谷昌良が担当した。
- 4 現地における発掘調査は、瀬谷の指示の下に平松康毅・片平雅俊・斎藤神明・阿津坂博が分担し、調査補助員として立原睦代・小林明美・小林範子・酒井広子・千葉美恵子・田中幸夫・荻沼隆一・緑川智行・大塚善憲(以上、茨城キリスト教大学)が当り、更に多くの地元の方々の御協力を得た。
- 5 出土人骨の鑑定は、那珂湊市藤本医院・藤本弥城氏にお願いした。
- 6 出土鉄器の金属学的解析は、新日本製鐵第三技術研究所・佐々木隆氏、伊藤 薫氏にお願いした。
- 7 出土遺物の整理作業は、瀬谷・片平・斎藤・中山仁美・市毛美津子が分担し、田中・酒井・鈴木昭子(以上、茨城キリスト教大学)が協力した。
- 8 遺構・遺物写真は、瀬谷が担当し一部酒井の協力を得た。
- 9 押図・押表・図版の作成は、瀬谷の指示の下に片平・斎藤・中山・市毛・田中・酒井が分担・協力して行なった。
- 10 参考資料については、藤田安通志(「新治及古館」)・藤田積善・藤田清美の各氏の所蔵品を心良く観察させて頂いた。
- 11 調査及び本書の作成に際して、次の方々には有益なご教示とご協力を賜った。記して感謝する次第である。

阿久津 久	伊東 勇敏	大竹 憲治	大山 文朗	甲斐 博幸	川井 正一
瓦次 堅	木津 博明	木村 隆	小森 哲也	鈴木 裕芳	高井悌三郎
高根 信和	田口 崇	塚本 輝也	鶴見 貞雄	能島 清光	藤田安通志
藤田 積善	藤田 清美	安田 厚子	山野井哲夫	山本 慎	

(順不同・敬称略)

12 調査参加者

石川のぶ子	石川 初枝	岩島 敏治	岩渕 保	植木 勝治	植木 芳子
浦井孝一郎	海老沢昭三	海老沢文男	海老原キク	海老原敬三	海老原 敏
大竹 一男	小栗キイノ	海賀十六子	木下 房吉	国松 輝寿	小林 兼雄
小林すみ子	小林美代子	坂井 久江	清水 宗吉	薄 和子	薄 きよ
薄 信男	鈴木二美子	関口 正	館野 高松	中島 志ん	白田 麻子
白田 清	広沢 武	福田 巖	藤田啓四郎	藤田志づ江	藤田 富美
藤田 一	細谷 幸作	谷島 スイ			

凡 例

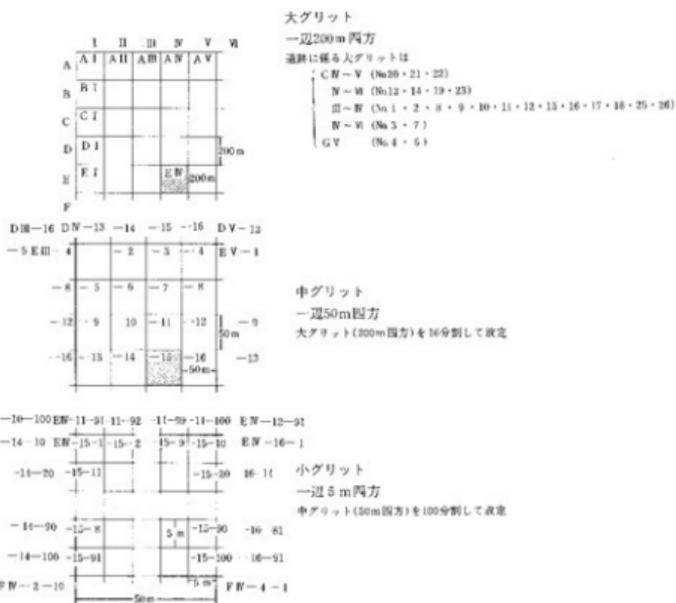
1 本文・挿図等に使用した遺構略号は、次のとおりである。

SI ……竪穴式住居跡 SK ……土 壇 SD ……溝状遺構

2 出土遺物解説表において法量 (cm) の略号は、次のとおりである。

A LI 径 B 底 径 C 器 高 D 臺台径 E 孔 径

※ ただし、() は標準径・遺存高を表わす。



目 次

序 文	
発刊によせて	
例 言	
凡 例	
I 地理的環境	2
II 歴史的環境	4
III 調査に至る経過	6
調査日誌抄	7
IV 遺 構	12
1. No. 22 地 点	12
I号墳/15 II号墳/41 III号墳/43 IV号墳/55	
V号墳/68 VI号墳/76 VII号石棺/81 VIII号墳/83	
IX号墳/91 X号石棺/101 SI-1/104 SI-2/110	
SI-3/113 SI-4/117 SI-5/123 SI-6/127	
SI-7/132 SI-8/136 SI-9/140 SK-1/143	
SD-1・2/145 集石1・2/163 中世墳墓/172 中世墓地/177	
2. No. 24 地 点	180
3. 試掘調査遺跡	199
4. 保 存 遺 跡	216
V ま と め	225
付編 I X号石棺出土人骨の観察所見	281
付編 II 小栗地内古墳出土鉄器の金属学的解析	283

挿 図 目 次

第 1 図 調査対象遺跡	1
第 2 図 関東ロームの分布	2
第 3 図 遺跡分布図	5
第 4 図 全体図	14
第 5 図 I 号墳・SD-1 平面図	17
第 6 図 I 号墳北方トレンチ東西セクション図	18
第 7 図 I 号墳周溝確認第 1・2 トレンチ石室北方掘方セクション図	19
第 8 図 I 号墳石室南方南北セクション SD-1 南北セクション図	20
第 9 図 I 号墳石室平面図(確認段階)	21
第 10 図 I 号墳石室平面図(検出段階)	22
第 11 図 I 号墳石室断面図・閉塞状態断面図	23
第 12 図 I 号墳石室展開図	24
第 13 図 I 号墳石室内遺物出土状態(1)	25
第 14 図 I 号墳石室内遺物出土状態(2)	26
第 15 図 I 号墳石室内出土遺物(1)	27
第 16 図 I 号墳石室内出土遺物(2)	28
第 17 図 I 号墳石室内出土遺物(3)	29
第 18 図 I 号墳石室内出土遺物(4)	30
第 19 図 I 号墳石室内出土遺物(5)	31
第 20 図 I 号墳石室内出土遺物(6)	32
第 21 図 I 号墳石室内出土遺物(7)	33
第 22 図 I 号墳石室内出土遺物(8)	34
第 23 図 I 号墳石室内出土遺物(9)	35
第 24 図 I 号墳石室内出土遺物(10)	36
第 25 図 I 号墳石室内出土遺物(11)	37
第 26 図 I 号墳石室内出土遺物(12)	38
第 27 図 I 号墳石室内出土遺物(13)	39
第 28 図 I 号墳石室内出土遺物(14)	40
第 29 図 II 号墳平面図・断面図	42
第 30 図 III 号墳平面図・断面図	45
第 31 図 III 号墳南北セクション図 東西セクション図・周溝内検出土 墳平面図・断面図	46
第 32 図 III 号墳石室平面図(確認段階)	47
第 33 図 III 号墳石室平面図(検出段階)	48
第 34 図 III 号墳石室断面図・閉塞状態断面 図	49
第 35 図 III 号墳石室展開図	50
第 36 図 III 号墳石室内遺物出土状態	51
第 37 図 III 号墳石室内出土遺物(1)	52
第 38 図 III 号墳石室内出土遺物(2)	53
第 39 図 III 号墳石室内出土遺物(3)	54
第 40 図 IV 号墳平面図・周溝確認トレン チ配置図	57
第 41 図 IV 号墳周溝確認トレンチ・セクシ ョン図	58
第 42 図 IV 号墳石室平面図(確認段階)	59
第 43 図 IV 号墳石室平面図(検出段階)	60
第 44 図 IV 号墳石室断面図・閉塞状態平 面図	61
第 45 図 IV 号墳石室展開図	62
第 46 図 IV 号墳石室内・前底部遺物出土 状態	63
第 47 図 IV 号墳石室内出土遺物(1)	64
第 48 図 IV 号墳石室内出土遺物(2)	65
第 49 図 IV 号墳石室内出土遺物(3)	66
第 50 図 IV 号墳石室内出土遺物(4)	67
第 51 図 V 号墳石室平面図(確認段階)	70
第 52 図 V 号墳石室平面図(検出段階)	71
第 53 図 V 号墳石室断面図	72
第 54 図 V 号墳石室展開図	73
第 55 図 V 号墳石室内遺物出土状態	74
第 56 図 V 号墳石室内出土遺物	75
第 57 図 VI 号墳石室平面図(確認段階)	78
第 58 図 VI 号墳石室平面図(検出段階)・断 面図	79
第 59 図 VI 号墳石室展開図	80
第 60 図 VII 号石棺平面図・断面図	82
第 61 図 VIII 号墳石室平面図(検出段階)	85
第 62 図 VIII 号墳石室断面図	86
第 63 図 VIII 号墳石室内遺物出土状態	87
第 64 図 VIII 号墳石室内出土遺物(1)	88
第 65 図 VIII 号墳石室内出土遺物(2)	89
第 66 図 VIII 号墳石室内出土遺物(3)	90
第 67 図 IX 号墳石室平面図・断面図	93
第 68 図 IX 号墳石室平面図・遺物出土 状態	94
第 69 図 IX 号墳石室展開図	95

第70図	Ⅸ号墳石室内出土遺物(1) ……	96	遺物(1) ……	147	
第71図	Ⅸ号墳石室内出土遺物(2) ……	97	第111図	I号墳周溝・SD-1覆土中出土遺物(2) ……	148
第72図	I・Ⅲ号墳石室内出土遺物・直刀(1) ……	98	第112図	I号墳周溝・SD-1覆土中出土遺物(3) ……	149
第73図	Ⅲ・Ⅳ号墳石室内出土遺物・直刀(2) ……	99	第113図	Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(1) ……	150
第74図	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ号墳石室内出土遺物・直刀(3) ……	100	第114図	Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(2) ……	151
第75図	X号石棺・展開図 ……	102	第115図	Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(3) ……	152
第76図	X号石棺周辺出土遺物 ……	103	第116図	Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(4) ……	153
第77図	S1-1 ……	105	第117図	Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(5) ……	154
第78図	S1-1 出土遺物(1) ……	106	第118図	Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(6) ……	155
第79図	S1-1 出土遺物(2) ……	107	第119図	DIV-4 グリッド出土遺物(1) ……	156
第80図	S1-1 出土遺物(3) ……	108	第120図	DIV-4 グリッド出土遺物(2) ……	157
第81図	S1-1 出土遺物(4) ……	109	第121図	SD-2・DIV-4 グリッド出土遺物(3) ……	158
第82図	S1-2 ……	111	第122図	DV-5 グリッド出土遺物 ……	159
第83図	S1-2 出土遺物 ……	112	第123図	DIV-2・3 グリッド出土遺物(1) ……	160
第84図	S1-3 ……	114	第124図	DIV-2・3 グリッド出土遺物(2) ……	161
第85図	S1-3 竈 ……	115	第125図	DIV-2・3 グリッド出土遺物(3) ……	162
第86図	S1-3 出土遺物 ……	116	第126図	集石1 平面図 ……	164
第87図	S1-4 ……	118	第127図	集石2 平面図 ……	167
第88図	S1-4 竈 ……	119	第128図	DIV-3-15 グリッド基礎石組遺構 ……	168
第89図	S1-4 出土遺物(1) ……	120	第129図	DIV-3-5 グリッド内検出蔵骨器出土状況 ……	168
第90図	S1-4 出土遺物(2) ……	121	第130図	集石1・2 出土五輪塔(1) ……	169
第91図	S1-4 出土遺物(3) ……	122	第131図	集石1・2 出土五輪塔(2) ……	170
第92図	S1-5 ……	124	第132図	集石2 出土遺物・蔵骨器 ……	171
第93図	S1-5 竈 ……	125	第133図	中世墳墓 ……	174
第94図	S1-5 出土遺物 ……	126	第134図	中世墳墓周辺出土遺物(1) ……	175
第95図	S1-6 ……	128	第135図	中世墳墓周辺出土遺物(2) ……	176
第96図	S1-6 竈 ……	129	第136図	中世墓地位置図・平面図 ……	178
第97図	S1-6 出土遺物(1) ……	130	第137図	中世墓地出土五輪塔 ……	179
第98図	S1-6 出土遺物(2) ……	131	第138図	Na 24 全体図 ……	182
第99図	S1-7 ……	133	第139図	EⅢ-4-50 ~ EⅣ-2-43 (東西セクション図) ……	183
第100図	S1-7 竈 ……	134	第140図	EⅣ-2-71 ~ 2-31 (南北セクション図) ……	184
第101図	S1-7 出土遺物 ……	135		EⅣ-1-83 ~ 1-89 (東西セクション図) ……	184
第102図	S1-8 ……	137	第141図	EⅣ-5-24 ~ 1-4	
第103図	S1-8 竈 ……	138			
第104図	S1-8 出土遺物 ……	139			
第105図	S1-9 ……	141			
第106図	S1-9 竈 ……	142			
第107図	S1-9 出土遺物 ……	143			
第108図	SK-1 ……	144			
第109図	SD-2 ……	146			
第110図	I号墳周溝・SD-1覆土中出土				

(南北セクション図)	185	図	212
第142図 SI-1	186	第163図 No.20・21 出土遺物(1)	213
第143図 SI-2	187	第164図 No.20・21 出土遺物(2)	214
第144図 SI-3	188	第165図 No.20・21 出土遺物(3)	215
第145図 SI-4・5	189	第166図 保存遺跡測量図(No.1・17)	220
第146図 EIV-1-4・14・15・21・23・ 24・25 出土遺物	190	第167図 保存遺跡測量図(No.2・25)	221
第147図 EIV-1-24・25・40 出土遺物	191	第168図 保存遺跡測量図(No.3・19)	222
第148図 EIV-1-40・50・94 出土遺物	192	第169図 保存遺跡測量図(No.7・11)	223
第149図 EIV-1-40・50 出土遺物	193	第170図 保存遺跡測量図 (No.8・9・10・16・26)	224
第150図 EIV-2-31・41 出土遺物	194	第171図 協和町小栗地内古墳分布図	226
第151図 EIV-2-41・42・52 出土遺物	195	第172図 No.24出土文字瓦比較資料	232
第152図 EIV-2-61・EIII-4-50 出土 遺物、参考資料	196	第173図 参考資料「新治汲古館」蔵(1)	234
第153図 EIV-1-4・24・25・ EIV-2-31 出土遺物	197	第174図 参考資料「新治汲古館」蔵(2)	235
第154図 EIV-1-15 出土遺物	198	第175図 鉄鍔・石室区分模式図	236
第155図 試掘調査遺跡(No.12・13)	205	第176図 試料鉄器中の化学成分の頻度分 布	285
第156図 試掘調査遺跡(No.14・15)	206	第177図 試料鉄器の実測図と鍔片採取個所 (その1)	291
第157図 試掘調査遺跡(No.18・23)	207	第178図 試料鉄器の実測図と鍔片採取個所 (その2)	292
第158図 No.18出土古銭(拓影)	208	第179図 試料鉄器の実測図と鍔片採取個所 (その3)	293
第159図 試掘調査遺跡 (No.20・21 トレンチ配置図)	209	第180図 試料鉄器の実測図と鍔片採取個所 (その4)	294
第160図 No.20・21 東西セクション図	210		
第161図 No.20・21 南北セクション図	211		
第162図 No.20 トレンチ内確認石棺平面			

挿 表 目 次

第 1 表 鉄製品・装身具計測表

237~258

1. 直刀
2. 鍔
3. 肥頭
4. 柄目
5. 足金具・貴金具
6. 鐙
7. 積尻金具
8. 鍔・把金具
9. 刀子
10. 鍔・石突
11. 釘かくし
12. 両頭金具
13. 雲珠
14. 鉄斧
15. 金属製品
16. 耳環・銅釧
17. 玉類(小玉・丸玉・白玉)
18. 玉類(切子玉)
19. 玉類(黒玉)
20. 玉類(勾玉)
21. 玉類(碧玉)

第 2 表 出土遺物(土器・石器)解説表

259~280

1. X号石椁周辺出土遺物解説表
2. SI-1 出土遺物解説表
3. SI-2 出土遺物解説表
4. SI-3 出土遺物解説表
5. SI-4 出土遺物解説表
6. SI-5 出土遺物解説表
7. SI-6 出土遺物解説表
8. SI-7 出土遺物解説表
9. SI-8 出土遺物解説表
10. SI-9 出土遺物解説表
11. I号墳馬蹄・SD-1 覆土中出土遺物解説表
12. II号墳石室周辺出土遺物解説表
13. SD-2, DIV-4, DV-5 グリッド出土遺物解説表
14. DIV-2, 3 グリッド出土遺物解説表
15. 集石2 出土遺物解説表
16. 中位墳墓周辺出土遺物解説表

17. E IV-1-4, 14, 15, 21, 23, 24, 25 出土遺物解説表
 18. E IV-1-24, 25, 40 出土遺物解説表
 19. E IV-1-40, 50, 94 出土遺物解説表
 20. E IV-1-40, 50 出土遺物解説表 21. E IV-2-31, 41 出土遺物解説表
 22. E IV-2-41, 42, 52 出土遺物解説表
 23. E IV-2-61, E III-4-50 出土遺物・参考資料解説表
 24. E IV-1-4, 24, 25, E IV-2-31 出土遺物解説表
 25. E IV-1-15 出土遺物解説表 26. Na 20・21 出土遺物解説表
 27. 参考資料解説表

第3表	試料鉄器の化学組成	284
第4表	関連鉄器の化学組成例	287

挿図写真目次

写真1	鍔片断面のマクロ組織	写真2	刀子鍔片のミクロ組織
写真3	I号墳出土鍔片のミクロ組織	写真5	鉄環鍔片のミクロ組織
写真4	鍔先鍔片のミクロ組織		

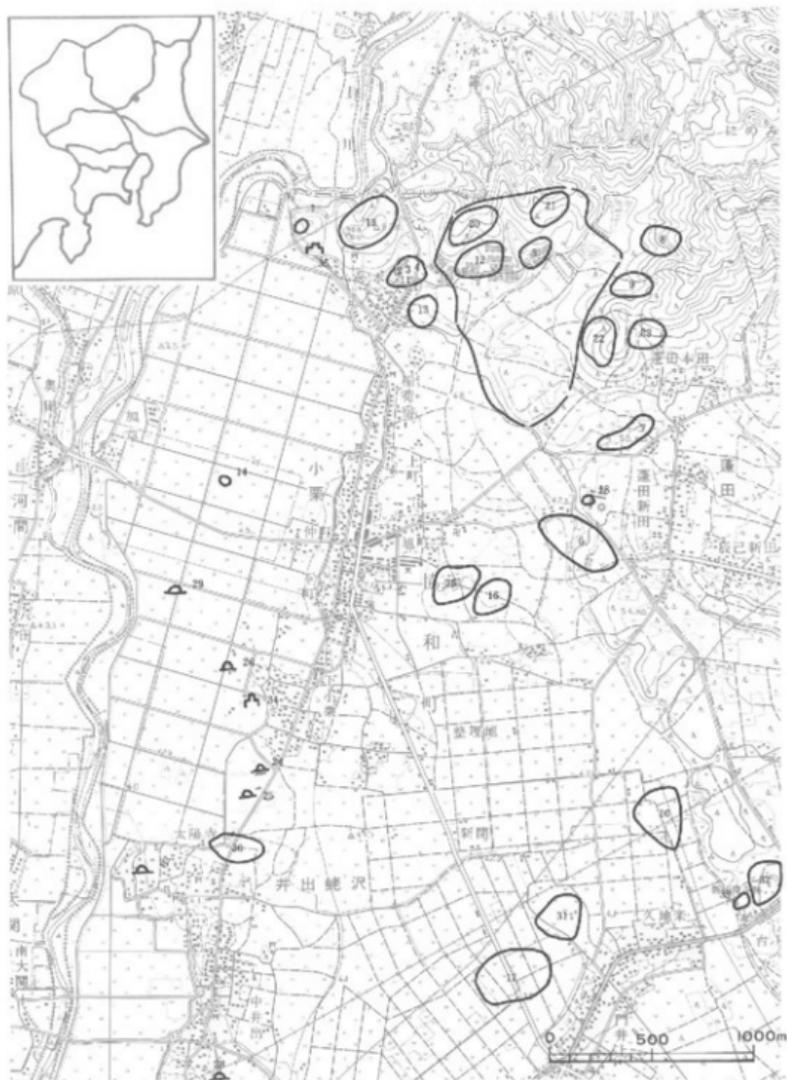
図版目次

図版1	調査区全景	図版10	II・III号墳
図版2	遺跡遠景	1.	II号墳周溝とSI-1(北より)
1.	南西より	2.	III号墳石室確認段階(東より)
2.	Na 22・23 南東より	図版11	III号墳
図版3	遺跡近景	1.	石室(南より)
1.	Na 22 調査前(東より)	2.	石室(北より)
2.	Na 24 調査前(東より)	図版12	III号墳
図版4	I号墳	1.	石室正面(南より)
1.	石室確認段階(北より)	2.	見返り
2.	石室奥壁裏込め状況(北より)	図版13	III号墳
図版5	I号墳	1.	石室閉塞状況と遺物出土状況
1.	石室(南より)	2.	石室内遺物出土状況
2.	石室(北より)	図版14	III号墳
図版6	I号墳	1.	周溝(東側)
1.	石室内遺物出土状況(入口付近)	2.	東側周溝内土壌(北より)
2.	石室内遺物出土状況(東壁付近)	図版15	IV号墳
図版7	I号墳	1.	石室(北より)
1.	石室内遺物出土状況(西壁~中央)	2.	石室(南より)
2.	石室内遺物出土状況	図版16	IV号墳
図版8	I号墳	1.	石室内遺物出土状況(東壁際)
1.	見返り	2.	石室内遺物出土状況(中央付近)
2.	石室内断ち割り状況	図版17	IV号墳
図版9	I号墳	1.	石室前庭部(南より)
1.	周溝(東側)	2.	見返り
2.	周溝土層状況(西側)	図版18	V号墳

1. 石室確認段階(北東より)
2. 石室(南より)
- 図版19 V号墳
1. 見返り
2. 石室内遺物出土状況(西壁側)
- 図版20 VI号墳
1. 石室確認段階(南より)
2. 石室(南より)
- 図版21 VI号墳
1. 石室礎床除去後(南より)
2. 見返り
- 図版22 VII・VIII号墳
1. VII号石棺(南より)
2. VIII号墳石室(東壁と残存礎床)
- 図版23 VIII号墳
1. 石室内遺物出土状況
2. 石室内遺物出土状況
- 図版24 IX号墳
1. 大井石検出状況(南西より)
2. 大井石除去後(南西より)
- 図版25 IX号墳
1. 石室内遺物出土状況(北半部)
2. 石室内人骨出土状況(南半部)
- 図版26 住居跡
1. SI-1とII号墳周溝(北より)
2. SI-2(北より)
- 図版27 住居跡
1. SI-4(南より)
2. SI-4 竈と土器出土状況
- 図版28 集石2
1. 五輪塔・礎出土状況
2. 集石下層石組遺構
- 図版29 集石2
1. 威骨器出土状況
2. 威骨器出土状況
- 図版30 中世墳墓
1. 北東より
2. 中央施設
- 図版31 中世墳墓
1. 北側周溝(西より)
2. 南側周溝(東より)
- 図版32 溝
1. SD-1(東より)
2. SD-1土層状況
- 図版33 No.24住居跡
1. SI-3(北より)
2. SI-2(西より)
- 図版34 No.24住居跡
1. SI-4・5(北より)
2. SI-4 竈跡
- 図版35 No.24
1. 土器出土状況
2. 土器出土状況
- 図版36 試掘調査遺跡
1. No.12(北東より)
2. No.13(北より)
- 図版37 試掘調査遺跡
1. No.14(南より)
2. No.14 南北トレンチ状況(南より)
- 図版38 試掘調査遺跡
1. No.15(南より)
2. No.15 南北トレンチ状況(南より)
- 図版39 試掘調査遺跡
1. No.18(供養塚 南より)
2. No.23 第1南北トレンチ状況(北より)
- 図版40 試掘調査遺跡
1. No.23 第1東西トレンチ状況(西より)
2. No.23 第2南北トレンチ状況(北より)
- 図版41 試掘調査遺跡
1. No.20(北東より)
2. No.20 東トレンチ土層状況(東より)
- 図版42 試掘調査遺跡
1. No.20 北トレンチ内I号石棺(南より)
2. No.20 北トレンチ内I号石棺(西より)
- 図版43 試掘調査遺跡
1. No.20 西トレンチ内II・III号石棺(北東より)
2. No.20 東トレンチ内墳頂直下出土土器(北東より)
- 図版44 試掘調査遺跡
1. No.21(南東より)
2. No.21 北トレンチ内土器出土状況(南より)
- 図版45 中世墓地
1. 集石状況(北より)
2. 五輪塔出土状況・下層遺構(東より)
- 図版46 保存遺跡
1. No.1(西より) 2. No.2(南西より)

- 図版47 保存遺跡
1. No.7 (北より) 2. No.8 (西より)
- 図版48 保存遺跡
1. No.9 (南西より) 2. No.10 (南西より)
- 図版49 保存遺跡
1. No.11 (西より) 2. No.16 (東より)
- 図版50 保存遺跡
1. No.17 (南西より) 2. No.25 (北東より)
- 図版51 作業風景
1. No.24 2. No.22 S1-5
- 図版52 遺物
1. I号墳石室内出土 直刀
2. I号墳石室内出土 刀装具
- 図版53 遺物
1. I号墳石室内出土 鉄鏃(1)
2. I号墳石室内出土 鉄鏃(2)
- 図版54 遺物
1. I号墳石室内出土 鉄鏃(3)
2. I号墳石室内出土 鉄鏃(4)
- 図版55 遺物
1. I号墳石室内出土 鉄鏃・石突・刀子
2. I号墳石室内出土 鉄斧・釘かくし・刀装具・「U」字状鉄製品・毛抜き状鉄製品
- 図版56 遺物
1. I号墳石室内出土 馬具・鉄製品
2. I号墳石室内出土 馬具(轡)
- 図版57 遺物
1. I号墳石室内出土 馬具・鉄製蹄先
2. I号墳石室内出土 馬具
- 図版58 遺物
1. I号墳石室内出土 両頭金具・馬具
2. I号墳石室内出土 毛抜き状鉄製品・馬具(轡)部分
- 図版59 遺物
1. I号墳石室内出土 主頭把頭(木質部分)
2. I号墳石室内出土 主頭把頭(布部分)
- 図版60 遺物
1. I号墳石室内出土 刀子(柄部分)
2. I号墳石室内出土 鉄鏃・両頭金具(部分)
- 図版61 遺物
1. I号墳石室内出土 装身具(耳環・小玉・勾玉)
2. I号墳石室内出土 装身具(白玉)
- 図版62 遺物
1. III号墳石室内出土 直刀
2. III号墳石室内出土 刀装具・刀子・鉄鏃
- 図版63 遺物
1. III号墳石室内出土 人骨片・人歯
2. III号墳石室内出土 装身具
- 図版64 遺物
1. IV号墳石室内出土 直刀
2. IV号墳石室内出土 刀装具・刀子
- 図版65 遺物
1. IV号墳石室内出土 鉄鏃(1)
2. IV号墳石室内出土 鉄鏃(2)
- 図版66 遺物
1. IV号墳石室内出土 馬具(轡)
2. IV号墳石室内出土 装身具(玉環・銅網・垂玉)
- 図版67 遺物
1. IV号墳石室内出土 装身具(小玉)
2. IV号墳石室内出土 馬具(轡)部分
- 図版68 遺物
1. V号墳石室内出土 直刀
2. V号墳石室内出土 鉄鏃
- 図版69 遺物
1. V号墳石室内出土 鉄鏃(部分)
2. V号墳石室内出土 鉄鏃(部分)
- 図版70 遺物
1. VI号墳石室内出土 鉄鏃・刀子・金銅製金具
2. VI号墳石室内出土 金銅製金具・刀装具
- 図版71 遺物
1. VII号墳石室内出土 装身具(切子玉・垂玉・勾玉・耳環)
2. VII号墳石室内出土 装身具(小玉・丸玉・管玉)
- 図版72 遺物
1. IX号墳石室内出土 直刀
2. IX号墳石室内出土 刀子・装身具(小玉)
- 図版73 遺物
1. IX号墳石室内出土 装身具(切子玉・小玉・管玉)
2. IX号墳石室内出土 人骨片
- 図版74 遺物
1. No.22 III号墳石室周辺出土 大囊片
- 図版75 遺物
1. No.22 III号墳石室周辺出土 大囊片

2. No 22 III号墳石室周辺出土 埴明皿
- 図版76 遺物
1. No 22 出上ハニワ片
2. No 22 山ハニワ片
- 図版77 遺物
1. No 22 出上ハニワ片
2. No 22 出上土器
- 図版78 遺物
1. No 22 出土石器(サイド・スクレイパー・石斧)
2. No 22 出土中世瓦・蔵骨器
- 図版79 遺物
1. No 22 SI-1 出土土器
- 図版80 遺物
1. No 22 SI-2 出土土器
2. No 22 SI-4 出土土器(1)
- 図版81 遺物
1. No 22 SI-4 出土土器(2)・紡錘車
- 図版82 遺物
1. No 22 SI-6 出土土器
2. No 22 SI-7 出土土器
- 図版83 遺物
1. No 22 SI-8 出土土器(1~3)
- SI-9 出土土器(4・5)
2. X号墳石棺周辺表採土器
- 図版84 人骨
1. X号墳石棺内出土(♀)
2. X号墳石棺内出土(♂)
- 図版85 人骨
1. X号墳石棺内出土
2. X号墳石棺内出土
- 図版86 人骨
1. X号墳石棺内出土
2. X号墳石棺内出土
- 図版87 遺物
1. No 24 出土土器・磁石
- 図版88 遺物
1. No 24 出土土器・文字瓦「鳥」
- 図版89 遺物
1. No 24 出土土器
- 図版90 遺物
1. No 24 出土土器・参考資料(藤田尚英氏蔵)
- 図版91 遺物
1. No 18 (供養塚)出土占銭(表)
2. No 18 (供養塚)出土占銭(裏)
- 図版92 遺物
1. No 20 トレンチ内出土土器・石斧
2. No 21 トレンチ内出土土器
- 図版93 遺物
1. No 21 トレンチ内出土土器
2. No 21 トレンチ内出土土器
- 図版94・95・96 参考資料
- 小栗地内出土品(「新治及古郡」蔵)



第1圖 道跡分布圖

I 地理的環境

八溝山地を形成する山塊の1つである鷓足山塊は、徐々に高度を低くして栃木県南那須町付近を源とし南流する小貝川と西面する。小貝川は、茨城県南西部の真壁郡を南下し五行川と合流して更に利根川へと進んで行く。この小貝川の左岸一帯に面する栃木県南部の山塊は、浸食を受けて樹枝状の小支谷を多く形成している。また、この小貝川に形成された沖積低地と、南北に延びる真壁台地(常総台地)を含んで協和町は所在し、東に岩瀬町・大和村・真壁町、南に明野町、西に下館市、北に栃木県二宮町と接している。

小栗地内遺跡は、真壁郡協和町の北端部・栃木県二宮町と境する山間部から山裾台地一帯にかけて分布する遺跡群の総称

(今回の調査では寺山古墳群・雷神山古墳群・丑塚古墳群が主体)として用いた名称である。同遺跡地一帯は、町内に唯一存在する谷津で現在も湧水地点をもつ(別名「七ツ池」と呼称され、現在までも用水確保の為に溜池を保持している)もので、南西に開口する支谷を取り巻くように分布している。今回の調査地点を見ても、谷奥山頂部付近・谷口の西側で南面する傾斜地一帯・東側は台地縁辺部から山裾にかけての一帯に広く位置している(第3図)。

さらに、遺跡地の地質を見ると、新第三紀層の上に下末吉ローム層・武蔵野ローム



第2図 関東ロームの分布

ーム層によって形成された関東ローム層(火山灰層)が広く堆積し、その上の鹿沼軽石層から成っている。遺構の多くは、この鹿沼軽石層を掘り込み、一部はローム層に達するものもある。しかも、多くの調査地点は旧状を逸しており、遺構の全体を窺い知るものは数少ないものであった。

II 歴史的環境

協和町の遺跡分布状況を概観すれば、そのほとんどが北部の小栗地内に集中している。この事は、新に町域内の踏査を行えば、遺跡数の増加はあり得るがそれでも分布密度の様相は、他を抜きにしていることに変わりないものである。特に、昭和30年代に実施された分布調査註1の小栗地内に顕著であり、また、同地内が古く大正時代の頃には注目を受けていた事によっても解される。

先土器時代の遺跡は、城山遺跡(第1図-1)を初めとして谷島静訓氏の意欲的な踏査の結果、お越し遺跡・中台遺跡・狐塚遺跡(今調査地域の№6地点)など小栗地内に集中している。それは、遺跡立地の好条件を備えた地勢からも読み取れるものである。

縄文時代の遺跡は、やはり小栗地内が中心で、宮本A～C(第1図-2～4)、らいさま山(第1図-5)、中台(第1図-6)、蓬田石畑(第1図-7)、蓬田東原一区、七ツ池東方A・B(第1図-8・9)、旧小栗中学校内(第1図-18)の各遺跡が知られ、他に久地楽台(第1図-10)、横塚古堂遺跡などがある。

弥生時代になると、七ツ池東方A・B、久地楽台、宮本D(第1図-11)、芝塚(第1図-12)、権塚(第1図-14)、竹の下(第1図-14)、駒塚A・B(第1図-15・16)、宿原(第1図-17)、旧小栗中学校内などの各遺跡が知られるが、小栗地内を生活の中心地とした様相となっている。

古墳時代の遺跡は、生活地よりも埋葬地としての古墳の分布に片寄ってしまうが、宮本(第1図-19)、寺山(第1図-20)、雷神山(第1図-21)、丑塚(第1図-22)、天神山(第1図-23)、御殿内(第1図-26)、太陽寺(第1図-30)などが古墳群として知られ、西館(第1図-24・25)、御止山(第1図-27)、元宿(第1図-28)、中台(第1図-29)の各古墳は濫滅してしまっている。

奈良・平安時代では、新治廃寺註4(第1図-32)、新治郡衙跡註5や久地楽長町註6(第1図-33)、久地楽試験場橋内(第1図-31)の各遺跡が存在する。

中世以降では、御殿城跡(第1図-34)、小栗城跡(第1図-35)、組内経塚、寺山廃寺(今調査地域の№23地点)の各遺跡がある。中でも小栗地内にあっては、古墳時代以降に墓域的な性格を強く示す様になり、それは中世に至っても何ら変化する事はなかった様である。

註1 藤田清・藤田積善氏を中心に実施された踏査結果で、特に古墳群の存在価値は大きいものである(第171図参照)。

註2 小栗地内の古墳については、栃木県真岡市在中の斎藤行哉氏が意欲的に調査を行い、円筒・形象埴輪を中心とした数多くの古墳遺物を出土したと云う事である。

- 註3 既に早く、昭和26年頃より遺跡の性格に注目しており、その成果は
谷島静訓『宮本のプレ縄文石器について』『古代常総文化』1955
谷島静訓『茨城県西およびその縁辺における旧石器遺跡』『那珂川の先史遺跡』第2集 1968
- 註4 高井樺三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』桑名文星堂 1944
- 註5 同上
- 註6 『新治院寺一久地楽長町築跡予備調査報告書-』協和町教育委員会 1984



遺跡No	種別	備考
1	古墳	現状保存(円墳)
2	古墳	現状保存(円墳)
3	古墳	現状保存(円墳)
4	古墳	現状保存(前方後円墳)
5	——	現状保存
6	包蔵地	現状保存(旧石器)
7	古墳	現状保存(円墳)
8	古墳	現状保存(円墳)
9	古墳	現状保存(円墳)
10	古墳	現状保存(円墳)
11	古墳	現状保存(円墳)
12	古墳	現状保存(円墳、確認調査)
13	古墳	現状保存(円墳、確認調査)
14	古墳	現状保存(円墳、確認調査)
15	古墳	現状保存(円墳)
16	古墳	現状保存(円墳)
17	古墳	現状保存(円墳)
18	供養塚	現状保存(円墳、確認調査)
19	古墳	現状保存(円墳)
20	古墳	現状保存(円墳、確認調査)
21	包蔵地	現状保存(円墳、確認調査)
22	包蔵地	発掘調査(円墳、集落跡、中世墓)
23	包蔵地	現状保存(中世、確認調査)
24	包蔵地	発掘調査(集落跡)
25	古墳	現状保存(円墳)
26	古墳	現状保存(円墳)
27	墳・包蔵地	部分調査(弥生、円墳?)

第3図 調査対象遺跡

III 調査に至る経過

昭和 59 年

5月3日 協和町小栗地内一帯のゴルフ場開発行為に先立って、町文化財保護審議会・町教育委員会と合同で現地踏査を行う。

5月7日 5月3日の現地踏査の結果をもとに四者会議を行った結果、ゴルフ場予定地内に確認した 23 箇所の遺跡の保存は可能である旨で合意が成立する。

5月24日 町文化財保護審議会の意見書を総武都市開発㈱に提出する。

6月15日 茨城県教育委員会にゴルフ場開発行為に伴う埋蔵文化財発掘届を提出する。

7月10日 県土木各関係課、県文化課、町関係各課、総武都市開発㈱による大規模土地開発事業に伴う合同現地調査を行う。

7月26～27日 県文化課、町教育委員会と合同で分布調査(表面観察)を実施する。

8月24日 県文化課の指導をいただき、発掘調査会規約(案)を作成する。

9月21日 発掘主任調査員を瀬谷昌良氏に依頼する。

10月4日 総武都市開発㈱から発掘調査の委託を受ける為、小栗地内遺跡発掘調査会を発足する。

12月5日 埋蔵文化財発掘通知書を進達する。

12月10日 総武都市開発㈱と委託契約を締結し、本日より小栗地内遺跡の発掘調査に着手

する。

昭和 60 年

1月18日 第1回の発掘調査報告会を開催する。

2月8日 調査区No.20・21・24号遺跡の調査終了通知書が主任調査員から提出される。

2月12日 町文化財保護審議会委員諸氏の現地視察。

2月15日 町議会教育民生委員諸氏の現地視察。

2月20日 調査区No.20・21・24号遺跡の発掘調査終了確認を県文化課に依頼する。

2月28日 現地にて県文化課、能島清光氏・高根信和氏に調査終了の確認と指導・助言をいただき、その旨を総武都市開発㈱に通知する。

3月1日 県教育委員会より発掘調査終了確認通知を受領する。

3月22日 調査区No.23号遺跡の調査終了通知書が主任調査員より提出される。

3月23日 調査区No.23号遺跡の調査終了の旨を総武都市開発㈱に通知する。

4月1日 調査区No.12・13・14・15・18・22号(部分終了)遺跡の調査終了通知書が主任調査員より提出される。

4月2日 調査区No.12・13・14・15・18・22号(部分終了)遺跡の調査終了の旨を総武都市開発㈱に通知する。

4月25日 ゴルフ場内の調査対象遺跡の発

掘調査が全て終了し、現地調査会事務所を町民総合センターに移転する。

5月1日 調査区№12・13・14・15・18・22・23号遺跡の発掘調査終了確認を県文化課に依頼する。

5月4日 県文化課，能島清光氏・高根信和

氏に調査終了の確認と指導・助言をいただく。

5月8日 県教育委員会より発掘調査終了確認通知を受理する。

5月25日 町民総合センターに於いて新聞各社合同記者発表を行う。

(調査会事務局)

調査日誌抄

昭和59(1984)年

12月10日

調査区域での地鎮祭及び№22の除草作業。

12月11日

№20・21・24の除草作業，器材搬入，調査前の遺跡写真撮影。

12月12日

№24にて5m四方のグリッド設定。

12月13日

№22にて重機によるコンクリート除去作業。

12月14日～16日

№24にて地形測量を実施(前方後円形を呈す)。

12月17日

降雪～雨の為，野外作業中止。

12月18日

№24はグリッド排土作業を開始。

12月19日

高井悌三郎氏来跡。№22に遺構確認の為のトレンチを東西方向に2箇所設定。

12月20日～28日

№24での排土結果，耕作土(約10～20cm)中に若干の遺物を包含するもの，縄文～弥生～古墳～奈・平～中世までほぼ全時期の遺

物を出土する事や耕作土直下に鹿沼層・ローム層を全域で確認し，多数の貯蔵穴(現代のイモ穴)を検出するなど古墳を認定するに疑問を生ず。

12月22日

№22での遺構確認トレンチの結果，0.3～2.5m以上の客土を確認し，ほぼ全域に渡って大規模な造成を行っていた事が判明。上段トレンチにては，約1.5mもの客土層下に弥生時代の住居跡を検出。

12月24日

№22の下段トレンチにおいて，約50cmの客土層下に青灰色粘土で裏込めされた大型の礫を多数と，礫間に直刀(斜位に立つ)を検出。

12月25～28日

№22での遺構検出によって，今後全面調査の方向で協議す可く，一部埋め戻し保存を図る。

昭和60(1985)年

1月5日～6日

№24にてグリッド排土を続行。EIV-1-23区のPit覆土中より土師器(甕)出土。

1月7日

EⅢ-4-40, EⅣ-1-25 区にて住居跡を検出(Na 24 は古墳でない事が明確になる)。

1月8日

EⅣ-1-40, EⅣ-1-50区にて住居跡を検出(重複している)。

1月9日

No 24 調査区北端・西端は人為的に削土されている事が判明。

1月10日

EⅣ-2-31 区にて炉跡を検出(住居跡内)。

1月11日～17日

No 24 にて遺構検出作業を続行。No 22 にて各地域に小トレンチを設定し、遺構確認面までの層序を把握する。

1月18日

保存遺跡(Na 1・10・11・17)、試験調査遺跡(Na 12・13・14・18)の現況写真撮影及び分布図を作成する。

1月19日

保存遺跡(Na 2・7・8・9・25)の現況写真撮影及び分布図を作成する。No 22 にてDIV-4 区より円筒埴輪片が出土。

1月20日～2月1日

No 24 にて土層断面実測・住居跡実測・全域測量・写真撮影など総ての作業を終了する。

1月22日～25日

No 20 にて地形測量を実施。

1月25日～2月1日

No 23 にて遺構確認の為に幅3mのトレンチを設定し排土を行う。その結果、ほぼ全域は削平を受けてはいるものの、中世瓦・陶磁器・土師器などを広範囲で検出し、調査区域

のほぼ中央に砂利敷きの地固め遺構部分を確認。

2月1日

No 22 において遺構確認面まで重機による排土を開始する。DIV-3-91～94区にて石室(Ⅳ号墳)・住居跡(S1-8)を確認する。

2月2日

保存遺跡(Na 19)、試験調査遺跡(Na 20・21)の現況写真撮影とNo 21 の地形測量を開始する。No 22 では、DIV-3-15区にて集石状高構(集石2)を確認する。

2月4日

No 20・21 にて座標軸沿いに東西・南北方向のトレンチを設定し排土作業を開始する。北トレンチ(Na 21)より弥生土器片を検出。No 22 では、集石と共に五輪塔を検出し、DIV-4-82～83 区内に住居跡(S1-3)、溝(SD-2)を確認する。

2月6日

No 20 のトレンチにより、墳頂部直下やや北寄りに石棺(1号石棺)を確認する。No 22 では、DV-5-31 区に石室(V号墳)を確認する。

2月6日～7日

No 20 の西トレンチ内に石棺2基(Ⅱ・Ⅲ号石棺)を確認する。

2月8日

No 22 では、集石2の範囲を追求すると共に、同確認面で五輪塔・燈明皿・古瀬戸片及び火葬骨片(炭化材を伴う)を検出する。

2月11～23日

No 20・21 の土層断面実測・石棺平面実測・

写真撮影を行う。

2月12日

№22のCIV-15-27～37区内に溝状遺構(SD-1)、住居跡(SI-1)を確認する。

2月13日

試掘調査遺跡№12(円墳)の地形測量を行う。

2月14日

試掘調査遺跡№13・14・15(円墳)、№18(供養塚)の地形測量を行う。

2月15日～17日

№22のCIV-15-36～38区内に円墳の周溝(Ⅱ号墳)を確認する。SD-1は西側に傾斜する大溝で、SI-1は北半城をⅡ号墳周溝に削土されている事が判明した。

2月18日

№22のDIV-8区内にSI-4・5・6とSD-2(南半部)を確認する。

2月19日～21日

降雨により野外作業中止。

2月22日～

№22のCIV-15-2区にて石室(Ⅰ号墳)を確認する。Ⅰ・Ⅴ号墳、SI-1・3・4・5・6、SD-1、2の調査を続行する。

2月23日

町立小栗小学校(5年生)及び町内各学校教師の来跡。

2月25日

小栗地内婦人会来跡。

2月28日

県文化課来跡。

3月3日

№22では、Ⅵ号墳の調査を開始する。

3月5日

№22にて、Ⅰ号墳石室内に遺物の遺存が確認され、Ⅴ号墳石室には直刀を確認する。

3月6日

№22にて、集石Ⅰ及びⅤ号墳の実測・写真撮影を開始する。

3月7日～8日

クラブハウス建設予定地内(東傾斜面上)の造成工事中に、互輪塔を伴う集石遺構を確認する。工事の中断を申し入れ調査を行う。

3月9日

№22にて、Ⅲ・Ⅳ号墳の調査を開始する。D-IV-2-40区内に中世墳墓を検出。

3月10～12日

降雪・降雨により野外作業中止。

3月13日～20日

№22にて、Ⅰ号墳・中世墳墓の調査を続行。№20・21のトレンチ埋め戻し作業を行い、保存処置を図る。

3月16日

町長・町会議員・教育委員会来跡。

3月16日

町史編さん室、町文化財審議委員会・教育委員会・町会議員来跡。

3月22日

№22にて、Ⅲ号墳東側周溝内にPit2基を検出する。うち1基より金銅製耳環を検出する。

3月23日～28日

試掘調査遺跡(№12・13・14・15・18)に遺構状態把握の為のトレンチを設定する。その結果、№18は江戸時代の供養塚と判明する。

3月25日
No.22にて、S1-2はⅢ号墳周溝によって北壁を削土されている事が判明する。

3月26日
No.22にて、集石2(DIV-3-5区内)より蔵骨器を検出する。

3月28日～4月1日
試掘調査遺跡の調査を終了し、トレンチの埋め戻しを行い保存処置を図る。

3月29日～
No.22にて、I号墳石室内出土遺物の取り上げを開始する。

3月30日
No.22にて、Ⅱ号墳石室内に直刀3振を入口部で検出する。

4月2日
No.22にて、IV号墳石室内に遺物を検出する。S1-7・8・9, SD-2を調査する。

4月3日～8日
No.22にて、I・Ⅲ号墳石室の実測を行う。
4月8日～9日
I号墳石室の総ての作業を終了すると共に、町職員による石室解体・搬出が行われた。

4月9日
IV号墳石室の実測を開始する。

4月10日
No.22にて、DIV-4-63～73区内に石棺(Ⅴ号石棺)、石室(Ⅵ号墳)を確認する。

4月13日
新日鐵の来跡。出土鉄器の解析の打ち合わせを行う。

4月14日～18日

Ⅴ号墳石室より遺物を検出する。S1-6・7・9, SD-2, Ⅵ号石棺の実測を行う。

4月20日
No.22にて、CIV-7区における造成工事中に石室(IX号墳)発見の報を受け現地に赴く。竪穴式石室と判明する。

4月21日
No.22にて、S1-3・5・9, V・IX号墳の実測を行う。

4月22日
IX号墳石室内より人骨・遺物を検出する。

4月23日～25日
IX号墳石室の実測を終了する。

4月26日
一部器材の搬収と遺物の搬出を開始する。

4月27日～30日
No.22にて、住居跡の補足実測を行い、総ての調査を終了する。

7月31日
雷神山山頂部付近の造成工事中に、石棺と人骨出土の報告を受け再度現地に赴く。石棺(X号石棺)は、造成中に蓋石総てを削平され、人骨(2体分)も取り上げられていた。直ちに石棺内外の調査を行い、石棺内に人骨・人骨片を検出する。写真撮影・実測を行う。

8月1日
X号石棺の作業を継続する。石棺周辺の調査も合わせて行った。一帯は比較的平坦な面を残し、南側(現在の水田面)を眺望できる谷奥に位置している。平坦面から弥生土器(後期)・土師器の表採があった。石棺の調査を終了し、現地を引き上げる。

協和町小栗地内遺跡発掘調査会名簿(昭和59年12月現在)

会 長	協和町長	浦 井 亀 三
副 会 長	協和町教育長	大久保 弥 作
副 会 長	協和町文化財保護審議会々長	川 又 正 弘
顧問	協和町議会議長	大 嶋 晴 雄
顧問	協和町議会教育民生委員長	田 中 守
顧問	協和町教育委員長	宮 本 豊一郎
理 事	協和町総務課長	中 原 正
理 事	協和町町長室長	海老沢 喜一郎
理 事	協和町総合企画開発課長	若 松 富 雄
理 事	協和町文化財保護審議会副会長	小 栗 猷
理 事	協和町文化財保護審議会副会長	藤 田 積 善
理 事	協和町文化財保護審議会委員	田 中 時 信
理 事	協和町文化財保護審議会委員	中 野 忠 之
理 事	協和町文化財保護審議会委員	篠 崎 隆
理 事	協和町文化財保護審議会委員	小 林 隆 一
理 事	協和町文化財保護審議会委員	谷 島 白 水
理 事	主任調査員	瀬 谷 昌 良
理 事	地元代表	広 沢 栄
理 事	総武都市開発株式会社	佐 藤 重 夫
監 事	協和町収入役	鈴 木 稔
監 事	地元代表	田 谷 和 一
幹 事(事務局)	協和町教育委員会事務局長	飯 泉 貞 雄
幹 事(事務局)	協和町公民館副館長	深 谷 豊 貞
幹 事(事務局)	協和町教育委員会(派遣社会教育主事)	植 木 収
幹 事(事務局)	協和町教育委員会主事	中 沢 哲 雄
幹 事(事務局)	協和町公民館主事	猪 野 貴 子

IV 遺 構

1. No. 22 地 点

本地点は、南西に開口する谷津の谷口部(西側)にあたり、樹枝状に発達した小支谷に挟まれた山腹南斜面の中腹から裾部(標高80~60m)に位置している。

昭和30年代に当地域の裾部一帯を大規模な種鶏場地とした為、丘陵斜面を切りくずし階段状に地形を変換している。この為、寺山古墳群として存在していた数多くの円墳と中世墓地(川原石を積み上げ、五輪塔を樹立させて一部に蔵骨器を埋納している事が知られていた)は、その総てが湮滅したものと考えられていた。しかし、一部に川原石群の露頭が見られる事により、一部遺構の遺存の可能性を察せられていた。よって、本調査実施にあたっては、事前調査の結果をもって今後の調査の検討を行う事になった。事前調査は総てトレンチ法による事とし、鶏舎基礎のコンクリートに沿って、南側テラス部分(旧地形をかろうじて残しているものと思われた)に幅2.0m、長さ50~100mのトレンチを鶏舎跡地毎に設定した。その結果、各鶏舎跡地ではその東半域は0.2~0.3mの客土(盛土部分)の堆積を確認でき、西半域は徐々に客土層を厚く(確認箇所においては約2.5m以上堆積している)している事が判明した。それは、斜面削平に伴う排土を西側の支谷に移動させ、支谷を半ば埋めながら南面する緩傾斜面を階段状に大きく変換させている事である。しかも、削平工事によって旧地表に存在したであろう大多数の墳丘を削り取ってしまっており、この事が当地の古墳群の湮滅感を与えていたものと思われる。しかし、この試掘トレンチ調査の結果では住居跡×4、溝状遺構×1、集石状遺構×1、古墳(石室及び周溝)×3の確認を至し得た。以上の結果により、当地点における本調査は全面域に拡張する事となり、重機による鶏舎基礎コンクリートの除去及び客土層の排土をとり行う事にした。従って、本地点の調査対象面積は9,200m²を実施する事となり、取り急ぎ造成工事に係る地域を優先して行った。

遺構の遺存状況は、全体的に攪乱を受けてはいるものの、部分的な遺構は比較的良好に遺存していた。古墳について見れば、総てが墳丘を削平されており、しかも石室の天井石もⅡ号墳を除いたものは総てが崩落或いは抜き取られていた。周溝の遺存状況も、当調査地点で最大規模を呈するⅠ号墳は、その東半域は比較的良好に基底面まで確認できたが、西半域に至っては、地形的に谷筋に沿っている事もあり削平・客土(盛土)が著しく、わずかに基底面近くを確認しただけである。Ⅱ号墳の状況は更に著しく、わずかに北半域の周溝を確認したのみにとどまり、墳丘・

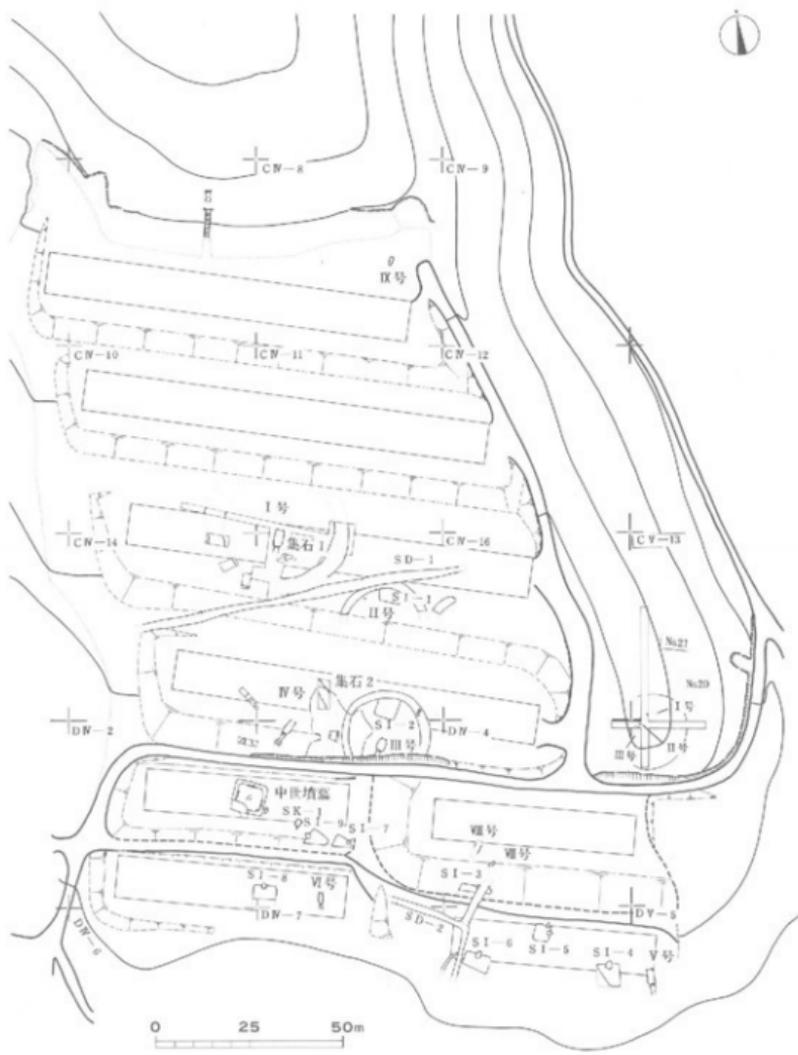
主体部・南半城周溝は共に消滅してしまっていた。住居跡について見れば、様相は更に厳しいものであったが、弥生時代後期から古墳時代中・後期にかけての9軒を検出できた事は、当町にとっても初めての成果として掲げることができるものである。SI-1・2は古墳周溝と重複し、奇しくも北半部を消失してしまい、SI-3・4・6・7・8・9は種鶏場造成工事によって南半部1/3～2/3を消失してはいるが、竈を含めた状況は比較的良好に遺存していた。そしてわずかに、SI-5についてのみその全容を窺い知る事ができた。更に、特筆す可き事柄として中世墓の存在・解明の一端を伺い知れた事も大きな成果であった。この中世墓については、既に早くから篤志家によってその存在が知られ、多くの蔵骨器を出土している。蔵骨器の多くは古瀬戸瓶子を中心とするもので、十三世紀の年代を得られている。今調査においては、瓶子の断片ではあるがその出土を見る事ができ、中世墓の年代をほぼ確定する事ができた。ただ、中世墓として完存する遺構は皆無であったが、当地点の造成工事によるところの広範囲に亘る客土層中より、集石(川原石)の散乱、五輪塔の散在を確認できた。しかも、集石中の各所より炭化材を伴う火葬骨の集中範囲を押さえる事ができた。中世墳墓と認定した遺構についても、その特殊性を顧みれば類い稀な遺構とする事ができる。

このNo 22地点における特異な地利は、居住期間としての弥生時代後期から古墳時代後期初頭まで続き、やがて画然として埋葬期間としての墓域観にとって代わる事である。特に、1号墳石室内より出土した金銅装主頭大刀を初めとする多くの副葬品より得られた推定年代を七世紀初頭に押さえれば、他の墳輪^{註1}を出土する事により、遅くとも六世紀代には墓域的な性格を濃厚にしていったものと思われる。しかも、この墓域観念は後世にまで及び、特に十三世紀を中心とした中世墓地の造営にまで至る事実である。

当地点の古墳分布に関しては、昭和30年代の分布調査による所が大である。^{註2}それによると、山頂部は基より丘陵斜面上から裾部に至るまで好所を選定した一大古墳群の存在を窺い知れる。しかも、山頂部に所在する古墳は、年代的にも遡る可能性は非常に大きいものがある。総ては今後の調査・研究の課題として残されるものであるが、これらの群構成を考究していく上で、今回の調査は有意義かつ重要な問題を多分に含んでいるものである。

註1 この墳輪に伴う石室は確実に押さえられないが、Ⅶ・Ⅷ号墳或いはその近隣に存在したものと推定できる。

註2 藤田清・藤口積善氏作成による古墳分布図であり、本書掲載第171図参照。



第4圖 全体圖

I 号 墳 (第5図～28図, 第72図) (図版4～9, 図版52～61)

I号墳はNo.22地点のほぼ中央・南面する丘陵の中腹で標高72.00mに位置している。調査区では、CIV-10・11・14・15区(中グリッド)に跨がり、南半城の周溝と石室を確認した。また、石室の南東には集石1を検出するに至り、南側の周溝の一部は東西に走向するSD-1と重複する事が判明した。

遺跡は、鶏舎跡地より検出されたもので、鶏舎の基礎コンクリートを除去した後、一部に青灰色粘土の露出を認めた。そこで、この粘土の露出部分を中心に小トレンチを設定し掘土を行ったところ、多量の雑草と裏込めを施した石室の一部、更には青灰色粘土(裏込めに使用された)塊を多量に検出したのである。調査は、石室の範囲を明確にしつつ、周溝検出の為にトレンチを設定する事とした。その結果、埋葬施設を横穴式石室とする円墳である事が判明した。また、同遺跡地は墳丘・石室天井・周溝上端部などが削平され、更に盛土が行われて平坦地を形成した事も判明した。それは、遺跡の東端においては約0.2～0.3m、西端においては約3.0～3.5m以上の客土(盛土)層を削平後の同遺跡に確認できた事によるものである。

周溝は、調査期間と云う時間的制約の下で、その南半城の検出に主眼を置いたが、直径約40m(周溝外径)を測る円墳である事が判明した。東側周溝は、上幅4.42m、底面幅1.40m、深さ約0.80mを測り、周溝の立ち上がりは内・外側共に緩やかで、断面形状は逆台形「┌」を呈する。同周溝は南下するに従って急傾斜となり、南側周溝とは約3.10mの比高差をもっている。南側周溝は、上幅3.32m、底面幅1.66m、深さ約0.50mを測り、断面形状は逆台形「┌」を呈するものである。周溝の立ち上がりは外側に浅く緩やかで、内側は急でわずかに認められるものである。この事は南下する斜面上に構築されたと云う地形的なものと、墳丘をより高く見せる為の意図的なものによる事が考えられる。更に、西側周溝に至っては比高差約2.10mをもって立ち上がる様になる。この西側周溝は、上幅5.24m、底面幅2.72m、深さ約1.06mを測り、周溝の立ち上がりは内・外側共にやや急で、断面形状は逆台形「┌」を呈する。

石室は、樞石によって明確に玄室と羨道とに分けられ、閉塞がなされていた。閉塞状況は、径10～20cm内外の隙を混じた褐色土によって、入口部全体を軽く被うと云う比較的安易な構造を確認した。この事は、後述する石室の状況よりして二次的な所業との公算を受け取れるものである。

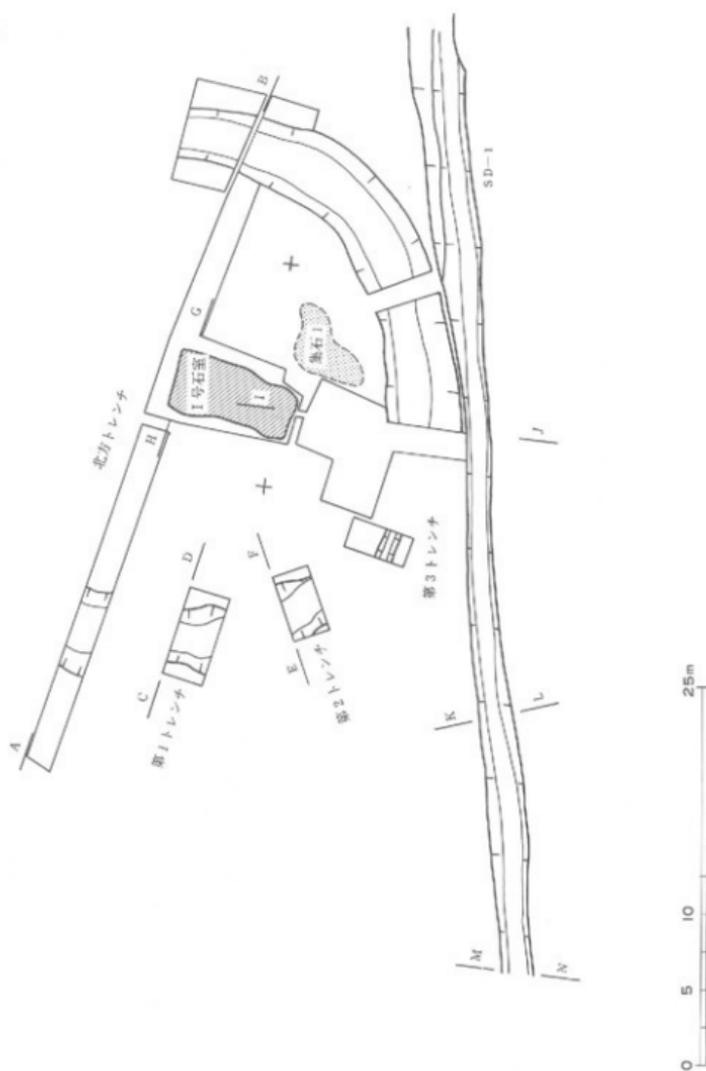
羨道部は、一部入口付近に径10cm内外の隙が1.0×1.0mの範囲で敷かれ、長さ約2.5m、幅1.2～0.8mを測るものであった。更に、入口西側では一辺20～30cmの礫(4段)と青灰色粘土による長さ65cm、高さ75cmを測る壁面を確認し、入口東側では一辺10～40cmの礫(3段)と多量の茶褐色土による長さ70cm、高さ60cmを測る壁面が構築されていた。

主体部たる玄室は、長さ約1.0m、幅0.15～0.22m、高さ約0.48mを測る框石によって囲せられ、玄室長(主軸長)4.18m、最大幅(玄室中央)2.12m、最小幅(玄室南側)1.83m、遺存高1.30m、主軸方位N-19°-Eを測る尚軸式の横穴式石室である。西側軸は底辺25×40cmを測る塊石と小型の塊石を用いて確認4段の小口積みによるもので、東側軸は底辺33×35cmを測る塊石とやや大型の塊石を用いて確認2段の小口積みである。西側壁は、床面下約40cmまで埋め込んだ基礎石を5列配し、小口積みで確認4段の持ち送り形式をとり裏込めに厚さ約50～60cmに達する青灰色粘土を確認した。東側壁は、床面下約45～35cmまで埋め込んだ基礎石を5列配し、小口積みで確認5段の持ち送り形式をとり裏込めは西側壁と同一の形態であった。奥壁は長さ1.76m、幅0.54m、高さ1.47m(うち床面下に0.42m埋まる)を測る一石と、西側の隙間部分約20cmには小口積みによる4段の小型塊石を積み垂直に築かれる。また、奥壁の裏込めには厚さ50～60cmを測る粘土と径20～40cmの塊石を用いている(第7図、G-Hライン)。床面は、掘り方の上に褐色土を用い平坦化し、更に径5～10cm内外の礫を全面に敷き詰めている。特に上面には径10cm内外の扁平な川原石を用いている。

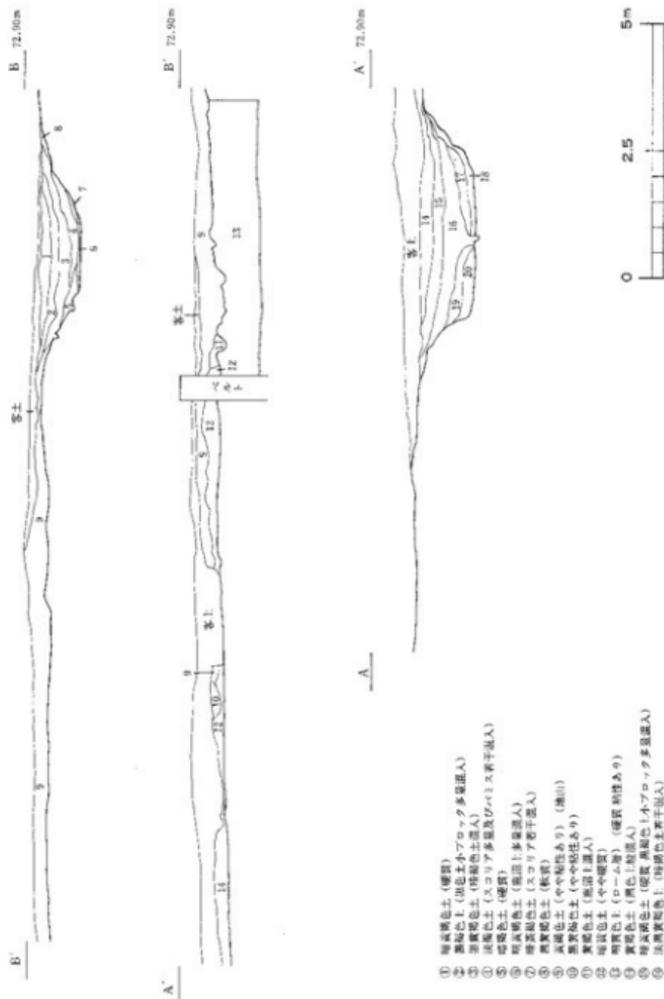
玄室の構築は、ルーム面まで長方形状に掘り込んで、奥壁・側壁・入口部においては基礎石を据える為に溝状により深く掘り込んでいる。基礎石や側壁の崩落を防ぐ為、厚さ50～60cmにも及ぶ粘土を裏込めしている。床一面には礫を敷き、天井(石)を架けたものと思われる。当墳は、直径約40m(墳丘径約30m)を測る円墳である事は明確である。

出土遺物は総て玄室内から検出され、直刀・刀装具・刀子・鉾・鉄斧・鉄鏃・轡・鞆・鎧鉾・辻金具・鐙先・釘かくし・両頭金具・毛抜き状鉄製品・「U」字状鉄製品・耳環・小玉・勾玉・白玉など総点数約300点を超えるものであった。中でも東壁際に検出した直刀は銛を連え、うち一振は金銅装大刀で、主頭把頭は着装箇所より1.0m離れた玄室中央付近から、鈿・貴金具は入口際や西壁際に散在していた。鉄鏃はほぼ中央付近にまとまるが、各々何ら方向性も無く散在する。馬具では鞆鉾・鞆が各個体別に東西両壁際に離れ、鉾は共に東壁で方向を連えて約1.4m離れる。耳環(鉄製)1対は奥壁際やや東寄りに馬路型勾玉と共に検出し、他の勾玉3点は玄室中央(ほぼ主軸上)に0.7～1.3m離れて並置する。滑石製白玉はほぼ鉄鏃の出土と重なり、人骨片の集中箇所は玄室中央やや北寄りに確認した。この人骨片直上に毛抜き状鉄製品を検出した。尚、この鉄器には全体が布に包まれていた痕跡をもっている。

玄室内の副葬品の出土状況は、あまりにも雑然としておりその判断に断定を得るものではない。しかし、この原位置からすれば明らかに二次的な移動を受けているものと思われる。更に、武器や馬具において見られる金銅製品の在り方などからして、当墳の被葬者の問題が浮かび上がってくる。年代的には、板状立開素環鏡板付轡や主頭大刀などより七世紀第1四半世紀頃に比定する事が可能であろう。



第5図 I号墳・SD-1平面図



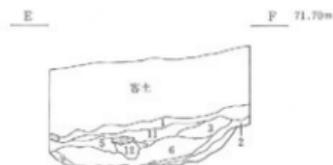
第6図 I号墳北方トレンチ東西セクション図



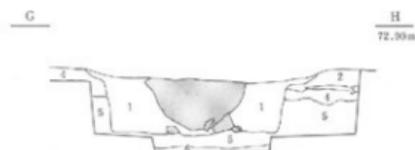
第1トレンチ

- ① 暗黄褐色土 (軟質、黒色土粒若干混入)
- ② 暗黄褐色土 (黒色土粒多量混入)
- ③ 褐色小アブロック (やや粒性あり、褐色土若干混入)
- ④ 黄褐色土 (硬質、黒色土小アブロック混入)
- ⑤ 黒褐色土 (黒色小アブロック及びビスコリア若干混入)
- ⑥ 暗褐色土 (バミス、カーボン若下及びビスコリア多量混入)
- ⑦ 淡褐色土 (バミス若干スコリア多量混入)
- ⑧ 白色粘土若干カーボン混入
- ⑨ 可塑性粘土層、カーボン混入
- ⑩ 黄褐色土 (暗黄褐色土小アブロック多量混入)
- ⑪ 黄褐色土 (暗黄褐色土小アブロック多量混入)
- ⑫ 淡黄褐色土 (灰砂骨片多量混入)

※⑫はP11であり、底上の平石は土板の礫石、もしくは五輪塔の台座として備えられたもの?



第2トレンチ



- ① 粘土アブロック層 (表込め)
- ② 暗黄褐色土アブロック及び黄褐色土小アブロック及び暗黄褐色粘土小アブロック混入土
- ③ 黒色土 (粘質、バミス混入)
- ④ 黄褐色土
- ⑤ 暗黄褐色ローム層
- ⑥ 黄褐色土



第7図 1号墳周溝確認第1・2トレンチ石室北方掘方セクション図



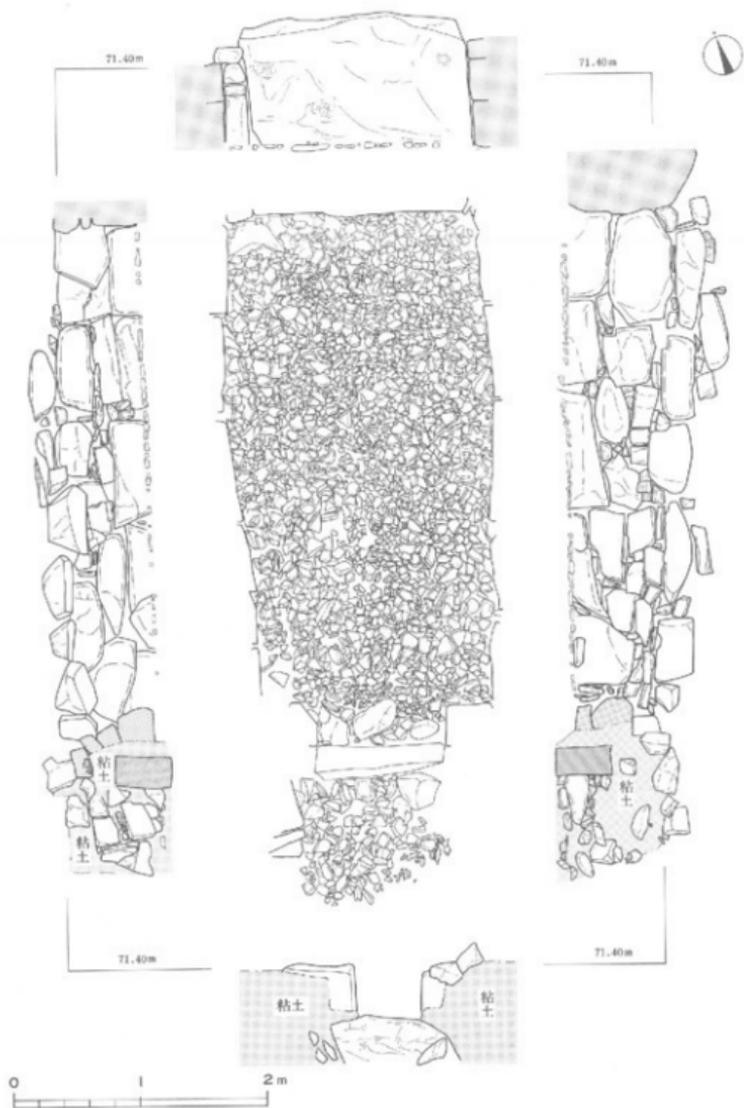
第8図 I号墳石室南方南北セクションSD-1南北セクション図



第9圖 I号墳石室平面図(確認段階)



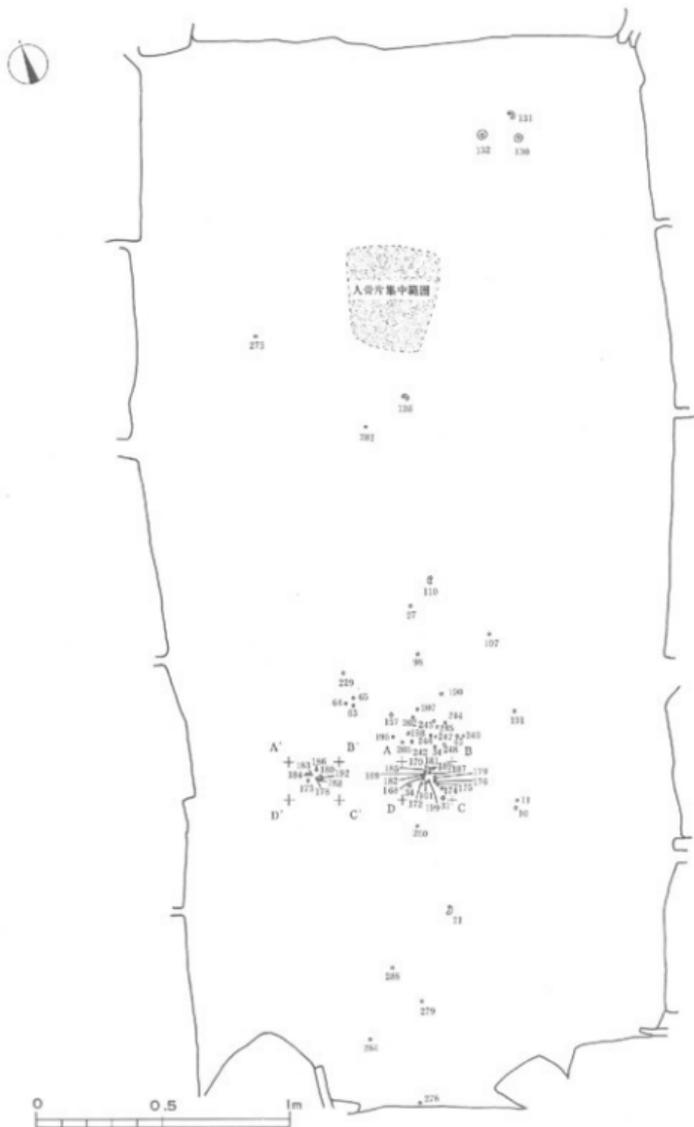
第10图 I号墳石室平面图(検出段階)



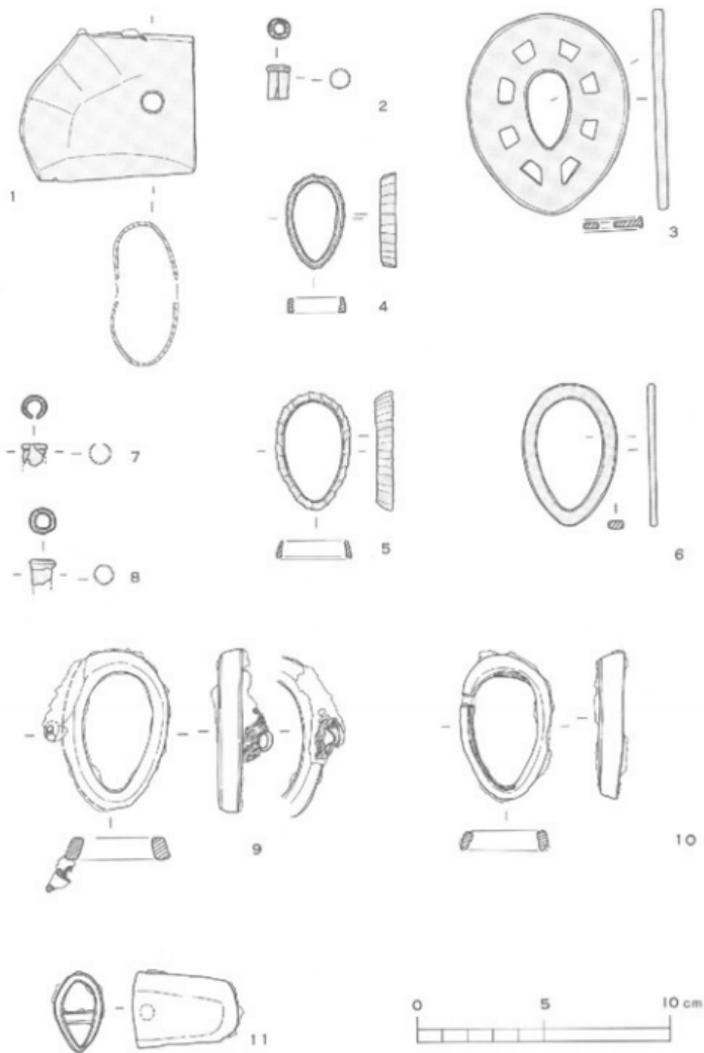
第12图 I号墳石室展開図



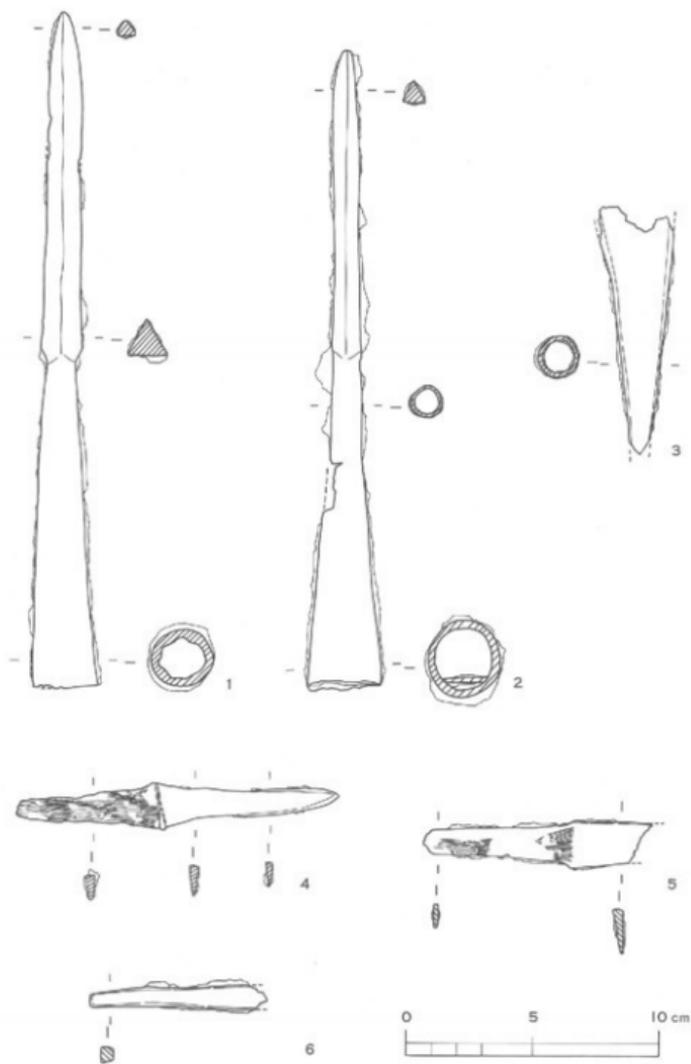
第13圖 I号墳石室内遺物出土狀態(1)



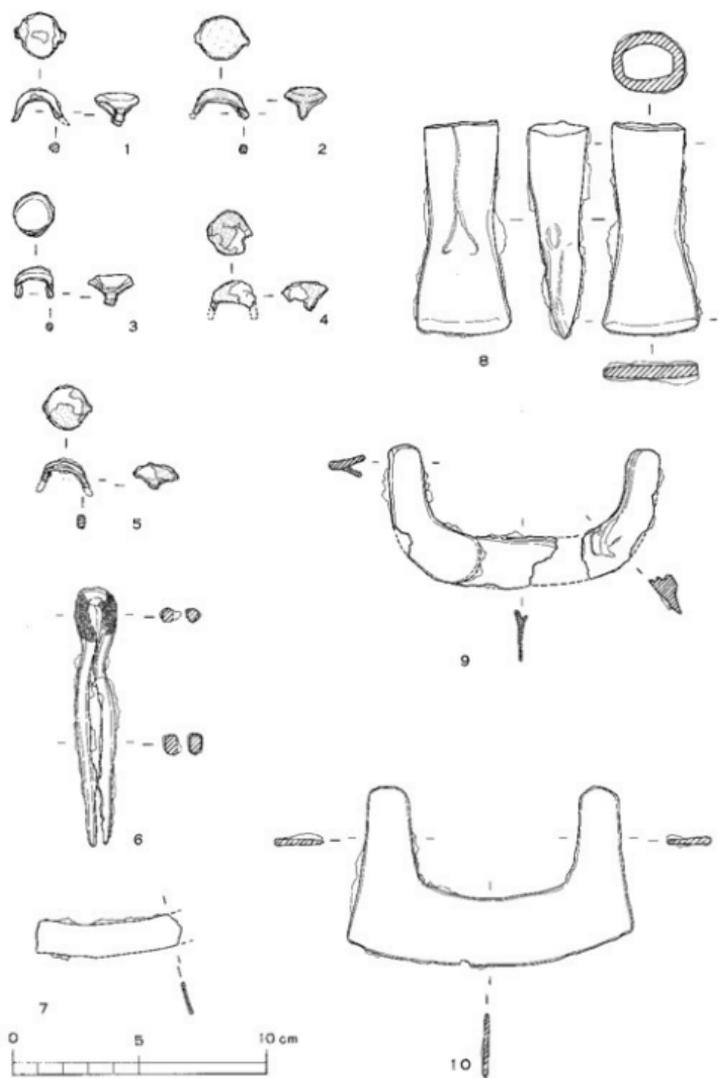
第14圖 I号墳石室内遺物出土狀態(2)



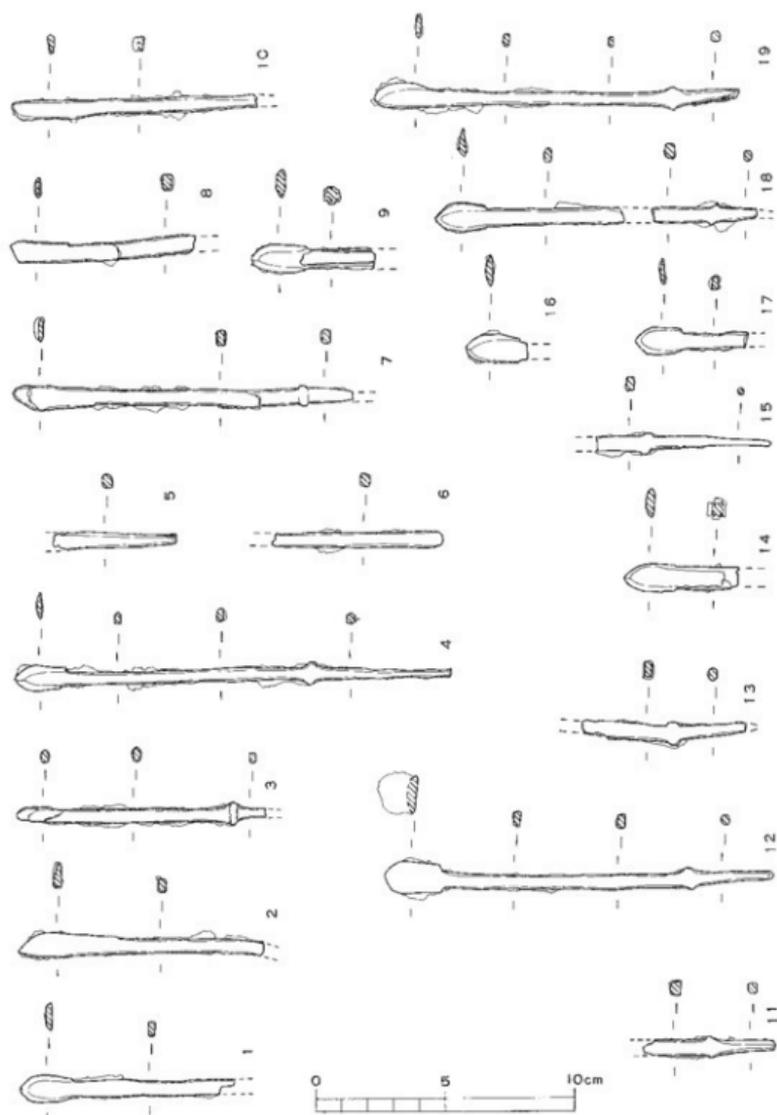
第15圖 I号墳石室内出土遺物(1)



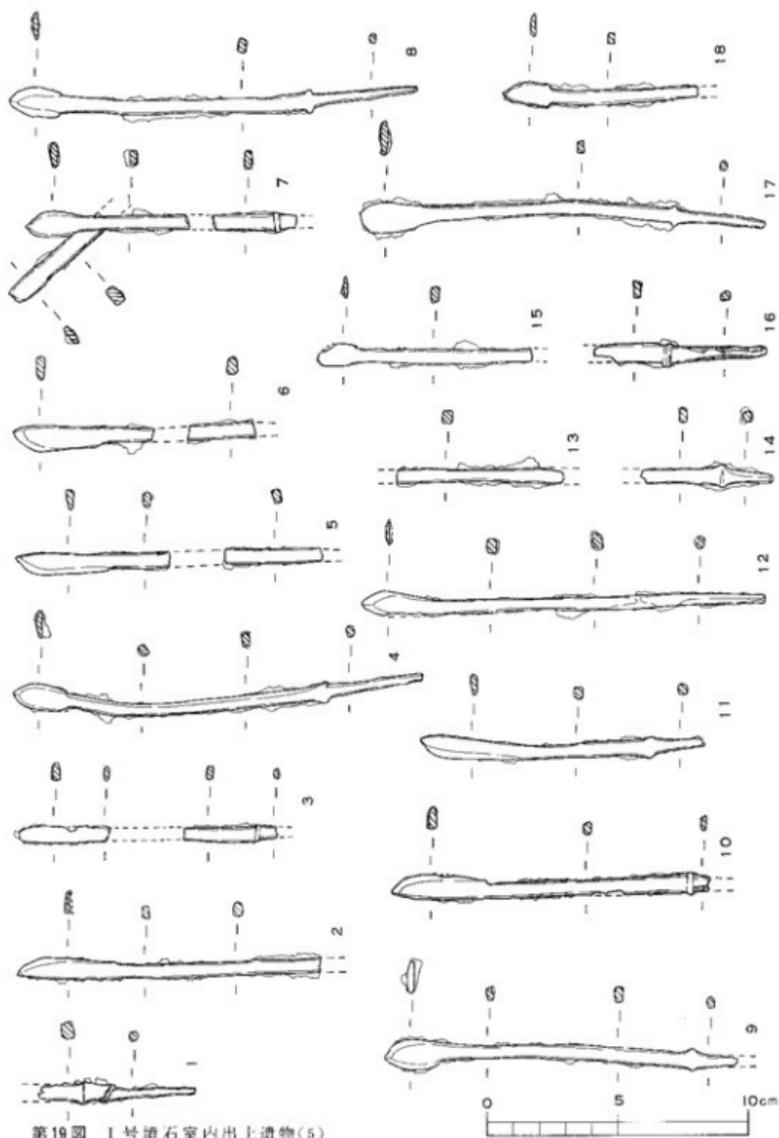
第16图 I号墳石室内出土物(2)



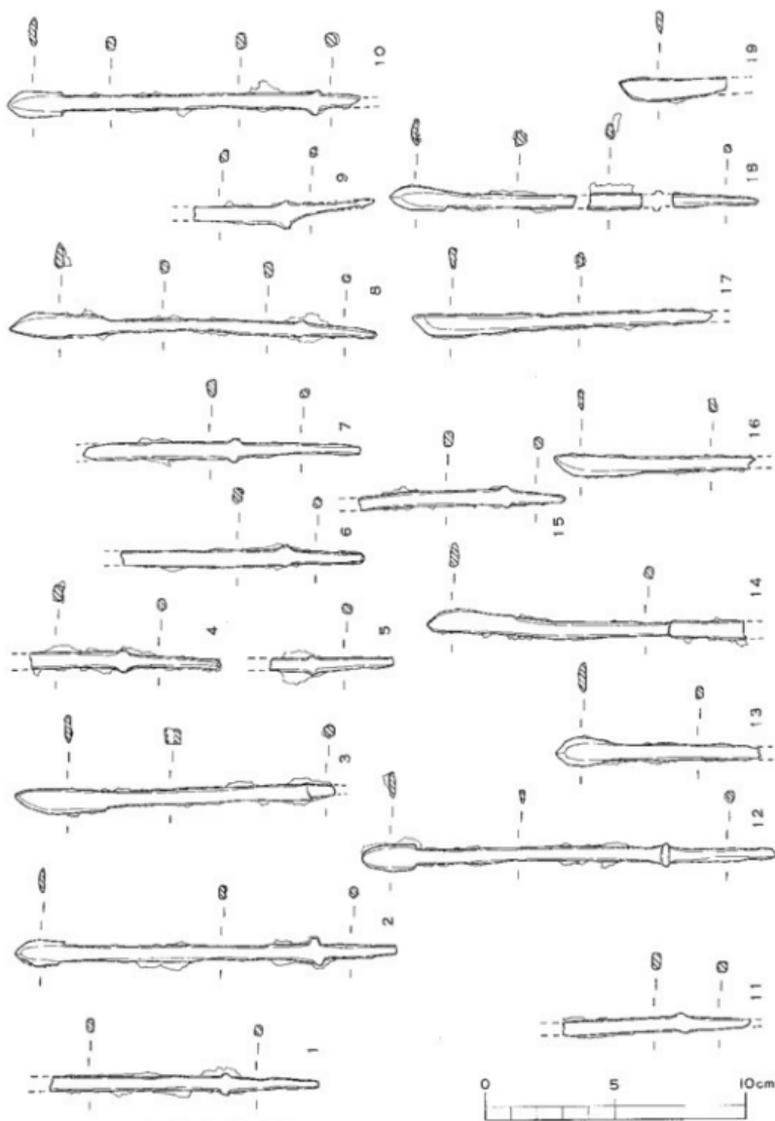
第17图 I号墳石室内出土遺物(3)



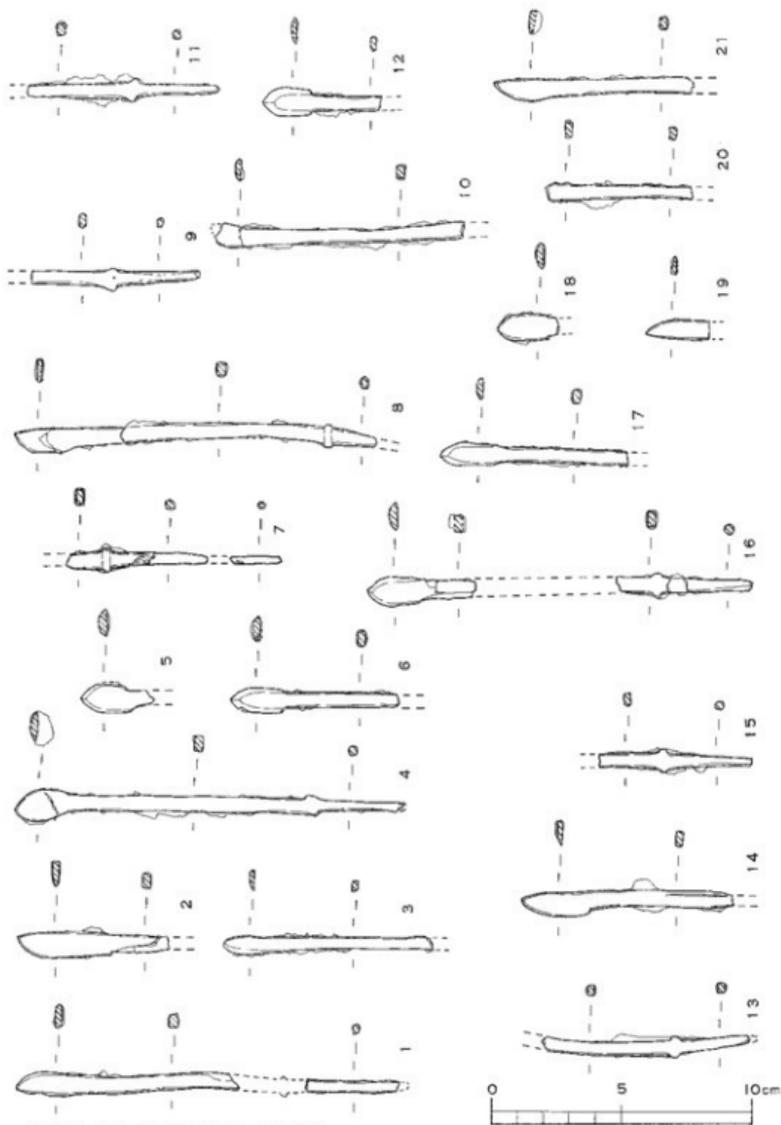
第18图 I号墳石室内出土遺物(4)



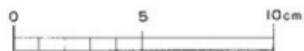
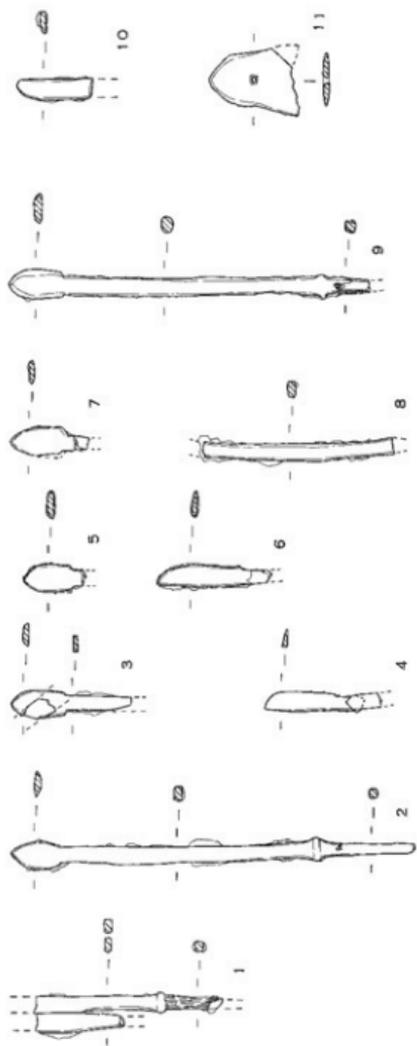
第19圖 1号墳石室内出土遺物(5)



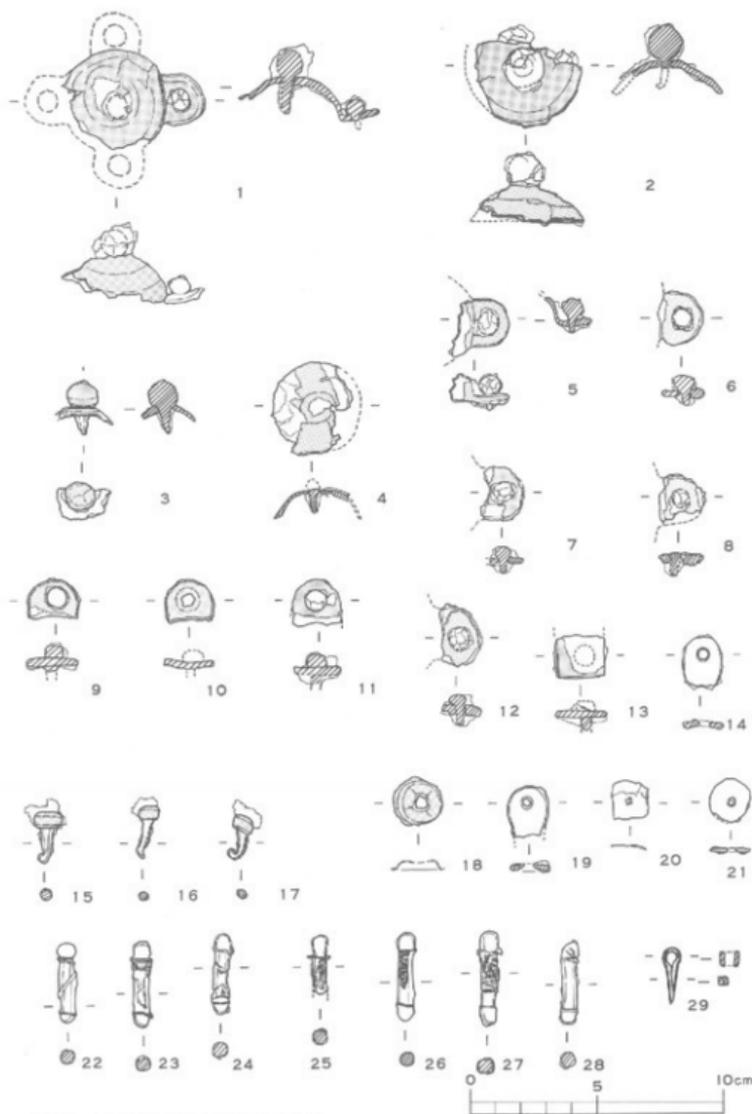
第20图 1号墳石室内出土遺物(6)



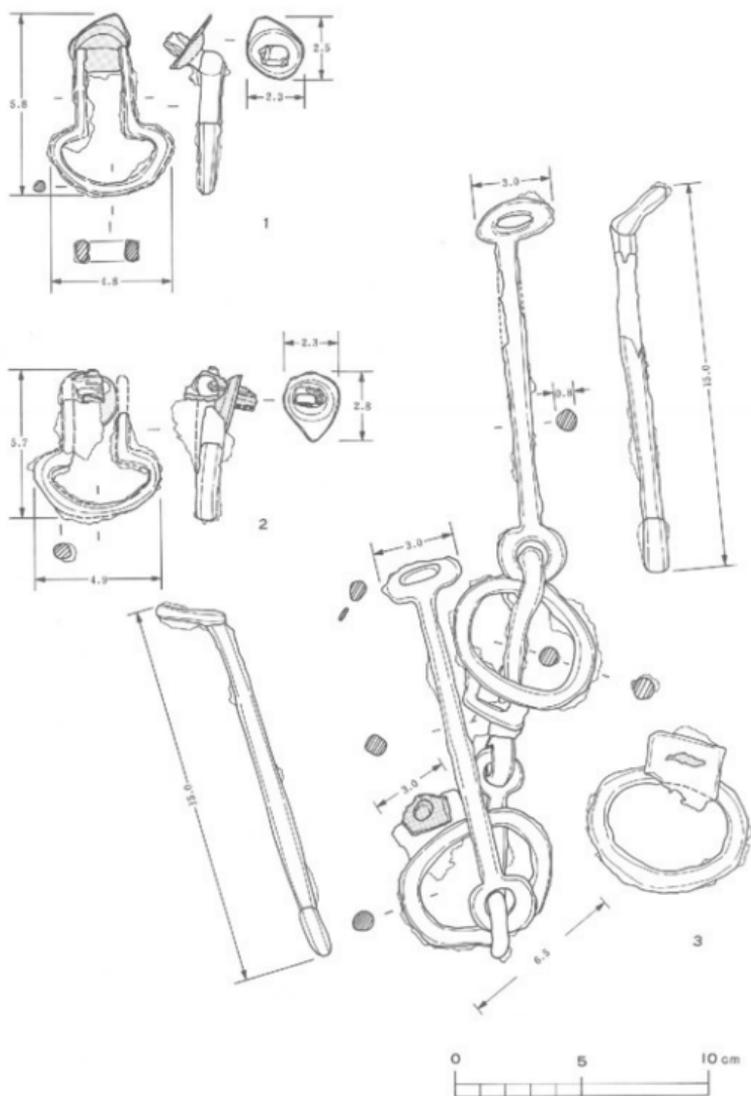
第21图 I号填石室内出土遗物(7)



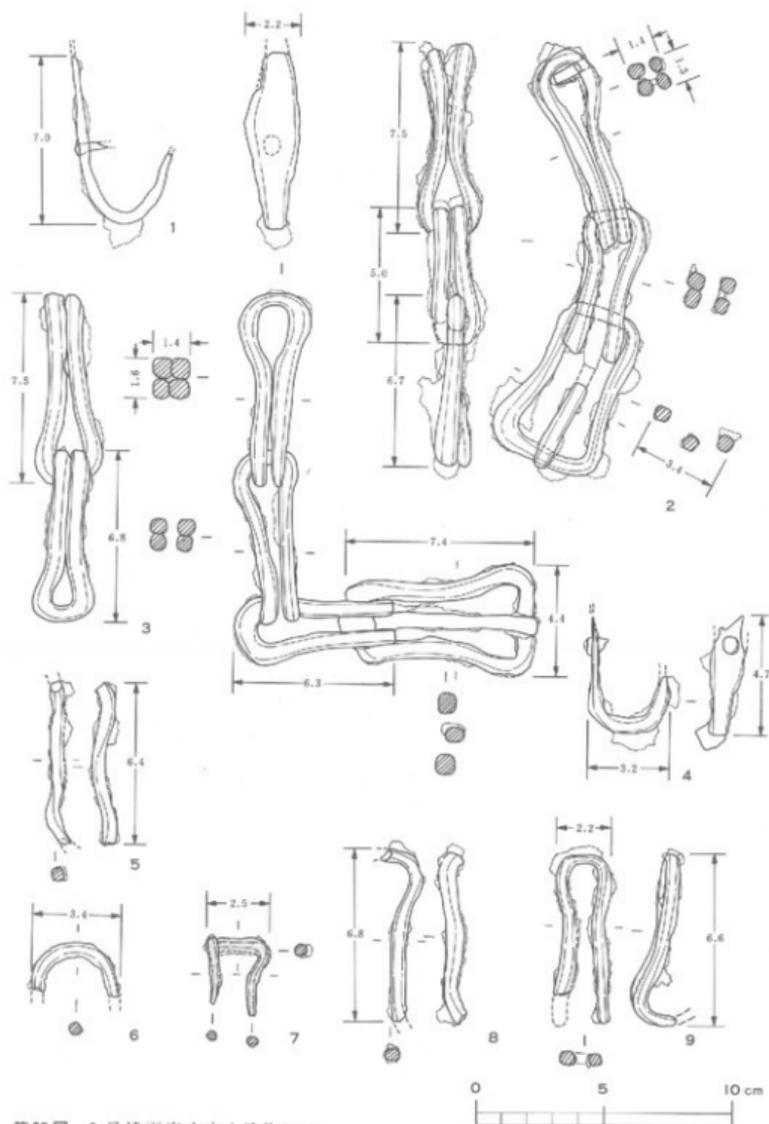
第22图 I号墳石室内出土遺物(8)



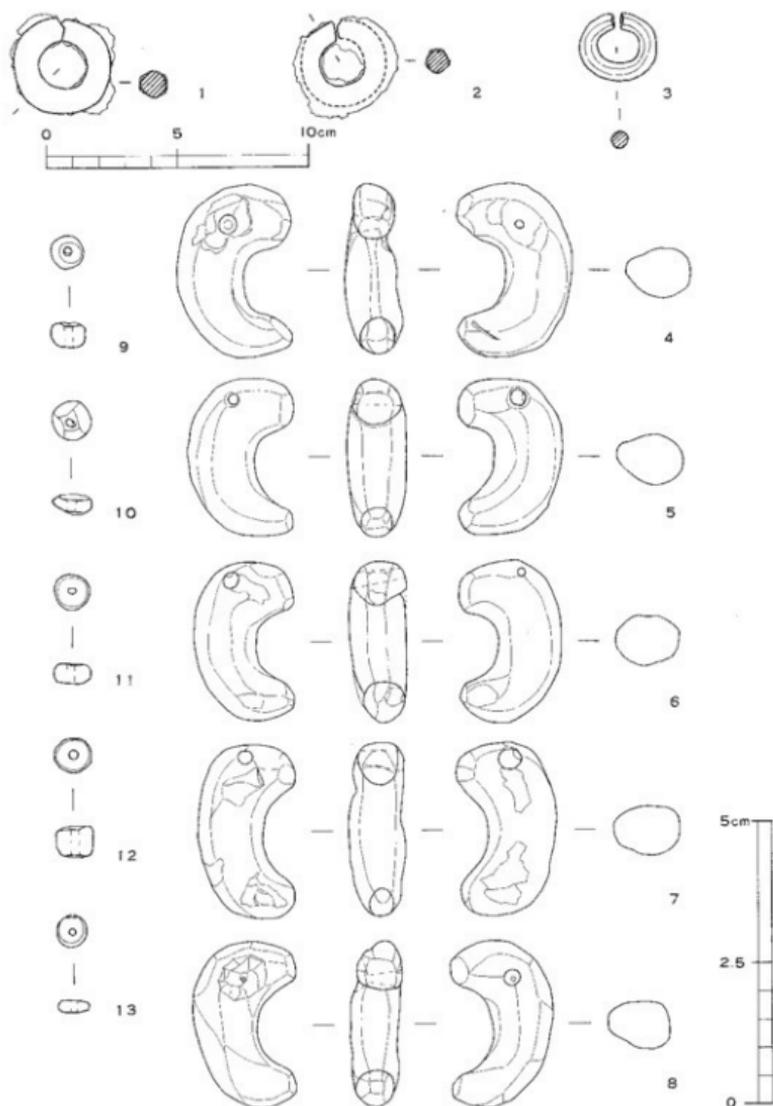
第23图 I号墳石室内出土物(9)



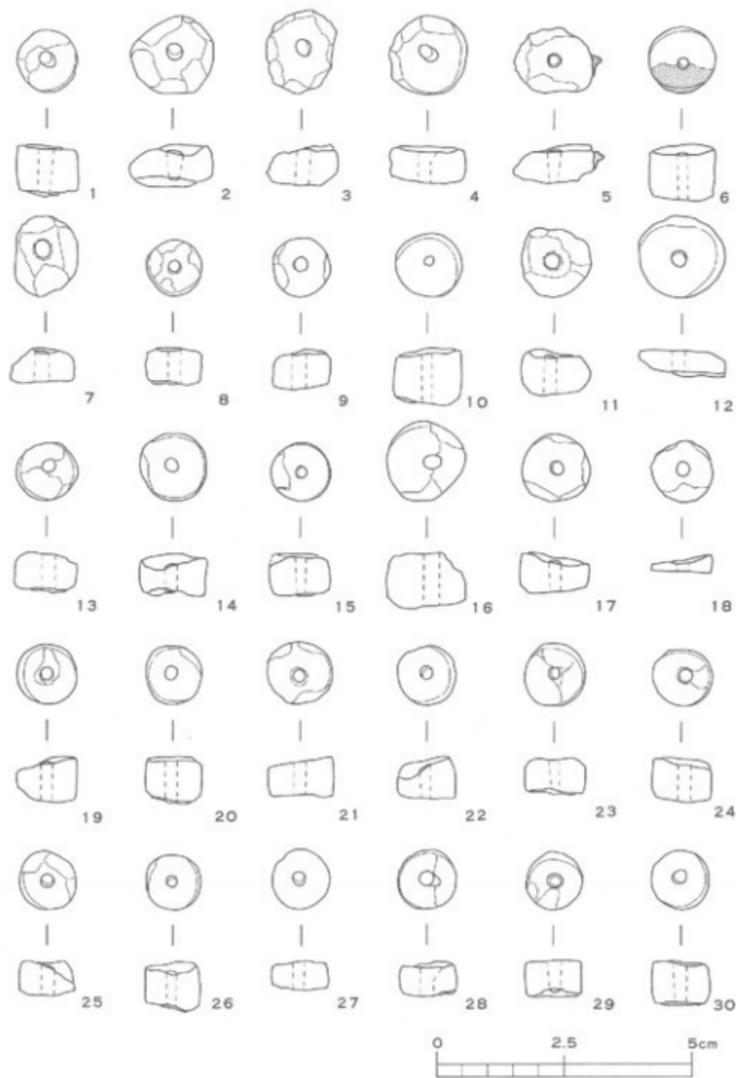
第24图 1号墳石室内出土遺物(10)



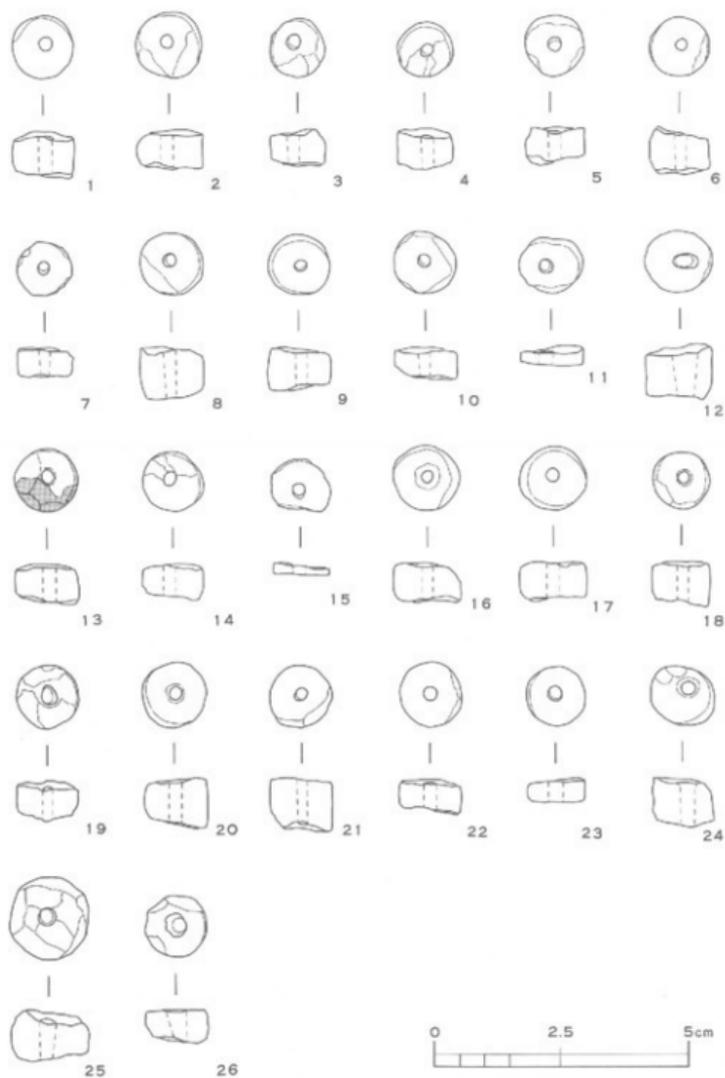
第25圖 I号墳石室内出土遺物(11)



第26图 I号坟石室内出土遗物(12)



第27圖 I号墳石室内出土遺物(13)



第28图 I号墳石室内出土遺物(14)

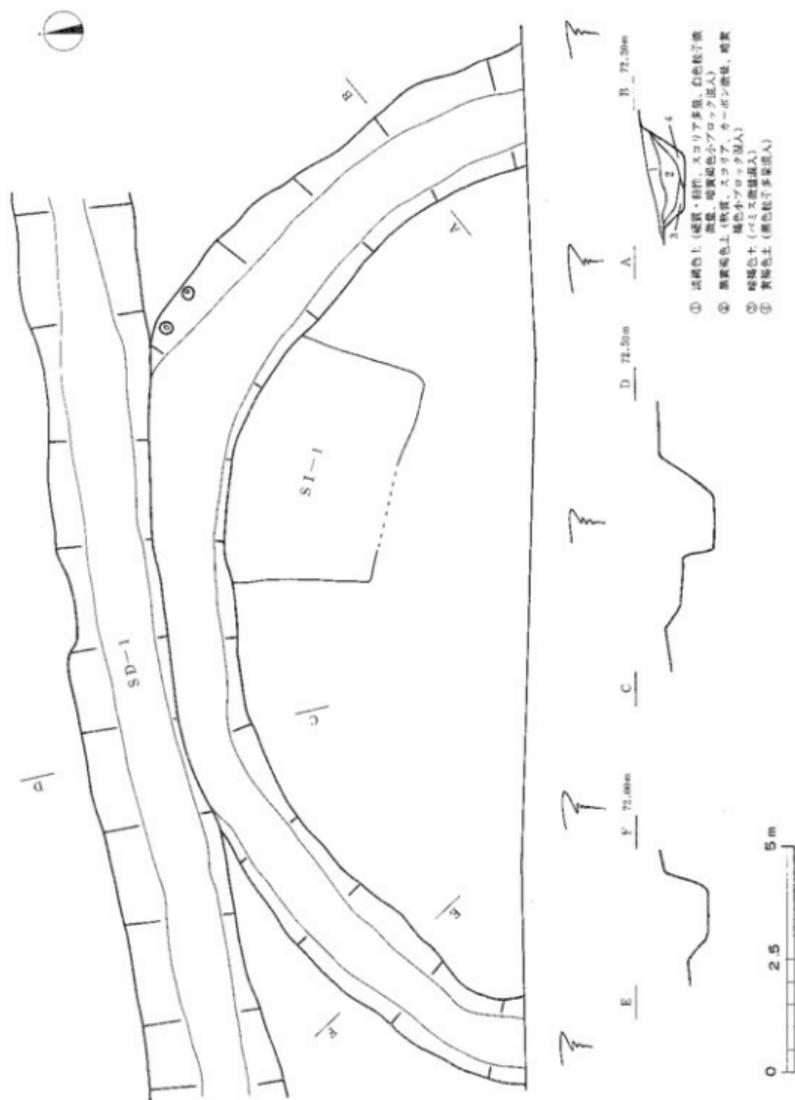
II 号 墳 (第29図) (図版10-1)

II号墳は、I号墳の南東約40m(円墳の心々距離)に位置し、周溝最短距離(北西端)は約8mを測る。南面する丘陵斜面の標高72.00mに位置し、調査区ではCIV-15区(中グリッド)内に北半域の周溝を遺存する。同周溝の北端・外側は東西に走向するSD-1と重複し、内側はSI-1と重複する。

遺跡は、鶏舎跡地の南側で東西に広がるテラス部分に、No.22地点の遺構確認の為の試掘調査時に確認されたもので、東側で約0.7m、西側で約1.5mの盛土層の堆積下に検出した。調査は盛土の除去を行った後、遺構の全容を窺った。その結果、墳丘・主体部・南半域周溝を削平され、わずかに円墳の名残りとどめる周溝の北半域を検出するに至ったのである。

周溝の北端部・外側の約11mは、東西に走向し西側の支谷に落ち込むSD-1に削土され、内側は弥生時代後期のSI-1を削土する。更に、同地一帯は西及び南側を強く削平しており、遺構の残存状況からは旧形を窺い得ない状況となっていた。周溝は、その東側で上幅2.30m、底面幅1.12m、深さ約0.90~0.60mを測り、周溝の立ち上がりは内・外側共にやや急で、断面形状は逆台形「┌」を呈する。周溝底面はほぼ平坦で、標高約71.10mである。北側では上幅1.60m以上、底面幅1.06m以上、深さ約0.44~0.36mを測り、周溝の立ち上がりは内側では緩やかで、断面形状は逆台形「┐」を呈するものと思われる。周溝底面はほぼ平坦で、標高約71.50mである。西側では上幅2.00m、底面幅1.04m、深さ約0.86~0.58mを測り、周溝の立ち上がりは内側では緩やかで外側では急であり、断面形状は逆台形「┐」を呈する。周溝底面はほぼ平坦で標高約70.40mである。周溝の高低差はやはり地形的なもので、北と東では0.40m東に低く、北と西では1.10m西に低くなっている。以上の周溝遺存状況により、II号墳の直径は約24m、墳丘径で約20mを測る円墳を推測する事ができるものである。

出土遺物は、周溝内覆土中より若干の弥生土器片を検出した。しかし、これらの弥生土器は総て後期に位置付けられるものであり、SI-1からの出土・流出による事は明らかであろう。



第29图 II号墳平面图・断面图

III 号 墳 (第30図～39図, 第72図～74図) (図版10～14, 図版62・63)

Ⅲ号墳は、Ⅰ号墳の南東約63mに位置し、Ⅳ号墳の東隣りに並存する。同墳は南面する丘陵斜面の標高70.00mに位置し、調査区ではCIV-15区とDIV-3区(中グリッド)に跨がる。遺跡は南側周溝を欠失し、北側周溝はSⅠ-2と重複する。更に、西半域は中世の集石2と重複(墳丘中腹～裾部にかけて中世墓が造営された)している。

遺跡は、鶏舎跡地の南側で東西に広がるテラス部分に、No.22地点の遺構確認を行った試掘調査トレンチによって確認されたものである。確認遺構は、東側周溝を地表下約0.6m、石室を地表下約0.5～0.7mの盛土下層で検出したもので、調査は同地一帯の客土(盛土)層の除去より開始した。その結果、西側周溝の確認面は地表下約1.9mの深さにまで及び、集石2と同一面で把握できた。同地一帯も地形的に西側へ傾斜する為、Ⅲ号墳墳丘を西に向けて削平しながら盛土を行っている事が判明した。また、同墳南側周溝は道路敷設によって削土されている。遺構は周溝の2/3を遺存し、天井を削平された石室も遺存している。

周溝は、確認面において全掘を行った。その結果、直径約24m(周溝外径)を測る円墳である事が判明した。東側周溝は、上幅2.50m、底面幅1.45m、深さ約0.70mを測り、周溝の立ち上がりは内・外側共にやや急で、断面形状は逆台形「∩」を呈する。周溝底面はほぼ平坦で標高68.60mである。北側周溝は、上幅2.35m、底面幅1.13m、深さ約0.80mを測り、周溝の立ち上がりは内側では緩やかで外側では急であり、断面形状は逆台形「∩」を呈する。周溝底面はほぼ平坦で標高69.10mである。西側周溝は、上幅1.62m、底面幅0.78m、深さ0.77mを測り、周溝の立ち上がりは内・外側共に急で、断面形状は逆台形「∩」を呈する。周溝底面はほぼ平坦で、標高67.10mである。周溝の比高差は、北と東では0.50m東に低く、北と西では2.00m西に低くなっている。墳丘の立ち上がりについても、東から北半部にかけては比較的緩やかで、特に西側は急なものであった事が想定でき、やはり地形的な利を生かして構築したものであろう。

石室は、樞石によって明確に玄室と羨直とに分けられ、比較的入念な閉塞がなされていた。閉塞状況は、径20～40cmの塊石と褐色土・青灰色粘土により丹念に積み上げられていた。また、閉塞東側部分に鏝(破損している)部分を石室床面にし、刃部を下にした大刀の茎が確認された。後の精査で、斜位に立て掛けたかもしくは突き刺した状況を呈していた。

羨直部は、両側壁にその名残りをとどめており、特に西壁は良好に遺存していた。羨直部長約0.80m、幅約0.90mを測り、西壁は2段に塊石を小口積みにし、東壁は原位置を動いていると思われるが、長さ約60cm、高さ約65cmの塊石を確認した。また、西壁には樞石と並置させた一辺約30cm、高さ約70cmを測る柱石が存在する。樞石は長さ約100cm、幅約15～25cm、厚さ約27cmを測る塊石であるが、更に高さと同じくする一辺20～40cmの塊石を外側に3個並存(隙間

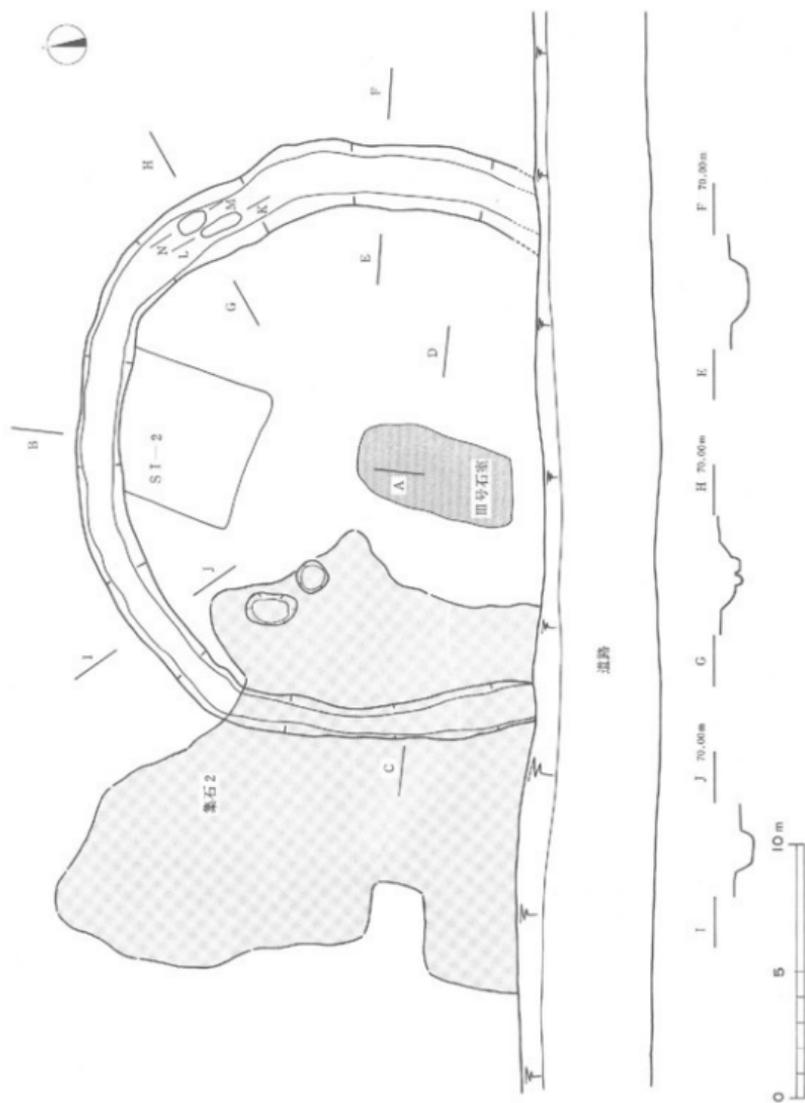
は礫・粘土・褐色土を使用している)させている。

玄室は、長さ3.20m、最大幅(玄室中央)1.85m、最小幅(奥壁寄り)1.40m、遺存高1.36m、主軸方位N-32°-Eを測る両袖式・両脇張りの横穴式石室である。西側袖は底辺約20×20cmの塊石により、東側袖もほぼ同一のものを想定できる。西側壁は、床面とはほぼ同一レベルに大型の基底石を5列据え置き、小口積みで確認4段まではほぼ垂直に積み上げ、隙間に割石を詰めている。東側壁は、床面下約15~20cmまで埋め込んだ大型の基底石を4列配し、小口積みで確認5段の緩やかな持ち送り形式をとり、隙間に割石や礫を詰めている。両側壁共に、裏込めには青灰色粘土・褐色土・黒色土などの混入土を版築状に固めていた。奥壁は、長さ1.00m、幅0.38m、高さ0.85m(うち床面下に0.08m埋まる)を測る一石と、西側隙間幅約30~20cm・東側隙間幅約45~15cm共に小口積みによる確認7段の小型塊石から成り、やや内傾して立ち上がる。床面は、褐色土を用いて平坦化した上で、径5~10cm内外の礫を全面に敷き詰めている。

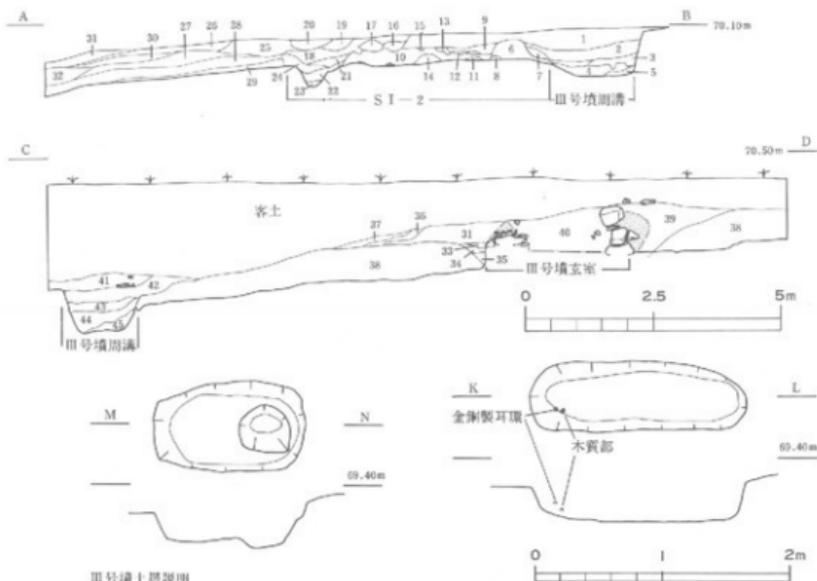
玄室の構築は、ローム面まで掘り下げ奥壁・側壁・入口部などを構成する基底石を据え置き、裏込めしながら壁を積み上げている。最終的には天井(石)を架けたものであろうが、墳丘と同時に削平を受けて遺存しない。そして、床には盛土によって平坦化し礫敷きとしている。当墳は、I号墳の様に壁の基底面を掘り込む事なく、単に据え置く状態で構築が成されている。更に、入口西側には柱石が遺存する事から、東側部分の崩壊箇所にもその存在を考えられるものである。また、周溝の状況からは直径約24m(墳丘径約19m)を測る円墳である事を推定できるものである。

出土遺物は、総て玄室内から検出しており、直刀・刀装具・刀子・鉄鍔・耳環・勾玉・切子玉など約42点が出土した。直刀は、1振が入口に斜位(閉塞の上方から玄室床面に達する影をとる)、他2振は銚を西にし入口部に並置される。刀装具及び刀子は、玄室西側にまとまり、装身具は奥壁寄りに集中して出土した。瑪瑙製勾玉8点と水晶製切子玉9点は一連となっていた可能性は強く他には東壁際より水晶製切子玉1点が出土している。銅地金銅張り耳環は、骨片の集中範囲内より約40cmの間隔をもって一対が出土した。この骨片は、奥壁寄りに70×80cmの範囲で検出したもので、形をとどめるものでは大腿骨(成人骨)と脛の一部を確認した。

Ⅲ号墳周溝の北東部には、その周溝底面に土坑2基を検出した。2基は共に長軸を同じくし、南側土坑は1.70×0.55m、深さ0.30mを測り、平面長楕円形状を呈して両隅から銅地金銅張り耳環1点と不明木質片を出土した。北側土坑は1.20×0.70m、深さ0.25~0.34mを測り、平面不整形楕円形状を呈して、北隅に37×40cm、深さ10cmの小Pitを有している。出土遺物はなかった。しかし、この2基の土坑はほぼ同時期の所産と考えられるものである。



第30圖 Ⅲ号墳平面図・断面図



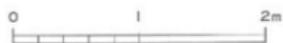
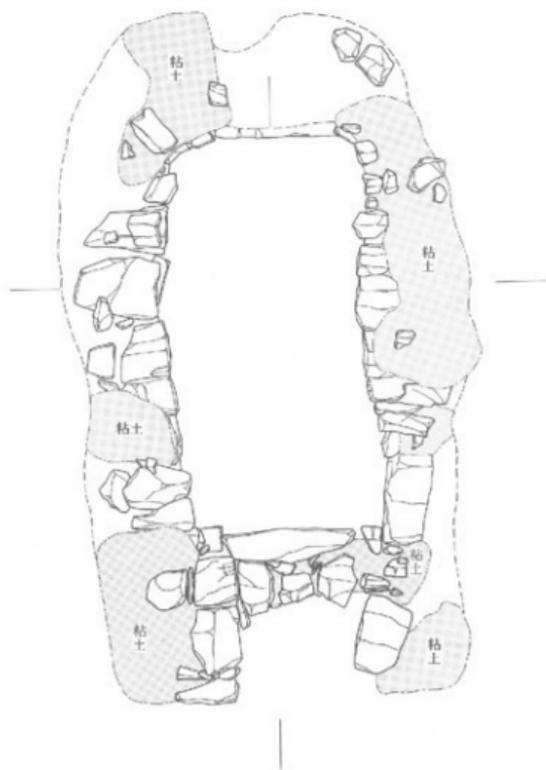
Ⅲ号墳上層説明
(全・S1-2)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------------|-------------------------|----------------------|------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|---------------------|----------------------|---------------------|------------------------|--------------------------|-------------------------|---------------------|-----------------|------------------|-----------------|-----------------------|-----------------|--------|-------------------------|----------------|-------------------|---------------|------------------------|--------------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| ① 黒黄褐色土 (パミス・スコリア・黄褐色土ブロック等千乱入) | ② 赤褐色土 (パミス微塵・スコリア多量混入) | ③ 赤褐色土 (黒色小ブロック土) 混入 | ④ 赤褐色土 (黒色小ブロック土) 多量混入 | ⑤ 黄褐色土 (粘土小ブロック土) | ⑥ 黄褐色土 (粘土小ブロック土) | ⑦ 黄褐色土 (明褐色粘土粒混入) | ⑧ 黄褐色土 (微土粒多量混入) | ⑨ 赤褐色土 (黒色土小ブロック混入) | ⑩ 赤褐色土 (陶質褐色土・黒色土混入) | ⑪ 赤褐色土 (微土粒・白色粒千乱入) | ⑫ 赤褐色土 (陶質褐色土小ブロック土混入) | ⑬ 赤褐色土 (陶質褐色土小ブロック土多量混入) | ⑭ 赤褐色土 (陶質褐色土小ブロック土) 混入 | ⑮ 赤褐色土 (微土粒・炭化材) 混入 | ⑯ 赤褐色土 (明黄白色粘土) | ⑰ 赤褐色土 (パミス多量混入) | ⑱ 赤褐色土 (スコリア多量) | ⑲ 赤褐色土 (白色粒千・黒色粒千) 混入 | ⑳ 赤褐色土 (スコリア混入) | ㉑ 赤褐色土 | ㉒ 赤褐色土 (陶質褐色土小ブロック土) 混入 | ㉓ 赤褐色土 (炭化材混入) | ㉔ 赤褐色土 (炭化材・粘土若干) | ㉕ 赤褐色土 (遺物包含) | ㉖ 赤褐色土 (スコリア多量・炭化材) 混入 | ㉗ 赤褐色土 (パミス・スコリア・黒色土) 混入 | ㉘ 赤褐色土 (パミス・スコリア多量) | ㉙ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㉚ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㉛ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㉜ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㉝ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㉞ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㉟ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊱ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊲ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊳ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊴ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊵ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊶ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊷ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊸ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊹ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊺ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊻ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊼ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊽ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊾ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) | ㊿ 赤褐色土 (パミス多量・黒色粒千) |
|---------------------------------|-------------------------|----------------------|------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|---------------------|----------------------|---------------------|------------------------|--------------------------|-------------------------|---------------------|-----------------|------------------|-----------------|-----------------------|-----------------|--------|-------------------------|----------------|-------------------|---------------|------------------------|--------------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|

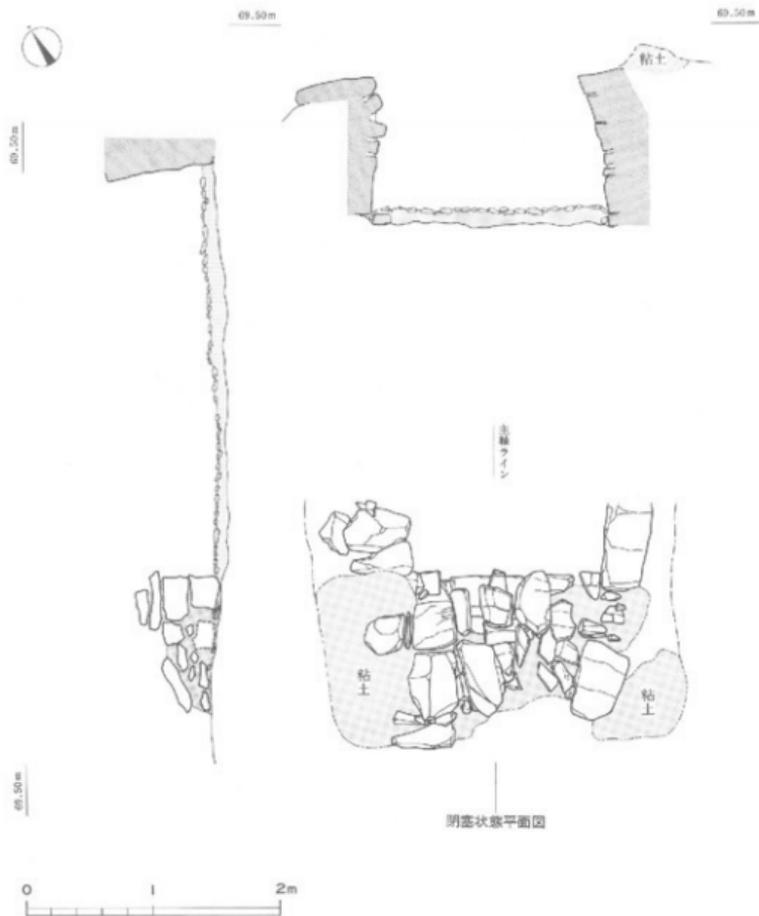
第31図 Ⅲ号墳東西セクション図、周溝内検出土坑平面図・断面図



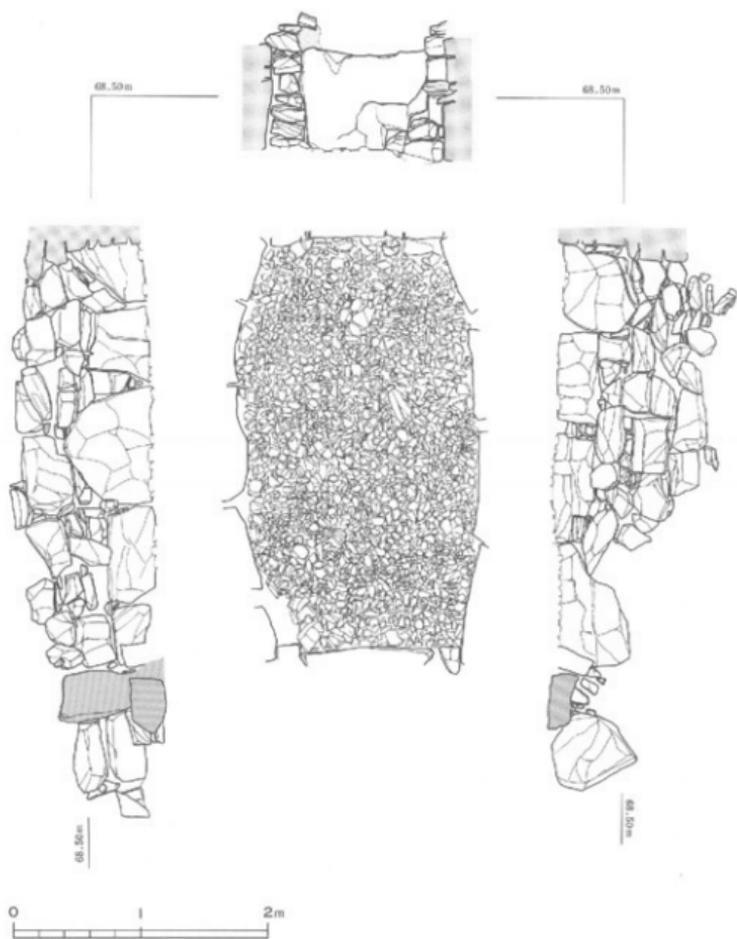
第32圖 III号填石室平面图(俯视图)



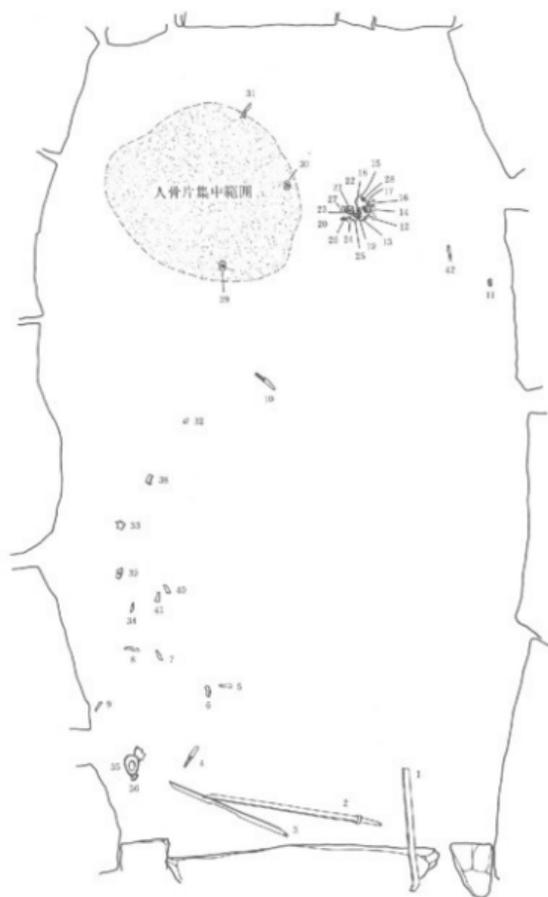
第33图 III号填石室平面图(绘出毁损)



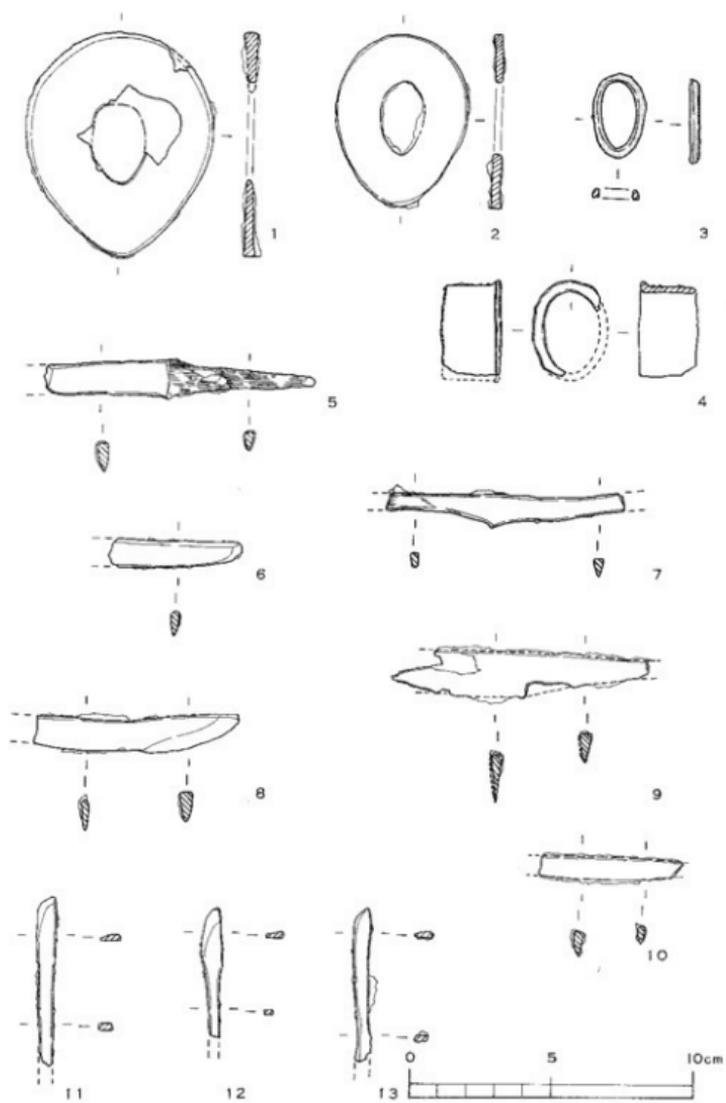
第34圖 III号墳石室断面図・閉塞状態平面図



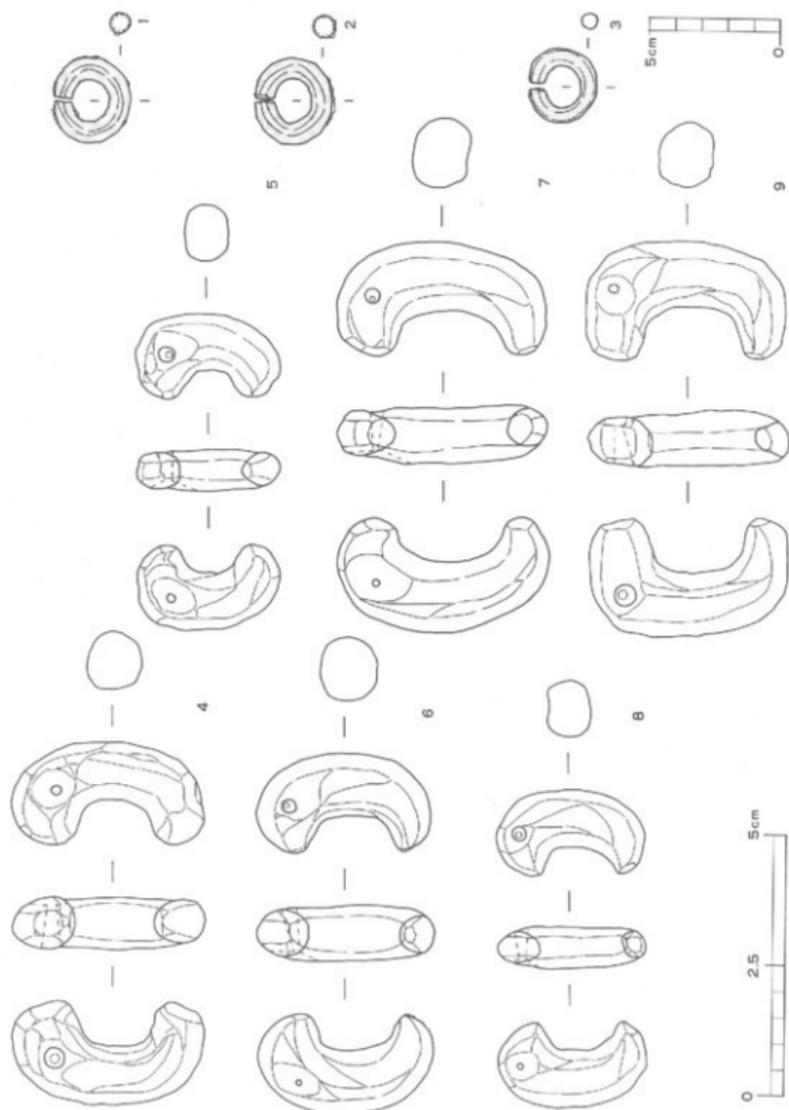
第35圖 III号墳石室展開圖



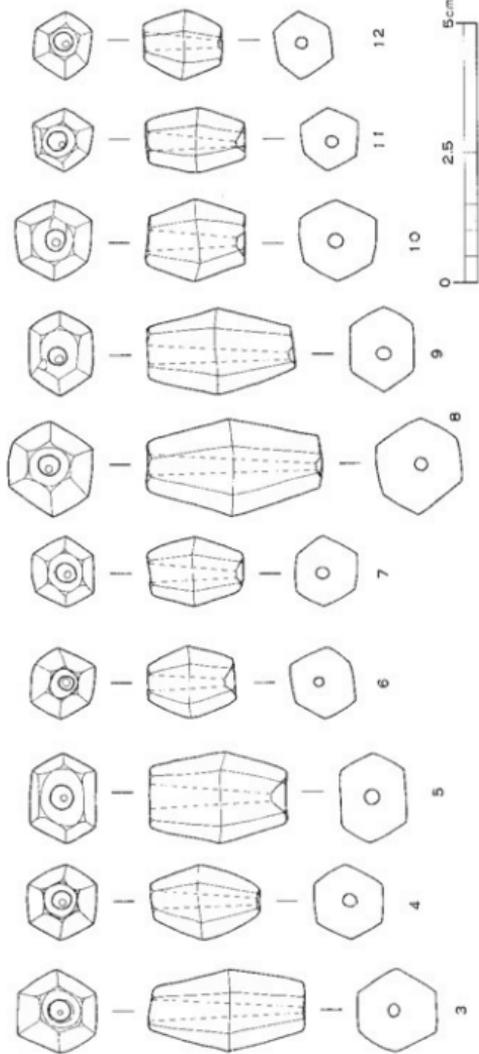
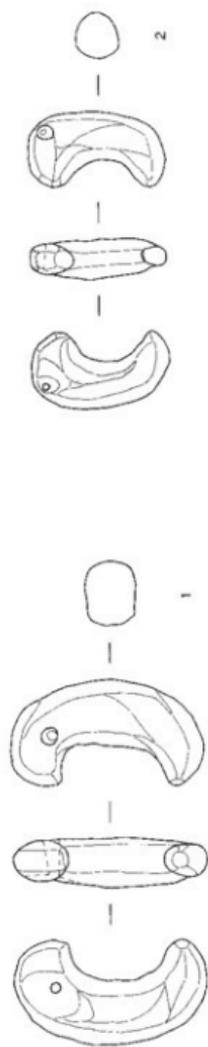
第36圖 III号墳石室内遺物出土狀態



第37圖 Ⅲ号墳石室内出土遺物(1)



第38图 Ⅲ号墳石室内出土遺物(2)



第39圖 雁弓墳石室内出土遺物(3)

IV 号 墳 (第40図～50図, 第73・74図) (図版15～17, 図版64～67)

IV号墳は、I号墳の南約53mに位置し、III号墳の西隣りに並存する。周溝最短距離は、IV号墳東端とIII号墳西端において約1.3mを測る。同墳は南面する丘陵斜面の標高67.00mに位置し、調査区ではCIV-14・15区、DIV-2・3区(中グリッド)に跨がり、石室及び周溝を確認した。遺跡は南側周溝を欠失し、東半域は中世の集石2と重複(集石2はIII号墳とIV号墳に跨って造営された)している。

遺跡は、鶏舎跡地での遺構確認調査後に行った客土(盛土)層の除去によって確認するに至ったもので、東部に約2.0m、西部に約3.7mの盛土を除去した。その結果、径30～40cmの塊石・五輪塔(水輪)・青灰色粘土の散乱を検出し、更に慎重に塊石の除去を行ったところ、入口から羨道部にかけての崩落した天井石を検出した。玄室の天井石は墳丘と共に削平されており、奥壁は抜かれていた。また、南側周溝は道路敷設によって削土され、地形的には西に低くなる。

周溝は、4本のトレンチ調査によって確認したもので、直径約25m(周溝外径)を測る円墳である事が判明した。東側周溝は、上幅2.0～2.2m、底面幅0.4～0.8m、深さ約0.4～0.6mを測り、周溝の立ち上がりは内側ではやや急で外側は緩やかである。断面形状は逆台形「┌」を呈し、周溝底面はほぼ平坦であるが、南に低くなっている。北東部の周溝には、径15～50cm・深さ10～30cmを測る平面円形・楕円形を呈するPit群を検出した。また、これら東半域の周溝は集石の下層約30～40cmが確認面である。西側周溝は、上幅1.3～1.6m、底面幅0.3～0.8m、深さ0.3～0.5mを測り、周溝の立ち上がりは内・外側共に緩やかで、断面形状は浅い逆台形「┌」を呈する。周溝底面はやや凹凸をもつが、南側で標高66.30m、北側で標高66.00mであり、地形的に西に落ちる事を利用して周溝を掘り込んだものと思われる。また、これらの西半域の周溝は約3.5～4.0mにも及ぶ盛土を確認し、その中には樹木を含んだ腐敗層も検出された。この事は、地形的にも低く谷に而した当地一帯を埋め立てた事を如実に示すものである。

石室は、框石によって明確に玄室と羨道とに分けられ、入念な閉塞がなされていた。閉塞状況は、径20～40cmの塊石と褐色土により塞さがれ、入口全体に積み上げて被うというものではない。

羨道部は全長約3.5mを測り、西壁は長さ1.1mまで塊石により確認3段で高さ0.8m、東壁は長さ1.0mまでやや小型の塊石により確認5段で高さ0.8mをそれぞれ計測する。幅は0.6～0.9mを測るもので、入口から南へ約1.7mまで雑敷となっている。また、羨道から入口にかけては天井石が遺存し、それぞれ74×40×9.5cm、80×69×11cmを測る平石を架けていた。更に、框石に並置して柱石は東西共に遺存しており、西柱石は底径17×25cm、高さ69cm、東柱石は底径19×28cm、高さ90cmを測る。框石は長さ約102cm、幅32～40cm、厚さ約29cmを測る塊石であ

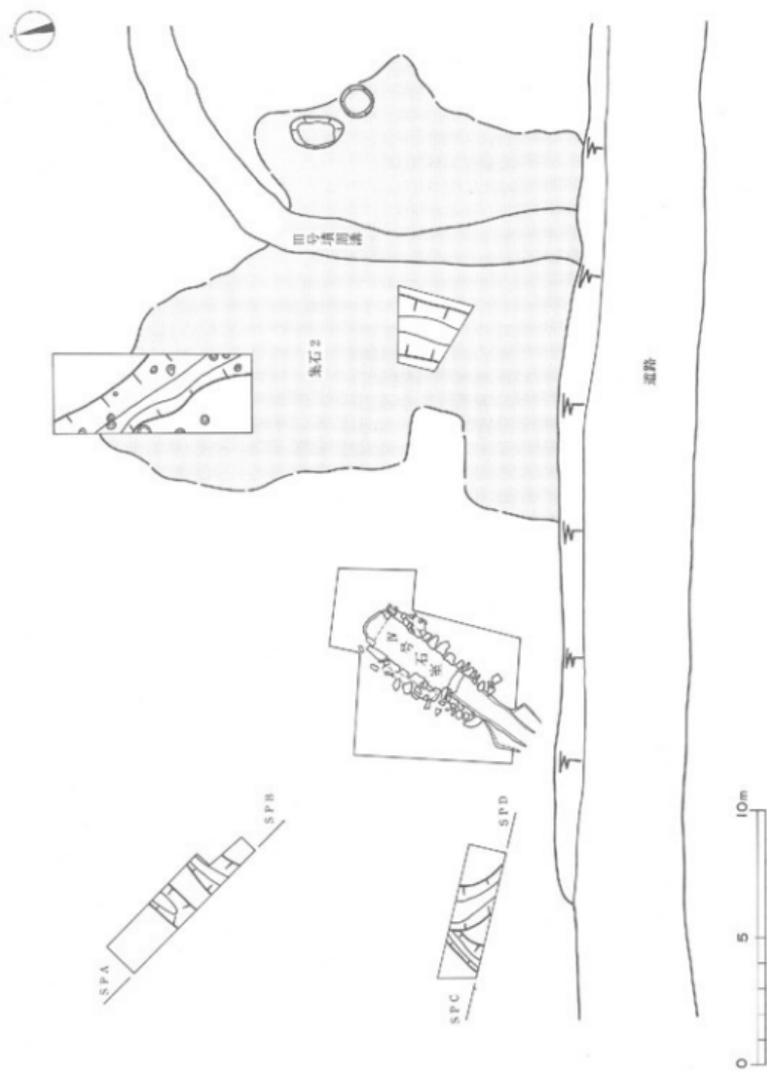
る。

玄室は、長さ3.45m、最大幅(玄室中央)1.58m、最小幅(入口寄り)1.21m、遺存高1.06m、主軸方位N-42°-Eを測る無袖式の横穴式石室である。西側壁は、床面とほぼ同一レベルに大型の基底石を6列据え置き、小口積みで確認5段の持ち送り形式をとり、隙間に割石を詰めている。東側壁は、床面とほぼ同一レベルに大型の基底石を5列据え置き、小口積みで確認8段の持ち送り形式をとる。また、西側壁の北側傾斜はやや急である。両側壁共に、裏込めには青灰色粘土・褐色土の混入土を飯茶状に固めていた。奥壁は既に抜かれていたが、その据え置き場所には東西両端部に平石(一辺40×20×25cm)を検出した。以上により、奥壁長約1.4m、幅約0.5m、高さ約1.0m以上の一枚石を想定する事ができる。床面は、褐色土を用いて平坦化した後、径5cm内外の礫を全面に敷き詰めている。

玄室の構築は、ローム面まで掘り下げた後奥壁・側壁・入口部などを構成する基底石を据え置き、裏込めしながら壁を積み上げると云うⅢ号墳とほぼ同じくしている。ただ、玄室から羨道にかけては幅をせばめながら、ほぼ直線的な構成をしているのは特徴的な事である。周溝の状況から同墳は、直径約26m(墳丘径約22m)を測る円墳であった事が判明した。

出土遺物は、玄室及び羨道部より約117点を検出している。玄室からは、直刀・刀装具・刀子・鉄鏃・轡・耳環・銅釧・小玉・垂玉などで、閉塞中よりは、鉄鏃・土師器片などである。直刀2振(大刀)は銚を入口にし東壁際より出土している。また直刀2振(小刀)は銚を東壁にし大刀に交叉させ重なって出土した。大刀の下よりは、轡・鉄鏃がまとまって出土したが、鉄鏃は方向性もなく散在していた。更に、入口から西壁際にかけても鉄鏃が散乱していた。銅釧はそれぞれ西・東壁近くに約1.2m離れて出土し、銅地金銅張り耳環は主軸上やや西寄りに直線的に4点並存していた。刀装具(鈎)は西壁際の入口コーナーに存し、刀子は主軸上奥壁寄りに耳環に隣接して出土していた。ガラス製小玉は中央やや西寄り、耳環の周囲に集中して出土した。閉塞中より出土した鉄鏃は、礫や覆土中より6点検出したが、いずれも破損している。

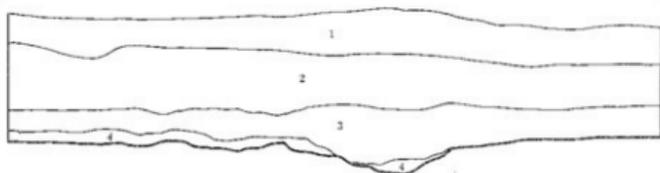
副葬品の出土状況で、武器・馬具などは入口東壁際にほぼ集中しており、小玉もほぼ中央付近に集中するが、耳環・銅釧・鈎などは遊離する状況を呈していた。また、大刀には刀装具が伴出していない事により、外装の質素な実用性を帯びるものであろう。馬具は轡1点であり、この鈎具立間素環鏡板付轡は六世紀第4四半世紀から七世紀第1四半世紀頃に比定されるものであり、I号墳出土の轡とほぼ同時期か若干先行する時期に同墳の年代を推定する事も可能である。



第40図 IV号墳平面図・周溝確認トレンチ配置図

SPA

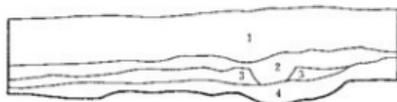
SPB 68.30m



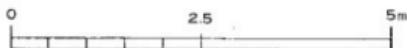
- ① 盛土 (造成時)
 ② 腐敗土 (腐植 多量混入土)
 ③ 炭灰褐色土 (暗褐色土ブロック 多量混入(田圃成))
 ④ 灰褐色土 (粘性あり、パミス・黄褐色土 小ブロック混入(ローン堆山))

SPC

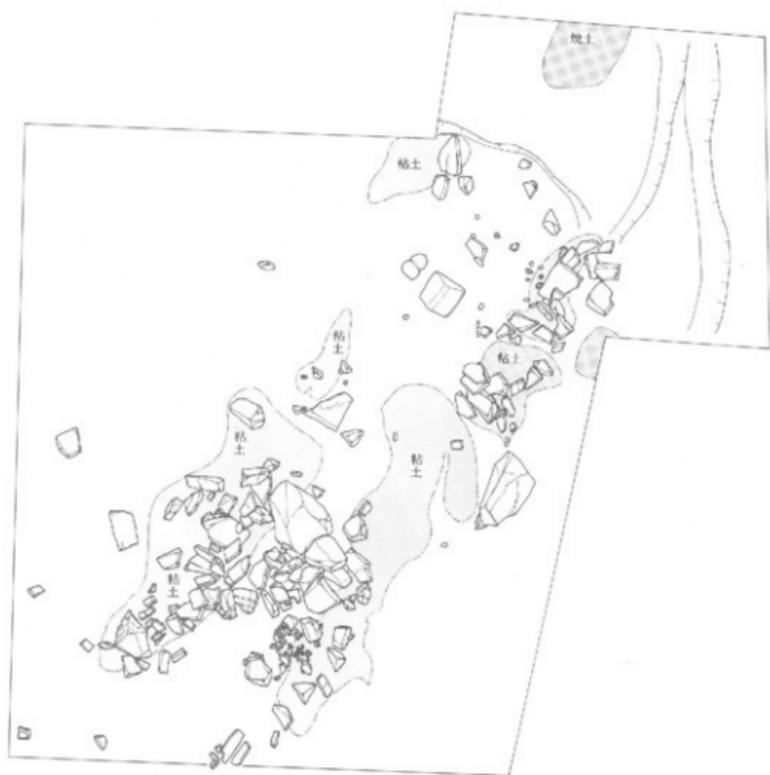
SPD 68.30m



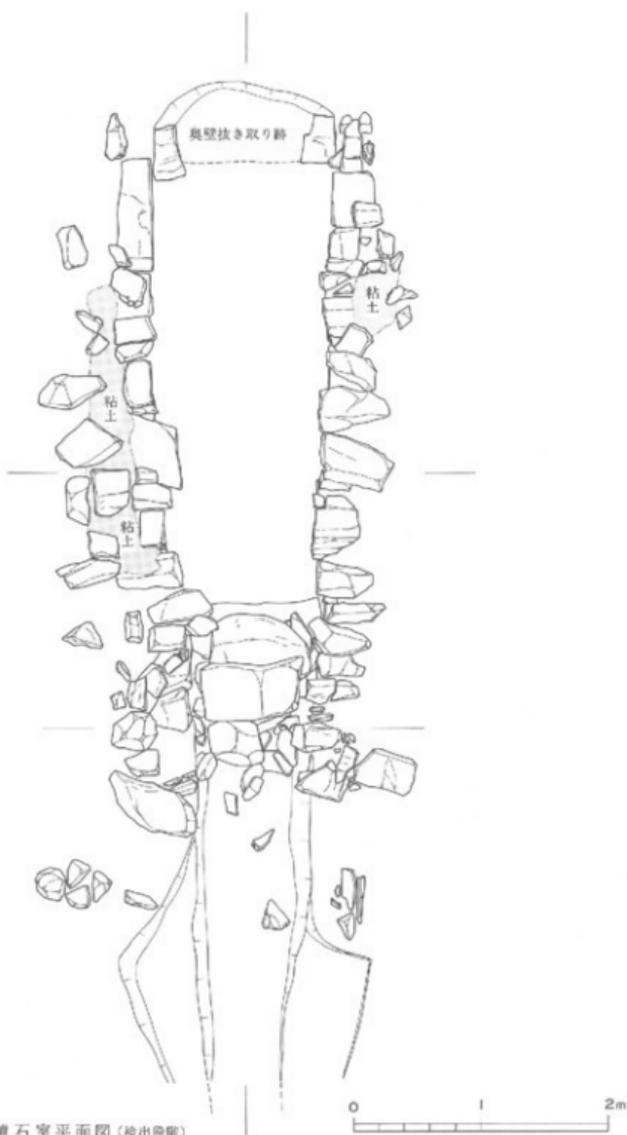
- ① 盛土 (造成時)
 ② 暗褐色土 (軟質、ローム粒子・黒色土粒子・黄褐色土ブロック)
 ③ 腐敗土 (硬質、褐色土小ブロック多量及び灰褐色土ブロック混入)
 ④ 黒灰褐色土 (ローム堆山、粘性あり、黄褐色土ブロック混入)



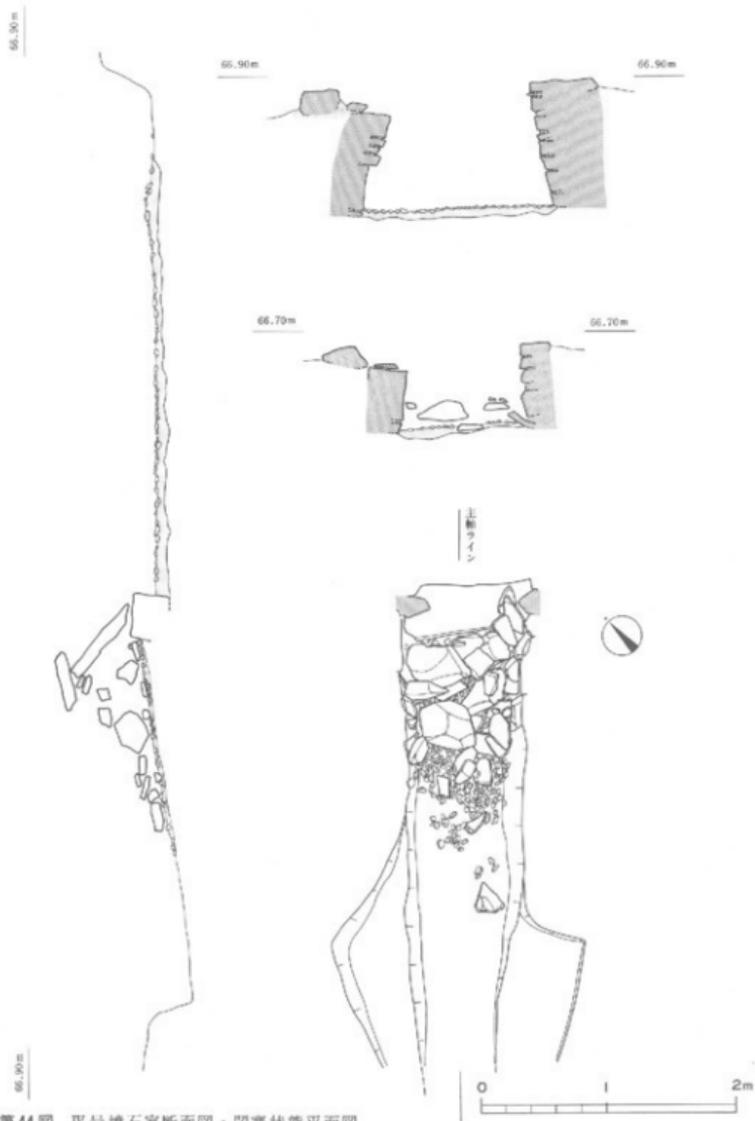
第41図 IV号墳周溝確認トレンチ・セクション図



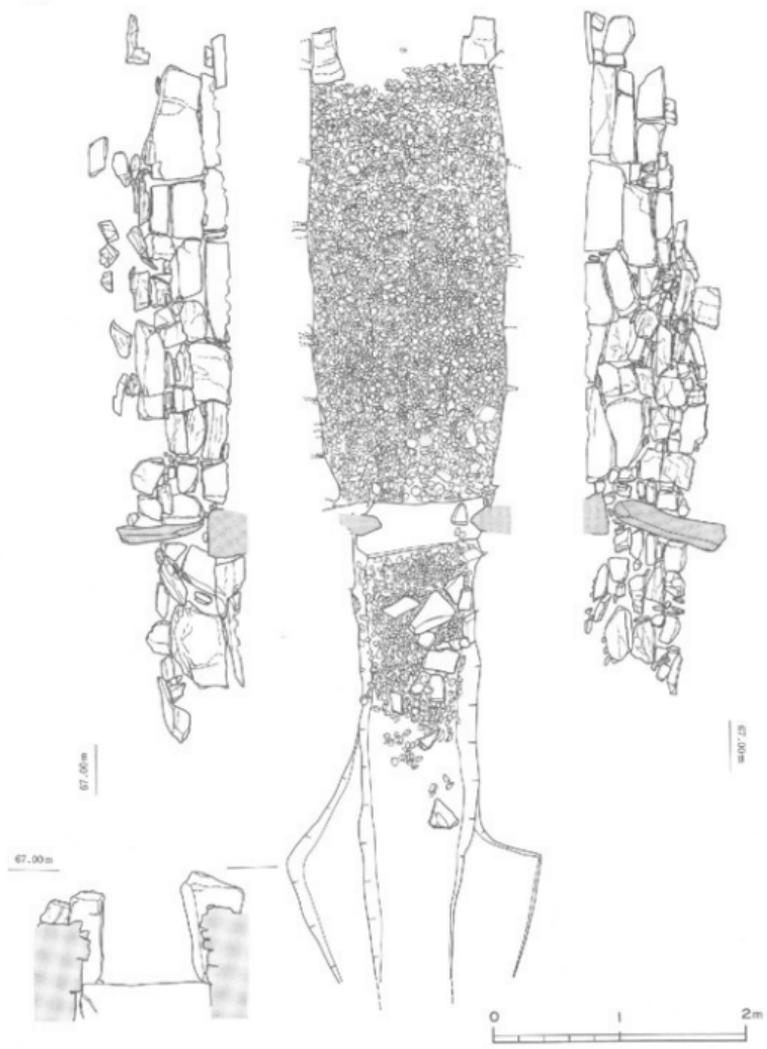
第42图 IV号墳石室平面图(確認設備)



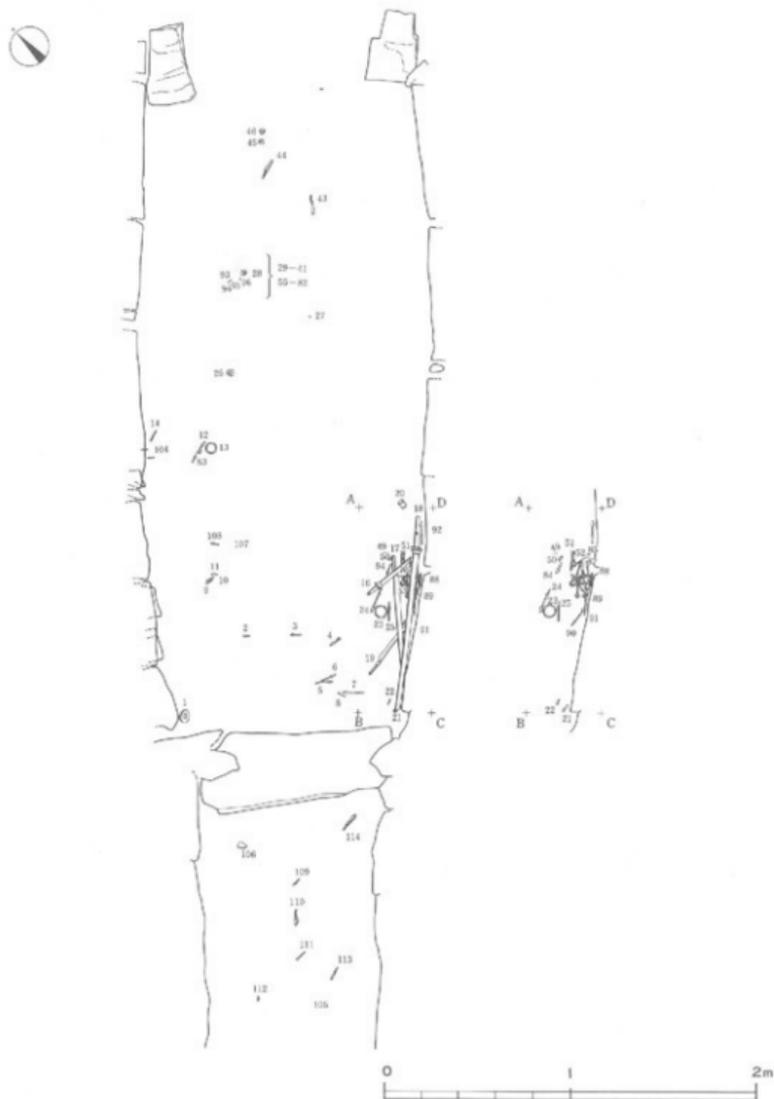
第43図 IV号墳石室平面図(検出段階)



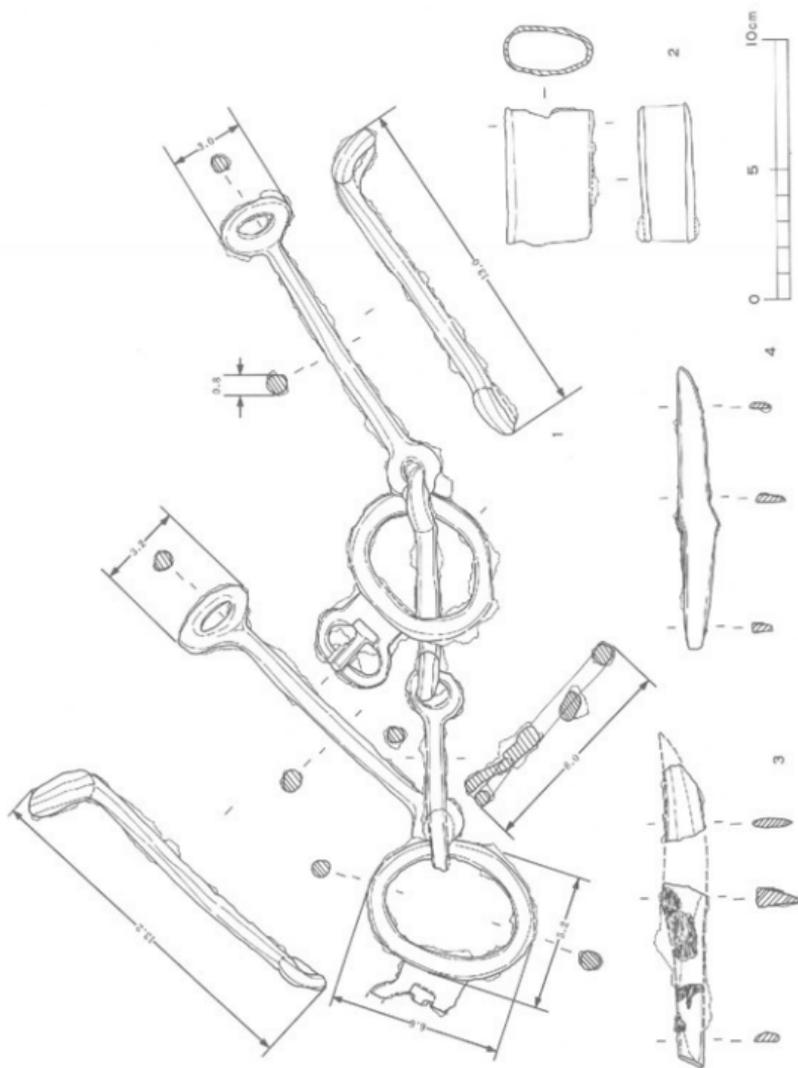
第44図 IV号墳石室断面図・閉塞状態平面図



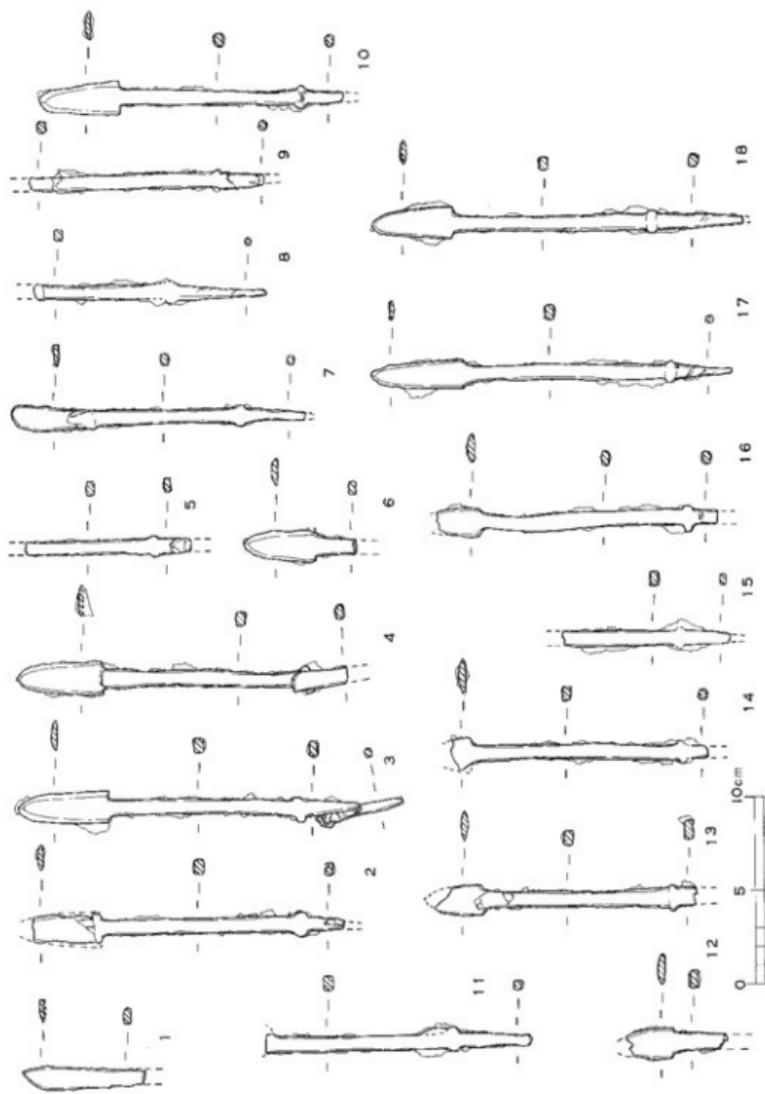
第45图 IV号坟石室展开图



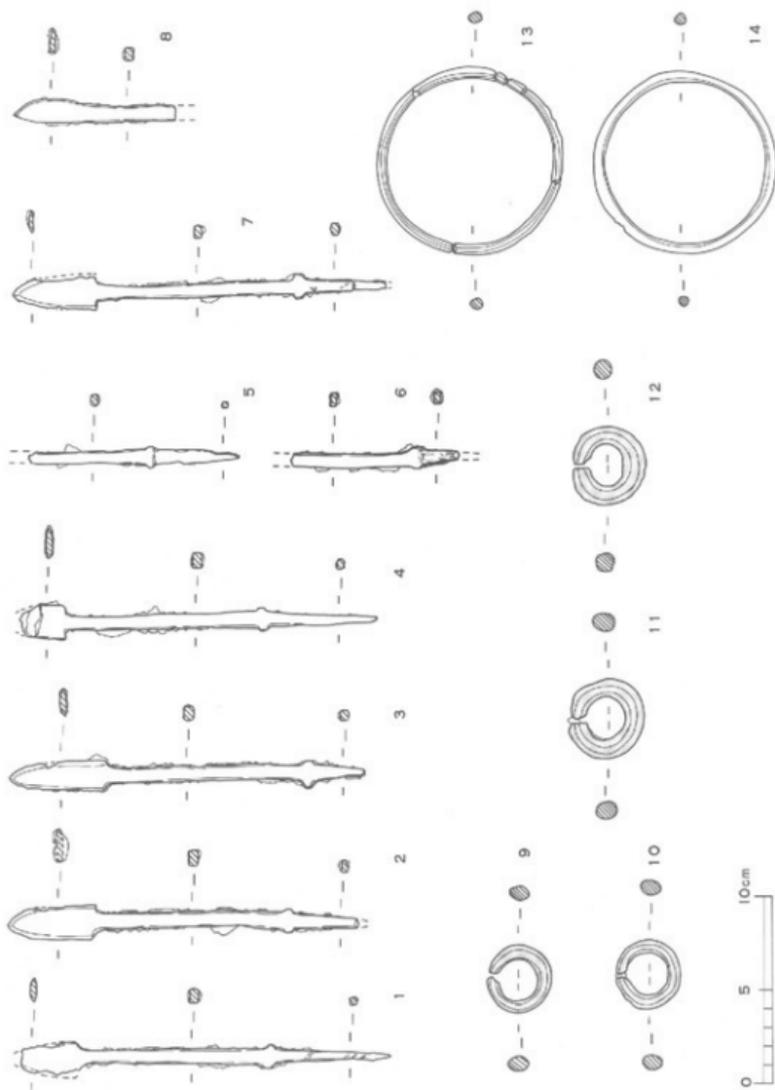
第46图 IV号墳石室内・前底部遺物出土状態



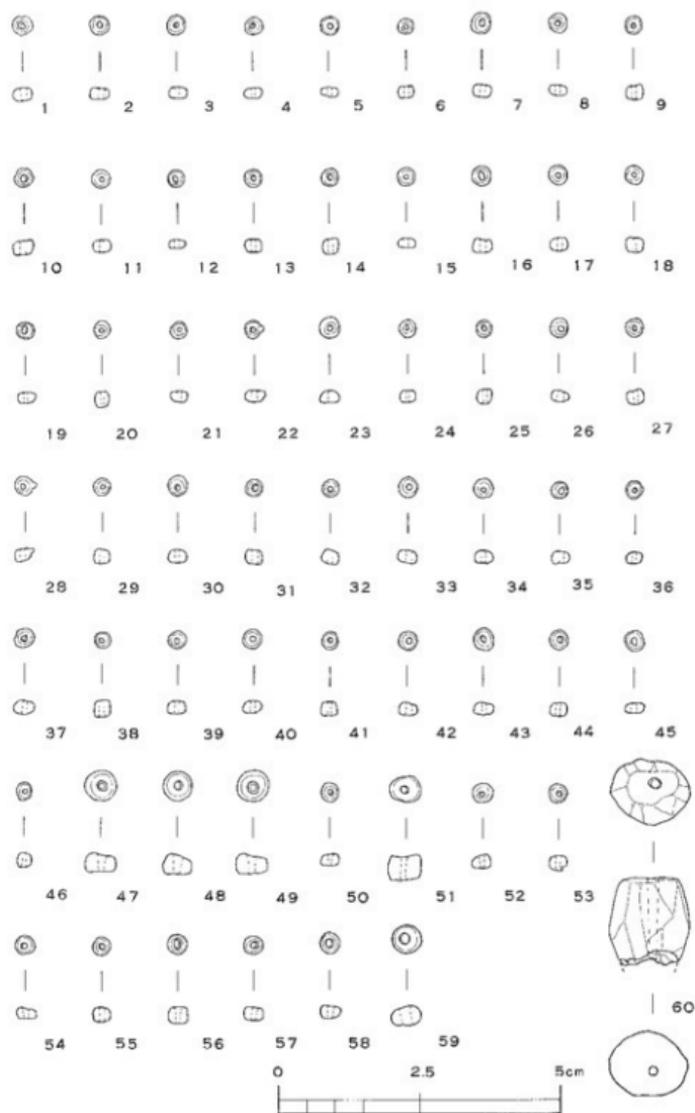
第47图 IV号墳石室内出土遺物(1)



第48圖 IV 弓墳石室内出土遺物(2)



第49图 IV号墳石室内出土遺物(3)



第50圖 IV 弓墳石室内出土遺物(4)

V 号 墳 (第51図～56図, 第74図) (図版18・19・68・69)

V号墳は、1号墳の南東約154mに位置し、南面する丘陵の裾部、標高64.00mに存在する。調査区ではDV-5区(中グリッド)内で、No.22地点の南東隅に在る。

遺跡は、鶏舎跡地から南側テラス部分に係り、鶏舎基礎コンクリート及び客土(盛土)層の除去により確認されたものである。盛土は約0.5～0.7mに及び、確認面で長径5.5×短径2.5mの平面長方形に青灰色粘土と径30～60cmの塊石が出土した。更に、この確認面を精査したところ奥壁及び側壁の配列を確認し天井石は削平されている事が判明した。また、ほぼ南北に長軸をとり、掘り込み部分は北に半円形で東西ともにほぼ平行して南に直線的に閉じる円頭の砲弾型を呈する事を確認した。更に、同地帯は南に低い丘陵の裾部であり、墳丘部分を削平した後に一帯に盛土を行い平坦地に造成したものである事を確認した。地元での聞き取り調査においても、ほぼ当地点に開口する石室が存在していた事を明らかにし、造成工事の際にも大きな平行敷敷を当地点から抜き取っている事を聞きつけた。

周溝は、石室を中心とする周辺の調査を行ったが検出するには至らなかった。しかし、石室の西方約7mの地点に住居跡(S1-4)を検出する事ができた。

石室は、榧石によって明確に玄室と羨道とに分けられ、閉塞の存在は確認されなかった。この事は前述した如く、当墳は古くより開口していたと云う聞き取りを裏付けるものである。玄室から羨道部にかけては、客土層・崩落塊石・青灰色粘土ブロックの混在を認めたと過ぎなかった。

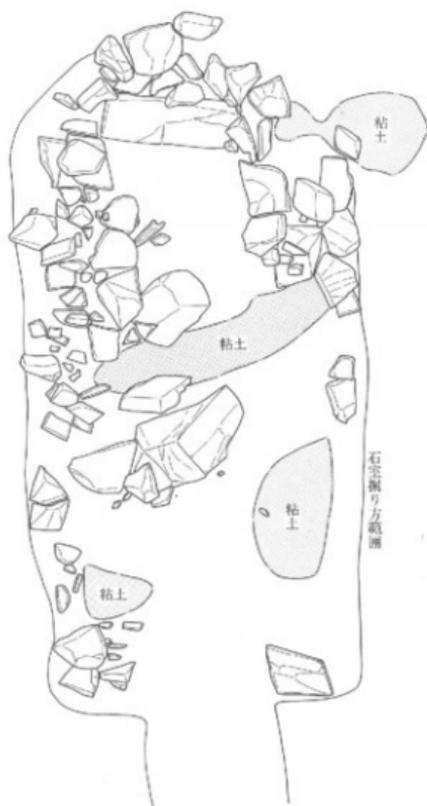
羨道部は、両側壁と構築時の掘り込み部分にその存在を窺い知る事ができた。西壁は玄室から南に直線的に延長したライン上に在り、一辺20～40cmの平石を基礎石として長さ0.63m、高さ約0.25mを遺存し、確認2段の小口積みである。東壁は直線的な玄室ライン上から西へ約40cm偏り、片袖を形成するものとなっている。長さ0.53m、高さ約0.40mを遺存し、確認2段の小口積みである。羨道部は0.86mを測り羨道部(塊石積み部分)の掘り込み範囲は、1.60×0.55m、深さ約0.21mの平面長方形形状である。更に、この掘り込みより一段高くなって幅1.02～1.05m、長さ約1.55m、深さ0.10mの掘り込みが南へ延びる。また、柱石は東西共にその存在は検出されず、設けられなかったものと思われる。榧石は長さ117cm、幅17～24cm、厚さ30～51cmを測り、西に低い塊石を用いている。ただし、床面下約30cmの掘り込みに半ば埋め置く形をとっている。

玄室は、長さ3.77m、最大幅(奥壁寄り)1.50m、最小幅(入口寄り)1.29m、遺存高1.21m、主軸方位N-3°-Wを測る片袖式の横穴式石室である。片袖は、東壁側の榧石の外側(南側)に形成されるもので、幅を約40cm狭めている。西側壁は、床面より約10～15cm掘り込んで基礎石を10列配し、確認5段の塊石を小口積みで持ち送り形式に積んでいる。隙間には割石や礫を詰めてい

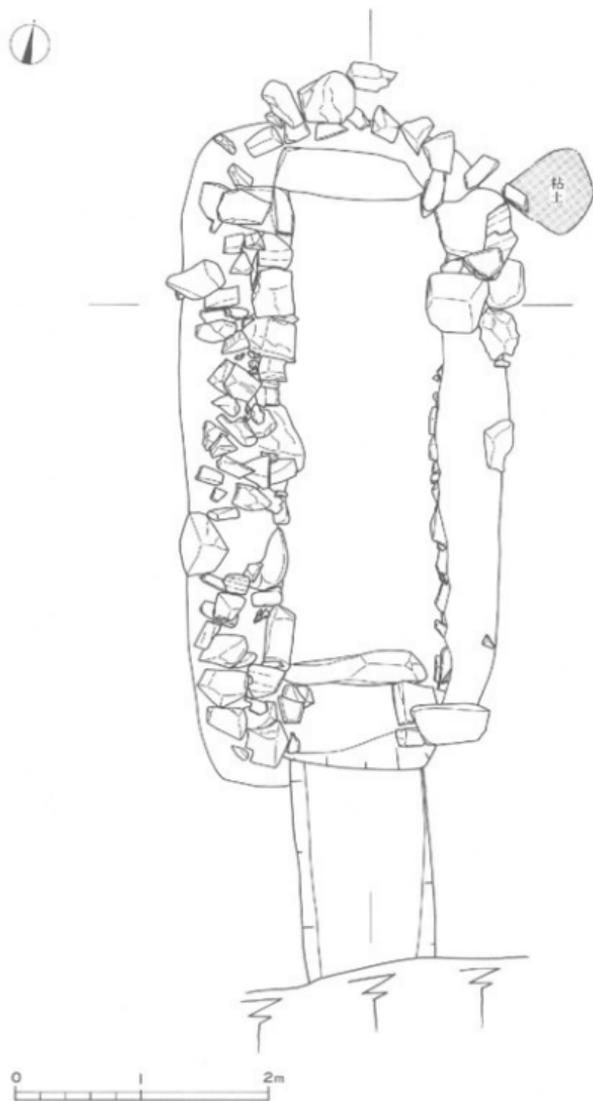
る。東側壁は、床面より約12~17cm掘り込んで基礎石を9列配し、確認6段の塊石を小口積みで緩い持ち送り形式に積んでいる。隙間には割石や礫を詰め、側壁は奥壁寄りに比較的良好に遺存している。両壁共に、裏込めには青灰色粘土・褐色土・黒色土などの混入土を版築状に固めていた。奥壁は、床面より約5~6cm埋め込んで長さ1.16~1.48m、幅0.37m、高さ1.19mを測る一石から成り、部分的に厚さ2~4cmの平石を基底面に敷いている事を確認した。また、奥壁はやや内傾している。床面は、奥壁寄りにローム層・鹿沼軽石層を露呈させ、南半城の低位に褐色土を盛ってほぼ平坦化した上で床面の約2/3を礫敷としている。礫は径2~3cmの砂利が主体的であった。

玄室の構築は、ローム面まで掘り下げた後、奥壁・側壁・入口部などを構成する基底面に更に掘り込んで基礎石を据え置き、裏込めしながら壁を積み上げている。中でも奥壁には、混入土による版築と礫を混じて固めている。両側壁は共に緩い持ち送り形式をとり、天井石を架した後、やや南に低くなる床面に盛土し礫を敷いている。同墳は、側壁中央から入口部にかけてはわずかに1~3段の壁の積み上げが遺存するだけである。しかし、この壁の遺存も造成工事による削平箇所として認められるものであり、墳丘や天井石と共に大きく変容を受けたものであろう。また周溝の存在は無かった事により墳丘径を明確にする事は断定できないが、石室規模などから推定すれば、Ⅲ号墳やⅣ号墳と同規模の直径20m級の円墳を想定する事ができるものである。

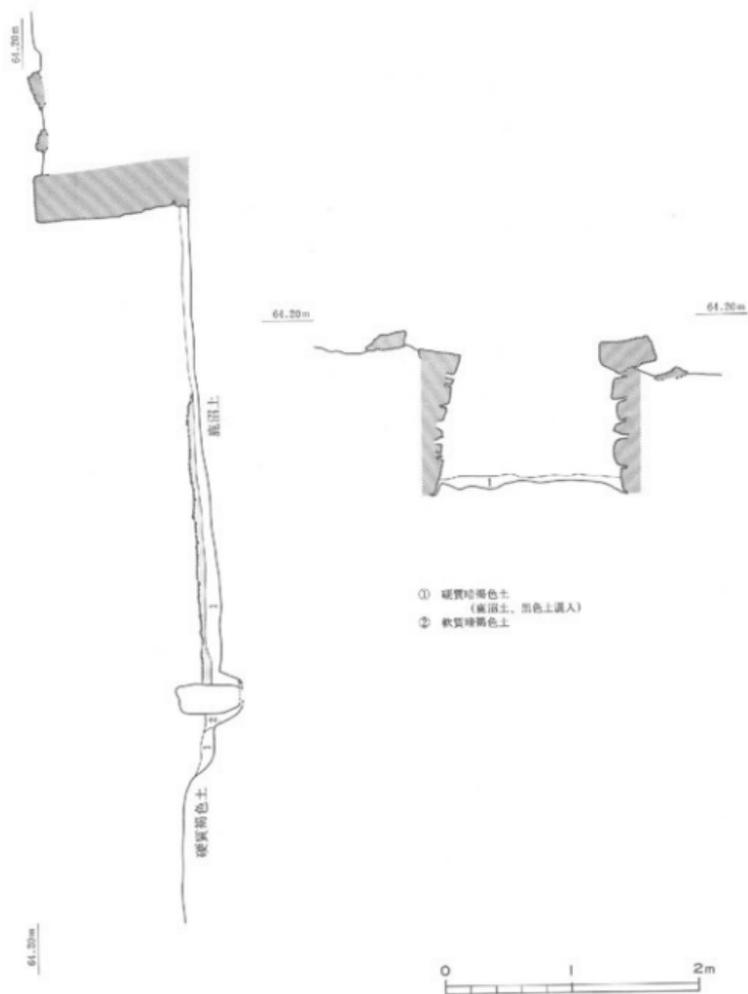
出土遺物は総て玄室内から検出しており、直刀・鉄鏃を出土した。遺物は、崩落塊石や崩落土中より礫床面直上において検出したものである。直刀(大刀)1振は、西壁際ほぼ中央部で鉋(欠損している)を北にし、刃部を西(壁)にして検出した。鉄鏃は直刀周辺に散在し、計5点を出土している。これら5点はほぼ完存するもので、無茎1点、有茎4点とである。同墳はかつて開口していたとの事で、他にも副葬されていた事を想定する事ができる。



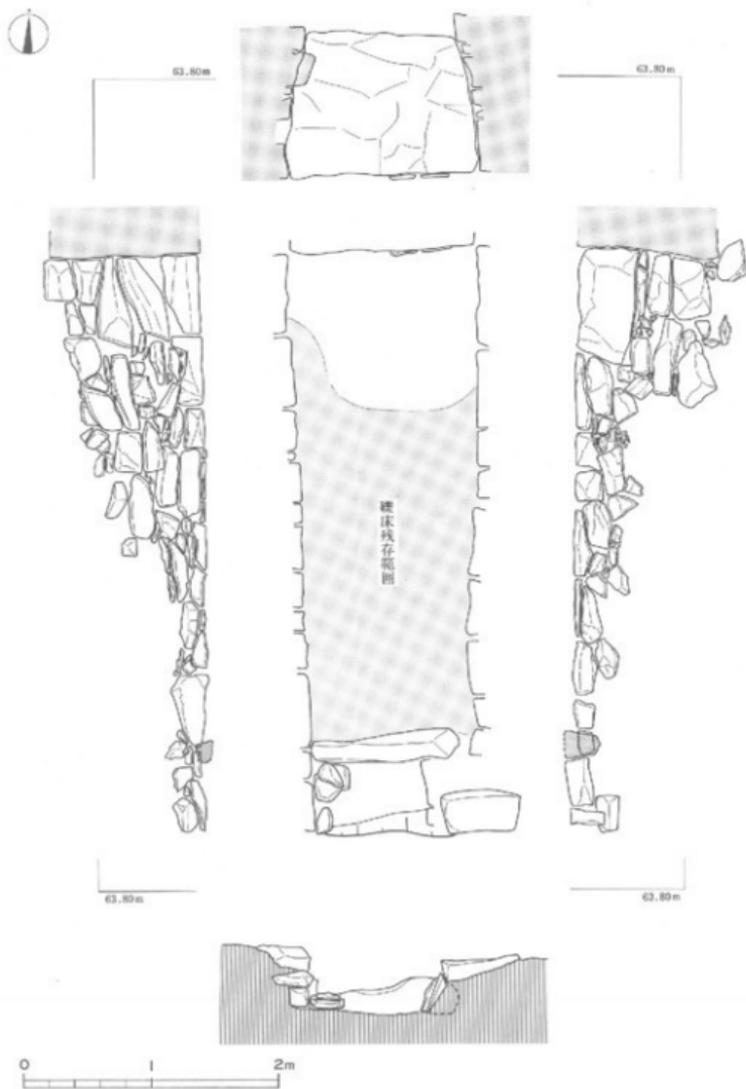
第51圖 V号墳石室平面図



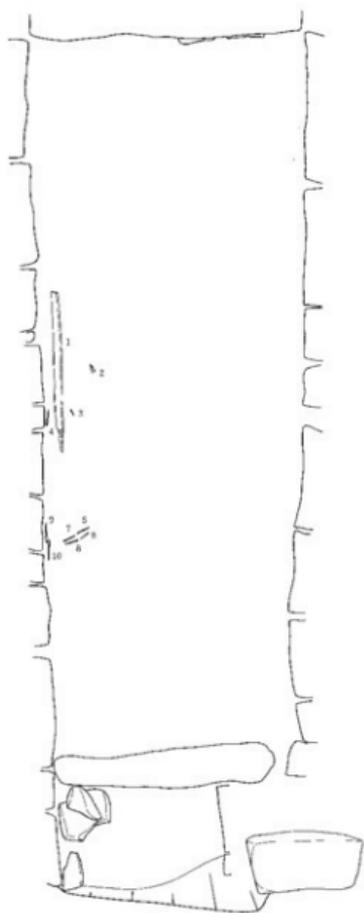
第52圖 V号墳石室平面図



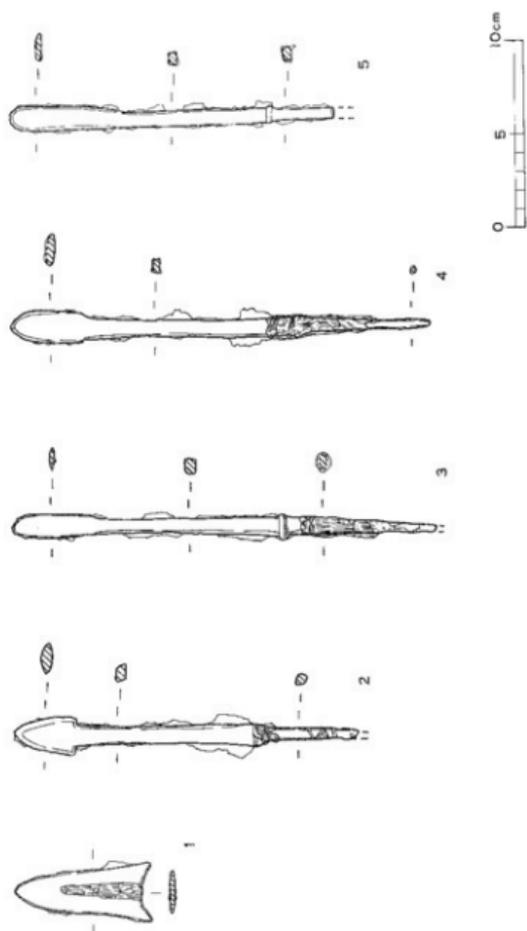
第53图 V号填石室断面图



第54圖 V号墳石室展開圖



第55图 V号填石室内遗物出土状态



第56圖 V号墳石室内出土遺物

VI 号 墳 (第57・58図) (図版20・21)

VI号墳は、I号墳の南約100m、V号墳の西約90mに位置し、南面する丘陵の裾部で標高63.00mに存在する。調査区はDVI-3区(中グリッド)内の南辺である。遺跡は、No.22地点で最も低位に位置するが、南方にはNo.23地点と隣接する。

同墳は、鶏舎跡地の東側に存し鶏舎基礎コンクリートの除去後に確認したものである。同地一帯は、造成時にローム面までの削平が行われ、既に墳丘及び天井石を消失していた。確認時には、 3.5×2.5 mの平面長方形に板状石片の散乱と青灰色粘土の集中範囲を認めた。更に、精査を行い奥壁と側壁の一部を確認した後、崩落石塊と崩落土の除去を開始した。と同時に、石室を中心に東西南北の各方向にトレンチを設定し、周溝確認作業を行った。

周溝確認調査の結果、各方向共に周溝を検出するには至らず、周溝を伴わない古墳であったと推定される。また、周溝の存在があったとしても、浅く部分的なものであった事を推定したい。地形的には、やや西に低く南から南西にかけては丘陵斜面に面している。石室周辺では、既にローム面の露呈する事により、墳丘は低平なものであった事が想定できる。

石室は、榎石によって明確に玄室と羨道とに分けられる。入口の閉塞は確認できず、入口部は崩落土と崩落石によって埋もれていた。羨道部は、両側壁共に掘り込みによるもので、西側は長さ2.10m、遺存高約30~35cmを測り、東側は長さ1.74m、遺存高約20~30cmを測る。羨道幅は約1.00~1.24mを計測し、ほぼ帯状に南に延びる。榎石は長さ79cm、幅32~36cm、厚さ34cm(玄室側は床面とほぼ同一レベルで据え置き、羨道側は石室掘り方により約15cm程埋もれる)を測る塊石から成っている。柱石が存した可能性は無く、積み上げられた側壁の上に天井石を架したものである。なお、羨道部の両側上端には厚さ5~10cm程の青灰色粘土を貼っていた。

玄室は、長さ2.83m、最大幅(玄室中央)1.15m、最小幅(奥壁寄り)0.77m、遺存高0.61m、主軸方位 $N-6^{\circ}-E$ を測り、無袖式の胴張り有する横穴式石室である。西側壁は、床面の基底面とはほぼ同一レベルに基底石を6列配し、小口積みで確認3段をほぼ垂直に積み上げている。しかし、中央やや南寄りの基底面(約55cm)は青灰色粘土と褐色土と共に割石を混じて遺存高約60cmまで積み上げを行なっている。また、隙間には割石を詰めている。東側壁は、その北半部を攪乱されており大半の塊石を抜かれてはいるものの、床面の基底面とはほぼ同一レベルに基底石を確認4列配し、小口積みで確認5段をほぼ垂直に積み上げている。両側壁共に、裏込めには青灰色粘土を使用し壁を補強している。裏込め粘土の厚さは、西側で約20~30cm、東壁で約25~40cmを計測する。奥壁は、長さ0.95m、幅0.12~0.15m、高さ0.63mで、更に床面下を約11cm程掘り下げ、基底石を据え置いている。奥壁自体は薄手の一枚石で垂直に立ち上がり、裏込めには約20~30cmの厚さを測る青灰色粘土を詰めている。床面は、約3~8cm程のローム土を敷き詰めて平坦化し

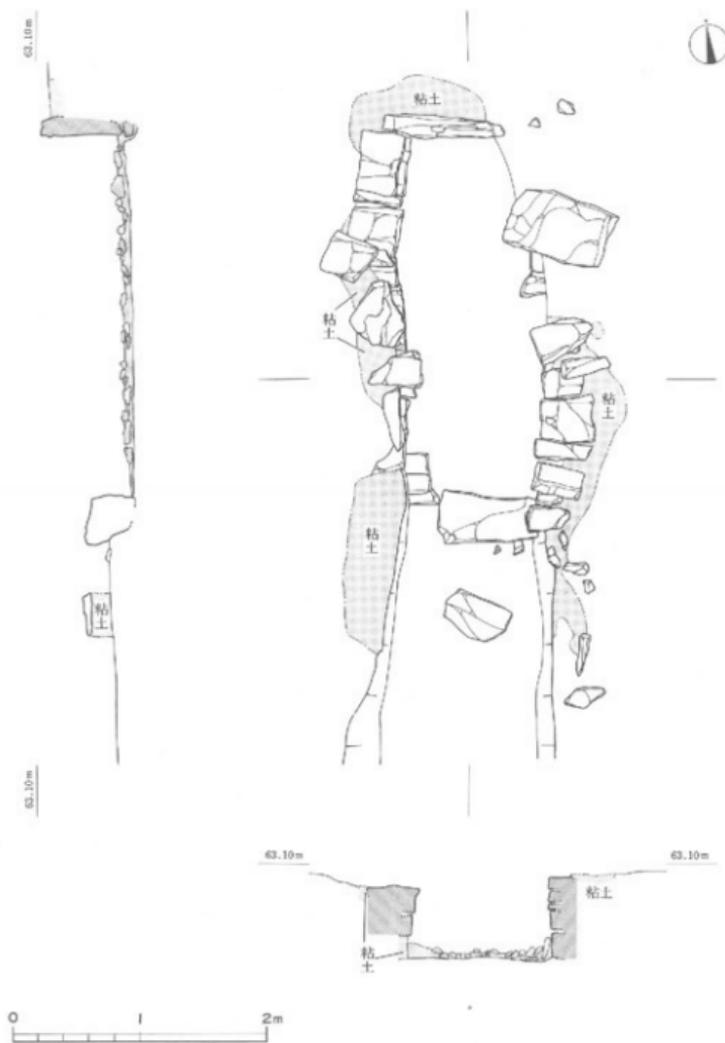
た上で、径10～15cmの円礫をほぼ全面に敷き詰めている。

玄室の構築は、石室規模の掘り込みをローム面まで行ない、側壁・入口部に基底石を配列している。奥壁には、基底石を埋め込んでその上に一枚石を据え置いている。側壁の積み上げは、小口面を合わせてほぼ垂直にするが、積み上げた石材は一定せず大小を混じている。また、西壁の胴張りに対して東壁はそれ程明確ではなく、特に北半部の攪乱によっている事で断定はできない。床面の礫敷は、他墳に比して比較的大きさを揃えた円礫を使用しているし、壁材として利用している粘板岩質の石材なども他墳には全く見出す事はできない。石室自体にしても他墳より小型化している現象があり、時間的推移を窺う事ができる石室である。

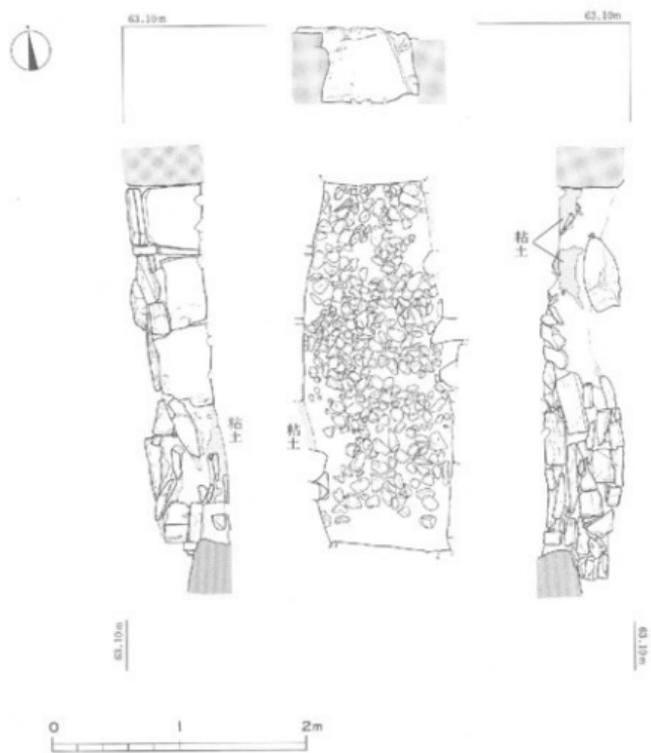
出土遺物は、全く検出する事ができなかった。それは、東壁の北半部における攪乱が盗掘坑であった可能性をもつものとしても、調査時には明確な確証を得る事ができなかった。また、入口部が開口していた可能性もある。どちらにしても、先づ副葬品が存在していないと云う事実は、当初から基ついていたものか或いは、盗掘を受けて何一つ残す事なく抜き盗られてしまったものなのか疑問を残す課題である。勿論、人骨片も検出できなかった。



第57图 VI号填石室平面图(碎器段附)



第58图 VI号填石室平面图(檢山段略)·断面图



第59图 VI号墳石室展開图

VII 号 石 棺 (第 60 図) (図版 22-1)

VII号石棺は、Ⅲ号墳の南東約45m、Ⅷ号墳の東約4mに位置し、調査区ではDIV-4区(中グリッド)内に存在する。南面する丘陵斜面で、標高68.00m上に確認された。

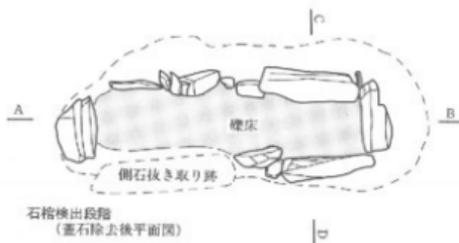
石棺は、鶏舎跡地の南側テラス部分でやや西寄りの地点で、約0.6～0.7mの客土(盛土)層の下から検出した。確認面では、径20～40cm、厚さ10～15cmの蓋石と思われる小型の板石を8枚と少量の青灰色粘土を検出した。更にこの板石を除去したところ、西側の壁石を検出するに至り同一レベルで石棺の精査を行った。その結果、石棺の掘り方を確認し他の側壁の位置もほぼ検出する事ができた。石棺の掘り方は、長径2.92×短径1.15mを測る平面長楕円形状を呈し、黒色土を掘り込んでいた。石棺はその掘り方内に長さ2.05m、幅0.60m、遺存高は東壁0.55m、西壁は0.40m、南壁は0.30m、北壁は0.50mを測り、主軸方位をN-42°-Eとしている箱式石棺である。北壁は長さ56cm、幅15～23cm、高さ71cmを測る一枚石で、床面下に約20cm埋め込んでいる。南壁は長さ49cm、幅23～32cm、高さ45cmを測る一枚石で、床面下に約19cm埋め込んでいる。西壁は、その北側で長さ77cm、幅20～22cm、高さ50cmを測る一枚石で、床面下を約24cm掘り下げ高さ15cmの基底石を埋め込んで、東壁との高さを調整している。他に長さ20～40cm、高さ30～40cmの塊石(4枚)を用いている。東壁は、その南側は抜き取られているが、北側で長さ74cm、幅11～19cm、高さ69cmを測る一枚石で、床面下に約15cm埋め込んでいる。他に長さ16～38cm、高さ20～50cmの塊石(2枚)を用いている。石棺は南方にやや低い形をとっているが、地形的な影響(斜面上に構築された)と思われる。北壁と東壁はほぼ直立するが、南壁は内傾している。床面は、側壁を組んだ後褐色土を用いてほぼ平坦化させ、径2cm内外の小石を用いて全面をバラス敷きとしている。

石棺の構築は、地表面からの掘り下げを行ないほぼ石棺規模の土坑とし、側壁用の掘り込みを行なって粘土・ローム土・黒色土の混入土による裏込めを施しながら長方形に四圍を組み立てている。北・南壁は一石により、東・西壁は五～六石を用いて組み立て、更に床面を平坦化した後に全面にバラス敷きとして仕上げている。蓋石は西壁の一部を被って検出したが、更に大型の平石が使用されていたものと想定される。

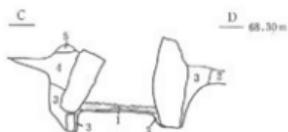
出土遺物は、石棺内覆土中より小鉄片1点を検出したが、その形状・用途は不明である。本遺構は、Ⅷ号墳と近接する事により単葬されたものとは思われず、位置・標高的にはⅧ号墳の東側斜面に相当するものである。石棺を時期的には断定しかねないが、Ⅷ号墳(石室)に先行するものではなく、ほぼ同時期か或いはやや後出するものと思われる。



石棺確認段階
(蓋石平面図)



石棺検出段階
(蓋石除去後平面図)



- ① 褐色土 (粘土多量混入)
- ② 鉄質褐色土
- ③ 粘土 (茶褐色土交り)
- ④ 紅色土 (パミス多量、ローム小ブロック混入)
- ⑤ (灰青灰色) 粘土



第60図 VII号石棺平面図・断面図

Ⅷ 号 墳 (第61岡~66岡) (図版22-2, 図版23, 図版70・71)

Ⅷ号墳は、Ⅲ号墳の南東約38m, Ⅷ号石棺の西約4mに位置し、南面する丘陵斜面の標高68.00mに存在する。調査区ではDIV-4区(中グリッド)内の西寄りである。

遺跡は、鶏舎跡地の南側テラス部で、地表下約0.6~0.7mの客土(盛土)層下に確認されたものである。確認遺構は、多量の青灰色粘土の散布と塊石の散在により検出したもので、調査はこれらの崩落土及び崩落塊石を除去する事により始めた。その結果、石室の遺存は極めて悪く、天井石・側壁・奥壁・羨道部などほとんど壊滅の状態であった。また、同地域の造成工事による地形削平の為、周溝の検出にも至らず、ただ客土(盛土)層中より円筒埴輪片を検出するに及んだだけであった。これらの円筒埴輪は、更に下方の地域(SD-2の上層など)よりも出土している。

石室は、羨道部と奥壁を欠失し、西壁と東壁の基礎石それに北半部の床面をわずかに遺存していた。西壁と東壁の南半部は崩壊して旧状を窺い得ないので、調査は残る北半部の基底面と残存礎床の精査に主眼を置いた。

西側壁は、遺存長約2.5mを測り、礎床の南側に基底石列を3列(長さ約0.9m)、確認4段の側壁(遺存高0.72m)と基礎石を埋め込んだ深さ15~22cmの掘り込みを確認した。基礎石は、床面下12~18cm程埋め込まれており、一辺30cm以上・厚さ25~30cmの方形塊石を使用している。また、裏込めには多量の青灰色粘土を施している。遺存側壁は、小口積みで持ち送り形式をとっている。東側壁は、遺存長約2.5mを測り、基底石列を3列(長さ約1.6m)、確認4段の側壁(遺存高0.79m)と基礎石を埋め込んだ深さ20~25cmの掘り込みを確認した。基礎石は、床面下20~25cm程埋め込まれ、一辺40~60cm・厚さ30~38cmの方形塊石を使用している。また、裏込めには青灰色粘土や褐色土を版築状に固めている。遺存側壁は、小口積みで持ち送り形式をとっている。

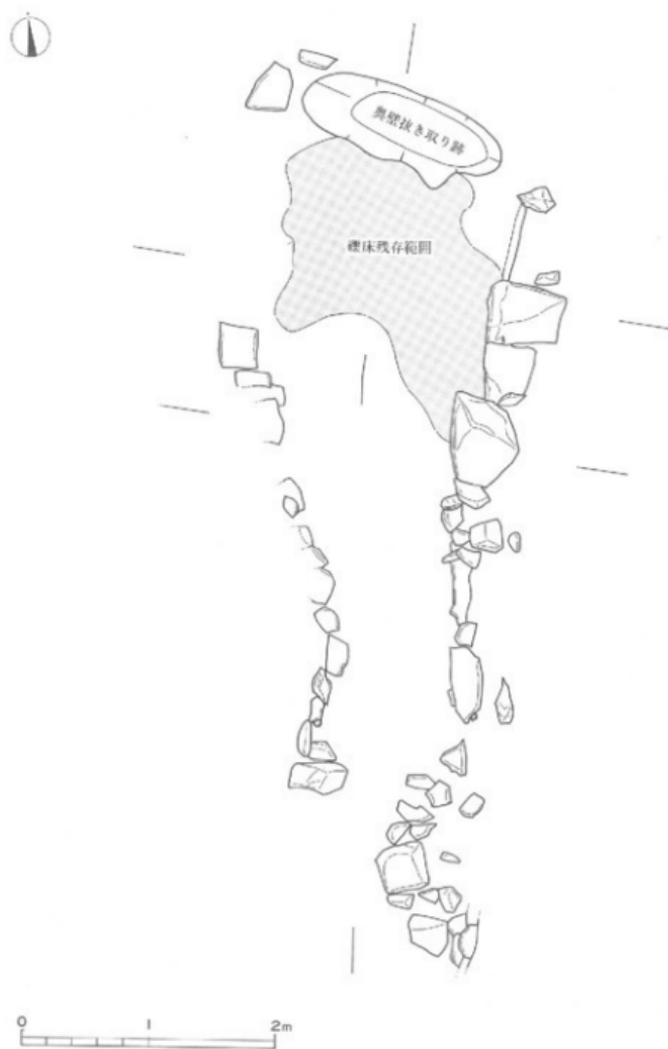
玄室幅は約1.8mを計測し、主軸方位はN-13°-Eをとる。残存礎床は長径1.7×短径1.5mの平面不整形に遺存する。床面は、掘り込んだ地山面(ローム層)に直に5cm内外の礫を敷き詰めている。遺物は総てこの礎床上より出土したものである。

奥壁は抜き取られてはいるものの、長径1.64×短径0.60mを測る平面長槽円形形状の掘り込み跡を検出している。この形状及び玄室幅から推測すれば、長さ約1.8m、幅約0.6m、高さ約1.3m以上の一枚石を推定する事ができる。更に、奥壁際の両側壁の高さも1.3m以上を推定でき、玄室長は約3.5~4.0mを有するものであったろう。

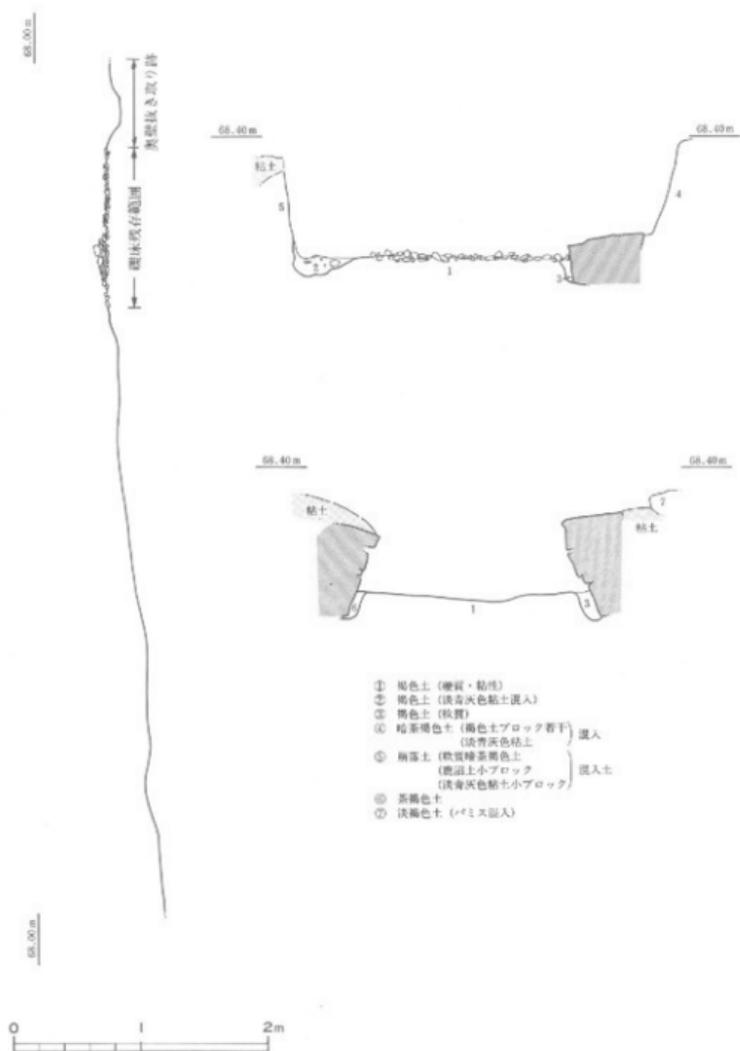
出土遺物は、鉄鏃・刀子・飾金具・丸玉(土製)・勾玉(水晶製)・小玉(ガラス製)・管玉(碧玉製)・切子玉(水晶製)・璽玉(琥珀製)・耳環など総数77点を検出した。鉄鏃・飾金具・小玉・管玉・切子玉・璽玉など多くの副葬品は、東壁際より集中して出土したもので、丸玉・小玉・刀子は玄室中

中央壁寄りにまとまっていた。耳環や勾玉はやや東壁に寄っていたが、他とは距離を離して出土している。鉄鍔は、無茎・有茎が共に出土しているが、他墳に比べて出土点数は少ないがバラエティーに富んでいる。飾金具の多くは、鉄地金銅張りで長方形もしくは円頭長方形を呈し鋸留となっている。馬具(辻金具)の破損品と考えられる。耳環は銅地金銅張り製でやや小型の製品である。水晶製勾玉は半壊するが、他墳には出土していない。琥珀製歯玉は長さ3~4 cm、幅2~3 cmを測る大型の製品である。碧玉製管玉の横穴式石室からの出土は当墳だけであり、IX号竪穴式石室出土の管玉に比べると非常に小型の製品である。

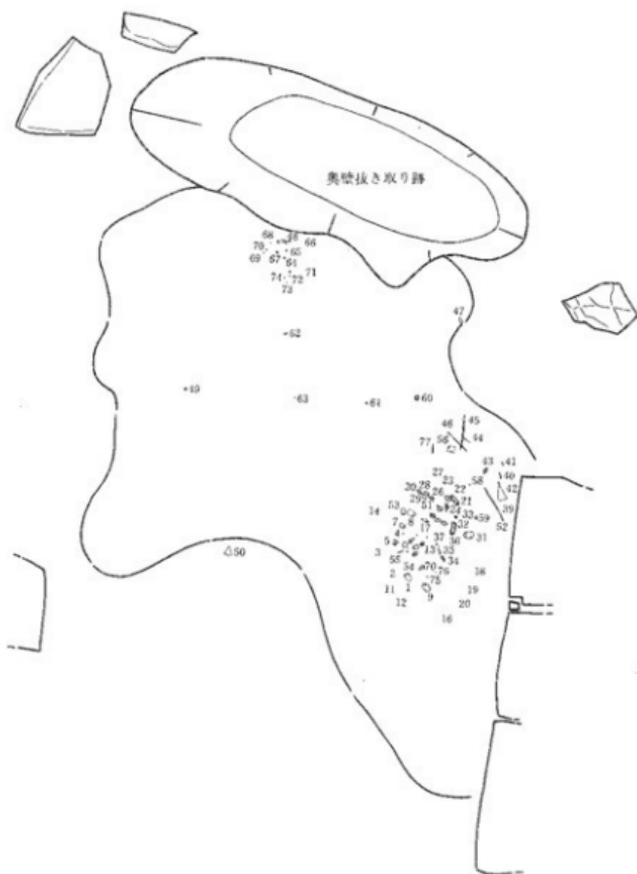
この様に当墳は、特に鉄鍔や装身具関係の種類が多いことで他墳にはない特殊性をもつものと思われる。また、推定ではあるが石室規模も中型墳(径30~40m級)以上を兼ね備えている点は見逃す事はない。



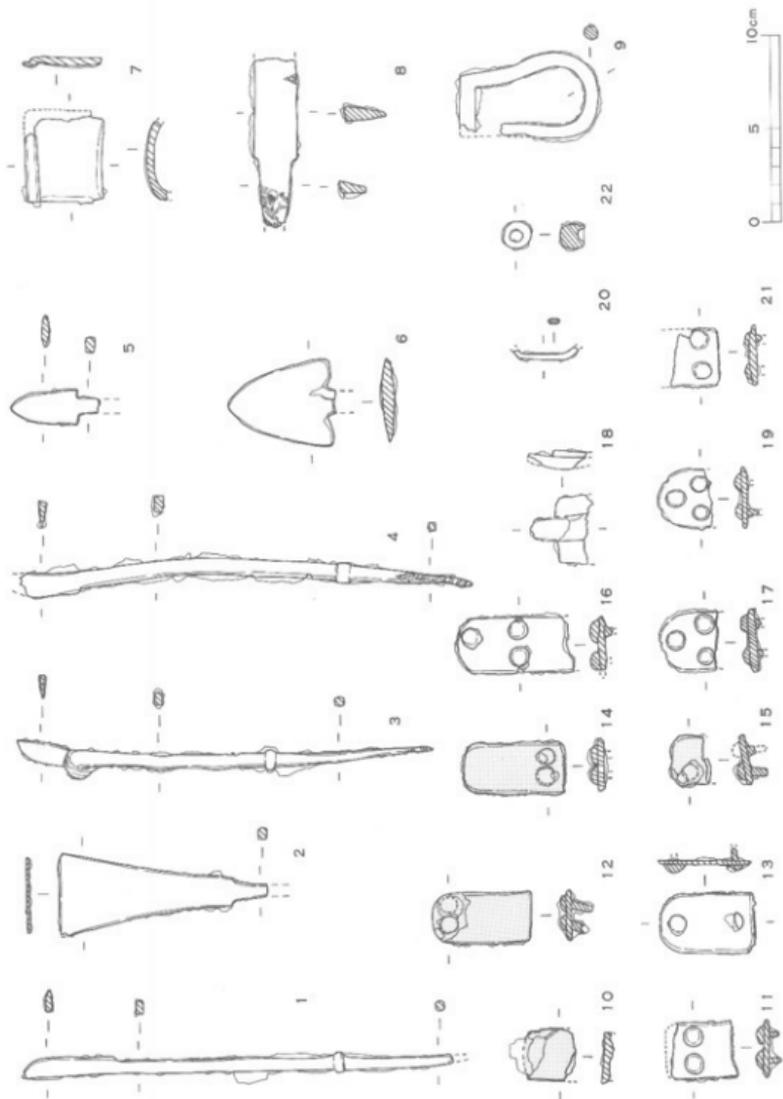
第61図 VII号墳石室平面図(検出段階)



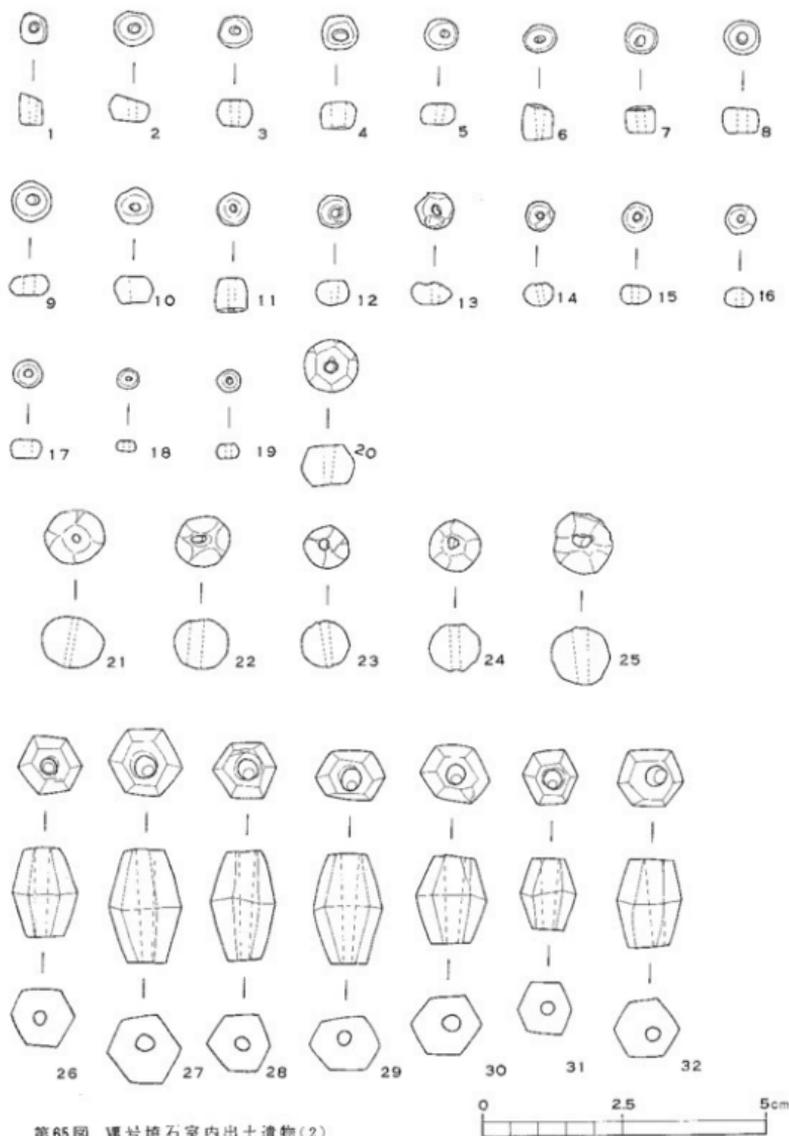
第62図 Ⅹ号墳石室断面図



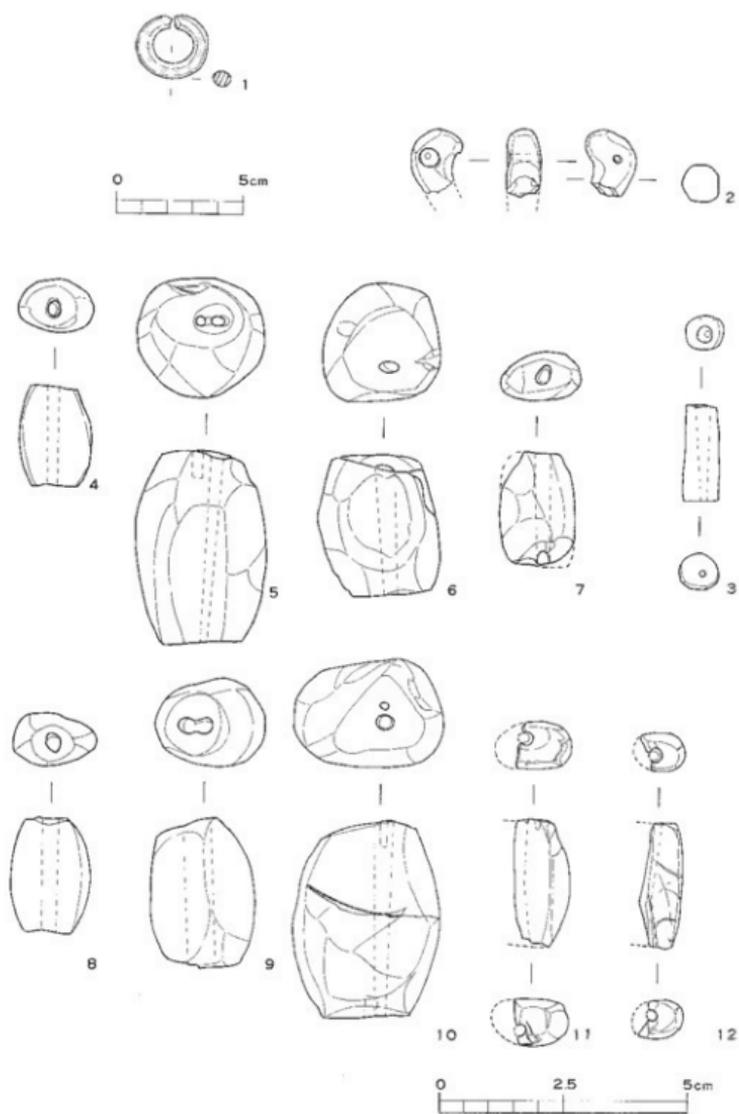
第63図 Ⅱ号墳石室内遺物出土状態



第64图 Ⅱ号填石室内出土遗物(1)



第65圖 Ⅱ号墳石室内出土遺物(2)



第66图 Ⅱ号墳石室内出土遺物(3)

IX 号 墳 (第67図～71図, 第74図) (図版24・25, 図版72・73)

IX号墳は、I号墳の北東約80mの地点で南面する丘陵の標高78.00mに存在する。調査区ではCIV-7区(中グリッド)内で遺跡の東部は北に進入する小支谷を形成している。このIX号墳の立地の延長上には、No.20・21地点が存在する。

同墳の発見は、当初このNo.22地点の排土場所としていた北部地域の造成工事に着手した事に依っている。それは、No.22地点の東部の小支谷において盛土工事を開始した為に、この北部地域の土砂を盛土に充てる事から当地域の削土が行われたのである。工事は、排土の移動と共に鶏舎跡地の削平が行われ、当地の東端部に及んだ際に平石(IX号墳の北側天井石と判明した)を削刺した事が発見の端緒である。発見の報は、ただちに工事主体者より現地調査会にもたらされ、急遽現地に赴いた。遺跡は、石室部分を小高く残し、石室周囲は約1～2mの削土が行われ、鹿沼軽石層・ローム層・礫層の一部を露出させていた。しかし、石室を観察する限りにおいては崩落及び盗掘を受けた痕跡はなく、未開封墳であった事を窺わせるものであった。

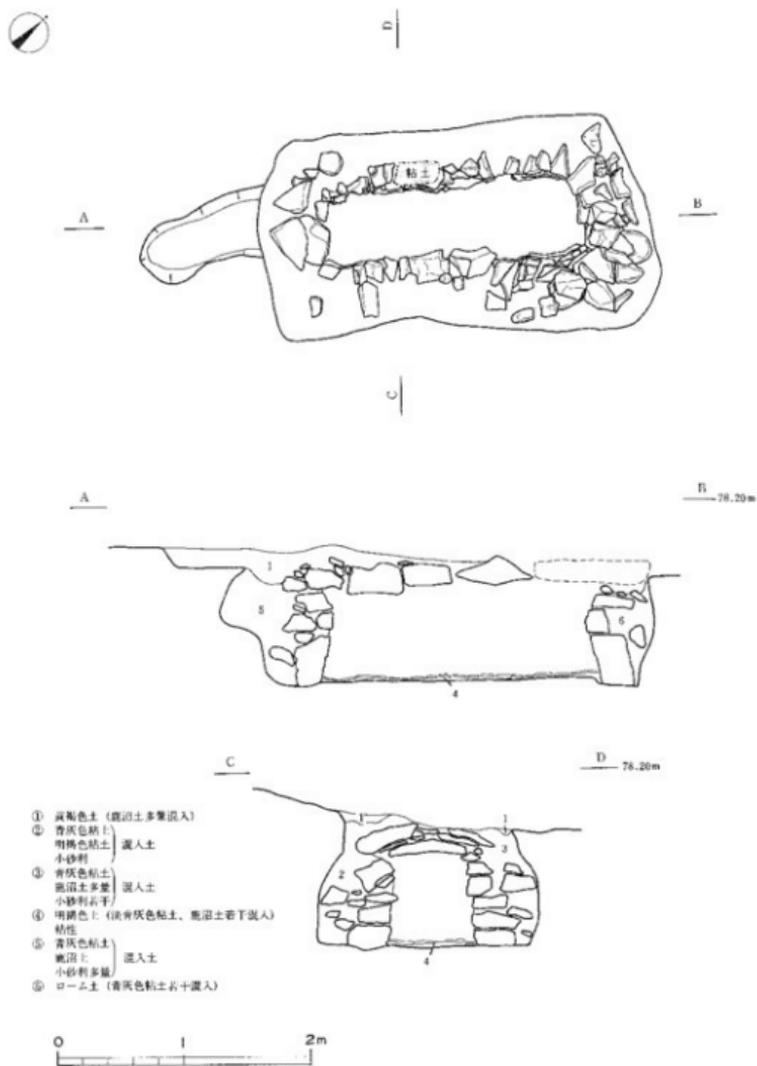
調査は、石室の掘り方範囲の検出から開始した。その結果、長軸を北東方向にとり約3.0×約1.5mを測る平面不整形長方形の落ち込みを確認した。また、同落ち込みの南西端には、長さ約1.0m、幅約0.5mを測る帯状の落ち込みが付設していた。更に、天井部を検出する為に落ち込みの排土を行い、遺存する天井石5枚と隙間を塞ぐ多数の礫を確認した。天井石は、最大130×70cm、厚さ約23cm、最小70×28cm、厚さ約14cmを測る扁平な一枚石を使用し、隙間を塞ぐ礫は51×21～10cm内外の礫に依っていた。

石室は、長さ2.19m、最大幅(石室中央)0.70m、最小幅(石室南寄り)0.52m、高さ約0.70m、主軸方位N-32°-Eを測る竪穴式石室である。四壁は、総べて大型～中型の礫を積み上げている。東壁は、床面とほぼ同一レベルに大型の基底石(長さ20～50cm)を6列配し、小口積みで確認5～6段をほぼ垂直に積んでいる。隙間には、礫石や青灰色粘土で日貼りを施している。裏込めは、一部に控え積みを施すものの褐色土・粘土・鹿沼土を混じた土壌をつき固めている。西壁は、一部に基底石の乗りを良くする為に床面下を浅く掘り固めてはいるものの、ほぼ床面と同一レベルに大型の基底石(長さ20～50cm)を6列配し、小口積みで確認5～6段をほぼ垂直に積んでいる。隙間には、礫石や青灰色粘土で日貼りを施している。裏込めは、一部に控え積みや混入土をつき固めるなどで東壁と同一の手法に依っている。南壁は、床面下を浅く3～4cm掘り固めて石室幅の基底石(長さ約50cm)を据え置き、北壁は、床面下6～7cm程浅く掘り固めて石室幅の基底石(長さ約90cm)を据え置いている。両壁共に小口積みで4段をほぼ垂直に積み上げ、裏込めは、控え積みと混入土をつき固めている。床面は、一辺10～20cm・厚さ2～3cmの平石を全面に敷き詰めている。副葬品は総てこの床面上に検出したものである。

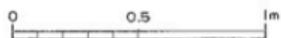
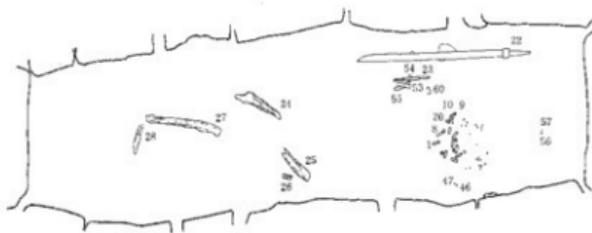
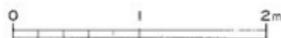
石室の構築は、石室大の掘り方をルーム面まで深く掘り込み、四壁を構成する基底石を東西6列・南北各一列(石室幅)で長方形に配置する。更に、小口面を合わせて四壁を各々積み上げ、隙間に礫石や粘土で目貼りを施す。裏込めには、混入土や一部に控え積みを施して壁の崩壊を防ぐ為の補強を行う。四壁の高さを合わせ、床面にほぼ同一規模の平石を全面に敷き詰める。遺骸と副葬品を埋納した後、長さ0.9～1.4m×幅0.5～0.6mの一枚石を数枚天井に架け、更に天井石の隙間を埋める為に大小の礫をもって塞ぎ、一部に粘土による目貼りを施すなどして石室全体を密封している。同墳は、既に石室を除く他は総て削土されてしまっていた為に、墳丘規模及び周溝の存在を知る手掛りは、皆無であった。しかし、他墳との関わりなどを考慮すれば、中型の円墳を想定する事も可能である。

出土遺物は、直刀・刀子・鉄鏃・管玉(碧玉製)・切子玉(水晶製・瑪瑙製)・小玉(ガラス製)など約70点を検出した。これらの副葬品は、総て石室の北半部より検出したものである。直刀一振は、西壁際に鏃を兩位にしほぼ中央部分には鞘の一部を遺存していた。把・鏃・貴金具・足金具・鞘尻などの外装金具類は検出されていない事により、質素で実用的な大刀であった事が想定できる。また、大刀と併行して刀子・鉄鏃を並置して検出した。装身具(管玉・切子玉・小玉)類は、そのほとんどが石室北半部の中央やや東寄りに集中して検出された。管玉11点と切子玉6点は、その出土状況より一連していたものと思われる。更に、小玉46点は35×30cmの範囲に亘って検出した。石室の南半部には、人骨の出土を認めた。鑑定の結果は、大腿骨・脛骨部分である事を判明したが、性別・年齢などは不明である。

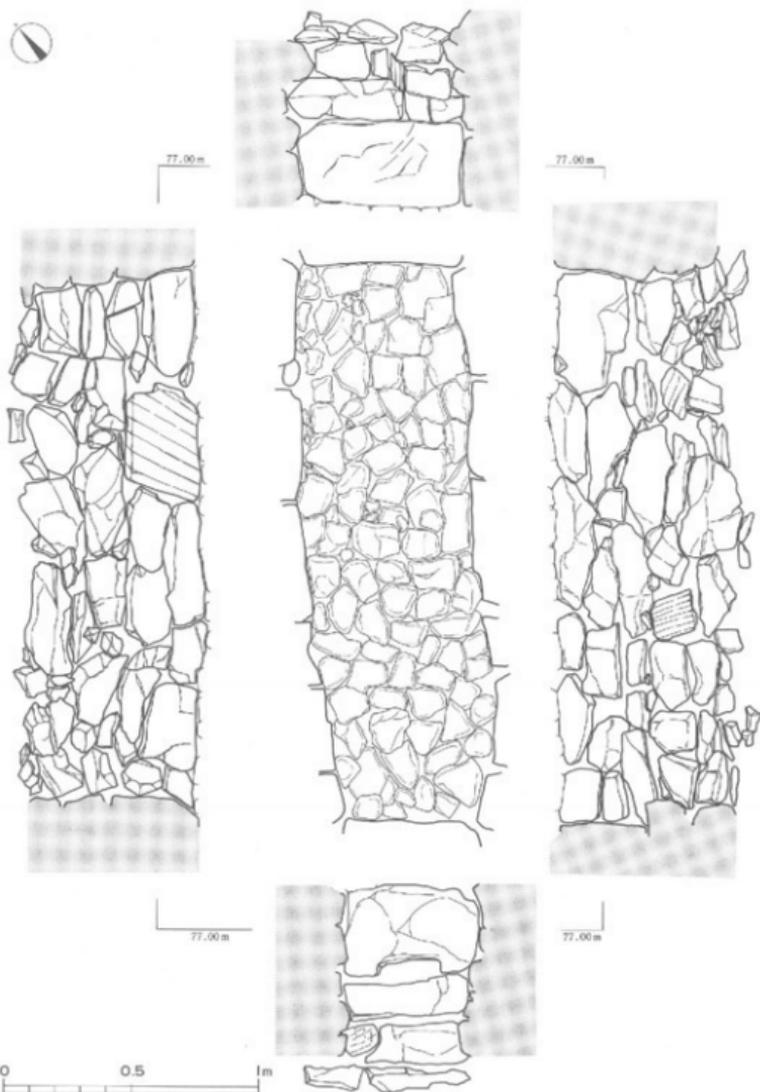
これらの副葬品及び人骨の位置から、埋葬時の状況を推定する事は可能であろう。それは、遺骸を石室のやや東寄りに安置し、首部分には装身具を施している。遺骸の右側(西壁寄り)には、頭部から肩～腕部にかけて大刀・刀子・鉄鏃を並置させると云う状況をこれらの副葬品の原位置によって窺う事ができるものである。



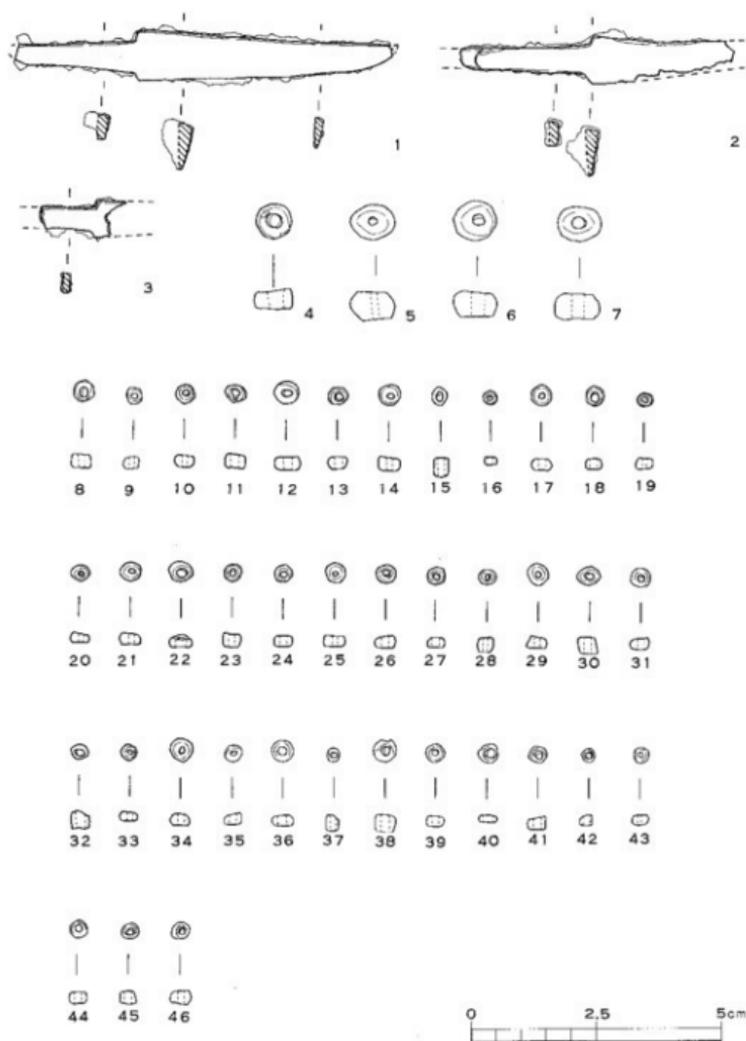
第67图 IX号墳石室平面图·断面图



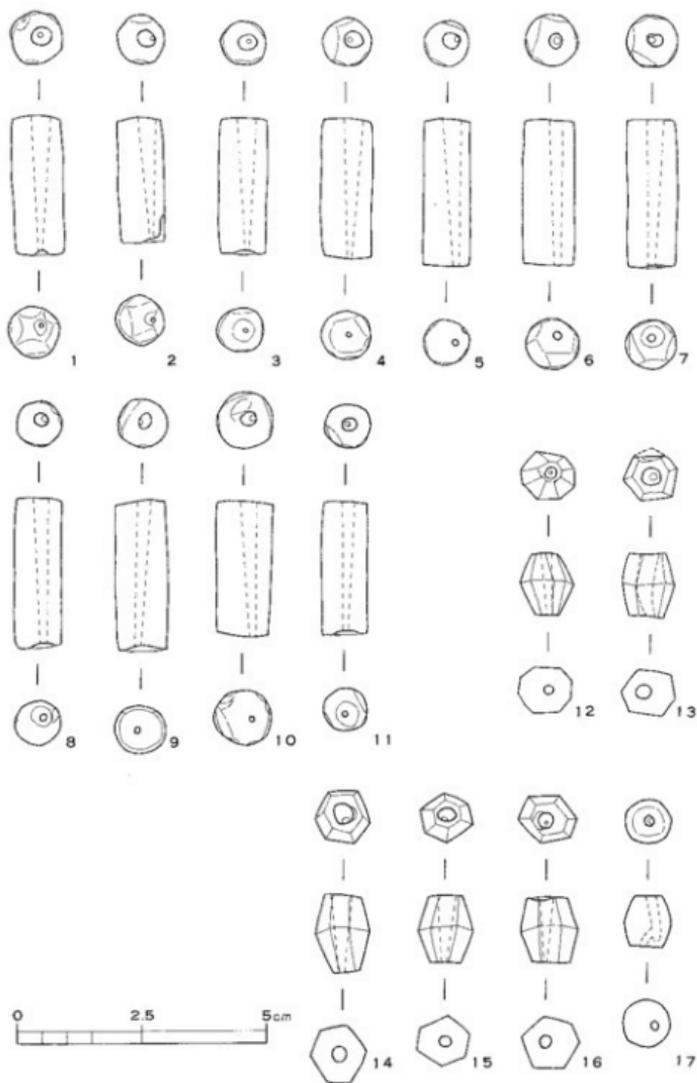
第68図 IX号埴石室平面図・遺物出上状態



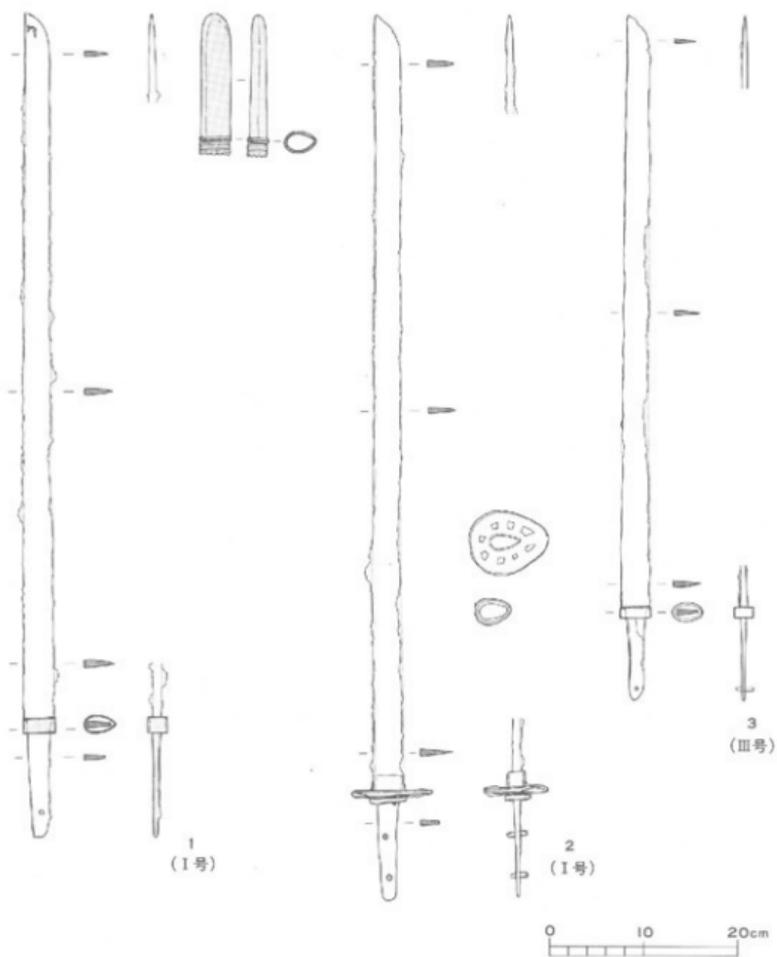
第69圖 IX号墳石室展開図



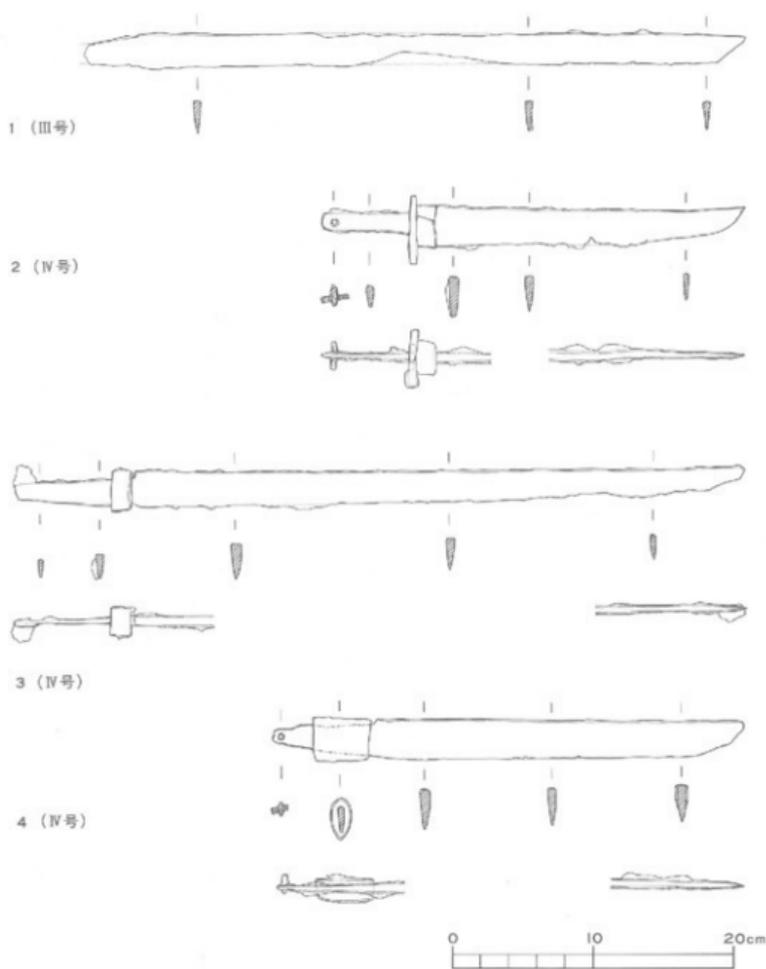
第70圖 IX号墳石室内出土遺物(1)



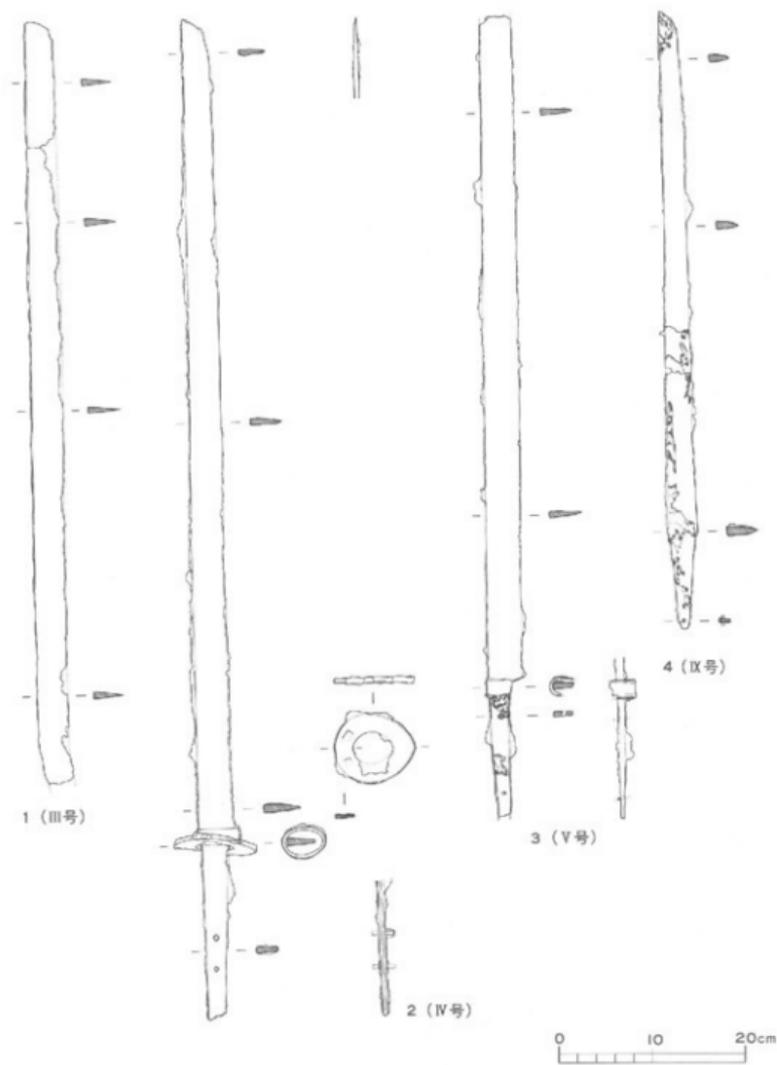
第71圖 IX号墳石室内出土遺物(2)



第72圖 1・Ⅲ号墳石室内出土遺物・直刀(1)



第73图 III·IV号墳石室内出土遺物・直刀(2)



第74图 Ⅲ·Ⅳ·Ⅴ·Ⅸ号墳石室内出土遺物·直刀(3)

X 号 石 棺 (第 75 図) [図版 84 ~ 86]

X号石棺は、№22地点の北東約450mで雷神社の東約250mに位置している。同地域は、小栗地内遺跡群を構成する古墳群の一つで、雷神山古墳群域にあたるものである。遺跡地は、小栗地内遺跡群を二分する南西に開口する谷津の谷奥部分の西側にあたり、北に進入する小支谷と北西に進入する小支谷に挟まれた丘陵の頂上部分に存在する。同頂上部分は、標高90.00m付近で狭い平坦地と非常に緩やかな傾斜地を形成しており、低平なマウンド(地彫れ程度)をもつ遺跡が散在している。

石棺の発見は、現地調査を終了し、整理期間中の1985年7月31日に工事主体者より通報を受けた。それは、現地の山頂付近を造成中、平石(石棺の蓋石と判明)を削割し小さな石棺内から人骨が出土しているとの事であった。そこで、早速現地に赴いた所、蓋石を繰て削割された石棺1基と同石棺内から出土した人骨2体分(頭蓋骨により2体分と判明した)が取り上げられていた。なお当該地域は造成工事を継続している地である為、調査は石棺内の精査と実測に依る事とした。

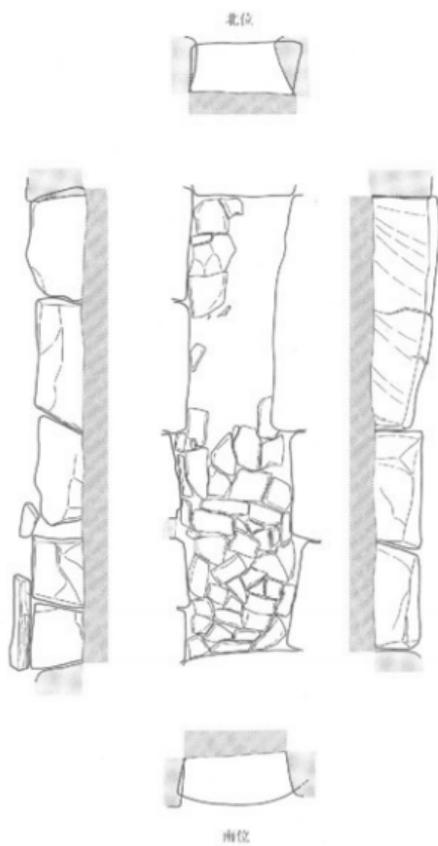
石棺は、長さ1.8m、幅0.4m、遺存高0.2~0.25mを測る箱式石棺である。北壁は長さ40cm、高さ約20cmを測る一枚石であり、南壁は長さ47cm、高さ約15~20cmを測る一枚石である。東壁は3枚の大型礫を配し、それぞれの長さ93~42cm、高さ25~16cmを測る。西壁は5枚の大型礫を配し、それぞれの長さ53~22cm、高さ22~17cmを測る。床面は一辺10~20cm内外の扁平な割石を南半部に敷き詰めている。また、北半部の西壁際にも遺存する事により、全面に敷き詰めていたものと思われる。

副葬品は検出されなかったが、床面の精査によって人骨片・歯1点を検出した。出土地点は、石室北半部の中央やや西寄りの礫床辺である。また、同石棺内より既に取り上げられた人骨は、石棺北端部に頭蓋骨(頭頂部を北位にし顔面を上向きにしていた)が安置され、更に石棺南端部にも頭蓋骨(頭頂部を南位にし顔面を上向きにしていた)を安置しほぼ二体分の人骨(上腕骨・肋骨・尺骨・肋骨・鎖骨・腰椎・足骨など多数検出)を出土している。なお、以上の人骨については鑑定結果を後述するが、

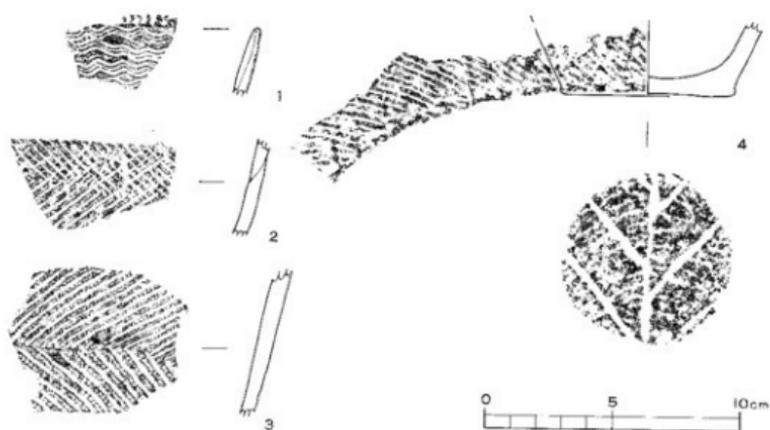
石棺北端部出土の人骨(北位：N方位)——→1号人骨(♀)

石棺南端部出土の人骨(南位：S方位)——→2号人骨(♂)

として区別した。同石棺は、尾根上に構築されて主軸長をIX号墳(壘穴式石棺)とほぼ同じくし、石棺の南方は谷津の入口部から広く沖積地や筑波山を見渡す事ができる。また、VII号石棺に比して石棺長・石棺幅をやや小型化している事や石棺高を約1/2とする低平な石棺である事などから、年代的にも他の古墳群に先行するものとして捉えて置きたい。



第75圖 X号石棺・展開圖



第76図 X号石棺周辺出土遺物

上記の遺物は、X号石棺を緊急調査した時に同地の平坦部～緩傾斜地一帯にかけて広く散布していたものであり、これらを表採資料としたものである。表採遺物の多くは弥生土器片であり、他に若干の土師器片を検出した。弥生土器片は、弥生時代後期に比定し得るもので、No 22地点のS I-1やNo 21地点の住居跡出土遺物とほぼ同時期である。また、土師器片からは器種・年代等を比定し得ないものであった。

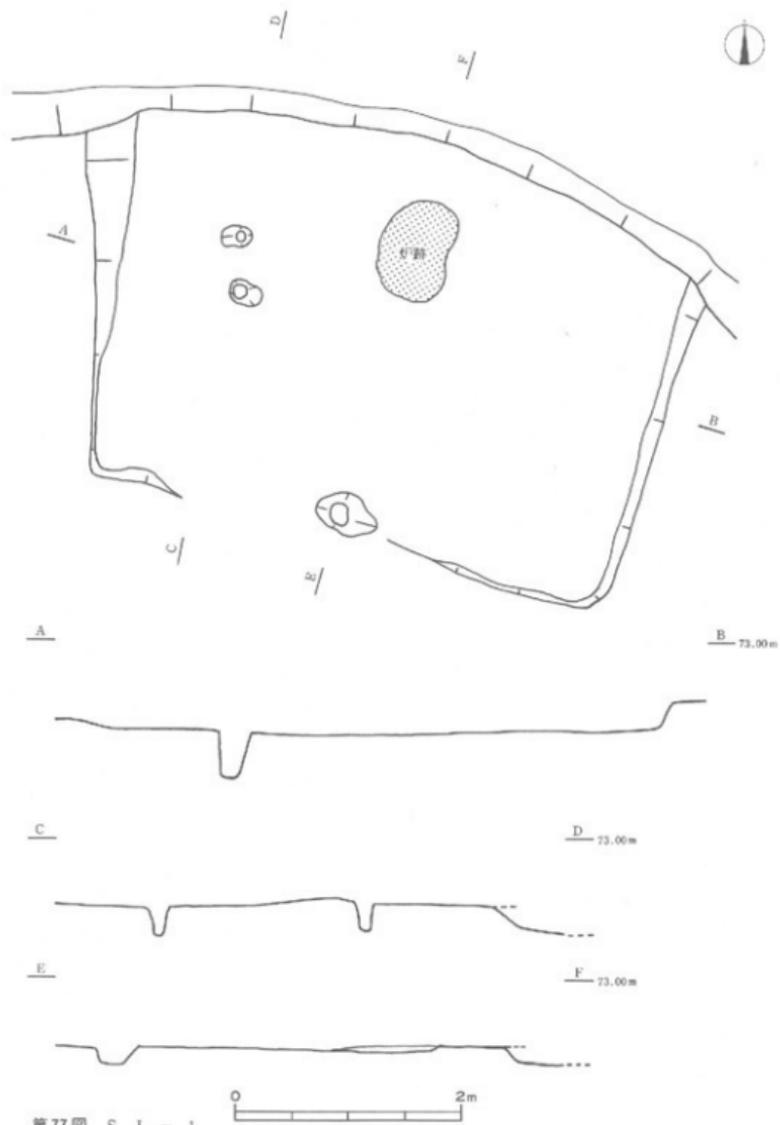
これらの遺物がX号石棺周辺(標高90.00～95.00m)の高地から表採された事は、先のNo 22地点、S I-1と共に弥生時代後期においては、山頂部を含めた広範囲を生活の場としていた当地の弥生人の特色を見出す事ができる。更に、当地域の古墳群の先駆となった雷神山古墳群の一端を窺わせるこのX号石棺は、位置的にも未踏査地域にあたる事から、今後の対応を慎重に行ってもらいたいものである。

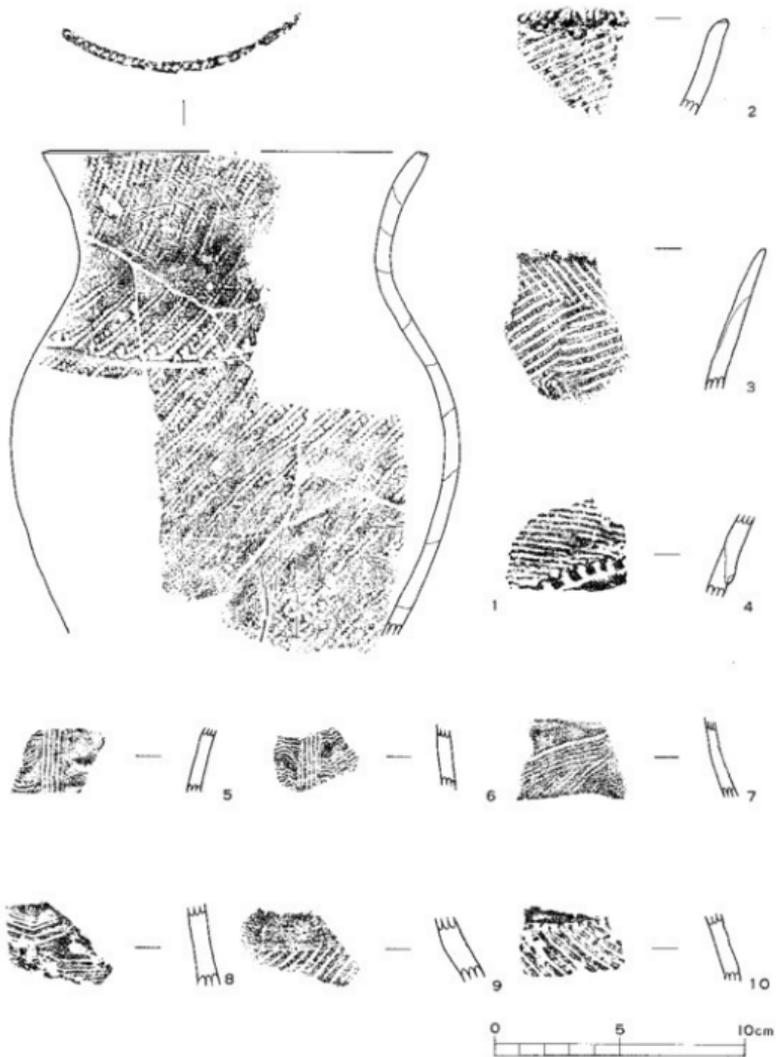
S I - 1 (第77図～81図) (図版26-1, 図版79)

S I - 1は、C IV - 15区(中グリッド)内で1号墳石室の南東約35m・標高72.00mに位置し、北側にはII号墳周溝が重複する。主軸をN-14°-Eにとり、平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。北壁はII号墳周溝に削土されるが、南壁長4.50m、西遺存壁長2.98m、東遺存壁長2.88mを測り、床面のはば中央に炉床を有する。炉床は、長径90×短径61cmを測り平面形は楕円形を呈するもので、焼土の堆積は最大約5cmである。炉床は床面を浅く低平に掘り凹められている。東壁は強く立ち上がり、壁高は南側で15cm、北側で28cmを測る。西壁は低平に緩やかで、壁高は南側で5cm、北側で12cmを測る。南壁は強く立ち上がり、壁高は東側で13cm、西側で5cm、中央付近は床面とはほぼ同一レベルとなっている。

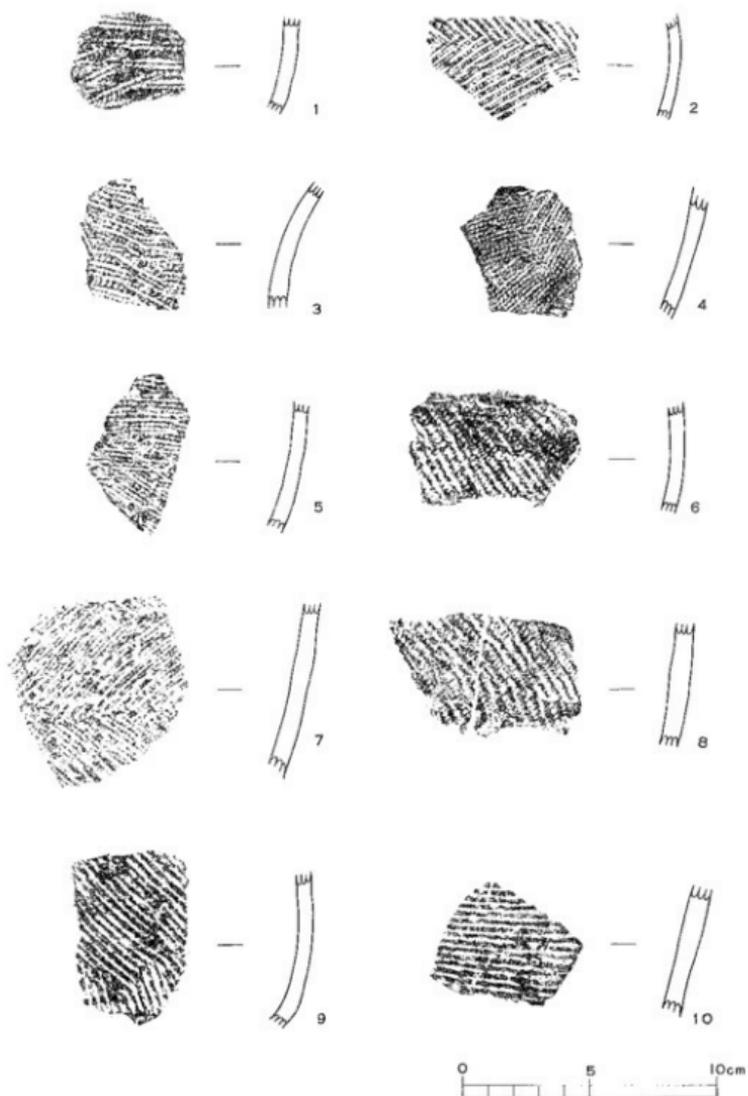
床面はほぼ平坦で、住居跡の北側は南側に比して掘り込みが深い。また、床面にはPit 3基が検出され、北位より径28×19cm・深さ25cm、径29×19cm・深さ41cm、南壁際中央に径56×35cm・深さ15cmを測る。更に、炉床周辺の床は固くしまっているが、壁周辺に至るとやや軟質となってくる。

出土遺物は、総て住居跡覆土中より検出されたものである。出土状況は、炉床を中心とする住居跡の中央部分に集中していた。しかし、接合する遺物はほとんど皆無で、多くは小破片となって混在するものであった。遺物の多くは甕形土器を中心とする破片で、器形は第78図-1に特色付けられるものである。他に図示できるものには、口縁部・頸部・肩部・胴部・底部などをあげることができる。口縁部は、その口唇部分に縄文原体を押捺するものが多く、内面にはナデ整形・外面には付加条縄文による羽状化及び斜行化が見られる。頸部は、内面にナデ整形・外面には櫛描文や縄文の斜行・縄文原体の押捺を行なっている。肩部から胴部にかけては、内面にナデ整形・外面には付加条縄文などにより斜行や羽状化に施文する。底部は、総て平底で内面はナデ整形とし、外面には木葉圧痕を有している。器形的には厚手でやや大型のものと、小型のものにと別られる。また、特色ある遺物としては高坏形土器(第81図-6)を検出した事である。受部はやや深く、口縁までは短かく外傾して立ち上がり、脚部はやや深く外反して裾部に至る器形である。受部の外面には付加条縄文が施文され、脚部では羽状化している。内面は、全面ナデ整形である。

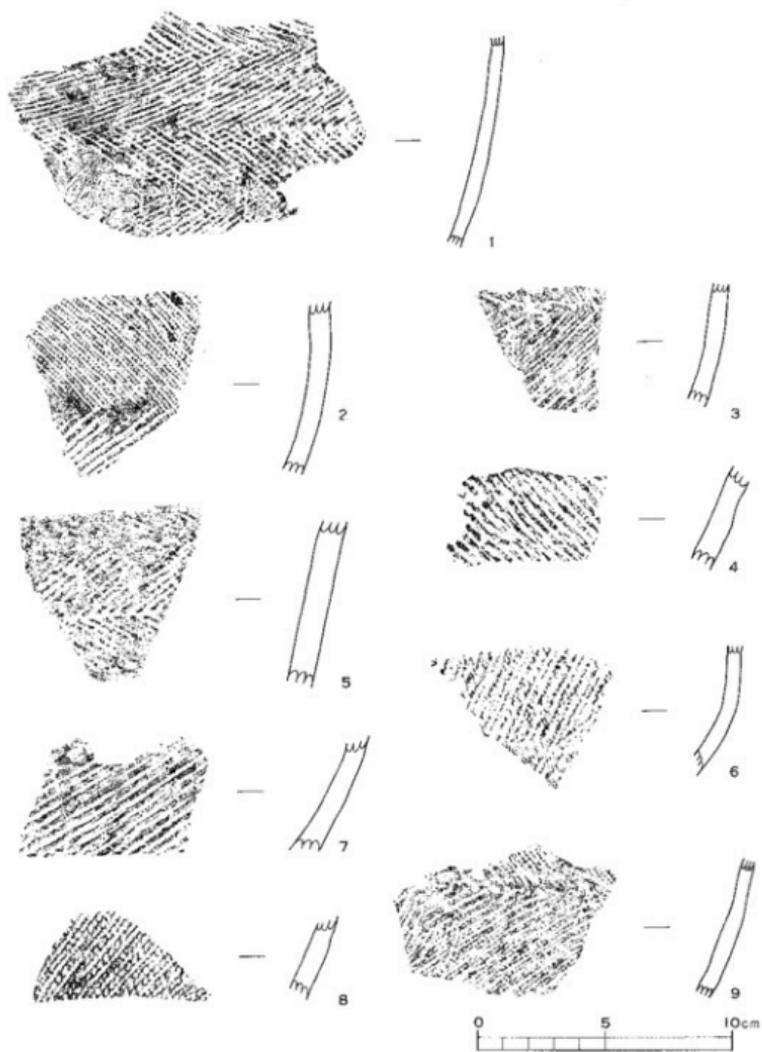




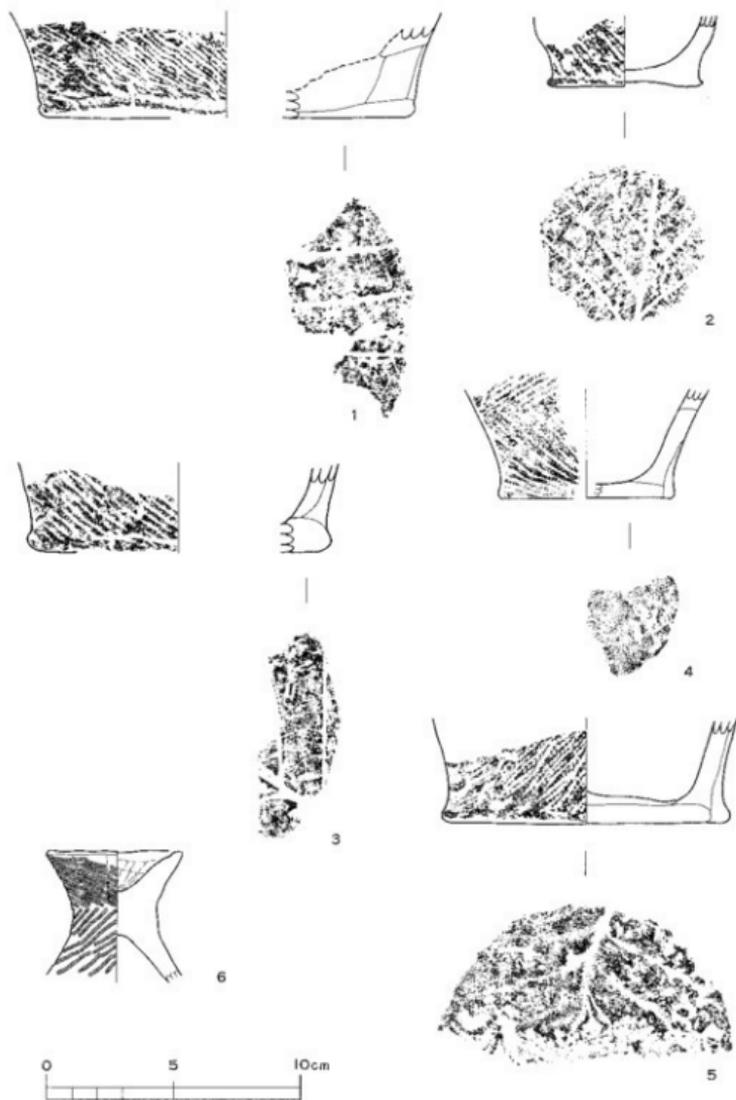
第78圖 S I - 1 出土遺物(1)



第79圖 S I - 1 出土遺物(2)



第80圖 S I - I 出土遺物(3)



第81圖 S 1 - 1 出土遺物(4)

S I - 2 (第82・83図) 図版26-2、図版80-1)

S I-2は、CIV-15区(中グリッド)内でS I-1の南26m・標高69.00mに位置し、北側をⅢ号墳周溝と重複する。主軸をN-28°-Eにとり、平面形は方形を呈するものと思われる。北壁はⅢ号墳周溝に削土されるが、南壁長5.80m、西遺存壁長4.06m、東遺存壁長5.92mを測り、北壁の中央部分にカマドを有するものと思われる。東壁は強く立ち上がり、壁高は南側で9cm、北側で48cmを測る。西壁は北半部ではほぼ垂直に近く南半部では浅く外傾して立ち上がり、壁高は南側で4cm、北側で30cmを測る。南壁は全体的に浅く外傾して立ち上がり、壁高は東側で10cm、西側で7cm、中央付近はわずかに痕跡程度に遺存する。

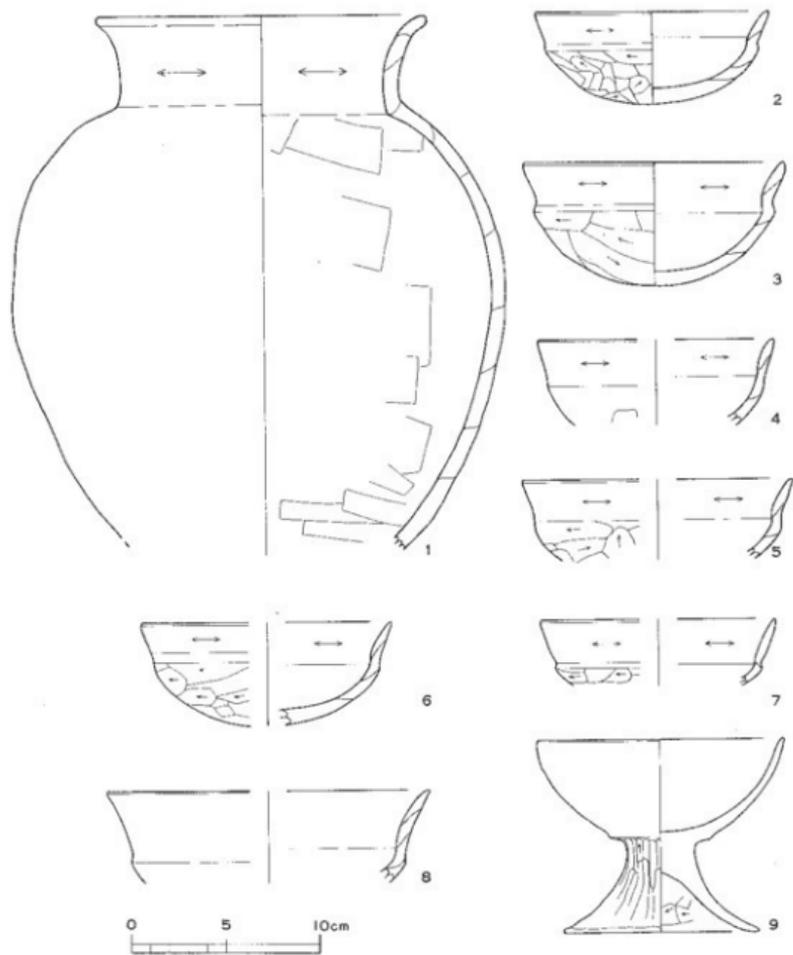
床面はほぼ平坦であるが、西及び南に低く傾斜する。それは、同地域全面に鶏舎造営時の造成工事による削平が行われた結果であり、壁自体がころうじて遺存した事によるものである。住居跡の掘り込みは、旧地形が南面する傾斜地上であった為に、北側が南側に比べて深く掘り込まれているものである。また、床面には多数のPitを検出するが、径10~28cm・深さ8~25cmとばらつき、その配置からも柱穴と認定するまでには至っていない。南壁際の中央部には、最大径115×69cm・深さ31cmを測る攪乱土坑を確認した。この土坑覆土中からは土師器片を出上している。床面の東約2/3は踏み固められてよくしまっていた。更に、この床面直上には広範囲に亘って焼上帯が広がり、中でも南半部には炭化した家屋材が散乱していた。

カマドは、北壁の中央部に構築されていたものと推定されるが、Ⅲ号墳周溝によって完全に削土されてしまっている。しかし、同付近より出土した遺物の周囲には、袖を構築していたと思われる粘土の堆積を認め、また、遊離してはいるが同一の帯状粘土塊を2箇所床面で確認した。

出土遺物は覆土中及び床面上で検出されたもので、総て土師器である。器種には、甕・高坏・坏を検出した。甕(第83図-1)は、西半城のⅢ号墳周溝際で床面直下より出土した。胴部中位に最大径をもつやや大型の製品で、胴下半部に多量の煤を付着している事により、カマドで使用されていた事が判明する。高坏(第83図-9)は、北壁のカマド付近で床面直上より出土した。脚部の一部を欠失するが全容を窺える資料である。坏部と脚台部は稜によって画され、坏部はやや内湾気味に立ち上がり、脚台部は「八」の字状に末広がる。坏は、中型でやや深いもの(第83図-2・3・4・5・6)と浅いもの(第83図-7・8)とがあるが、丸底を早し内面は磨き外面は手持ちへら削りされたものが主体的である。



第82圖 S I - 2



第83图 S 1 - 2 出土遗物

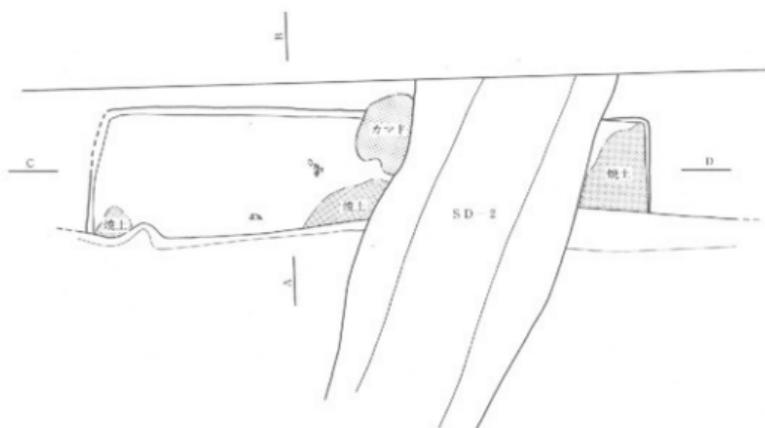
S I - 3 (第84図～86図)

S I - 3は、DIV - 4区(中グリッド)内でS I - 2の南東52m・標高65.00mに位置し、Ⅶ号石棺・Ⅷ号石室の南10m地点に存在する。住居跡の東半部はSD-2と重複し、南半部は鶏舍造営時の造成工事によって削土され、わずかに北半部の約1/4を遺存する。主軸をN-18°-Eにとり、平面形は方形を呈するものと思われる。北壁はその東半部をSD-2によって削土されるが北壁長8.33m、南壁は造成時に削土されて遺存しない。西遺存壁長1.91m、東遺存壁長0.95mを測り、北壁の中央やや東寄りにカマドを有する。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は55～69cmを測る。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30～50cmを測る。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東側で70cm、西壁で50cmを測る。

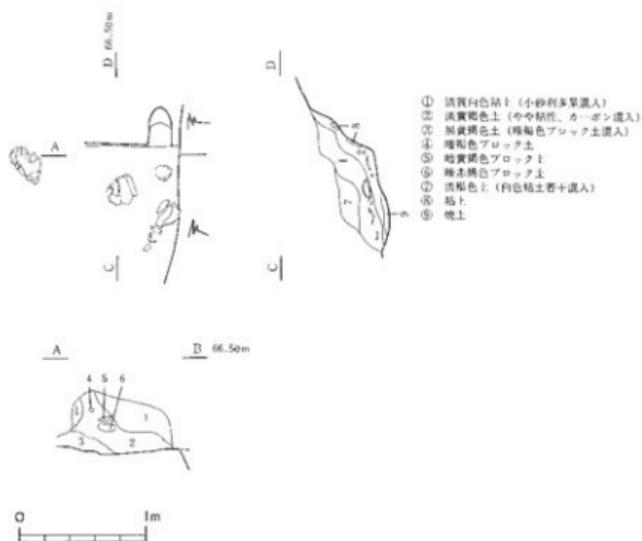
床面は平坦で、ほぼ全面に亘って固くしまっている。また、柱穴などのPitは検出されなかったが、ほぼ全面に焼土及び炭化材片を検出した。特に焼土の堆積は、東半部において著しいものであった。更に、床面の東半部は北東から南西に走向する大溝(SD-2)によって断ち切れ、カマドの東側も削土されている。

カマドは、北壁の中央やや東寄りで壁外に30cmの煙道部と思われる張り出しをもって構築されている。遺存状況は悪く、掘り方は径87×82cmの平面不整形を遺存し、床面より最大約5～6cmの深さを測る。陶袖は遺存せず、小砂利を多量混入した粘土層中に土師器片を多量検出した。また、火床面は不明瞭で、掘り方部分も脆弱である。壁外に張り出した煙道部は30×19cmを測る平面長楕円形状を呈し、傾斜面上に径10cm内外を測る扁平な礫2点が落ち込んでいた。

出土遺物は北壁際に多く検出され、中でもカマドの周囲(西側)に集中していた。遺物は総て土師器を中心とするものであるが、土師器の燈明皿(第86図-13)は覆土上層から検出しており、後世の紛れ込みと思われる。器種には、甕・甗・埴・坏・高坏などが見られ、甕はカマド覆土中より検出し、他は総て床面直上より検出した。中でも、埴・甗・高坏は北壁際にカマド西端に接し折り重なって検出され、高坏は伏せた状況を呈していた。甕(第86図-1・2)は、平底で胴部は緩やかに立ち上がり、口辺部は外反する。内面はナデ整形・外面はヘラ削り後にナデ整形が行なわれ、底部はヘラ削りによる。甗(第86図-3)は、やや厚みのある平底の底部で、その中央に径3.2cmの単孔を穿つものであり、胴部はラッパ状に開いて立ち上がる。埴(第86図-4)は、全体的に小型でやや厚みをもち、内面は磨き整形・外面はヘラ削りを施している。坏は、浅い丸底と深い丸底を有するものがあり、口縁部は外反する(第86図-10・11)もので、内面は磨き整形・外面はヘラ削りされるものと磨きを施されるものがある。また、内面に放射状の暗文を有するものもある。高坏(第86図-12)は、大型の製品で坏底部は平底を呈し、坏部は直線的に外傾して立ち上がる。坏部内・外面は共に磨き整形で、内面には放射状の暗文を有する。脚部内面は、ヘラ状

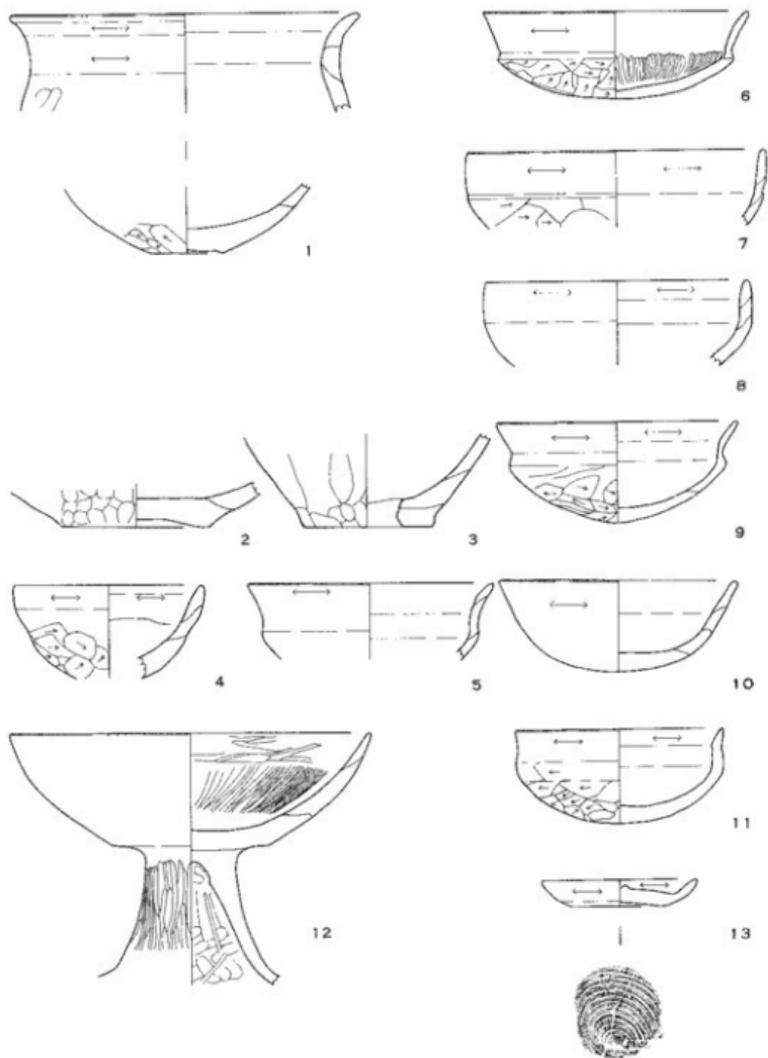


第84図 S I - 3



第85図 S I - 3 遺

工具によるナデ付け及びへら削り整形で、外面は縦位にへら磨きが施される。燈明皿(第86図-13)は、やや肥厚する底部より浅く直線的に外傾して立ち上がり、内・外面共にロクロナデ整形、底部は回転糸切り痕を有するものである。



第86圖 S 1 - 3 出土遺物

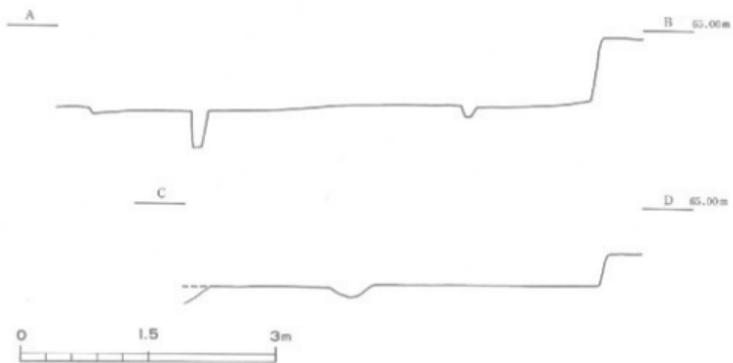
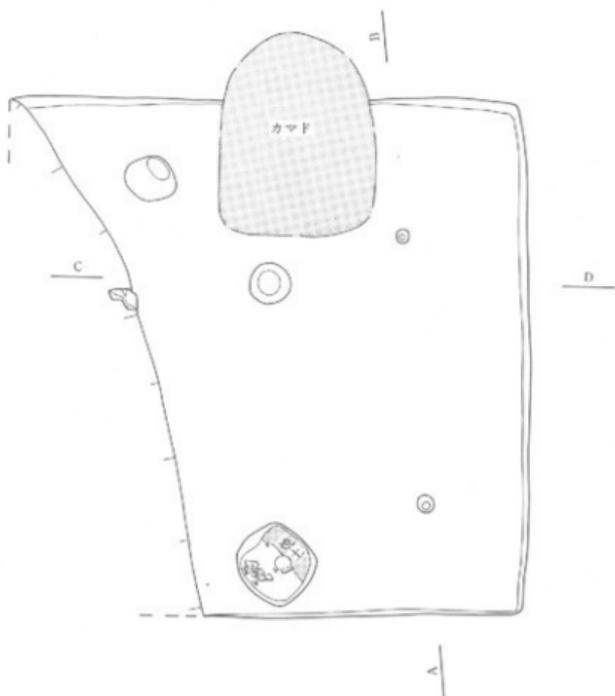
S I - 4 (第87図～91図) (図版27, 図版80-2, 図版81)

S I - 4は、D IV - 8区(中グリッド)内の東辺でV号埴石室の西7m・標高64.00mに位置し、S I - 6とは東西に約30m離れて存在する。住居跡の西半～南半にかけては斜方に擾乱を受け、南半部は鶏舎造営時に造成工事で削平されている。主軸をN-1°・Wにとり、平面形は方形を呈する。北壁長3.98m、南遺存壁長2.50m、西壁は擾乱を受けて遺存せず、東壁長4.02mを測り北壁の中央やや東寄りにカマドを有する。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南側で6cm、中央部で25cm、北側で51cmを測る。南壁はその西半部に擾乱を受けて消失するが、浅く外傾して立ち上がり、壁高は東側で5cm、中央部で4cmを測る。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東側で50cm、中央部で68cm、西側で47cmを測る。

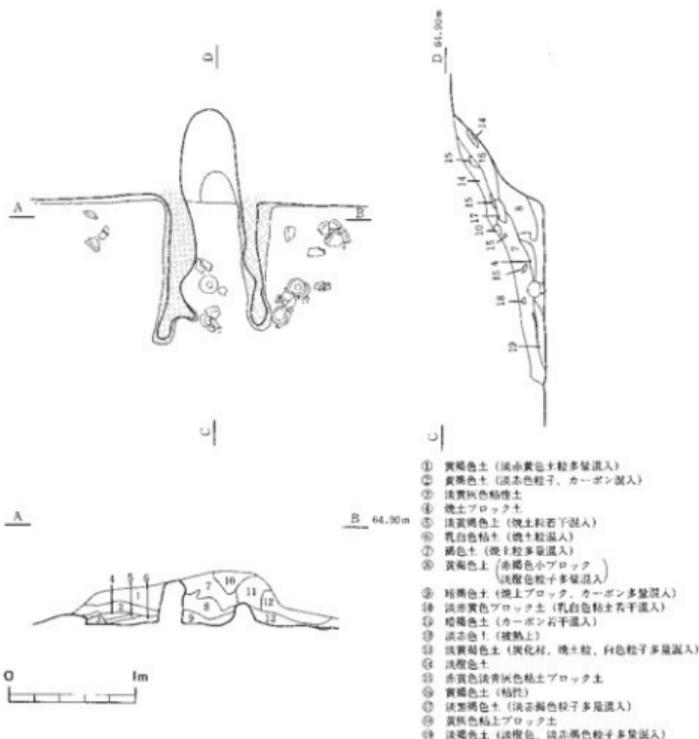
床面は若干南側に傾斜するがほぼ平坦であり、カマド周辺と東半部は固くしまっている。柱穴と考えられるPitは、南東コーナーの径14×13cm・深さ29cmを測る1基だけであり、北半部に検出されたPit3基(径10～37cm・深さ8～10cm)は柱穴とは考え難いものである。また、南壁際の中央には、径60×57cm・深さ32cmを測る平面不整形形を呈する土坑を検出した。この土坑は、北東部の基底面付近に焼土が堆積し、中央の基底面に小型壺・南西部に甍片を出土している。床面には、ほぼ全域に亘って焼土・炭化材を確認したが特に、東半部においては炭化した家屋材を明確に検出し、焼土の堆積も最大で10cmを超えるものであった。

カマドは、北壁のほぼ中央やや東寄りで壁外に73cmの張り出しをもって構築されている。遺存状況は良好で、掘り方は確認できなかった。カマド天井部は崩落していたが、両袖共に良好に遺存する。両袖共に壁から作り付けられており、両側袖は最大長113cm・幅15～26cm・最大高35cmを測り、東側袖は最大長100cm・幅14～27cm・最大高19cmを測り、共に直線的に延びる。カマド幅は約85cm、燃焼部最大幅52cm、煙道部は壁外の張り出し部分で73×44cmの平面長楕円形状に掘り込まれる。カマド内には伏せた埴を検出したが、支脚に使用したものであろうか。また、燃焼部には約50×50cmの範囲で良好に焼きしまった平坦面を検出したが、火床面と推定することもできる。

出土遺物は、カマド周辺を中心として北壁・東壁際・中央部などの床面直上で検出された。遺物は総てが土師器であり、器種には甍・壺・埴・甍・坏・埴形土器などがあり、他に紡錘車1点を検出した。甍(第89図-1・2・3・4, 第90図-1・2)は、平底の底部で胴部中央に最大径をもち頸部は「く」の字状に外反し口縁に至るものである。小型甍(第89図-7)は、短頸のものである。壺(第89図-5)・小型壺(第89図-6)は、頸部から口縁部が「く」の字状に強く外反している。埴(第90図-3)は、平底気味の底部で胴部中央に最大径をもち、頸部はほぼ直線的に強く外傾している。甍は共に大型の製品で、多孔式(2孔)甍(第90図-4)と単孔式(第91図-1)甍とがある。

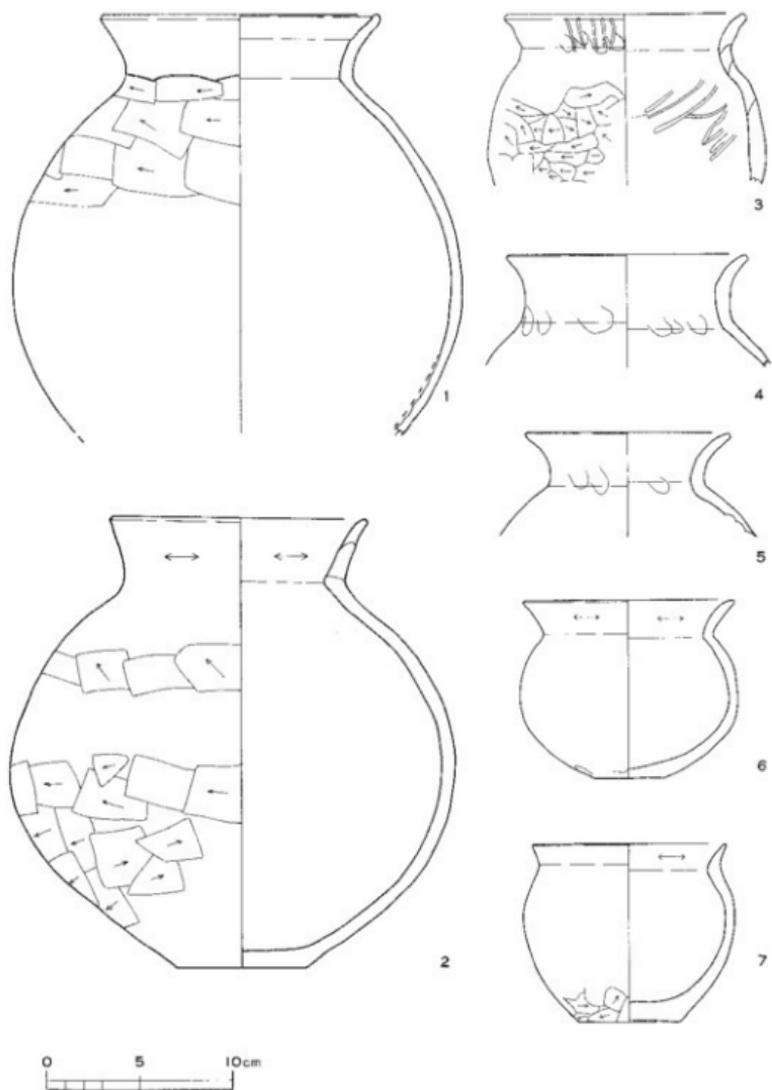


第87図 S I - 4

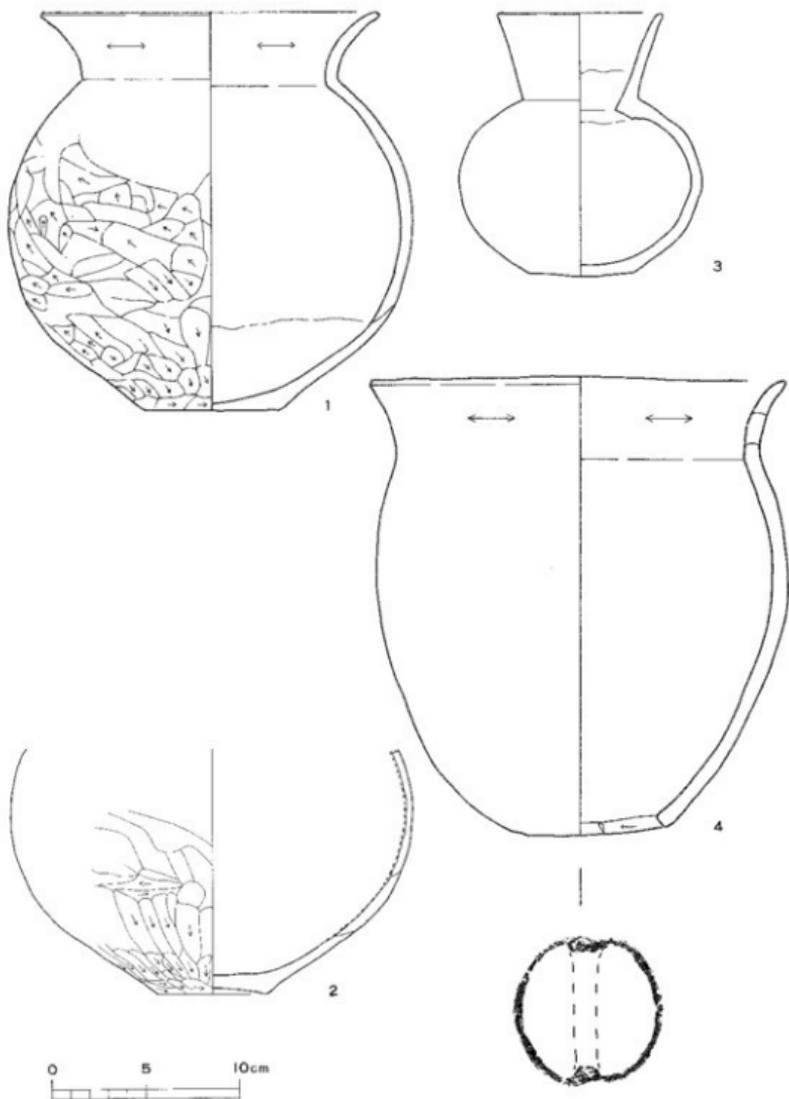


第88図 S I - 4 竈

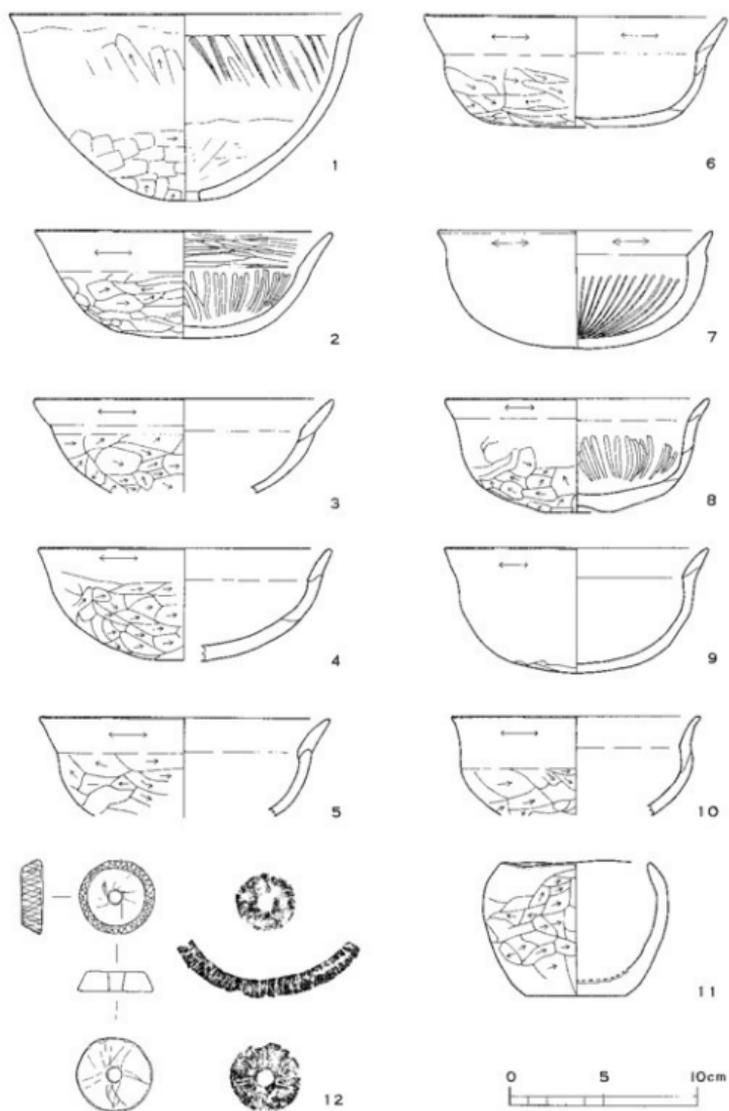
環はやや深いものと浅いものがあり、口縁部が外傾する(第91図-2・3・4・5・6・7・9)ものとわずかに外反する(第91図-8・10)ものとに別けられる。壙形土器(第91図-11)は小型で平底を呈する。紡錘車(第91図-12)は滑石製で東壁際において検出されており、断面形状は定角台形状を呈してほぼ中央に円孔が穿たれている。更に、側面には交叉沈線文が全周する。



第89圖 S 1 - 4 出土遺物(1)



第90圖 S 1 - 4 出土遺物(2)



第91图 S I - 4 出土遗物(3)

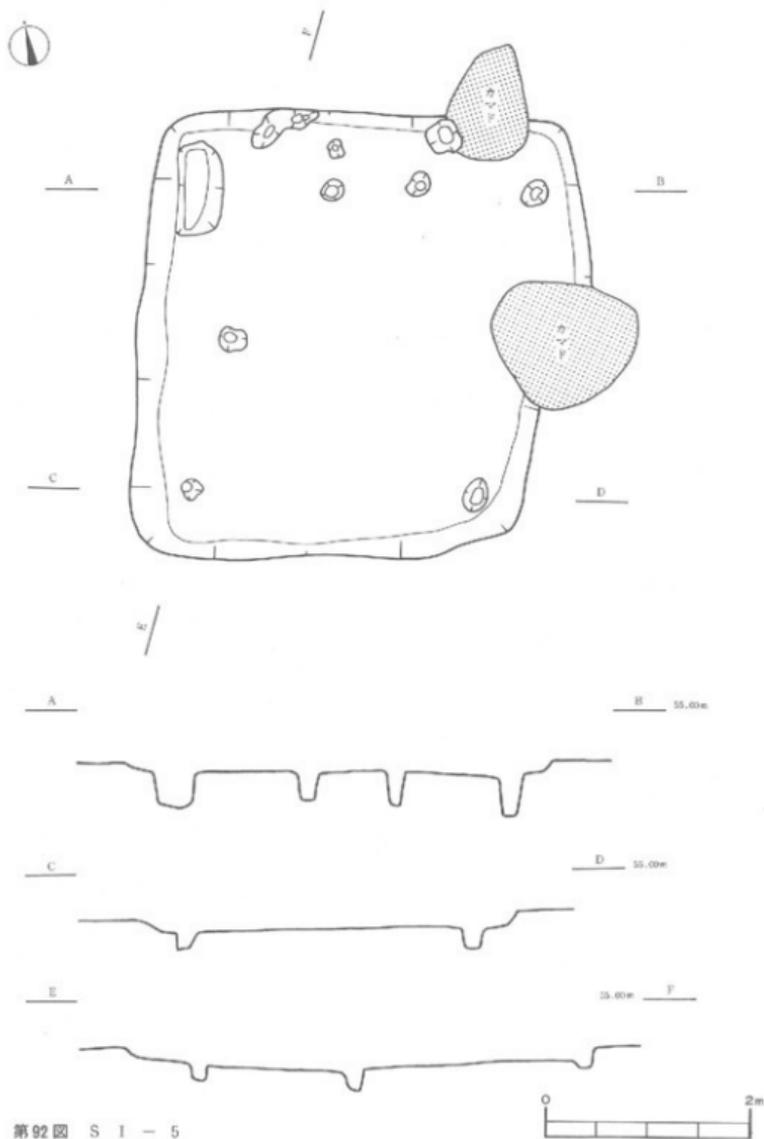
S I - 5 (第92図～94図)

S I - 5は、D IV - 8区(中グリッド)内の北辺でS I - 4の北西15m・標高64.00mに位置し、北西にS I - 3・南西にS I - 6とが存在する。住居跡は鹿沼縣石屋中に構築され、また同住居跡は鎌倉造営時に全域が削平されている。主軸をN-16°-Eにとり、平面形は方形を呈する。北壁長3.98m、南壁長3.74m、西壁長4.29m、東壁長4.06mを測り、北壁の東寄りと東壁の中央にカマドを各々付設する。東壁は、カマドの構築によるものかその北半と南半は大きく(約50cm)くい違いを見せている。東壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は南側で16cm、北側で15cmを測る。西壁は緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は南側で11cm、北側で7cmを測る。南壁は緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は東側で14cm、西側で12cmを測る。北壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は東側で14cm、西側で10cmを測る。

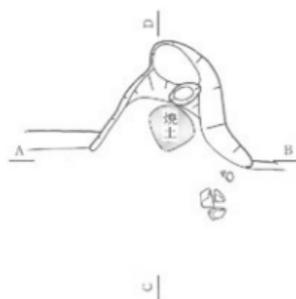
床面はほぼ平坦で、全面に亘って脆弱である。Pitは各壁際に10基を検出したが、そのうち径12～14cm・深さ20～38cmを測るPit5基と、径14～30cm・深さ10～15cmを測るPit5基とに区別される。また、西壁際の北隅に長軸を西壁に平行させる長径89×短径44cm・深さ35cmで平面長方形形状を呈する土坑1基(貯蔵穴か)を検出した。

カマドは北壁及び東壁にて2基確認したが、北壁カマドは住居跡内の部分を完全に削平され、わずかな掘り方と薄い焼土帯を残すのみであった。本住居跡は、北壁カマドの廃棄後に東壁カマドを構築したものと推定される。北壁カマドは、壁外に70cmの張り出しを持って構築され、張り出し部分は浅い掘り方を有している。掘り方は59×55cmの範囲で床面よりの深さは約7～9cmを測る。煙道部は、張り出しの最奥部に幅16cm・高さ25cmを測る急な傾斜面を利用したものと思われる。両袖共に遺存せず、床面と張り出しに2基の浅いPit(径13～17cm・深さ3～4cm)を有し、19×7×10cmを測る竈が張り出しの中央で床面上に遺存する。東壁カマドは、壁外に82cm張り出して構築され、両袖は遺存しない。燃焼部は90×60cmの範囲で、火床面は34×31cmを測り明瞭な被熱痕を遺存している。煙道部は一段高く(火床面より約15cm高い)なり、37×31cmを測る突出部分(張り出しの最奥部)に設けられたものと推定できる。カマドの南側床面上に径10cm内外の礫5点を検出した。

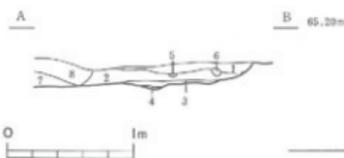
出土遺物は住居跡覆土中より検出したもので、器種は土師器(甕)・内黒土師質土器(高台付環)・弥生土器片である。甕(第94図-1)は、頸部でわずかに外反し口縁部はほぼ直立する。内面はナデ整形・外面はヘラ削りを施す。高台付環(第94図-2)は、高台部は「ハ」の字状に開き、内面は黒色処理、底部は回転ヘラ切り後に高台を貼り付ける。弥生土器(第94図-3・4)は、甕形土器の底部断片である。共に底部に木葉圧痕を有している。



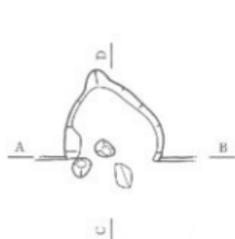
第92圖 S I - 5



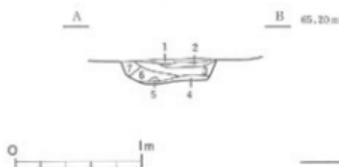
- 東壁土層説明
- ① 褐色土 (焼土、白色粘土混入)
 - ② (焼土、炭化材混入) 混入土
(淡黄色粘土、黄白色粘土)
 - ③ 暗黄褐色土 (焼土、炭化材混入)
 - ④ 雑色土 (明赤色)
 - ⑤ 淡黄色粘土アロップ
 - ⑥ 乳白色粘土アロップ
 - ⑦ 暗黄褐色土 (パミス混入)
 - ⑧ 暗黄褐色土 (パミス混入)
 - ⑨ 暗褐色土 (焼土混入)
 - ⑩ 暗褐色土 (灰田土アロップ混入)



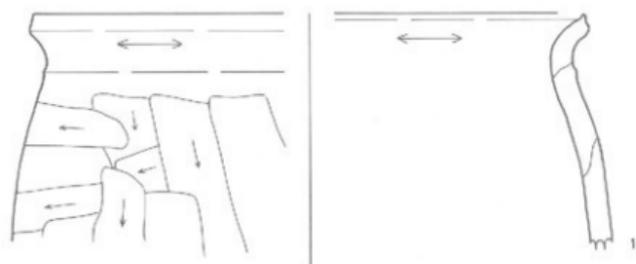
東壁



- 北壁土層説明
- ① 淡褐色土 (パミス混入)
 - ② 黄褐色土 (焼土、白色粘土混入)
 - ③ 褐色土 (焼土、黄褐色土混入)
 - ④ 暗褐色土 (黄土混入)
 - ⑤ 暗黄褐色土 (硬質、焼土混入)
 - ⑥ 暗褐色土 (焼土多量混入)
 - ⑦ 暗黄褐色土 (焼土、灰田土混入)
 - ⑧ 暗黄褐色土 (焼土粒多量混入)
 - ⑨ 暗黄褐色土 (パミス多量、黒色粘土若干混入)



北壁



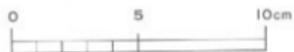
2



3



4



第94圖 S I - 5 出土遺物

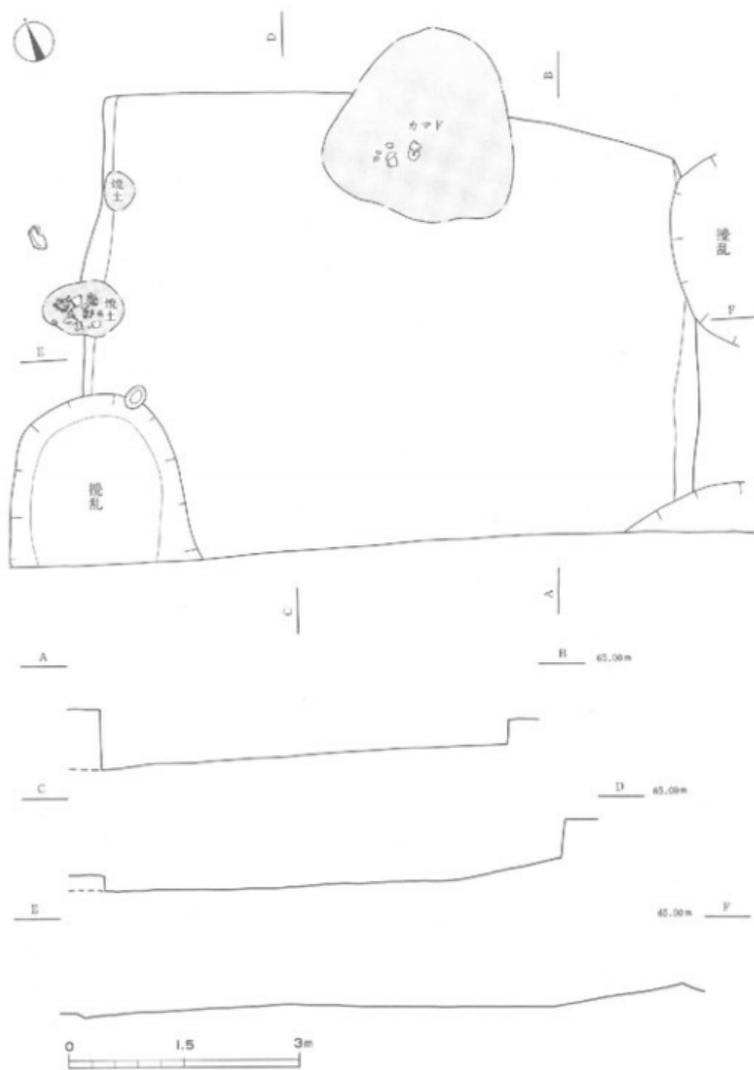
S I - 6 (第95図~98図) [図版82-1]

S I - 6は、DIV - 8区(中グリッド)内の西辺でS I - 3の南16m・標高64.00mに位置し、S D - 2と並存する。住居跡の東側及び西側は一部攪乱を受け、南側は調査区域外である。主軸をN - 24° - Eにとり、平面形は方形を呈するものと思われる。北壁長7.44m、南壁は区域外の為不明である。西遺存壁長3.95m、東遺存壁長4.38mを測り、北壁の中央やや東寄りにカマドを有する。東壁は低くわずかに傾斜して立ち上がり、壁高は痕跡程度で南側で約3cm、北側は攪乱により不明である。西壁は低平でわずかに外傾して立ち上がり、壁高は中央部で6cm、北側で22cmを測る。北壁は垂直に立ち上がり、東側で15cm、中央部(最大高)で56cm、西側で30cmを測る。

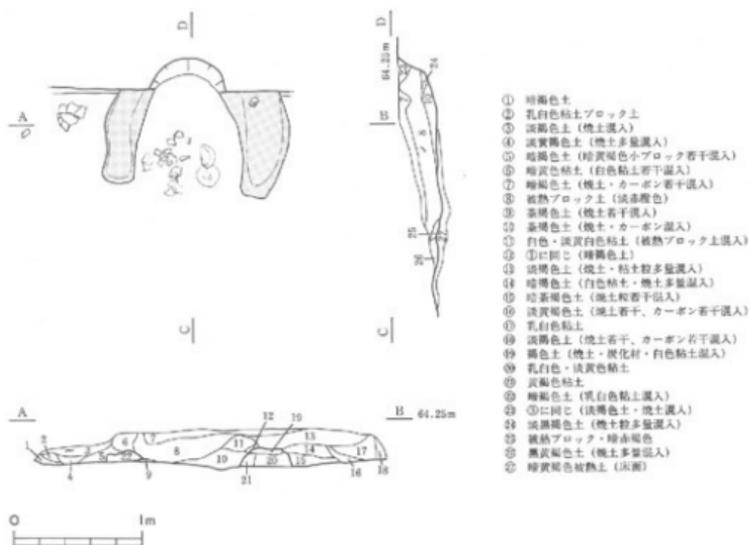
床面は南と西に緩やかに低く傾斜し、東に緩やかに盛り上がる。カマド周辺と北半部の床は固くしめるが、南半部は脆弱である。Pitは検出するに至らず、東壁際床面及び西壁南部床面は攪乱を受ける。また、床面西半域は焼土及び炭化材の出土を著しく認め、特に西壁中央部には長径106×短径70cmの平面楕円形状に焼土の堆積(約3cm)と土師器片・礫の出土を認めた。更に、西壁の北部から床面にかけて長径52×短径40cmの平面不整形楕円形状の焼土の堆積(約3cm)を認めた。

カマドは、北壁の中央やや東寄りて壁外に25cm張り出して構築されている。遺存状況は良好で、西側袖は最大長85cm・幅24~47cm・遺存高14cmを測り、東側袖は最大長74cm・幅23~29cm・遺存高9cmを測る。燃焼部は92×84cmの範囲で、火床面(141×70cm)を袖外の床面にまで明瞭に遺存する。煙道は張り出し部分の25×60cmで平面半円形状を呈し、底面は直線的に外傾する傾斜面を遺存している。

出土遺物は、カマド内及びカマド周辺から検出されたもので、器種は甕・小型壺・坏・高坏があり総て土師器である。また、西壁中央の焼土帯中より高台付坏(土師質土器)が出土している。甕(第97図-1)は、胴部中位に最大径をもち頸部は「く」の字状に強く外反する。器面が著しく荒れることにより、二次焼成を受けたものと思われる。小型壺(第97図-2)は、平底の底部より立ち上がった頸部は中位で最大径をもち、頸部は直線的に外傾するものである。坏は、いずれもやや深い丸底の底部を呈し、口縁部が直線的に外傾する(第97図-3・4・6)ものとやや外反する(第97図-5・7)もの、ほぼ直立する(第97図-8・9)ものがあり、内面は磨き整形・外面はヘラ削りされるものである。また、一部の内面には放射状の暗文を有するものもある。更に、坏底部にヘラ記号を有する(第97図-10・11)ものがある。記号はヘラ書き沈線で「X」としている。高坏(第98図-1・2・3・4)は、比較的大型のものが多く坏部の体部は緩やかに立ち上がっている。脚部は直立気味で、裾部は強く外反する。外面は全体にヘラ磨きを施し、特に脚部は縦位に細かい磨き整形

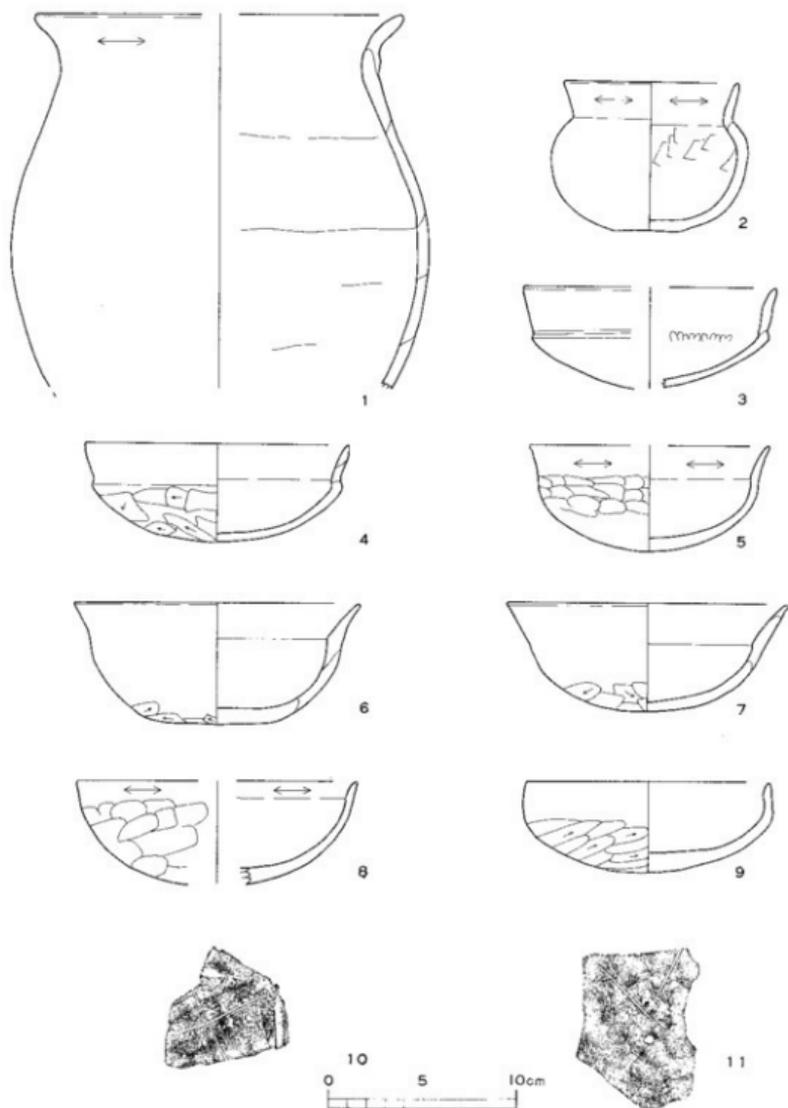


第95圖 S I - 6

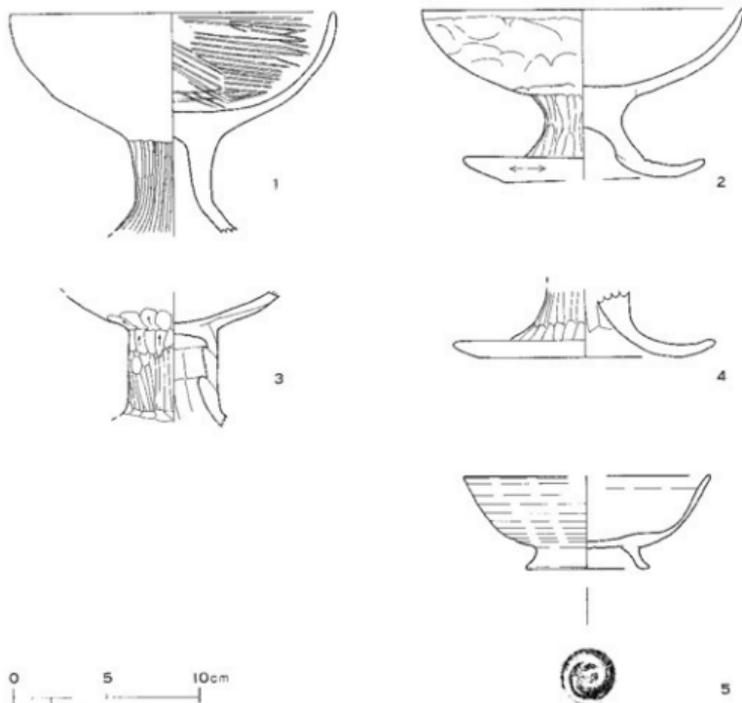


第96図 S I - 6 竈

がなされる。坯部内面はヘラ磨き、脚部は指頭や工具によるナデ整形を行なっている。高台付坏（第98図-5）は、直接的には本住居跡に関わり合うものではないが、西壁中央の焼土帯中より出土している事により掲載したものである。遺物は内・外面共にロクロナデ整形で、底部は回転ヘラ切り後に高台部を貼り付けるものである。



第97圖 S I - 6 出土遺物(1)



第98圖 S I - 6 出土遺物(2)

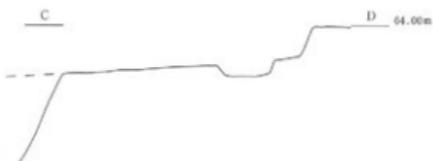
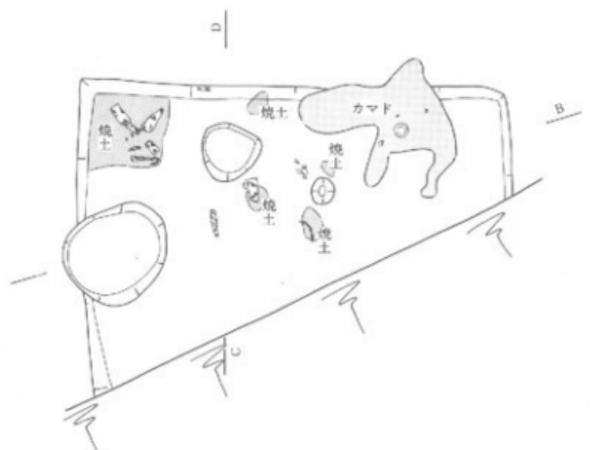
S I - 7 (第99図～101図) [図版82-2]

S I - 7は、D IV - 3区(中グリッド)内の中央付近でS I - 9の東1.5mに近接し、標高63.00 mに位置する。南面する丘陵の掘部付近でⅢ号墳石室の南25m、Ⅳ号墳石室の北13mの地点に存在する。住居跡の南半部は、鶏舎造営時の道路敷設によって削土され消滅しているが、北半部を鶏舎跡地の南側テラス範囲に遺存していた。主軸をN-40°-Eにとり、平面形は方形を呈するものと思われる。北壁長4.55m、南壁は消滅しており、西遺存壁長3.43m、東遺存壁長1.10mを測り、北壁の中央やや東寄りにカマドを有する。東壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は24cmを測る。西壁は、その中央部分に長径115×短径98cm・深さ38cmを測る楕円形土坑によって攪乱されているが、壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は南側で23cm、北側で32cmを測る。北壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は東側で26cm、西側で35cmを測る。

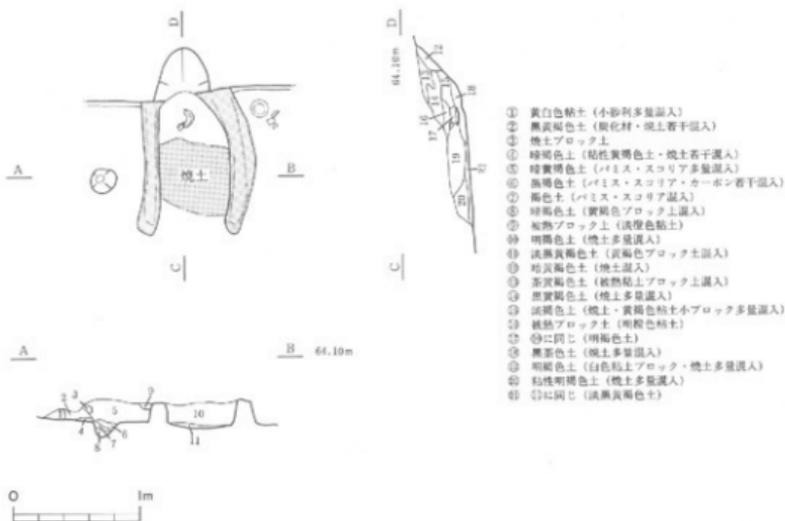
床面は南側にわずかに傾斜するがほぼ平坦であり、全域に亘って固くしまっている。柱穴と考えられるPitは確認できなかったが、攪乱土坑2基と小Pit2基を検出した。攪乱土坑は、西壁中央と北壁際(長径64×短径62cm・深さ14cmを測り平面不整形を呈する)に確認し、小Pitはカマド西側袖付近に長径29×短径25cm・深さ12cmを測り平面楕円形を呈するものと、やや北東側に長径21×短径20cm・深さ12cmを測り平面不整形を呈するものである。また、床面にはほぼ全域に亘って焼土及び炭化した家屋材を検出した。炭化材の多くは北西コーナーに集中し、約5cmを測る焼土の堆積とともに確認した。

カマドは、北壁の東寄りで壁外に35cmの張り出しをもって構築されている。遺存状況は比較的良好で、掘り方は明確ではなかった。燃焼部や袖などの状況からみれば、壁外の張り出しは煙道と考えられるもので、35×41cmの平面双曲線形状に掘り込まれ、床面からは緩やかに外傾して立ち上がる。燃焼部は113×55cmを測り、底面はほぼ平坦である。火床面は、55×55cmの範囲に被熱した硬質面を確認した。両袖共に細長く付設され、東側袖は長さ116cm・幅13～22cm・最大高21cmを測り、西側袖は長さ106cm・幅10～16cm・最大高21cmを測るものであるが天井部は遺存しない。

出土遺物は、カマド周辺(特に東側に集中)に多く検出されたものである。遺物は総て床面直上で検出された土師器であり、器種には甕・小型甕・壺・坏などを見出すものである。甕(第101図-1)は、胴部中央やや上位に最大径をもち、頸部は「く」の字状に反外する。胴部外面はへら削り内面はナデ整形を施し、底部は藁木茎圧痕を有している。小型甕(第101図-2)は、肥厚する平底の底部と頸部は「く」の字状に反外し短かい口縁をもつ。胴部外面は雑な整形を施し、底部はへら削りによる。壺(第101図-3)は、やや丸味を帯びた底部はへら削りによるものである。坏はやや深いもので、平底に近い丸底を呈する(第101図-4)ものと、肥厚する丸底を呈する(第101図-5



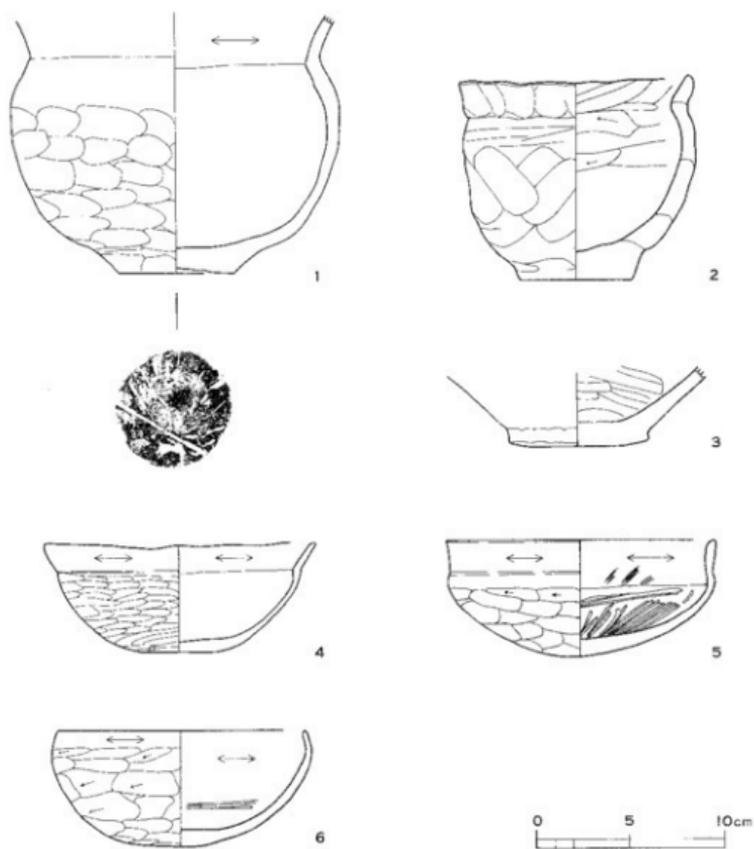
第99圖 S I - 7



第100図 S I - 7 竈

・6)ものがあり、外面はヘラ削り整形・内面はヘラ磨き整形を施している。また、内面に放射状の暗文を有するものもある。

- ① 黄白色粘土 (小砂利多量混入)
- ② 黒炭褐色土 (炭化材・焼土若干混入)
- ③ 焼土ブロック上
- ④ 暗褐色土 (粘性黄褐色土・焼土若干混入)
- ⑤ 暗黄褐色土 (パミス・スコリア多量混入)
- ⑥ 褐色土 (パミス・スコリア・カーボン若干混入)
- ⑦ 褐色土 (パミス・スコリア混入)
- ⑧ 暗褐色土 (黄褐色ブロック土混入)
- ⑨ 焼土ブロック上 (洗淨色粘土)
- ⑩ 明褐色土 (焼土多量混入)
- ⑪ 洗淨黄褐色土 (黄褐色ブロック土混入)
- ⑫ 巧黄褐色土 (焼土混入)
- ⑬ 茶黄褐色土 (軟弱粘土ブロック土混入)
- ⑭ 黄褐色土 (焼土多量混入)
- ⑮ 洗淨色土 (焼土・黄褐色粘土小ブロック多量混入)
- ⑯ 洗淨ブロック土 (明褐色粘土)
- ⑰ 砂に同じ (明褐色土)
- ⑱ 黒茶色土 (焼土多量混入)
- ⑲ 明褐色土 (白色粘土上ブロック・焼土多量混入)
- ⑳ 粘性明褐色土 (焼土多量混入)
- ㉑ ㉒に同じ (洗淨黄褐色土)



第101圖 S I - 7 山土遺物

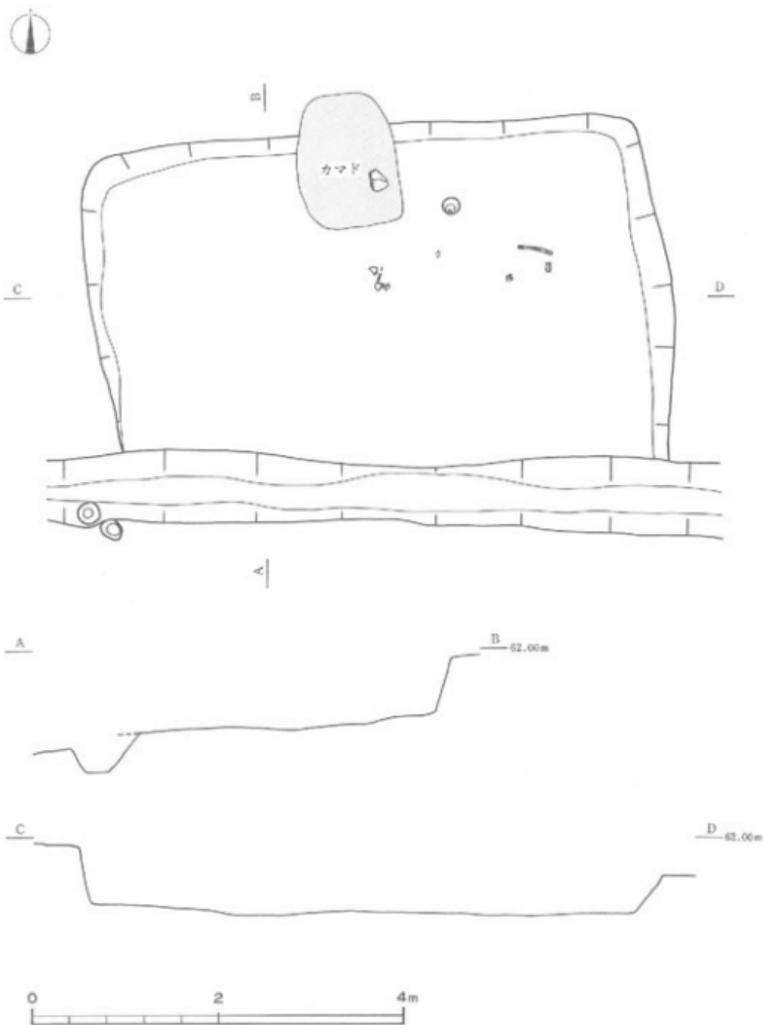
S I - 8 (第102図~104図) (図版83-1①②③)

S I - 8は、D IV - 3区(中グリッド)内の南西隅でIV号墳石室の西11m・標高61.00mに位置し、S I - 9の南西14mの地点で本調査区域内の検出遺構では最も低位に存在している。本住居跡は鶏舎跡地の基礎コンクリートにおいて確認されたが、南半部は後世の攪乱を受けて消滅する。主軸をN-5°-Wにとり、平面形は方形を呈するものと思われる。北壁長5.81m、南壁は攪乱によって遺存せず、西遺存壁長3.12m、東遺存壁長3.68mを測り、北壁の中央にカマドを有する。東壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は南側で32cm・北側で56cmを測る。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南側で4cm・北側で64cmを測る。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、東側で34cm・北側で65cm・中央付近で72cmを測る。

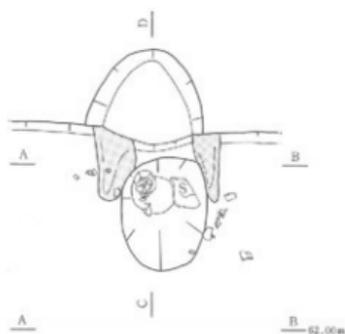
床面は南側にわずかに傾斜するがほぼ平坦であり、カマド周辺は比較的固くしまっている。柱穴は確認するに至らず、カマド周辺と北東域の床面には焼土・炭化材を検出した。

カマドは、北壁の中央で壁外に63cmの張り出しをもって構築されている。遺存状況は比較的良好であるが、天井部を崩落している。張り出し部分は、92×63cm・深さ54cmを測る平面双曲線形を呈し、位置的に煙道部として掘り凹められたものと思われる。更に、この煙道部は幅6~14cmの平坦部によって床面と画せられ、一段低い火床面に至る。袖は東西共に遺存し、東側袖は長さ54cm・幅8~22cm・高さ(最大)24cmを測り、西側袖は長さ58cm・幅17~30cm・高さ(最大)8cmを測る。共に南北に直線的に付設されている。火床面はこの両袖に挟まれる様に浅く掘り込まれ、大半は袖外の床面に遺存する。長径89×短径67cm・深さ10cmを測り、平面楕円形状を呈する。カマド内には、一辺25×17cm・厚さ2~3cmを測る平石と坏・壺などを確認した。平石はカマド構築に使用されたものと思われる。

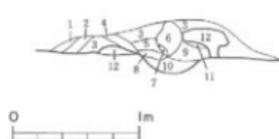
出土遺物は、総てカマド周辺から検出された土師器である。器種には小型甕・壺・小型壺・甎・坏などである。小型甕(第104図-1・4・7)は、平底の底部と丸味をもつ胴部そしてわずかに外傾する口縁部をもつ。胴部外面はヘラ削り・ナデ整形を施すが磨滅するものが多い。内面はナデ整形で底部はヘラ削り成形である。壺(第104図-3)は、丸底の底部にヘラ調整を施して平底気味にしている。小型壺(第104図-2)は、胴部の断片であるが全体的に薄手で内面は指頭ナデ整形・外面は二次焼成による磨滅が著しい。甎(第104図-5)は、胴部は「ラッパ」状に開き底部に円孔を穿つ単孔式である。内面はナデ整形・外面はヘラ削り整形を施している。坏(第104図-6)は、比較的浅く肥厚する丸底を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。



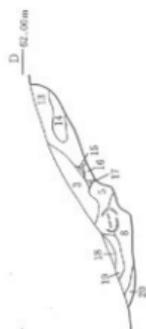
第102図 S I - 8



A B D
B 62.00m



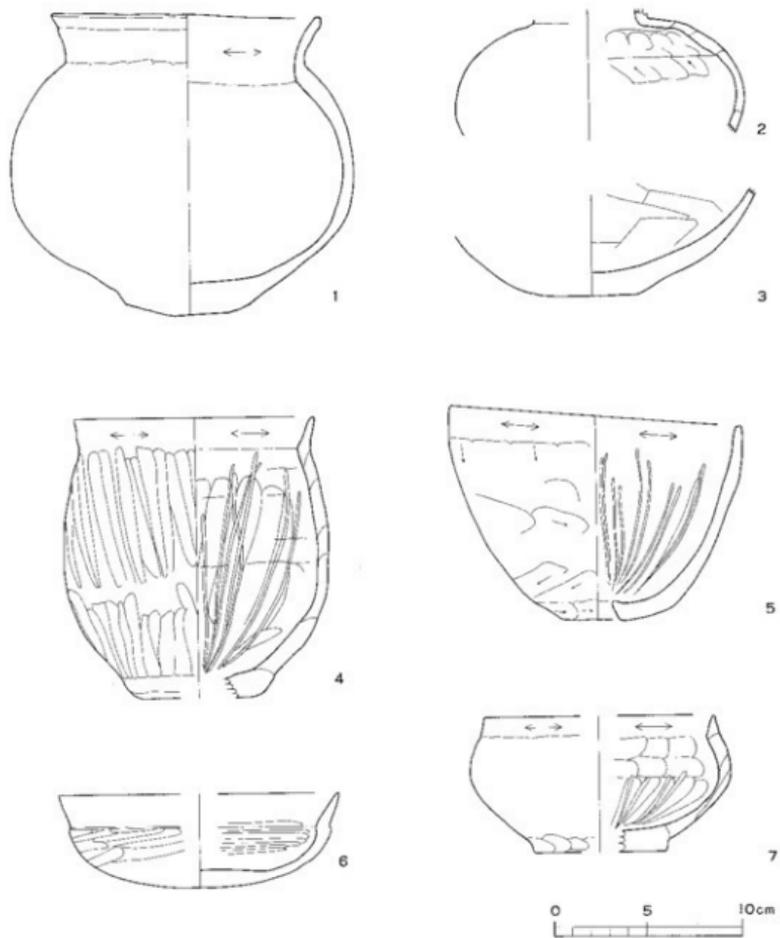
C A
0 1m



D 62.00m B

- ① 暗褐色土
- ② 黄褐色土
- ③ 黑褐色土 (イビス・スコリア・カーボン混入)
- ④ 暗褐色土 (燧土粒・白色粘土粒子多量混入)
- ⑤ 暗褐色土 (燧土若干混入)
- ⑥ 乳白色粘土ブロック土
- ⑦ 被熱アロク土 (塊層色)
- ⑧ 淡褐色土 (燧土多量混入)
- ⑨ 被熱ブロック土
- ⑩ 淡黄褐色土 (炭化材混入)
- ⑪ 淡白色粘土
- ⑫ 乳白色粘土
- ⑬ 茶褐色土 (スコリア・カーボン若干混入)
- ⑭ 暗黄褐色土 (黄褐色ブロック混入)
- ⑮ 暗褐色土 (燧土多量混入)
- ⑯ 燧土ブロック土
- ⑰ 黄褐色小ブロック土
- ⑱ 淡黄褐色土 (砂質)
- ⑲ 乳白色粘土
- ⑳ 被熱土 (明赤褐色)

第103図 S I - 8 電



第104圖 S I - 8 出土遺物

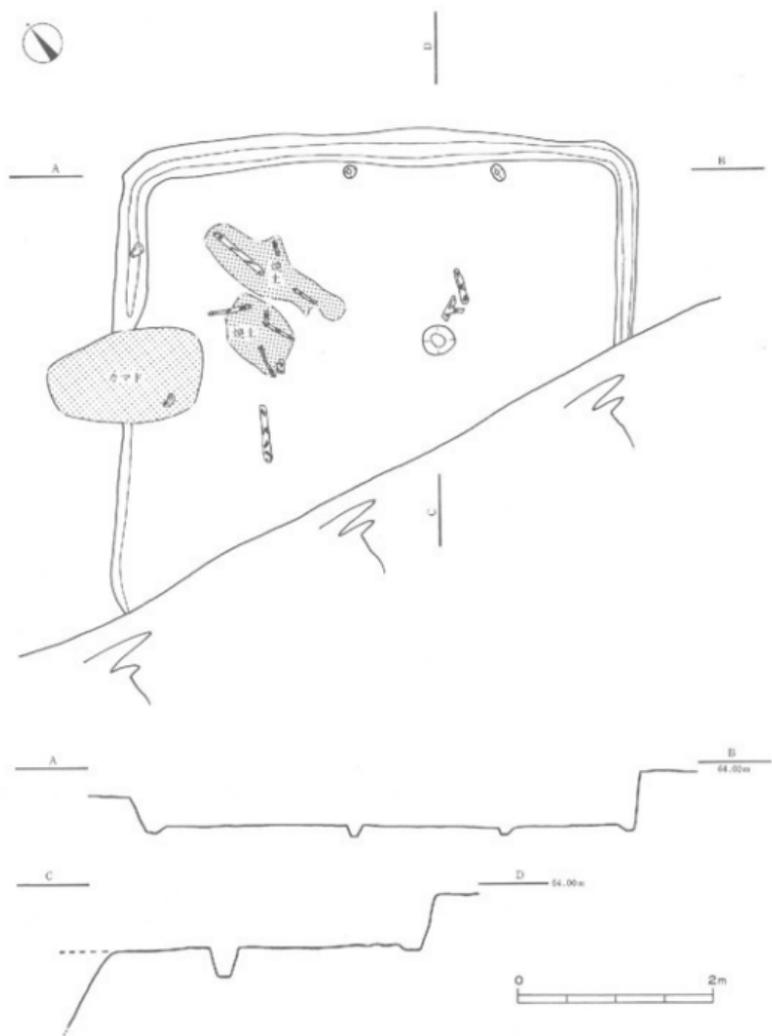
S I - 9 (第105図～107図) [図版83-1④⑤]

S I - 9は、DIV - 3区(中グリッド)内でS I - 7の西1.5mに近接し、標高63.00mに位置する。本住居跡は南13mにVI号墳石室、南西14mにS I - 8、北西14mに中世墳墓を控え、No.22地点内に検出された多くの住居跡とは、カマド位置を約90°西に偏するなど様相を異にしている。S I - 7と並存する本住居跡は、その南半城を鶏舎造営時の道路敷設によって削土され消滅している。北半城はS I - 7と共に鶏舎跡地の南側テラス範囲に遺存するもので、主軸をN-46°-Wにとり、平面形は方形に近い長方形を呈するものである。北壁長5.30m、南壁は消滅しており、西壁長4.74m、東遺存壁長2.01mを測り、西壁のほぼ中央にカマドを有する。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は61cmを測る。西壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は南側で34cm・北側で37cmを測る。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東側で60cm・中央で55cm・西側で39cmを測る。

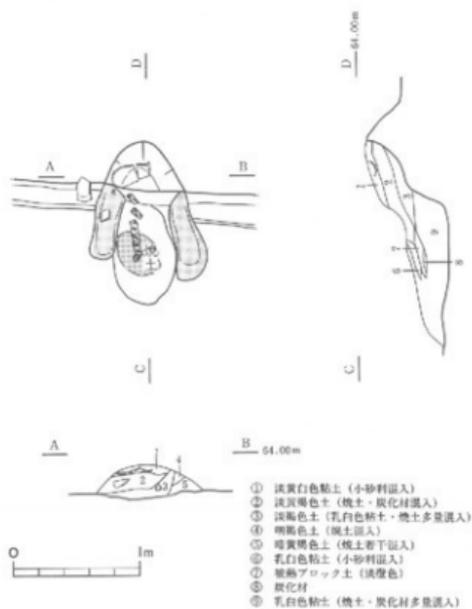
床面は南側にわずかに傾斜するがほぼ平坦であり、カマド周辺及び中央部の床は比較的固くしまっている。本住居跡には、更に周溝を廻らせている事が確認され、特に西壁カマドの北方から北壁→東壁に沿って明確に検出された。周溝は、東壁際では幅8～12cm・深さ6～8cm、北壁際では幅9～28cm・深さ4～7cm、西壁北方では幅22～25cm・深さ4～5cmを測る。また、床面上には3基のPitを検出し、北壁際やや東寄りに径18×12cm・深さ7cm、北壁中央付近に径14×12cm・深さ11cmを測り、床面中央やや東寄りに径32×30cm・深さ31cmを測るものであるが、その配置より柱穴とは考え難いものである。更に、床面にはほぼ全域に亘って焼土及び炭化材を検出した。中でも、カマド周囲と床面中央には約7cmを測る焼土の堆積と炭化した家屋材を確認している。

カマドは、西壁の中央で壁外に39cmの張り出しをもって構築されている。壁外の張り出しは煙道と考えられるもので、36×64cmの平面双曲線形に掘り込まれ、床面とは約30cmの傾斜する段差面をもっている。燃焼部は79×49cm・深さ5cmを測る浅い凹みをもち、火床面は40×29cmの範囲で被熱した硬質面を確認している。両袖は、壁に付設されて緩やかに「八」の字状に開いている。北側袖は長さ70cm・幅15～24cm・高さ(最大)13cmを測り、南側袖は長さ59cm・幅20～21cm・高さ(最大)18cmを測るものであるが、天井部は遺存しない。

出土遺物は、カマド内及び周溝内より検出された土師器と支脚である。器種は鉢と甗であり、鉢(第107図-1)は、平底の底部と「ラッパ」状に開く胴部をもつ。甗(第107図-2)は、平底の底部と「ラッパ」状に開く胴部をもち底部に約3cmの円孔を穿つ単孔式の甗である。支脚(第107図-3)は、カマド北方の周溝内より出土したもので、形状は截頭円錐体を呈する。

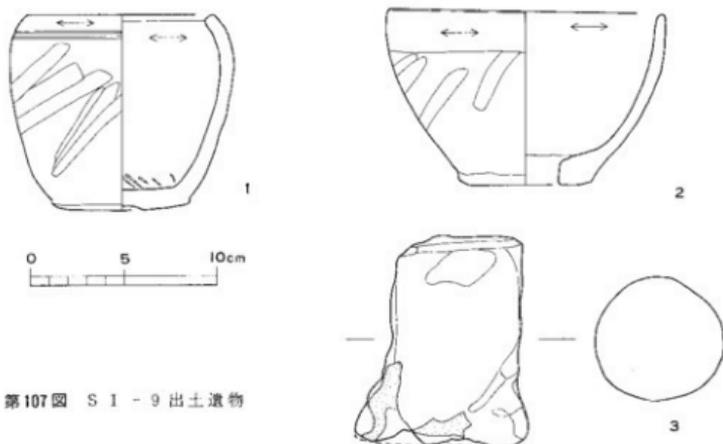


第105圖 S I - 9



- ① 淡黄白色粘土 (小砂粒混入)
- ② 淡黄褐色土 (焼土・炭化材混入)
- ③ 淡褐色土 (乳白色粘土・焼土多量混入)
- ④ 褐色土 (焼土混入)
- ⑤ 暗黄褐色土 (焼土若干混入)
- ⑥ 乳白色粘土 (小砂粒混入)
- ⑦ 焼締アロク土 (淡褐色)
- ⑧ 炭化材
- ⑨ 乳白色粘土 (焼土・炭化材多量混入)

第106図 S I - 9 甗



第107図 S1-9出土遺物

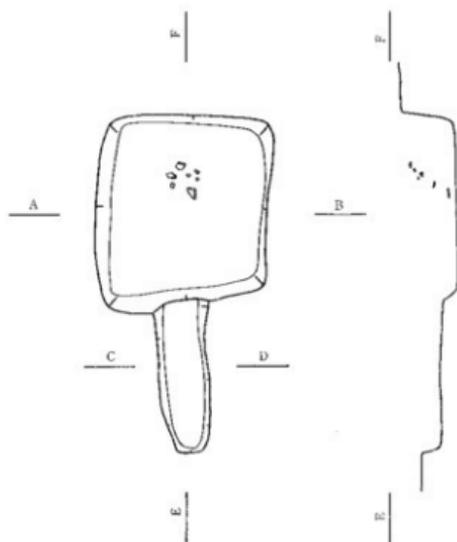
SK-1 (第108図)

SK-1は、DIV-3区(中グリッド)内でS1-9の北西3.1mに位置し、更に北23mでIV号墳石室、北西9mで中世墳墓に至る。遺構は、鶏舎跡地の基礎コンクリート下に確認され、標高64.00m上に構築されている。

平面形は、主体部を方形として細長い柄状の長楕円形を付設するものである。主軸をN-20°-Eにとり、主体部は北壁長1.52m、南壁長1.54m、西壁長1.82m、東壁長1.60mを測り、付設部は最大長1.50m・幅0.32~0.52m・深さ約20cmを測る。主体部の壁は、北壁においてはほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東側で50cm・西側で48cmを測る。南壁は直線的に外傾して立ち上がり、壁高は東側で43cm・西側で45cm・中央の付設部で14cmを測る。西壁は直線的に急に外傾して立ち上がり、壁高は南側で48cm・北側で48cmを測る。東壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は南側で45cm・北側で49cmを測る。

底面形は、平面形とほぼ同一にしており、主体部で方形・付設部で長楕円形を呈する。主体部は北辺長1.61m、南辺長1.41m、西辺長1.66m、東辺長1.36mを測り、付設部は最大長1.42m・幅0.21~0.37mを測るものである。

床面は、主体部・付設部共に平坦であり、主軸の断面形状は火熨斗形を呈する。床面のほぼ中央には、径20cmの範囲で少量の炭化材を検出した。また、覆土層中に土師質土器片を検出したが、計測するに至らないもので、壺もしくは甕の断片と考えられる。



第108圖 S K - 1

S D - 1 (第5図, 第8図, 第110図~112図) [図版32]

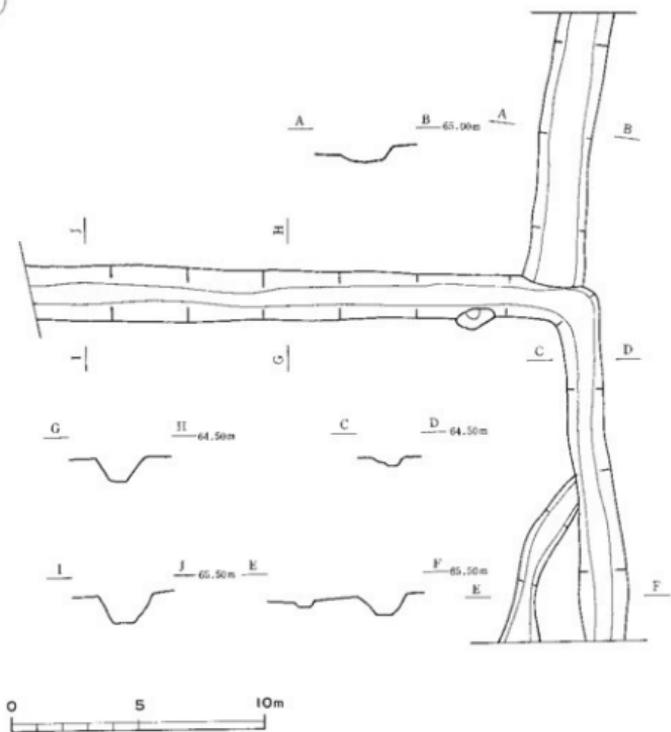
SD-1は、CIV-14・15・16区(中グリッド)内で、I号墳周溝の南辺とII号墳周溝の北辺を削土している。遺構は南面する丘陵斜面の中腹で、西側の小支谷に落ち込む様に構築されているが全容は未詳である。また、鶏舎造営時に部分的に削平されてはいるものの、特に基底面を良好に遺存する事により判断できるものである。遺構の東端は標高70.00m上に、西端は標高63.00m上に掘り込まれ、遺存長約87mを測り標高差約7mをもって西へ傾斜走向する大溝である。東端域は上幅0.75m・基底幅0.58m・深さ0.12mを測り、断面逆台形「 \neg 」状を呈する。中央部でIII号墳周溝の南側では上幅2.76m・基底幅1.28m・深さ1.26mを測り、断面逆台形「 \neg 」状を呈する。西端域は上幅0.98m・基底幅0.21m・深さ0.50mを測り、断面は「V」字状に近いものとなる。

出土遺物は、総て覆土層中より検出されたもので、縄文土器・弥生土器・土師器(坏)・須恵器(坏・高台付坏・甕)・内黒土師質土器(高台付坏)・土師質土器(燈明皿)などを出土した。

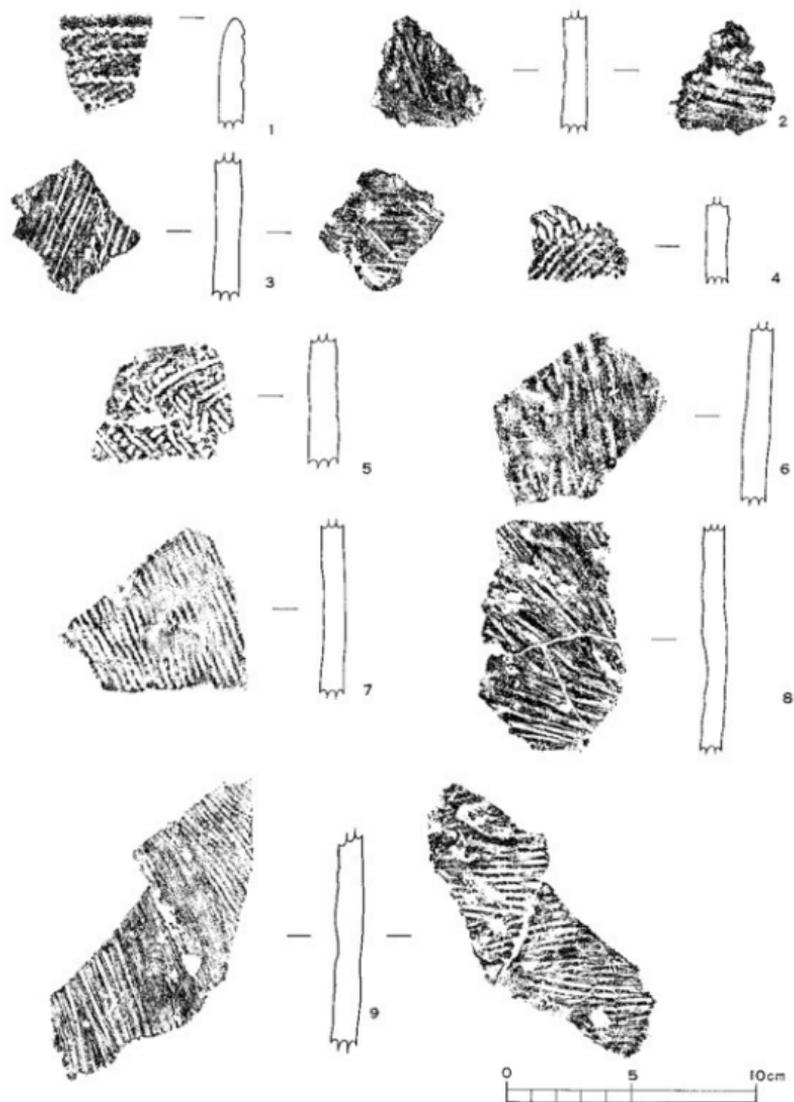
S D - 2 (第109図, 第121図③~⑦)

SD-2は、DIV-3・4・7・8区(中グリッド)に跨がり、北東端でSI-3と重複し、南端ではSI-6とはほぼ平行する。遺構はSD-1の南約90mに位置し、南面する丘陵斜面の裾部付近で標高64.00~63.00m上に構築されている。北東域と北西域は、鶏舎造営時に削土され消滅するが、南域は更に丘陵斜面に向けて落ち込むものである。SI-3を削土する北位の溝は、ほぼ直線的に北西から南西に走向し、遺存長10.9m・上幅2.0~2.4m・基底幅1.1~1.5m・深さ0.7~1.4mを測り、標高差90cmをもって南位の溝のコーナーに接続する。同溝の基底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形「 \neg 」を呈する。南位の溝はその北西コーナーで北位の溝と接するが、このコーナーより西と南へはほぼ直角に分かれて走向する。更に、南に走向する溝は中央西側で南西に浅い溝と接している。西に走向する溝は、コーナーよりの遺存長21.3m・上幅1.6~2.2m・基底幅0.5~0.82m・深さ0.4~1.2mを測り、基底面の標高差はほとんどなく、ほぼ平坦な基底面を呈している。断面形状はやや深い逆台形「 \neg 」を呈する。南に走向する溝は、コーナーよりの遺存長13.2m・上幅1.45~2.0m・基底幅0.55~0.85m・深さ0.38~0.9mを測り、基底面の標高差は約40cmをもって更に南の斜面に落ち込んでいる。基底面はほぼ平坦で、断面形状は南側でやや深い逆台形「 \neg 」を呈する。この溝の中央西側からは、更に南西方向に浅い溝が走向する。遺存高6.5m・上幅0.79~1.55m・基底幅0.3~0.97m・深さ0.23~0.3mを測り、基底面の標高差は約20cmをもって南に落ち込む。基底面はほぼ平坦で、断面形状は浅い逆台形「 \neg 」を呈する。

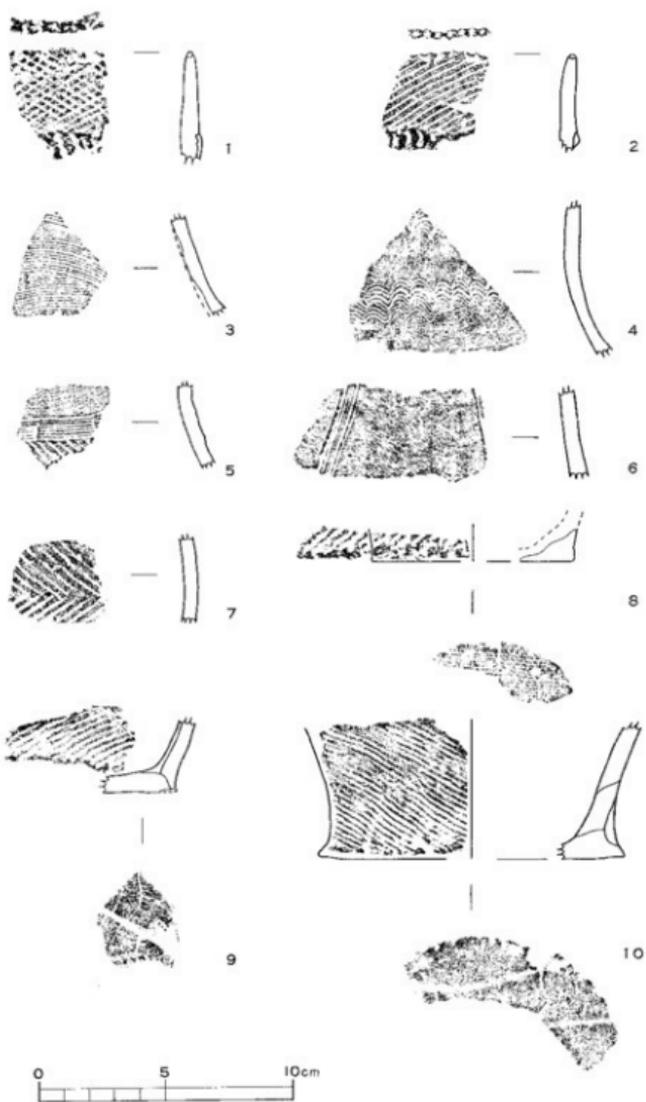
出土遺物は、北西コーナーより南に走向する溝覆土層中に多く検出され、土師器(坏・甕)・須恵器(平板)・土師質土器(燈明皿)などを出土している。



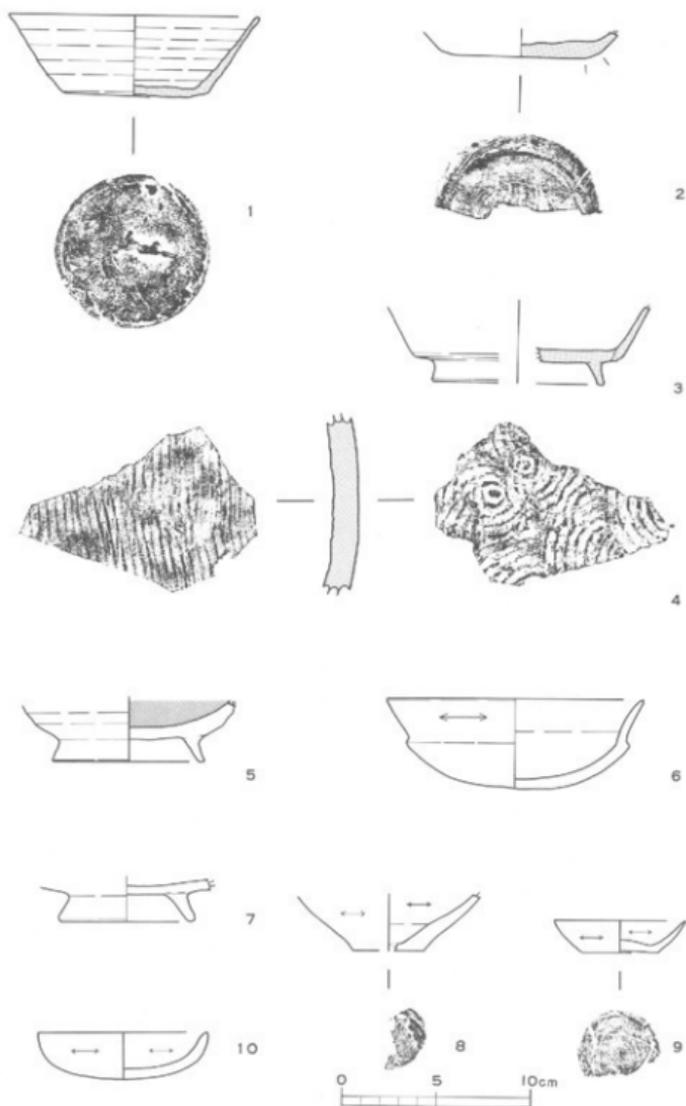
第109圖 S D - 2



第110图 I号埧周溝・SD-1覆土中出土遺物(1)



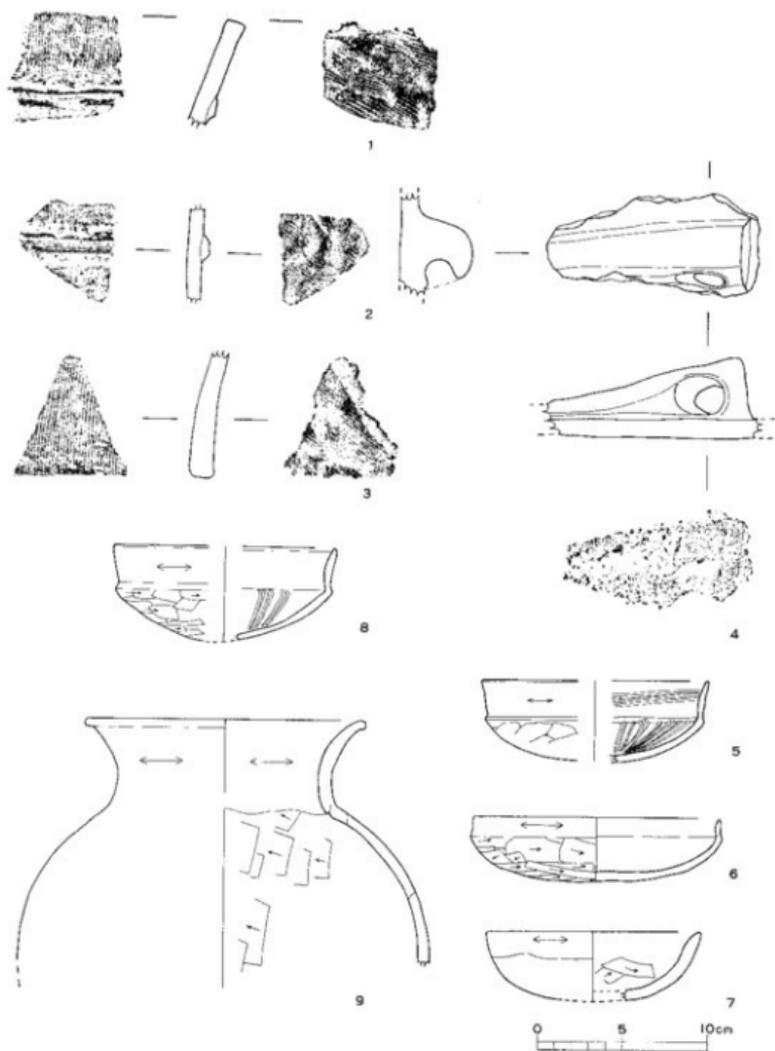
第111图 I号埧周溝・S D-1 甕上中出土遺物(2)



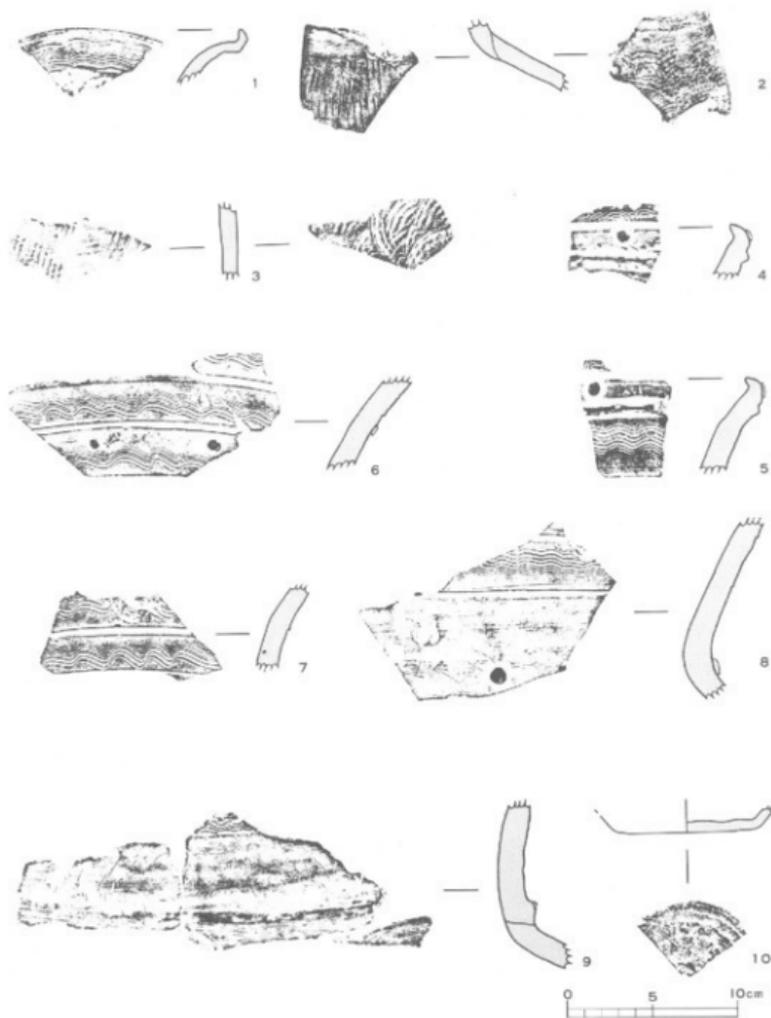
第112图 I号墳周溝・S D-1 覆土中出土遺物(3)



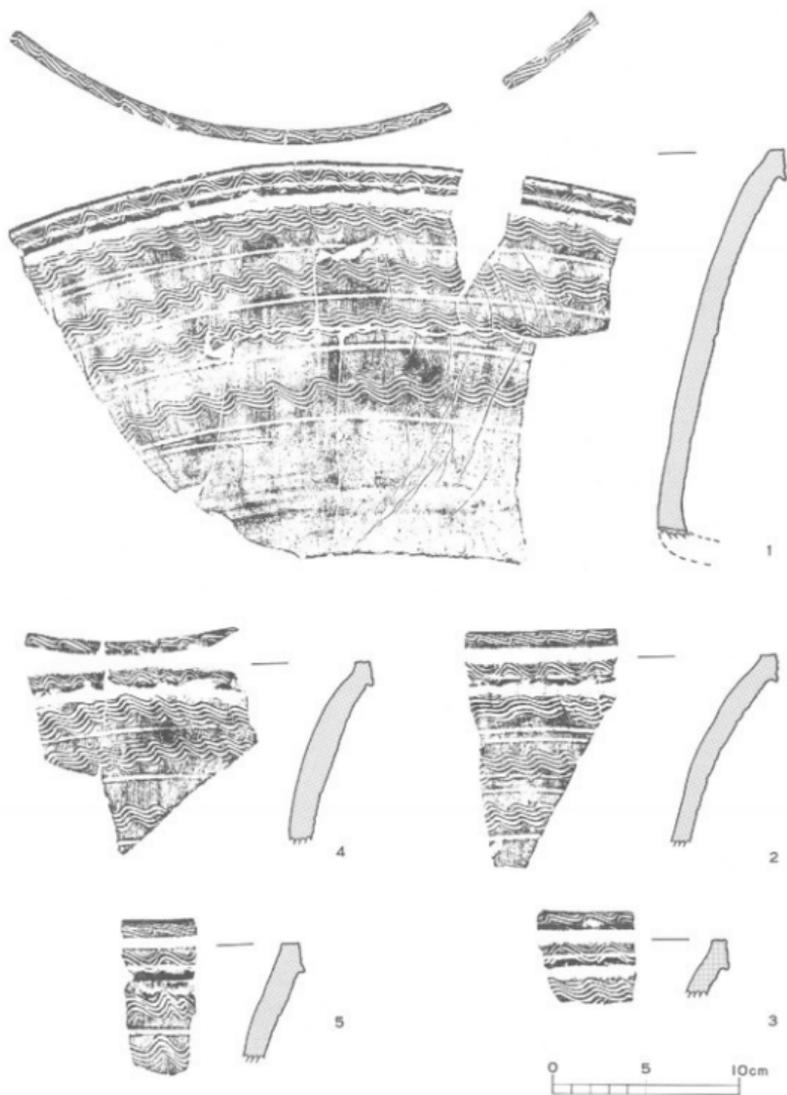
第113圖 Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(1)



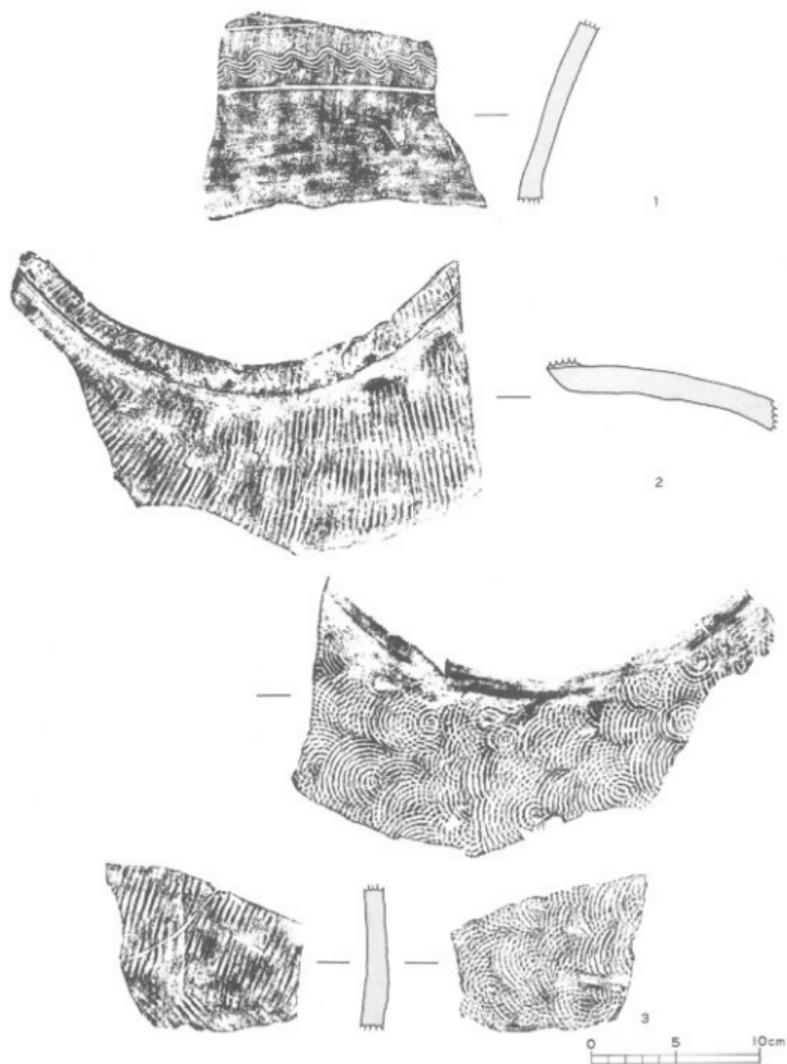
第114圖 Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(2)



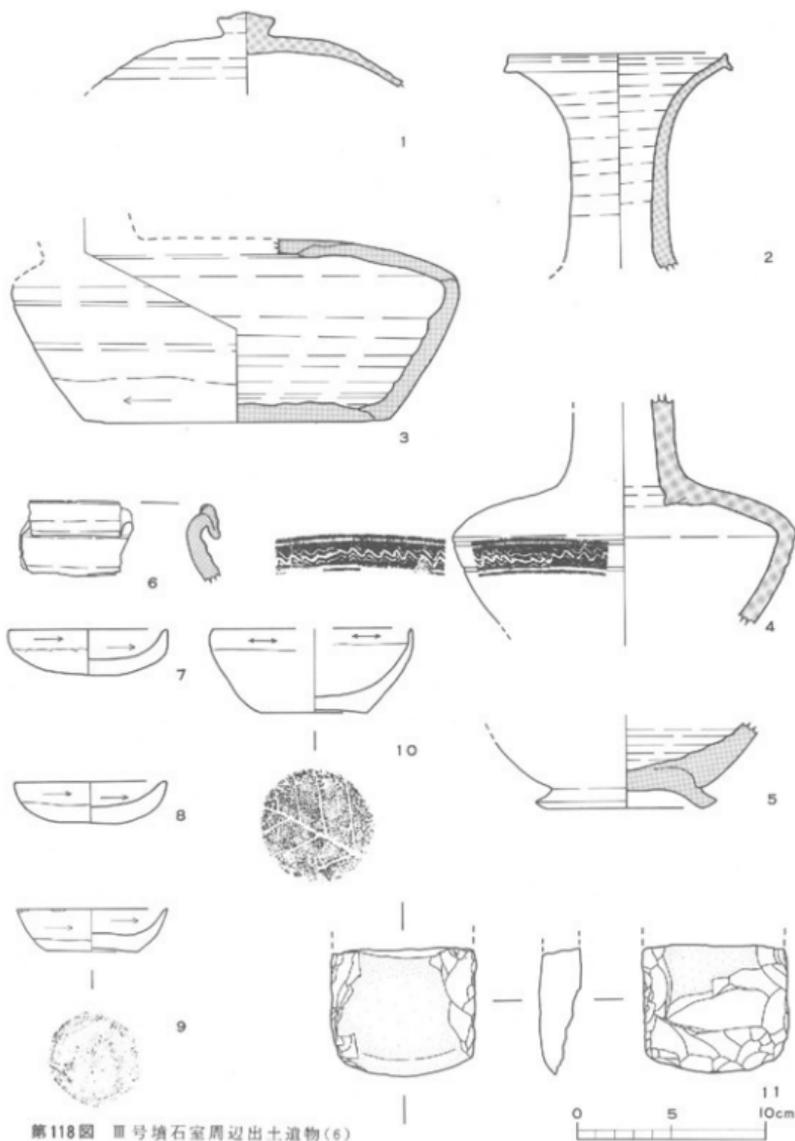
第115图 Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(3)



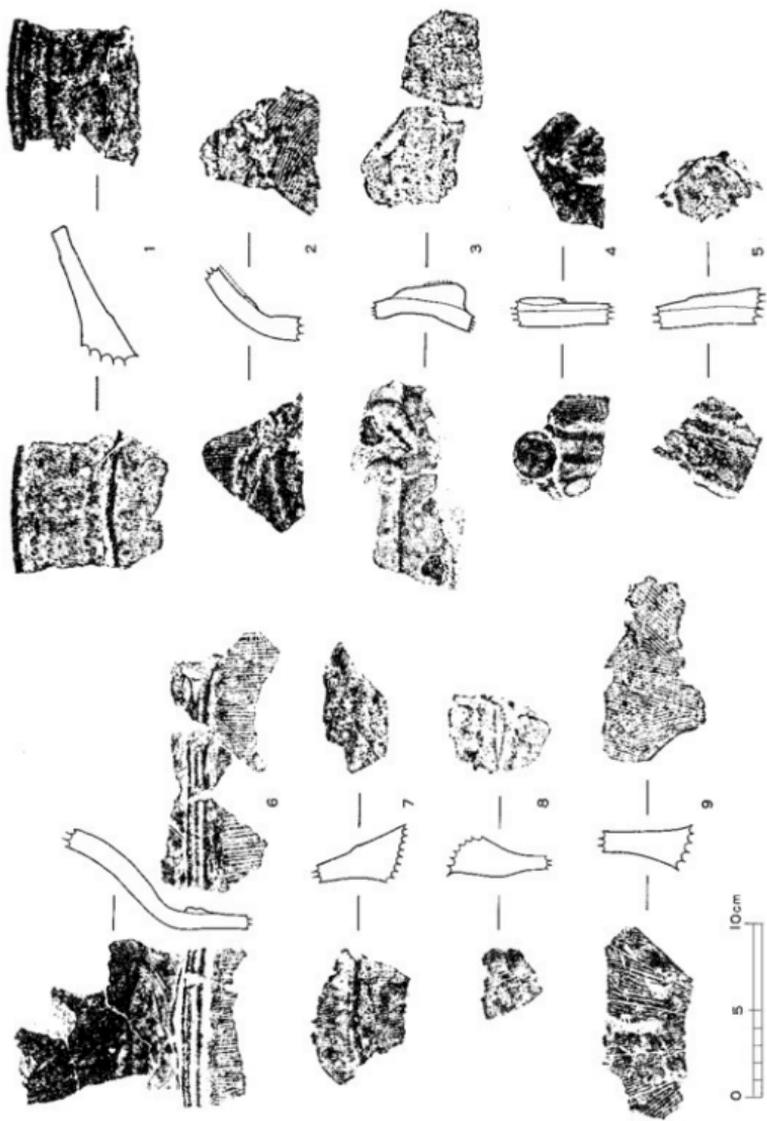
第116圖 Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(4)



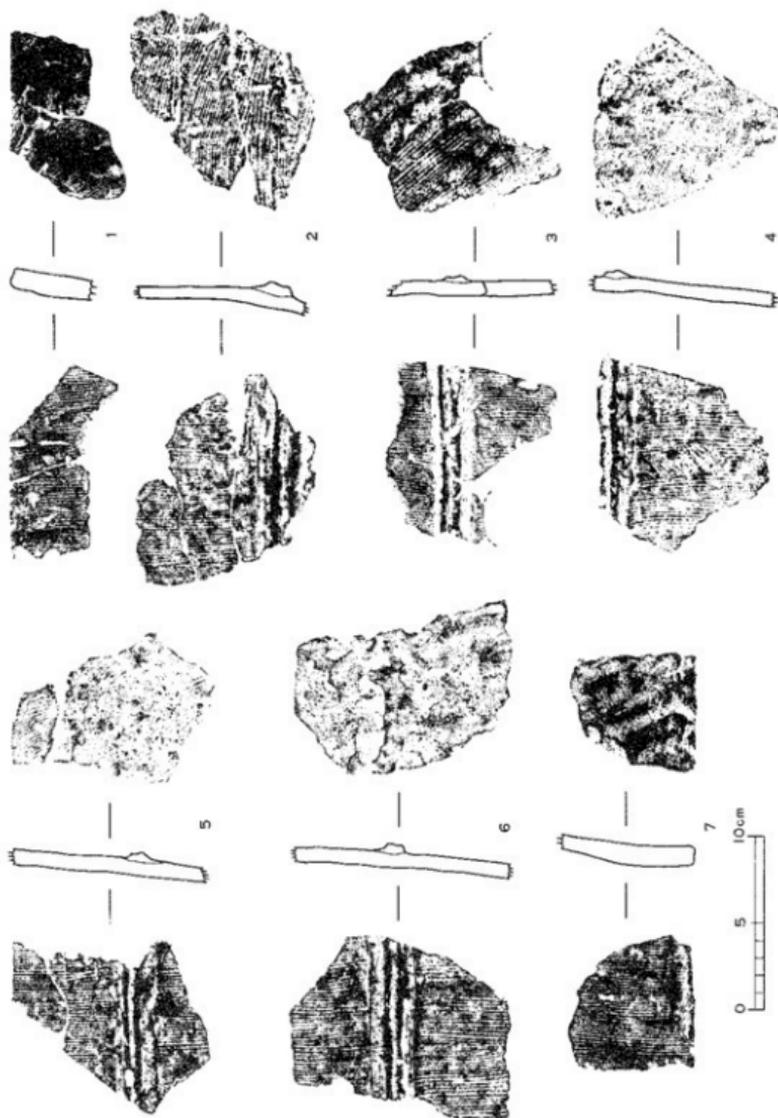
第117图 Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(5)



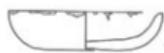
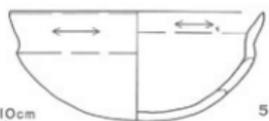
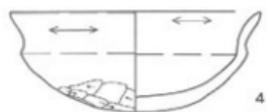
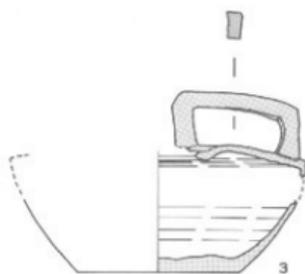
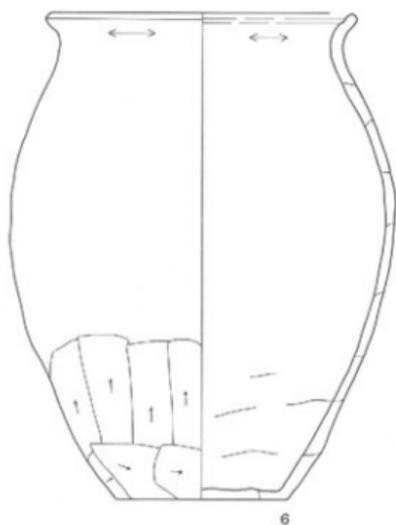
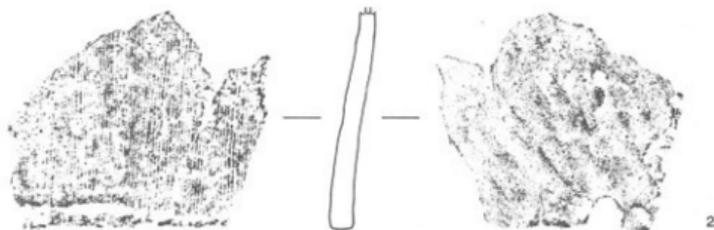
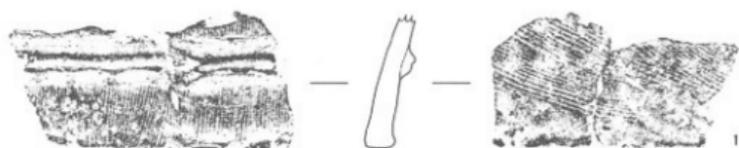
第118圖 Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(6)



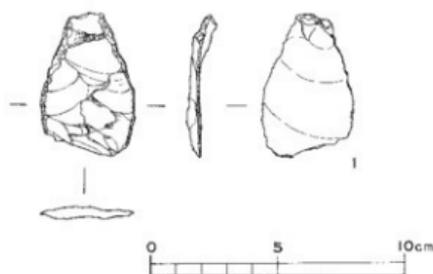
第119図 D IV-4 グリッド出土遺物(1)



第120図 D IV-4 グリッド出土遺物(2)



第121図 SD-2・DIV-4グリッド出土遺物(3)



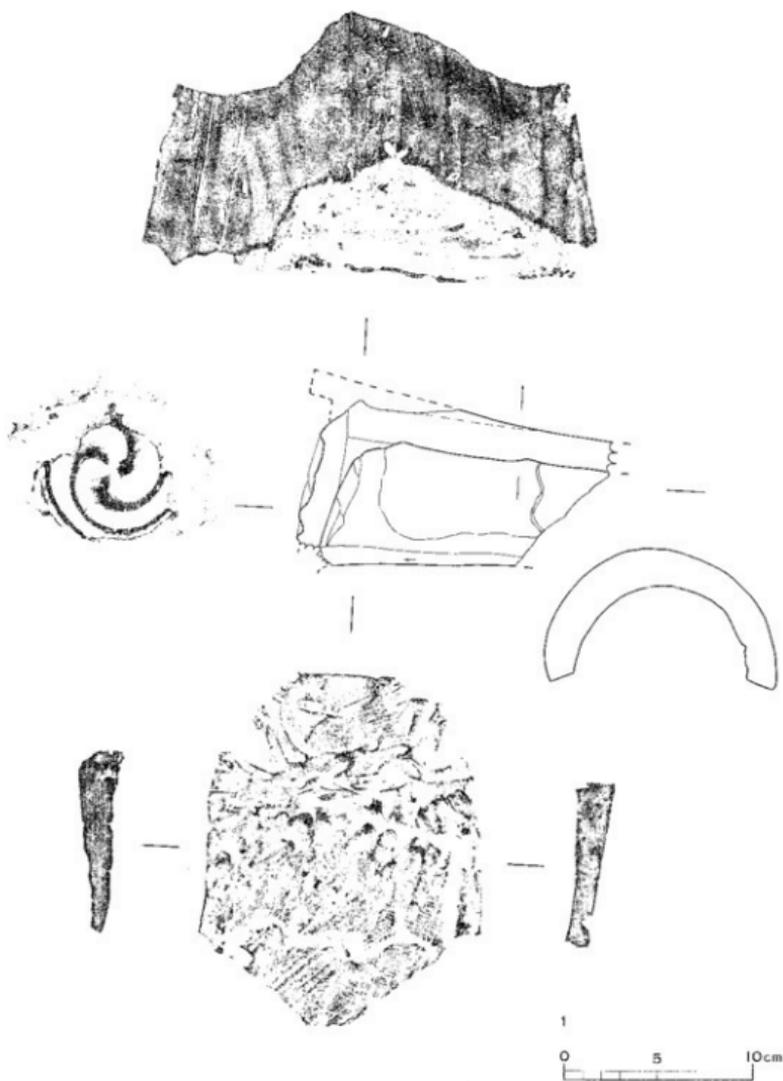
第122図 DV-5グリッド出土遺物

Ⅲ号墳石室周辺出土遺物(第113～118図)は、弥生土器・埴輪(円筒・形象)・土師器(坏・甕)・須恵器(大甕・平瓶・壺)・東海系大甕片・土師質坏形土器・土師質燈明皿などがⅢ号墳石室内覆土・同墳石室南側覆土・同墳周溝覆土中から検出されたものである。中でも、須恵器・大甕(第115図-1～9, 第116図, 第117図-1～3)はその口縁部に特徴をもつもので、直立する口縁部と口唇部に至るまでクシ描き波状文を施したり、珠文を配したりするものである。その胴部は、内面に同心円文叩き・外面に平行叩きを施している。須恵器・大型平瓶(第118図-3)や壺(第118図-2・4・5)は石室南側の客土層下より検出したもので、特に壺(第118図-4)には強く張り出した肩部にクシ描き波状文を巡らすなどの特徴を有している。また、東海系大甕(第118図-6)や土師質燈明皿(第114図-7, 第118図-7・8・9)などは、Ⅲ号墳からIV号墳に跨がって確認された集石2(中世墓)と関連する遺物である。

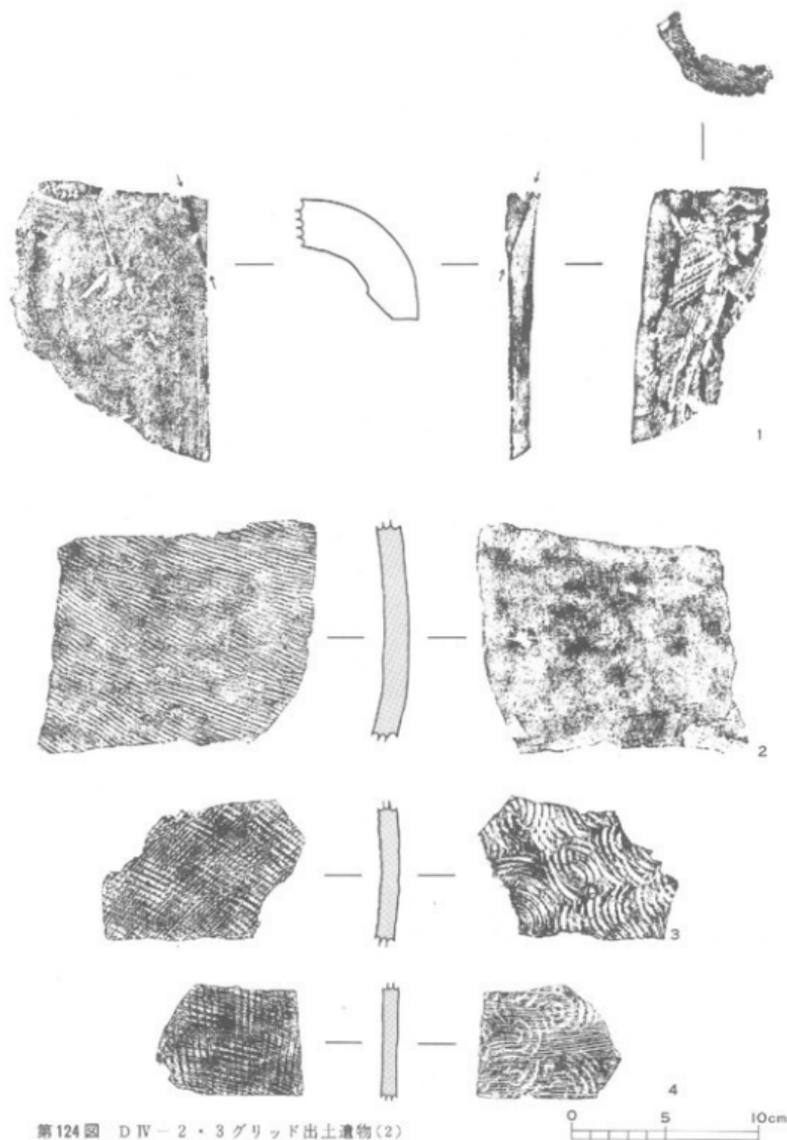
DIV-4グリッド出土遺物(第119図, 第120図, 第121図-2)は、形象・円筒埴輪を中心とするものであるが、そのほとんどが造成時の客土(盛土)層中より検出されており、近接するⅦ号石棺・Ⅶ号墳と共にその関連遺構を明確にする事はできなかった。

スクレイパー(第122図-1)は、今調査時にDV-5(V号墳石室北方のローム上層面)グリッド北西城よりの表採資料である。当地域一帯には幾多の先土器遺跡が確認されており、このスクレイパーも同時期の刮片石器と思われる。

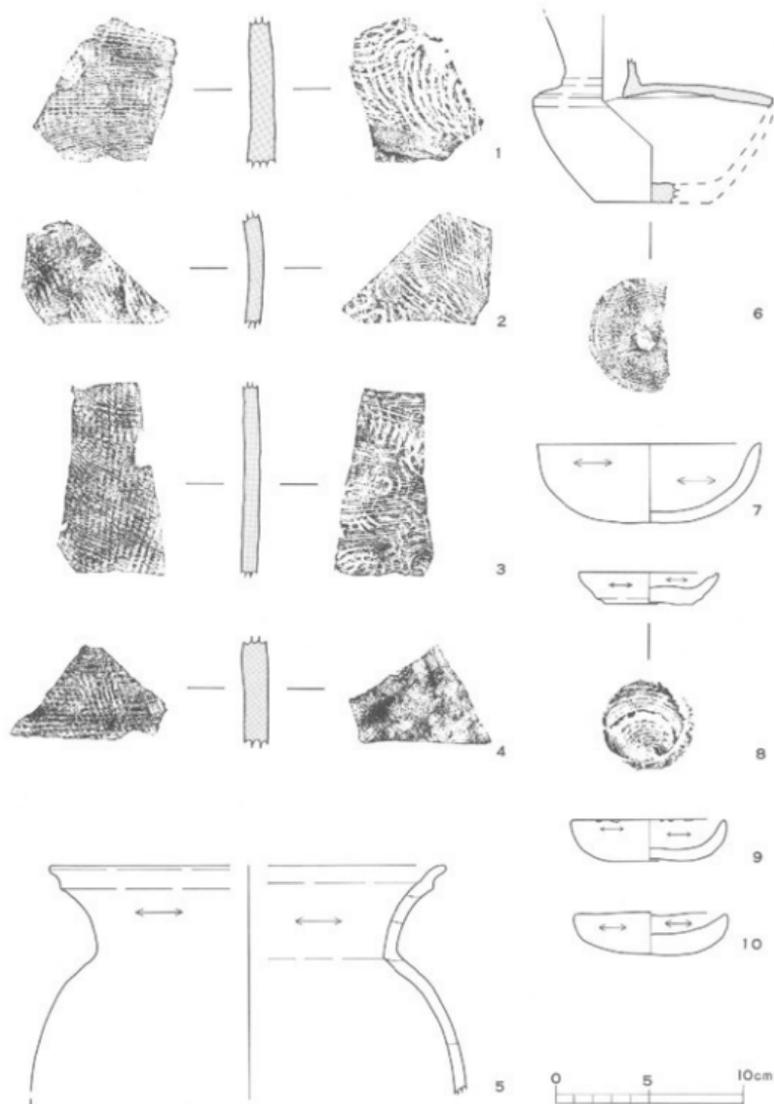
DIV-2・3グリッド出土遺物(第123図～125図)は、総てグリッドの南半部・最下段面からの出土である。瓦類は№23地点の中世瓦であり、土師質燈明皿は中世墓にも共通する関連資料である。



第123図 DW-2・3グリッド出土遺物(1)



第124圖 D IV-2・3 グリッド出土遺物(2)



第125図 D IV-2・3 グリッド出土遺物(3)

集 石 1 (第126図, 第130図, 第131図)

集石1は、I号墳石室の南東約3mの地点で、CIV-15-22区及び23区内にて検出された。東西約4.5m、南北約3.5mを測る範囲に、径10cm内外の円礫を主体として火葬骨・炭化材の集中地点も認められた。円礫は、扁平のものを主体とする川原石群であり、両区に跨って平面的に散乱するものであった。

遺構の状況は、円礫の散乱と火葬骨・炭化材がそれぞれ2箇所集中する地点を検出した。火葬骨集中地点は径20×10cm及び径20×20cmの範囲に少量の骨片が堆積し、炭化材は径20×15cm及び径30×25cmの範囲に薄く散布するものであった。更に、この集中地点の北側にL字形の小トレンチを設定し、下層状況の把握を行った。その結果、下層には自然堆積の暗褐色土層を確認しただけで、何らの遺構を伴うものではない事が判明した。それは、当地のI号墳墳丘上に造営された中世墓が、鶏舎造営時に削土されると共に散乱したものである。

出土遺物は、I号墳石室及び周溝上を造成した客上(盛土)層中から検出したもので、五輪塔(第130図, 第131図)の地輪1点・風空輪1点・水輪3点である。石質は総て凝灰岩製である。地輪は幅(一辺長)に対する高さの割合が約2/3となる重厚なもので、水輪は幅(直径)に対する高さの割合が3/4からほぼ同一に近い均整のとれたものである。空輪・風輪は一石から成り、風輪は扁平な宝珠形を呈している。また、これらの五輪塔には種子・装飾などの陰刻はなされていない。

集石1の造営時期は、その状況や五輪塔の形態などにより次項に述べる集石2・中世墓地などと同時期に比定される可きものである。

CN-15-23



CN-15-33



第126図 集石1平面図

集 石 2 (第127図～132図) [図版28・29]

集石2は、DIV-3グリッドに確認されたⅢ号墳石室とIV号墳石室の間で、両石室に重複する形で検出された。遺構は、東西約15m、南北約20mの範囲に径10～20cmの円礫が集中し、五輪塔の散乱や炭化材を伴う火葬骨の露呈が随所に確認できた。しかし、遺構自体が旧形をとどめているものは皆無であった。それは、CIV-15-84区～85区・CIV-15-93区～96区・DIV-3-4区～6区・DIV-3-13区～16区に亘る散乱状況によって、鶏舎造成時に大規模な削平を受けた事を物語っており、五輪塔の出土状況からも各個体が無秩序に散逸している事よりして明確である。

遺構の状況は、集石・五輪塔・火葬骨が雑然として検出されているが、特に火葬骨の検出範囲はまとまりが見られる様である。CIV-15-93区～94区のほぼ中間に検出した火葬骨は、東西3.5m、南北1.9mの平面長楕円形状に広く散布する形をとる。火葬骨の堆積は、最大で約5cm程度であり、確固たる掘り方をもたず地面に浅い凹みを掘り直接埋納した様である。DIV-3-6区の間やや西寄りに検出した火葬骨は、東西1.0m、南北0.5mの平面長楕円形状で散布するが、川原石と混在し堆積も最大で約2～3cmを測るだけであった。他に、DIV-3-15区から16区にかけて検出した火葬骨は、ただ広範囲に亘って散布している状況であり、埋納された状態をとるものではなく、造成時に削平されたものと思われる。

集石の検出状況は、Ⅲ号墳西側周溝の覆土上層中やIV号墳東側周溝の覆土上層中より検出している事を考え合わせれば、向古墳の墳丘斜面から裾部にかけて畧々と造営されていたことを想定できる。また、これらの集石の検出面を除去し、ローム面までの掘り下げを行った所、平石による石組遺構及び蔵骨器を検出するに至った。

石組遺構(第128図)は、集石下層のDIV-3-15区・西～北西にかけて検出したもので、最大100×50cm・厚さ20cmを測る長方形の平石と30～40×20～30cm・厚さ10～15cmを測るやや小型の平石を周囲に配し、隙間に径10～20cmを測る川原石を敷き詰め、全体形をほぼ長方形状に組む遺構である。長軸を南北にとり、全体規模は約2.0×1.5mを測る。出土遺物は、川原石中より土師質燈明皿1点を検出している。この遺構は、後述する中世墳墓の中央施設と同様の性格を持つものと思われる。

集石2の出土遺物は、主に集石範囲のほぼ全域に亘って検出されたもので、瓶子(占瀬戸)・甕(瀬戸)・広口壺(東海系)・内黒土師質土器(坏・高台付坏)・土師質燈明皿・五輪塔などである。蔵骨器として利用された東海系の広口壺(第132図-1)は、Ⅲ号墳西側周溝の外縁・周溝内覆土上層中より出土(第129図)し、DIV-3-5区のほぼ中央部の集石下層より検出されたものである。蔵骨器直上の集石は、径10cm内外の扁平な川原石を敷き詰め、蔵骨器は単独で埋納されていた。こ

の蔵骨器は、頸部から口縁部を打ち欠かれ、器内には多くの炭化材と火葬骨が納められていた。五輪塔(第130 図, 131 図)は、地輪 3 点・水輪 11 点・火輪 4 点・空・風輪 21 点を検出し、石質は総て凝灰岩製である。地輪は幅(一辺長)に対する高さの割合が $1/2 \sim 2/3$ 程度のやや重厚なもので、水輪は幅(直径)に対する高さの割合が $2/3 \sim 3/4$ と大きく、均整のとれたものから重厚で太鼓腹様の大型のものまで存するが、いずれも最大径を中位にとっている。火輪は幅(一辺長)に対する高さの割合は $1/2 \sim 2/3$ をとり、軒反りはゆるいものの背が高く重厚なものである。空輪・風輪は総て一石より成り、比較的バランスはとれている。しかし、風輪は宝珠形をとるものとやや扁平なものとが作られている。宝珠形の先端は、大型・小型の両者を持つが総て尖頭的である。水輪には浅い凹みを持つものと深い凹みをもつものがあるが、この凹みに対応する柄を持つ個体は遺存しない為、柄穴との断定はできない。また、これらの検出された五輪塔には、総てに種子・装飾の類は刻まれてはいない。



第127圖 集石2平面図



+DN-3-14



+3-16

+3-24

+3-25

+3-26



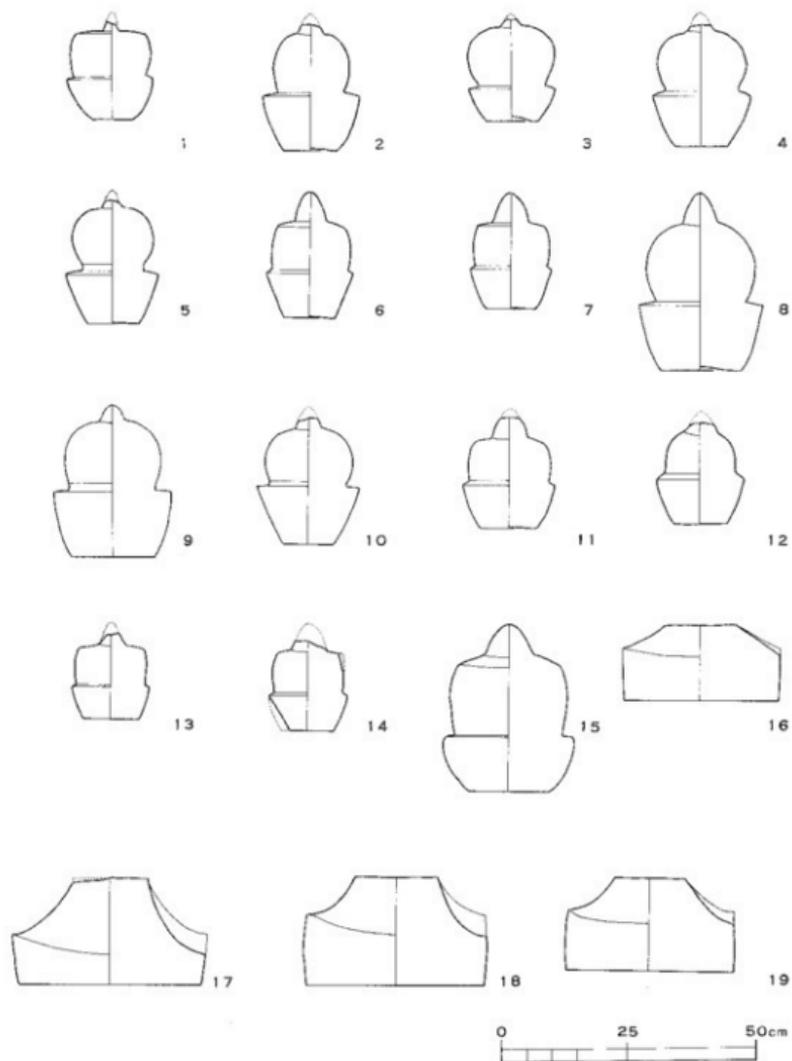
第128図 D IV-3-15グリッド基礎石組遺構

A for S

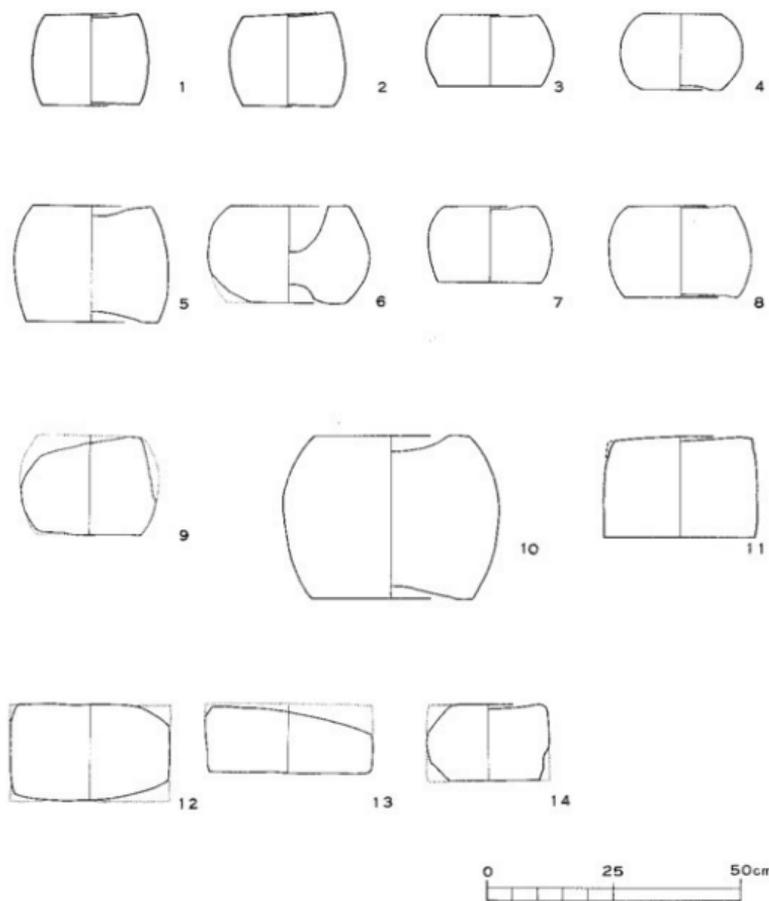
B for N
08.20m



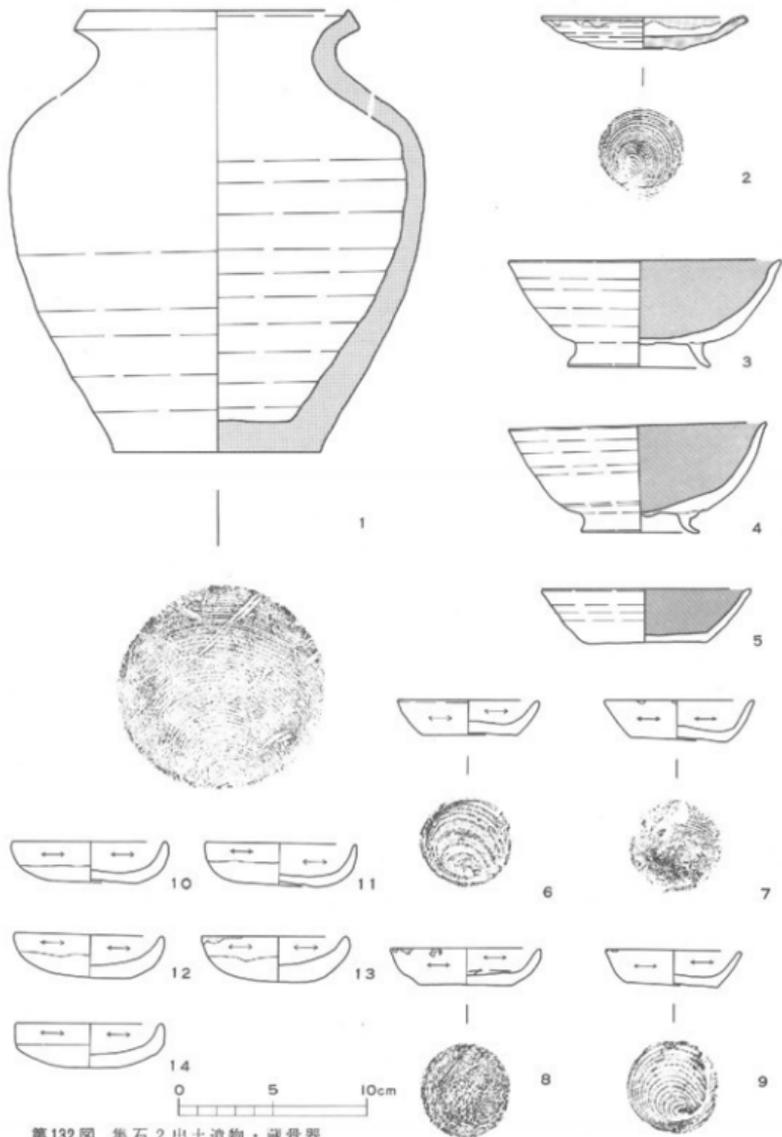
第129図 D IV-3-5グリッド内検出蔵骨器出土状況



第130圖 集石1・2出土五輪塔(1)



第131圖 集石1・2出土五輪塔(2)



第132圖 集石2出土遺物・藏骨器

中世墳墓 (第133図～136図) (図版30・31)

No 22地点の斜面下方や西寄りに存し、標高62.00mに造営された遺構である。集石2より南西に約20mの地点でDIV-2-40区～50区、DIV-3-31区～41区内において検出し、特殊な形態を遺存している。同地も亦、鶏舎造成時に削平を受け、地上施設(墳丘もしくは盛上部分)の旧形を窺えるものではなかった。

遺構の平面形状は方形を呈し、四囲を巡る周溝によって内・外に隔されるが、特に内郭に特殊遺構としての性格を秘めるものと思われる。全体の規模は、

	外郭距離	内郭距離	
東辺	8.1 m	6.0 m	
西辺	8.0 m	(6.2 m)	一部擾乱
南辺	8.2 m	(6.4 m)	一部擾乱
北辺	8.2 m	6.3 m	

を測り、ほぼ正方形に近い形態となっている。また、周溝幅・深さについて見れば、

	周溝幅	周溝基底幅	深さ
東側周溝	104～62 cm	58～36 cm	55～65 cm
西側周溝	100～92 cm	71～54 cm	60～30 cm
南側周溝	140～102 cm	94～76 cm	40～30 cm
北側周溝	128～76 cm	60～38 cm	60～40 cm

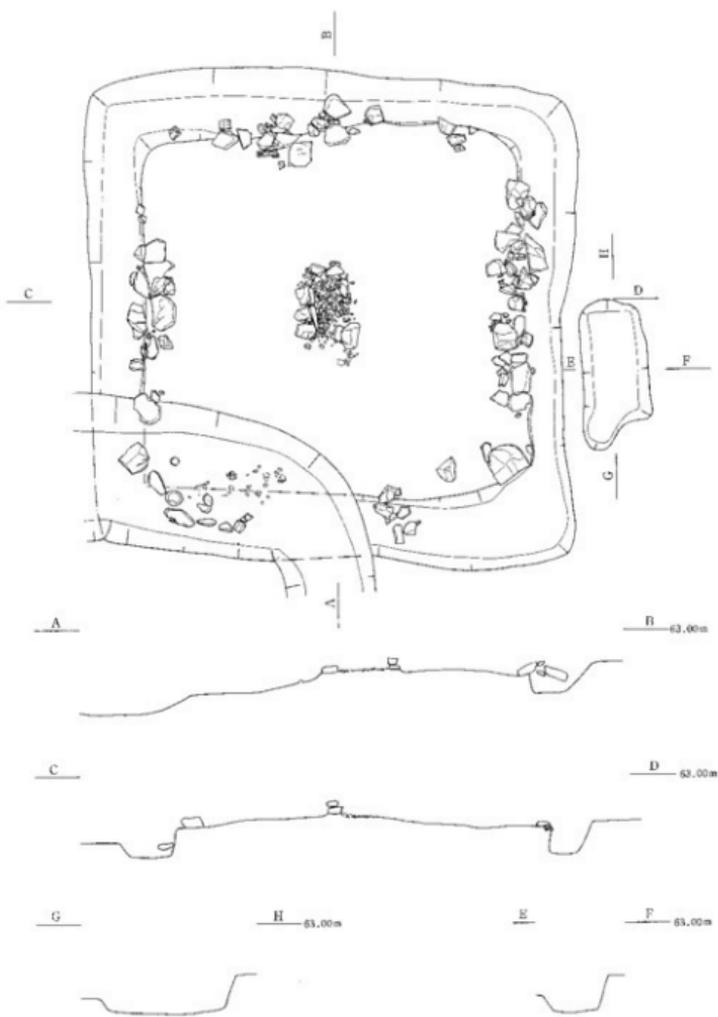
を測り、ほぼ同一の規模をもつものである。断面形状は逆台形(ハ)を呈するものであるが、特に内郭に対してはほぼ垂直に近く、外郭に対してはやや急に立ち上る様相となっている。ただし深さについては造成時の削平により一定ではないが、遺存箇所の最大・最小値によった。更に、内郭周囲には土留めと思われる外護列石(多くは平石状の礫石)を東・西・北辺に遺存し、南辺にもその残骸を見る事ができる。列石の多くは、径30×40×50～60cm・厚さ13～14×20～22cmの平石を用いており、やや小型の礫で隙間を満たす形となっている。

内郭のほぼ中央施設は、長軸を南北方向(N-18°-E)にとる石組遺構(中央施設)が遺存している。この中央施設は、長軸150×短軸114cmを測る平面長方形を呈しており、四囲を一辺30～40cm・厚さ10cm内外の礫石で形作り、径5cm内外の小砂利を敷き詰めた遺構である。遺存高は最大で22cmを測り、砂利敷きも薄く1～2列程度に詰めている。南辺及び西辺の一部は欠失しているが、旧形を窺えるものである。これらの遺構は、特に周溝においてはローム面まで掘り込まれ外護列石及び中央施設はローム直上面に構築されている。しかも、中央施設の下部には掘り込みなどの人為的造作は行われておらず、施設の基底部を形作っていたものである事が判明した。

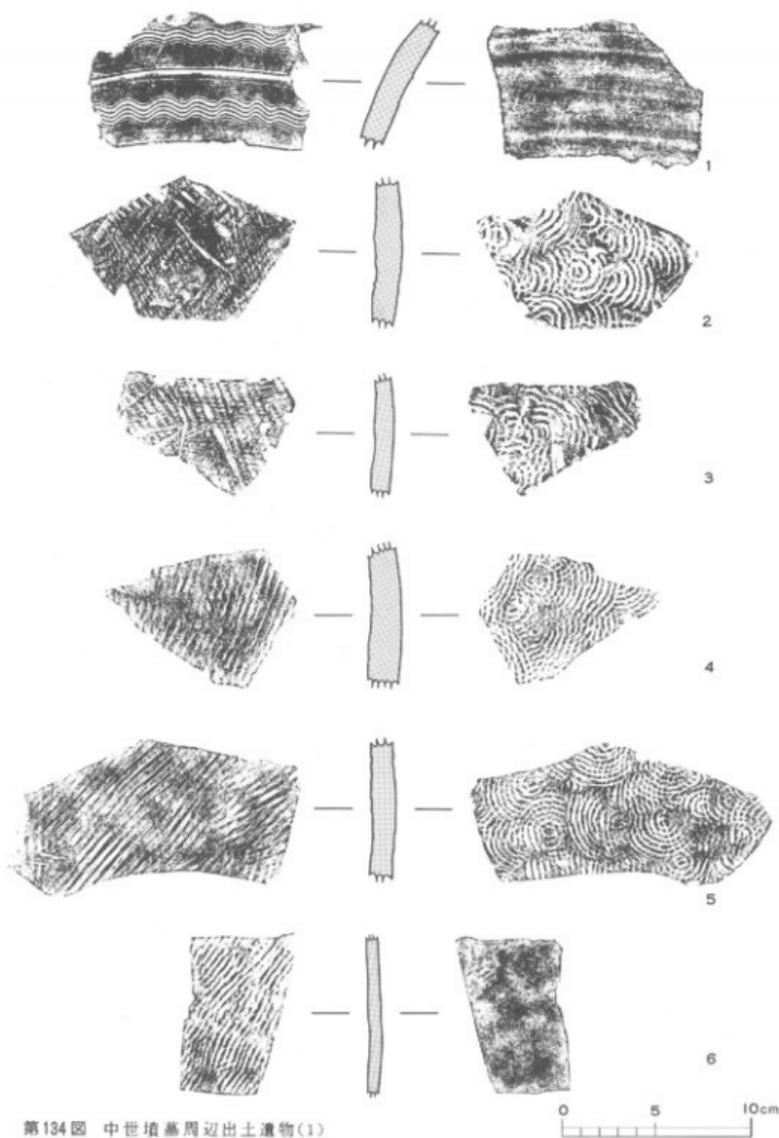
出土遺物は、周溝内及び中央施設よりは皆無であり、わずかに外護列石間より陶器片・須恵器

(大甕)片・土師質土器(燗明皿)片を検出したにすぎない。しかし、同遺構の南西隅を攪乱する覆土上層(黒褐色土層)中より、土師器(坏・埴・甕)・五輪塔(水輪)を検出している。

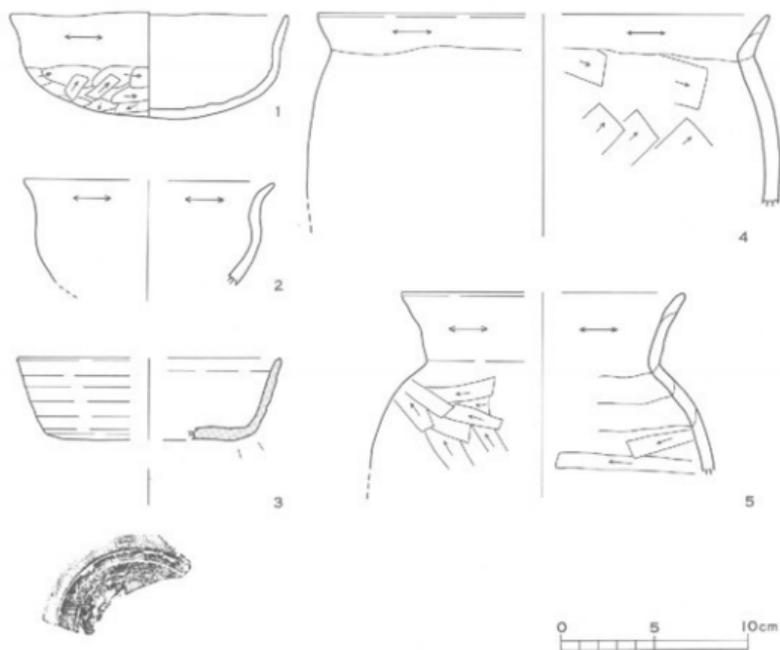
遺構の東隣には、長軸方向を同じくする土坑が並置する。長径2.7×短径1.8m・深さ約0.6mを測る平面不整長方形を呈する土坑である。出土遺物は検出されず、时期的な判断・遺構の性格についても断定はできない。しかし、この中世墳墓に合致する点(方向・深さ・掘り込みなど)を持ち合わせる事などを考慮すれば、何らかの関連性を見出す事も可能であろう。



第133圖 中世墳墓



第134图 中世墳墓周辺出土遺物(1)



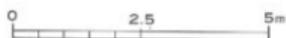
第135圖 中世墳墓周辺出土遺物(2)

中 世 墓 地 (第 136 図～137 図) [図版 45]

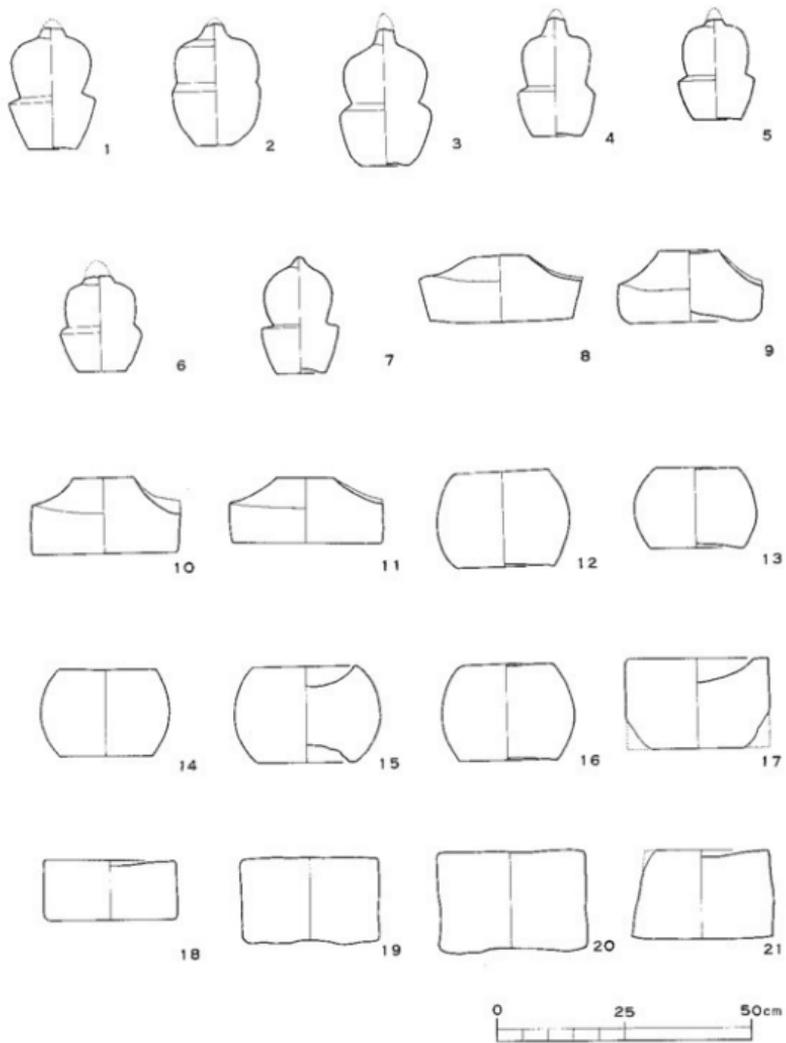
遺跡は、No 22 地点の西方約 100 m の地点で、No 22 地点とは北に進入する浅い小支谷を挟み、その対岸にあたる丘陵西側斜面上に位置する。多くの中世墓(集石及び中世墳墓)が検出された No 22 地点の標高と同じくし、この標高 65.00～70.00 m 上に墓地在造営されていたことは確実であろう。しかも、No 22 地点と当遺跡を画する小支谷内でも、この標高 65.00 m 上に集石・五輪塔・礎石の露呈を確認している。

遺跡地は、調査前の踏査時点では未確認であった。しかも、当地一帯はクラブハウス建設予定地となっており、その造成工事の開始によって 1985 年 3 月 7 日に発見の端緒(集石及び五輪塔の出七)をもたらした。調査は、工事の中断要請と共に翌 3 月 8 日にかけて実施し、記録保存をもって当たる事になった。表土は既に重機によって削平されており、取り急ぎ遺跡範囲の把握を行った。その結果、丘陵突端の南東斜面上で標高 65.00～70.00 m 上に南北 14 m、東西 4 m の範囲で南北方向に並び(斜面上に併行して)造られた墓域を確認するに至った。同遺跡地の南半域は、径 10 cm 内外の川原石の散乱を確認し、北半域には径 60～100 cm の範囲に川原石で集石状にした遺構 2 基(共に礎下の地山直上面に炭化材・火葬骨片を検出)、一辺 30～40 cm・厚さ 10～15 cm の方形石材とその周囲に川原石を敷き詰めた遺構 2 基(共に礎下に炭化材・火葬骨片を検出)、更に同地の最北部に崩落した五輪塔の散乱状況を検出した。この北半域で確認した火葬人骨片を伴う遺構 4 基はいずれも斜面地山に径 1.0～2.0 m・深さ 10～20 cm を測る浅い凹みの掘り方(平面形は楕円形状を呈す)をとっていた。

出土遺物は、燈明皿片・男瓦片・五輪塔である。燈明皿片は、集石間より検出されたものであり、男瓦片は五輪塔下層の黒色土中より検出された。共に No 22 地点で検出した遺物と同一の特徴をもち、遺構の状況と合わせ見ても、鎌倉時代以降には下らないものと思われる。五輪塔(第 137 図)は、地輪 5 点・水輪 5 点・火輪 4 点・空・風輪 7 点の計 21 点が実測可能であった。いずれも石質は凝灰岩製で、どの個体にも種子や装飾は刻まれていなかった。地輪は、幅(一辺長)に対して高さの割合は $1/2 \sim 2/3$ 程度であり、やや重厚の感を受けるものが多い。水輪は、幅(直径)に対する高さの割合は総て $2/3$ に近く、最大径をほぼ中位にとる均整のとれたものとなっている。火輪は、幅(一辺長)に対する高さの割合は総て $1/2$ 以下となり、云々ゆる背が低く軒反りのゆるいものとなっている。また、空・風輪は総て一石から成っており、空輪・風輪共にバランス良く造られている。また、空輪は総て宝珠形を呈し、先端は大きく尖頭する。地輪及び水輪には、共に柄穴を深く大きく掘り凹めた個体(各 1)を有するが、これに対応する柄をもつ個体が存在しない事を振り返れば、これらの特徴的な個体はその特殊性によって注目されるものであろう。



第136图 中世墓地位置图·平面图



第137圖 中世墓地出土五輪塔

2. No. 24 地 点

概 要

本地点は、No.22地点の南方約150mに位置し、南西に開口する谷津の西側谷口部にあたる。現水田面との比高差は約3～4m程度で、丘陵南端の微高地を形成する地勢である。

遺跡は、立ち合い調査の時点で一面が畑地として耕作されてはいるものの、外観上は前方後円形を良好に残しており、古墳として全面発掘を前提にした調査計画を立てた。その結果、小栗地内遺跡の全域を区画したグリッド法による事とし、当地点に最小の5.0mグリッドを設定し調査面積約2,500m²全域について排土作業を実施した。

地形的には、北端と西端は1.0m内外の段差をもって削平され、南方は粘土採掘によって大きく攪乱を受けていた。地形測量の結果、北半に後円部の高まりが見られ、南半に前方部の広がりを呈していた。しかし、排土作業の進展に伴い古墳の認定要素は皆無となり、集落跡の一端を窺わせる結果となった(第138図)。ほぼ全域が耕作の為に削平され(第139図～141図)、約10～20cmの耕作土直下はローム層及び鹿沼軽石層を全域に認めた。ただ東端部分については、地形の平坦化を図った為に盛土によって旧地形を残すものとなっていた。この東端部における遺構検出面は、ほぼ現水田面と同一で一部に湧水を認められた。検出遺構は、住居跡5軒・溝状遺構・小pit群・焼土帯・井戸状遺構に及び、年代は住居跡による古墳時代前期から井戸状遺構の中世にまで及んでいる。

溝 状 遺 構 (第183図)

EⅢ-4-59区からEⅣ-1-54区にかけて検出した遺構で、西に緩傾する東西走向の溝である。断面形状は逆台形(∟)を呈し、西端で最大幅約4.0mを計測する。深さはEⅣ-1-54区で10cm、EⅢ-4-59区で約80cmである。遺構は鹿沼軽石層中に掘り込まれ、時期は未詳である。

焼 土 帯 (第183図)

EⅣ-1-46区・47区の中央に確認された遺構で、調査区を北東に走向する高さ0.5～1.0mの段差下面に径3.0×2.3mの範囲を確認した。焼土の堆積は、最大で約5～6cmであり淡赤黄色～淡黒色を呈していた。炭化材・遺物の出土は無かった。当地耕作者の話では、かつて一面の櫟を利用した炭窯が付近に点在していたと云う事であり、本遺構もその下部の被熱帯の可能性を秘めているものと思われる。

井戸状遺構 (第138図)

EIV-1-80区のはぼ中央に検出した遺構で、平面形状は一辺約1.6mの隅丸方形を呈する。深さは1.5m以上で、断面形状は「V」字形に近いものであった。地表下1.0mの地点には、90×40×10cmを測る平面長方形を呈する板状石が横置され、覆土中には人頭大の径20～30cm甕(30点)と共に風化した五輪塔(火輪)や内耳土器片を出土した。遺構の廃絶時期は中世を比定した。

Pit 群 (第138図)

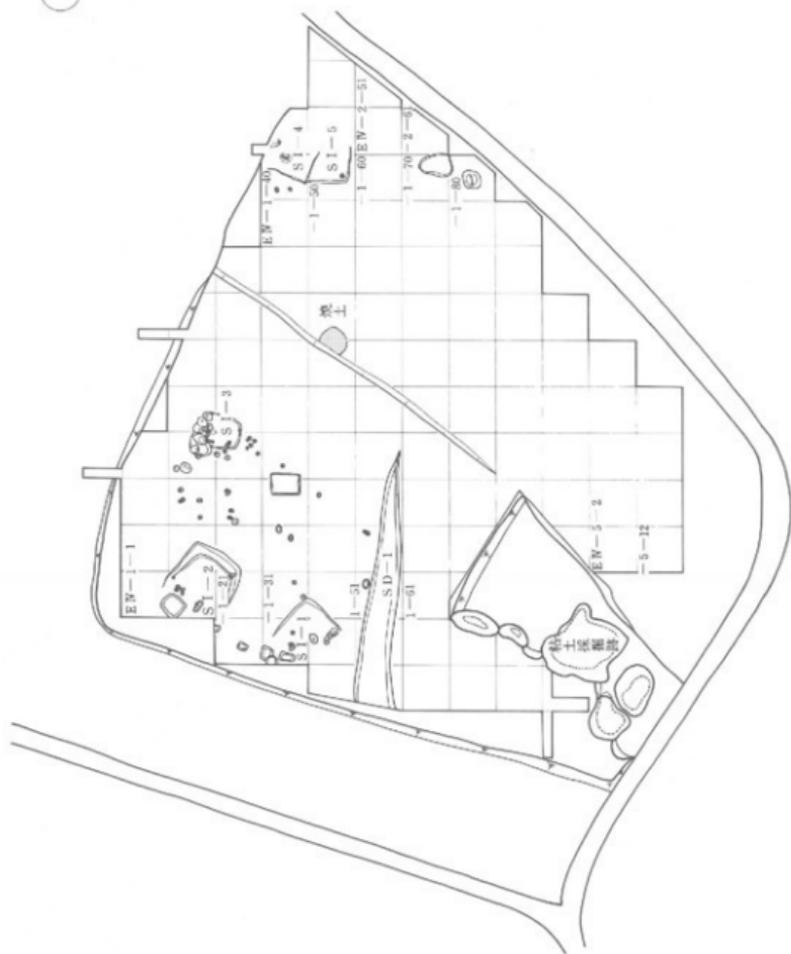
Pit群の多くは、当調査地点内でも比較的標高の高い位置(EIV-1-13・23・24区)に集中し、やや規模を大きくするものは西寄りに位置している。Pitの多くは、径40cm内外の平面円形を呈し、深さ20～60cmを測る。覆土は総て単層で、鹿沼土混じりの淡褐色を主体とするものであった。中でも、EIV-1-23区内検出の小Pit(径30cmの平面円形で深さ50cmを測る)は土師器・甕(第146図-6)を埋納していた。他のPitよりは出土遺物は無く、遺構の関連性も判然としない。

住 居 跡 (第138図～145図) (図版33～35)

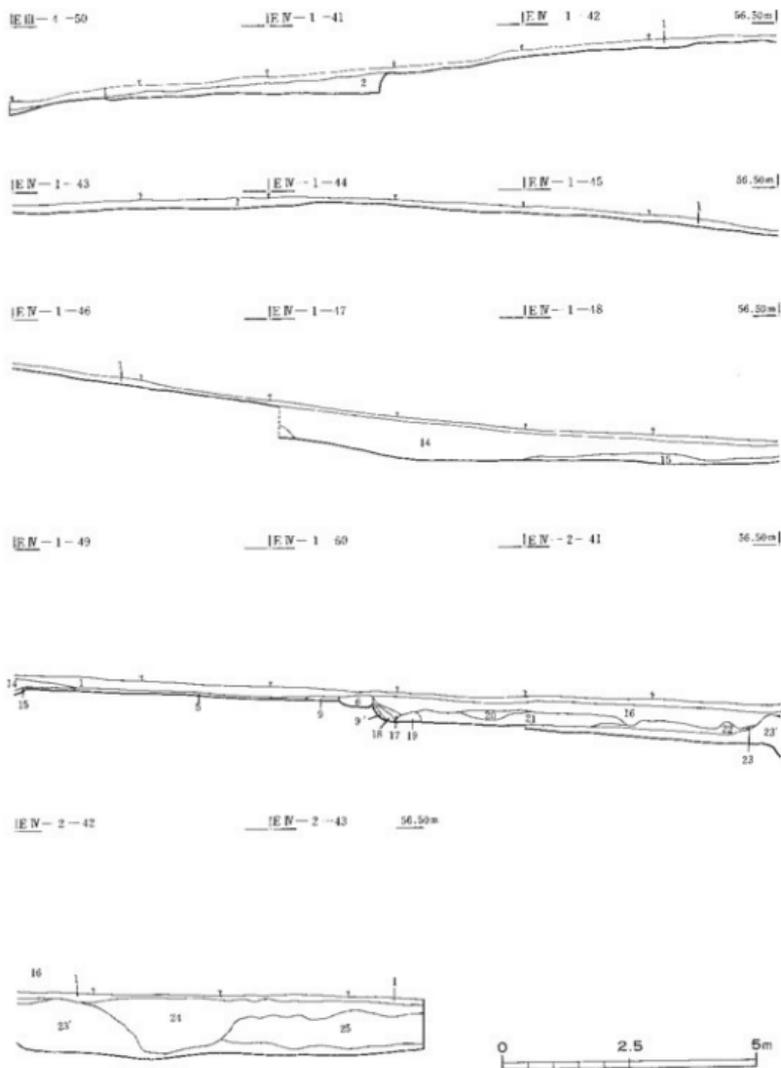
SI-1 (第142図) EIII-4-40・50, EIV-1-31・41区において確認された平面方形を呈する遺構である。本遺構は鹿沼土面に構築され、西壁・南壁を消失する。地形的に西へ斜行する為に、西半城の遺存は不良で遺存壁長は北で5.5m・東で4.9mを測り、壁高は東コーナーで最大45cmを測る。Pitは西半部に散在し、径45cm・深さ15cmの平面円形から径100×80cm・深さ34cmの平面楕円形まで7基を有する。出土遺物は、耕作土層中のみで遺構に伴うものではなく、遺構の時期的判断は不明である。

SI-2 (第143図) SI-1の北東約10mの地点で、EIV-1-11・12・21・22区において確認された。SI-1と同様に地形的な面からその西壁を消失する。本遺構は鹿沼土面に構築され、平面方形を呈するものと思われるが、壁際に有段状の二段掘り込みが施される。掘り込みは遺存壁とはぼ平行する形で残り、上辺壁長は北東南で6.0, 5.5, 4.0mを測り、下辺長は3.5, 4.0, 3.1mを測る。上辺壁高は東壁中央で最大42cm、下辺にては最大30cmを測る。壁際下段面には径28～58cm・深さ15～35cmを測るPit2基を検出した。明らかに本遺構に伴う遺物の出土は無かったが、EIV-1-21区覆土中より土師器・甕(第146図-7)が出土している。

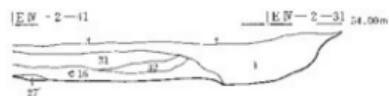
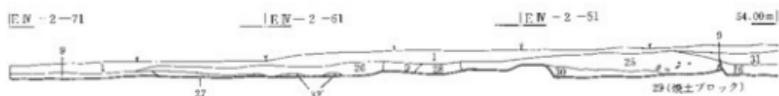
SI-3 (第144図) SI-2の東約11mの地点で、EIV-1-14・15・24・25区において確認された。主軸をN-14°-Eにとり、平面長方形を呈し北壁は攪乱を受けている。壁長は東西南で3.7, 2.5, 2.6mを測り、壁高は西壁中央で最大18cm・東壁で10cmを計測する。床面中央やや北寄りに炉跡をもち、径90×50cmの長楕円形状を呈した焼土は最大堆積8cmを測る。床面には



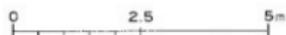
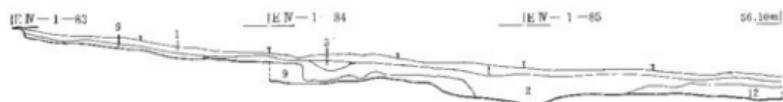
第138圖 No. 24 全体図



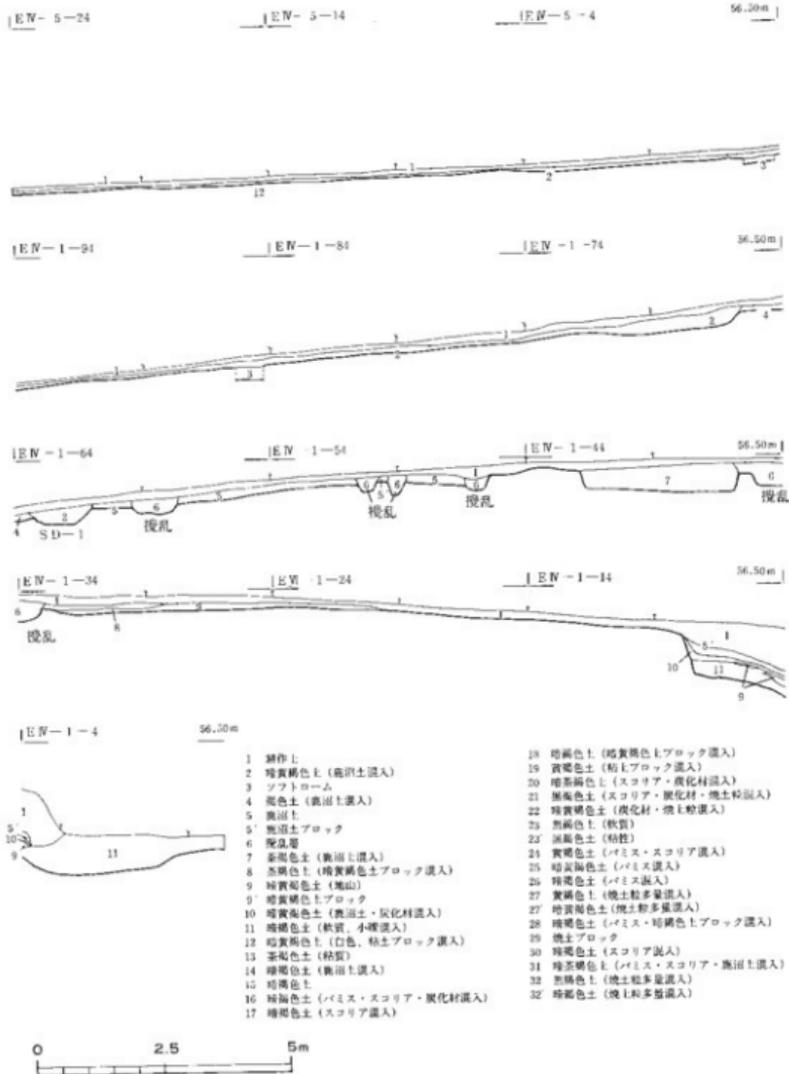
第139図 E III - 4 - 50 ~ E IV - 2 - 43 (東西セクション図)



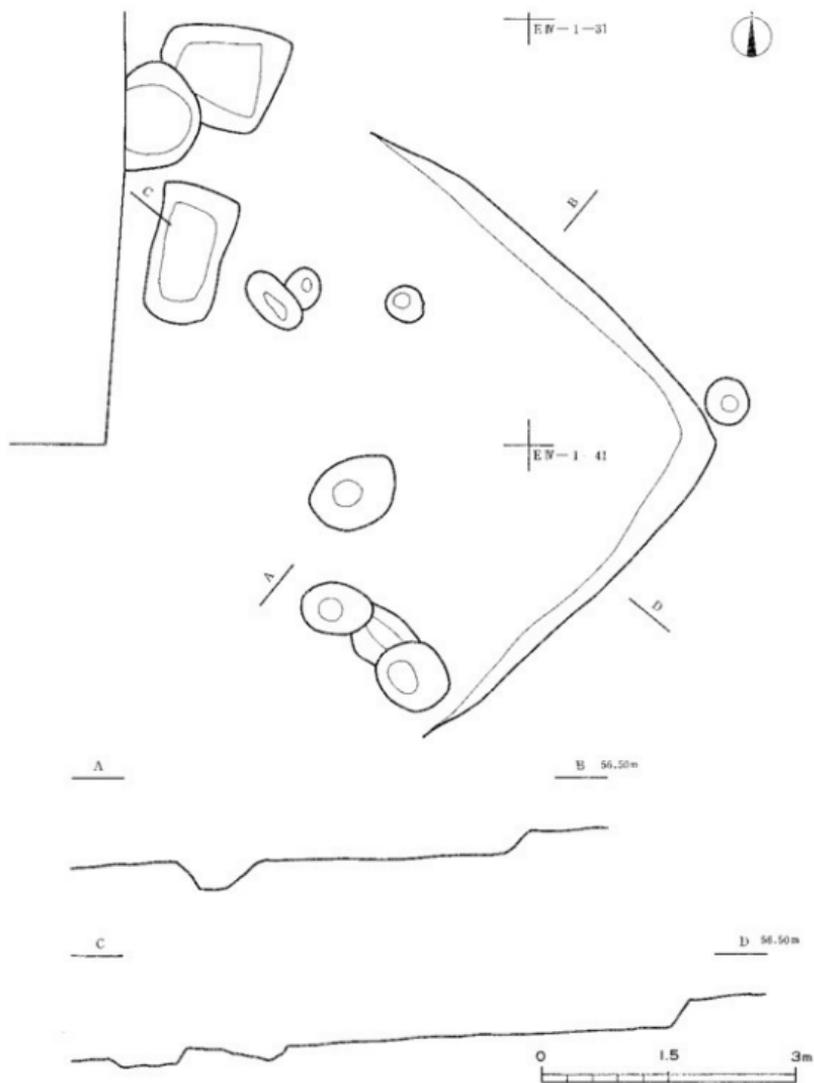
EW-2-71~EW-2-31(南北セクション図)



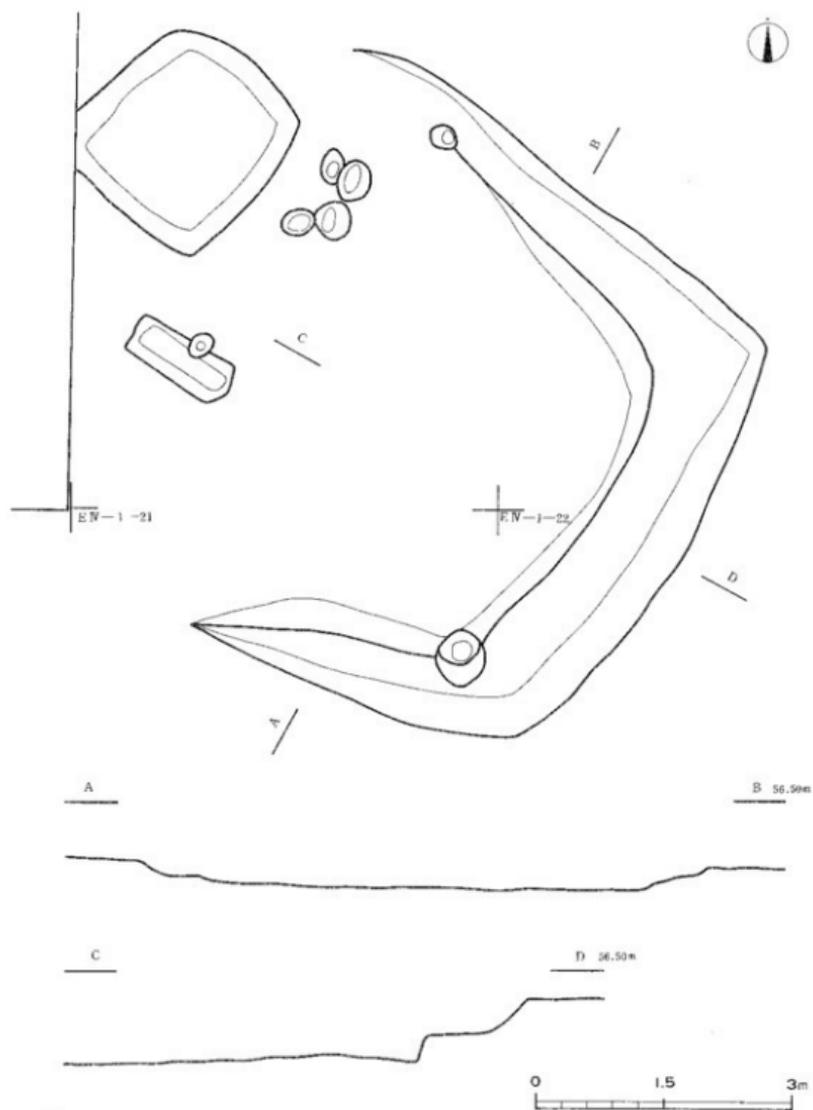
第140図 EW-1-83~1-89(東西セクション図)



第141図 E IV-5-24~1-4 (南北セクション四)

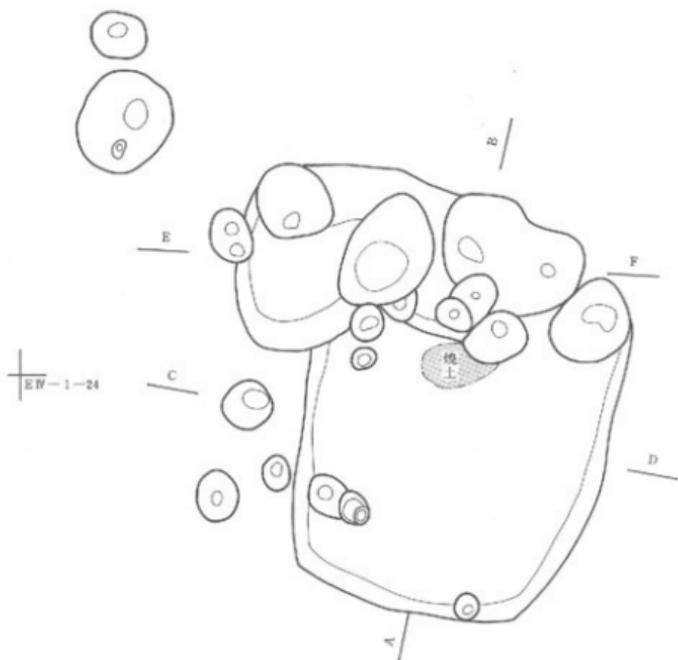


第142圖 S I - 1

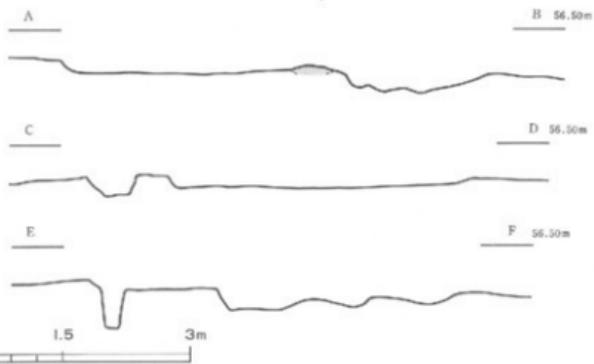


第143圖 S I - 2

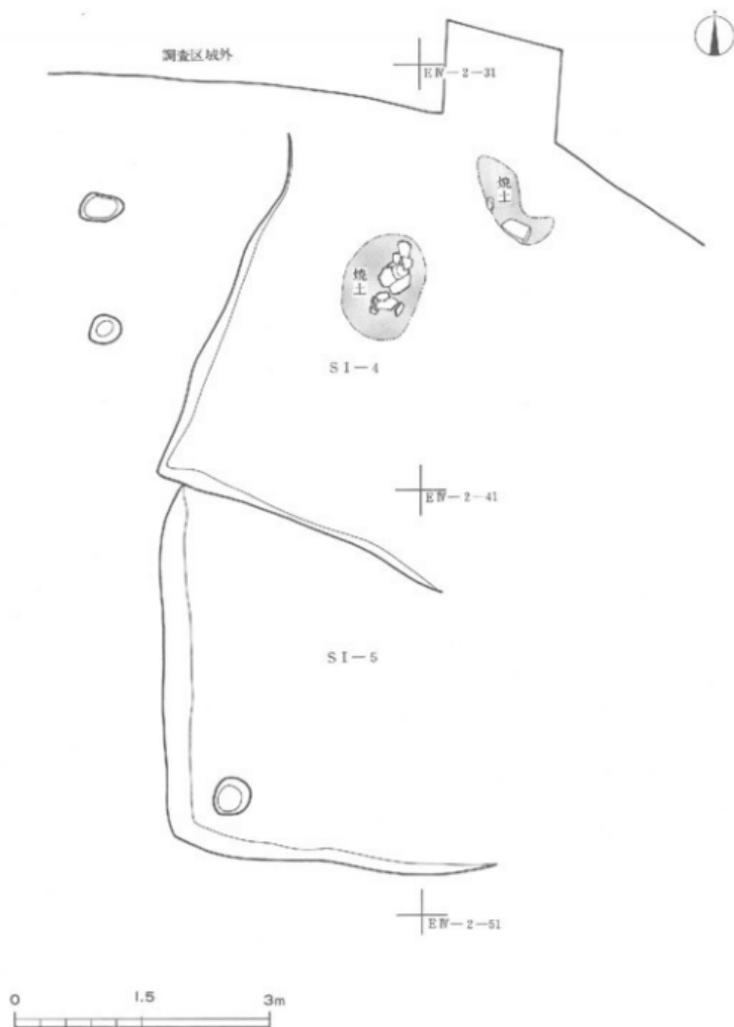
EW-1-14



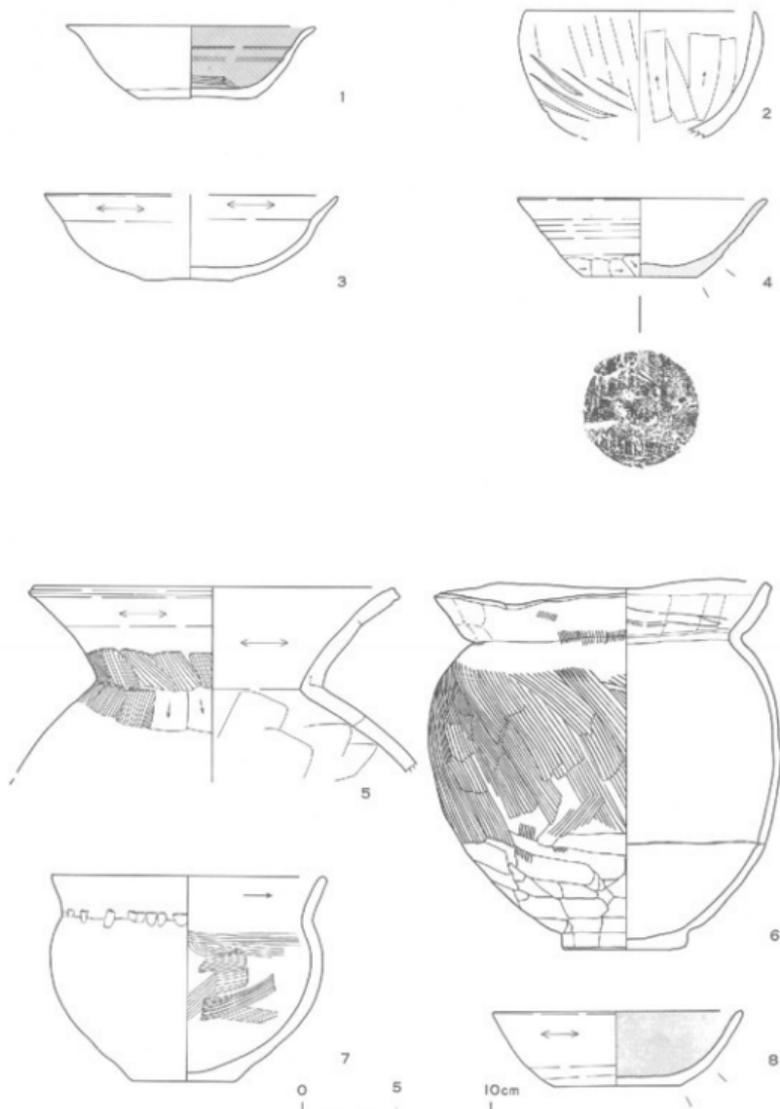
EW-1-24



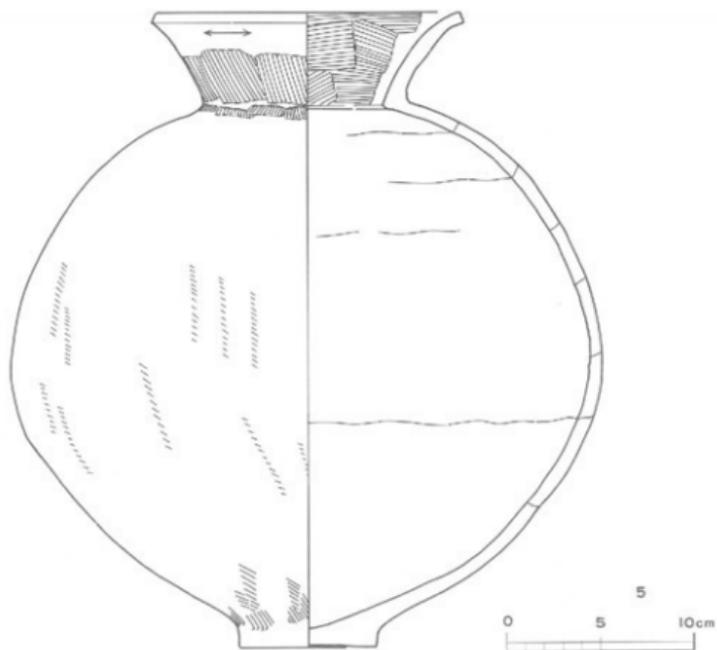
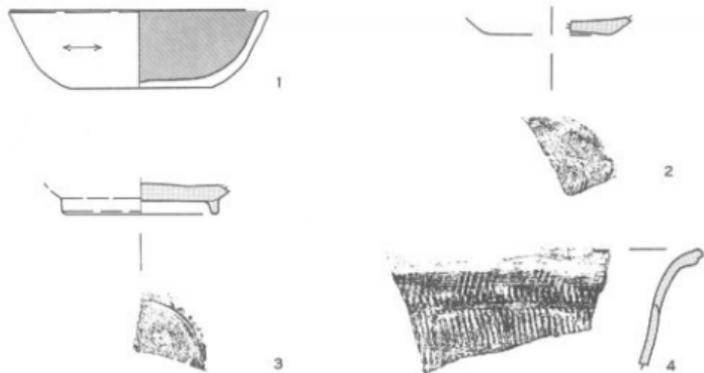
第144图 S I - 3



第145図 SI-4・5



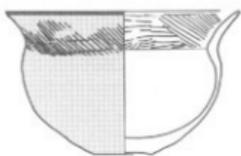
第146圖 E IV - 1 - 4 · 14 · 15 · 21 · 23 · 24 · 25出土遺物



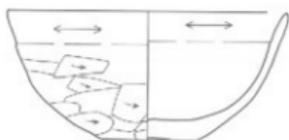
第147圖 E VI - 1 - 24・25・40出土遺物



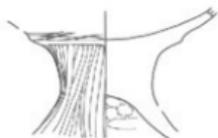
1



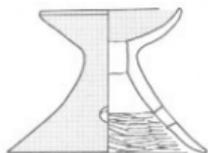
2



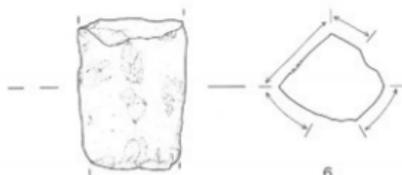
3



4



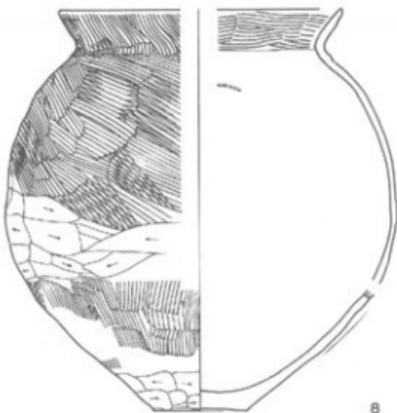
5



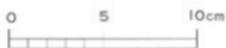
6



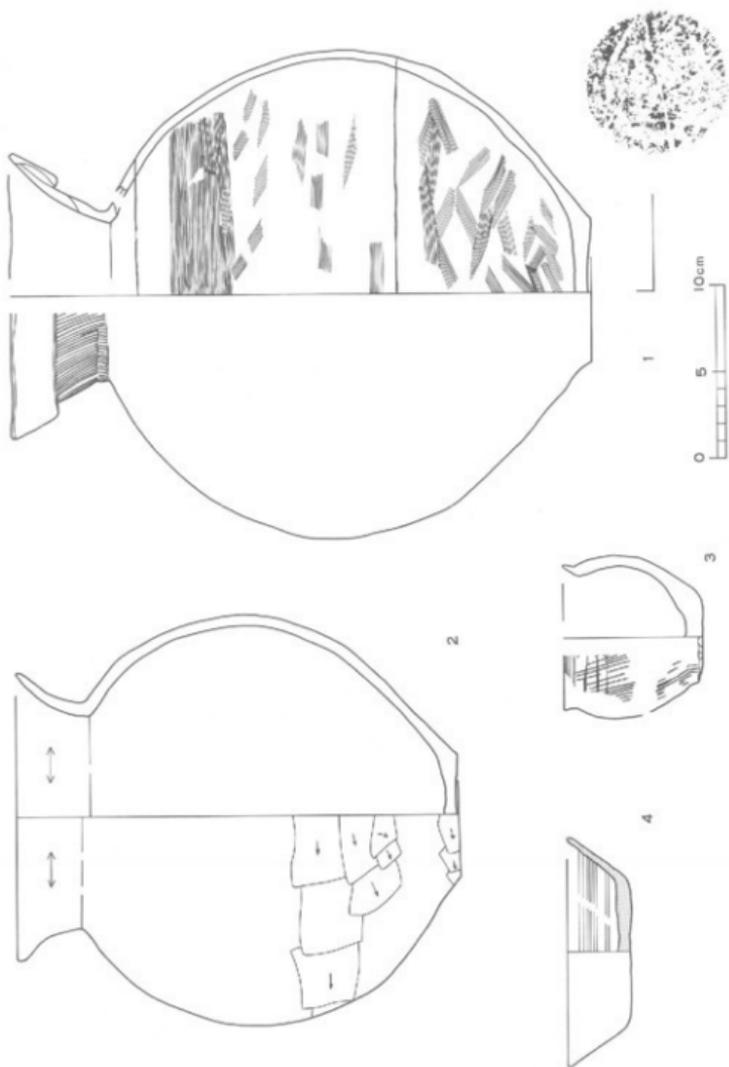
7



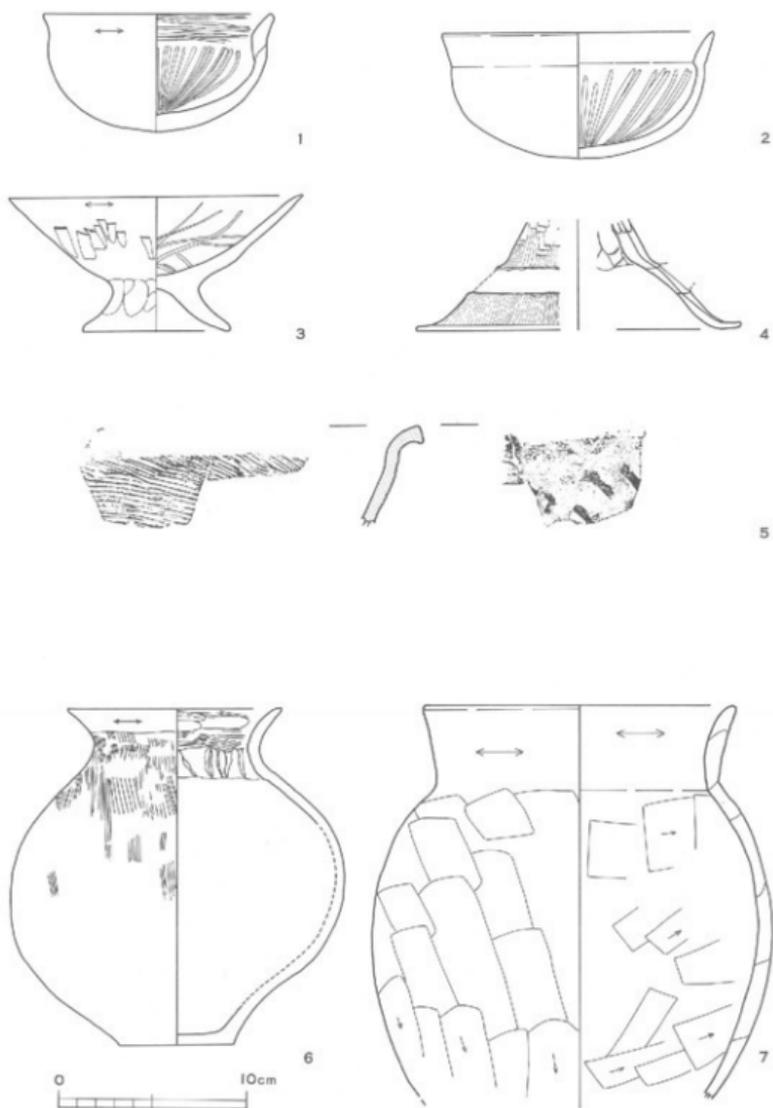
8



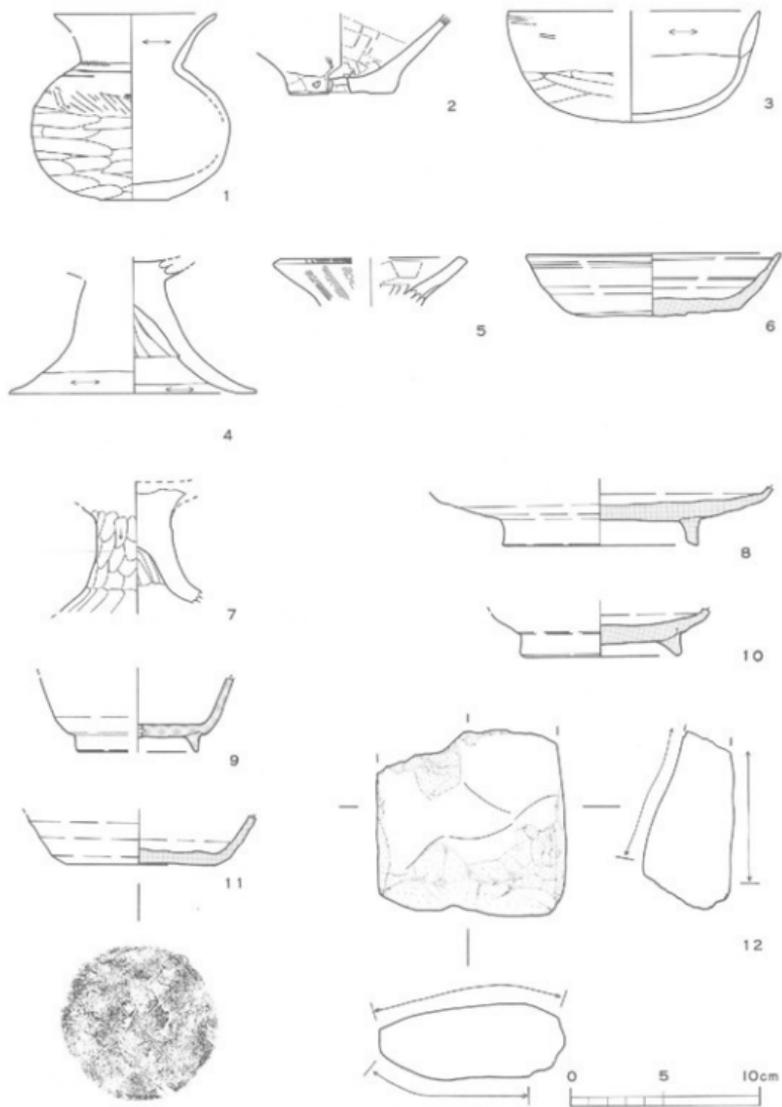
第148圖 E IV - 1 - 40 · 50 · 94 出土遺物



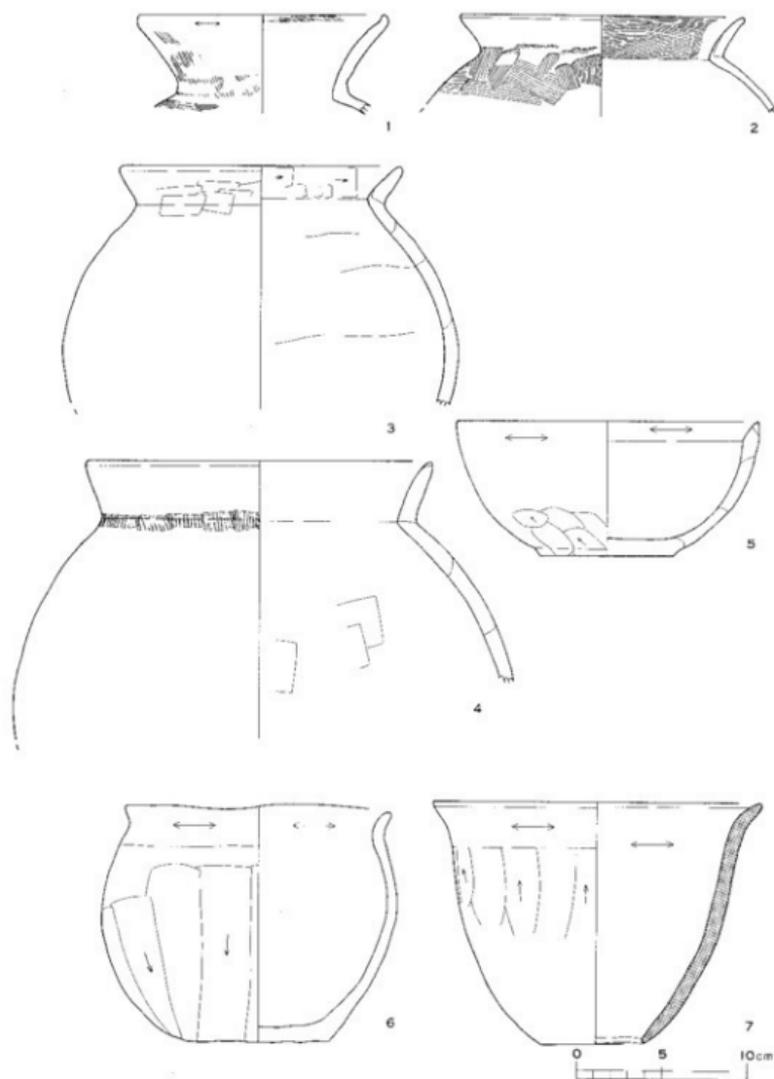
第149圖 E IV - 1 - 40・50出土遺物



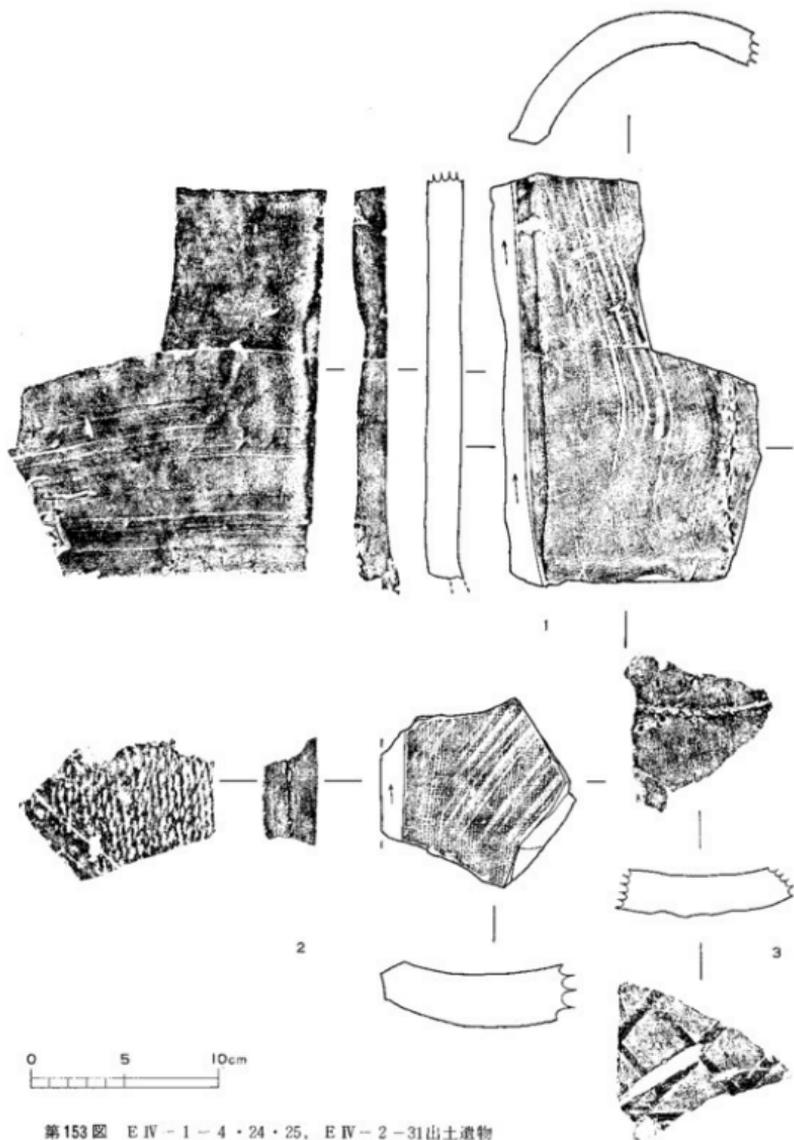
第150图 E IV - 2 - 31 · 41出土遗物



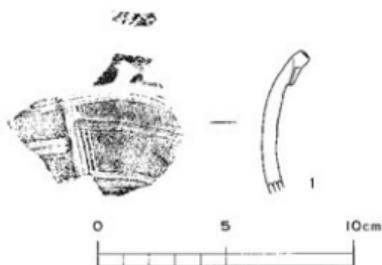
第151圖 E IV - 2 - 41・42・52出土遺物



第152圖 E IV-2-61, E III-4-50, 出土遺物, 參考資料



第153圖 E IV-1-4・24・25, E IV-2-31出土遺物



第154図 E IV - 1 - 15出土遺物

径16~42cm・深さ20~36cmを測るPit 5某を検出した。本遺構覆土中よりは数点の土師器を検出したが、上層の耕作土層中よりは多くの遺物(第146・147・153・154図)を出土している。

SI-4(第145図) 調査区域の北東隅で、EIV-1-40・EIV-2-31区に検出され、SI-5と重複する。北壁・東壁を消失し、遺存壁長は西南で4.3, 3.65mを測り、壁高は西壁で30cm、南壁で10cmを計測する。炉跡は、床面中央やや西北寄りに径126×90cm・最大堆積7cmを測る。炉跡の北東1.0mの地点に焼土ブロックを確認した。出土遺物は、土師器高坏・小型壺・甕・小型甕など(第147図-5, 第148図-1・2・4, 第149図-3)である。

SI-5(第145図) 調査区域の北東隅のSI-4と重複し、北壁をSI-4に削土され、東壁を消失する。壁長は西と南で4.12, 3.83mを測り、壁高は西壁中央で最大21cm、南壁で12cmを測る。炉跡は確認できなかったが、床面直上の覆土は焼土粒・炭化材混じりの暗黒褐色土である。床面南西際に、径46×40cm・深さ43cmを測る平面楕円形のPitを検出した。出土遺物は、土師器坏・埴・高坏・器台・壺・甕・甗など(第148図-7・8, 第149図-1・2, 第150図-2・4・6・7, 第151図-1・2・4・5)である。

以上、No24地点に検出された遺構では年代を押しえられるのは、SI-4・5の古墳時代前期~(五領~和泉期に比定)の遺構である。また、当地点の東側一帯は地形的に低く、現水面とほぼ同一になるもので、遺物の流出・混入が著しいものであった。その多くは土師器に占められるが、他に縄文土器・弥生土器・須恵器・内耳土器・燈明皿など多くの土器片の検出を得た。

No24参考資料(第152図6・7, 図版90)は、当地の所有者である藤田清美氏が1979年8月24日にEIV-1-54区付近にて、耕作中に得られた完形土器2点である。土師器甕は、外面全体に煤が付着し比較的難に作られている。須恵器甗は、単孔で堅緻・密な作りである。今調査においては、何ら遺構の検出はなかったが、永年に渡る土地改良による為であったと推測される。

3. 試掘調査遺跡

概 要

試掘対象となった遺跡については、事前踏査の時点で6箇所(No.12・13・14・15・18・23地点)について協議を重ねてきた。その結果、ゴルフコース内と重複するものの、墳形を保つ事を条件に試掘調査を実施する事となった。ただし、No.23については地形的見地より造成工事で盛土を行う箇所にあたり、試掘調査後に盛土保存という形をとった。また、調査の進行に伴い当初全掘対象遺跡であったNo.20・21地点についても、一部コースの変更・遺跡地点の誤認などからコース外となる為、急速試掘調査に止まることとなった。よって、小栗地内遺跡において試掘の対象となった遺跡8箇所について実施し、これらの遺跡は総て試掘後に保存を図る事となった。

試掘調査は、総てトレンチ法による事とし、調査に先行して地形測量を実施した。その結果、No.12・13・14・15・18・20については比較的良好に旧状を保つ墳丘である事が判明した。No.21は、踏査時において古墳の墳丘状を呈するものと認定されていたが、測量の結果、墳丘としては疑問の残る遺跡となった。No.23については、遺跡地一面が耕作地の為、多くのトレンチを設定して遺構の把握に務める事とした。なお、墳丘におけるトレンチの設定は任意とした。

No.12・13・14・15・18地点

遺跡は、小栗地内遺跡を二分する南西に開口する谷津の東側一帯に点在する。同地一帯は、井塚古墳群の範疇と考えられるが、調査に先立って行われた踏査時に、今調査区域内に認定した遺跡として通番を附したものである。No.12・13・14は、谷津の東側・中央付近に並存する円墳である。同円墳は、背後の標高128.2mの山塊の西側で、谷津に至る変換地点(山裾)に位置している(標高64～67m)。これらの古墳は、設計上どうしてもコース内に係る為、一部盛土・抜根の恐れが生じたもので、確認調査後に墳形を変容しない範囲で保存が図られる事となった。No.15・18は、No.12・13・14と連続する台地上に存在する(標高60～61m)。位置的には南西に開口する谷津の東側・谷口やや中央より部分で、台地の縁辺に並存するものである。両古墳は、やはり設計上コース内に係る為、確認調査後に墳形を変容しない範囲で保存を図る事となった。

No.20・21地点

両遺跡は、調査前の踏査時点において丘陵縁辺に南北に並存する古墳として認定されていた。当地域は、谷津の西側一帯の丘陵斜面に散在する寺山古墳群の範疇であり、井塚古墳群とは谷津を挟んで対峙する。一帯は昭和30年代に種鶏場造営の為、その地形を大きく変容している。しか

し、このNo 20・21が存在する地点は丘陵の東端に位置する為、かろうじて浸滅の危機を免れたものである。遺跡は、標高125.5mの山塊が南に張り出す緩傾斜面を形成している突端部分で、谷津の中央部・西斜面に位置している(標高76.00m)。遺跡の西側は、成造時に削平されて人為的な急斜面に変容され、東側は、旧地形を保つものの谷津に落ち込む斜面を形成している。北側は、ほぼ旧地形を保つもので緩やかな丘陵斜面となっており、南側は、No20地点の南側直下に道路を敷設している為大きく削土されている。踏査時における遺跡地点は、その後の調査によって誤認されたものである事が^{註1}明し、新たな地点と一部コース設計の変更により、全掘対象遺跡を試掘調査遺跡とするにとどまった。また、両遺跡は南北に並存する事により、同時にトレンチ調査を実施する事となった。この両遺跡については、試掘調査後に現状保存が図られる事となり、寺山古墳群の名残りをとどめる遺跡となった。

No.23 地点

当遺跡は、南西に開口する谷津の西側・谷口部やや中央寄り、寺山古墳群の存在する丘陵の南端・谷津を望む縁辺地の微高地上に位置する(標高55.00～57.00m)。一帯は、既に耕作地として一面を削平し、平坦化なされていた。よって、踏査時点より遺跡地範囲の認定が難しく、ただ漠然と畑地一帯を指す事となった。なお、当地においては開墾時に礎石や瓦片を出土していることなどから、寺院跡の可能性を秘めているものである。^{註1}また、地元在中の郷土史研究家であった藤田清氏による^{註2}と、

「寺山古墳群の山麓に西方と北方とを削り取って約八反歩以上の平地林がある。櫟一相の美林である。先年(昭和25年)、小栗中の中生徒達と歩んだ際、西寄りの崖から一枚の唐草文を配した軒平瓦の断片を採集した。これは寺山廃寺の唯一の貴重資料である。……中略……付近の山林中から裏面に縄文、又は菱形の押型文のある平瓦断片が見つかる。これ等の文様は平安末期か鎌倉期の特徴をもっているもので、寺山廃寺も概ね、この時代の建立と考えても無理はないであろう。……以下略」

の報告文があり、同様に高井佛三郎氏の見解も得られた地である。^{註3}試掘調査は、広範囲にトレンチを設定し遺構検出を行う事とした。調査後は、一帯に盛土保存が図られる事となった。

註1 このNo.23地点は、地元でも「ニジムカイ」と云う呼び名が残っており、「尼寺向ひ」・「二寺向い」など寺の存在を窺う事ができる。

註2 藤田清・中村盛吉共著『常総古文化研究』所収 第4編小貝川文化 八、寺山付近より(既刊の研究誌を合冊・製本し、1972年に復刻・発行された。)

註3 高井佛三郎「常陸・下野の中世瓦甍見」『茨城県史研究』43号 1979年

No.12 地 点 (第155図) (図版36-1)

遺跡は、南西に開口する谷津の東側中位(谷口部より北東へ約500m)で、谷津に沿う山麓の変換点に位置する。水田面との比高差は約10mであり、遺跡の東と南側は自然地形である。墳頂部最高位は標高65.40mを測り、直径約10m・高さ約1.5mの円墳と推定される。

試掘トレンチの設定は任意としたが、後の保存処置の問題などから最小限にとどめる事とし、遺構輪郭の確認に重点を置き実施した。トレンチは、西側の緩傾斜面・北西方向に幅1m×長さ7m、墳頂部付近から東方向に幅1m×長さ6mを設定した。その結果、同遺跡には周溝は確認できなかったが、明らかに人為的な盛土部分の存在を明確にした。それは墳頂部付近において顕著なものであり、褐色土を基調として暗黄褐色ブロック・黒色の小ブロックを混入する人為的な4層以上の土層を確認し得た。なお、遺物の出土はなかった。以上の結果より、同遺跡を明らかに円墳として断定するには至り得ない所があるが、低平なマウンドを明らかに形造っていると言う事実をもって、同遺跡を円墳として推定するに至ったのである。なお、同地点は丑塚古墳群の北域にあたっている。

No.13 地 点 (第156図) (図版36-2)

遺跡は、No.12地点より北東方向に約60mの地点で、谷津に沿った山麓の変換地点に位置している。No.12地点と同様に遺跡の南東側は自然地形であり、北から西側にかけてのみマウンドを形造る姿となっている。この事は、明らかに谷津の存在を意識して、谷筋のこの地に形成された事を明確にしているものである。水田面との比高差は約10mあり、墳頂部最高位は標高66.90mを測る。直径約6m・高さ約1mの円墳と推定される。

試掘トレンチは任意に2本設定し、特にマウンドの構築状況と周溝の存在に重点を置いた。トレンチは、北方向の緩傾斜面上に幅1m×長さ4m・墳頂部より西方向の緩傾斜面上に幅1m×長さ7mを設定した。その結果、明確に周溝の存在は得られず出土遺物も皆無であったが、人為的な3層の盛土を確認した。しかも、墳頂部において露呈する石片(一辺10~15cm・厚さ3~5cmの板状石片)の直下には、暗黄灰色を呈する粘土をブロック状に確認した(いずれも小塊ではあるが径5~10cm前後である)。よって、同遺跡には墳頂部に何らかの施設を持ち、人為的なマウンドを築土する遺跡である事が判明した。ただし、同遺跡についても明らかに古墳とする認定には至らないが、同地点もまた丑塚古墳群中の北域にあたる事などからして、その可能性を十分に秘めているものと思われる。

No.14 地点 (第156図) [図版37]

遺跡は、No.13地点から更に北東へ約45mの地点で、No.12・13地点と同様に東側は自然地形、北・西・南側にマウンド部分を認める。遺跡の立地はほぼ同一で、谷津を望む方向を意識してマウンドの築土を行った事は明確であろう。また、同遺跡は既に墳頂部の西側部分(径3.0×1.6m)に平面楕円形状の盗掘坑と思われる凹みを有している。墳頂部最高位は標高63.83mで、水田面との比高差は約9mである。直径約9m・高さ約1.3mを測り、低平なマウンドを有する円墳と推定される。

試掘トレンチは任意に2本設定し、特にマウンドの構築状況の把握に務めた。共に墳頂部より、南西方向に幅1m×長さ4.5m、南東方向に幅1m×長さ6mを設定した。その結果、遺物の出土はなかったが、鹿沼土ブロックを混入する暗黄褐色土・暗黄褐色ブロック土を混入する黒黄褐色土・鹿沼土や暗黄褐色土や黒色の小ブロック土を多量に混入する暗褐色土など、広い範囲に渡って人為的な盛土が成されている事が判明した。よって、同遺跡についてもNo.12・13地点と同様な推定を下したものである。なお、同地点は丑塚古墳群で最も北端に位置している。

No.15 地点 (第156図) [図版38]

遺跡は、No.12地点から南西に約210m、谷津に沿った平坦地上に立地する。遺跡の立地はNo.12・13・14地点とやや異なり、地形的にもマウンドの構築を大きくしている。水田面との比高差は約7mで、墳頂部最高位は標高61.00mを測る。平面形は長円形を呈するが、直径約11m・高さ約1.8mを測る円墳である。

試掘トレンチは墳頂部付近より任意に2本設定し、北西方向に幅1m×長さ6m、南方向には幅1m×長さ5mを設定した。その結果、北西部に褐色土・黒色土・鹿沼土ブロック・暗黄褐色土ブロックを多量に混入する土層を確認し、南部においてもその一部を視認した。また、遺物の出土はなかったが、墳頂部から西側斜面にかけて、径10～20cm内外の礫が露呈する事などにより、本遺跡についても円墳としての判定を下したものである。なお、同地点は丑塚古墳群域の北西端に位置している。

No.18 地点 (第157図 158図) [図版39-1, 図版91]

遺跡は、No.15地点より南西へ約100m・谷口部より北東へ約220mの地点に立地する。No.12・13・14・15地点と同様に、谷津に沿った平坦地上に立地し、低平なマウンドを形造っている。水田面との比高差は約6mあり、墳頂部最高位は標高59.70mを測る。平面形状は径6.0×5.1m・高さ0.8mを測る楕円形状を呈する。踏査時点では、他墳同様に低平な円墳として推定され

ていたが、試掘調査によって供養塚である事が判明した。

試掘トレンチは、墳頂部より任意に2本設定し、北方向に幅1m×長さ3.5m、西方向には幅1m×長さ4.8mを設定した。その結果、暗黄褐色のブロック土を多量に混入する黒黄褐色土や黄褐色のブロック土を混入する暗黄褐色土がほぼ均一に水平堆積(盛土)している事が判明した。出土遺物は、北方トレンチ内覆土ほぼ全域より土師器片と西トレンチ内覆土・墳頂付近より陶磁器片、土師器片、同トレンチ中央部盛土直下(地山直上面)より古銭を検出した。古銭は総て「寛永通寶」で計九枚が重なって出土した(第158図)。この古銭中には、官鑄銭として寛文八年(1688年)以降に鑄造された「新寛永」と呼ばれる古銭を含んでいる事や、貨幣の裏面上位に「文」の字を鋳する事などからして、塚の築造年代は十七世紀末以降が比定される。

No.20 地点 (第159図～162図) (図版41～43, 図版92～1)

遺跡は、小栗地内遺跡を東西に二分する南西に開口する谷津の西側中位で、樹枝状に北に進入する小支谷に挟まれた南面する丘陵の先端部に位置している。遺跡の西半部は、人為的な削土を受け傾斜面を形成するが、東半部は小支谷に落ち込む東斜面が旧形を残し、その山稜部分に平面半円形状となったNo.20地点が存在する。水田面との比高差は約21mあり、直径約20m・高さ3.5mを測る円墳である。

試掘トレンチは、遺跡を縦横に断ち切る様にグリッドに平行させて設定し、共に墳頂部を中心とするものであり、幅2m×東西25m、幅2m×南北44m(No.21まで延長させた)を設定した。なお、同トレンチは便宜上、墳頂部より各方向にE・W・S・Nのトレンチ名を附した。Eトレンチにおいては、墳頂部表土下に破砕されたと思われる土師器・小型甕(第165図7)一個体分を検出し、墳丘の構築は最大で約2mの盛土を確認し、レンズ状に互層させた版築法によった事を窺い得た。なお、東側周溝は明確ではなかった。更に、土師器の出土地点より南へ50cmの所で、長軸を南北にとる石棺をボーリング探査によって確認した。同トレンチ内出土遺物は、他に弥生土器片・打製石斧(第165図5)・磨製石斧(第165図6)などである。Sトレンチにおいては、その南端部を道路敷設によって大きく削り取られてはいるが、青灰色粘土ブロックと共にレンズ状に堆積する版築土を確認した。Wトレンチにては、墳頂部付近にて表土下約30cmの所より2基の石棺と裏込めに供された青灰色粘土を多量に検出した。この2基の並置された石棺は、共に長軸を南北方向にするもので、トレンチ北壁際に検出した石棺をⅡ号、南壁際をⅢ号とした(第162図)。Nトレンチにおいては、墳頂部より北へ約2mの東壁際の表土直下に粘土で日張りされた石棺を検出した。この石棺にはⅠ号を附し、長軸は東西方向をとっていた。同トレンチにては、北側周溝の検出には至らず、基底面(地山)直上より弥生土器片を検出した。なお、同地点は現状保存がなされる事となり、調査後はトレンチを含めて総て埋戻しを行った。

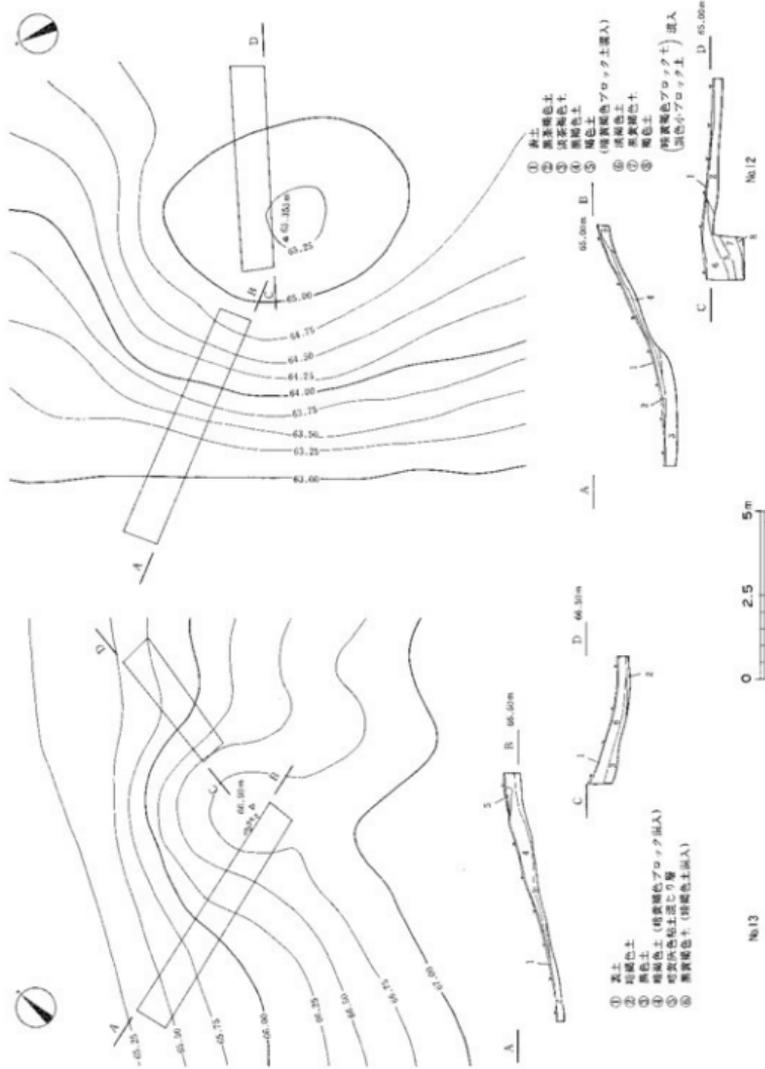
No.21 地点 (第159図, 161図) [図版44, 図版92-2, 図版93]

遺跡はNo.20地点に北隣し、調査前の踏査時点には低平なマウンドを有する円墳と推定されていた。試掘調査については、No.20地点において設定したNトレンチを延長する事により、遺構の確認を行う事とした。その結果、当地点には古墳の存在は皆無であり、自然堆積層を確認するとどまった。しかし、Nトレンチの中央やや北寄りの地点には弥生時代の住居跡を検出し、床面直上の遺物(第163図1)などを出土している。床面の標高は75.20mで、No.22地点SI-1とはほぼ同じ標高である。時期的にも同じ弥生時代後期を比定できるもので、出土遺物はNトレンチのほぼ全域において弥生土器を検出した(第163図~165図4)。同地点もNo.20地点と同様に現状保存が図られる事となり、調査終了後にトレンチの埋戻しを行い保存処置を行った。

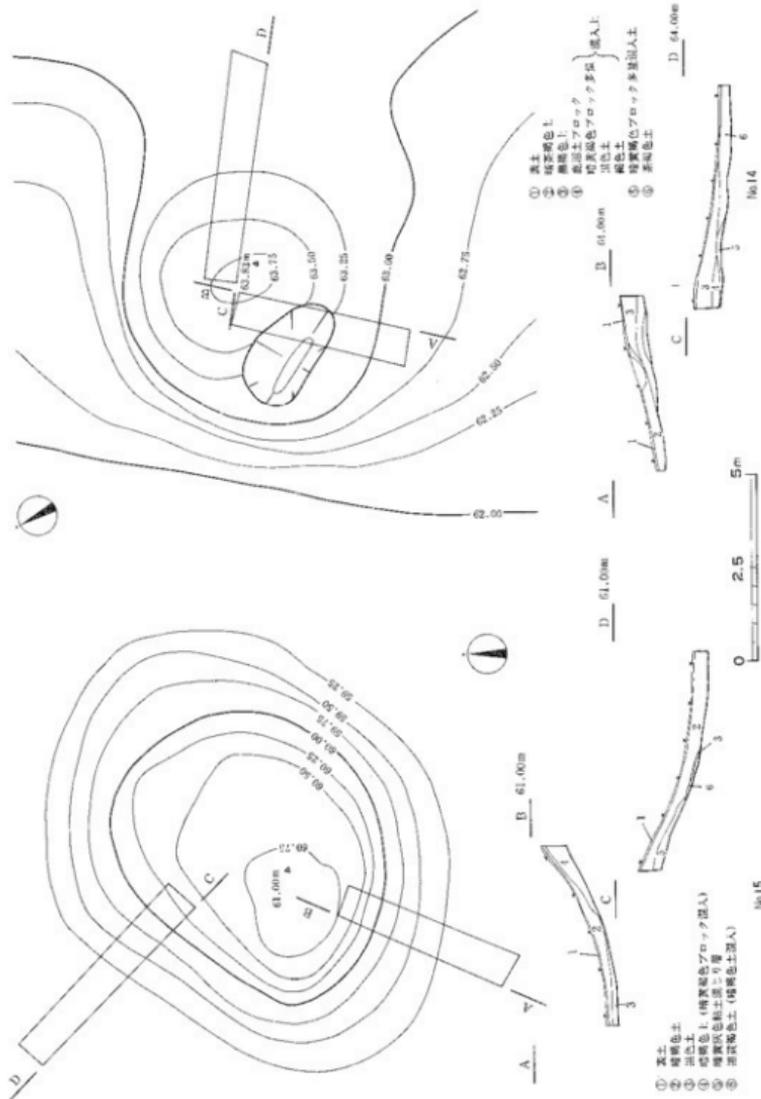
No.23 地点 (第157図) [図版39-2, 図版40]

遺跡は、小栗地内遺跡を二分する南西に開口する谷津の西側縁辺で、No.22地点の南・山麓部に位置する。遺跡地一帯は、早くから耕作地として平坦化されており、水田面との比高差は約3mである。

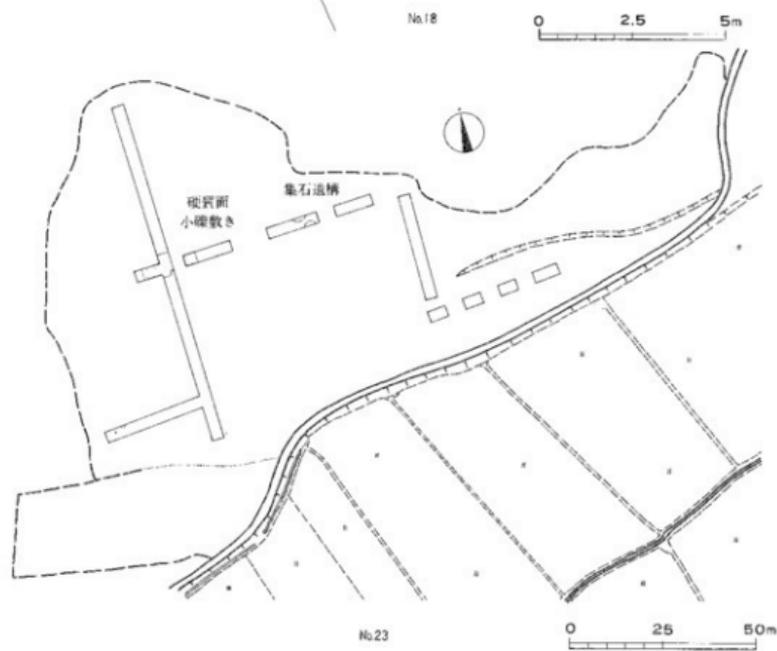
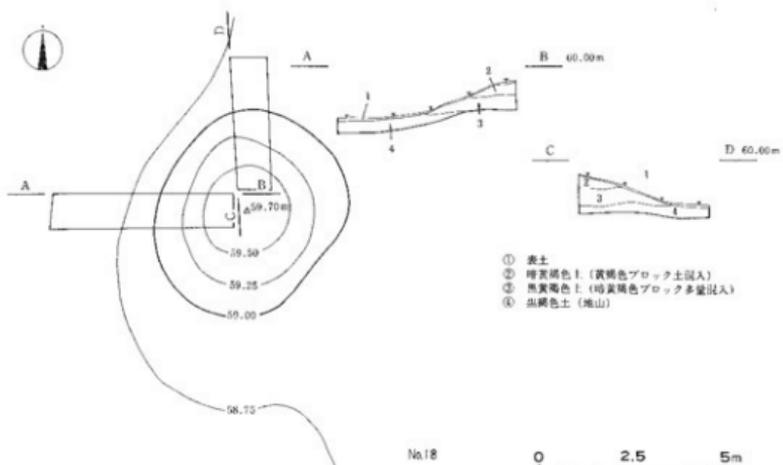
試掘トレンチは、遺跡地のほぼ中央に東西・南北方向へと5本設定した。南北方向で幅3m×長さ93mを第1南北トレンチとし、その中央を横断する幅3m×長さ67mの第1東西トレンチ、その東端から南方向へ幅3m×長さ30mの第2南北トレンチ、その南端から東方向へ幅3m×長さ37mを第2東西トレンチ、第1南北トレンチの南端部から西方向へ幅3m×長さ27mを第3東西トレンチとした。その結果、第2南北トレンチ及び第2東西トレンチからは遺構・遺物の出土はなかった。第1南北トレンチの北端部より中世瓦(男瓦)の小片を出土し、同トレンチ北半域からは土師器・陶磁器の小破片を検出した。地山面までは10~20cmの深さである。南半域からは若干の陶磁器片を検出しただけであるが、特に南端部に至ると地山面まで30~100cmを超える深さとなる。第1南北トレンチのほぼ中央部とこれに交差する第1東西トレンチ内にては、地表下10~15cmの所より東西15m×南北7mの範囲で硬質の土壌面を検出した。この硬質面の南側幅1~2mは、小砂利敷き(バラス敷き)の平坦部分となっており、何らかの遺構に伴うものであろう。更に第1東西トレンチの東半域からは、地表下10cmの所から直径3~4mの範囲で集石(径10~20cmの円礫)状の遺構2箇所を検出した。第3東西トレンチの西半部からは、径0.3mの円形土坑及び径1mの青灰色粘土範囲を検出した。よって、同地点の西側部分(東西80m×南北100mの範囲)においては、中世以降に何らかの遺構が存在した事は事実であり、それが寺院跡の可能性を秘めている事は、出土遺物・地名伝承などからして期待され得るべきものであろう。



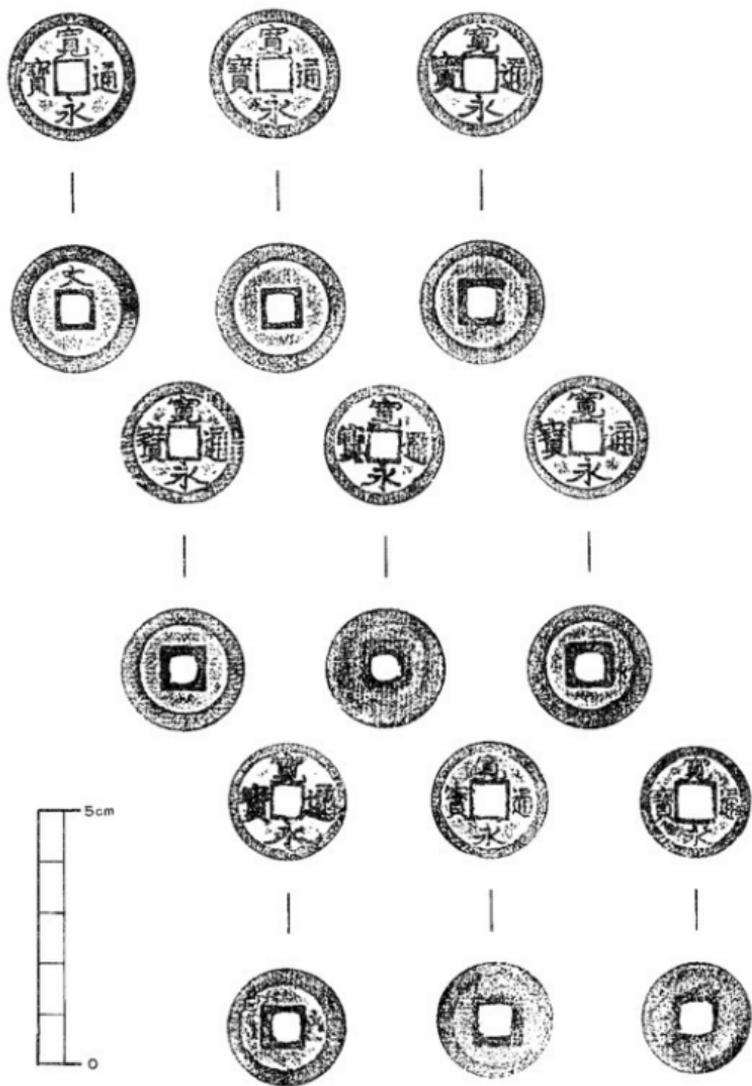
第155図 試掘調査遺跡(No.12・13)



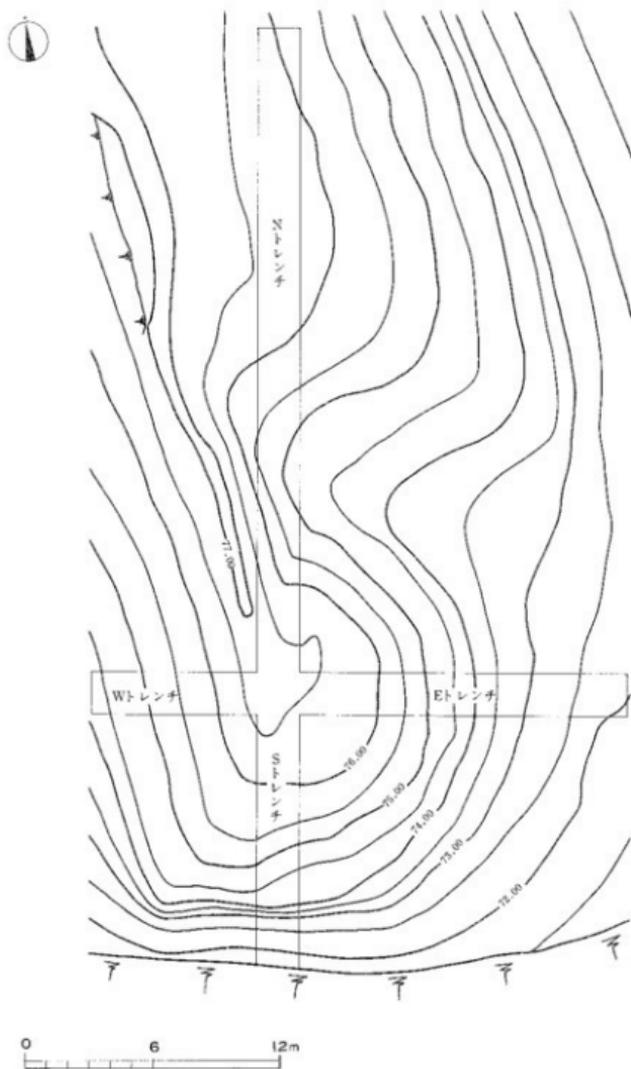
第156図 試掘調査遺跡(No.14・15)



第157図 試掘調査遺跡(No.18・23)



第158圖 No. 18 出土古錢(拓影)



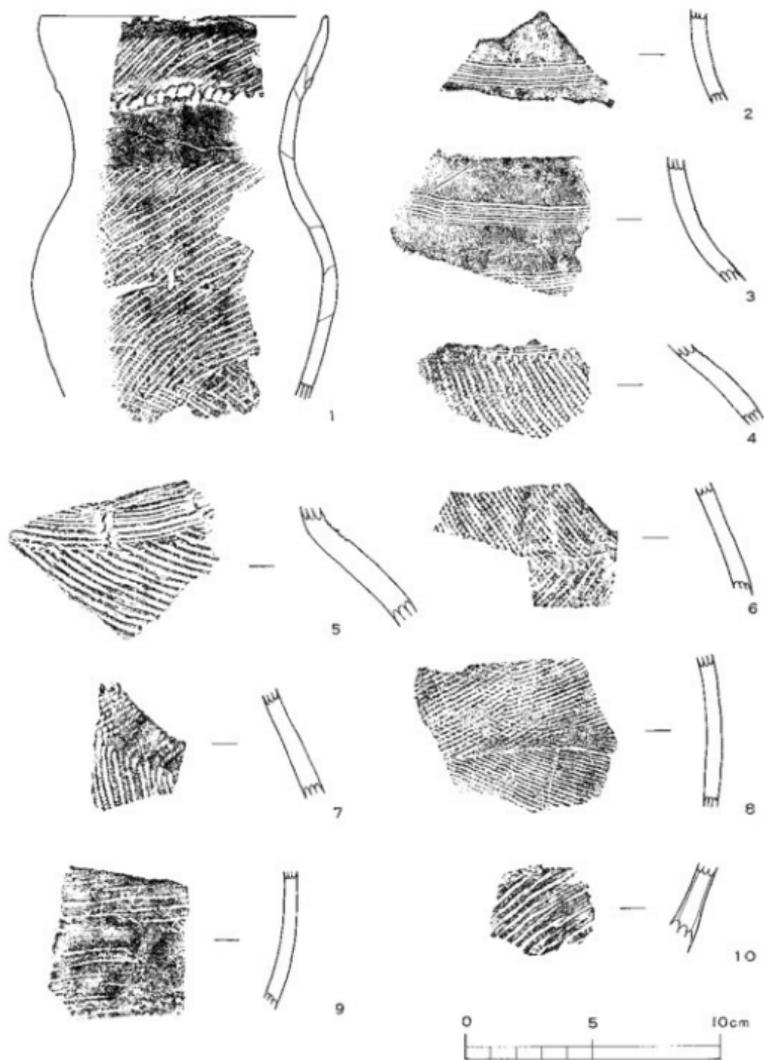
第159図 試掘調査遺跡(No.20・21トレンチ配置図)



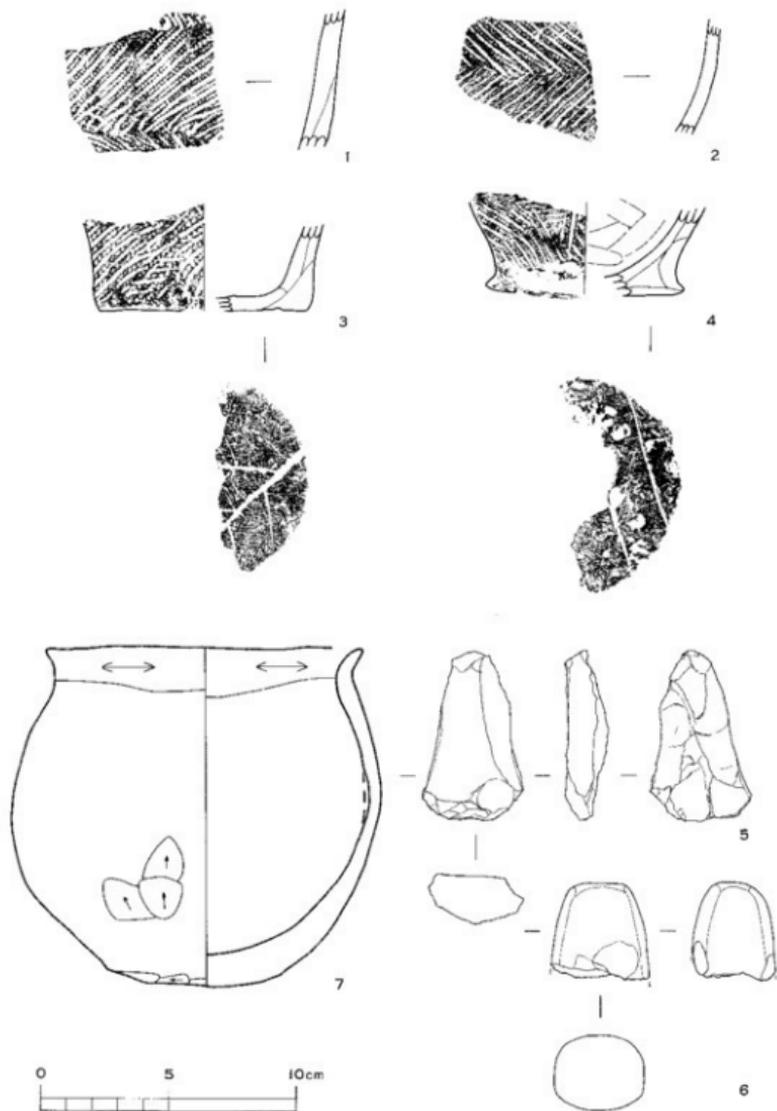
第162図 No 20トレンチ内確認石棺平面図



第163圖 No. 20・21 出土遺物(1)



第164圖 Na 20・21 出土遺物(2)



第165圖 No.20・21出土遺物(3)

4. 保存遺跡

概 要

保存遺跡については、調査前の踏査時にゴルフ場造成地域内に確認された遺跡 24 箇所(調査に入ってから新たに 2 箇所を発見した為、計 26 箇所となった)を対象として、そのうちゴルフコースの造成工事箇所に係らない遺跡について現状保存を答申したものである。遺跡の多くは丑塚古墳群域に存在するもので、古墳 13 基(円墳 12 基、前方後円墳 1 基)・包蔵地 1 箇所であり、対岸の寺山古墳群からは古墳(円墳) 1 基の計 15 箇所を対象遺跡とした。これらの遺跡については、単に現状で保存されるとは云うものの、将来に調査着手は難しい立場にある事などにより、出来る限りこの調査期間内に墳丘測量を実施したものである。

No 1 (第 166 図、図版 46-1)

遺跡は、小栗字丑塚 6860 番地に所在し、小栗地内遺跡を二分する南西に開口する谷津の東側・谷口部に位置している。水田面との比高差を約 3.0 m とする標高 55.00 m の台地上の縁辺部に占地し、墳丘径約 26.0 m ・高さ約 2.3 m を測る中型の円墳である。墳頂部はやや平坦化しており、比較的低下なマウンドを形成しているが、均整のとれた姿を残している。

No 2 (第 167 図、図版 46-2)

遺跡は、小栗字丑塚 6878-1 番地に所在し、No 1 の東方約 200 m の地点で No 1 と No 3 の間を東に浅く進入する小支谷の奥に位置している。水田面との比高差は約 5.0 m であるが、標高 57.00 m のほぼ平坦な台地上で丑塚古墳群のほぼ中央に位置している。墳丘径約 30.0 m ・高さ約 4.0 m を測る中型の円墳である。全体的に均整のとれた円墳で、旧状を良好に残している。

No 3 (第 168 図)

遺跡は、小栗字丑塚 6886 番地に所在し、No 1 の南方約 100 m の地点で No 1 とは東に進入する浅い支谷を挟んで対岸の突端部に位置している。水田面との比高差は約 7.0 m あり、標高 57.00 m の台地縁辺部に占地する。墳丘径約 20.0 m ・高さ約 1.5 m を測る円墳である。墳頂部の東側には、長径 4.5 m × 短径 3.0 m を測る平面不整形を呈する盗掘坑が存在する。墳丘自体もやや崩落した様相を呈し、低下なマウンドとなっている。しかし、墳丘の東側は自然丘陵の延長となっており、低湿地を望む北・西・南側は顕著にマウンド部を形造る姿となっている。

No 4

遺跡は、小栗字丑塚 6914-22 番地に所在し、No 3 の南東約 230 m の地点で北東に進入する浅い小支谷の北側・谷口部の突端部に位置し、No 3 とは同一の台地上(標高 57.00 m)の縁辺部に占地している。古くから注目されていた前方後円墳で、俗に「狐塚」と称されている。現況は、同古墳

の周囲にまで耕作が及び、後円部径約20.0mと円筒埴輪片を残すだけである。かつて、地元の郷土史研究家である藤田清氏は、『常総古文化研究』(藤田清・中村盛吉共著、1972年)・小貝川文化の中で

「蓬田西方丘陵上にある狐塚は前方後円墳であるが、前方部は開畑され、僅かに名残りをとどめているに過ぎない。後円部は高さ6メートルぐらい。長さ20メートルぐらいあるが、周囲より削り取られてある。前方部と合わせれば、現在は底辺部の長さ40余メートルと目測される。墳丘上はかつて大演習の際、重機の銃座が設けられ、壕を構築したのでその跡が残っている。円筒埴輪片などは、その時の出土であろうか、すべて大型である。この墳には立派な埴輪が埋もれていたことが想像される。以下略」

と報告している。

No. 6

遺跡は、小栗字丑塚6901-1・他に所在し、No.4の東側一帯に面して存在する。標高57.00mの台地縁辺部で、旧石器から縄文・土師器・須恵器が散布する包蔵地である。現況は山林及び畑地となっている。当地は、谷島静訓氏によって確認・報告がなされており(「茨城県西および縁辺における旧石器遺跡」・『那珂川の先史遺跡』第2集、1968年)、昭和31年11月がその発見の端緒となっている。遺物は総て表採されたものであるが、チョッピング・ツール、サイドスクレイパー、ナイフ、ポイント、有舌ポイント、稲荷台式土器などを出土している。

No. 7 (第169図、図版47-1)

遺跡は、小栗字丑塚6811番地に所在し、No.2の東方約130mの地点で東に進入する浅い小支谷の谷奥部に位置し、背後の標高119mの山塊の西側斜面の地形変換地点に存在する。標高65.00mの地に占地し、水田面との比高差は約13mあり、墳径約28.0m・高さ約4.0mを測る中型の円墳である。墳形は全体的に良好に残り、特に谷津を望む西方はマウンドの旧形を良くしている。古墳の東側墳丘裾部には、2.0×1.5mの方形の土取り跡2箇所が存し、墳丘の南西部・中腹には6.5×3.0mを測る平面不整形の盗掘坑を確認する。また、墳頂部西側の一部にも崩落箇所が存在する。

No. 8 (第170図、図版47-2)

遺跡は、小栗字丑塚6819番地に所在し、No.7の北方約100mの地点で背後の標高119mの山塊の西側斜面・山麓部(地形の変換地点)に位置している。水田面との比高差約13mの標高65.00mの地に占地している。遺跡の東側と南側は、丘陵斜面の延長による自然地形であり、わずかに北側部分にのみマウンドを想定させる膨れを認める事ができる(高さ約50cm)。その膨れの頂上部で平坦な地に、径10cm内外の円礫がまわって露呈している。なお、同遺跡については、調査前の踏査時に占墳との推定を行ったものである。

No 9 (第170図, 図版48-1)

遺跡は、小栗字丑塚6819番地に所在し、No 8の北側に並置する。立地はNo 8と同様で、遺跡背後の山塊の斜面山麓部(地形の変換地点)に位置している。水田面との比高差は約13mで、標高65.00mの地に占地している。遺跡の東側は、丘陵斜面の延長による自然地形であり、北側及び南側よりわずかにマウンドの膨らみを想定できるものである(高さ約50cm)。なお、同遺跡については、調査前の踏査時点に古墳との推定を行ったものである。

No 10 (第170図, 図版48-2)

遺跡は、小栗字丸山6762番地に所在し、No 7の北方約140mの地点に位置している。背後の標高128.2mの山塊の西側斜面の裾部に存し、南西に張り出す緩斜面上に占地する。水田面との比高差は約16mあり、標高68.00mの地に低平なマウンドを形造っている。墳丘径約20.0m・高さ1.5mを測るが、特に谷津を望む西及び南方向にマウンドを見せている。同遺跡もまた、調査前の踏査時点に古墳との推定が行われたものである。

No 11 (第169図, 図版49-1)

遺跡は、小栗字丸山6760番地に所在し、No 10の北方約60mの地点に位置している。No 10と同様に背後の山塊の西側斜面裾部に存し、水田面との比高差が約18mある標高70.00mの地に占地している。遺跡の東側は、丘陵斜面の延長であるが、特に西側に張り出す様にマウンドを形造っている。墳丘径約14.0m・高さ1.5mを測る低平なマウンドを有している。同遺跡は、北・西・南の三方向からそのマウンドを視認する事ができる。なお、遺跡は調査前における踏査時点に古墳との推定を行ったものである。

No 16 (第170図, 図版49-2)

遺跡は、小栗字丑塚6835番地に所在し、No 15の東方約50mの地点に位置している。一帯は、背後の標高128.2mの山塊の西側裾部で、谷津に望む低い台地を形成している。遺跡はその台地の中央付近で、水田面との比高差を約5.0mもつ標高59.00mの地に占地している。同地一帯は、かつて畑地として開墾され(現在は山林となっている)、同遺跡も亦その周囲及び南西半域を削土されている。現況は、わずかに6×4m、高さ1mの範囲で平面半円形状を遺存するに過ぎない。

No 17 (第166図, 図版50-1)

遺跡は、小栗字丑塚6839番地に所在し、No 1の北東約180mの地点に位置している。周囲には北東にNo 15、西にNo 18が存し、水田面との比高差を約5.0mもつ標高59.00mの同一台地上に占地する。墳丘径約17.0m・高さ約1.5mを測る円墳である。同墳は、その東部に不自然な広がりを見せているが、それは後世の削平による所業と思われる。また、墳丘の北西裾部には3×3mの範囲で平面方形を呈する盗掘坑を確認する事ができ、径10cm内外の礎も露呈している。墳形は低平なマウンドであるが、特に南西部などは比較的良好に遺存するものである。

No. 19 (第168図)

遺跡は、小栗字浦山6654-1番地に所在し、No. 20の南方約15mの地点に位置する。同地点は、小栗地内を二分する南西に開口する谷津の西側丘陵の斜面上に位置し、対岸の丑塚古墳群と相對峙する寺山古墳群中で唯一現状保存が図られた遺跡である。水田面との比高差を約13.0mもつ標高68.00mの地に占地し、谷津を望む南東に張り出した傾斜面上に構築されたものである。墳丘径約10.0m・高さ約1.2mを測る円墳であり、北西部は自然の緩傾斜面で、谷津を望む南東部にマウンドの構築を視認できる。墳形は、この南東に下る傾斜面を利用して、低平なマウンドを形造っているものと思われる。

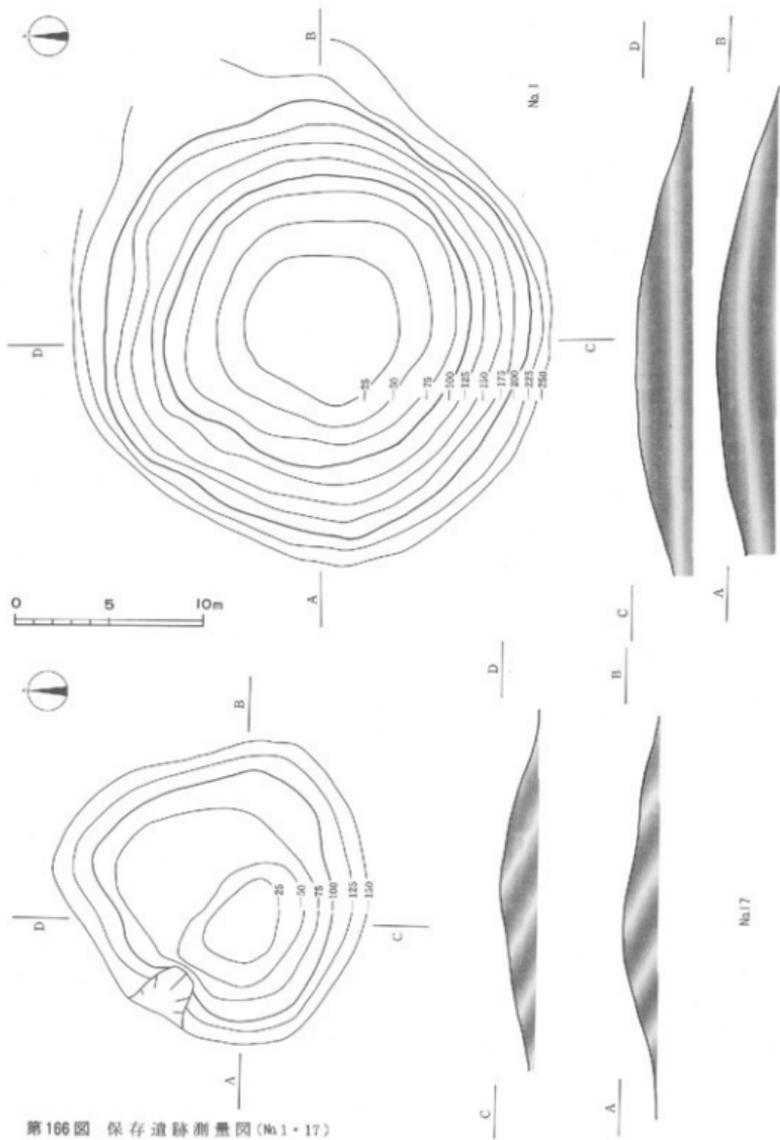
No. 25 (第167図、図版50-2)

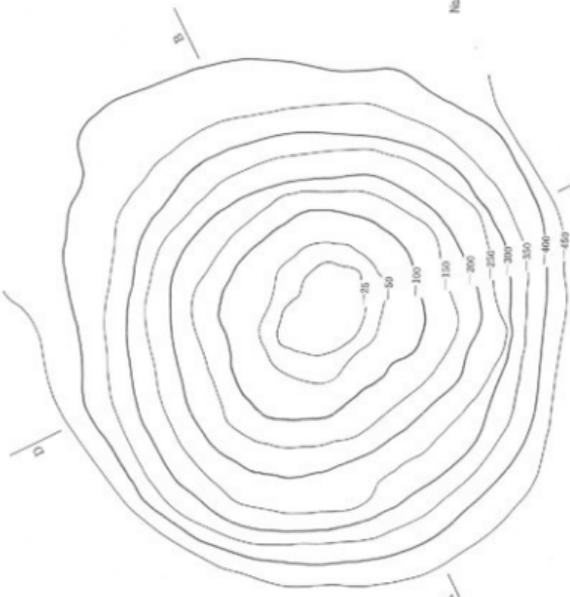
遺跡は、小栗字丑塚6828番地に所在し、No. 1の北東約330mの地点に位置している。同地点は、背後の標高128.2mの山塊の西側丘陵裾部で、谷津に面する低い台地を形成している。遺跡は、水田面との比高差を約6.0mとする標高60.00mの地に占地し、比較的良好に旧形をとどめている。墳丘径約15.0m・高さ約2.0mを測る円墳で、墳頂部はやや平坦で低平なマウンドを形造っている。同墳は、調査前の踏査時点では確認されておらず、保存遺跡の再確認時に発見されたものである。測量調査の結果、同墳はゴルフコースには係らない為、現状保存が可能となったものである。

No. 26 (第170図)

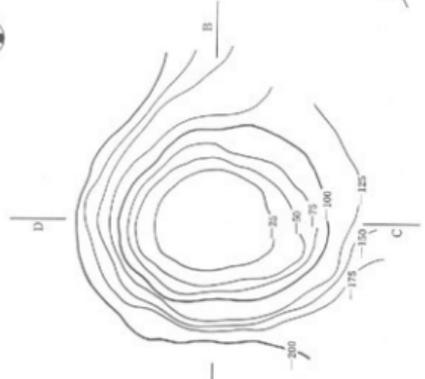
遺跡は、小栗字丑塚6822番地に所在し、No. 25の東方約50mの地点に位置している。付近にはNo. 12が存し、やはり同一の台地上に点在する遺跡である。水田面との比高差を約8.0mとする標高62.00mの地に占地し、特に谷を望む西側に向けて構築されている。墳丘径約8.0m・高さ約1.2mを測る円墳である。同墳も亦、調査前の踏査時点は未確認であり、保存遺跡の再確認時に発見されたものである。No. 25と同様に、協議の結果現状保存が可能となったものである。

第166图 保存道跡測量図(№1・17)





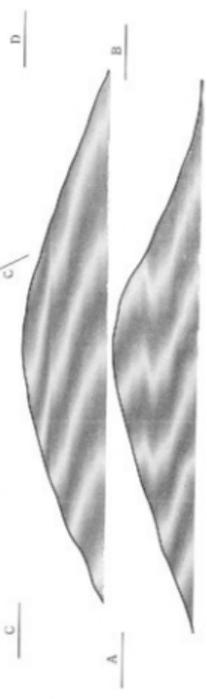
No. 2



No. 25

0 5 10m

第167圖 保存遺跡測量圖 (No. 2・25)



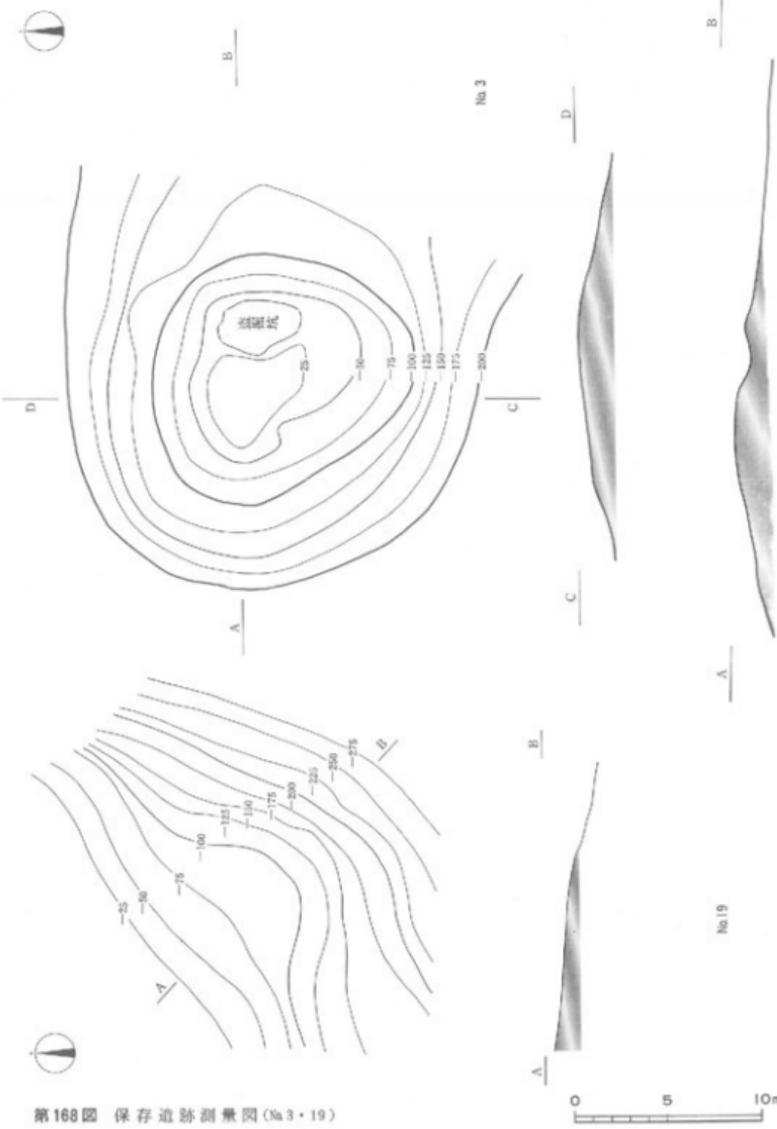
C A

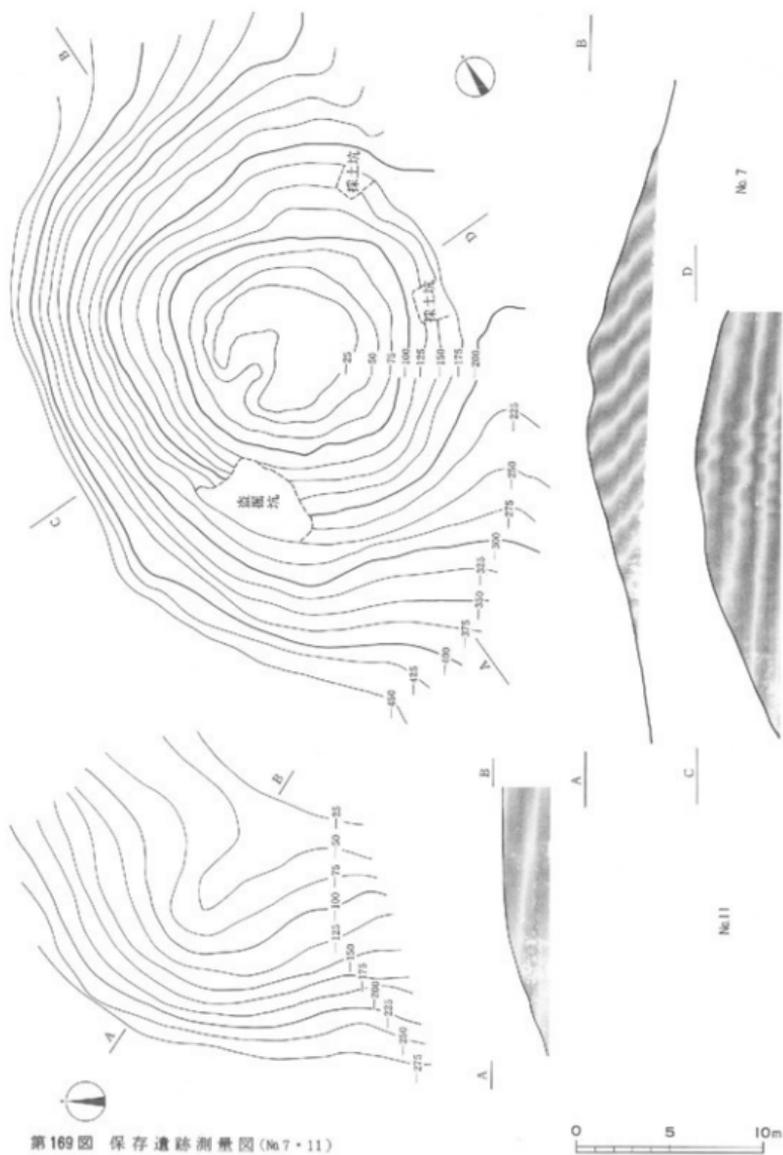


C A

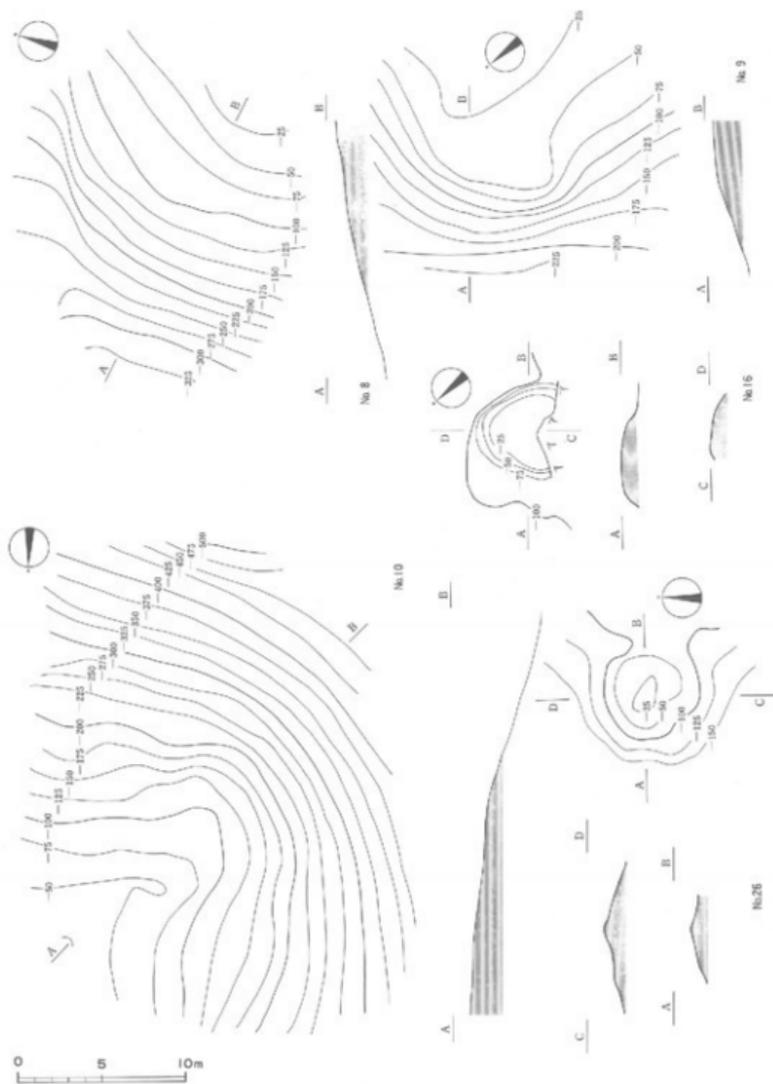
IV 遺 跡

第168圖 保存道跡測量圖(№3・19)





第169图 保存遺跡測量图(No.7·11)



第170图 保存迹跡測量图 (No. 8 · 9 · 10 · 16 · 26)

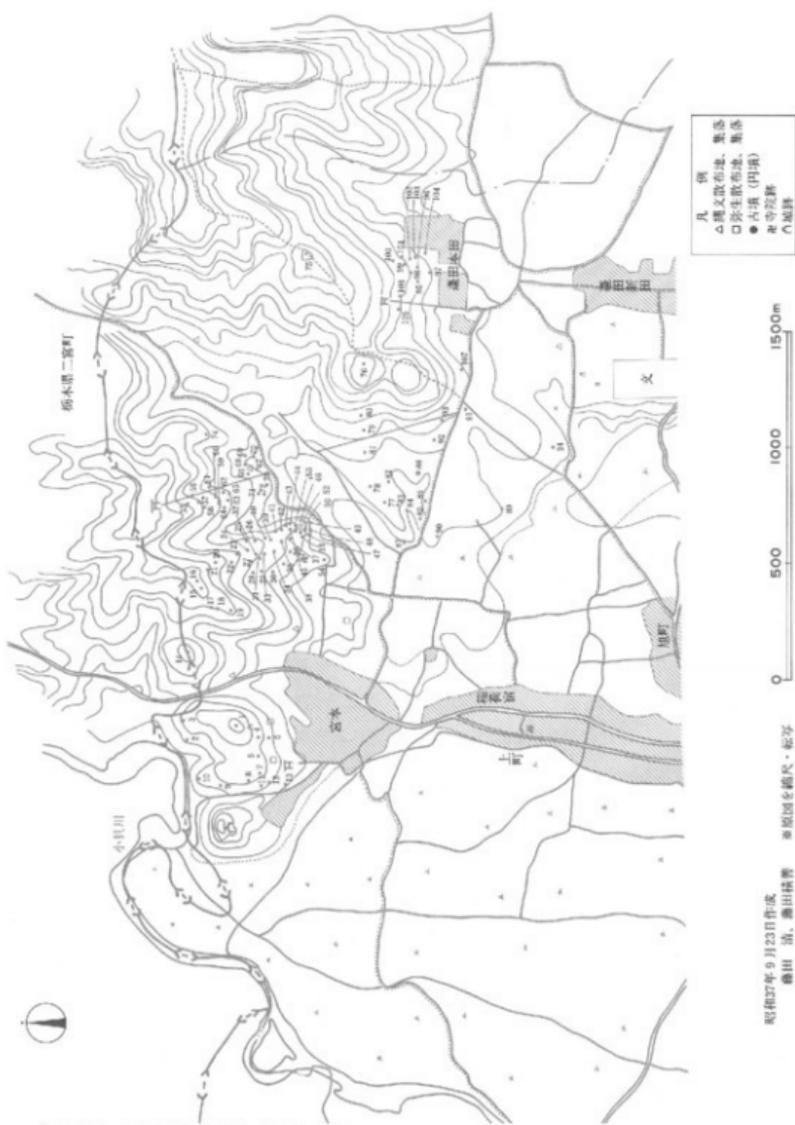
V ま と め

小栗地内遺跡において検出された遺構は、住居跡・古墳(石室・周溝)・中世墓地・溝・供養塚などであるが、それにも増して多くの遺物から見れば旧石器・縄文・弥生・古墳・奈平・鎌～室・江戸時代に至るまでの歴史事象を窺い得る事ができるものである。

とりわけ、茨城県西部地域から栃木県南部地域にかけて(小貝川流域)の旧石器時代遺跡に注目した谷島静訓氏は、昭和26年頃から協和町内の縄文時代早・前期の遺跡の発見と共に当時クローズアップされつつあった旧石器(先土器・無土器文化とも称された)に熱意を示し、小貝川流域に多くの足跡を残された^{註1}。今回、No 22地点のDV-5区(中グリッド)内において表採された資料(第122図-1)についても、協和町内の旧石器時代遺跡の分布状況より見れば看過できない資料の1つと云える。協和町内の旧石器時代遺跡について見れば、西方1km以内に「城山遺跡」・「おっ起し遺跡」が存し、南方1.5km以内に「狐塚遺跡」・「中台遺跡」を擁している。

縄文時代においては遺構の検出には至らなかったが、No 22地点の標高72.00m付近に前期の遺物、No 24地点の標高53.00m付近に後・晩期の遺物を出土している。遺跡は、同地周辺の台地縁辺部や山裾部・谷津沿いに広く分布しており、その傾向は弥生時代にも続くものである。しかも、弥生時代遺跡の分布状況についてみれば、今調査区域内においては標高90.00m付近に発見されたX号石棺の周辺においても弥生土器を表採できたと言う事実が明らかにされた。期的には、No 22地点(SI-1)やNo 21地点において検出された遺構・遺物と同一の弥生時代後期に比定できるものである。こうした観点よりすれば、勿論弥生時代の住居跡の検出は町域ではこの小栗地内が初めての事であり、今後共に周辺の山頂部に至るまでの広範囲をその対象地域として活用されるべきものであろう。

古墳時代においては、特に昭和37年に藤田清・藤田積善両氏によって作成された分布図(第171図)が大いに参考となる。古墳群を形成するのは町域でもこの小栗地内だけであり、西方より宮本古墳群・寺山古墳群・雷神山古墳群・丑塚古墳群・天神山古墳群の存在が知られ、中でも今回の造成地域内には寺山古墳群・雷神山古墳群・丑塚古墳群の三支群が含まれている。寺山古墳群は、今調査時点のNo 19地点と試掘調査にとどめたNo 20地点の2基は保存策が図られる事となり、No 22地点は既に造成された地域内から9基の古墳を再確認する事ができた。しかも、今回のゴルフ場地域内となっている山頂部にかけては、更に数基の古墳の存在を窺う事ができる。これらは、保存される先の2基の古墳と共に山頂部付近に存在するであろう古墳には、今後の慎重な対策を必要とするものである。雷神山古墳群は、今調査時におけるX号石棺の発見に伴って注目され、



第171图 協和町小栗地内古墳分布图

更に谷奥部にまで範囲が延びる可能性があるもので、しかも小栗地内でも初現的な古墳群として注目したい遺跡地の1つである。山裾部はNo.22地点と同様に既に鶏舎造営時に削平されている様であるが、山頂部から中腹にかけてはまだ存在の可能性を大きく残している。しかも、今後の調査が図られるならば、特に山頂部に弥生時代の遺跡の存り方と共に綿密な調査を要望するものである。丑塚古墳群については、試掘調査遺跡5基を含む18基総てに保存が図られ、他にNo.4地点の東隣りに所在する旧石器・縄文・奈～平までの複合遺跡であるNo.6地点についても保存策を図ったものである。当地一帯は、「狐塚」と称される前方後円墳1基と中型の円墳を主体とする古墳群であり、近世に至ると供養塚も造営されており、今後の保存策が大いに注目される遺跡である。また、町域内において初めて古墳時代の集落跡の一端を検出したことも、特筆されるべきものである。それは、No.24地点(標高53.00m)における古墳時代前期の住居跡(SI-4・5)の検出と、No.22地点(標高69.00～61.00m)における古墳時代中～後期の住居跡(SI-2～9)の検出であった。No.24地点の住居跡は中央炉の存在が明らかになり、No.22地点ではその多くが北カマド(斜面上方にカマドを設置する)を有する事が判明した。しかも、No.22地点の住居跡は古墳の築造と共に廃棄されたものであり、寺山古墳群の形成を考える上で重要な示唆を与えてくれるものである。

中世においては、No.23地点に伝承される「ニジムカイ」の地名と背後のNo.22地点に散在する集石遺構(集石1・2)、中世墳墓、更にはクラブハウス建設予定地内の中世墓地(集石と五輪塔群)などをあげる事ができる。No.23地点は、試掘調査終了後に盛土保存を図ったものであるが、寺院跡を明確に裏付ける資料は得られなかった。しかし、可能性としては大いに期待を持てるものであり、本調査も中央に検出された礎敷きの地固め範囲を中心として実施すれば、より明確な遺構の検出を見る事になるであろう。集石1・2及び中世墓地は、明らかに火葬骨の埋納と墓標たる五輪塔の存在を裏付けるものであった。特に集石2においては、基礎石組み遺構と共に蔵骨器の出土を見るなど、13世紀の年代を与えられた好資料となっている。また、中世墳墓は明確な時期比定は行い得ないが、その特殊性の在り方などから中世の墳墓の特異な形態として捉える事も可能である。

近世においては、丑塚古墳群域の試掘調査遺跡であるNo.18地点が江戸時代の供養塚として確認された。当地点は古墳群内に単独に存在するもので、一見して古墳との判別がつけがたいものであった。試掘調査の結果、17世紀第3四半紀を降らない造営である事が判明し、と同時に江戸時代の信仰の一端を窺わせるものであった。今後更に、当地一帯の解明によって民間信仰の在り方を究明する事も可能であろう。

以上、大局的な見解を示してみたが、それでも尚かつ今回の調査によって浮き彫りにされた問題点は数多いものがある。それも総てが今回の調査を端緒として、今後の調査・研究に委ねられ

る事が大ではあるが、調査結果のいくつかを明らかにしてみたいと思う。

弥生式土器と古式土師器について

今回の調査で確認された弥生時代の遺構は、No 21 地点の住居跡とNo 22 地点の住居跡(SI-1)があげられる。これに対して弥生式土器は、その殆どが破片でありながらもNo 21 地点・No 22 地点を中心に数多く確認されており、それらは弥生時代後期に位置づけられるものである。No 24 地点より出土した資料(第 154 図-1)は、他の土器よりも若干時期が古く後期前半に比定され得るのであるが、これ以外は後期後半の土器と考えられる。このうち明確に土器型式が判明するものとしては、十王台式土器(第 78 図-5・6)、二軒屋式土器(第 164 図-5)があげられるが、これらを除く土器群は、その多くが同様の特徴を見せながらも、明瞭に帰属させるべき土器型式が現時点では存在しないものと思われる。

この土器群の特徴を述べる前に、茨城県内の弥生時代後期の土器様相を概観しておきたい。山内清男氏によって十王台式土器が^{註2}提唱された後、十王台式土器と同年に提唱された二軒屋式土器^{註3}との概念規定の混乱もあって、十王台式土器と二軒屋式土器を同型式の異称として捉える傾向が強く、十王台式土器が茨城県内から栃木県に至る広い地域に分布するものと考えられてきた。しかし、近年の資料の増加に伴い十王台式土器の主要な分布圏は、那珂台地を中心とする那珂川流域から福島県夏井川流域までの海岸平野、石岡・竜ヶ崎周辺、鹿行地方と茨城県内でも海岸寄りに^{註4}濃密な分布を示し、また霞ヶ浦沿岸には上稲吉式土器の存在が^{註5}考えられている。これに対して茨城県西部地域の弥生時代後期の土器様相については、不明な点が多い。茨城県西部地域には、県内の海岸寄りに分布する十王台式土器とは若干様相を異にした地域的特性を示す十王台式土器^{註6}が分布するものと考えられるが、さ程濃密な分布は示していない。これに対して結城市田間権限遺跡・香取前B遺跡においては、破片ながらも二軒屋式土器が^{註7}確認されている。この様にみても茨城県西部地域の後期弥生式土器は、十王台式土器と二軒屋式土器が稀薄ながらも分布しているものと思われる。

この様に、協和町を含む茨城県西部地域は、土器型式分布圏の狭間といえるかも知れない。この狭間を埋めるのが、今回の調査による土器群に得られるものと思われる。なお、当遺跡地出土の土器群の特徴は、

- 口縁部は明確な折り返し口縁であり、二段の折り返し口縁も少なからず存在する。
- 口唇部・口縁部下端に縄文原体を押押し、刻み目状を呈する。
- 口縁部には斜行の縄文を施文し、二段の折り返し口縁については原体を変え羽状構成をとる。
- 頸部は無文帯である。
- 胴部は斜行か羽状構成の縄文を施文する。
- 底部には木葉痕を有する。

があげられる。この土器群の典型として、№21地点より出土した片口の壺形土器(第163図-1)があげられる。但しこの土器は、二段の折り返し口縁の上に一部折り返し口縁を加え、片口にするなど若干特異的な例と云えるかも知れない。更に上記した特徴の中には、十王台式土器・二軒屋式土器に共通する点も含まれている。口縁部の折り返しの技法は、二軒屋式土器や県西部地域に分布する十王台式土器にもみられる手法であり、二段の折り返し口縁もしばしば二軒屋式土器では確認されている。また、口唇部・口縁部下端の縄文原体の押圧も二軒屋式土器にみられる手法であり、口縁部のみでは二軒屋式土器に類似する。縄文原体も、二軒屋式土器に多くみられるものと考えられる。この様に当遺跡地出土の土器群は、二軒屋式土器に極く近似する印象を与えるが、二軒屋式土器・ひいては十王台式土器と明らかに異なる点は、頸部が無文である事である。

二軒屋式土器と十王台式土器は、所謂「註9東部弥生式土器」註10に属する土器型式であり、頸部の櫛櫛文はその主体的な文様要素である。これに対して、頸部の櫛櫛文を欠失し無文となっている当遺跡地出土の土器群は、この1点のみでもいかに近似しているとはいえ、二軒屋式土器の範疇に含まれるものかどうか疑問が残るものである。現時点での当遺跡地出土の土器群の帰属すべき編年的位置としては、二軒屋式土器の一亜種として捉えることが最も妥当であると考えられる。当遺跡地出土の土器群の類別は、「新治汲古館」蔵の小栗宮本出土資料(第173図-1)、明野町倉持遺跡第1年次調査出土例、岩瀬町花園遺跡出土例、栃木県真岡市井頭遺跡出土例の他、大和村でも確認されて註12おり、稀薄ながらも確実に小栗地内周辺に分布しているものと考えられる。

次に、当遺跡地出土の土器群の中で考えなくてはならない点は、胴部に施文される縄文の差異についてである。胴部に施文される縄文は、斜行縄文と羽状縄文とが確認されている。この施文方法の違いを同時期のバリエーションとして捉えるのか、当遺跡地出土の土器群の中の時間的推移として捉えるのかについては、問題が残るものである。今回の調査では、層位的な確認はなされず明確な回答は出せないが、縄文の羽状化は斜行縄文よりも後出的要素が強いものとして捉えられる以上、この事はおそらく後者になるものと考えられる。

次いで、古式土師器の問題について若干触れておきたい。古式土師器は№24地点で集中的に確認されたが、今回確認された古式土師器の中で特に注目すべき資料は、№24地点のEIV-2-31区~41区で出土した器台形土器である。当土器(第150図-4)は、胎土が他の土器に比べて明らかに精練されており、また器形的にも南関東地方まで含めた場合でも在地の土器ではないこと等から、明らかに搬入品として捉えることができ、その出自は東海地方の弥生時代後期のものに求められる。また、茨城県内では類別が確認されていない。茨城県内においては、弥生時代最終末の土器と県内で確認される古い段階の古式土師器とでは、ギャップが大きすぎて古い段階の古式土師器は搬入されたものと考えられる。その際の搬入経過について、ひいては古式土師器の出現については多くの議論がかわされてきているが、今回の資料はその問題に一石を投じることになる

世紀の東国と畿内とが密接に結びついた一例をこれらの出土品によって知り得るのである。更に、搬入経路の問題であるが、地理的には太平洋岸からの河川の北上もしくは隣接する古代下野国との関連を窺い得るが、今後の調査・解析の結果に詳細を委ねられるものである。(瀬谷 昌良)

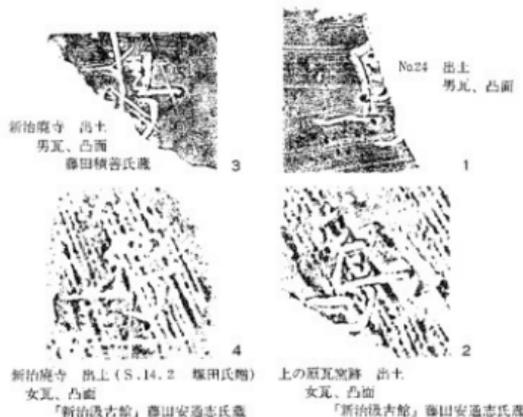
主頭大刀について(第15図-1~6, 第72図-1)

1号墳に副葬されていた金銅装主頭大刀(第72図-1)については、当初より注目に値する所であり、その被葬者と共に古代の新治国内における勢力を窺い知れる資料を供してくれるものである。この主頭大刀の特徴は、第一に把頭の内部の木芯に布が巻かれていたことである。こうした技法は、頭椎大刀にしばしば用いられるが、主頭大刀には例がなく、注目されるものである。同様に頭椎大刀との関係が窺えるものに、真壁郡真壁町山王塚古墳出土の主頭把頭があるが、この把頭には縦の畦目が施してある。^{註18}主頭大刀と頭椎大刀は、共に6世紀後半に円頭大刀より派生したものと考えられており、主頭大刀の中でも把頭の頭頂部が左文字の「へ」の字状を呈するものは、把頭が肥大化する傾向にあり、この事は頭椎大刀の影響によるものと思われる。第二の特徴は、片側縁が波状を呈する刀装具である。鞘尻金具に接して貴金具を用いている類例はあるが、本例の貴金具は表面が波状になっており、珍しい例であるにもかかわらず、更には波状を呈する刀装具が用いられると云うもので他に類例は見られず、また、その形態にも類例がない。第三の特徴は、鞘中金具と足金具が共に用いられていない事である。通常、主頭大刀の場合、鞘に素鞘を用いるときには足金具が付き、鞘中金具を用いる準素鞘のときには足金具は付かない。しかも、本例で見える事ができる貴金具は、4点検出され足金具は付かなかったと考えられる。従って、本例の鞘は準素鞘と考えられるものであるが、鞘中金具の検出には至らなかった。このことは、既に腐食して残存しなかったとも推定されるが、他の刀装具の残存状況が比較的良好である事などから、本例には当初より着装されるには至らなかったものと考えられる。なお、本例には鞘口金具や把間に用いられる金銅板も検出されておらず、問題は残る。更に、以上の特徴を踏まえた主頭大刀の年代であるが、須恵器など年代判定の基準となる可き遺物は伴出してない為、断定するまでには至らないが、八窓透鈿を有する事や有窓鈿を用い準素鞘で丸尻金具を持つ主頭大刀は、陶器編年に云うところのTK-209から217型式の須恵器を伴出する事^{註20}などから、本例には、7世紀前半の年代を与えられるものである。(齊藤 伸明)

文字瓦について

小栗地内より出土した文字瓦は、No.24 地点で地形最高位付近のEIV-1-24~25区内(耕作土内)より得られたものである(第153図-1~3)。当資料は、男瓦の断片で凸面にへら書きによる「鳥」の文字を有しており、同一台地上の南方約3.2kmに存する新治廃寺の文字瓦との関連が窺い知れたのである。新治廃寺の出土遺物は、地元の郷土史研究家である藤田積善氏及び藤田清氏の志を次いだ藤田安通志氏両宅に保管されており、比較資料としての調査に御協力を御願した。

資料調査には向氏より心良く協力を得られ、新治廃寺(第172図-3、4)及び上野原瓦窯跡出土資料(第172図-2)の計3点を拓影で示した。かつて、新治廃寺の資料は高井佛三郎氏によって報告^{註1}がなされており、今回の小栗地内遺跡よりの出土資料は同廃寺出土の遺物と同一である事も判明した。



第172図 No.24 出土文字瓦比較資料

しかしながら、その出土状況は遺構に伴うものではなく、断片採集されたものと同じである事などから比較資料としてとどめておきたい。尚、北東約100mに中世寺院「寺山廃寺」の存在が知られるが、当地一帯より採集された瓦とは明らかに性質を異にしている。(瀬谷 昌良)

中世瓦資料

小栗地内遺跡より出土した中世瓦は、No.23地点(「寺山廃寺」の存在が推定される)及びその背後の斜面上より数点検出された(第123図-1、第124図-1)。No.23地点よりは女瓦の断片で、斜面上(VI号墳石室南方)よりは體瓦・男瓦の断片である。「寺山廃寺」の採集資料は、「新治遺古館」に所蔵されており、遺物の実測・採拓については心良く御協力を賜わった(第174図-1~8)。同資料は、かつて藤田清氏・高井佛三郎氏によって報告^{註2}がなされ、中世鎌倉期の県西部地域における寺院形態の一端を明らかにしている。この「寺山廃寺」を根拠地の1つとした小栗氏の動向は、その背後の斜面に造営された中世墓地(No.22地点や同一の標高で西城に検出された墓地群など)の存在などにより、13世紀を中心に展開されていた事が判明した。尚、当廃寺と同范関係にある體瓦は下館市・川澄くまどう遺跡(第174図-2)より出土している。(瀬谷 昌良)

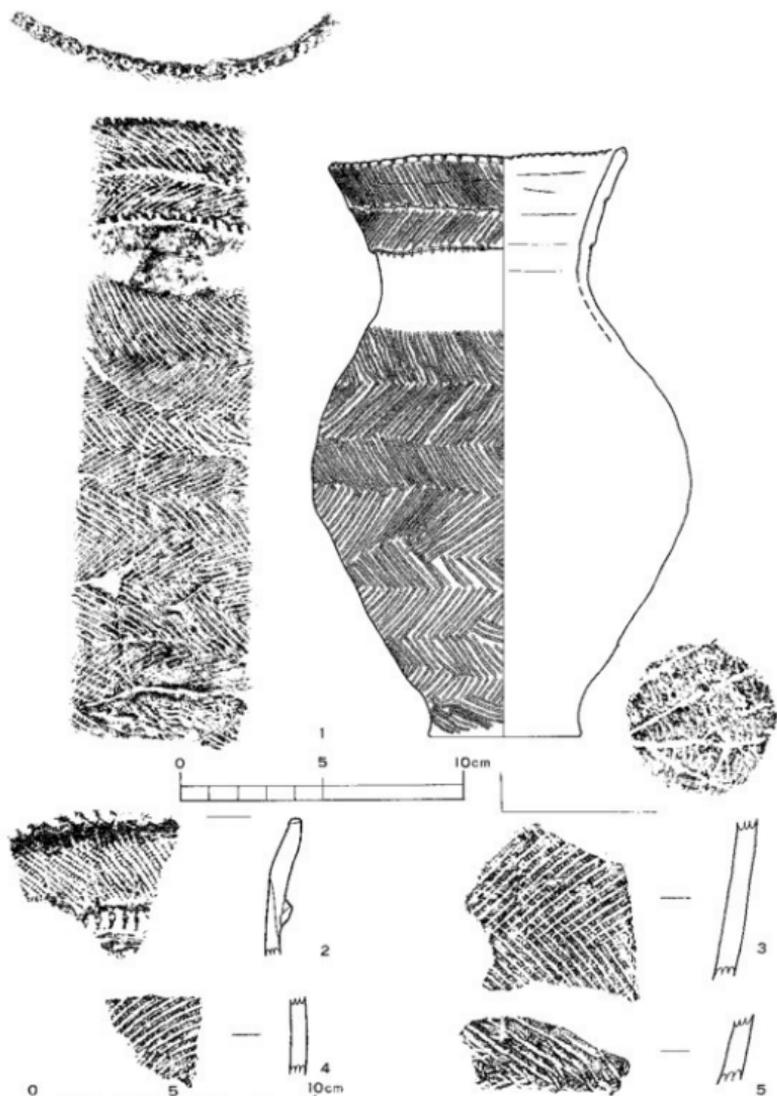
註1 谷島静訓 「茨城県西およびその縁辺における旧石器遺跡」『那珂川の先史遺跡』第2集 1968

註2 山内清男 『日本先史土器図譜』1 1939

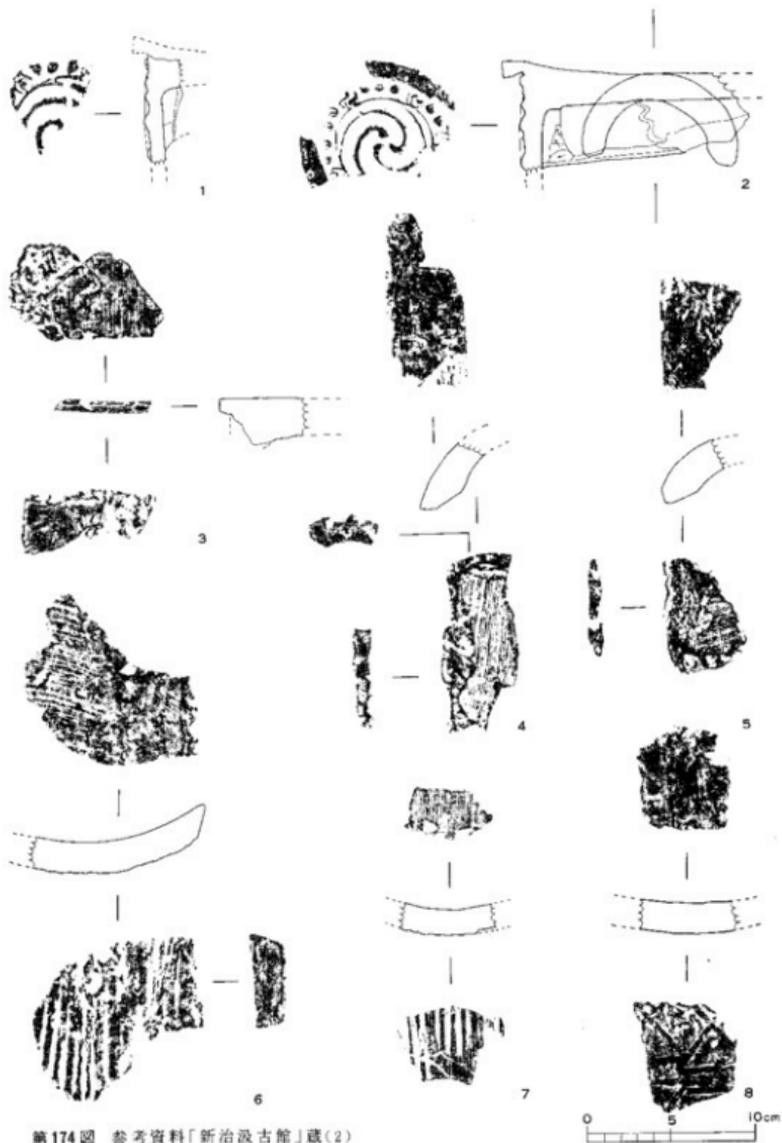
註3 寺内武夫・藤田善之助 「下野中原遺跡調査概報-第1回・第2回-」『考古学』10-9・10 1939

註4 十王台式土器の主要遺跡として、茨城県内では十王町十王台遺跡、東海村郡原遺跡、那珂湊市北ノ上遺跡、同宮ノ上遺跡、大宮町富士山遺跡、大洗町髭釜遺跡、水戸市お下屋敷遺跡、鉾田町堀

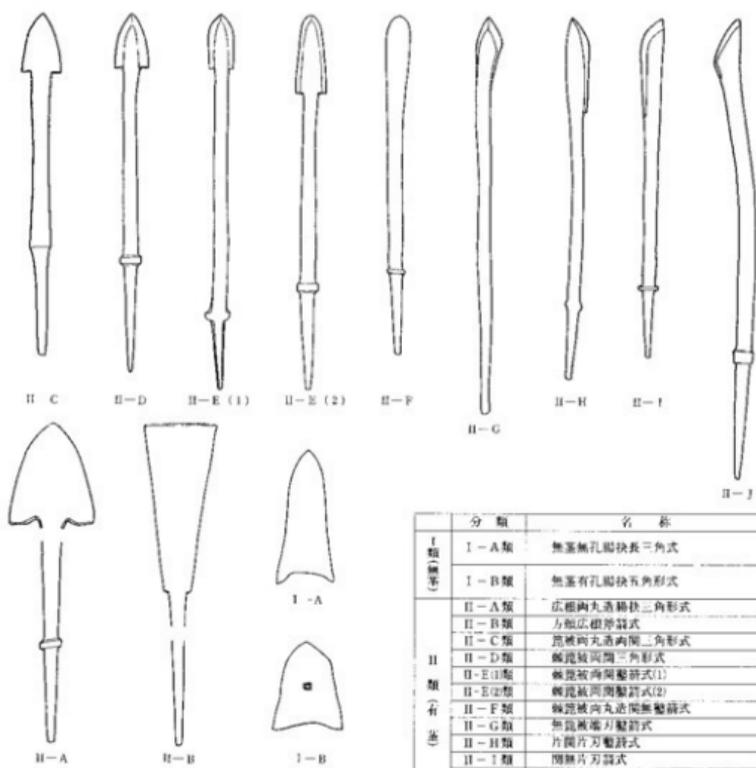
- 田遺跡、同安塚遺跡などがあげられる。
- 註5 川崎純徳 「霞ヶ浦沿岸における弥生文化終末期の様相—特に貼瘤を持つ土器群を中心に—」『婆良岐考古』第5号 1983
- 註6 佐藤次男他 「第3章 弥生文化の成立と社会の発展」『茨城県史』原始古代編 1985
- 註7 安田厚子 「三 稲作の始まり」『結城市史』第四巻 古代中世通史編 1980
- 註8 山内清男 「日本先史時代概説」『日本原始美術』I 1964
- 註9 山野井哲夫他 「倉持遺跡—第1年次調査—」『茨城県明野町埋・文調査報告第1集』1983
- 註10 川又清明 「岩瀬町花園遺跡出土弥生土器」『婆良岐考古』第6号 1984
- 註11 大金宣亮他 「井頭」 栃木県教育委員会 1974
- 註12 真壁郡大和村教育委員会蔵 教育委員会の御好意で実見を得た。
- 註13 各国・各郡の中心地には国衙・郡衙・寺院が設置され、しかも寺院の運営には信仰の中心ばかりではなく文化の栄華も結集した事による。当地には同一台地上に新治廃寺・新治郡衙跡が隣接して存する。
- 註14 勝田市 『勝田市史』別編1 虎塚壁画古墳 1978
- 註15 宇都宮市 『宇都宮市史』原始古代編 1979
- 註16 末永雅雄 増補『日本上代の武器』1981
- 註17 本書所収 佐々木稔・伊藤薫「小栗地内古墳出土鉄器の金属学的解析」による。
- 註18 次城烈 『茨城県史料』考古資料編・古墳時代 1974
- 註19 刀装具の分類は、滝瀬芳之氏によるものを用いた。
- 滝瀬芳之 「岡墳・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984
- 註20 註19に同じ
- 註21 高井梯三郎 『常陸国新治郡上代遺跡の研究』桑名文屋堂 1944
- 註22 藤田清・中村盛吉共著 『常陸古文化研究』1972
- 註23 註22に同じ
- 註24 藤田清(註22に同じ)
- 高井梯三郎 「常陸・下野の中世瓦管見」『茨城県史研究』43号 1979
- 註25 藤田清氏や地元近隣の研究者によって集められた資料が、藤田清氏宅(現在は御子息である藤田安通志氏宅)の資料館に保管・展示してある。



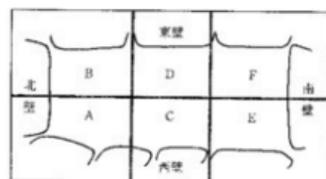
第173圖 參考資料「新治汲古館」藏(1)



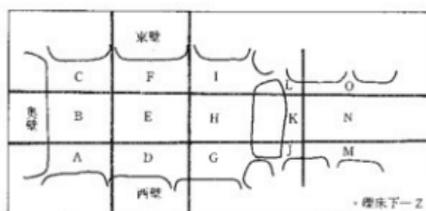
第174図 参考資料「新治汲古館」蔵(2)



分類	名稱
I類 (無基)	I-A類 無基無孔錐狀長三角式
	I-B類 無基有孔錐狀五角形式
	II-A類 広細柄丸首錐狀三角形式
II類 (有基)	II-B類 方細広細柄錐式
	II-C類 荒柄丸首錐狀三角形式
	II-D類 扁錐狀圓錐三角形式
	II-E(1)類 扁錐狀圓錐錐式(1)
	II-E(2)類 扁錐狀圓錐錐式(2)
	II-F類 扁錐狀丸首錐狀錐式
	II-G類 無基扁錐刀狀錐式
	II-H類 片圓片刀狀錐式
	II-I類 薄圓片刀狀錐式
	II-J類 薄片刀狀錐式
II類	形式不能
-	分類不能



竪穴式石室遺物出土地点区分模式図



横穴式石室遺物出土地点区分模式図

第175図 鉄鏃・石室区分模式図

第1表

1 直刀 (cm)

番号	遺物号	名称	全長	刃部			茎部			目釘穴	図版番号	遺存度	出土地点	備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
1	I-1	大刀	88.0	65.3	3.0	0.75	12.7	2.26	0.6	1	第104図-1	完形 フルラケ	P・I	金銅製短
2	I-2	大刀	92.8	78.4	2.9	0.6	14.4	2.05	0.45	2	第104図-2	完形 フルラケ	P・I	肥後、崎、目釘 2
3	III-1	大刀	(81.6)	(81.6)	3	0.8	-	-	-	-	第106図-1	刃部4/5 フルラケ	H	
4	III-2	大刀	74.1	64.2	2.8	0.6	9.9	1.6	0.4	1	第104図-3	完形 カマズ	H	短、目釘1
5	III-3	大刀	(52.9)	48.7	2.4	0.6	(4.2)	1.7	0.4	-	第105図-1	ほぼ完形 カマズ	H	
6	IV-16	小刀	30.15	24.25	2.8	0.6	5.0	1.6	0.4	1	第105図-2	完形 カマズ	I	崎、目釘1
7	IV-17	大刀	57.2	48.8	2.6	0.7	8.4	1.5	0.5	-	第105図-3	完形 カマズ	I	短
8	IV-18	大刀	107.0	86.4	3.7	0.6	20.6	2.3	0.67	2	第106図-2	完形 フルラケ	I	崎、目釘1
9	IV-19	小刀	36.8	28.63	3.0	0.6	8.17	2.0	0.45	1	第106図-4	完形 フルラケ	I	肥後、目釘1
10	V-1	大刀	(85.5)	(71.3)	3.6	0.7	14.2	1.9	0.5	2	第106図-3	刃部3/4	D	肥後全具
11	IX-22	大刀	65.8	55.9	2.6	0.8	9.9	2.0	0.5	1	第106図-4	完形 フルラケ	A	

2 鉄鏃 (cm)

番号	遺物号	全長 (遺存長)	鏃身部			鏃穂部			茎部			遺存度	図版 番号	分類	出土 地点	備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
1	I-9	(8.30)	2.10	1.08	0.28	(6.20)	0.57	0.30	-	-	-	鏃身部-鏃穂部 1/2	第18図 -1	II-1E1	I	
2	I-10	(5.80)	-	-	-	-	-	(5.80)	-	-	-	鏃穂部	-	-	H	
3	I-24 +288	(3.10)	-	-	-	-	-	(3.10)	-	-	-	茎部	-	-	E+H	一部木質部残存
4	I-28	(2.80)	(2.80)	-	-	-	-	-	-	-	-	鏃身部?	-	-	H	
5	I-32	(9.50)	3.85	0.99	0.40	(5.55)	0.54	0.35	-	-	-	鏃身部-鏃穂部 2/3	第18図 -2	II-H	E	
6	I-32	(9.70)	1.41	0.52	0.30	7.12	(0.60)	0.30	(1.17)	0.39	0.23	3/4残 (茎部先欠損)	第18図 -3	II-F	E	
7	I-33	16.90	2.01	1.00	(0.25)	9.67	0.40 0.51	0.25 (0.28)	5.22	0.41	(0.40)	完形	第18図 -4	II-E11	E	
8	I-36	(4.80)	-	-	-	-	-	(4.80)	0.62	0.45	-	茎部1/3残	第18図 -5	II-短	E	一部木質部残存
9	I-36	(6.60)	-	-	-	(6.60)	0.55	0.40	-	-	-	茎部先-鏃穂部 1/3残	第18図 -6	II-短	E	無鏃穂
10	I-39	(13.11)	3.10	0.94	0.40	8.30	0.61	(0.40)	(1.71)	0.54	(0.40)	ほぼ完形 (茎部欠損)	第18図 -7	II-1	E	
11	I-39	(7.15)	2.27	0.80	(0.30)	(4.90)	(0.68)	(0.50)	-	-	-	鏃身部-鏃穂部 1/2	第18図 -8	II-短	E	
12	I-40	(4.77)	2.15	(1.12)	0.37	(2.62)	(0.54)	(0.41)	-	-	-	鏃身部-鏃穂部 1/3残	第18図 -9	II-E11	E	
13	I-42 +186	(9.55)	2.96	0.77	0.25	(6.60)	0.58	(0.25)	-	-	-	鏃身部-鏃穂部 1/2残	第18図 -10	II-1	E+E	

番号	遺物 番号	全長 (遺存長)	鍔身部			刃部			茎部			遺存度	図版 番号	分類	出土 地点	備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
14	I-43	(5.15)	-	-	-	(2.70)	0.65	0.45	2.39	0.41	0.40	鍔部～茎部 1/3残	第18図 - 11	II 類	E	
15	I-44 + 49 + 44	15.00	2.20	1.45	(0.39)	9.70	(0.55) 0.60	0.30 0.31	3.40	0.40	0.32	欠形	第18図 - 12	II-R1	E+E	
16	I-47 + 251	(6.30)	-	-	-	(3.80)	(0.70)	(0.39)	(2.50)	0.47	(0.40)	鍔部～茎部 1/3残	第18図 - 13	II 類	E+E	
17	I-48	(4.80)	2.10	1.45	0.36	(2.40)	(0.55)	(0.41)	-	-	-	鍔身部～刃部 1/3残	第18図 - 14	II-B1	E	
18	I-48	(3.32)	-	-	-	-	-	-	(3.32)	-	-	刃部?	-	-	E	
19	I-48 + 295	(6.80)	-	-	-	(2.20)	(0.59)	0.33	4.60	0.30	0.21	鍔部～茎部 1/2残	第18図 15	II 類	E+E	
20	I-49	(2.40)	(2.40)	1.20	(0.39)	-	-	-	-	-	-	鍔身部	第18図 - 16	II-B1	E	
21	I-50	(4.40)	1.94	1.05	(0.22)	(2.66)	0.6	(0.25)	-	-	-	鍔身部～刃部 1/3残	第18図 - 17	II-R1	E	
22	I-51	(6.40)	-	-	-	(6.40)	-	-	-	-	-	刃部	-	-	E	
23	I-51 (短)	(4.90)	-	-	-	(4.90)	-	-	-	-	-	刃部	-	-	E	
24	I-53	(7.35)	2.05	1.10	(0.35)	5.30	0.53	0.30	-	-	-	鍔身部～刃部 1/2	第18図 - 18	II-R1	F	遺品 25 と同一個体
25	I-53	(4.05)	-	-	-	(2.60)	(0.37)	(0.38)	(1.45)	0.40	0.32	鍔部～茎部 1/4残 (茎元欠)	第18図 - 18	II-B1	E	遺品 24 と同一個体
26	I-54 + 295 + 54	(14.69)	2.20	0.92	0.22	9.40	0.51 0.42	0.28 0.22	2.49	0.41	0.40	欠形	第18図 - 19	II-J	E+Z	茎部一部本質残存
27	I-55 + 49	(6.11)	-	-	-	(1.91)	0.63	0.50	4.20	0.41	0.35	鍔部～茎部 1/3残	第18図 - 1	II 類	E+Z	
28	I-56	(11.75)	3.85	0.88	(0.30)	(7.90)	0.53	0.35	-	-	-	鍔身部～刃部 2/3残	第19図 - 2	II-B1	II	
29	I-57	(3.80)	2.00	0.80	(0.40)	(0.90)	0.40	0.25	-	-	-	鍔身部～刃部 1/4残	第19図 - 3	II-B1	F	遺品 30 と同一個体
30	I-57	(3.60)	-	-	-	(2.90)	(0.58)	0.29	(0.70)	(0.46)	0.25	刃部～茎部 1/4残	第19図 - 3	II-H	E	遺品 29 と同一個体
31	I-58 + 154	15.90	2.09	1.12	(0.31)	10.12	0.43 (0.53)	0.30 0.30	3.69	0.30	0.30	欠形	第19図 - 3	II-B1	E-E	
32	I-60 (長)	(3.61)	-	-	-	(3.61)	-	-	-	-	-	刃部?	第19図 4	-	E	
33	I-60 (短)	(1.82)	-	-	-	(1.82)	-	-	-	-	-	不明(刃部?)	-	-	E	
34	I-61	(2.56)	-	-	-	(2.56)	-	-	-	-	-	刃部	-	-	E	
35	I-62	(6.0)	3.60	0.79	0.31	(2.40)	(0.60)	0.38	-	-	-	鍔身部～刃部	第19図 - 5	II-H	F	遺品 36 と同一個体
36	I-62	(3.79)	-	-	-	(3.79)	0.59	0.39	-	-	-	鍔身部～茎部	第19図 - 5	II-B1	E	遺品 35 と同一個体
37	I-66	(5.30)	3.30	0.95	0.32	(2.29)	-	-	-	-	-	鍔身部～刃部	第19図 - 6	II-B1	E	遺品 38 と同一個体
38	I-66	(2.65)	-	-	-	(2.65)	0.70	0.49	-	-	-	刃部?	第19図 - 6	II-B1	II	遺品 37 と同一個体

番号	遺物 番号	全長 (遺存長)	胴身部			腕部			基 部			遺 存 度	図 版 番 号	分類	出 土 地 点	備 考	
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ						
39	I-67	6.35	1.90	1.00	0.30	(4.45)	(0.60)	(0.30)	-	-	-	胴身部~腕部 1/2	第10図 - 7	E-F	E	39-01 遺物41と同一個体	
40	I-67	4.69	1.44	0.80	0.30	(3.25)	0.73	(0.40)	-	-	-	胴身部~腕部 1/3	第10図 - 7	E-F	E	39-02	
41	I-67	3.20	-	-	-	(2.50)	(0.70)	0.30	(0.41)	-	-	腕部~基部 1/4	第10図 - 7	E-F	E	遺物39と同一個体	
42	I-68	(5.40) (3.95)	-	-	-	(5.40)	-	-	(3.95)	-	-	腕部 基部?	-	-	E	E	同一個体か
43	I-69	18.85	2.05	1.1	(0.27)	9.75	0.59	(0.30)	4.05	0.43	0.27	完 形	第10図 - 8	E-E11	E		
44	I-71	(13.65)	2.20	(1.28)	(0.30)	9.85	0.48 0.6	0.30 (0.31)	(1.60)	0.48	0.30	ほぼ完形 (基先欠損) 3/4残	第10図 - 9	E-E11	E		
45	I-71	(12.80)	3.79	0.86	(0.35)	7.96	0.51	0.35	(0.63)	0.53	0.29	(基先欠損) 3/4残	第10図 - 10	H	H	E	基部一部木質残存
46	I-71	10.90	3.90	0.85	0.30	5.20	0.46	(0.31)	1.80	0.40	0.35	完 形	第10図 - 11	H-I	E		
47	I-71 +48	15.60	2.00	(0.90)	(0.20)	12.60	(0.61) 0.56	(0.40) (0.40)	-	0.40	(0.35)	完 形	第10図 - 12	H	G	E	無腕部
48	I-71 (長)	(6.49)	-	-	-	(6.49)	0.50	0.40	-	-	-	腕部のみ 1/3~1/4残存	第10図 - 13	E	類	E	
49	I-71 (短)	(5.10)	-	-	-	(3.30)	(0.60)	0.30	1.80	(0.46)	(0.37)	腕部~基部	第10図 - 14	H	類	E	
50	I-71 (短)	(2.33)	-	-	-	(2.33)	-	-	-	-	-	腕部?	-	-	E		
51	I-72	(4.40)	1.80	1.05	0.15	(2.60)	0.6	0.25	-	-	-	基 先	-	-	E		
52	I-73	(8.35)	1.60	0.90	0.21	(6.75)	0.6	0.40	-	-	-	ほぼ完形 (基先欠損) 2/3残	第10図 - 15	E-E11	E		
53	I-74 (長)	(6.70)	-	-	-	(3.1)	0.71	0.31	3.6	0.44	0.4	腕部~基部 1/2残	第10図 - 16	E	類	E	基部木質残存
54	I-74 (短)	(3.80)	-	-	-	(3.80)	-	-	-	-	-	腕部	-	-	E		
55	I-76	(7.50)	1.85	0.95	0.29	5.65	0.47	0.30	-	-	-	胴身部~腕部	第10図 - 18	H	D	E	
56	I-77	15.70	2.40	1.38	(0.42)	9.90	0.53	0.25	3.40	(0.43)	0.30	完 形	第10図 - 17	H-F	E		
57	I-79	(4.94)	4.34	(1.0)	(0.28)	0.60	(0.5)	(0.30)	-	-	-	胴身部~腕部	-	-	D		
58	I-82	(10.40)	-	-	-	(7.00)	0.54	0.22	3.40	0.42	0.31	腕部~基部 2/3残	第10図 - 1	E	類	D	
59	I-83	(3.83)	-	-	-	(0.94)	-	-	(2.90)	-	-	不 明 (腕部~基部?)	-	-	D		
60	I-84	14.80	2.00	1.00	0.21	10.00	0.57	(0.30)	2.80	0.48	0.31	完 形	第10図 - 2	H-E11	D		
61	I-85	(12.36)	3.56	1.09	0.28	7.91	0.63	(0.30)	(0.80)	0.58	0.41	胴身部~基部 (基先欠損)	第10図 - 3	H-H	E		
62	I-86	(7.40)	-	-	-	(3.80)	(0.60)	(0.40)	3.60	0.49	0.31	腕部~基部	第10図 - 4	E	類	F	
63	I-86	(3.56)	-	-	-	(3.56)	-	-	-	-	-	不 明 (腕部?)	-	-	E		

番号	遺物 番号	全長 (遺存長)	鎌身部			踏接部			茎部			遺存度	図 番 号	分類	出土 地点	備 考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
64	I-87	(4.78)	-	-	-	(1.80)	-	-	2.98	0.40	0.40	踏接部~茎部 1/2残	第20図 - 5	II類	E	
65	I-88	(2.25)	(2.25)	-	-	-	-	-	-	-	-	鎌身部	-	-	E	
66	I-88	(5.30)	-	-	-	(5.30)	-	-	-	-	-	踏接部	-	-	E	
67	I-89	(9.33)	-	-	-	(6.51)	0.60	0.43	2.82	0.40	0.35	踏接部~茎部 1/2残	第20図 - 6	II類	E	茎部~節木質残存
68	I-91 +90	(10.70)	-	-	-	(6.04)	0.70	0.40	4.66	0.35	0.37	踏接部~茎部 1/2残	第20図 - 7	II類	F+E	
69	I-95	14.20	3.70	(0.96)	(0.35)	7.42	0.50 (0.61)	0.30 0.38	2.68	0.31	0.37	完形	第20図 - 8	II-H	E	
70	I-99	(7.00)	-	-	-	(3.70)	0.50	0.39	3.30	0.39	(0.30)	踏接部~茎部 1/2残	第20図 - 9	II類	F	
71	I-100 (長)	(3.85)	-	-	-	(2.70)	-	-	(1.15)	-	-	踏接部~茎部	-	-	E	
72	I-100 (幅)	(1.70)	-	-	-	(1.70)	-	-	-	-	-	踏接部	-	-	E	
73	I-104	(13.71)	2.19	1.10	0.29	9.93	0.52 0.60	0.35 0.38	(1.50)	0.52	(0.41)	ほぼ完形 (茎部欠損) 3/4残	第20図	II-III	E	
74	I-101	(4.45)	-	-	-	(4.45)	-	-	-	-	-	踏接部	-	-	E	
75	I-101 2片 複合	(4.36)	-	-	-	(4.36)	-	-	-	-	-	踏接部	-	-	E	
76	I-101 +212	(7.15)	-	-	-	(4.80)	0.65	0.32	(2.35)	0.42	0.37	踏接部~茎部 1/2残	第20図 - 11	II類	E+E	
77	I-102	(2.60)	-	-	-	-	-	-	(2.60)	-	-	茎部	-	-	E	
78	I-103	15.98	2.10	1.05	(0.26)	9.82	0.50	0.20	4.06	0.50	0.38	完形	第20図 - 12	II類2	E	
79	I-104	(7.85)	1.95	1.10	0.30	(5.90)	0.95	0.25	-	-	-	鎌身部~踏接部 1/2残	第20図 - 13	II-III	E	
80	I-106 +105 +102	(12.33)	3.50	0.80	0.31	(8.83)	0.41	0.32	-	-	-	鎌身部~踏接部 2/3残 (茎部欠損)	第20図 - 14	II-H	F+E	
81	I-105	(5.70)	-	-	-	(5.70)	-	-	-	-	-	踏接部~茎部	-	-	E	無踏接
82	I-109	(8.10)	-	-	-	(6.03)	0.60	0.35	2.10	0.40	0.33	踏接部~茎部 1/2残	第20図 - 15	II類	E	
83	I-111	(4.90)	-	-	-	(4.90)	-	-	-	-	-	踏接部	-	-	E	
84	I-112	(X1.59) (X2.51) (X1.92)	(1.50)	-	-	(2.61)	(1.92)	-	-	-	-	鎌身部 踏接部	-	-	E	
85	I-114	(7.75)	3.45	0.82	0.25	(4.30)	0.50	0.25	-	-	-	鎌身部~踏接部 1/3残	第20図 - 16	II-III	F	
86	I-114	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	-	-	F	
87	I-115	(11.60)	3.90	(0.8)	0.31	(7.70)	0.53	0.30	-	-	-	鎌身部~踏接部 2/3残 (茎部先欠損)	第20図 - 17	II-I	F	
88	I-117	(7.30)	2.30	1.08	(0.29)	(5.00)	0.55	(0.41)	-	-	-	鎌身部~踏接部	第20図 - 18	II-B1	F	遺物90と同一 個体と考えられる

番号	遺物 番号	全長 (遺存長)	鍔身部			鍔根部			茎 部			遺存度	図版 番号	分類	出土 地点	備 考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
88	I-117	(2.10)	-	-	-	(2.10)	0.68	(0.30)	-	-	-	不明(鍔根部?)	第205 - 18	E-231	F	遺器 88、90 と同一 個体と考えられる
90	I-117	(3.30)	-	-	-	-	-	(3.30)	0.30	0.30	-	茎部先	第205 - 18	E-231	F	遺器 88、89 と同一 個体と考えられる
91	I-118	(4.20)	3.50	0.90	0.30	(0.70)	-	-	-	-	-	鍔身部～鍔根部	第205 - 19	II-E	F	
92	I-119	(8.60)	3.40	0.90	(0.30)	(5.16)	0.57	0.40	-	-	-	鍔身部～鍔根部 1/2	第214 - 1	II-I	F	遺器 93 と同一個体
93	I-119	(3.69)	-	-	-	-	-	(3.69)	0.46	0.27	-	茎 部	第214 - 1	II-I	F	I-119(遺器 92)の 茎先と考えられる
94	I-120	(5.90)	3.68	1.04	(0.35)	(2.22)	0.60	(0.35)	-	-	-	鍔身部～鍔根部 1/3	第216 - 2	II-E	F	
95	I-122	(8.10)	2.30	0.70	0.21	(5.85)	0.40	0.25	-	-	-	鍔身部～鍔根部 1/2	第214 - 3	E-I	F	
96	I-122											鍔根部～茎部	-	-	F	
97	I-134	(4.53)	-	-	-	-	-	(4.53)	-	-	-	茎 部	-	-	E	
98	I-137	(6.61)	-	-	-	(6.61)	-	-	-	-	-	鍔根部	-	-	E	
99	I-149	(2.72)	-	-	-	(2.72)	-	-	-	-	-	鍔根部	-	-	E	
100	I-141	15.91	2.01	(1.31)	0.30	9.80	0.60	0.40	(3.20)	0.42	0.36	ほぼ完形 (茎部先欠損)	第216 - 4	II-E31	E	
101	I-142	(2.90)	2.10	1.10	(0.41)	(0.80)	-	-	-	-	-	鍔身部～鍔根部	第216 - 5	II-E11	E	
102	I-143	(2.05)	-	-	-	-	-	(2.05)	-	-	-	茎部先	-	-	E	
103	I-145	(6.50)	2.10	1.0	(0.39)	(4.40)	(0.62)	(0.36)	-	-	-	鍔身部～鍔根部 1/2	第214 - 6	II-E11	E	
104	I-146	(5.50)	-	-	-	(1.78)	(0.7)	(0.39)	(3.72)	0.45	0.41	鍔根部～茎部	第214 - 7	E 類	E	茎部一筋木質残存
105	I-146	(1.95)	-	-	-	-	-	(1.95)	0.30	0.30	-	茎部先	第214 - 7	II 類	E	茎部一筋木質残存
106	I-147 +70	(14.00)	2.30	0.95	(0.29)	10.00	(0.58)	(0.44)	(1.70)	0.50	(0.33)	ほぼ完形 (茎部先欠損)	第214 - 8	II-J	E+E	
107	I-148	(2.20)	(2.20)	-	-	-	-	-	-	-	-	鍔身部	-	-	E	
108	I-151											鍔身部	-	-	F	
109	I-151											鍔身部～鍔根部	-	-	E	
110	I-152	(3.71)	-	-	-	-	-	(3.71)	-	-	-	茎部?	-	-	E	茎部一筋木質残存
111	I-153	(6.55)	-	-	-	(3.34)	0.50	0.29	3.21	0.37	0.30	鍔根部～茎部 1/3 残	第214 - 9	E 類	E	
112	I-156	(9.70)	(2.40)	0.90	(0.31)	(7.30)	(0.62)	0.34	-	-	-	鍔身部～鍔根部 1/2	第214 - 10	E-J	E	
113	I-158	(7.41)	-	-	-	(4.30)	0.50	0.31	3.11	0.40	0.30	鍔根部～茎部	第214 - 11	II 類	E	

番号	遺物 番号	全長 (遺存長)	鎌身部			穂柄部			茎部			遺存度	図版 番号	分類	出土 地点	備 考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
114	I-158		-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明(穂柄部?)	-	-	E	
115	I-159	(4.61)	1.91	1.05	0.21	(2.70)	0.58	0.26	-	-	-	鎌身部~穂柄部 1/3	第21図 - 12	II-B11	E	
116	I-160	(8.00)	-	-	-	(5.30)	0.48	(0.89)	(2.70)	0.40	(0.40)	穂柄部~茎部 1/2	第21図 - 13	II 類	E	
117	I-160		-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明(穂柄部?)	-	-	E	
118	I-160		-	-	-	-	-	-	-	-	-	穂柄部~茎部	-	-	E	
119	I-162	(3.90)	-	-	-	-	-	-	(3.90)	-	-	茎部1/2	-	-	E	
120	I-163 +165	(8.20)	2.63	(1.00)	(0.28)	(5.57)	0.65	0.30	-	-	-	鎌身部~穂柄部 1/2	第21図 - 14	II-J	E+E	
121	I-163 破片 3片	①(2.23) ②(1.90) ③(1.50)	-	-	-	-	-	-	(2.23)	-	-	茎部先]不明破片2	-	-	E	
122	I-164 破片 2片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明破片2	-	-	E	
123	I-203	(3.28)	-	-	-	(1.37)	-	-	(1.91)	-	-	穂柄部~茎部	-	-	E	
124	I-204	(3.09)	-	-	-	(3.09)	-	-	-	-	-	穂柄部	-	-	E	
125	I-208	(5.92)	-	-	-	(2.70)	(0.50)	0.27	3.22	0.27	0.31	穂柄部~茎部 1/3 残	第21図 - 15	II 類	E	
126	I-210	(4.20)	2.36	1.1	0.37	(1.94)	0.70	(0.43)	-	-	-	鎌身部~穂柄部 1/3	第21図 - 16	II-B11	E	錆化が激しく穂柄部 が破状に裂ける
127	I-211	(5.23)	-	-	-	(1.77)	(0.75)	(0.48)	3.47	0.45	(0.40)	穂柄部~茎部 1/3 残	第21図 - 16	II 類	E	
128	I-213	(7.25)	2.45	0.85	0.30	(4.80)	0.60	(0.40)	-	-	-	鎌身部~穂柄部 1/2	第21図 - 17	II-B11	F	
129	I-214	(4.35)	-	-	-	(3.80)	-	-	(0.75)	-	-	穂柄部~茎部	-	-	F	茎部木質残存
130	I-216	(3.16)	-	-	-	(3.16)	-	-	-	-	-	穂柄部	-	-	E	
131	I-217	(4.79)	-	-	-	-	-	-	(4.79)	-	-	茎部	-	-	E	
132	I-218	(2.40)	2.08	1.00	(4.00)	(0.32)	-	-	-	-	-	鎌身部	第21図 - 18	II-B11	E	
133	I-218	(2.43)	(2.43)	0.72	(0.30)	-	-	-	-	-	-	鎌身部	第21図 - 19	-	E	
134	I-221	(2.69)	-	-	-	-	-	-	(2.69)	-	-	茎部先	-	-	E	
135	I-222	(5.62)	1.30	(0.61)	0.30	4.32	0.50	0.34	-	-	-	鎌身部~穂柄部 1/2 残?	第21図 - 20	-	E	
136	I-223	(4.80)	-	-	-	(2.63)	-	-	(2.17)	-	-	穂柄部~茎部 (茎部一部木質 残存)	-	-	E	茎部一部木質残存
137	I-224	(6.40)	-	-	-	(6.40)	-	-	-	-	-	穂柄部	-	-	E	
138	I-225	(1.61)	-	-	-	(1.61)	-	-	-	-	-	穂柄部小	-	-	E	

番号	遺物 番号	全長 (遺存数)	鎌身部			鍔部			茎部			遺存度	図 表 号	分類	出 土 地 点	備 考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
139	I-226	(3.30)	-	-	-	(3.30)	-	-	-	-	-	-	-	-	E	
140	I-227 +228	(7.70)	3.50	0.9	(0.58)	4.20	(0.57)	(0.35)	-	-	-	鎌身部～鍔部 1/2	第21図 21	E-J	E+E	
141	I-231 -3	(7.40)	-	-	-	(5.11)	0.58	0.38	(2.99)	0.44	(0.48)	鍔部～茎部 1/2	第22図 1	II類	E+E+E	141-A(表) 茎部木質残存
142	I-231 -3	(3.60)	-	-	-	(3.60)	0.55	0.29	-	-	-	鍔部1/4残	第22図 1	II類	E+E+E	141-B(幅)
143	I-236	(6.50)	-	-	-	(3.18)	-	-	(3.32)	-	-	鍔部～茎部	-	-	E	鍔部残少
144	I-238 -237 +235+71	15.60	1.90	1.00	0.29	10.20	(0.60)	(0.40)	3.50	0.35	0.39	完形	第22図 2	II類I	E+E+E	茎部木質残存
145	I-239	(3.10)	-	-	-	(3.10)	-	-	-	-	-	鍔部	-	-	E	
146	I-252	(4.70)	2.10	0.90	0.35	(2.60)	6.0	0.15	-	-	-	鍔部中位～茎 部欠損	第22図 3	E-BI	E	
147	I-256	(4.45)	2.70	0.70	0.20	(1.75)	-	-	-	-	-	鎌身部～鍔部	第22図 4	E-II	H	
148	I-262	(3.60)	(3.60)	-	-	-	-	-	-	-	-	鎌身部	-	-	E	
149	I-270	(2.40)	1.90	1.10	(0.40)	0.50	-	-	-	-	-	鎌身部～鍔部	第22図 5	II-BI	F	
150	I-271	(4.50)	3.35	1.00	(0.30)	(2.15)	-	-	-	-	-	鎌身部～鍔部	第22図 6	E-II	F	
151	I-275	(2.82)	-	-	-	-	-	(2.82)	-	-	-	茎部?	-	-	F	
152	I-280	(3.00)	2.15	0.90	0.25	(0.85)	-	-	-	-	-	鎌身部～銜部	第22図 7	II-D	E	
153	I-282	(2.13)	-	-	-	(2.13)	-	-	-	-	-	鍔部	-	-	E	
154	I-285	(2.00)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	-	-	E	
155	I-286	(2.12)	(2.12)	-	-	-	-	-	-	-	-	不明(鎌身?)	-	-	E	
156	I-286 +112	(7.50)	-	-	-	(7.50)	0.65	0.31	-	-	-	鍔部のみ全体 の1/2残	第22図 8	II類	E+E	
157	I-291 +116 +73	(13.95)	2.10	1.17	0.35	10.20	0.68	0.90	(1.65)	(0.50)	(0.41)	鎌身部～茎部 (茎部欠損)	第22図 9	II-BI	Z+E+E	茎部一茎木質残存
158	I-292	(2.90)	(2.90)	0.85	(0.40)	-	-	-	-	-	-	鎌身部	第22図 10	-	Z	
159	I-293	(4.70)	-	-	-	(4.70)	-	-	-	-	-	鍔部	-	-	Z	
160	I-294	(2.21)	-	-	-	(2.21)	-	-	-	-	-	不明(鍔部?)	-	-	Z	
161	I-297	(1.30)	-	-	-	-	-	(1.30)	-	-	-	茎部先	-	-	Z	
162	I-298	(1.46)	-	-	-	-	-	(1.46)	-	-	-	茎部先	-	-	Z	
163	I-299	(1.30)	-	-	-	-	-	(1.30)	-	-	-	茎部	-	-	Z	

番号	通称	全長 (遺存長)	腰身部			脇部			基部			遺存度	図番	分類	山土地点	備考
			長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ					
164	I-300	(1.00)	-	-	-	(1.00)	-	-	-	-	-	-	-	-	Z	
165	I-301	(1.79)	-	-	-	-	-	-	(1.79)	-	-	-	-	-	Z	
166	I-302	(1.60)	-	-	-	-	-	-	(1.60)	-	-	-	-	-	Z	
167	I-303	(3.34)	-	-	-	(3.34)	-	-	-	-	-	-	-	-	Z	
168	I-314	①(1.40) ②(1.39)	-	-	-	-	-	-	① (1.40)	② (1.39)	-	-	-	-	Z	2個体
169	I-96	3.45	3.45	2.14	0.20	-	-	-	-	-	-	図録片欠損	第22図 - 11	I-B	E	
170	Ⅱ-42	(6.65)	2.69	0.80	0.30	(4.06)	0.68	0.36	-	-	-	腰身部～脇部 1/2	第37図 - 11	Ⅱ-H	C	
171	Ⅲ-45	(5.15)	2.00	0.74	0.30	(3.15)	0.40	0.20	-	-	-	腰身部～脇部 1/3残	第37図 - 12	Ⅱ-J	Z	Ⅲ-45-01
172	Ⅲ-45	(6.07)	2.50	(0.70)	(0.40)	(3.57)	0.57	(0.27)	-	-	-	腰身部～脇部 1/3残	第37図 - 13	Ⅱ-I	Z	Ⅲ-45-02
173	Ⅳ-2	(4.77)	3.47	0.87	(0.24)	(1.30)	0.64	0.32	-	-	-	腰身部～脇部 1/3残	第48図 - 1	Ⅲ-H	H	
174	Ⅳ-4 +3	(12.0)	(2.70)	1.03	(0.35)	7.88	(0.60)	(0.46)	(1.42)	(0.50)	(0.40)	腰身部～基部	第48図 - 2	Ⅲ-B2	H	
175	Ⅳ-5 +6	13.15	3.60	1.14	2.60	7.47	(0.62)	(0.50)	2.08	(0.60)	(0.46)	ほぼ完整	第48図 - 3	Ⅲ-B2	H	全体に錆化進行 基部に他の基部分置
176	Ⅳ-7	(12.76)	3.46	1.20	(0.67)	8.01	0.60	0.39	(1.29)	(0.65)	(0.35)	(基部一部欠損)	第48図 - 4	Ⅲ-B2	I	基部にて折れ重なる 全体に錆化進行
177	Ⅳ-8	(3.01)	-	-	-	-	-	(3.01)	-	-	-	基部先	-	-	I	
178	Ⅳ-9	(5.79)	-	-	-	(4.37)	-	-	(1.42)	-	-	腰身～基部	-	-	G	
179	Ⅳ-10	(6.40)	-	-	-	(5.15)	0.51	0.36	(1.25)	0.40	(0.29)	腰身部～基部	第48図 - 5	Ⅲ類	G	遺存状態良好
180	Ⅳ-11	(4.38)	2.80	1.10	0.31	(1.58)	0.55	0.30	-	-	-	腰身部～脇部	第48図 - 6	Ⅲ-B2	G	錆化進行
181	Ⅳ-12	(11.3)	3.31	(0.88)	(0.35)	5.60	0.50	(0.32)	(2.3)	0.35	(0.30)	ほぼ完整	第48図 - 7	Ⅲ-H	D	遺存状態良好
182	Ⅳ-14	(8.90)	-	-	-	(5.50)	0.48	0.32	3.40	0.35	0.29	腰身部～基部のみ	第48図 - 8	Ⅲ類	D	全体に錆化進行
183	Ⅳ-21 +22	(9.00)	-	-	-	(7.32)	0.50	(0.40)	(1.68)	0.40	(0.36)	腰身部～基部 基部のみ 片方欠損	第48図 - 9	Ⅲ類	I	全体に錆化進行
184	Ⅳ-24	(11.67)	3.14	1.15	(0.41)	7.06	(0.55)	(0.47)	(1.48)	(0.40)	(0.30)	ほぼ完整	第48図 - 10	Ⅲ-B2	I	全体に錆化進行 基部一部本質残存
185	Ⅳ-25	(10.23)	(0.34)	-	-	7.15	0.60	0.40	2.74	0.42	(0.44)	腰身部は一部残すのみ 腰身部～基部	第48図 - 11	Ⅲ類	I	全体に錆化が激しい
186	Ⅳ-49	(1.81)	(1.81)	-	-	-	-	-	-	-	-	腰先	-	-	I	
187	Ⅳ-50	(3.93)	(1.88)	1.20	0.30	(2.05)	0.71	(0.48)	-	-	-	腰身部脇部 腰身部1/3欠損	第48図 - 12	Ⅲ-D	I	錆化進行
188	Ⅳ-51 +52	(10.10)	(2.00)	1.17	0.34	7.38	0.60	(0.45)	(0.72)	(0.93)	0.39	腰身部～脇部 腰身部1/3欠損 基部2/3欠損	第48図 - 13	Ⅲ-D	I	

番号	遺物 番号	全長 (遺存長)	胴 身 部			尾 部 部			基 部		遺 存 度	図 版 番号	分類	出 土 地点	備 考	
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅						厚さ
189	IV-54	(9.90)	(0.80)	(1.30)	(0.50)	8.23	(0.58)	(0.40)	(0.87)	(0.45)	(0.20)	胴身部～基部 胴身部の3次拍 基部の3次拍	第49図 - 14	II-D	I	全体に錆化が進行
190	IV-83	(2.48)	-	-	-	(2.48)	-	-	-	-	-	尾幹部?	-	-	I	
191	IV-84	(6.45)	-	-	-	(4.05)	(0.60)	(0.42)	(1.80)	(0.50)	0.32	尾幹部～基部	第49図 - 15	II-類	I	錆化進行
192	IV-85	(10.80)	(1.70)	1.13	(0.37)	8.20	0.88	(0.40)	(0.90)	0.55	(0.45)	胴身部～基部 (胴身部先端欠損) (基部の3次拍)	第49図 - 16	II-E2	I	全体に錆化が激しい
193	IV-86	13.84	3.70	0.80	(0.22)	7.94	0.59	(0.47)	2.20	0.30	0.30	ほぼ球形	第49図 - 17	II-E2	I	全体に錆化が激しい 基部にわずかに口巻 残存
194	IV-87	(14.30)	3.20	0.95	(0.30)	7.80	0.55	(0.42)	(3.30)	0.53	0.42	ほぼ球形 基部先端一部欠 損	第49図 - 18	II-E2	I	全体に錆化が激しい 基部にわずかに口巻 残存
195	IV-89	(14.17)	(2.42)	0.95	0.29	7.37	0.58	(0.50)	4.38	0.30	0.20	ほぼ球形 胴身部先端 尚 対称欠損	第49図 - 1	II-D	I	基部一口巻をわず かに認める
196	IV-90	(18.40)	3.40	1.27	(0.60)	7.58	0.60	(0.49)	(2.42)	0.36	(0.40)	ほぼ球形 (胴身部一部欠損)	第49図 - 2	II-E2	I	全体に錆化が進行
197	IV-91	13.70	3.83	(1.12)	(0.30)	7.80	0.60	(0.47)	1.98	0.40	(0.35)	ほぼ球形 (一部/基部欠損)	第49図 - 3	II-E2	I	
198	IV-92	(13.70)	(1.75)	(1.30)	(0.34)	7.70	0.61	(0.50)	4.25	(0.36)	(0.35)	ほぼ球形 胴身部先端一部欠 損	第49図 - 4	II-D	I	錆化進行するが遺存 状態良好
199	IV-108	(3.02)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明 遺物? (移行か)	-	-	I	
200	IV-109	(8.50)	-	-	-	(4.80)	0.48	(0.32)	3.70	0.23	0.25	尾幹部～基部 残存	第49図 - 5	II-類	N	全体に錆化進行
201	IV-110	(8.40)	(2.40)	-	-	(4.10)	-	-	(1.90)	-	-	胴身～基部	-	-	N	4片同一個体か
202	IV-111 (長)	(3.10)	-	-	-	(3.10)	-	-	-	-	-	尾幹部	-	-	N	
203	IV-111 (短)	(2.44)	-	-	-	(2.44)	-	-	-	-	-	尾幹部	-	-	N	
204	IV-112	(2.86)	(2.86)	-	-	-	-	-	-	-	-	胴身?	-	-	N	
205	IV-113	(6.50)	-	-	-	(5.10)	0.58	(0.39)	(1.40)	(0.50)	(0.42)	尾幹部～基部	第49図 - 6	II-類	N	基部一部木質残存 錆化激しい
206	IV-114	(14.20)	3.20	0.90	(0.27)	8.00	0.55	(0.36)	(3.05)	0.50	0.40		第49図 - 7	II-E2	N	基部にわずかに口巻 残存
207	IV-115	(6.25)	2.48	(1.05)	(0.40)	(3.77)	0.59	(0.49)	-	-	-	胴身部～尾幹部	第49図 - 8	II-H	N	錆化激しい
208	IV-116	(1.38)	-	-	-	-	-	-	(1.38)	-	-	基部先	-	-	N	
209	IV-5	(4.30)	-	-	-	-	-	-	(4.30)	-	-	基 部	-	-	H	
210	①	(2.77)	(2.77)	-	-	-	-	-	-	-	-	胴身部か	-	-	Z	
211	②	(2.05)	-	-	-	(2.05)	-	-	-	-	-	尾幹部か	-	-	Z	
212	③	(1.40)	-	-	-	-	-	-	(1.40)	-	-	基部か	-	-	Z	
213	④	(1.41)	-	-	-	-	-	-	(1.41)	-	-	基部先	-	-	Z	

番号	遺物番号	全長 (遺存長)	鍔身部			鴨口部			茎部			遺存度	図版番号	分類	出土地点	備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
214	V-2	5.30	5.30	1.69	0.23	-	-	-	-	-	-	完形	第56図-1	I-A	D	木質部残存
215	V-4 -3	(13.31)	2.40	1.20	0.50	7.20	0.70	0.40	(3.71)	0.50	0.40	ほぼ完形 基部先欠損	第56図-2	II-C	D	基部木質部残存
216	V-6+ 7+8	(16.45)	3.10	0.90	0.29	7.50	0.66	0.47	(6.85)	(0.53)	(0.29)	ほぼ完形 基部先欠損	第56図-3	II-F	D	基部木質部残存
217	V-9 +10 (短)	16.22	2.80	1.28	0.31	8.41	(0.59)	0.32	5.01	0.35	0.30	完形	第56図-4	II-B11	D	基部木質部残存
218	V-9 -5 (長)	(12.90)	3.50	1.10	0.28	6.60	0.60	(0.37)	(2.40)	0.50	(0.39)	ほぼ完形 基部先欠損	第56図-5	II-F	D	
219	III-39	16.43	(1.40)	(0.85)	(0.30)	16.87	0.90	0.30	4.16	0.40	0.38	ほぼ完形 (基部端1/3欠損) (基部一筋欠損)	第64図-1	II-J	C	基部2/3は丸棒を穿ぶ
220	III-42	(8.05)	6.75	2.90	0.11	1.30	0.50	0.32	-	-	-	鍔身部~総攷部	第64図-2	II-B	C	
221	III-45	15.95	2.80	0.85	0.20	7.10	0.53	0.28	6.05	0.35	0.40	完形	第64図-3	II-H	C	
222	III-46	(17.30)	(2.30)	1.00	0.23	11.60	0.65	0.35	4.70	0.30	0.25	ほぼ完形 (鍔身部1/3欠損)	第64図-4	II-J	C	
223	III-47	(3.40)	3.40	1.25	0.30	(0.85)	0.60	0.40	-	-	-	(基部欠損)	第64図-5	II-類	C	
224	III-50	(4.15)	4.15	3.19	0.40	-	-	-	-	-	-	鍔身部のみ	第64図-6	II-A	B	
225	III-27	(2.71)	-	-	-	-	-	-	(2.71)	-	-	茎部	-	-	C	
226	III-40	(3.22)	-	-	-	-	-	-	(3.22)	-	-	茎部か	-	-	C	
227	III-41	(1.90)	(1.90)	-	-	-	-	-	-	-	-	鍔身部	-	-	C	
228	III-44	(3.90)	-	-	(0.80)	-	-	-	3.01	-	-	総攷部?~茎部	-	-	C	
229	III-77	(5.60)	-	-	(5.60)	-	-	-	-	-	-	鍔身部	-	-	C	

3 把頭 (cm)

番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	鴨口径	遺存度	名称	図版番号	出土地点	備考
1	I-8	6.85	5.75	2.65	0.9	ほぼ完形	半環	第15図-1	E	銅地金銅張り

4 鴨口 (cm)

番号	遺物番号	長さ	外径		内径	遺存度	図版番号	出土地点	備考
			鴨口径	足部径					
1	I-8	1.35	0.90	0.80	0.70	ほぼ完形	第15図-2	E	銅地金銅張り
2	I-17	(0.90)	0.95	0.85	0.75	ほぼ1/2残存	第15図-7	I	銅地金銅張り
3	I-123	(1.0)	1.0	0.78	0.70	足部のみ欠損	第15図-8	E	銅地金銅張り
4	I-124	(0.85)	0.76	0.75	0.65	1/2残存	第15図-9	E	銅地金銅張り

5 足金具・費金具(cm)

番号	遺物番号	外径	内径	厚さ	遺存度	図版番号	出土地点	備考
1	I-12	4.70 × 2.90	3.08 × 2.30	0.70	完形	第15図-5	I	銅地金銅張り
2	I-13	3.70 × 2.35	3.20 × 1.75	0.60	完形	第15図-4	H	銅地金銅張り
3	I-20	5.63 × 3.80	4.30 × 2.65	0.30	欠形	第15図-6	D	銅地金銅張り
4	I-124A	5.80 × 3.60	3.82 × 2.60	0.80	一部欠損	第15図-9	E	鉄製
5	I-124	5.75 × 4.45	4.65 × 2.80	0.85	完形	第15図-10	R	鉄製
6	II-36	3.35 × 2.0	2.6 × 1.4	0.40	完形	第37図-3	G	金銅製

6 鈎 (cm)

番号	遺物番号	外径	内径	厚さ	遺存度	図版番号	出土地点	形数	備考
1	I-22	7.95 × 6.43	3.0 × 1.65	0.43	完形	第15図-3	G	8	銅地金銅張り
2	I-2	8.50 × 6.86	3.12 × 1.5	0.78	完形	第72図-2	F	8	鉄製
3	III-9 +33+37	8.85 × 7.25	(3.1 × 2.1)	0.55	内側欠損	第37図-1	G	無窓	鉄製
4	III-95	6.78 × 5.15	2.9 × 1.74	0.5	完形	第37図-2	G	無窓	鉄製
5	IV-16	6.94 × 5.12	3.06 × 2.00	0.53	完形	第73図-2	I	(8)	鉄製
6	IV-16	8.6 × 7.5	4.3 × (2.37)	0.9	内側欠損	第74図-2	I	(8)	鉄製

7 精尻金具(cm)

番号	遺物番号	長さ	外径	内径	遺存度	図版番号	出土地点	備考
1	I-27	4.47 (4.75)	3.10 × 1.90	2.50 × 1.30	ほぼ完形	第15図-11	G	銅地金銅張り

8 鍬・把金具(cm)

番号	遺物番号	外径	内径	幅	遺存度	図版番号	出土地点	備考
1	III-38	(4.92 × 2.08)	(3.2 × 2.15)	2.4	2/3 残存	第37図-4	D	鍬
2	IV-20	3.43 × 1.88	(3.05 × 1.5)	5.2	ほぼ完形	第47図-2	I	把金具
3	III-56	-	-	3.95	1/3 残存	第64図-7	C	把金具

9 刀子(cm)

番号	遺物番号	全長	刃部			柄部			遺存度	図版番号	出土地点	備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ				
1	I-6	12.7	7.20	1.29	0.40	5.50	1.20	0.98	完形	第16図-4	F	
2	I-20	(7.06)	-	-	-	(7.06)	0.64	0.50	1/3 残存	第16図-6	H	
3	I-113	(9.15)	(3.10)	1.73	0.45	8.05	0.95	0.30	刃部ほぼ2/3欠損	第16図-5	E	
4	III-4	(10.55)	(5.7)	0.8	0.4	(4.85)	1.2	0.45	2/3 残存	第37図-5	G	
5	III-9	(5.1)	(5.1)	1.0	0.35	-	-	-	刃部残存	第37図-6	G	
6	III-10	(9.3)	(5.2)	0.7	0.4	(4.1)	0.6	0.3	2/3 残存	第37図-7	E	
7	III-31	(7.9)	(7.9)	1.2	0.3	-	-	-	刃部残存	第37図-8	B	
8	IV-43	(11.3)	(5.1)	1.7	0.7	6.2	1.0	0.35	2/3 残存	第47図-3	B	
9	IV-44	10.9	5.7	1.0	0.3	5.2	1.1	0.3	完形	第47図-4	B	

番号	遺物番号	全長	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	遺存度	図版番号	出土地点	備考
10	Ⅰ - 8	(6.5)	(3.7)	1.6	0.35	(2.8)	1.1	0.45	1/2残存	第61図-8	B	
11	Ⅰ - 23	(14.6)	(9.8)	1.7	0.6	(4.8)	1.0	0.45	ほぼ完全	第70図-1	A	
12	Ⅰ-33+54+55	(10.7)	(4.9)	1.6	0.3	(5.8)	1.0	0.4	2/3残存	第70図-2	A	
13	Ⅰ - 60	(3.4)	(1.2)	1.4	0.3	(2.2)	0.8	0.3	1/4残存	第70図-3	A	

10 鎌・石突(cm)

番号	遺物番号	全長	身部長	総柄長	外長	内長	身幅	遺存度	図版番号	出土地点	備考
1	I - 3 + 129	25.30	12.20	13.10	3.14	2.35	三角形	ほぼ完全	第16図-2	I-F	鎌
2	I - 4	26.70	13.99	12.80	2.70	1.80	三角形	ほぼ完全	第16図-1	F	鎌
3	I - 127	9.75	-	9.75	1.73	1.20	-	2/3残存	第16図-3	B	石突

11 釘かくし(cm)

番号	遺物番号	幅	高さ	幅	足幅	遺存度	図版番号	出土地点	備考
1	I - 14	1.80 1.50	1.32	(2.38)	0.35	片足欠損	第17図-1	I	跡地金銅張り
2	I - 15	1.88 1.65	1.20	(2.30)	0.35	片足欠損	第17図-2	H	跡地金銅張り
3	I - 16	1.60	1.28	1.55	0.49	ほぼ完全	第17図-3	II	跡地金銅張り
4	I - 264	1.70 1.30	(0.75)	(1.80)	0.49	両足欠損	第17図-4	H	跡地金銅張り
5	I - 289	1.80	(1.05)	(2.50)	0.50	両足欠損	第17図-5	I	跡地金銅張り

12 両頭金具(cm)

番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	遺存度	図版番号	出土地点	備考
1	I - 52	3.15	0.75~0.70	0.50	完全	第23図-22	G	
2	I - 75	3.50(2.35)	0.75(0.55)~0.60	0.50	完全	第23図-26	E	
3	I - 123	3.49	0.60~0.62	0.60(0.55)	完全	第23図-23	F	
4	I - 149	3.15	0.65~0.60	0.60(0.54)	完全	第23図-28	R	
5	I - 150	3.15	0.55~0.60	0.53	完全	第23図-24	E	
6	I - 215	3.70(3.60)	0.70~0.60	0.65(0.50)	完全	第23図-27	E	
7	I - 265	2.30	0.60	0.60	1/2残存	第23図-25	F	

13 雲 珠 (cm)

番号	遺物番号	全長(長)	高さ	厚さ	足幅	筒径(口)	口径	遺存痕	図収番号	出土地点	備 考
1	I - 7	5.55	3.1	0.35	2.0	2.58 (0.80)	1.0 0.7	三足欠損	第 23 図 - 1	F	鉄地金銅雲
2	I - 41	4.2	3.0	0.3	-	(1.78)	1.3	師部1/2残存	第 23 図 - 2	E	鉄地金銅雲
3	I - 209	2.1	2.15	0.3	-	2.15	1.15	線消痕残存	第 23 図 - 3	E	鉄地金銅雲
4	I - 135 I - 144	3.08	1.16	0.2	-	(1.0)	-	跡部3/4残存	第 23 図 - 4	B+E	鉄地金銅雲
5	I - 7	2.42	(1.34)	0.3	1.9	1.35	0.87	足部	第 23 図 - 5	E	鉄地金銅雲
6	I - 154	1.8	-	0.4	2.1	1.2	(0.6)	足部	第 23 図 - 6	E	鉄地金銅雲
7	I - 167	1.74	-	0.27	2.1	1.05	(0.64)	足部	第 23 図 - 7	E	鉄地金銅雲
8	I - 220	1.86	-	0.35	2.0	(0.87)	-	足部	第 23 図 - 8	E	鉄地金銅雲
9	I - 59	1.54	-	0.35	2.05	(1.05)	0.7	足部	第 23 図 - 9	E	鉄地金銅雲
10	I - 164	1.73	-	0.35	1.96	-	-	足部	第 23 図 - 10	E	鉄地金銅雲
11	I - 230	1.94	-	0.35	2.0	1.15	0.84	足部	第 23 図 - 11	E	鉄地金銅雲
12	I - 138	1.6	-	0.42	2.5	(1.15)	0.64	足部	第 23 図 - 12	E	鉄地金銅雲
13	I - 35	1.8	-	0.3	2.0	(0.8)	-	足部	第 23 図 - 13	E	鉄地金銅雲
14	Ⅴ - 1	1.98	-	0.4	2.04	-	-	足部	第 64 図 - 11	C	鉄製
15	Ⅴ - 7	2.57	-	0.2	2.2	1.0	0.8	足部(編2)	第 64 図 - 12	C	鉄製
16	Ⅴ - 8	3.88	-	0.2	2.0	1.26	0.62	足部(編2)	第 64 図 - 13	C	鉄地金銅雲
17	Ⅴ - 17	3.75	-	0.15	2.35	(0.9)	0.8	足部(編2)	第 64 図 - 14	C	鉄製
18	Ⅴ - 19	3.9	-	0.24	2.0	(0.5)	0.63	足部(編2)	第 64 図 - 15	C	鉄地金銅雲
19	Ⅴ - 21	1.58	-	0.25	1.94	1.2	0.64	足部(編2)	第 64 図 - 16	C	鉄地金銅雲
20	Ⅴ - 22	5.5	-	0.3	2.2	(0.88)	0.9	足部(編3)	第 64 図 - 17	C	鉄製
21	Ⅴ - 23	2.3	-	0.33	(2.2)	(0.8)	0.78	足部(編3)	第 64 図 - 18	C	鉄製
22	Ⅴ - 29	2.1	-	0.34	2.35	(0.9)	0.68	足部(編3)	第 64 図 - 20	C	鉄製
23	Ⅴ - 30	1.94	-	0.3	2.37	(0.69)	0.55	足部(編2)	第 64 図 - 21	C	鉄製

14 鉄 斧 (cm)

番号	遺物番号	長さ	刃 部		装 部		遺存痕	図収番号	出土地点	備 考
			幅	厚さ	外径	内径				
1	I - 5	8.4	3.8	3.6	2.9×2.44	2.05×1.45	完 形	第 17 図 - 8	F	

15 金属製品 (cm)

番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	-	-	遺存痕	図収番号	出土地点	備 考
1	I - 128	10.2	1.63	0.8	-	-	完 形	第 17 図 - 6	B	五接糸鉄製製品 薄片付着
2	I - 78	(5.70)	1.3	0.1	-	-	断 片	第 17 図 - 7	D	用途不明鉄製品
3	I - 125 I - 139	10.66	5.63	0.8	(刃部厚) 0.12	-	一部欠損	第 17 図 - 9	E+E	磨光
4	I - 28	11.3	7.0	0.3	-	-	完 形	第 17 図 - 10	E	「U」字状鉄製品
5	I - 200	1.93	1.55	0.28	(孔径) 0.35	-	完 形	第 23 図 - 14	E	用途不明鉄製品
6	I - 196	2.0	1.64	0.24	(孔径) 0.3	-	ほぼ完形	第 23 図 - 19	E	用途不明鉄製品
7	I - 196	1.54	1.5	0.08	(孔径) 0.14	-	完 形	第 23 図 - 20	E	用途不明鉄製品
8	I - 200	1.76	1.62	0.16	(孔径) 0.3	-	ほぼ完形	第 23 図 - 21	E	用途不明鉄製品

番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	(高さ)	(孔径)	遺存度	図面番号	出土地点	備考
9	I-26	1.92	1.9	0.05	(高さ) 0.4	(孔径) 0.47	ほぼ完形	第23図-18	G	金剛製
10	I-201	2.06	1.1	-	-	-	完形	第23図-15	E	錐部は鉄地金銅張り
11	I-46	2.08	0.83	-	-	-	完形	第23図-16	E	錐部は鉄地金銅張り
12	I-197	1.8	0.84	-	-	-	完形	第23図-17	E	錐部は鉄地金銅張り
13	I-161	2.24	0.74	0.6	-	-	完形	第23図-29	E	金銅製
14	Ⅲ-32	5.38	3.27	(断面) 0.51	-	-	一部残存	第64図-9	C	紋目金具
15	Ⅲ-28	(2.44)	2.73	0.76	-	-	一部残存	第64図-19	C	用途不明鉄製品
16	Ⅲ-51	(2.5)	-	0.44	-	-	一部残存	第64図-22	C	用途不明鉄製品
17	Ⅲ-49	1.09×1.01	-	0.03	(孔径) 0.5	(高さ) 0.24	完形	第64図-23	A	用途不明鉄製品

16 耳環・銅釦 (cm)

番号	遺物番号	外径	内径	断面径	重量(g)	遺存度	図面番号	出土地点	備考
1	I-318	2.61~2.94	1.95~1.98	0.62	16.0	完形	第26図-3	Z	耳環・銅地金銅張り
2	I-130	3.53~3.70	1.8~1.85	0.965	31.31	ほぼ完形・全面錆化	第26図-1	C	耳環・鉄製
3	I-132	3.57~3.80	1.66~1.63	1.1	32.36	ほぼ完形(一部剝離) 全面錆化	第26図-2	C	耳環・鉄製
4	Ⅱ-29	2.95~3.32	1.43~1.6	0.6	-	完形	第38図-1	B	耳環・鉄地金銅張り
5	Ⅱ-30	2.94~3.38	1.4~1.72	0.9	-	完形	第38図-2	B	耳環・鉄地金銅張り
6	Ⅱ-土壌	2.65~2.86	1.35~1.6	0.6	-	完形	第38図-3	東内溝内土壌	耳環・鉄地金銅張り
7	Ⅳ-26	2.96~2.98	1.41~1.63	0.78	11.5	完形・1/3腐食	第49図-9	E	耳環・銅地金銅張り
8	Ⅳ-28	2.46~2.71	1.50~1.48	0.79	12.45	完形・1/2腐食	第49図-10	B	耳環・銅地金銅張り
9	Ⅳ-45	2.89~3.05	1.53~1.09	0.78	22.9	完形・2/3腐食	第49図-11	B	耳環・銅地金銅張り
10	Ⅳ-46	2.89~3.05	1.41~1.67	0.72	20.5	完形・2/3腐食	第49図-12	B	耳環・銅地金銅張り
11	Ⅳ-23	7.01~7.03	6.20~6.26	0.42	15.3	完形	第49図-14	I	銅釦
12	Ⅳ-13	7.14~7.28	6.28~6.40	0.48	13.2	完形	第49図-13	D	銅釦
13	Ⅲ-60	2.60~2.86	1.43~1.63	0.73	14.15	ほぼ完形・全面錆化	第66図-1	C	耳環・銅地金銅張り

17 小玉・丸玉・白玉(mm)

番号	遺物番号	材質	径(たて・よこ)	厚さ	孔径	重量(g)	色調	遺存度	図面番号	出土地点	備考
1	I-10	滑石	12.0×12.0	10.0	3.5~3.0	2.40	灰褐色	完形	第27図-1	E	白玉・一部鉄線付着
2	I-11	滑石	16.0×16.5	9.0	3.2~3.0	2.50	灰褐色	完形	第27図-2	E	白玉
3	I-31	滑石	16.0×13.5	8.0	3.5~3.0	2.90	灰褐色	完形	第27図-3	E	白玉・鉄線付着
4	I-34	滑石	16.0×15.0	7.0	2.0~2.3	2.39	灰褐色	完形	第27図-4	E	白玉
5	I-37	滑石	13.0×15.5	8.0	2.5~2.5	1.72	灰褐色	部欠損	第27図-5	E	白玉 鉄及び鉄線付着
6	I-45	滑石	13.0×13.0	11.0	2.0~2.0	2.60	灰白色	完形	第27図-6	E	白玉 1/2に鉄線付着
7	I-63	滑石	16.0×12.5	7.0	3.0~3.0	2.02	灰白色	完形	第27図-7	E	白玉
8	I-64	滑石	11.0×11.0	7.5	2.5~2.2	1.56	灰白色	完形	第27図-8	E	白玉
9	I-65	滑石	12.0×11.0	8.0	2.5~2.5	2.50	灰褐色	完形	第27図-9	E	白玉

番号	遺物番号	材質	区 (大て・よこ)	厚さ	孔 径	直径(d)	色 調	遺存度	図版番号	出土地点	備 考
10	I-97	滑石	13.0×13.0	11.5	2.1~2.0	2.86	灰褐色	完形	第27図-10	E	白土・一部鉄錆付着
11	I-98	滑石	13.5×13.5	9.0	2.9~2.6	2.00	灰褐色	完形	第27図-11	E	白土
12	I-107	滑石	16.0×17.0	5.0	3.0~2.8	2.07	灰褐色	光形	第27図-12	R	白土
13	I-157	滑石	11.5×12.5	8.0	2.8~2.7	1.66	灰褐色	完形	第27図-13	E	白土
14	I-168	滑石	13.0×13.0	8.0	2.5~2.6	1.86	灰褐色	完形	第27図-14	E	白土
15	I-169	滑石	12.0×12.0	8.0	2.4~2.0	1.72	灰白色	完形	第27図-15	E	白土
16	I-170	滑石	16.0×15.5	11.0	4.2~3.5	3.36	灰白色	完形	第27図-16	E	白土
17	I-171	滑石	13.0×13.0	8.0	2.8~2.1	1.82	灰褐色	完形	第27図-17	E	白土
18	I-173	滑石	12.0×12.5	4.0	3.0~2.4	0.77	灰褐色	完形	第27図-18	E	白土
19	I-174	滑石	11.5×12.0	9.0	2.4~2.4	2.00	灰褐色	完形	第27図-19	E	白土・一部鉄錆付着
20	I-175	滑石	12.0×11.0	9.0	2.9~2.3	1.99	灰褐色	完形	第27図-20	E	白土
21	I-176	滑石	12.0×13.0	8.0	2.3~2.1	1.94	灰褐色	完形	第27図-21	E	白土
22	I-177	滑石	11.5×12.0	8.0	2.7~2.3	1.61	灰褐色	完形	第27図-22	E	白土 下部に鉄錆付着
23	I-178	滑石	12.0×12.0	7.0	2.6~2.3	1.42	灰褐色	完形	第27図-23	E	白土
24	I-179	滑石	11.0×11.5	9.0	2.6~2.5	1.64	灰褐色	完形	第27図-24	R	白土
25	I-180	滑石	12.0×11.0	7.0	3.2~2.7	1.15	灰褐色	完形	第27図-25	E	白土・一部鉄錆付着
26	I-181	滑石	11.0×11.0	10.0	2.5~2.2	1.88	灰白色	完形	第27図-26	R	白土
27	I-182	滑石	12.0×11.5	6.0	2.6~2.4	1.11	灰白色	完形	第27図-27	R	白土
28	I-183	滑石	11.0×11.5	7.0	4.0~3.0	1.31	灰白色	完形	第27図-28	R	白土
29	I-184	滑石	11.5×11.0	7.5	2.8~2.4	1.45	灰褐色	完形	第27図-29	E	白土
30	I-185	滑石	12.0×11.0	8.5	2.9~2.8	2.02	灰白色	光形	第27図-30	E	白土
31	I-186	滑石	12.5×12.0	9.0	2.7~2.5	2.07	灰褐色	完形	第28図-1	E	白土
32	I-187	滑石	13.0×13.0	8.0	2.6~2.5	1.63	灰白色	完形	第28図-2	E	白土
33	I-188	滑石	12.0×10.5	7.0	3.1~2.7	1.29	灰褐色	完形	第28図-3	E	白土
34	I-189	滑石	11.0×11.0	8.0	3.5~2.6	1.26	灰白色	一部欠損	第28図-4	R	白土
35	I-190	滑石	12.5×11.5	7.5	3.1~2.7	1.62	灰褐色	完形	第28図-5	E	白土 全体に鉄錆付着
36	I-191	滑石	12.0×12.0	9.0	2.6~2.3	1.75	灰白色	完形	第28図-6	R	白土
37	I-192	滑石	10.5×11.0	6.0	2.5~2.2	1.06	灰褐色	完形	第28図-7	E	白土
38	I-195	滑石	12.0×12.5	10.5	2.5~2.4	2.71	灰褐色	完形	第28図-8	E	白土
39	I-198	滑石	12.0×13.0	9.0	2.4~2.4	1.75	灰褐色	完形	第28図-9	R	白土 全体に鉄錆付着
40	I-202	滑石	12.0×12.0	6.0	2.3~2.2	1.36	灰褐色	完形	第28図-10	E	白土 下部に鉄錆付着
41	I-205	滑石	11.0×12.5	4.0	2.7~2.5	0.57	灰褐色	完形	第28図-11	E	白土
42	I-207	滑石	12.0×13.0	11.0	3.5~2.8	2.58	灰褐色	完形	第28図-12	E	白土
43	I-229	滑石	12.0×12.5	8.0	3.4~2.5	1.67	灰褐色	完形	第28図-13	E	白土 全体に鉄錆付着
44	I-242	滑石	12.0×12.0	7.0	2.3~2.3	1.32	灰褐色	完形	第28図-14	R	白土
45	I-243	滑石	10.0×11.5	3.0	2.3~2.3	0.58	灰褐色	75%残存	第28図-15	R	白土
46	I-244	滑石	13.0×13.0	8.0	2.0~1.8	1.94	灰褐色	完形	第28図-16	E	白土
47	I-245	滑石	13.0×13.0	8.0	2.0~2.2	1.86	灰褐色	光形	第28図-17	E	白土

番号	遺物番号	材質	径 (たて・よこ)	厚さ	孔径	重さ(g)	色調	透光度	図数番号	出土地点	備考
48	I-246	滑石	11.0×11.0	9.0	2.4~2.3	1.72	灰褐色	完形	第28図-18	E	白土
49	I-247	滑石	12.0×12.0	8.0	2.5~1.65	1.05	灰褐色	完形	第28図-19	R	白土
50	I-248	滑石	13.0×13.0	10.0	2.5~2.5	2.22	灰白色	完形	第28図-20	E	白土
51	I-249	滑石	12.0×12.0	10.5	2.3~1.9	2.50	灰褐色	完形	第28図-21	E	白土
52	I-250	滑石	12.0×13.0	7.0	2.7~2.2	1.57	灰褐色	完形	第28図-22	E	白土・一部鉄錆付着
53	I-278	滑石	12.0×12.0	4.0	2.8~2.6	1.06	灰白色	完形	第28図-23	E	白土
54	I-279	滑石	12.0×12.0	10.0	2.5~2.5	2.04	灰白色	完形	第28図-24	E	白土・一部鉄錆付着
55	I-283	滑石	16.0×15.5	10.0	3.7~3.5	3.07	灰褐色	完形	第28図-25	E	白土・一部鉄錆付着
56	I-284	滑石	12.0×12.0	7.0	3.2~1.4	1.47	灰褐色	完形	第28図-26	E	白土・一部鉄錆付着
57	I-172	土製	7.0×6.0	5.0	1.5~1.4	0.23	黒褐色	完形	第26図-9		小玉
58	I-263	土製	7.5×6.0	4.0	1.7~1.7	0.24	黒褐色	完形	第26図-10		小玉
59	I-261	土製	7.0×7.0	4.0	2.0~1.3	0.27	黒褐色	完形	第26図-11		小玉
60	I-289	土製	6.0×7.0	6.0	1.5~1.4	0.30	赤黒褐色	完形	第26図-12		小玉
61	I-290	土製	6.5×5.5	3.0	1.3~1.3	0.185	赤黒褐色	完形	第26図-13		小玉
62	IV-15	ガラス	3.9×4.0	2.8	1.2~1.1	0.06	緑青	完形	第50図-1	E	小玉
63	IV-27	ガラス	4.0×3.9	2.2	1.1~1.0	0.07	青	完形	第50図-2	E	小玉
64	IV-28	ガラス	4.1×3.9	2.0	1.0~1.0	0.05	青	完形	第50図-3	B	小玉
65	IV-30	ガラス	3.2×3.6	2.3	1.2~1.1	0.07	青	完形	第50図-4	B	小玉
66	IV-31	ガラス	3.8×3.9	2.0	1.1~0.8	0.06	緑青	完形	第50図-5	B	小玉
67	IV-32	ガラス	3.2×3.0	2.6	1.0~1.0	0.05	青	完形	第50図-6	B	小玉
68	IV-33	ガラス	4.1×4.2	2.8	1.2~1.2	0.07	青	完形	第50図-7	B	小玉
69	IV-34	ガラス	3.9×3.9	2.2	1.2~1.0	0.07	青	完形	第50図-8	B	小玉
70	IV-35	ガラス	3.4×3.7	3.1	1.0~0.9	0.09	青	完形	第50図-9	B	小玉
71	IV-36	ガラス	4.0×4.0	2.9	1.2~1.1	0.085	青	完形	第50図-10	B	小玉
72	IV-37	ガラス	3.6×3.9	2.8	0.8~0.8	0.07	青	完形	第50図-11	B	小玉
73	IV-38	ガラス	3.2×3.4	1.8	1.0~0	0.07	青	完形	第50図-12	B	小玉
74	IV-39	ガラス	3.2×3.0	2.6	1.0~0.9	0.07	青	完形	第50図-13	B	小玉
75	IV-40	ガラス	3.8×3.3	3.0	1.3~1.2	0.07	青	完形	第50図-14	B	小玉
76	IV-41	ガラス	3.9×3.7	2.0	1.0~1.0	0.07	青	完形	第50図-15	B	小玉
77	IV-42	ガラス	4.0×3.8	3.0	1.3~1.1	0.06	青	完形	第50図-16	B	小玉
78	IV-47	ガラス	3.9×4.0	2.6	1.1~1.1	0.09	青	完形	第50図-17	B	小玉
79	IV-48	ガラス	3.7×3.9	3.0	1.1~1.0	0.85	青	完形	第50図-18	B	小玉
80	IV-55	ガラス	3.3×3.2	2.1	1.2~1.0	0.07	青	完形	第50図-19	B	小玉
81	IV-56	ガラス	3.5×3.6	3.3	0.8~0.7	0.07	青	完形	第50図-20	B	小玉
82	IV-57	ガラス	3.2×3.5	2.6	1.0~1.0	0.07	青	完形	第50図-21	B	小玉
83	IV-58	ガラス	3.8×4.2	2.4	1.1~1.0	0.075	青	完形	第50図-22	B	断面突起有・小玉
84	IV-59	ガラス	4.1×4.1	2.6	1.2~1.1	0.075	青	完形	第50図-23	B	小玉
85	IV-60	ガラス	3.2×3.5	2.4	1.2~0.7	0.05	青	完形	第50図-24	B	小玉

品号	通物番号	材質	寸法 (たて・よこ)	厚さ	孔径	重さ(g)	色調	透光度	図帳番号	出上地点	備考	
86	IV-61	ガラス	3.5×3.2	2.0	1.1~1.0	0.075	青	光	形第50図-25	B	小玉	
87	IV-62	ガラス	3.9×3.5	2.4	2.0~1.3	0.06	青	光	形第50図-26	B	小玉	
88	IV-63	ガラス	3.9×3.5	3.2	1.0~1.0	0.09	青	光	形第50図-27	B	小玉	
89	IV-64	ガラス	3.5×4.4	2.7	1.3~1.0	0.04	青	光	形第50図-28	B	小玉	
90	IV-65	ガラス	3.5×3.5	3.1	1.1~1.0	0.08	青	光	形第50図-29	B	小玉	
91	IV-66	ガラス	4.0×4.0	2.9	1.2~1.0	0.075	青	光	形第50図-30	B	小玉	
92	IV-67	ガラス	3.6×3.6	3.0	1.5~1.0	0.055	青	光	形第50図-31	B	小玉	
93	IV-68	ガラス	3.3×3.5	2.9	1.0~1.0	0.07	青	完	形第50図-32	B	小玉	
94	IV-69	ガラス	4.0×3.8	2.8	1.3~1.1	0.04	青	完	形第50図-33	B	小玉	
95	IV-70	ガラス	4.0×3.9	2.8	1.3~0.9	0.085	青	完	形第50図-34	B	小玉	
96	IV-71	ガラス	2.3×3.4	2.5	1.1~1.1	0.04	青	完	形第50図-35	B	小玉	
97	IV-72	ガラス	3.4×3.5	2.3	0.8~0.7	0.08	青	完	形第50図-36	B	小玉	
98	IV-73	ガラス	3.8×4.1	3.0	1.2~1.1	0.07	青	完	形第50図-37	B	小玉	
99	IV-74	ガラス	-	-	-	(0.025)	青	50	年	-	B	小玉
100	IV-75	ガラス	3.3×3.5	3.5	1.0~1.0	0.065	青	完	形第50図-38	B	小玉	
101	IV-76	ガラス	3.5×3.7	2.8	1.0~1.0	0.055	青	完	形第50図-39	B	小玉	
102	IV-77	ガラス	3.7×3.8	2.6	1.5~1.0	0.05	青	光	形第50図-40	B	小玉	
103	IV-78	ガラス	3.8×3.3	2.8	1.1~1.0	0.05	青	完	形第50図-41	B	小玉	
104	IV-79	ガラス	3.8×4.0	2.5	1.4~1.1	0.06	青	完	形第50図-42	B	小玉	
105	IV-80	ガラス	4.6×3.9	2.7	1.3~1.0	0.08	青	完	形第50図-43	B	小玉	
106	IV-81	ガラス	3.9×3.9	2.8	1.2~1.2	0.085	青	光	形第50図-44	B	小玉	
107	IV-82	ガラス	4.0×4.0	2.1	1.8~1.8	0.048	青	完	形第50図-45	B	小玉	
108	IV-93	ガラス	3.4×3.3	2.9	1.0~0.6	0.08	青	完	形第50図-46	B	小玉	
109	IV-94	ガラス	6.0×6.2	4.0	1.2~1.2	0.22	群青	完	形第50図-47	B	小玉	
120	IV-95	ガラス	6.0×5.7	4.1	1.6~1.3	0.21	群青	完	形第50図-48	B	小玉	
111	IV-96	ガラス	6.0×6.3	4.0	2.1~1.2	0.20	群青	完	形第50図-49	B	小玉	
112	IV-97	ガラス	3.7×3.9	2.5	1.0~0.7	0.05	青	完	形第50図-50	B	小玉	
113	IV-98	ガラス	5.0×6.0	5.0	1.7~1.3	0.25	群青 (不透明)	完	形第50図-51	B	小玉	
114	IV-99	ガラス	3.9×3.9	2.8	1.0~0.9	0.06	青	完	形第50図-52	B	小玉	
115	IV-100	ガラス	3.9×3.8	3.0	1.0~0.8	0.07	青	完	形第50図-53	B	小玉	
116	IV-101	ガラス	3.5×3.9	2.1	1.1~1.0	0.07	群青	完	形第50図-54	B	小玉	
117	IV-102	ガラス	4.0×3.7	3.0	1.1~0.7	0.085	青	完	形第50図-55	B	小玉	
118	IV-104	ガラス	4.0×4.1	3.0	1.6~1.2	0.10	青	完	形第50図-56	B	小玉	
118	IV-105	ガラス	4.0×3.8	2.7	1.2~1.0	0.06	青	完	形第50図-57	B	小玉	
119	IV-105	ガラス	4.2×4.0	2.4	1.5~1.3	0.09	群青	完	形第50図-58	B	小玉	
120	IV-107	ガラス	5.2×6.0	4.0	2.0~2.0	0.195	群青	完	形第50図-59	B	小玉	
121	Ⅴ-2	ガラス	6.0×5.5	6.0	1.2~1.2	0.23	群青	完	形第65図-1	C	小玉	
122	Ⅴ-4	ガラス	6.8×8.0	5.2	2.1~1.9	0.25	群青	完	形第65図-2	C	小玉	
123	Ⅴ-14	ガラス	6.1×6.6	5.0	1.5~1.4	0.24	群青	完	形第65図-3	C	小玉	

番号	遺物番号	材質	寸法 (たて・よこ)	厚さ	孔 深	径(φ)	色 調	遺存度	図形番号	出土地	備 考
124	Ⅴ-16	ガラス	7.0×7.0	5.5	3.0~2.5	0.35	群青	完形	第65図-4	C	小玉
125	Ⅴ-36	ガラス	6.0×7.0	4.0	1.5~1.3	0.22	緑	完形	第65図-5	C	小玉
126	Ⅴ-37	ガラス	5.5×6.5	8.0	1.7~1.5	0.30	群青	完形	第65図-6	C	小玉
127	Ⅴ-38	ガラス	6.×6.6	5.8	1.8~1.7	0.22	群青	完形	第65図-7	C	小玉
128	Ⅴ-52	ガラス	6.7×7.0	5.1	2.0~2.0	0.31	群青	完形	第65図-8	C	小玉 白くヒビ割れる
129	Ⅴ-54	ガラス	8.0×7.8	4.5	2.0~1.8	0.32	青	完形	第65図-9	C	小玉
130	Ⅴ-56	ガラス	7.5×7.5	5.5	2.0~1.9	0.34	群青	完形	第65図-10	C	小玉
131	Ⅴ-63	ガラス	8.2×6.5	6.0	1.9	(0.42)	群青	一部欠損	第65図-11	B	小玉
132	Ⅴ-69	土製	6.5×6.0	5.0	2.0~2.0	0.15	黒褐色	ほぼ完形	第65図-12	B	小玉 表面磨滅・焼成済
133	Ⅴ-70	土製	7.0×7.8	5.0	2.0~1.9	(0.16)	黒褐色	一部欠損	第65図-13	B	小玉 表面磨滅・焼成済
134	Ⅴ-72	土製	6.0×5.8	4.3	1.0~1.0	0.11	黒褐色	一部欠損	第65図-14	B	小玉 表面磨滅・焼成済
135	Ⅴ-73	土製	5.9×6.0	4.0	1.3~1.0	0.12	黒褐色	完形	第65図-15	B	小玉 表面磨滅・焼成済
136	Ⅴ-74	土製	6.0×6.0	4.1	1.0~1.0	0.13	黒褐色	完形	第65図-16	B	小玉 表面磨滅・焼成済
137	Ⅴ-76	ガラス	8.0×6.0	3.5	1.5~1.5	(0.16)	水色	一部欠損	第65図-17	C	小玉・白くヒビ割れる 表面磨滅
138	Ⅴ-78	ガラス	4.1×4.4	2.0	1.5~1.9	0.05	群青	完形	第65図-18	C	小玉
139	Ⅴ-79	ガラス	4.0×5.2	3.0	1.0~1.1	0.06	群青	完形	第65図-19	C	小玉
140	Ⅴ-64	土製	10.5×2.0	10.0	1.5~1.5	1.35	淡黄褐色	完形	第65図-21	B	丸玉
141	Ⅴ-65	土製	10.0×1.0	10.0	3.0~3.0	1.10	淡黄褐色	完形	第65図-22	B	丸玉
142	Ⅴ-66	土製	8.8×9.6	9.5	2.0~2.0	0.60	淡黄褐色	完形	第65図-23	B	丸玉
143	Ⅴ-67 Ⅴ-68	土製 土製	10.0×0.0	9.5	1.8~1.6	0.85	淡黄褐色 黄褐色	完形 完形	第65図-24	B B	丸玉・焼成済 丸玉・焼成済
144	Ⅴ-71	土製	12.0×1.5	11.5	3.0~2.0	1.55	灰色	完形	第65図-25	B	丸玉
145	Ⅴ-75	ろう石	10.6×0.7	8.0	2.1~2.0	1.30	灰色 (不透明)	完形	第65図-26	C	小玉
146	Ⅴ-18	ガラス	7.0×6.5	4.0	3.0~2.9	0.20	群青	完形	第70図-4	B	小玉
147	Ⅴ-19	ガラス	8.0×6.8	5.8	1.9~1.9	0.50	群青	完形	第70図-5	B	小玉
148	Ⅴ-20	ガラス	8.5×8.0	5.0	2.1~2.1	0.40	群青	完形	第70図-6	B	小玉
149	Ⅴ-21	ガラス	8.5×6.9	5.0	2.0~2.0	0.35	青	完形	第70図-7	B	小玉
150	Ⅴ-29	ガラス	4.2×4.5	3.0	1.8~1.5	0.04	水色	完形	第70図-8	B	小玉
151	Ⅴ-30	ガラス	3.2×3.4	2.6	1.4~1.4	0.035	青	完形	第70図-9	B	小玉
152	Ⅴ-31	ガラス	3.6×3.8	2.5	1.1~1.1	0.04	青	完形	第70図-10	B	小玉
153	Ⅴ-32	ガラス	3.8×4.0	3.3	2.0~1.8	0.05	青緑	完形	第70図-11	B	小玉
154	Ⅴ-33 Ⅴ-34	ガラス ガラス	4.1×3.0	2.9	2.0~2.0	0.06	水色 青色	完形 完形	第70図-12	B B	小玉
155	Ⅴ-35	ガラス	3.8×4.0	2.7	1.3~1.3	0.04	群青	完形	第70図-13	B	小玉
156	Ⅴ-36	ガラス	4.5×4.5	3.0	1.3~1.3	0.05	水色	完形	第70図-14	B	小玉
157	Ⅴ-37	ガラス	4.0×3.1	4.6	1.4~1.4	0.06	黄緑	完形	第70図-15	B	小玉
158	Ⅴ-38	ガラス	2.9×2.1	1.8	1.0~1.0	0.02	群青	完形	第70図-16	B	小玉
159	Ⅴ-39	ガラス	4.1×4.0	2.7	1.0~1.0	0.055	群青	完形	第70図-17	B	小玉
160	Ⅴ-40	ガラス	3.8×3.2	2.3	2.0~2.0	0.07	群青	完形	第70図-18	B	小玉
161	Ⅴ-41	ガラス	2.8×3.5	2.0	1.1~1.1	0.04	青	完形	第70図-19	B	小玉

番号	遺物番号	材質	径 (たて・よこ)	厚さ	孔 径	重量(g)	色 調	遺存度	図版番号	出土地点	備 考
162	IX-42	ガラス	3.0×3.7	2.0	1.8~1.5	0.05	緑	完形	第70図-20	B	小玉
163	IX-43	ガラス	3.0×4.2	2.5	1.4~1.4	0.055	青	完形	第70図-21	B	小玉
164	IX-44	ガラス	4.0×4.5	2.6	1.9~1.9	0.08	青	完形	第70図-22	B	小玉
165	IX-45	ガラス	3.5×3.4	2.8	1.5~1.5	0.05	青	完形	第70図-23	B	小玉
166	IX-46	ガラス	3.4×3.5	2.3	1.5~1.5	0.05	群青	完形	第70図-24	B	小玉
167	IX-47	ガラス	4.0×4.2	2.0	1.1~1.0	0.06	群青	完形	第70図-25	B	小玉
168	IX-48	ガラス	3.5×3.9	2.2	1.5~1.4	0.055	群青	完形	第70図-26	B	小玉
169	IX-49	ガラス	3.4×3.3	2.0	1.0~1.0	0.045	群青	完形	第70図-27	B	小玉
170	IX-50	ガラス	3.0×3.5	2.9	1.1~1.0	0.08	青	完形	第70図-28	B	小玉
171	IX-51	ガラス	4.0×3.9	2.7	1.1~1.0	0.08	群青	完形	第70図-29	B	小玉
172	IX-52	ガラス	3.6×4.2	3.5	1.1~1.1	0.095	青	完形	第70図-30	B	小玉
173	IX-56	ガラス	4.0×4.0	2.0	1.0~1.0	0.08	群青	完形	第70図-31	B	小玉
174	IX-57	ガラス	3.0×3.8	3.2	2.0~2.0	0.06	青	完形	第70図-32	B	小玉
175	IX-58	ガラス	3.0×3.4	2.0	0.9~0.9	0.03	群青	完形	第70図-33	B	小玉
176	IX-59	ガラス	4.5×4.1	2.0	1.0~1.0	0.08	群青	完形	第70図-34	B	小玉
177	IX-61	ガラス	3.4×3.7	2.2	1.5~1.5	0.02	群青	完形	第70図-35	B	小玉
178	IX-62	ガラス	4.0×4.2	2.0	1.6~1.6	0.05	群青	完形	第70図-36	B	小玉
179	IX-70	ガラス	2.9×2.5	3.4	1.0~1.0	0.03	青	完形	第70図-37	B	小玉
180	IX-71	ガラス	4.3×4.5	3.7	1.1~1.0	0.14	群青	95%	第70図-38	B	小玉
181	IX-72	ガラス	3.2×3.5	2.0	1.0~1.0	0.05	群青	完形	第70図-39	B	小玉
182	IX-73	ガラス	3.8×3.7	1.3	1.5~1.5	0.025	青	完形	第70図-40	B	小玉
183	IX-74	ガラス	3.2×2.8	2.8	1.4~1.3	0.05	群青	完形	第70図-41	B	小玉
184	IX-75	ガラス	2.8×2.3	2.0	1.0~1.0	0.02	群青	完形	第70図-42	B	小玉
185	IX-76	ガラス	3.2×3.1	2.0	0.9~0.9	0.05	群青	完形	第70図-43	B	小玉
186	IX-77	ガラス	3.8×3.6	2.5	1.4~1.4	0.07	群青	完形	第70図-44	B	小玉
187	IX-78	ガラス	3.0×3.4	2.7	1.0~1.0	0.07	青	完形	第70図-45	B	小玉
188	IX-79	ガラス	3.0×3.6	3.1	1.0~0.9	0.08	青	完形	第70図-46	B	小玉
189	IX-80	ガラス	-	-	-	-	青	60%	-	B	小玉
	IX-81	ガラス	-	-	-	-	青	40%	-	B	小玉

18 切子玉(mm)

番号	透物 番号	材質	長さ	最大径	最小径	孔径	重さ(g)	色調	透存度	図 番号	出 地点	備 考
1	Ⅱ-11	水晶	29.55~29.85	16.3	9.1~10.0	3.75~1.35	9.30	透明に近く 黄色味がある	宛形で中央部 にきず有り	第39図 3	C	片面穿孔・面取り 六角
2	Ⅱ-15	水晶	20.1~20.3	14.5	7.9~8.2	3.75~1.4	4.80	半透明	ほぼ宛形で 中央部に亀裂 と打入有り	第39図 4	C	片面穿孔・面取り 六角
3	Ⅲ-18	水晶	25.75~26.1	17.5	10.8~11.9	4.1~1.4	9.10	透明	宛形	第39図 5	C	片面穿孔・面取り 六角
4	Ⅲ-19	水晶	16.0~16.5	13.9	7.1~8.0	3.1~1.8	3.60	半透明	宛形	第39図 6	C	片面穿孔・面取り 六角
5	Ⅲ-20	水晶	17.2~17.9	13.55	7.5~9.0	3.8~1.1	4.00	半透明	ほぼ宛形で 上端一部欠陥	第39図 7	C	片面穿孔・面取り 六角
6	Ⅲ-21	水晶	32.5~33.1	18.5	8.5~10.1	3.95~1.4	12.45	透明に近く 黄色味がある	宛形	第39図 8	C	片面穿孔・面取り 六角
7	Ⅲ-22	水晶	27.8~28.1	15.35	8.3~9.55	3.8~1.8	8.20	透明	時光	第39図 9	C	片面穿孔・面取り 六角
8	Ⅲ-23	水晶	18.4~19.4	16.5	9.8~10.3	3.3~1.95	6.45	半透明	宛形	第39図 10	C	片面穿孔・面取り 六角
9	Ⅲ-25	水晶	18.2~18.5	12.85	7.9~8.6	3.55~1.3	3.80	半透明	宛形	第39図 11	C	片面穿孔・面取り 六角
10	Ⅲ-28	水晶	14.55~14.65	12.9	7.2~8.1	3.6~1.55	2.80	透明	宛形	第39図 12	C	片面穿孔・面取り 六角
11	Ⅳ-11	水晶	17.4~18.0	12.3	6.0~6.6	4.0~1.5	3.10	白色透明	ほぼ球光形	第65図 26	C	片面穿孔・面取り 六角
12	Ⅳ-13	水晶	22.1~22.5	14.5	6.5~7.0	4.0~1.8	5.35	白色透明	時光	第65図 27	C	片面穿孔・面取り 六角
13	Ⅳ-15	水晶	21.3~22.0	12.8	6.2~6.4	4.1~2.0	3.75	白色透明	ほぼ球光形	第65図 28	C	片面穿孔・面取り 六角
14	Ⅳ-18	水晶	21.2~21.8	13.5	7.7~8.9	4.4~1.9	3.95	白色透明	宛形	第65図 29	C	片面穿孔・面取り 六角
15	Ⅳ-24	水晶	16.4~17.5	13.5	7.4~7.6	4.0~1.6	3.35	白色透明	宛形	第65図 30	C	片面穿孔・面取り 六角
16	Ⅳ-25	水晶	13.9~14.0	11.0	5.7~5.8	4.0~2.0	2.10	白色透明	宛形	第65図 31	C	片面穿孔・面取り 六角
17	Ⅳ-43	水晶	16.6~17.0	13.0	7.6~8.4	3.8~2.0	3.50	白色透明	宛形	第65図 32	C	片面穿孔・面取り 六角
18	Ⅴ-12	水晶	11.7~12.6	10.6	5.0~5.2	2.0~1.0	1.40	白色透明	ほぼ球光形	第71図 12	B	片面穿孔・面取り 八角
19	Ⅴ-13	水晶	12.6~13.0	10.0	6.5~7.4	3.4~1.2	1.70	白色透明	一部欠陥	第71図 13	B	片面穿孔・面取り 六角
20	Ⅴ-14	水晶	14.8~15.5	11.0	4.8~5.3	4.0~1.1	2.30	白色透明	ほぼ球光形	第71図 14	B	片面穿孔・面取り 六角
21	Ⅴ-15	水晶	12.8~13.0	10.2	4.8~5.2	3.0~1.5	1.50	白色透明	宛形	第71図 15	B	片面穿孔・面取り 六角
22	Ⅴ-16	メノウ	12.8~13.0	11.8	5.7~6.0	3.0~1.0	1.80	白色透明	宛形	第71図 16	B	片面穿孔・面取り 六角
23	Ⅴ-17	水晶	9.8~10.0	9.0	8.2	1.9~1.8	1.25	白色透明	時光	第71図 17	B	片面穿孔・気泡有 様なし

19 畫玉(mm)

番号	遺物番号	材質	長さ	最大幅	厚さ	孔径	重さ(g)	色調	透存度	図版番号	出土地点	備考
1	IV-117	琥珀	(16.8~16.9)	15.9	10.1	2.5	(2.0)	暗赤褐色	3/4	第50図-60	Z	
2	V-3	琥珀	19.0~20.5	14.8	10.0	3.0~2.9	1.90	暗赤褐色	一部欠損	第66図-4	C	
3	V-6	琥珀	34.7~38.0	25.4	23.4	2.1~2.0	15.25	暗赤褐色	完形	第66図-5	C	上層二穴 一穴のみ貫通
4	V-9	琥珀	25.5~28.0	23.0	23.0	4.0~3.0	10.00	暗赤褐色	一部欠損	第66図-6	C	
5	V-10	琥珀	22.2~23.0	16.0	9.5	(3.0)~3.0	1.85	暗赤褐色	2/3	第66図-7	C	
6	V-12	琥珀	22.3~23.0	16.1	10.1	3.5~3.0	2.05	暗赤褐色	完形	第66図-8	C	
7	V-20	琥珀	24.0~28.0	22.0	18.0	6.0~5.9	7.00	暗赤褐色	完形	第66図-9	C	両端穴とも0状 を呈す
8	V-31	琥珀	35.0~39.0	28.0	21.0	3.0~2.0	14.50	暗赤褐色	完形	第66図-10	C	両穴二穴 一穴のみ貫通
9	V-5	琥珀	-	-	-	-	-	暗赤褐色	1/3	-	C	
10	V-25	琥珀	-	-	-	-	-	暗赤褐色	1/3	-	C	
11	V-26	琥珀	-	-	-	-	-	暗赤褐色	1/8	-	C	
12	V-34	琥珀	24.85	-	8.4	-	-	暗赤褐色	1/2	第66図-11	C	
13	V-55	琥珀	24.5	-	6.85	-	-	暗赤褐色	1/2	第66図-12	C	

20 勾玉(mm)

図号	遺物番号	材質	長さ	幅	厚さ	孔径	面取り径	重さ(g)	色調	透存度	図版番号	出土地点	備考
1	I-21	メノウ	33.8	21.9	10.0	3.8~2.3	9.0~7.0	2.60	乳褐色に赤褐色	完形	第26図-4	E	片面穿孔・面取り
2	I-110	メノウ	30.2	19.7	11.0	4.0~2.7	-	7.80	赤褐色に乳褐色 一部乳白色	完形	第26図-5	E	片面穿孔
3	I-126	メノウ	31.0	19.2	10.5	2.5~1.8	-	6.90	乳褐色	完形	第26図-6	E	片面穿孔
4	I-131	メノウ	33.1	19.0	10.5	4.2~2.0	-	7.00	赤褐色に乳白色	完形	第26図-7	E	片面穿孔
5	I-264	メノウ	32.0	19.1	9.0	4.0~1.5	10.0~7.5	7.10	赤褐色	完形	第26図-8	E	片面穿孔・面取り
6	II-12	メノウ	36.5	19.8	10.0	3.8~1.8	8.5~7.0	9.20	乳褐色に赤褐色	完形	第38図-4	C	片面穿孔・面取り
7	III-13	メノウ	27.6	16.0	8.0	9.0~6.2	9.0~6.2	5.00	縞状に白色半透明	完形	第38図-5	C	片面穿孔・面取り
8	III-14	メノウ	33.4	18.9	10.3	2.8~1.5	10.0~5.0	8.75	乳褐色	完形	第38図-6	C	片面穿孔・面取り
9	III-16	メノウ	40.0	21.7	10.5	2.7~1.3	13.0~8.5	12.60	赤褐色	完形	第38図-7	C	片面穿孔・面取り
10	III-17	メノウ	28.2	15.9	8.0	2.4~1.3	6.0~5.0	5.05	赤褐色に乳白色	完形	第38図-8	C	片面穿孔・面取り
11	III-24	メノウ	38.0	22.8	10.0	3.0~1.5	7.6~7.5	11.10	乳褐色に赤褐色	完形	第38図-9	C	片面穿孔・面取り
12	III-25	メノウ	37.0	20.0	9.5	2.5~1.8	9.0~6.8	9.20	乳褐色に乳白色	完形	第38図-10	C	片面穿孔・面取り
13	III-27	メノウ	36.2	14.1	7.3	2.8~1.0	4.5~3.0	4.05	赤褐色	完形	第38図-11	C	片面穿孔・面取り
14	III-61	水晶	(12.5)(10.5)	7.3	3.7~1.0	-	-	(1.25)	白色透明	1/2	第66図-2	C	片面穿孔

21 管 玉 (mm)

番号	通器	材質	長さ	径 (たて・よこ)	孔 径	面取り径	重さ(g)	色 調	透光度	図取番号	注目点	備 考
1	Ⅷ-35	碧玉	19.0	6.8~7.0	3.0~1.0	-	1.45	深緑色	完 形	第66図-3	C	片面穿孔
2	Ⅸ-1	碧玉	27.0~25.8	10.2~10.0	4.0~1.0	3.2~2.5	4.90	濃深緑色	完 形	第71図-1	B	片面穿孔・面取り
3	Ⅸ-2	碧玉	24.2~23.8	10.0~9.3	3.0~(1.0)	3.5~2.6	4.10	濃深緑色	ほぼ完形	第71図-2	B	片面穿孔・面取り
4	Ⅸ-3	碧玉	27.0~25.6	8.8~8.0	4.0~0.9	4.4~4.3	4.25	濃深緑色	完 形	第71図-3	B	片面穿孔・面取り
5	Ⅸ-4	碧玉	27.3~25.8	9.5~9.5	3.1~1.0	-	4.60	深緑色	完 形	第71図-4	B	片面穿孔
6	Ⅸ-5	碧玉	28.5~27.8	9.0~9.0	3.0~1.0	-	4.30	深緑色	完 形	第71図-5	B	片面穿孔
7	Ⅸ-6	碧玉	28.4~28.0	10.5~10.0	3.0~1.4	-	5.80	深緑色	完 形	第71図-6	B	片面穿孔
8	Ⅸ-7	碧玉	28.5~28.4	10.5~10.0	4.0~1.5	4.5~4.3	5.60	深緑色	完 形	第71図-7	B	片面穿孔・面取り
9	Ⅸ-8	碧玉	29.5~27.8	9.0~9.0	2.5~1.0	4.2~3.8	4.45	緑 色	完 形	第71図-8	B	片面穿孔・面取り
10	Ⅸ-9	碧玉	30.0~28.6	9.5~9.5	3.0~1.1	7.5~6.0	5.20	深緑色	完 形	第71図-9	B	片面穿孔・面取り
11	Ⅸ-10	碧玉	27.0~25.5	11.5~10.1	3.0~1.0	-	6.30	深緑色	完 形	第71図-10	B	片面穿孔
12	Ⅸ-11	碧玉	26.2~25.4	9.0~8.5	3.0~0.9	4.9~4.3	3.55	濃深緑色	完 形	第71図-11	B	片面穿孔・面取り

第2表

1. X号石棺周辺出土遺物解説表(第76図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色澤・焼成	備考
1 (76-1)	甕 口縁部 弥生土器	2.7 4.3 0.55	外縁する口縁部の口唇部が直上に削 み皿を有する。	外面はケシ状工具による平行沈線文 (下から上に施文) 内面は器面荒れ	灰石・砂粒 (内)赤褐色 (外)褐色 良好	
2 (76-2)	甕 口縁部 弥生土器	3.5 6.4 0.55		外面は付加条縄文による羽状縄文 内面はナデ	長石・細砂 (内)赤褐色 (外)黒褐色 良好	
3 (76-3)	甕 口縁部 弥生土器	5.7 6.5 0.7		外面は付加条縄文による羽状縄文 内面はナデ	長石・石英・微砂粒 (内)赤褐色 (外)黒褐色 良好	
4 (76-4)	甕 口縁部 弥生土器	B 6.8 C (2.8)	平底の甕部より胴部は外傾して立ち 上がる。器厚はほぼ均一である。	外面は縄文 内面は器面荒れ 底部は木炭屑痕	長石・砂粒 (内)赤褐色 (外)黒褐色 やや中良	

2. SI-1出土遺物解説表(第78～81図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色澤・焼成	備考
1 (78-1)	甕 口縁部 弥生土器	A(15.0) B(19.0)	器部は緩やかなカーブを描き、やや 外反の傾に直立して口縁部に平る。 口縁部は平底である。	外面は斜方に縄文 口縁部に器体押捺 内面はナデ	微砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	
2 (78-2)	甕 口縁部 弥生土器	3.8 3.9 0.74	ほぼ直線的に立ち上がり、口唇部は 丸味を帯びる。	外面は斜方に縄文 口唇部に器体押捺 内面はナデ	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	
3 (78-3)	甕 口縁部 弥生土器	5.7 4.5 0.65	口縁部は尖頭形である。	外面は付加条縄文による羽状縄文 内面はナデ	微砂粒・長石・石英 (内)赤褐色 (外)褐色 良好	
4 (78-4)	甕 口縁部 弥生土器	4.4 4.6 0.8		外面は斜方に縄文・器体押捺 内面はナデ	微砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	
5 (78-5)	甕 口縁部 弥生土器	2.4 2.7 0.35		外面はケシ置き平行沈線文 内面はナデ	微砂粒・石英 (内)(外)赤褐色 やや中良	
6 (78-6)	甕 口縁部 弥生土器	2.3 3.3 0.7		外面はケシ置き平行沈線文 内面は器ナデ	砂粒・長石 (内)(外)赤褐色 やや中良	
7 (78-7)	甕 口縁部 弥生土器	3.0 3.8 0.5		外面はケシ置き平行沈線文 内面はナデ	微砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	
8 (78-8)	甕 口縁部 弥生土器	3.2 4.0 0.76		外面はケシ置き平行沈線文 内面はナデ	微砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや中良	
9 (78-9)	甕 口縁部 弥生土器	2.7 4.3 0.8		外面はケシ置き平行沈線文・縄文 内面はナデ	細砂・長石 (内)赤褐色 (外)褐色 やや中良	
10 (78-10)	甕 口縁部 弥生土器	2.7 4.1 0.5		外面はナデ・縄文 内面は磨耗	砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	
11 (79-1)	甕 口縁部 弥生土器	3.5 4.8 0.7		外面は付加条縄文 内面は磨耗	砂粒・石英 (内)(外)黒褐色 良好	
12 (79-2)	甕 口縁部 弥生土器	4.0 6.8 0.5		外面は付加条縄文による羽状縄文 内面は磨耗にナデ	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	

番号	器種	口径 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色面・焼成	備考
13 (79-3)	甕形 亦生土器	5.0 3.8 0.7	-	外面は付加糸織文 内面は磨耗	砂粒・石英 (内)暗褐色 (外)黄褐色 良好	
14 (79-4)	甕形 亦生土器	5.0 3.8 0.7	-	外面は磨耗 内面はナデ	微砂粒 (内)(外)赤褐色 良好	
15 (79-5)	甕形 亦生土器	6.4 3.5 0.6	-	外面は付加糸織文 内面は中磨耗	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)黄褐色 良好	
16 (79-6)	甕形 亦生土器	4.4 6.8 0.72	-	外面は斜方に織文 内面は磨耗	砂粒・石英 (内)(外)黄褐色 中々良	
17 (79-7)	甕形 亦生土器	7.3 6.8 0.8	-	外面は斜状織文 内面は磨耗	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 中々良	
18 (79-8)	甕形 亦生土器	4.8 6.5 0.8	-	外面は斜方に織文 内面は中磨耗	砂粒・石英 (内)黄白色 (外)黄褐色 中々良	
19 (79-9)	甕形 亦生土器	6.7 4.3 0.6	-	外面は斜方に織文 内面はナデ	砂粒・石英 (内)褐色 (外)赤褐色 良好	
20 (79-0)	甕形 亦生土器	5.0 5.6 0.8	-	外面は横斜に織文 内面は中磨耗	砂粒・石英 (内)褐色 (外)赤褐色 中々良	
21 (80-1)	甕形 亦生土器	8.5 13.3 0.7	-	外面は斜状織文 内面はナデ	砂粒・石英 (内)(外)暗褐色 中々良	
22 (80-2)	甕形 亦生土器	4.3 4.0 0.75	-	外面は付加糸織文による斜状織文 内面は横ナデ	砂粒・石英 (内)(外)赤褐色 中々良	
23 (80-3)	甕形 亦生土器	6.8 6.5 0.75	-	外面は付加糸織文と斜状織文による斜状織文 内面はナデ	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)暗褐色 中々良	
24 (80-4)	甕形 亦生土器	3.8 5.5 0.9	-	外面は付加糸織文 内面は磨耗	砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 中々良	
25 (80-5)	甕形 亦生土器	6.5 6.4 1.0	-	外面は斜状織文 内面は中磨耗	砂粒・石英 (内)(外)黄褐色 中々良	
26 (80-6)	甕形 亦生土器	5.3 6.5 0.6	-	外面は斜方に織文 内面は横斜にナデ	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)黄褐色 良好	
27 (80-7)	甕形 亦生土器	5.0 6.5 0.9	-	外面は斜方に織文 内面は横斜にナデ	砂粒・石英 (内)(外)黄褐色 中々良	
28 (80-8)	甕形 亦生土器	5.5 8.0 0.65	-	外面は付加糸織文による斜状織文 内面は中磨耗	砂粒・石英 (内)褐色 (外)赤褐色 中々良	
29 (80-9)	甕形 亦生土器	3.3 7.0 0.7	-	外面は斜方に織文 内面は中磨耗	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)黄褐色 中々良	
30 (81-1)	甕形 亦生土器	B(14.8) C(3.7)	平底の直徑より胴部は急に立ち上がる。器厚は厚手である。	外面は斜方に織文 内面は斜壁する 底壁は木炭圧痕	微砂粒・石英 (内)褐色 中々良	
31 (81-2)	甕形 亦生土器	B 6.2 C(2.8)	平底の直徑より胴部は急に立ち上がる。全体的に小型である。	外面は斜方に織文 内面はナデ 底壁は木炭圧痕	微砂粒・石英 (内)黄褐色 (外)褐色 良好	

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	加工・色調・焼成	備考
32 (81-3)	甕形 赤生土器	B(12.0) C(3.5)	平底の底部より胴部は急に立ち上がる。底部は肥厚する。	外面は斜方向に縄文 内面はナデ 底部は木炭圧痕	砂粒・石灰・長石 (外)(内)赤褐色 や中良	
33 (81-4)	甕形 赤生土器	B(7.0) C(4.2)	平底の底部より胴部はやや急に外傾して立ち上がる。	外面は引状縄文 内面はナデ 底部は木炭圧痕	微砂粒 (内)(外)赤褐色 良 好	
34 (81-5)	甕形 赤生土器	B 11.4 C(4.2)	平底の底部より胴部はやや急に外傾して立ち上がる。	外面は斜方向に縄文 内面はナデ 底部は木炭圧痕	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)黄褐色 や中良	
35 (81-6)	高 杯 赤生土器	A 5.3 C 4.9	受部はやや深く凹み、口縁部まで短かく外傾する。胴部は深く外反する。	外面受部は付加糸文、胴部で凹状化する。 内面受部は捺強ナデ、胴部はナデ	微砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)褐色 良 好	

3. SI-2 出土遺物解説表(第82図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	加工・色調・焼成	備考
1 (82-1)	甕形 土 器	A 17.4 C(28.7)	胴部中に最大径をもち、胴部はほぼ直立状態で口縁部は外反する。	外面胴部は多方向に葉いナデ。口縁部内外面共に横ナデ。内面は工具ナデ。	小石・砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)淡赤褐色～淡黄褐色 中良	胴下半部に 窪付着。
2 (82-2)	高 杯 土 器	A 12.5 C 5.0	丸底の底部より、緩やかに立ち上がる体部は明瞭な線によって外傾する口縁部と画される。	外面体部は多方向の手持ちへう削り。口縁部内外面共に横ナデ。内面は工具による磨き。	微砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 (底面)良 好	
3 (82-3)	高 杯 土 器	A(14.9) C(6.7)	丸底の底部よりやや急に立ち上がる体部は明瞭な線によって外反する口縁部と画される。	外面体部は手持ちへう削り。口縁部内外面共に横ナデ。内面は工具による磨き。	微砂粒・雲母 (内)(外)赤褐色 良 好	
4 (82-4)	高 杯 土 器	A(13.5) C(4.6)	口縁部はわずかに外反し、体部とはやや不明な線によって画される。	外面体部は手持ちへう削り。口縁部内外面共に横ナデ。内面は磨き。	砂粒・石英 (内)(外)赤褐色 や中良	
5 (82-5)	高 杯 土 器	A(14.2) C(4.3)	口縁部はわずかに外傾し、体部とはやや不明な線によって画される。	外面体部は手持ちへう削り。口縁部内外面共に横ナデ。内面は磨き。	微砂粒 (内)(外)赤褐色 良 好	
6 (82-6)	高 杯 土 器	A(13.3) C(5.5)	緩やかに立ち上がる体部は、明瞭な線によって外傾する口縁部と画される。	外面体部は手持ちへう削り。口縁部内外面共に横ナデ。内面は工具による磨き。	砂粒・雲母 (内)(外)赤褐色 良 好	
7 (82-7)	高 杯 土 器	A(12.6) C(3.5)	体部と口縁部は、明瞭な線によって区別され、口縁部は外傾気味に立ち上がる。	外面体部は手持ちへう削り。口縁部内外面共に横ナデ。内面は工具による磨き。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 良 好	
8 (82-8)	高 杯 土 器	A(17.0) C(4.9)	体部と口縁部は、明瞭な線によって区別され、口縁部は外反する。	外面体部は磨き。 口縁部内外面共に磨き。 内面は工具による磨き。	砂粒・雲母 (内)(外)赤褐色 良 好	
9 (82-9)	高 杯 土 器	A 13.4 C 10.4 胴径径(11.0)	胴部と頸部は明瞭な線によって画され、胴部は末広がり(八字状)を示す。杯部の立ち上がりはやや中内高する。	胴部外面は縦位のへう削り。内面は横位のへう削り。杯部外面は不明。内面は磨き。	砂粒・小石 (内)(外)赤褐色 不 良	

4. SI-3 出土遺物解説表(第 86 図)

番号	器種	出量 (cm)	器形の特徴	成形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (86-1)	壺 土師器	A(18.6) B 3.8 C(9.0)	胴部は平底の底面より緩やかに立ち上がり、腹部から口縁部にかけては緩やかに外反する。	外面胴部はへり削り後にナデ。 底面はへり切り。 口縁部内外面は横ナデ。	黄緑色・雲母 (内)赤褐色 (外)赤褐色～母褐色 やや黄	
2 (86-2)	甗 土師器	A(7.8) C(2.3)	やや肥厚する底部より胴部は緩やかに立ち上がる。	外面はへり削り後にナデ。 底面はへり切り。 内面は工具による磨き。	砂粒・黒点・石灰 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや黄	
3 (86-3)	甗 土師器	A 6.8 C(5.0) 3.2	底部は肥厚する平底で、中央にへり切りによる穿孔を施す。 胴部は外傾気味に立ち上がる。	外面胴部は腹位にへり削り後ナデ。 内面はナデ。	砂粒・雲母・石灰 (内)(外)赤褐色 黄 好	胎土欠
4 (86-4)	埴 土師器	A(10.0) C(5.0)	内面胴部に立ち上がり、口縁部に至ってやや直立気味となる。 小型で全体の肥厚する。	外面胴部は手持ちへり削り。 口縁部内外面共に横ナデ。 内面は工具による磨き。	砂粒・黒点片 (内)(外)赤褐色 黄 好	
5 (86-5)	埴 土師器	A(13.0) C(4.1)	口縁部と体部は明瞭な線によって画され、口縁部は外反する。	外面体部は工具による磨き。口縁部は横ナデ。 内面は工具による磨き。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 黄 好	
6 (86-6)	埴 土師器	A 14.7 C 4.7	浅い丸底を呈し、口縁部とは明瞭な線によって画される。口縁部は外反する。	外面体部は手持ちへり削り。口縁部は横ナデ。 内面体部は放射状のへり磨き。口縁部は横位に工具による磨き。	砂粒・小石 (内)(外)赤褐色 黄 好	
7 (86-7)	埴 土師器	A(15.8) C(4.1)	口縁部と体部は明瞭な線によって画され、口縁部はほぼ直立する。	外面体部はへり削り。 口縁部内外面共に横ナデ。 内面は工具による磨き。	砂粒・石灰・雲母 (内)赤褐色 (外)赤褐色 黄 好	
8 (86-8)	埴 土師器	A(14.0) C(4.5)	体部は内面胴部に立ち上がり、口縁部は直立する。全体の肥厚気味。	外面体部は工具による磨き。 口縁部内外面共に横ナデ。 内面は工具による磨き。	砂粒・石灰・雲母 (内)赤褐色 (外)赤褐色 黄 好	
9 (86-9)	埴 土師器	A 12.8 C 5.4	深い丸底を呈し、口縁部とは明瞭な線によって画される。口縁部は外反する。	外面体部はへり削り。 口縁部内外面共に横ナデ。 内面は磨き。	黄砂粒 (内)(外)赤褐色 黄 好	
10 (86-10)	埴 土師器	A 12.6 C 4.9	浅い丸底から体部は急に立ち上がり、直線的に口縁部に至る。	外面体部はへり削り。口縁部は横ナデ。 内面は工具による磨き。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 (外)赤褐色 やや黄	
11 (86-11)	埴 土師器	A 11.2 C 5.0	丸底の底面より外傾気味に立ち上がる。体部は、口縁部と明瞭に画される。口縁部は中や外反する。	外面体部はへり削り。 口縁部内外面共に横ナデ。 内面は工具による磨き。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 外面に黒点有り やや黄	
12 (86-12)	高 土師器	A 19.2 C(13.5)	口縁部は平底気味で、体部は外反して立ち上がり、口縁部に至る。胴部は外傾しつつ底部に至って強く外反する。	外面体部は工具による磨き。内面は放射状のへり磨きで口縁部は腹位にへり磨き。胴部外側は腹位にへり磨き。内面はナデ付け及びへり削り。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 やや黄	
13 (86-13)	埴 土師器	A(8.2) B 5.0 C 1.4	体部は、肥厚する底部より浅く外反して立ち上がる。	内面共にノコリナデ。 底部は回転糸切り。	砂粒・雲母 (内)(外)赤褐色 黄 好	

5. SI-4 出土遺物解説表(第 89 ~ 91 頁)

番号	器種	法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色澤・焼成	備考
1 (89-1)	壺 土師器	A 16.7 C (75.0)	胴部中央に最大径をもつ。頸部は外反し、「く」の字状を呈す。口縁部はわずかに立ち上がり丸味を帯びる。	外面胴部はナデ。胴部上半はへり削り。口縁部内外面は横ナデ。内面はナデ。	磁粒・石英 (内)淡赤褐色 (外)淡黄褐色 やや良	内面は割傷が深い。
2 (89-2)	壺 土師器	A 15.4 B 7.8 C 26.9	平底の底部より緩やかに立ち上がる胴部は中央で最大径をもつ。頸部は強く外反し、「く」の字状を呈し、口縁部は外縁する。	外面胴部はへり削り後にナデ。口縁部内外面は横ナデ。内面は横位に工具ナデ。底部はへり削りによるナデ。	磁砂粒・長石 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	
3 (89-3)	壺 土師器	A 14.0 C (10.3)	頸部は外反し、「く」の字状を呈す。口縁部は平坦である。	外面胴部はへり削り後にナデ。口縁部内外面は横ナデ後へり研磨。頸部に指線工。内面はナデ後にへり研磨。	磁砂粒・石英・雲母 (内)(外)赤褐色 良 好	
4 (89-4)	壺 土師器	A 14.1 C (6.8)	頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	外面胴部はへり削り後にナデ。口縁部内外面は、位にへり研磨。内面はナデ。	磁砂粒 (内)(外)赤褐色 良 好	
5 (89-5)	壺 土師器	A 12.0 C (6.4)	頸部は強く外反し、「く」の字状を呈す。	外面胴部はへり研磨。口縁部内外面はナデ後に研磨。内面はナデ。	磁粒・長石 (内)(外)淡赤褐色 やや良	
6 (89-6)	壺 土師器	A 12.4 B 5.6 C 10.6	平底の底部より緩やかに立ち上がる胴部は中央で最大径をもつ。頸部は強く外反し、「く」の字状を呈して口縁部に至る。	外面胴部は磨耗する。口縁部内外面は横ナデ。内面はナデ。底部は手持ちへり削り。	磁粒・石英・長石 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
7 (89-7)	小型壺 土師器	A 11.4 B 5.6 C 10.6	平底の底部より急に立ち上がる胴部は頸部に来て強く外反し、短頸で突縮する口縁部をつくる。	外面胴部上半はナデ。下半はへり削り。口縁部内外面は横ナデ。内面はナデ。底部はへり削り。	磁砂粒・長石 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
8 (90-1)	小型壺 土師器	A 17.8 B 7.8 C 21.3	平底の底部より緩やかに立ち上がる胴部は中で最大径をもつ。頸部は強く外反して口縁部に至る。	外面胴部はへり削り後にナデ。口縁部内外面は横ナデ。内面はナデ。底部はへり削り。	磁粒・石英・長石 (内)淡赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
9 (90-2)	壺 土師器	B 5.8 C (13.1)	平底気味の頸部より胴部は緩やかに立ち上がる。	外面胴部上半はへり削り後にナデ。下半は短位にへり削り。内面は磨耗する。底部はへり削り。	磁粒・長石 (内)(外)赤褐色 やや良	
10 (90-3)	壺 土師器	A 8.6 B 5.8 C 14.1	平底気味の底部より緩やかに立ち上がる胴部は中央で最大径をもつ。頸部で強く外反し、ほぼ直線的な口縁部に至る。	外面胴部は横位にへり研磨。口縁部内外面はへり研磨。内面はナデ。底部はへり削り。	磁粒・石英・長石 (内)(外)赤褐色 良 好	
11 (90-4)	壺 土師器	A 22.2 C 24.5 E 7.3	急に立ち上がる胴部は、ほぼ中に最大径をもつ。口縁部は強く外反し、急部の孔は半月形を2孔有する。	外面胴部はナデ後にへり研磨。口縁部は横ナデ。内面は横位のへり研磨。孔部分はへり削り。	磁砂粒・石英 (内)淡黄褐色 (外)黄褐色 やや良	多孔式甕 (二孔)
12 (91-1)	壺 土師器	A 18.6 C 10.0 E 1.5	緩やかに外傾して立ち上がる胴部は頸部で強く外反し、短頸で突縮する口縁部をつくる。底部の孔は一孔。	外面胴部はへり削り。口縁部内外面は横ナデ。内面はへり削り。ナデ。孔部分はへり削り。	磁砂粒・長石 (内)(外)赤褐色 やや良	単孔式甕
13 (91-2)	壺 土師器	A 15.8 C 5.7	平底に近い丸蓋より緩やかに立ち上がる体部は、わずかに外傾して突縮する口縁部に至る。	外面はへり削り。口縁部内外面は横ナデ。内面は放射状にへり研磨。口縁部は横位にへり研磨。	磁砂粒・雲母 (内)(外)赤褐色 良 好	
14 (91-3)	壺 土師器	A 15.9 C (5.0)	緩やかに立ち上がる体部は、外傾する口縁部と縁によって圍まれる。	外面はへり削り。口縁部は横ナデ。内面は工具による研磨。	磁粒・長石 (内)(外)赤褐色 やや良	
15 (91-4)	壺 土師器	A 15.6 C (6.0)	丸蓋気味の底部より緩やかに立ち上がる体部は、わずかに外傾して口縁部に至る。	外面はへり削り。口縁部は横ナデ。内面は工具による研磨。	磁砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
16 (91-5)	壺 土師器	A (15.4) C (5.2)	緩やかに立ち上がる体部は、外傾して肥厚気味の口縁部に至る。	外面はへり削り。口縁部内外面は横ナデ。内面は工具による研磨。	磁砂粒・石英 (内)(外)赤褐色 やや良	
17 (91-6)	壺 土師器	A 16.0 C 5.9	平底に近い蓋部より急に立ち上がる体部は、明顯な縁によって外傾する口縁部と圍まれる。	外面はへり削り。口縁部内外面は横ナデ。内面は工具による研磨。	磁砂粒・長石 (内)黄褐色 (外)赤褐色 やや良	
18 (91-7)	壺 土師器	A 14.8 C 6.3	平底気味の丸蓋を呈し、体部はやや急に立ち上がり、強く外傾して突縮的な口縁部に至る。	外面はへり研磨。口縁部内外面は横ナデ。内面は放射状にへり研磨。	磁砂粒 (内)(外)赤褐色 良 好	

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	粘土・色調・焼成	備考
19 (91-8)	環 上部器	A 14.0 C 6.1	平底を磨いた底部は、中央が肥り、 体部は急に立ち上がり、わずかに外 反する口縁部に至る。	外面はへう削り、 口縁部内外面は横ナデ。 内面は放射状にへう研磨。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 良好	
20 (91-9)	環 土 器 器	A 14.0 C 6.7	丸底の底部よりやや急に立ち上がる 体部は、外傾してやや肥厚する口縁 部に至る。	外面体部下半はへう削り、上半はへ う研磨。 口縁部内外面は横ナデ。 内面はへう研磨。	微砂粒・雲母 (内)(外)淡青褐色 やや良	
21 (91-10)	環 上部器	A 13.0 C (5.3)	やや急に立ち上がる体部は、外反気 味の口縁部に至る。	外面はへう削り。 口縁部は横ナデ。 内面は工具による研磨。	砂 粒 (内)(外)茶褐色 やや良	
22 (91-11)	環形土器 土 器 器	A 8.0 B 5.2 C 7.1	平底の底部より急に立ち上がる体部 は、内傾して口縁部に至る。	外面はへう削り、 口縁部内外面は指擦ナデ。 内面はナデ。 底部はへう削り。	砂 粒 (内)(外)淡青褐色 やや良	
23 (91-12)	特殊土 滑 石	上径 3.1 下径 4.0 高さ 1.7 孔径 0.9	断面形状は六角台形を呈し、ほぼ中 心に円孔を穿つ。	上・下面、側面共に丹念に研磨され、 特に側面に交差する辺縁が全面に屈 かれる。		裏壁階層十 中より

6. SI-5 出土遺物解説表(第94図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	粘土・色調・焼成	備考
1 (94-1)	壺 土 器 器	A (21.6) C (9.0)	頸部はわずかに外反し、口縁部は直 立気味。	内面全体は横ナデ。 外面口縁部は横ナデ。 頸部はへう削り。	微砂粒 (内)淡青褐色 (外)淡黒褐色 やや良	
2 (94-2)	高台付環 土 器 器	A (2.0) D 7.9	高台部は薄刃「八」の字状を呈し、大 きく外傾する。	外面はへう磨き(黒色感磨)。 外面はナデ。 底部は回転へう削り。	微砂粒・雲母片 (内)淡褐色 (外)淡青褐色 やや良	内裏十層
3 (94-3)	環形土器 赤土土器	B (9.8) C (3.0)	肥厚する底部より頸部は緩やかに立 ち上がる。	内面は著しく削磨する。 外面は粗文。 底部は木蓋片磨。	砂粒・石英 (内)(外)淡青褐色 やや良	
4 (94-4)	環形土器 赤土土器	B (7.0) C (2.0)	頸部の立ち上がりは直立気味。	内面全体に指擦ナデ。 外面は粗文。 底部は木蓋片磨。	砂粒・粗砂・石英 (内)淡青褐色 (外)淡黒褐色 やや良	

7. SI-6 出土遺物解説表(第97・98図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	粘土・色調・焼成	備考
1 (97-1)	壺 土 器 器	A (19.8) C (20.0)	頸部はほぼ中心で最大径をもつ。頸 部は緩やかなカーブを呈し、口縁部 は急に外反して、口縁部に気味を 帯びる。頸部はほぼ均一。	外面はナデ(器面が反れる)。 口縁部(外面)は横ナデ。 内面は器面磨(粘土接合部が露骨 に認められる)	微砂粒 (内)(外)明赤褐色 不良	
2 (97-2)	小型壺 土 器 器	A 9.4 B 3.2 C 8.0	平底の底部より急に立ち上がる頸部 は、ほぼ中心で最大径をもつ。頸部 から口縁部にかけては直線的に外傾 する。	外面はナデ。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は多方向に指擦ナ デ。底部はへう削り。	砂粒・石英・長石 (内)淡青褐色 (外)淡黒褐色 やや良	
3 (97-3)	環 土 器 器	A (13.5) C (5.4)	やや深い底部より緩やかに立ち上 がる体部は、明瞭な縁によって口縁部 と隔される。口縁部はやや外傾する。	外面は磨耗する。 口縁部内外面は横位に粗かい研磨。 内面は放射状にへう研磨。	微砂粒 (内)(外)明赤褐色 不良	二次焼成
4 (97-4)	環 土 器 器	A 14.1 C 5.3	丸底の底部より緩やかに立ち上 がる体部は、口縁部と明瞭な縁によ って隔される。口縁部は実証的である。	外面はへう削り、 口縁部内外面は横位に粗かい研磨。 内面は多方向に粗かい研磨。	微砂粒・石英・雲母 (内)(外)赤褐色 良好	
5 (97-5)	環 土 器 器	A (12.8) C 5.7	丸底の底部より緩やかに立ち上 がる体部は、口縁部によってやや外反 気味となる。	外面はへう削り。 口縁部内外面は横位に粗かい研磨。 内面は磨耗。	砂粒・長石 (内)(外)明赤褐色 やや良	二次焼成
6 (97-6)	環 土 器 器	A 15.1 C 6.5	平底気味の底部より緩やかに立ち上 がる体部は、強く外傾して尖頭する 口縁部に至る。	外面はへう削り、ナデ。 口縁部内外面は横位に研磨。 内面は多方向に研磨。	微砂粒・石英 (内)(外)明赤褐色 良好	

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色澤・焼成	備考
7 (97-7)	土 師 器	A 15.0 C 5.8	丸底の底部より緩やかに立ち上がる 体部はわずかに反して口縁部に至る。 口縁部は直線的。	外面はヘラ削り。ナデ。 口縁部内外面は横位に研磨。 内面は放射状に研磨(一部磨粒)。	微砂粒 (内)赤褐色 (外)黄褐色 良好	
8 (97-8)	土 師 器	A(15.0) C(5.8)	丸底の底部より緩やかに立ち上がる 体部は、口縁部に至っては直立的 となる。	外面はヘラ削り。 口縁部内外面に横ナデ。 内面は磨ナデ後ヘラ研磨。	砂粒・石英 (内)(外)黄褐色 やや良	一次焼成
9 (97-9)	土 師 器	A 13.0 C 4.9	丸底の底部より緩やかに立ち上がる 体部は、口縁部に至っては直立的 となる。	外面はヘラ削り。ナデ。 口縁部内外面は横位に研磨。 内面は多方向に研磨。	微砂粒・雲母 (内)(外)赤褐色 良好	
10 (97-10)	土 師 器	6.7 4.2 4.6	底部外面にヘラ記号「×」	外面はヘラ削り。 内面はナデ後に多方向へのヘラ研磨。	砂粒・石英 (内)(外)赤褐色 良好	
11 (97-11)	土 師 器	8.5 8.2 0.6	底部外面にヘラ記号「×」	外面はヘラ削り。 内面はナデ後に多方向へのヘラ研磨。	砂粒・石英 (内)(外)赤褐色 良好	
12 (98-1)	土 師 器	A 17.6 C(11.7)	平底の底部より緩やかに立ち上がり、ほぼ直 立気味の口縁部に至る。胴部は直立 気味で、底辺は緩く外反する。	外面はヘラ研磨。胴部は縦位に 細かにヘラ研磨。 内面はヘラ削りによる研磨。 内面はヘラ削りによる研磨。	砂 粒 (内)(外)赤褐色 良好	
13 (98-2)	土 師 器	A 17.4 C 9.3 胴径(13.0)	胴部は緩やかに立ち上がり、口縁部 に至る。胴部は直立、胴部は直立 気味で、底辺は緩く外反する。	外面はヘラ研磨。胴部は縦位に ヘラ研磨。底辺と胴部の接合面は ヘラ削り。内面は細かにヘラ研磨。胴部 は指頭研磨。底辺は磨ナデ。	砂 粒 (内)赤茶褐色 良好	
14 (98-3)	土 師 器	C(7.3)	胴部は緩やかに立ち上がる。 胴部は直立し、底辺にまで外反し る。	外面はヘラ研磨。胴部は縦位に ヘラ研磨。底辺と胴部の接合面は ヘラ削り。内面はヘラ研磨。	微砂粒 (内)(外)赤褐色 良好	
15 (98-4)	土 師 器	C(3.6) 胴径 14.1	胴部は直立気味で、底辺は緩く外反 しやや内返る。	外面はヘラ削り。 胴部内外面はナデ。 内面は一筋工ナデ。	微砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
16 (98-5)	土 師 器	A(13.2) C 5.0 C 6.6	平底の底部より緩やかに立ち上がる 体部は、外反して口縁部に至る。底 部は「八」の字状を呈す。	内外面にコロコナナ。 底辺は回転ヘラ切り後に両面研磨。	無塵・石英 (内)(外)黄褐色 良好	

8. SI-7出土遺物解説表(第101図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色澤・焼成	備考
1 (101-1)	土 師 器	B 6.2 C(13.6)	肥厚する底部より胴部は緩やかに立 ち上がり、胴部中央やや上方で最大 径をもつ。胴部は「3」の字状を呈す。	外面胴部はヘラ削り。 内面は磨ナデ。 胴部内外面は横ナデ。 底辺は磨ナデ仕上げ。	砂粒・石英 (内)(外)黄褐色 やや良	
2 (101-2)	土 師 器	A 12.6 B 6.0 C 10.6	肥厚する平底の底部より胴部は急 に立ち上がる。胴部は外反し「3」の字 状を呈し、口縁部は緩やかに内返 的である。	外面胴部はヘラ削り。ナデ(緩な整 形)。口縁部は指頭研磨。 内面胴部中央はナデ。上半はヘラ削 り。底辺はヘラ削り。	砂 粒 (内)(外)黄褐色 やや良	
3 (101-3)	土 師 器	B 7.5 C(3.8)	やや丸味を帯びた平底気味の底部よ り胴部は外反して立ち上がる。	外面はヘラ削り。ナデによるナデ。 内面はヘラ削り(緩な整形)。 底辺はヘラ削り。	砂 粒 (内)(外)黄褐色 良好	
4 (101-4)	土 師 器	A 14.6 C 5.7	平底気味の丸底の底部より緩やかに 立ち上がる体部は、直線的に外反す る口縁部と明確な縁によって両され る。	外面は細かにヘラ削り。 口縁部内外面は横ナデ。 内面はヘラ削り。	砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)黄褐色 良好	
5 (101-5)	土 師 器	A 14.4 C 6.3	肥厚する丸底の底部より緩やかに立 ち上がる体部は、口縁部に至っては 直立的となる。	外面はヘラ削り。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は放射状にヘラ研磨。	砂粒・石英 (内)(外)黄褐色 良好	
6 (101-6)	土 師 器	A 13.3 C 6.2	肥厚する丸底の底部より緩やかに立 ち上がる体部は、内湾する口縁部 に至る。	外面はヘラ削り。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は横位にヘラ研磨。	砂粒・石英・雲母 (内)(外)赤褐色 良好	

9. SI-8 出土遺物解説表(第104図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (104-1)	小型甕 土師器	A 14.5 B 6.7 C 16.0	平底丸味の底部より胴部はやや球形に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	内外面共に磨しく磨耗する。口縁部には横ナゲが認められる。	砂粒 (内)赤褐色 不良	
2 (104-2)	小型甕 土師器	C(5.5)	胴部や口下に最大径をもち、全体的に薄手である。	内面胴部上半は朝七日、形磨きを認め、下半はナゲ。外面はヘラ捺研を認めるが割溝が深い。	砂粒・霞母 (内)赤褐色 良好	
3 (104-3)	甕 土師器	B 5.1 C(5.4)	わずかな平底の底部より胴部は緩やかに立ち上がる。	内面はヘラ削り工具によるナゲ。外面はよく磨耗する。底部は丸底をヘラ削りして平底とする。	砂粒・石灰・雲母 (内)赤褐色 やや良	
4 (104-4)	小型甕 土師器	A 12.9 B(5.9) C 15.0	平底の底部より胴部は急に立ち上がりわずかに丸味をもつ。口縁部はわずかに外傾し口縁部は実閉的である。	口縁部内外面は横ナゲ。内面胴部は縦位のヘラ削り後に磨文。外面胴部は縦位のヘラ削り。底部はヘラ削り。	砂粒・石灰・スコリア (内)赤褐色 良好	粘土団塊を 観察に既す。
5 (104-5)	甕 土師器	A 15.7 C 11.0 E 2.2	胴部の立ち上がりは急で、口縁部は直立する。	口縁部内外面は横ナゲ。内面胴部は刷毛・横ナゲ後に磨文。外面胴部は不鮮明な多方向のヘラ削り。	砂粒・石灰・スコリア (内)赤褐色 良好	厚肌式甕
6 (104-6)	甕 土師器	A 15.0 C 5.0	肥厚する丸底丸味の底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外傾する。口唇部は実閉的である。	内面口縁部は横ナゲによる磨文。体部には刷毛が認められるが全面にヘラ磨耗。外面口縁部は横ナゲ。体部は斜位にヘラ削り。	砂粒・霞母 (内)赤褐色 良好	
7 (104-7)	小型甕 土師器	A 12.4 B(7.1) C 7.3	肥厚する平底より胴部は急に立ち上がる胴部は中位やや上方に最大径をもち、口縁部は短く直立する。	口縁部内外面は横ナゲ。内面胴部上半はヘラ削り。下半はヘラ磨後に磨文。外面胴部はヘラ削り(割溝・磨耗する)。底部はヘラ削り。	砂粒・スコリア (内)赤褐色 良好	

10. SI-9 出土遺物解説表(第107図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (107-1)	鉢 土師器	A 10.0 B 7.5 C 10.4	平底の底部より胴部は急に立ち上がり、口唇部は内湾する。口唇部は中実である。	外面はヘラナゲ。内面はナゲ。口縁部内外面は横ナゲ。	砂粒 (内)赤褐色 良好	
2 (107-2)	甕 土師器	A 14.3 B 7.2 C 9.3 E 3.3	肥厚する底部より胴部は急に立ち上がり、口縁部は直立する。口は底部のはは中央に穿孔される。	外面はヘラナゲ。内面はナゲ。口縁部内外面は横ナゲ。口唇部はヘラ削り。	砂粒 (内)赤褐色 良好	厚肌式甕
3 (107-3)	文 土師器	上唇 6.8 下唇 9.0 C 11.2	上下面共に平底で、形状は截頭円錐体である。	全面に荒いナゲ。	小砂粒 褐色 不良(二次焼成)	

11. I号墳周溝・SD-1覆土中出土遺物解説表(第110~112図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (110-1)	深鉢 陶文土器	4.3 3.7 1.0	口縁部は直立する。	外面は横位の磨文を施文。内面は磨耗する。	砂粒・石灰 (内)赤褐色 やや良	
2 (110-2)	深鉢 陶文土器	5.0 4.7 1.0	-	外面は斜方向に磨文。内面は一部磨文するが、斜方向に磨文。	微砂粒・石灰 (内)赤褐色 やや良	組織混入
3 (110-3)	深鉢 陶文土器	6.3 5.4 1.1	-	内・外面共に斜方向に磨文。	微砂粒・石灰 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	組織混入
4 (110-4)	深鉢 陶文土器	4.0 3.2 0.9	-	外面は磨文施文。内面はナゲ。	砂粒・石灰片 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
5 (110-5)	深鉢 陶文土器	5.0 4.7 1.2	-	外面は付加磨文。内面はナゲ。	砂粒・石灰 (内)赤褐色 やや良	組織混入

番号	器型	径量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・成灰	備考
6 (110-6)	深鉢部 製文土器	6.8 5.8 1.0	-	外面は斜方向に染灰文。 内面は磨耗するが、一部ナデ磨り。	砂粒・石英 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	織物痕入
7 (110-7)	深鉢部 製文土器	8.4 7.2 1.0	-	外面は斜方向に縄文を施文。 内面はナデ。	微砂粒・石英 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	
8 (110-8)	深鉢部 製文土器	9.2 5.4 0.9	-	外面は斜方向に染灰文。 内面は磨耗する。	微砂粒・石英 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	織物痕入
9 (110-9)	深鉢部 製文土器	8.3 5.0 1.0	-	内・外面共に斜方向に染灰文。	微砂粒・石英 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	
10 (111-1)	丸口縁部 製文土器	4.3 3.7 0.7~0.5	口縁部は蓋筒的である。 口縁部に縄文原体を押捺。	外面は縄文施文。 内面はナデ。	砂粒・石英 (内)(外)淡黄褐色 やや良	
11 (111-2)	丸口縁部 製文土器	3.7 3.7 0.6	口縁部は蓋筒的である。 口縁部に縄文原体を押捺。	外面は縄文施文。 内面はナデ。	砂粒・石英 (内)(外)淡黄褐色 やや良	
12 (111-3)	深鉢部 製文土器	4.1 3.4 0.6	頸部は緩やかに内積する。	外面は横位にケン積み文。 内面は割製する。	砂粒・石英 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	
13 (111-4)	深鉢部 製文土器	7.3 5.8 0.3	頸部は内積し、緩やかに外積する。	外面は横位にケン積み波状文(2段)。 内面はナデ。	微砂粒 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 良 好	
14 (111-5)	深鉢部 製文土器	3.4 3.1 0.5	頸部は緩やかに内積する。	外面は上位にケン積み波状文、下位に横位にケン積み波状文と縄文。 内面はナデ。	砂粒・石英 (内)(外)淡黄褐色 やや良	
15 (111-6)	深鉢部 製文土器	7.1 3.5 0.6	頸部は緩やかに内積する。	外面は横位に幅0.8cmの工具波線を施文する。 内面はナデ。	微砂粒 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 良 好	
16 (111-7)	深鉢部 製文土器	3.9 3.4 0.5	頸部は緩やかに内積する。	外面は羽状紋文。 内面は磨耗する。	砂粒 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	
17 (111-8)	深鉢部 製文土器	B(8.0) C(1.3)	-	外面は縄文。 内面は割製。 底部は網代仕立。	微砂粒 (外)淡黄褐色 やや良	
18 (111-9)	深鉢部 製文土器	C(2.8)	平底の底部より頸部は緩やかに立ち上がる。頸厚はほぼ均一。	外面は斜方に縄文。 内面はナデ。 底部は木炭仕立。	砂粒・石英 (内)(外)淡黄褐色 良 好	
19 (111-10)	深鉢部 製文土器	B(12.0) C(5.2)	平底の底部より頸部は外積して立ち上がる。口縁部は底部より厚くして口縁部1.2~1.3は唇部は丸縁を帯びる。	外面は縄文。 内面はナデ。 底部は木炭仕立。	砂粒・石英・麻石 (内)赤褐色 (外)淡黄褐色 やや良	
20 (112-1)	深鉢部 製文土器	A 13.3 B 7.7 C 4.4	平底の底部より頸部は外積して立ち上がり、口縁部は底部より厚くして口縁部1.2~1.3は唇部は丸縁を帯びる。	内・外面共にロクロ製形。 底部は回転へう切り。	砂粒・石英 (内)(外)淡黄褐色 やや良	
21 (112-2)	深鉢部 製文土器	B(6.6) C(1.5)	平底の底部より頸部は緩やかに外積して立ち上がる。	内・外面共にロクロ製形。 底部周辺(底部下階)は回転へう削り。 底部は最初後に回転へう調整。	微砂粒・重層片 (内)(外)淡灰白色 不 良	
22 (112-3)	高台付杯 製文土器	B(10.6) C(4.2) D(9.2)	平底の底部より頸部は蓋筒的に立ち上がり、高台部は蓋筒的に外積して貼り付けられる。	内・外面共にロクロ製形。 底部は回転へう切り。	砂粒 (内)(外)灰白色 良 好	
23 (112-4)	深鉢部 製文土器	9.0 8.6 1.4	-	外面は斜方に平行印キ。 内面は同心円文印キ。	微砂粒 (内)淡黄褐色 (外)淡赤褐色 良 好	
24 (112-5)	高台付杯 製文土器	C(3.1) D 8.0	平底の底部より頸部は蓋筒的に立ち上がり、高台部は蓋筒的に外積する。	外面は磨耗する。 内面は蓋筒処理。 底部は回転へう切り後高台貼付。	砂粒・石英 (内)黒色 (外)淡黄褐色 やや良	

番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
25 (112-6)	埴 土師器	A 13.6 C 4.8	丸底の浅平より、体面は緩やかに立ち上がり、前縁は縁によって口縁部と蓋される。口縁部はやや外反し、口唇部は丸縁を帯びる。	外面は磨耗甚しい。 内面は磨耗甚しいが磨き痕を残す。 口縁部内外面は横ナデ。	微砂粒・小石 (内)(外)淡赤褐色 やや良	
26 (112-7)	高内付埴 土師質土器	C (2.3) D (2.2)	平底の底部と筒縁的でやや肥厚する高台部は「八」字状を呈す。	外面はナデ。 内面はへうつき。 底部は回転へう切り後裏面貼付。	微砂粒・小石 (内)淡赤褐色 (外)淡褐色 やや良	
27 (112-8)	埴 土師質土器	B (3.8) C (2.9)	体部は平底の底部より強く外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面共にナデ。 底部は回転削り。	微砂粒 (内)(外)淡黄白色 やや良	地味傾 (内面)
28 (112-9)	埴 土師質土器	A 7.0 B 4.0 C 1.7	底部は内面が盛り上がり、体部は直線的に外傾して立ち上がり、尖鋭する口縁部に至る。	内・外面共にナデ。 底部は回転削り。	微砂粒・石炭 (内)(外)淡赤褐色 良 好	磨痕痕?
29 (112-10)	埴 土師質土器	A 9.0 C 2.5	低平な丸底より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はやや直線的である。	内・外面共にナデ。 底部から外面体部中位まで指頭ナデ。	微砂粒 (内)(外)淡赤褐色 良 好	磨痕痕?

12. III号埴石室周辺出土遺物解説表(第113～118号)

番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (113-1)	埴 口縁部 弥生土器	3.4 6.1 0.5～0.7	—	外面は縄文。 口唇直上に懸垂唇縁。 内面はナデ。	微砂粒・長石 (内)明赤褐色 (外)褐色 良 好	
2 (113-2)	埴 弥生土器	6.2 4.3 0.7	—	外面上縁部にクシ横波線文。 外面は縄文。 内面はナデ。	微砂粒・長石・石炭 (内)淡赤褐色 (外)淡褐色 良 好	
3 (113-3)	埴 頸部・胴部 弥生土器	8.0 4.1 1.0	—	外面は縄文。 内面は人急なナデ。	微砂粒・石炭 (内)赤褐色 (外)多褐色 良 好	
4 (113-4)	埴 胴部 弥生土器	3.8 5.5 0.6	—	外面は縄文。 内面はナデ。	石炭・長石 (内)赤褐色 (外)暗赤褐色 良 好	
5 (113-5)	埴 弥生土器	B (7.3) C (1.8)	胴部は、平底の底部より外傾して立ち上がる。	外面は付加急縄文。 内面はナデ。 底部は木葉片敷。	石炭・長石 (内)(外)褐色 良 好	
6 (113-6)	埴 弥生土器	B (8.0) C (2.0)	胴部は、平底の底部より直立気味に立ち上がる。	外面は縄文。 内面はナデ。	砂粒・石炭・長石 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	
7 (113-7)	埴 弥生土器	B (8.0) C (2.2)	胴部は、平底の底部より直立気味に立ち上がる。胴部は肥厚する。	外面は縄文。 内面は横ナデ、指頭厚直。 底部は木葉片敷。	砂粒・石炭・長石 (内)(外)褐色 良 好	
8 (113-8)	埴 弥生土器	C (3.4)	胴部は、外傾気味に立ち上がる。全体的に肥厚する。	外面は縄文。 内面は磨面並れ。 底部は木葉片敷。	細砂・石炭・長石 (内)明赤褐色 (外)明赤褐色 やや良	
9 (114-1)	円筒型 ハニワ	6.8 6.0 1.4～1.1	—	外面は縦位の刷毛目。 タガ部分は横ナデ。 内面は全面ナデ後に一部斜方の刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	
10 (114-2)	円筒型 ハニワ	5.7 5.7 1.3～0.8	—	外面は縦位の刷毛目。 タガ部分は横ナデ。 内面は斜方に刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	
11 (114-3)	円筒型 ハニワ	7.8 6.5 1.3～1.0	—	外面は縦位の刷毛目。 内面は斜方に刷毛目。一部指頭ナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	
12 (114-4)	形象型 ハニワ	12.5 6.0 4.8～2.0	二等辺三角形形状を呈し、片側側面に径2.0×2.0cm、深さ1.5cmの凹みを有す。	外面はナデ。 内面は横位の刷毛目。	小石 (内)(外)淡明赤褐色 良 好	

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
13 (114-5)	環 土師器	A(13.4) C(4.8) 4.8~2.0	平底突出の丸蓋より緩やかに立ち上がる体部は、ほぼ直立する口縁部とは明瞭な線によって画される。	体部外面はヘラ削り。 口縁部内外面はヘラ磨研。 内面は放射状に焼文。	紫砂・黄褐色 (内)(外)明赤褐色 外周部は黒色 良好	
14 (114-6)	環 土師器	A 14.6 C 3.8	平底突出の蓋部より緩やかに立ち上がる体部は、直立する口縁部とは斜い線によって画される。	外面は多方向のヘラ削り。 口縁部は横ナデ。	紫砂粒 (内)(外)赤褐色 良好	
15 (114-7)	環明皿 土師質土出	A 12.6 C(4.1)	全体的に厚肉な体で、緩やかに立ち上る体部は尖鋭化する口縁部に平る。口縁部内面に1.0×0.7cmの透体痕有り。	外面は指觸ナデ。 口縁部は横ナデ。 内面の一部に刺毛貝痕。	紫砂粒 (内)(外)赤褐色 良好	徳志板
16 (114-8)	環 土師器	A(12.6) C(4.6)	深い丸蓋を早し、体部は外傾して立ち上がる。口縁部はほぼ直立気味に立ち上がり明瞭な線によって画される。	外周部はヘラ削り。 外面口縁部は横ナデ。 内面口縁部はヘラ磨研。 内面は放射状に焼文。	黄砂粒 (内)淡赤褐色 (外)明赤褐色 やや良	
17 (114-9)	環 土師器	A 16.6 C(14.4)	頸部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁部は丸蓋を差びる。	外面部は多方向のナデ。 口縁部内外面は横ナデ。 内面頸部は斜めに工具ナデ。	砂 粒 (内)(外)淡赤褐色 外周に黒色有り 良好	
18 (115-1)	環 土師器	8.5 3.7 0.7	口縁部は強く外反し、口縁部は直立気味に立ち上がる。	外面はクシ描き流状文。 口縁部から内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)淡灰白色 不良	
19 (115-2)	環 土師器	7.0 6.0 1.2~1.0	直線的に外傾して立ち上がる。	外面は平行叩き。 内面は同心円文叩き後にナデ。	黄砂粒 (内)淡灰白色 不良	
20 (115-3)	環 土師器	8.5 3.5 0.9		外面は平行叩き。 内面は同心円文叩き。 器面は差し磨耗する。	黄砂粒 (内)(外)淡灰白色 不良	
21 (115-4)	大 口 環 土師器	16.0 13.0 3.0	口縁部直上に流文を配し、口縁部は内傾する。	口縁部直下に断面三角形を呈する太い凸部を差らす。下部にクシ描き流状文を施す。口縁部にはクシ描き流状文を施す。内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)淡赤褐色 やや良	
22 (115-5)	大 口 環 土師器	5.7 4.5 1.4	口縁部は直立し、流文を配す。口縁部は内傾する。	口縁部直下に断面三角形を呈する太い凸部を差らす。下部にクシ描き流状文を施す。内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)淡赤褐色 やや良	
23 (115-6)	大 口 環 土師器	16.0 6.0 1.3	外傾気味に立ち上がる。	外面は幅約3.0cmでクシ描き流状文を施す。 内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)淡赤褐色 やや良	
24 (115-7)	大 口 環 土師器	10.6 4.7 1.2	外傾気味に立ち上がる。	外面は幅約2.8cmでクシ描き流状文を施す。 内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)黄褐色 (外)淡赤褐色 やや良	
25 (115-8)	大 口 環 土師器	14.5 10.5 1.4	頸部は「く」の字状を早し口縁部は外傾して立ち上がる。頸部には径1.0cmの流文を配す。	外面は横ナデ後にクシ描き流状文を施す。 内面は横ナデ(指觸斥点を明瞭に残す)。	黄砂粒 (内)淡褐色 やや良	
26 (115-9)	大 口 環 土師器	24.5 9.0 1.5	頸部はほぼ直立気味に立ち上がる。有段状の凸線が頸部を通る。	外面はナデ整形。 内面は指觸ナデ。	黄砂粒 (内)(外)淡黄褐色 やや良	
27 (115-10)	環 土師器	A 8.6 B(1.3)	平底の蓋部より体部は外傾して立ち上がる。	内外面共にロクロナデ。 底面はヘラ切り磨し。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 良好	底面にヘラ 記号「一」
28 (116-1)	大 口 環 土師器	32.0 21.0 1.3	口縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部・口縁部共に直に仕上げている。	外面頸部付近は横ナデ。口縁部直下より腹位のナデ後にクシ描き流状文。口縁部・口縁部共にクシ描き流状文。内面は指觸ナデ。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 良好	
29 (116-2)	大 口 環 土師器	10.2 7.9 1.1	口縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部・口縁部共に直に仕上げている。	外面は工具ナデ後にクシ描き流状文。口縁部・口縁部共にクシ描き流状文。内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 良好	
30 (116-3)	大 口 環 土師器	5.2 5.5 1.1	口縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部・口縁部共に直に仕上げている。	外面は工具ナデ後にクシ描き流状文。口縁部・口縁部共にクシ描き流状文。内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 良好	
31 (116-4)	大 口 環 土師器	11.4 10.0 1.5~1.3	口縁部は直反気味に立ち上がり、口縁部・口縁部共に直に仕上げている。	外面は工具ナデ後にクシ描き流状文。口縁部・口縁部共にクシ描き流状文。内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 良好	

番号	名称	寸法 (cm)	形状の特徴	形成技法	胎土・色調・焼成	備考
32 (118-5)	大 壺	6.7	口辺部は、外反気体に立ち上がり、 口縁部・口唇部共に上に上げている。	外面は傾斜のナデ後にクシ指き波状文。 口唇部・口縁部共にクシ指き波状文。 内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	口 縁 部	3.6				
33 (117-1)	大 口 壺	17.0	口辺部は真縁的に外縁して立ち上がる。	外面は工具ナデ後にクシ指き波状文。 内面は横ナデ。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	壺 部	1.2				
34 (117-2)	大 塚 須 壺	27.0	口部から腹やかに立ち上がり頸部に至る。口辺部との接合は人念に行なわれている。	外面は平行印き。 内面は同心円文印き。 頸部は横ナデ。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	須 壺 部	10.0				
35 (117-3)	大 塚 須 壺	12.5	-	外面は平行印き。 内面は同心円文印き。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	壺 部	9.2				
36 (118-1)	須 壺	2.1	頸部は扁平なボタン状を呈す。	内外面共にココロナデ。 器口周辺約 3.5 cm 幅で円方向に工具ナデ。	砂粒・小石 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	須 壺 部	1.3				
37 (118-2)	壺 部	A 11.5	口縁はラッパ状に大きく外反し、 頸部は丁字状に仕上げている。	内外面共にココロナデ。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	器口の約 1/2 に自然 輪
	須 壺 部	C (11.0)				
38 (118-3)	平 瓶	B 16.2	平底で広い底部より体部は緩やかに立ち上がる。	外面体部下半は円輪へり形り。 体部上端から大井部はナデ。 底部は面輪へり形り。 内面は歪いなデ。	砂粒・小石 (内)外: 焼灰褐色 良 好	頸部不欠損 するが、大 壺製品である。
	須 壺 部	C (9.8)				
39 (118-4)	壺 部	C (12.0)	口部は強く内反し、肩の傾りも強い。 頸部は直立気味となる。	内外面共にココロナデ。 器口部下 (約 1.3 cm 幅) に 2 条のクシ指き波状文を横文する。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	器口の約 1/2 に自然 輪
	須 壺 部	D 9.6				
40 (118-5)	壺 部	C (4.5)	肥厚する底部より頸部は急に立ち上がる。肩台部は「八」の半状に外反して広がる。	外面はココロナデ。 底面は丸いココロナデ。 内面は歪いココロナデ。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	器口の一部分 に自然輪
	須 壺 部	D 9.6				
41 (118-6)	壺 部	C (4.0)	頸部は強く外反し、口縁部は折り返して丁字形をなす。口唇部は丸縁をつけて仕上げている。	全面にナデ整形。	砂 粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	内外共に結 晶構造の胎
	壺 部	C (4.0)				
42 (118-7)	壺 部	A 8.5	扁平な丸底を呈し、深く立ち上がる 体部は実隙的で直立する口縁部に至る。	外面は指ナデ。 口縁部から内面は横ナデ。	砂粒・黄母 (内)外: 焼灰褐色 良 好	器口部
	壺 部	C 2.4				
43 (118-8)	壺 部	A 8.1	平底気味の丸底より深く立ち上がり 外縁する口縁部に至る。	外面は指ナデ。 口縁部から内面は横ナデ。	砂粒・黄母 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	壺 部	C 2.2				
44 (118-9)	壺 部	A (8.0)	肥厚する口底の底部より外縁して立ち 上がる体部は、尖鋭する口縁部に 至る。	内外面共にココロナデ。 底面は丸い輪切り。	砂粒・石膏・黄母 (内)外: 焼灰褐色 良 好	器口部
	壺 部	C 2.3				
45 (118-10)	壺 部	A 10.6	平底の底面より外縁して立ち上がる 体部は、尖鋭的で直立する口縁部に 至る。	外面体部は丸い形(ヒビ状) 口縁部内外面は横ナデ。 内面はナデ。 底面は本葉巻。	砂粒・石膏 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	壺 部	H 5.5				
46 (118-11)	壺 部	7.6	楕円型の形態を呈する。	器口部に表裏から調整を行なう。 片側を大きく打ち欠いて(先端の)対 称形にする。	黄砂粒 (内)外: 焼灰褐色 良 好	
	壺 部	6.7				
	壺 部	2.0				

13. SD-2・DIV-4・DV-5 グリッド出土遺物解説表(第119～122図)

番号	器種	法 線 (cm)	器 形 の 特 徴	整 形 技 法	粘土・色調・焼成	備 考
1 (119-1)	形象型 ハニウ	8.7 7.0 2.3～0.9	-	外面は斜方、縦位に刷毛目。 内面はココナデ。 先端部はココナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡赤褐色 良 好	DIV-4
2 (119-2)	形象型 ハニウ	8.0 5.8 1.3～1.0	-	外面下方はナデ。上方は刷毛目線に 粘土の貼り付けを行なう。 内面下方は斜方に刷毛目。上方はナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡赤褐色 良 好	DIV-4
3 (119-3)	形象型 ハニウ	11.9 5.9 2.3～1.0	外面に幅約4.0 cm 厚さ1.0～0.5 cmの凸帯と凸帯上に径1.7 cmの珠 文を貼り付ける。	外面全体にナデ。 内面はナデ(器面は剥離する)。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
4 (119-4)	形象型 ハニウ	6.3 5.0 1.5～1.2	外面に幅約3.0 cmの凸帯と凸帯上 に径2.6 cmの珠文を貼り付ける。	外面は縦位の刷毛目(一部ナデ)。 内面はナデ。	細 砂 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
5 (119-5)	形象型 ハニウ	6.5 5.4 2.0～1.3	外面に幅2.5 cmの凸帯と凸帯上 に径1.5 cmの珠文を貼り付ける。	外面はナデ。 内面はナデ。	小石・砂粒 (内)(外)明褐色 良 好	DIV-4
6 (119-6)	形象型 ハニウ	22.0 10.5 1.2～0.8	上半部は縦やかなカーブを描き、下 半部(内側部)は直立する。	外面上方はナデ。下方は縦位の刷毛 目。タガ部分はココナデ。 内面はナデ。	小 石 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
7 (119-7)	形象型 ハニウ	8.0 5.3 2.6～1.1	-	外面は縦位の刷毛目。 内面はナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡赤褐色 良 好	DIV-4
8 (119-8)	形象型 ハニウ	6.0 4.3 2.2～0.8	-	外面は縦位に刷毛目。 内面はナデ。	小 石 (内)(外)淡褐色 (外)淡赤褐色 良 好	DIV-4
9 (119-9)	形象型 ハニウ	11.2 5.6 2.3～1.1	-	外面は斜方に刷毛目線。約2 cm間 隔で放射状に沈線(4本)を施す。 内面は多方向に刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)暗赤褐色 良 好	DIV-4
10 (120-1)	円筒型 ハニウ	10.8 5.0 1.2	-	外面は縦位に刷毛目。 内面は斜方に刷毛目(一部隆部ナデ)。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
11 (120-2)	円筒型 ハニウ	10.8 10.0 1.5～0.7	-	外面は縦位に刷毛目。 タガ部分はココナデ。 内面は斜方に刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
12 (120-3)	円筒型 ハニウ	11.0 10.0 1.2～1.0	へう成形による凹窩を有する。	外面は縦位に刷毛目。 タガ部分はココナデ。 内面は斜方に刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
13 (120-4)	円筒型 ハニウ	11.2 10.6 1.2	-	外面は縦位の刷毛目。 タガ部分はココナデ。 内面はナデ後に多方向の刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
14 (120-5)	円筒型 ハニウ	11.2 8.5 1.3～0.9	-	外面は縦位に刷毛目。 タガ部分はココナデ。 内面はナデ後に多方向の刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
15 (120-6)	円筒型 ハニウ	12.6 8.1 1.3～0.9	-	外面は縦位に刷毛目。 タガ部分はココナデ。 内面は全面ナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
16 (120-7)	円筒型 ハニウ	7.5 6.8 1.2～0.8	-	外面は縦位に刷毛目。 内面は全面ナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡黄褐色 良 好	DIV-4
17 (121-1)	円筒型 ハニウ	14.0 7.5 1.5～0.9	-	外面は縦位に刷毛目。 タガ部分はココナデ。 内面はナデと斜方に刷毛目。	小石・砂粒 (内)(外)淡褐色 良 好	DIV-4
18 (121-2)	円筒型 ハニウ	13.0 10.4 1.2～1.0	-	外面は縦位に刷毛目。 内面は全面ナデ。	小石・砂粒 (内)(外)淡赤褐色 やや良	DIV-4

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
19 (121-3)	平 瓶 須 壺器	H 8.6 C (9.7) 口径 5.0	器底より腹面より縦やかに立ち上がり、 体部は、極めて薄く、天井部へ縮 く、天井部には斜削み状の把手を 組みつける。	外面部は楕円のへり削り。 底面は回転へう。 把手部は平面へり削り製形。 内面はコロナデ。	微砂粒 (内)淡青灰色 (外)暗灰色 炭 灰	SD 2
20 (121-4)	平 瓶 上 須 壺	A 13.3 C 5.4	器底より腹面より立ち上がり、 わずかに外反するし線部とは腹面 縁によって造られる。口縁部はやや 尖鋭的である。	外面部は工具ナデ。 口縁部内外面は磨ナデ。 底面はへり削り。 内面は内方向に磨き。	微砂粒 (内)淡青灰色 外面に黒炭行り 中や良 好	SD-2
21 (121-5)	平 瓶 十 須 壺	A 13.6 C 5.8	丸腹をなし、体部は縦やかに立ち上 がる。口縁部はわずかに外反し、口 縁部はやや尖鋭的である。	外面はヘラナデ。 口縁部内外面は磨ナデ。 内面は磨して割取・磨耗する。	微砂粒 (内)(外)赤褐色 外面に黒炭行り 中や良 好	SD-2
22 (121-6)	平 瓶 土 須 壺	A 16.0 H 9.0 C 26.1	腹やかに立ち上がる体部は、中位で 最大径を有する。器底は段やたたく の字状を呈し、外反させて口縁部を 形成する。	外面部は下平へり削り。上半は工 具ナデ。 口縁部内外面は磨ナデ。 内面は裏い磨納ナデ。	小石・砂粒・石英 (内)淡青褐色 (外)赤褐色 や中良 好	脚部中位に 供付者。 SD-2
23 (121-7)	平 瓶 土 須 壺	A 8.2 C 2.1	半瓶の器形より縦やかに立ち上がる 体部はわずかに外反し、やや尖鋭的 な口縁部を形成する。	(内)(外)共にナデ。	微砂粒 (内)(外)淡青褐色 良 好	
24 (122-1)	スタンパー 貞 壺	5.6 3.6 0.55	増長不整形を呈する割片石製である。	肉縁を細削調整して復元してゐる。	-	DV 5

14. DW-2・3グリッド出土遺物解説表(第123～125図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (123-1)	平 瓶 須 壺器	男丸径 05.00 高さ 17.0 厚さ 2.0～1.6	内区のフツバが遺存する。丸内面は 男丸に刻してやや斜方に取付付く。	内面は布目・粘土系削り製を有す。 凸面は其凸面縁に擦取粘土を洗す。 全面に縦位の工具ナデ。	砂粒・小石・窯母 凸面共に暗灰色 中や良 好	
2 (124-1)	平 瓶 須 壺器	男丸径 02.30 高さ 10.0 厚さ 2.6	小型で、全体のほぼ平手である。	内面は布目ノミ。 凸面はヘラナデ製形。 側縁はへり削り。	砂粒・小石・窯母 凸面共に淡灰色 中や良 好	
3 (124-2)	平 瓶 須 壺器	13.8 11.5 1.3	-	外面は斜削り削き。 内面は全面ナデ。	砂 粒 (内)暗灰色 (外)淡青褐色 良 好	
4 (124-3)	平 瓶 須 壺器	10.2 6.0 1.0	-	外面は斜削り削き。 内面は同心円文印。	微砂粒 (内)淡灰色 (外)暗灰色 炭 灰	
5 (124-4)	平 瓶 須 壺器	7.8 5.8 0.8	-	外面は斜削り削き。 内面は同心円文印を後に付す。	微砂粒 (内)暗灰色 (外)炭灰色 良 好	
6 (125-1)	平 瓶 須 壺器	7.5 6.4	-	外面は正角形を後に付す。 内面は同心円文印。	微砂粒 (内)炭灰色 (外)炭灰色 良 好	
7 (125-2)	平 瓶 須 壺器	7.2 5.8 0.9	-	外面は同心円文印を後に付す。 内面は同心円文印を後に付す。	砂 粒 (内)炭灰色 (外)暗灰色 良 好	
8 (125-3)	平 瓶 須 壺器	10.0 4.7 0.9	-	外面は斜削り削き。 内面は同心円文印を後に付す。	微砂粒 (内)暗灰色 (外)炭灰色 炭 灰	
9 (125-4)	平 瓶 須 壺器	8.0 5.3 1.4	-	外面は斜削り削き。 内面は全面ナデ。	砂 粒 (内)暗青褐色 (外)暗灰色 炭 灰	
10 (125-5)	平 瓶 須 壺器	A (21.2) C (12.0)	頸部はく、の字状を呈し、口縁部は 外反する。口縁部下に明確な段が一 道し、口縁部は強く外に凸み出す。	外面部は工具ナデ。 口縁部内外面は磨ナデ。 内面は磨耗する。	砂粒・小石 (内)淡青褐色 (外)暗褐色 中や良 好	
11 (125-6)	平 瓶 須 壺器	B (6.7) C (9.9) 口径 13.0	器底より腹面より体部は外縮して立 ち上がり、反手は天井部を成形する。 口縁部はラッパ状に削いた形となる。	外面部はコロコナデ。 天井部はヘラナデ。 底面は回転へり削り。 内面はコロコナデ。	微砂粒・小石 (内)(外)暗青褐色 炭 灰	

番号	器 形	寸 法 (cm)	器 形 の 特 徴	整 形 法 法	胎土・色調・焼成	備 考
12 (125-7)	環形土器 上脚蓋土器	A 12.0 C 4.2	平底丸味の底部より体部は緩やかに立ち上がる。口縁部は尖鋭的だが器厚はほぼ均一である。	外面体部は楕円ナア。 口縁部内外面は入念なナア。 内面は四方向ナア。	黄砂粒 (内)外)灰赤黄褐色 良 好	
13 (125-8)	燈明皿 上脚蓋土器	A 7.5 B 4.8 C 1.7	平底の底部より体部は緩やかに立ち上がり、尖鋭的な口縁部に至る。	内外面共にナア。 底部は回転糸切り。	黄砂粒 (内)外)灰赤褐色 良 好	
14 (125-9)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.0 C 2.2	平底丸味の丸底より体部は緩やかに立ち上がる。口縁部は直立気味。	外面は楕円ナア。 口縁部内外面はナア。	黄砂粒・石英 (内)外)赤褐色 やや良	惣志稿 6
15 (125-10)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.2 C 2.7	平底に近い丸底を呈し、体部は緩やかに立ち上がり口縁部に至る。全体的に器厚する。	外面は楕円ナア。 口縁部内外面はナア。	黄砂粒 (内)外)灰赤褐色 良 好	

15. 集石2 出土遺物解説表(第132図)

番号	器 形	寸 法 (cm)	器 形 の 特 徴	整 形 法 法	胎土・色調・焼成	備 考
1 (132-1)	広口壺 東海系	A 14.0 B 11.0 C(23.7)	肥厚な底部から緩やかに立ち上がり、肩部やや平字に最大径をもち、頸部はゆる外反し、口縁部は断面三角形状を呈す。	外面はロクロナア後に階段の丁具ナア。 内面はロクロナア。 底部は回転糸切り。	黄砂粒・小石 (内)赤褐色 (外)明褐色 やや良	黄砂器 内面に線痕 痕
2 (132-2)	壺 瀬戸系	A 11.0 B 4.2 C 1.7	体部は緩やかに外傾し、口縁部はわずかに外反気味である。	口縁部内外面はオリーブ色の釉を施す。 体部はロクロ製。 底部は明褐色糸切り。	粘土上 (内)外)向褐色 良 好	
3 (132-3)	高台付杯 内 壺 十脚蓋土器	A 14.6 C 5.8 D 7.6	緩やかに立ち上がる体部はやや肥厚気味で、口縁部はつまみ上げられる。高台部は「ハ」の字状を呈す。	外面はロクロナア。 内面は黄褐色。 底部はヘラはずし。 高台部は貼付高台。	砂粒・赤色粒 (内)赤褐色 (外)明褐色 良 好	
4 (132-4)	高台付杯 内 壺 上脚蓋土器	A 13.7 C 5.8 D 8.3	緩やかに立ち上がる体部はやや肥厚気味で、口縁部はつまみ上げられる。高台部はゆる外反し、断面は尖鋭的である。	外面はロクロナア。 内面は赤色気味。 底部はヘラはずし。 高台部は貼付高台。	砂粒・赤色粒 (内)赤褐色 (外)明褐色 良 好	
5 (132-5)	杯 内 壺 上脚蓋土器	A 11.1 B 6.1 C 2.9	平底の底部より体部は緩やかに外傾して立ち上がる。器厚は均一である。	外面はロクロナア。 内面は黄褐色気味。 底部は回転ヘラはずし。	灰石・石英 (内)赤褐色 (外)明褐色 良 好	
6 (132-6)	燈明皿 上脚蓋土器	A 7.6 C 4.8 C 1.9	平底の底部より体部はゆる外傾気味に立ち上がる。	内外面共に楕円ナア。 底部は回転糸切り。	砂粒・長石 (内)外)赤褐色 良 好	惣志稿 2
7 (132-7)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.0 B 5.0 C 2.0	平底の底部より体部はゆる急に立ち上がる。	内外面共に楕円ナア。 底部は回転糸切り。	砂 粒 (内)外)明褐色 良 好	惣志稿 5
8 (132-8)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.0 B 5.0 C 1.95	平底の底部より体部はゆる外傾気味に立ち上がる。	内外面共に楕円ナア。 底部は回転糸切り。	砂粒・金雲母 (内)外)灰褐色 良 好	惣志稿 9
9 (132-9)	燈明皿 上脚蓋土器	A 7.2 B 3.0 C 1.8	平底の底部より体部は急に外傾して立ち上がる。	内外面共に楕円ナア。 底部は回転糸切り。	砂 粒 (内)外)灰褐色 良 好	惣志稿 2
10 (132-10)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.3 C 2.0	平腹気味の丸底より体部はやや内傾気味に立ち上がる。	内外面共に楕円ナア。 底部はヘラナア。	砂粒・赤色粒 (内)外)赤褐色 良 好	惣志稿 2
11 (132-11)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.1 C 2.2	平腹気味の丸底より体部は急に立ち上がり、口縁部はやや直立気味である。	内外面共に楕円ナア。 底部はヘラナア。	砂粒・赤色粒 (内)外)赤褐色 良 好	惣志稿 3
12 (132-12)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.0 C 2.3	平底に近い丸底より緩やかに内高気味に立ち上がり体部は、口縁部に至ってほぼ直立気味となる。	内外面共に楕円ナア。 底部から体部外面はヘラナア。	砂粒・赤色粒 (内)外)赤褐色 良 好	
13 (132-13)	燈明皿 上脚蓋土器	A 8.5 C 2.0	平腹気味の丸底より体部はゆる外傾して立ち上がる。器厚は器厚する。	内面から口縁部は楕円ナア。 底部から体部外面はヘラナア。	砂粒・赤色粒 (内)外)赤褐色 良 好	惣志稿 15

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・地味	備考
14 (132-14)	燈明皿 上師算上器	A 8.0 C 2.3	平庭気味の丸底より体部は緩やかに外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	内面から口縁部は横ナデ。 底面から体部外面はヘラナデ。	紫砂・赤色焼 (内)外赤褐色 良好	燈志書3

16. 中世墳墓周辺出土遺物解説表(第134・135図)

番号	器形	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・地味	備考
1 (134-1)	大須 須器	A 12.0 B 6.8 C 1.3	-	外面は器底約4.0cmの位置が盛り、その間を1〜6条を単位とするクシ掻き波状文を施す。 内面はロクロナデ。	紫砂粒 (内)淡黄褐色 やや良	
2 (134-2)	大須 須器	A 12.0 B 7.8 C 1.3	-	外面は細かい斜格子叩き。 内面は同心円文叩き。	紫砂粒・細砂 (内)灰白色 (外)淡黄灰色 不良	
3 (134-3)	大須 須器	A 9.5 B 6.5 C 0.9	-	外面は斜格子叩き。 内面は同心円文叩き。	紫砂粒 (内)淡黄白色 (外)淡黄灰色 不良	
4 (134-4)	大須 須器	A 9.0 B 7.0 C 1.6	-	外面は平行叩き。 内面は同心円文叩き。	紫砂粒 (内)外淡赤色 良好	
5 (134-5)	大須 須器	A 16.0 B 7.2 C 1.2	-	外面は平行叩き。 内面は同心円文叩き。	紫砂粒 (内)淡赤色 (外)淡灰白色 良好	
6 (134-6)	大須 須器	A 8.5 B 5.0 C 0.6	-	外面は平行叩き。 内面は同心円文叩き後に全面ナデ整形。	砂粒 (内)淡灰色 (外)黄灰色 良好・平焼	
7 (135-1)	土師器	A 15.0 C 5.8	体部は丸庭気味の底面より緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	外面体部は多方向のヘラ削り。 口縁部は横ナデ。 内面は著しく器面が荒れる。	砂粒 (内)暗褐色 (外)赤褐色(黒胎) 良好	尚須川流域の 壘上層中 より
8 (135-2)	土師器	A(13.4) C(5.6)	器面はやや直立気味で、口縁部は強く外傾する。	外面体部は横ナデ。 口縁部は横ナデ。 内外面共に器面が荒れる。	砂粒 (内)外明赤褐色 やや良	
9 (135-3)	土師器	A(14.2) B(9.2) C 4.4	体部は外庭気味に立ち上がり、口縁部は軽く外傾する。	体部はロクロナデ。 底面は器底ヘラ切り。 体部下端(外周)は器底ヘラ。	紫砂粒 (内)外暗灰色 良好	
10 (135-4)	土師器	A(24.2) C(10.0)	胴部は緩やかな曲線を帯び、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は處に外傾しながら先端は先細る。	外面胴部はやや深い突き。 口縁部は横ナデ。 内面は工具ナデ。	紫砂粒 (内)透明茶褐色 (外)淡黄褐色 やや良	
11 (135-5)	土師器	A(15.2) C(9.5)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部を軽く外傾する。	外面胴部は左方向に工具ナデ。 口縁部は横ナデ。	小石・細砂 (内)外淡赤褐色 (外)に炭屑有り 良好	

17. EIV-1-4, 14, 15, 21, 23, 24, 25 出土遺物解説表(第146図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (146-1)	環 内黒 土師質土器	A 13.2	平底の底部より体部は外傾して立ち上がり、口縁部は軽く外反する。	外面制削は磨削する。下半(底部外周)はへう削り。内面は炭灰地層及び研磨。底部はへう削り。	砂粒・色石 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	EIV-1-4 内面に炭灰地層付着
		B 6.3				
		C 3.9				
2 (146-2)	環 土師器	A 12.2	体部は急に立ち上がり、口縁部は突強的でほぼ直立する。	外面は斜方へう状工具による切りつけ削を全面に有す。口縁部内外面は横ナデ。内面は縦位に1具ナデ。	黄砂粒 (内)(外)赤褐色 やや良	EIV-1-14
		C (6.8)				
3 (146-3)	環 土師器	A (15.7)	平底の底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外傾させ後によって直される。	外面体部は磨いたナデ。 口縁部内外面は横ナデ。 内面はへう先による研磨。 底部はへう削り。	黄砂粒 (内)(外)赤褐色 やや良	EIV-1-14 ~15
		B 4.8				
4 (146-4)	環 須恵器	A 13.2	平底の底部より体部は外傾して立ち上がり、真横的に口縁部に至る。	外面体部はロクロナデ。下半(底部外周)は手持ちへう削り。内面はロクロナデ。底部は回転へう切り刃直にへう削り調整。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 良 好	EIV-1-15
		B 6.1				
5 (146-5)	環 土師器	A 19.0	頸部は強く外反し、「く」の字状を呈す。口唇部は平坦。	外面頸部はナデ。頸部は刷毛目。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は1具ナデ。	黄砂粒・石炭 (内)(外)赤褐色 やや良	EIV-1-24
		C (9.5)				
6 (146-6)	環 土師器	A 18.0	平底の底部より急に立ち上がる頸部は、ほぼ球状を呈す。頸部は強く外反し、「く」の字状を呈し、口縁部はやや膨張する。全体が凹凸にまじしい。	外面頸部はへう削り。上半はへう削り後には刷毛目調整。口唇部内面はへう状工具による横ナデ。内面はナデ。底部はへう削り。	黄砂粒・スクリヤ (内)赤褐色 (外)暗褐色 良 好	EIV-1-23 二次焼成 外面に炭付着
		B 6.7				
		C 19.4				
7 (146-7)	小型環 土師器	A 14.7	平底の底部よりやや急に立ち上がる頸部は、中央やや上位で最大径をとる。頸部は軽く外反し、口縁部は突強的に外傾する。	外面頸部はへうナデ(全面に炭灰物付着)。頸部はへう止め。口縁部内外面は横ナデ。内面はナデ。底部はへう削り。	砂 粒 (内)灰褐色 (外)黒色 良 好	EIV-1-21
		B 5.2				
		C 11.0				
8 (146-8)	環 内黒 土師質土器	A 13.6	平底の底部より体部は緩やかに立ち上がり口縁部に至る。	外面体部上半はナデ。下半は回転へう。内面黒色地層(全面に黒点状の凹凸)。 底部は磨削する。	黄砂粒・石炭 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	EIV-1-21 ~25
		B 6.8				
		C 4.0				

18. EIV-1-24, 25, 40 出土遺物解説表(第147図)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (147-1)	環 土師質土器	A 13.8	平底の底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部に至る。器厚は均一である。	外面体部はナデ。内面は炭灰地層(へう研磨)。底部は回転へう切り刃直にへう削り調整。	黄砂粒・石炭 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	EIV-1-24
		B 7.5				
		C 4.2				
2 (147-2)	環 須恵器	B 6.4	やや膨張する頸部より体部は緩やかに立ち上がる。	内外面共にロクロナデ。 底部は回転未切り。	黄砂粒 (内)(外)暗灰色 やや良	EIV-1-25
		C 1.0				
3 (147-3)	高台付環 底削り 須恵器	C (1.7)	やや膨張する頸部は、ほぼ直立する高台部が貼付される。	内外面共にロクロナデ。 底部は回転へう削り。	砂 粒 (内)(外)暗灰色 良 好	EIV-1-24
		D 8.4				
4 (147-4)	環 口縁部 須恵器	11.4	頸部は緩やかに外反し、膨張する口縁部に至る。口唇部は丸味を帯びる。	外面は縦位に平行研削。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は指擦ナデ。	黄砂粒・石炭 (内)(外)赤褐色 やや良	EIV-1-24
		7.0				
5 (147-5)	環 土師器	A 15.2	平底の底部より頸部は急に立ち上がり、中央で最大径をとる。頸部は強く外反し、「く」の字状を呈し、平坦な口縁部に至る。	外面頸部は刷毛目磨に人念なナデ。頸部は刷毛目。口縁部は横ナデ。内面は1具ナデ。口唇部は刷毛目後には軽くナデ。底部はへう削り。	黄砂粒・石炭 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	EIV-1-40 頸部に彩色 (丹)塗?
		B 7.3				
		C 34.0				

19. EIV-1-40, 50, 94 出土遺物解説表(第 148 図)

番号	器種	法 磁 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (148-1)	小型甕 土 師 器	A 12.0 B 6.2 C 15.7	平底碗形の底部より急に立ち上がる胴部は、ほぼ中心で最大径をとる。頸部は「く」の字状を外反し、口縁部は軽く外反する。	外面胴部は刷毛目。下腹部は指頭調整体にてナゲ。口縁部内外面は滑ナゲ。内面は人工的なナゲ。底部はへう削り。	濃紺・スコリア (内)明褐色 (外)明褐色 良 好	EIV-1-40
2 (148-2)	小型広口甕 土 師 器	A 12.5 B 4.0 C 7.7	肥厚する平底の底部より緩やかに立ち上がる胴部は、頸部に至って「く」の字状を外反し、口縁部に至る。口縁部は中環である。	外面胴部はへう削り。 口縁部内外面は刷毛目(部分ナゲナゲ)。底部はへう削り。	石灰・長石 (内)(外)赤褐色 良 好	EIV-1 40 器面は丹塗り
3 (148-3)	甕 土師質土器	A 15.1 B 4.6 C 6.9	平底の底部より体部は急に立ち上がり、直線的に口縁部に至る。	外面体部はへう削り。ナゲ。 口縁部内外面は滑ナゲ。 内面は赤色肌理(放射状に細い筋線)。底部はへう削り。	濃紺・スコリア (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	EIV-1-40 I EIV-2-41
4 (148-4)	高 杯 土 師 器	C(7.2)	杯部と胴部は明確な境によって高さ別、胴部は強く外反する。	外面杯部下縁はへう止め。 胴部は縦位にへう削り。 内面杯部はナゲ。 胴部は刷毛目。	砂 粒 (内)(外)褐色 良 好	EIV 1-40
5 (148-5)	樽 内 土 師 器	A 7.6 C 7.7 樽部径 10.7	受部はやや深く、体部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。胴部は軽く外反気味に「く」の字状を外反し、口縁部はやや外反する。頸部孔は3ヶ所。	外面は刷毛目後に全面へうナゲ。 内面通し孔はへう削り。 内面胴部は刷毛目。へう削り。	砂 粒 (内)明褐色 良 好	EIV-1-40 器面全体に丹塗り
6 (148-6)	磁 石 安 山 石	8.0 4.0 ~ 2.6 4.0	断面形状は四角柱を呈する。全体的に欠陥する。西面に使用痕を認める。	-	-	EIV-1-94
7 (148-7)	甕 土 師 器	A 16.6 B 4.8 C 18.2	平底の底部より胴部は急に立ち上がり、中心で最大径をとる。頸部は「く」の字状を外反し、やや肥厚する口縁部に至る。	外面胴部は刷毛目調整後にへう削り。ナゲ。口縁部は滑ナゲ。 内面はへう削り後にナゲ。口縁部は刷毛目。底部は内方向へう削り。	濃紺砂 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	EIV 1-50
8 (148-8)	甕 土 師 器	A(15.2) B 5.0 C 21.5	平底の底部より胴部は急に立ち上がり、中心で最大径をとる。頸部は「く」の字状を外反し、やや肥厚する口縁部に至る。	外面胴部中心はへう削り。上下位は刷毛目。口縁部内外面は刷毛目。内面はナゲ。 底部はへう削り。	濃紺・スコリア (内)赤褐色 (外)明褐色 良 好	EIV 1 50

20. EIV-1-40, 50 出土遺物解説表(第 149 図)

番号	器種	法 磁 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (149-1)	甕 土 師 器	A 18.5 B 8.2 C 33.6	平底の底部より急に立ち上がる胴部は中心で最大径をとる。頸部は「く」の字状を外反し、やや肥厚する口縁部に至る。胎厚は、ほぼ均一である。	外面胴部は磨毛目。頸部上位は刷毛目。口縁部内外面は滑ナゲ。内面は刷毛目直交ナゲ。底部は刷毛目調整後にへう削り。	砂粒・石灰 (内)(外)赤褐色 やや良	EIV-1 50
2 (149-2)	甕 土 師 器	A 16.6 B 7.0 C 25.5	平底の底部より急に立ち上がる胴部は中心で最大径をとる。頸部は「く」の字状を外反し、やや肥厚する口縁部に至る。	外面胴部はナゲ(部分へう削り)。口縁部内外面は滑ナゲ。 内面は縦位に工具ナゲ。 底部はへう削り。	砂 粒 (内)赤褐色 (外)明褐色 やや良	EIV-1-50
3 (149-3)	小型甕 土 師 器	A(8.3) B 5.0 C 8.1	肥厚する平底碗形の底部より急に立ち上がる胴部は中央やや上位で最大径をとる。頸部は軽く外反し、初期で尖鋭する口縁部に至る。	外面胴部は刷毛目(部分滑ナゲ)。口縁部内外面は滑ナゲ。 内面は滑ナゲ。 底部はへう削り。	石灰・長石 (内)(外)明褐色 良 好	EIV-1 40
4 (149-4)	杯 清 産 器	A 13.2 B 7.0 C 3.7	平底でやや肥厚する底部より体部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。	内外面共にコロコナゲ。 底部は回転へう削り後にへう調整。	砂粒・長石 (内)(外)暗褐色 良 好	EIV 1 50

21. EIV-2-31, 41 出土遺物解説表(第150図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (150-1)	土師器 環	A 12.4 C 6.3	深い丸底を呈し、体部は急に立ち上がり、口縁部は直線的に外反し、やや尖鋭する。	外面体部はへう削り、口縁部は横ナデ。 内面は放射状にへう研磨(短文)。 口縁部は横ナデ後に横位にへう研磨。	石灰・長石・藍母 (内)(外)明褐色 良 好	EIV-2-31
2 (150-2)	土師器 環	A 14.5 C 6.7	丸底の底部より体部はやや急に立ち上がり、口縁部は肥厚し軽く外反させる。口縁部は尖鋭する。	外面体部は灰いナデ、一部研磨。 口縁部内外面は横位に研磨。 内面は放射状にへう研磨(短文)。	微砂粒・石灰 (内)(外)淡赤褐色 やや良	EIV-2-31 ~41 鼓形器台
3 (150-3)	高土師器 環	A 15.7 C 7.2 胎厚 7.8	胎厚は厚く、体部は腰のみに外傾して立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。胎厚は胎のく、口縁部の平状に強く外反する。	外面は全体にへうナデ。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は多方向に放射状に研磨(短文)。 胎厚はへうナデ。	微砂粒・スコリア (内)(外)赤褐色 良 好	EIV-2-31
4 (150-4)	高土師器 器台	C(3.9) 胎厚 17.3	口縁部の平状に強く外反する胎厚は、胎厚に至ってほぼ平直となる。胎厚中に胎厚に突帯をもつ(胎厚する)。	外面はへう削り後にナデ、研磨。 内面胎厚周辺はナデ、上半はへう削り。	微砂粒 (内)茶褐色 (外)赤褐色 良 好	EIV-2-31 ~41
5 (150-5)	土師器 口縁部	12.4 6.0 0.6	胎厚は胎のく外反させ口縁部に平直。口縁部の胎厚形状は三角形を呈す。	外面は胎方に平行研ぎ。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は指輪ナデ。	微砂粒・藍母 (内)(外)淡灰色 やや良	EIV-2-31
6 (150-6)	土師器 器台	A 11.4 B 6.0 C 16.0	平底の底面より急に立ち上がる胎厚は、胎厚で胎厚となる。胎厚は大きくく字状に外反し口縁部に立ち上がる。	外面胎厚は胎毛目整形後へうナデ、口縁部は横ナデ。 内面口縁部は胎毛目整形後へう研磨。	微砂粒 (内)(外)明褐色 良 好	EIV-2-41
7 (150-7)	土師器 器台	A 16.8 C(21.0)	口縁部の急に立ち上がる胎厚は胎厚で最大径をとり、胎厚で軽く外反しやや胎厚する口縁部に立ち上がる。	外面胎厚は横位に工具ナデ。 口縁部内外面は横ナデ。 内面は上層ナデ。	微砂粒 (内)(外)淡赤褐色 やや良	EIV-2-41

22. EIV-2-41, 42, 52 出土遺物解説表(第151図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (151-1)	土師器 器台	A(8.7) B 3.6 C 10.0	平底の底面より急に立ち上がる胎厚は、胎厚で胎厚となる。胎厚で大きくく字状に外反し、胎厚のく字状に胎厚する。	外面胎厚下半はへう削り、上半は胎毛目整形後へう研磨。口縁部内外面は横ナデ。	石灰・長石 (内)(外)明褐色 良 好	EIV-2-41
2 (151-2)	土師器 器台	A 5.6 C(3.9) E 1.0	平底の底面より胎厚は直線的に外傾して立ち上がる。胎厚は胎厚のく字状を呈す。	外面胎厚はナデ、上端部は指輪ナデ。 内面はへう削り後ナデ。 胎厚部分はへう削り。	微砂粒・長石 (内)明茶褐色 (外)赤褐色 良 好	EIV-2-41
3 (151-3)	土師器 環	A 13.5 C 8.0	平底の丸底を呈し、やや急に立ち上がる胎厚は、やや胎厚して直線的に外傾する口縁部に立ち上がる。	外面体部はへう削り。 口縁部内外面は横ナデ。 内面はナデ。	微砂粒 (内)(外)赤褐色 良 好	EIV-2-42
4 (151-4)	高土師器 器台	C(7.0) 胎厚 13.3	胎厚は腰のみに大きく外反し、胎厚は尖鋭する。	外面はナデ、胎厚内外面は横ナデ。 内面はナデ。	微砂粒 (内)緑褐色 (外)赤褐色 良 好	EIV-2-41
5 (151-5)	土師器 器台	A 10.3 C(2.6)	胎厚は胎のく外反して立ち上がり、口縁部は平直である。	外面体部から口縁部は胎毛目整形後にナデ。 内面はへうナデ、削り。	微砂粒・長石 (内)(外)茶褐色 やや良	EIV-2-41
6 (151-6)	土師器 環	A 13.6 B 8.3 C 3.3	平底の底面から胎厚は、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は尖鋭する。	内外面共にコロコナデ。 胎厚は回転へう削り。	長石 (内)(外)暗灰色 良 好	EIV-2-42
7 (151-7)	土師器 器台	C(6.3)	胎厚は腰のみに大きく外反する。	外面はへう削り、ナデ。 内面は上層ナデ。	微砂粒・石灰・藍母 (内)(外)淡赤褐色 良 好	EIV-2-52
8 (151-8)	高土師器 器台	C(3.0) D 10.5	平底の底面より胎厚は胎厚の外傾して立ち上がり、口縁部は胎厚の外傾して立ち上がる。胎厚は胎厚の外傾して立ち上がる(胎厚)。	内外面共にコロコナデ。 胎厚は胎厚の外傾して立ち上がる(胎厚)。 胎厚は胎厚の外傾して立ち上がる(胎厚)。	微砂粒 (内)(外)灰色 良 好	EIV-2-52
9 (151-9)	高土師器 器台	C(4.0) D(6.4)	平底の底面より胎厚は胎厚の外傾して立ち上がる。胎厚は胎厚の外傾して立ち上がる(胎厚)。	内外面共にコロコナデ。 胎厚は胎厚の外傾して立ち上がる(胎厚)。	微砂粒 (内)灰色 (外)淡赤褐色 良 好	EIV-2-52

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
10 (151-10)	高台付鉢 須磨器	C (2.5) D 8.6	平底で器厚なる底部より体部は緩やかに外傾して立ち上がる。器身は断面二等形状を呈す(取付)。全体の小型である。	内外面共にロクロナデ。 底部は回転ヘラ切り。	微砂粒 (内)(外)明灰色 良好	EIV-2-53
11 (151-11)	鉢 須磨器	R 8.0 C (2.5)	底部は平底でやや肥厚し、体部は直線的に外傾して立ち上がる。	内外面共にロクロナデ。 底部は器具ナデ。 底部は回転ヘラ切り後に削り調整。	微砂粒 (内)(外)灰白色 良好	EIV-2-52 底部に「J」 のヘラ記号
12 (151-12)	磁石 肥石	8.0 9.6 2.7~4.7	形状は長方形を呈し、使用後は裏・裏二面に認められる。片面は円急に使い込まれている。	-	-	-

23. EIV-2-61, E III-4-50 出土遺物解説表(第152図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (152-1)	帯 上防器	A 14.8 C (5.4)	頸部は「く」の字状に強く外反し、口唇部は直立する。	外面は細い刷毛目。 口唇部内外面は横ナデ。 内面はナデ。	砂粒 (内)(外)明褐色 良好	EIV-2-61
2 (152-2)	須磨器 口防器	A 16.8 C (5.5)	頸部は強く外反し、「く」の字状を呈す。	外面頸部は刷毛目。 口唇部は刷毛目後にナデ調整。 内面はナデ。 口唇部は横波に刷毛目。	微砂粒 (内)淡赤褐色 (外)淡褐色 やや良	EIV-2-61
3 (152-3)	鉢 土師器	A 16.7 C (14.0)	頸部は球形に近く、器部は強く外反し、「く」の字状を呈す。口唇部は短頸で口唇部は丸味を帯びる。	外面頸部は刷毛目ナデ。頸部は一部ヘラ削り。口唇部内外面はナデ。 内面は灰いナデ。口唇部は工具ナデ。	砂粒・灰石 (内)淡褐色 (外)淡赤褐色 やや良	EIV-2-61 削製
4 (152-4)	鉢 土師器	A 20.4 C (16.6)	頸部「く」の字状を呈し、直線的に外傾して口唇部に平る。器身はほぼ均一である。	外面頸部は工具ナデ。頸部は刷毛目調整。口唇部内外面は横ナデ。 内面は工具ナデ。 内面は横ナデ。	砂粒 (内)(外)淡赤褐色 やや良	EIV-4-50
5 (152-5)	鉢 土師器	A 17.9 B 7.7 C 8.0	平底の底部より体部は急に立ち上がりやや肥厚する口唇部に至る。口唇部は尖頭する。	外面体部は灰色ナデ。一部ヘラ削り。口唇部内外面は横ナデ。 内面はナデ後に多方向のヘラ研磨。 底部はヘラ削り。	微砂粒・灰石 (内)(外)赤褐色 やや良	EIV-2-61
6 (152-6)	須磨器 土師器	A 15.6 R 8.5 C 14.0	平底の底部から急に立ち上がる頸部は、頸部に至って強く「く」の字状に外反し、短頸で口唇部に平る。	外面頸部は横波にヘラ削り。口唇部内外面は横ナデ。内面は横ナデ。 底部はヘラ削り。	微砂粒・灰石・雲母 (内)(外)淡赤褐色 (灰)褐色 やや良	参考資料① 器部清灰氏 二次焼成
7 (152-7)	須磨器 須磨器	A 19.4 C 14.4 R 5.8	頸部は外傾して立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。器身はほぼ均一である。底部孔は単孔で、板成所は単孔される。	外面頸部は平に斜波にヘラ削り。下半は工具ナデ。研磨。口唇部内外面は横ナデ。内面は工具ナデ。研磨。 孔部はヘラ削り。	微砂粒・灰石 (内)(外)明灰色 良好	参考資料② 器部清灰氏 研

24. EIV-1-4, 24, 25, EIV-2-31 出土遺物解説表(第153図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (153-1)	男 丸瓦	22.0 13.0 1.9	工練式の瓦お断片である。平縁部分は、欠失しているが、比較的厚みがある。凸面に「鳥」のヘラ書きを有する。	両面中央部に布し合わせた目録。 平縁はヘラ削り。凸面は縦線に平行して全面工具ナデ。	微砂粒・灰石 (内)(凸)灰白色 やや良	EIV-1-4 -1-24 文字瓦
2 (153-2)	女 平瓦	10.0 9.7 2.9~2.4	両面は粘土板単削り後に布目法を有し、側縁は直リトされる。	平縁はヘラ削り。凸面は全面に刷毛目叩る。	微砂粒 (内)(凸)暗黄褐色 やや良	EIV-1-26
3 (153-3)	女 平瓦	8.0 8.0 2.0	-	凹面は、全体の布目法を丹先で磨消す。凸面は、一辺3.0~3.5 cm程度で確かな正縁子印きを有する。	微砂粒・灰石 (内)(凸)灰白色 (凸)淡黄褐色 良好	EIV-2-31

25. EIV-1-15 出土遺物解説表(第154図)

番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (154-1)	口縁部 弥生土器	5.5 7.0 0.6	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は平坦である。	外面は横位にクシ捺沈線文。 口唇部直上には原体押捺。 内面はナデ。	細砂粒・灰石 (内)(外)淡黄褐色 良 好	EIV-1-15

26. No 20・21 出土遺物解説表(第163～165図)

番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 (163-1)	片口式土器 弥生土器	A 12.2 B 7.3 C 20.0	胴部～頸部は緩やかなカーブを描き、 直線的に外傾する口縁部に至る。其 し厚さは粘土質の性質により、底部は 底成後に穿孔される。	外面は引伏線文。頸部は横文(ナデ)。 口唇部及び口唇部直下端には原体 押捺。 内面は指線ナデ。底部は木炭圧痕。	細砂粒・石英 (内)(外)淡黄褐色 やや良	No 21 Nトレンチ 内検出(美 部返道より)
2 (163-2)	変形土器 弥生土器	B 9.6 C(21.0)	平底の底部より胴部は直線的に外傾 して立ち上がる。	外面胴部は引伏線文。 内面はナデ(一部捺線する)。 底部は木炭圧痕。	細砂粒・石英・黒母 (内)(外)淡黄褐色 やや良	No 21 Nトレンチ 内検出
3 (163-3)	変形土器 胴部 弥生土器	27.0 22.0 0.5	胴部は緩やかにカーブを描きながら 立ち上がる。大型の変形土器である。	外面は引伏線文。 内面ナデ。	細砂粒・石英 (内)(外)淡褐色 やや良	No 21 Nトレンチ 内検出
4 (164-1)	甕形土器 弥生土器	A(11.4) B(15.0)	胴部上半に最大径をとり、胴部でや や縮まる。口縁部はやや外反し球状 に立ち上がり、口唇部は直立気味で実 績する。	外面胴部は割方に線文。 頸部は横文(ナデ)。 口唇部は割方に横文。口唇部は原体 押捺。内面はナデ。	細砂粒・石英・黒母 (内)(外)淡黄褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
5 (164-2)	甕形 弥生土器	4.0 6.9 0.6	-	外面はナデ及び横位にクシ捺沈線文。 内面は横位にナデ。	細砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 20-21 Nトレンチ 内検出
6 (164-3)	甕形 弥生土器	5.5 7.8 0.7	-	外面はナデ及び横位にクシ捺沈線文。 内面はナデ。	微砂粒 (内)(外)赤褐色 やや良	No 21 Nトレンチ 内検出
7 (164-4)	甕形 弥生土器	4.0 5.9 0.7	-	外面は付加系線文。上端にクシ捺沈 線文。 内面はナデ。	細砂粒・石英・灰石 (内)(外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
8 (164-5)	甕形 弥生土器	5.5 8.2 1.0	-	外面は横文。上端にクシ捺沈線文。 内面は横位にナデ。	細砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
9 (164-6)	甕形 弥生土器	4.9 7.3 0.6	-	外面は引伏線文。 内面はナデ。	細砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
10 (164-7)	甕形 弥生土器	4.1 4.0 0.7	-	外面は付加系線文を引伏に施文。 内面はナデ。	細砂粒 (内)(外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
11 (164-8)	甕形 弥生土器	6.0 7.2 0.6	-	外面は引伏線文。 内面はナデ。	細砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
12 (164-9)	甕形 弥生土器	5.7 5.2 0.5	-	外面は横り糸文を割に施文。 内面はナデ。	細砂粒・スコリア (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
13 (164-10)	甕形 胴部下端部 弥生土器	3.5 4.0 0.8～1.2	-	外面は付加系線文を施文。 内面はナデ。	細砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
14 (165-1)	甕形 胴部下端部 弥生土器	5.4 5.7 0.8～1.0	-	外面は付加系線文を引伏に施文。 内面はナデ。	細砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
15 (165-2)	甕形 弥生土器	4.2 5.3 0.6	-	外面は付加系線文を引伏に施文。 内面はナデ。	細砂粒 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出
16 (165-3)	甕形 弥生土器	B(8.2) C(4.2)	平底の底部より胴部は急に立ち上 がる。	外面は付加系線文。 内面はナデ。 底部は木炭圧痕。	細砂粒・灰石・石英 (内)(外)赤褐色 良 好	No 21 Nトレンチ 内検出

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色面・焼成	備考
17 (165-4)	腹部 弥生土器	B(7.8) C(3.6)	平底の底面より、腹部はやや内側より外側に急に立ち上がる。	外面は付加焼文。 内面はナデ。 底面は木置圧痕。	微砂粒・石英 (内)赤褐色 (外)赤褐色 良好	No 21 ミトレンジ 内検出
18 (165-5)	打製石斧 砂岩製	6.6 4.0 2.0	小型で筒形を呈する。	刀部は表面から二次調整が加えられる。	-	No 20 ミトレンジ 内検出
19 (165-6)	磨製石斧 炭素 麻沢石製	3.8 3.3 3.0	比較的小型で、断面形状は楕円形を呈する。	全面が人工的に研磨整形される。	-	No 20 ミトレンジ 内検出
20 (165-7)	小型 土製	A 12.4 B 6.8 C 13.3	丸底臼縁で肥厚する底面より胴部は急に立ち上がり、中位で最大径をとる。腹面はくさの字状を呈し、短縁で強く外反する口縁部をもつ。	外面胴部は縦位に工具ナデ(深ヘリ削り)。口縁部内外面は槍ナデ。内面はナデ(中位は垂状判傷がみられる)。底面はヘリ削り。	微砂粒・石英・雲母 (内)赤褐色 (外)赤褐色 やや良	No 20 ミトレンジ 内検出 下より

27. 参考資料遺物解説表(第173・174図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	胎土・色面・焼成	備考
1 (173-1)	腹部 弥生土器	A 15.1 B 8.0 C 31.0	平底の底面よりやや内側から急に立ち上がる胴部は、中位に最大径をとる。腹面はやや縮まり、円筒的に外傾して口縁部に至る。	胴部は付加焼文。腹面は焼文(ナデ)。口縁部は二段の焼文で形成し、その上部には焼文が金剛する。底面は木置圧痕。	微砂粒 (内)赤褐色 外面胴部に付着 良好	小塚・宮本 出土
2 (173-2)	腹部 弥生土器	6.0 4.8 0.5~0.7	-	外面下部からケムシ状、斜交文、横文、横ナデ。口縁部は地味押痕。内面はナデ。	微砂粒・パミス (内)赤褐色 良好	小塚・宮本 出土
3 (173-3)	腹部 弥生土器	6.0 5.5 0.7	-	外面は付加焼文を斜状に焼文。内面は刷毛状工具によるナデ。	微砂粒 (内)赤褐色 良好	小塚・宮本 東高倉内出土
4 (173-4)	腹部 弥生土器	3.4 3.0 0.6	-	外面は付加焼文。 内面はナデ。	微砂粒・パミス (内)赤褐色 やや良	小塚・宮本 東高倉内出土
5 (173-5)	腹部 弥生土器	5.5 2.5 0.7	-	外面は付加焼文。 内面はナデ。	微砂粒・パミス (内)赤褐色 良好	小塚・宮本 東高倉内出土
6 (174-1)	横瓦 二ツ巴紋	7.2 6.5 1.5~3.0	内区は三ツ巴紋。内区外周(1.7 cm 幅)に横文と小巴紋を配し、全面させるものである。	瓦当裏面はナデ。両瓦との接合箇所は指張ナデ。	砂粒・雲母 (即)明灰色 良好	小塚・小山 出土
7 (174-2)	横瓦 二ツ巴紋	12.8 9.0 18.5	内区は三ツ巴紋。内区外周に横文と小巴紋を配し全周する。外区は無文。両瓦間は丹念な面取りが行なわれる。	瓦当裏面はナデ。両瓦との接合箇所は指張ナデ。ヘリ削り。凸面は布目圧痕。凸面は縦位に全面ナデ(一部削り)。	微砂粒・雲母 (即)明灰色 (内)赤褐色 良好	下野市川邊 野原堂出土
8 (174-3)	平瓦 (軒平瓦)	10.0 7.0 2.8	外区上縁部のみ遺存する。 内区文様は不明。	凸面は布目圧痕。 凸面(裏面)はヘリ削り。 外区上縁は無文(ヘラナデ)。	微砂粒・雲母 (即)明灰色 (凸)赤褐色 良好	小塚・寺山 出土
9 (174-4)	男瓦	14.0 6.0 2.1	-	凸面は貫いたり比類。 凸面は横目叩き痕に人工的なナデ(磨削)。 裏縁はヘリ削り。(二面カット)	砂粒・雲母 (即)赤褐色 (凸)赤褐色 良好	小塚・小山 出土
10 (174-5)	男瓦	8.5 5.5 2.5	-	凸面は貫いたり布目圧痕。 凸面はナデ。 裏縁はヘリ削り。	砂粒・雲母 (即)赤褐色 やや良	小塚・宮本 引出土 1911.6.13 採取
11 (174-6)	女瓦 (平瓦)	13.0 13.0 2.3	-	凸面はやや貫いたり布目圧痕。 凸面は縦位に貫いたり横目叩き。	微砂粒・雲母 (即)明灰色 (凸)赤褐色 やや良	小塚・寺山 出土 二次焼成
12 (174-7)	女瓦 (平瓦)	8.5 6.0 2.0	-	凸面は密な布目圧痕。 凸面は平行叩き。	微砂粒 (即)明灰色 良好	寺山出土
13 (174-8)	女瓦 (平瓦)	8.5 7.5 2.3	-	凸面は縦位にナデ(布目磨削消し)。 凸面は丸がらな格子叩き。	砂粒・雲母 (即)明灰色 良好	寺山出土

X号石棺出土人骨の観察所見

藤 本 弥 城 (那珂湊市藤木医院)

1 号 人 骨

石棺内でN方位に埋葬された人骨である。

頭蓋骨の矢状縫合の癒着は認められるが、左頭頂骨と後頭骨の殆んどが欠損している。

冠状縫合は癒着が見られ、両側頭部は骨面脱落して凹凸あり、両乳様突起部はやゝ小さく平滑である。頭蓋骨の上面観は後頭骨欠損しあるも類卵円形を呈し長頭と思われる。

顔面観 脳頭蓋に対し、顔面頭蓋の容積が小さく、側面より見ると、前頭骨の上位にある弱い隆起部の前頭結節あたりから急カーブを画きながら、隆起の殆んどない眉間部と、巾広い鼻根部に続く弧線が想定される。両頬弓部骨面剥離、上顎骨は、歯牙の脱落した歯槽部が突出し、歯槽弓は、拋物線の形を画く。また、咬耗、2度の前歯2本あり。

上 顔 高	60	鼻 根 巾	19
鼻 巾	26	鼻根横弧長	21
鼻 高	46	鼻 示 数	56.5で広鼻である。 ^{註1}

その他 両骨端部の消失した両大腿骨及脛骨、出土せるも筋骨着面の発達はいづれも弱い。本人骨は頭蓋骨縫合、乳様突起部、歯牙及び顔面の側面観よりみて、壮年女性と推察する。

2 号 人 骨

石棺内にS方位に埋葬された人骨である。

頭蓋骨は後頭骨、頭頂骨及び両側頭骨が冠状縫合部より消失欠損し、残存する。顔面頭蓋部は次の通りである。

顔面観 側面よりみると、眉弓隆起しやゝ隆起した眉間部は、ゆるやかな傾斜で、浅くへこんだ鼻根部に続く弧線を画く。両頬弓欠損している。

上 顔 高	62	鼻 根 巾	21
鼻 巾	23	鼻根横弧長	22
鼻 高	47	鼻 示 数	48.8で中鼻である。 ^{註1}

上顎骨の歯弓は、拋物線の形を画き、歯並び正しく、鋭状咬合と思われる。カリエスなく、全智歯萌出せず、咬耗は0～1度である。歯は白く美しい歯を呈している。左恥骨結合部あり、結合部の軟骨面のしわは、横位に並び、周辺部のしわ消失せず、若年者と思われる。^{註2}

その他 残存骨は、肋骨、鎖骨、第Ⅰ頸椎、第Ⅱ頸椎、腰椎(2)、薦骨、腸骨、上腕骨、足骨等あるも欠損部分が多い。

本人骨は、顔面側面観、歯牙、及び恥骨結合部よりみて20～25才前後の男性と推察する。

註1 鈴木 尚「日本人の骨」岩波新書 1963

横尾安夫「頭蓋学概説」人類学先史学講座 1938によるところが多い。

註2 埴原和郎「骨を読む」中公新書 1965

小栗地内古墳出土鉄器の金属学的解析

佐々木 稔
伊藤 薫

1. い き さ つ

本遺跡は茨城県協和町の北部域で、栃木県二宮町との県境に近い山裾一帯に位置しており、近くには新治廃寺がある。

発見された古墳は9基で、遺跡調査会資料によれば、横穴式石室6基、竪穴式石室1基、箱式石室1基、主体部不明1基と報告されている。石室内からはかなり多くの鉄製武器や馬具が発掘され、その金属学的調査について阿久津久氏ならびに瀬谷昌良氏より依頼を受けた。

調査対象の鉄器が埋納されていた4基の古墳(I, III, IV, V号墳)は、6世紀末から7世紀初頭の造営と推定されており、西日本における鉄生産開始時期にも近接していて、製鉄技術史上に興味がもたれるところである。そうした面からの考察も加えて解析結果を述べることにしたい。

2. 調査試料および方法

試料鉄器の選定は、4基の古墳から出土した鉄器が各種含まれること、ならびに鉄器の目立たない箇所から1~2グラムの錯片を採取できることを条件にして行なった。直刀5、鐔2、刀子1、鐵2、鋤1、轡2、鍔^{アツ}1、斧1、鋤先1、鉄環1、用途不明鉄製品3の合計20点である。この中で鐔、轡、鍔、鋤先、鉄環の金属学的調査は、おそらく初めての例であろう。不明鉄製品は小型で薄刃の刃物であり、木工か穀物刈取り用の道具に装着するものではないかと考えられている。

20点の鉄器の実測図はこの報告の中で再録し、錯片採取箇所を記入した。一括して第177~180図に示した。

採取した錯片のうち、比較的量が多く、かつち密な黒錆から成るもの5点(刀子、轡、鋤先、鉄環)については、錯片の一部を小さく欠いて顕微鏡試料とした。残部ならびに他の錯片は粉砕し、化学分析に供した。分析は日本検査会東京理化学試験所に依頼して行った。

3. 分析結果ならびに考察

化学分析結果を第3表に示す。

分析成分は全鉄(T. Fe)、銅(Cu)、マンガン(Mn)、リン(P)、チタン(Ti)の5成分である。前三者は原料鉱石か矽鉄鉱の、後一者は砂鉄の標識成分である。

鉄は錯化の過程で酸素と水素分を増し、鉄分の含有量は減する。したがって錯化前の状態で上

第3表 試料鉄器の化学組成

種類	整理番号	古墳	化学成分 (%)				
			T. Fe	Cu	Mn	P	Ti
直刀	No 1	I号墳	62.18	0.004 0.006	0.01 0.02	0.015 0.024	0.014 0.023
			No 2	III号墳	62.45	0.147 0.235	0.01 0.02
	No 17	IV号墳			57.61	0.023 0.040	0.04 0.07
			No 19	IV号墳	58.85	0.113 0.192	0.03 0.05
	No 1	V号墳			60.94	0.010 0.016	0.01 0.02
罽	No 35	III号墳	58.97	0.015 0.025	0.01 0.02	0.035 0.059	0.011 0.019
			No 18	IV号墳	56.53	0.020 0.035	0.01 0.02
刀子	No 43	IV号墳	60.43	0.066 0.109	0.01 0.02	0.924 1.53	0.016 0.026
鉄鍔	No 67	I号墳	59.45	0.414 0.696	0.02 0.03	0.047 0.079	0.016 0.027
			No 163 + 165	I号墳	56.71	0.010 0.018	0.02 0.04
鉾	No 129	I号墳	62.25	0.002 0.003	0.01 0.02	0.178 0.286	0.022 0.035
鐔	No 30	I号墳	61.74	0.008 0.013	0.01 0.02	0.033 0.053	0.012 0.019
			No 53	IV号墳	54.27	0.007 0.013	0.03 0.06
鍔粗	No 94	I号墳	58.85	0.105 0.179	0.01 0.02	0.058 0.099	0.014 0.024
鉄斧	No 5	I号墳	53.94	0.003 0.006	0.04 0.07	0.213 0.395	0.048 0.089
鋤先			No 125	I号墳	59.69	0.185 0.310	0.02 0.03
鉄片	No 78	I号墳	61.83	0.001 0.002	0.05 0.08	0.052 0.084	0.035 0.057
			「U」字状 鉄製品	No 28	I号墳	61.55	0.003 0.005
鉄環	No 130	I号墳	56.59	0.005 0.009	0.01 0.02	0.214 0.378	0.011 0.019

備考 整理番号は瀬谷良氏による。

(上欄は分析値, 下欄は鉄対比)

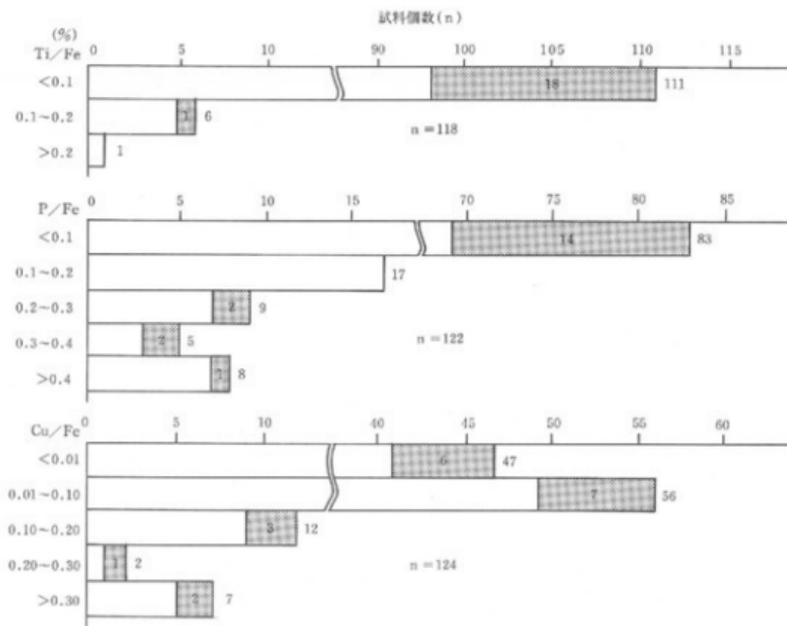
記の標識成分を比較しなければならない。通常用いられるのは“鉄対比”で、これは鉄分を100とし、他成分を外数として百分率で示すものである(第3表)。例えば第3表の直刀No2のCu分の鉄対比 0.147 (Cu分析値) / 62.45 (Fe分析値) $\times 100 = 0.235$ (%) と計算される。第3表では分析値

を各項の上段に、鉄対比は下段に記載してある。

3-1 試料鉄器の地金の組成

化学組成を鉄器の種類別に検討するに先立って、20点の鉄器の地金が全体としてどのようにとらえられるか考察してみたい。

清永欣吾氏の奈良県下で出土した鉄器^{註1}の分析は、106点という試料数の多いこと、古墳時代の前期から後期までを含むこと、そして奈良県が古代の先進地域であったという点で、極めて貴重なデータである。このデータからTi, P, Cuの鉄対比を求め、鉄対比の一定の幅ごとにその中に入る試料個数を調べて、ヒストグラムを描いたのが、第176図の白色部分である。その上に今回



ヒストグラムの灰色部分が今回データ、白色部分は奈良県下の前～後期古墳出土土鉄器の分析データ。

第176図 試料鉄器中の化学成分比の頻度分布

の20点の鉄対比のヒストグラム(灰色部分)を足し合わせて分布の形を比較してみると、Ti/Feは0.1以上が一例で奈良県の分布を変えていないが、P/Feは0.1以上が5例、Cu/Feは0.1以上が6例となっており、これら2成分は今回データでは高値側に片寄りのあることがわかる。すな

わち含銅、含りの矽鉄鉱を原料にして製造された地金の占める割合が高い。

古墳時代の鉄器は、今日の分析技術水準と金属学的知見にもとづけば、素材の地金は砂鉄からつくられたものとはいえない(第176図のTi/Feが0.1を越える7例については後述)。すべて鉱石製錬の地金である。わが国の鉄鉱石製錬は6世紀後半に滋賀県と広島県で開始された證據が提示されている。しかし小栗地内遺跡から出土した鉄器のうち、20点中の6点までが含銅の矽鉄鉱を原料にした地金を素材にしていることが明白である。含銅の矽鉄鉱山はわが国では近世に到るまで稼働されていないので、これら6点の地金は大陸もしくは半島における生産であり、また残る13点も同様とみなしてよいであろう。6世紀末の関東北部の古墳に埋納された鉄器は、素材もしくは製品の形で大陸や半島から輸入され、おそらく畿内で加工されるか、その地を經由して東国の北部まで運ばれたものと思われる。

3-2 各種鉄器の材質

直刀 Cu含有量の多いものが二振りあり、№2で鉄対比が0.235, №19で0.192となっている。このような例が直刀でとくに多いとはいえないが、鉄質がよく残っている比較的健全な鉄器では30数例中の約3分の1はCu分が高い。これは埋納条件がゆるやかな腐食環境であれば、鉄器表面の黒錆層にCu分が濃縮して密な保護膜を形成するからである。稲荷山古墳出土鉄剣がそのよい例である。なおTiの鉄対比は0.05以下できわめて低いが、周囲の土砂(それは砂鉄粒子を含むのが通例である)を固着している可能性のある赤錆(FeO・OH)を取り除いて、黒錆(Fe₃O₄)の部分だけを分析試料にした結果と考えられる。

鐔 初めての分析例になるが、Cu, Pともに低い。おそらく鍛造、造形しやすい低炭素鋼であったと思われる。残念ながら顕微鏡試料を採取するだけの量がなかった。

刀子 Cuの鉄対比は0.109, Pは1.53である。P含有量がきわめて高い。清水欣吾氏のデータではPの鉄対比が0.5を越えるものが、直刀で4例、剣と鐔に各1例ある。この中で直刀、鐔のそれぞれ1例が1%以上である。鐔の断面のマクロ組織を写真1aに示した。中心部の残存メタルのミクロ組織が写真2aで、細長く伸びた珪酸塩質介在物が数多く見られる。写真2bは黒錆層の組織で、灰色の粒状部分がもとの鋼のフェライト相に相当すると考えれば、フェライト結晶粒は20μ(0.02mm)前後で、800℃付近から放冷されたものと推定される。下方のやや暗い灰色の珪酸塩は風化が激しく、鉄錆が侵入して小片に分断されているが、これはP分の多い介在物ではないかと思われる。

鉄鐔 1号墳の№67は、Cuの鉄対比が0.694で異常に高い。清水欣吾氏のデータでは、新沢千塚の鐔に0.52という値がある。Cu含有量の多い鋼地金は、鍛造温度が高い(>1,000℃)と割れを生ずる。低い温度での鍛造がこれらの素材の加工を可能にしたのであろう。

鐔 P分が高く、鉄対比で0.286である。清水氏のデータには2例あって、抜すいて第4表

第4表 関連鉄器の化学組成例

No	種類	出土地	化 学 成 分 (%)					
			T, Fe	Cu	Mn	P	Ti	Si
1	鉾	奈良県円照寺基山, 古墳中期	51.38	0.02 0.04	< 0.01	0.013 0.025	0.048 0.093	4.50 8.76
			2	鉾	奈良県新沢千塚, 古墳中期	59.22	0.01 0.02	< 0.01
3	鉸具	奈良県三里, 古墳後期				58.27	< 0.01	0.01
			4	鎌	奈良県慈恩寺, 古墳後期	58.34	0.04 0.07	0.01 0.02
5	直刀	横浜市奈良町熊ヶ谷横穴墓群 7世紀代				62.0	0.13 0.21	< 0.02
			6	刀子	横浜市奈良町熊ヶ谷横穴墓群 7世紀代	55.9	0.19 0.34	< 0.02
7	刀子	横浜市奈良町熊ヶ谷横穴墓群 7世紀代				56.7	0.13 0.23	< 0.02
			8	鉄鏝	横浜市奈良町熊ヶ谷横穴墓群 7世紀代	62.6	0.016 0.026	< 0.02
9	鉄鏝	横浜市奈良町熊ヶ谷横穴墓群 7世紀代				61.7	0.055 0.089	< 0.02

(上欄は分析値, 下欄は鉄対比)

※1~4は清永欣吾氏, 5~9は「奈良地区遺跡群発掘調査報告書」II(1984), 住宅・都市整備公団, 奈良地区遺跡調査団。

のNo.1,2に示す。Cu, Pともに低い。No.1の鉾でTiが0.093と高目であるが, この原因は土砂の固着によるものと考えられる。Siの鉄対比8.76は, 粘土と砂の量でおそらく20%に近い。砂鉄粒子の混入があってもよい量である。第176図のTiが高目の例は, すべて同様の原因によるものと思われる。

■ I号墳とIII号墳の2つから試料を採取した。Cu, Mn, Pともに低い地金が使用されている。

I号墳のNo.30のマクロ組織は写真1bに, ミクロ組織は写真3に示した。中心部にメタルが残っているので, その部分を高倍率で観察すると, 写真3aで珪酸塩質介在物, 写真3bでウスタイト主体の介在物が同定される。近接して2種の介在物があるので, 炭素量が0.数%と0.1%前後の鋼の, 複合組織になっている可能性がある。メタル近傍の黒錆層の組織が写真3cで, 網目状にセメントタイトが残留しているのが見られる。このセメントタイトはもとの鋼のパーライト相を構成していたもので, フェライトが優先的にマグネタイト化し, 錆の進みにくいセメントタイトが残ったと考えられている。セメントタイトの網目状組織からもとの鋼の結晶組織を推定すると, この部分では推定炭素量が0.2~0.3%で, フェライト結晶程度は10~20μとやや小さい。800℃付近からかなり早い速度で冷却された組織といえる。櫛の機能を考えて, フェライト結晶の細粒化による鋼の硬化を狙ったことも考えられる。

IV号墳のNo 53でTiの鉄対比が0.191と高値を示す原因は、土砂の固着量が多いためと思われる。第179図と写真1Cを参照してわかるように、採取した錆片は“ふくれ上がった”もので、赤錆であった。このように錆試料では、Tiは汚染されて増加する成分なので注意をしなければならない。比較のために鉋具の分析例を第4表のNo 3に示した。化学組成はほとんど同一である。

鐵鏟 Cuの鉄対比0.179と高いのが特徴的である。

鉄斧 Pが高く、鉄対比で0.395である。清永氏のデータにある鉄斧の分析例では、0.081とやや高目である。なお本鉄斧は袋式の鍛造品であるが、清永氏の例には記載がない。

鋤先 鉄製農具の分析例としては、清永氏の鎌があるだけで、化学分析と金属組織の解析を行なったのは、これが初めてである。

化学組成で特徴的なのはCuとPの高いことである(鉄対比でそれぞれ0.310、0.238)。くり返すようであるが、原料鉋石は含銅、含りん硬鉄鉱で、地金は大陸の生産である。Tiは0.023で砂鉄の可能性はない。マクロ組織は写真1dに、残存メタルのミクロ組織は写真4に示した。メタル中の介在物はウスタイト主体である。鋼精錬時に脱炭材として砂鉄が使用されたのであれば、介在物はウルボスピネル主体でなければならない。介在物組成の面からも、砂鉄製錬の可能性は否定される。

比較材としての古墳時代後期の鉄鎌の化学組成を見よう。第4表のNo 4が清永氏のデータで、Tiの分析値からいって砂鉄の使用はないといっていよい。Cuの鉄対比は0.07とやや高めである。含銅硬鉄鉱が原料の可能性もある。

6世紀代の鉄鎌と鉄製鋤先は、畿内と東国の二例ともに大陸で生産の地金を使用している可能性が強い。調査例が少ないとはいえ、これは重要な問題を提起している。古墳出土の鉄器は武器だけでなく農具のはてまでも、鋼素材を大陸や半島からの輸入に負っていたのかも知れない。今後調査例を増やすと同時に、住居跡から発掘される農具の解析も行なって、大量消耗品である鉄製農具の原材料がどの時期から国内の生産に変わるのか、検討することが必要であろう。

鉄片・「U」字状鉄製品 第180図の実測図を見てわかるように、両者ともに薄刃を有する小型鉄器である。用途は不明であるが、実用品だとすれば耐久品ではなく、消耗の早いものであったろう。化学組成の面からは砂鉄ではなく、鉋石が原料である。上述の鋤先と合わせて考えると、埋納品とはいえ消耗性の鉄製品に輸入の地金を使用していた可能性が強く浮かび出てくる。

鉄環 Pの鉄対比0.378は、地金の原料鉋石が含りん硬鉄鉱であることを表わしている。マクロ組織を写真1eに、ミクロ組織を写真5に示した。介在物はウスタイト主体であり、また錆層に残るもとの鋼組織から考えて、炭素量は0.1%弱と推定される。特徴的なのはもとのフェライト組織をよく残していることで、とくに写真5bに見られる葉片状の組織は初析フェライトの形状を示している。もしこれが正しければ、平均炭素量が0.1%弱の鋼製品がオーステナイト域か

ら徐冷されたことになる。温度としては900℃よりかなり高い。おそらく1,000℃付近からの冷却であろう。このような熱処理を経た低炭素鋼の製品はきわめて柔らかく、鉄環の使用機能に適合したに違いない。

3-3 7世紀代の横穴墓埋納鉄器との関連

関東では主として7世紀代に造営される終末期古墳の横穴墓は家族墓としての性格から墳墓の規模も小さく、副葬品の種類と量も少なくなるが、鉄製品の埋納は引き続き行なわれている。したがってその鉄製品の材質調査を通じて、7世紀代の鋼生産に変化が起こったかどうかを知ることができよう。

最近、横浜市奈良町熊ヶ谷の横穴墓群から出土した鉄器の金属学的調査結果が発表された^{註4}。それを第4表のNo 5からNo 9に示す。直刀1、刀子と鉄鍔各2の計5点である。直刀と刀子の3点が、Cuの鉄対比0.21、0.34、0.23と高い。鉄鍔のNo 9も0.089と高目である。Pは刀子の2点と鉄鍔の1点が高い。全体として含銅、含りの砒鉄鍔を原料にしたものが多く、おそらく5点とも大陸生産の鋼地金と考えられる。多くの分析例をもって論ずる必要があるが、少なくとも熊ヶ谷横穴墓群の鉄器は、協和町の小栗地内古墳のそれと共通の生産地と流通の経路を予想することができそうである。

わが国の鉄生産は6世紀後半に開始されたことが、製鉄炉跡の調査で判明している(例えば滋賀県野路小野山、同源内峠で鉾石製鉄、岡山県人成池南遺跡で砂鉄製鉄)。関東地方では千葉県のノノ坪遺跡の砂鉄製鉄炉跡が8世紀初頭と報告されている。また常陸風土記にある慶雲元年(704年)の記事によっても鉄生産が裏付けられる。一方7世紀代の墳墓から出土した鉄器の調査で、砂鉄を原料にしたことが確かな例はまだ報告されていない。関東では8世紀初頭に鉄生産が開始されたと思われ、間違いないように思われる。

4. ま と め

小栗地内古墳群の6世紀末～7世紀初頭の造営と推定されるⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ号墳から出土した鉄器のうち、鈔、轡、鍔、鐙先、鉄環など、従来調査された例のないものを含めて、合計20点の鉄器の鍔片を分析し、一部については組織の解析も行った。

調査した20点の鉄器に使用されている地金はすべて鉾石が原料で、中でも6点はほぼ確実に含銅砒鉄鍔といえる。したがって地金の生産地は列島外である可能性が強い。6世紀後半には西日本で鉾石を原料にした鉄生産が開始されたといわれているが、本古墳群の埋納鉄器の地金は鉾石製品といえそうである。

鈔、轡、鍔の材質は他の武器とほぼ同じであるが、轡は鍛造温度から急冷して、フェライト結晶粒の細粒化による硬化を計った形跡がある。それとは反対に、鉄環は高い温度からの徐冷で、

機能を考慮した処理を行なっているようである。

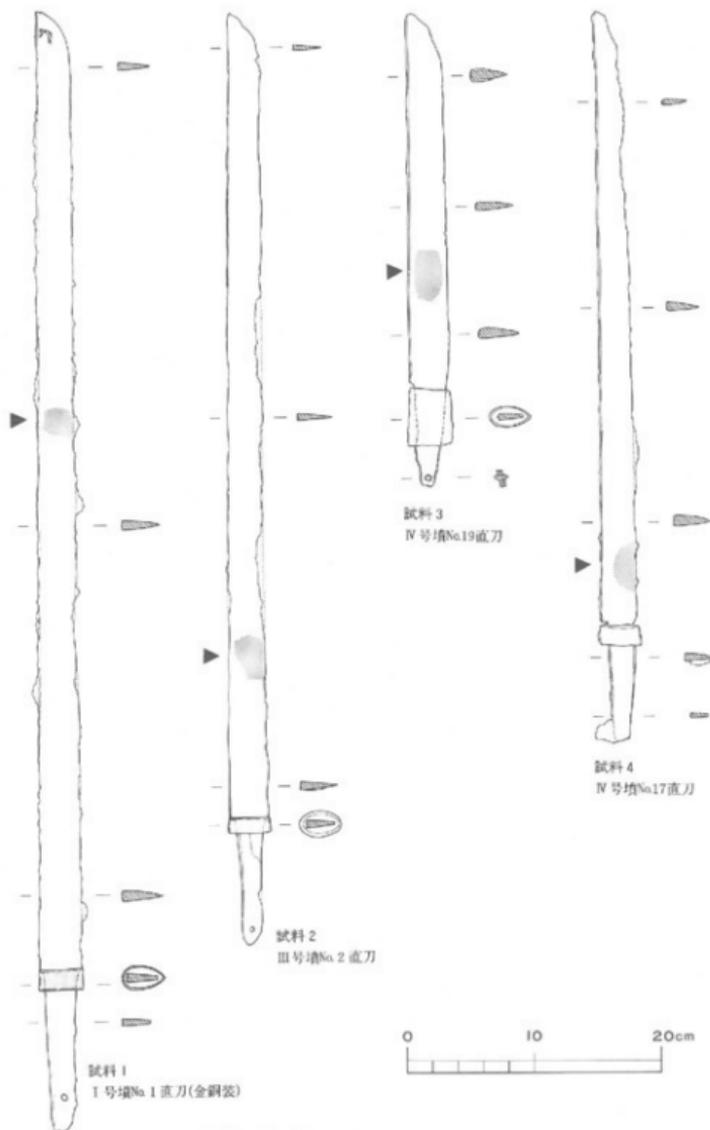
鋤先は、鋤片の採取個所に限って言えば炭素量の低い軟鋼で、もちろん鉱石を原料にした地金
が使用されている。既報の奈良県下の後期古墳出土の鉄鎌も同様の地金であり、今後類例の報告
が増えれば、鉄製農具の国内生産と使用の実態も次第に明らかになるのではないかと思われる。

註1 清永欣吾 「奈良県下より出土した鉄刀剣の化学分析」『橿原考古学研究所紀要』『考古学論叢』19
1984

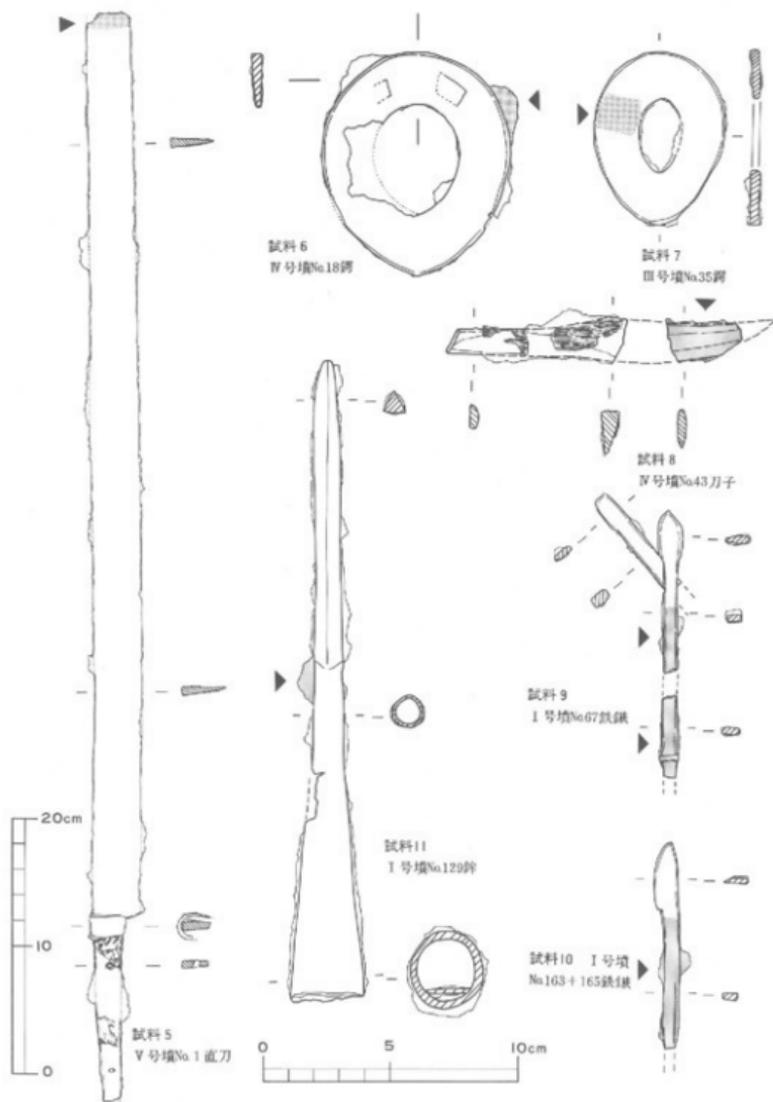
註2 佐々木稔 「古代日本における製鉄の起源と発展」『季刊考古学』8 1984.7 雄山閣出版

註3 佐々木稔、村田明美 「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」 註2に同じ

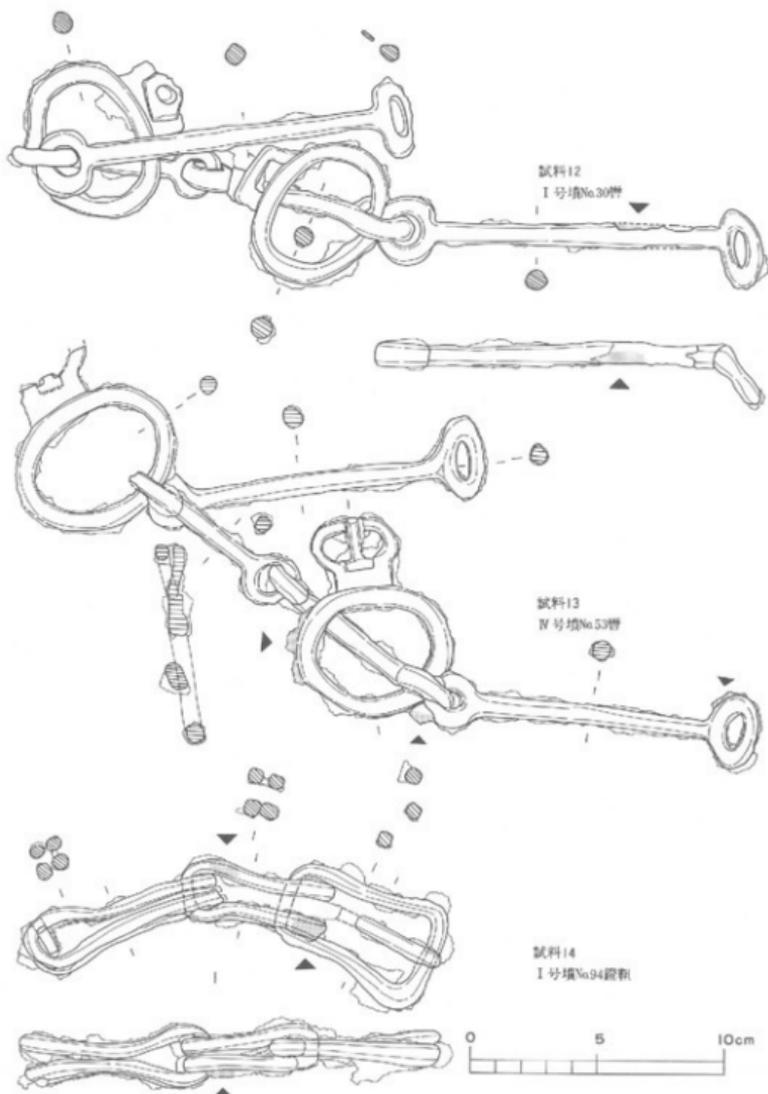
註4 神奈川県横浜市緑区奈良町 『奈良地区遺跡群発掘調査報告書』Ⅱ P.133 住宅・都市整備公団
奈良地区調査団 1984.3



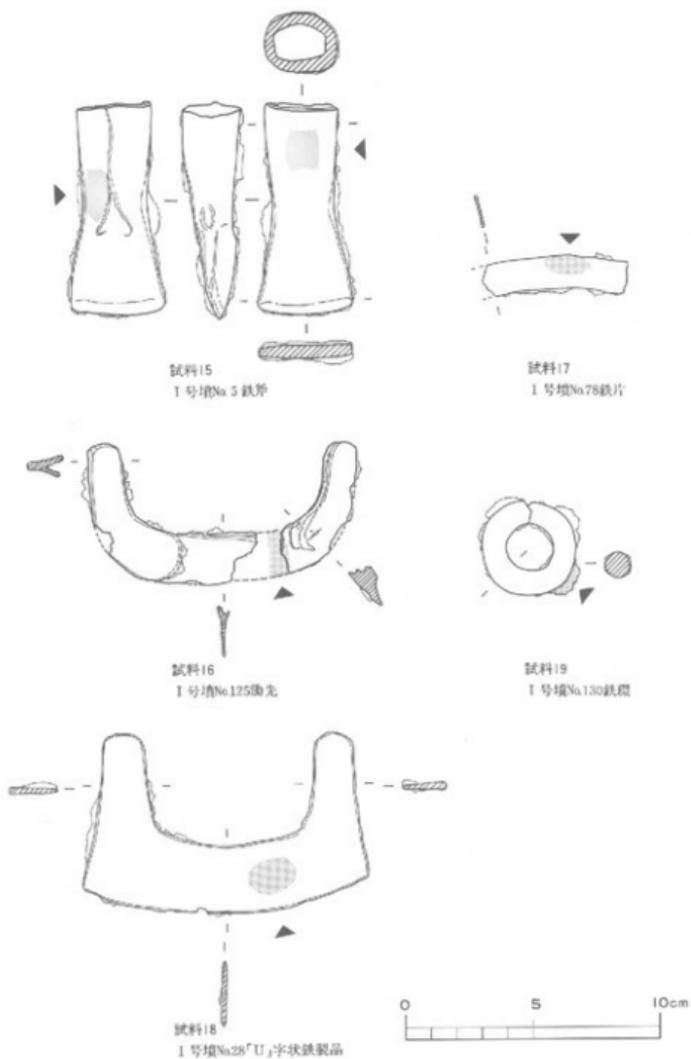
第177図 試料鉄器の実測図と鱗片採取箇所(その1)



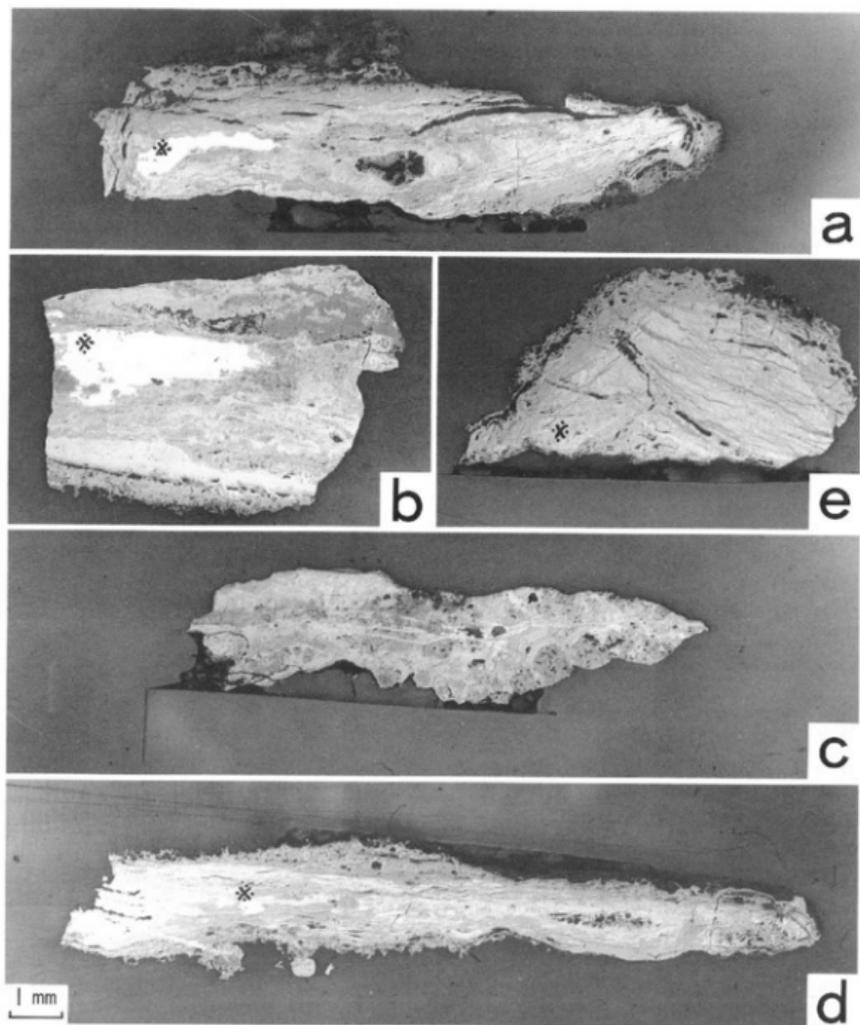
第178図 試料鉄器の実測図と錆片採取箇所(その2)



第179図 試料鉄器の実測図と錆片採取箇所(その3)

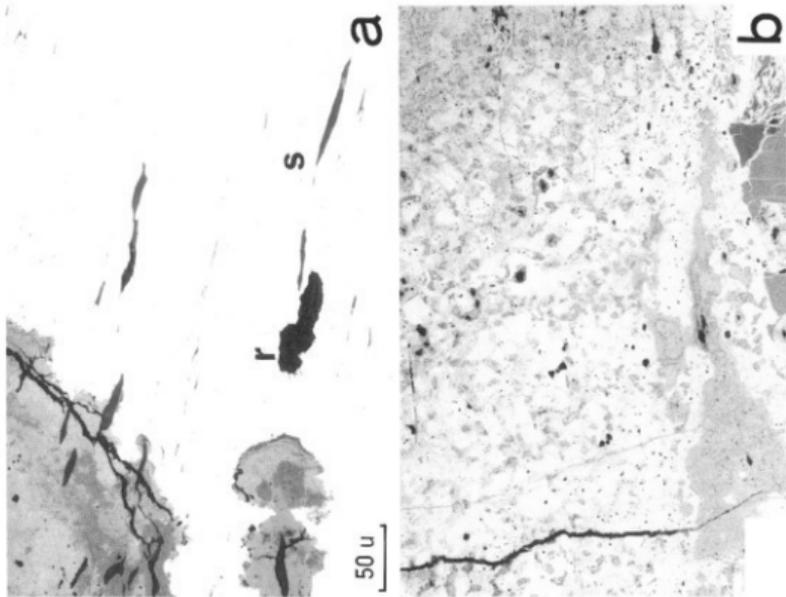


第180図 試料鉄器の実測図と錆片採取箇所(その4)



a) 刀子, b) 帯 (I号境), c) 帯 (IV号境), d) 髓心, e) 髓心。
 星印はミクロ組織観察箇所。

写真1 鱗片断面のマクロ組織



S) 珪酸塩系存在物, r) 存在物の周囲から進んだ筋。

写真2 刀子鑄片のミクロ組織

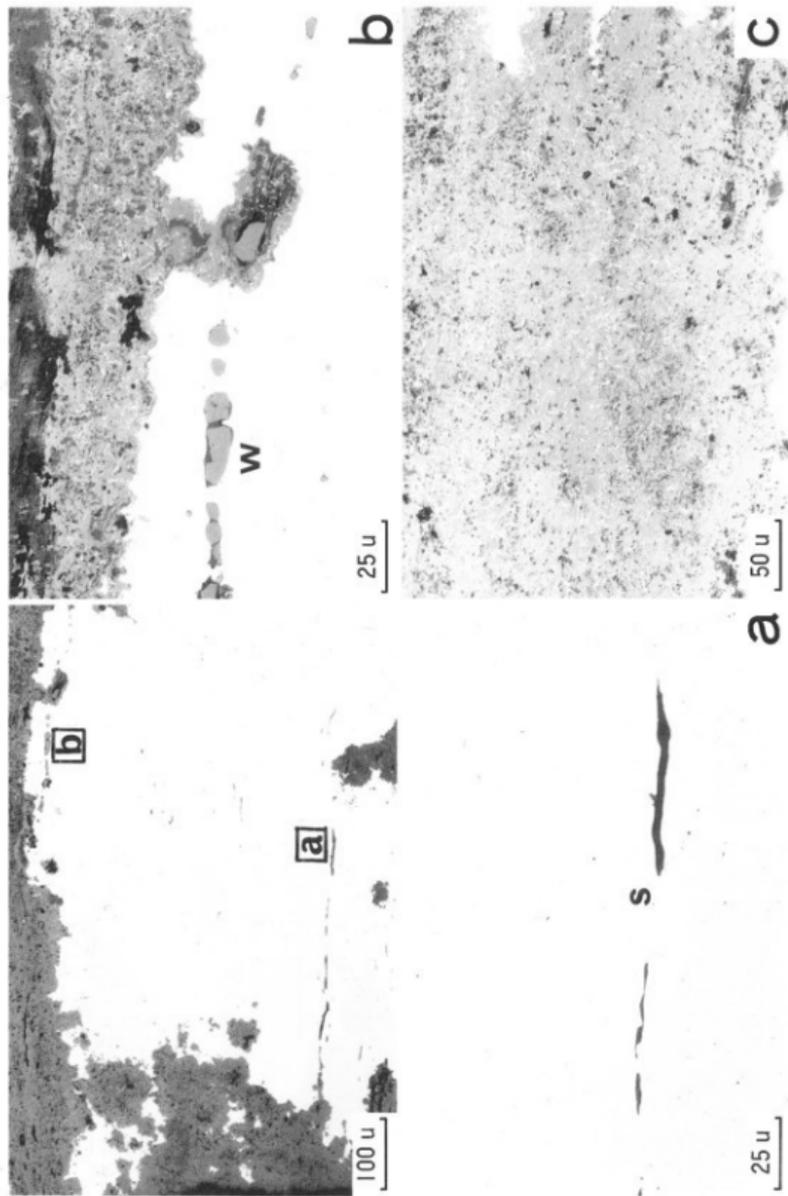
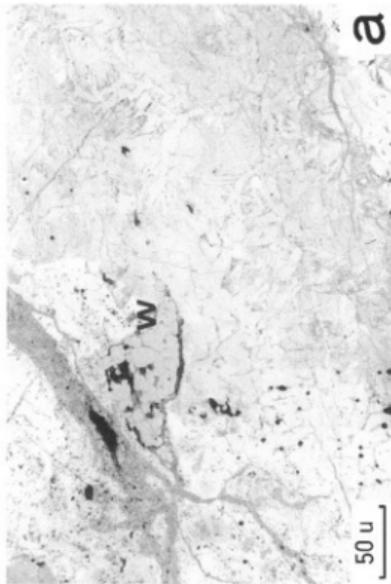


図1, 図2の高分率の組織がそれぞれ写真a), b), S)は目録塩基存在物, W)はウスタイト主体存在物。写真C)の前層中には網目状のセメントイトが存在。



Wはウスタイト主体介在物。

写真4 鋤先錯片のマイクロ組織



Wはウスタイト主体介在物。錯片中の鋸状状組織はもとの鋸の初断フェライトの跡を示す。

写真5 鉄道錯片のマイクロ組織

圖 版



1 昭和44年撮影(アジア航測株式会社, 茨城県写真図50より)

縮尺約1:10,000



1 南西より



2 No 22・23 南東より



1 No 22 調査前(東より)



2 No 24 調査前(東より)



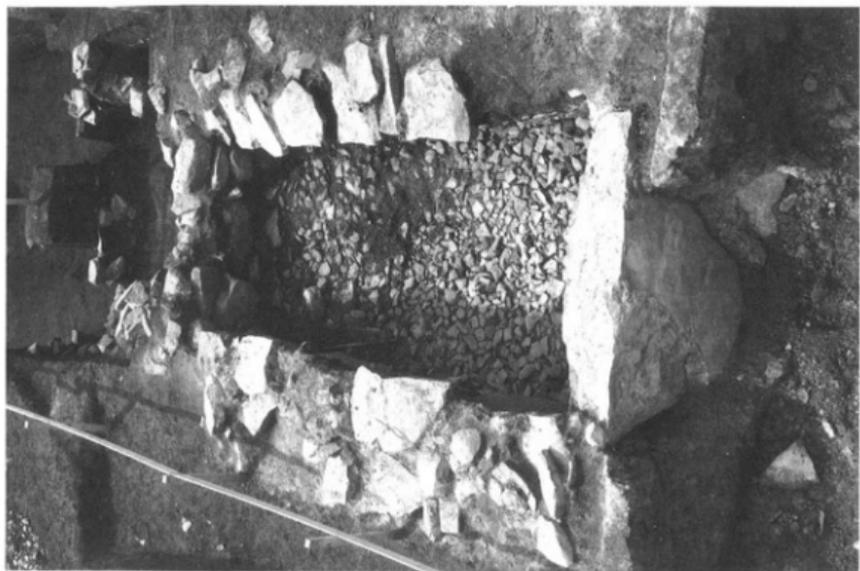
1 石室確認段階(北より)



2 石室奥壁裏込め状況(北より)



1 石室(南より)



2 石室(北より)



1 石室内遺物出土状況(入口付近)



2 石室内遺物出土状況(東壁付近)



1 石室内遺物出土状況(西壁~中央)



2 石室内遺物出土状況



1 見 返 り



2 石室内断ち割り状況



1 周溝(東側)



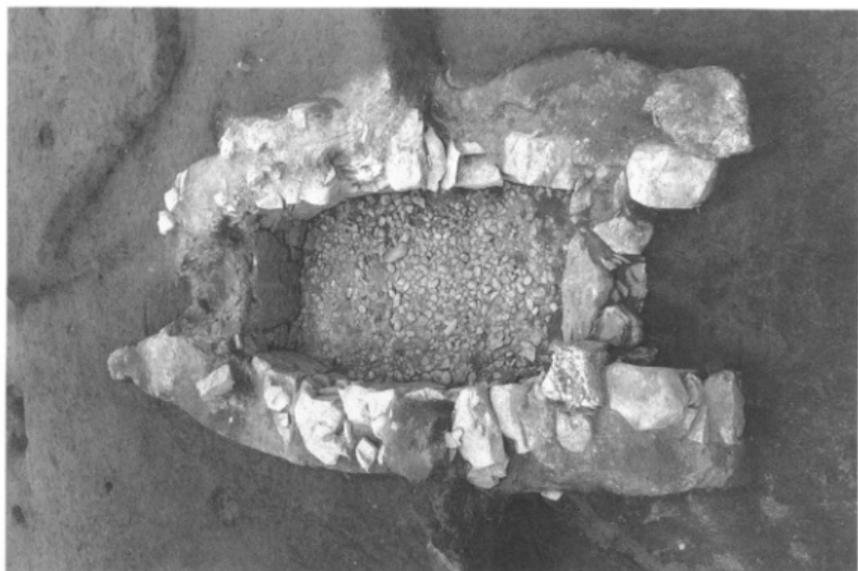
2 周溝土層狀況(西側)



1 Ⅱ号墳周溝とSⅠ-1(北より)



2 Ⅲ号墳石室確認設階(東より)



1 石室(南より)



2 石室(北より)



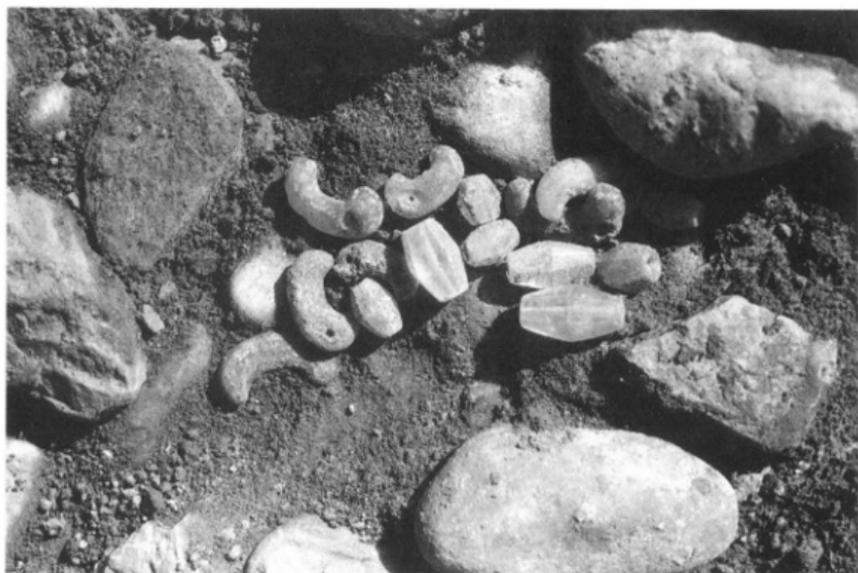
1 石室正面(南より)



2 見返り



1 石室閉塞状況と遺物出土状況



2 石室内遺物出土状況



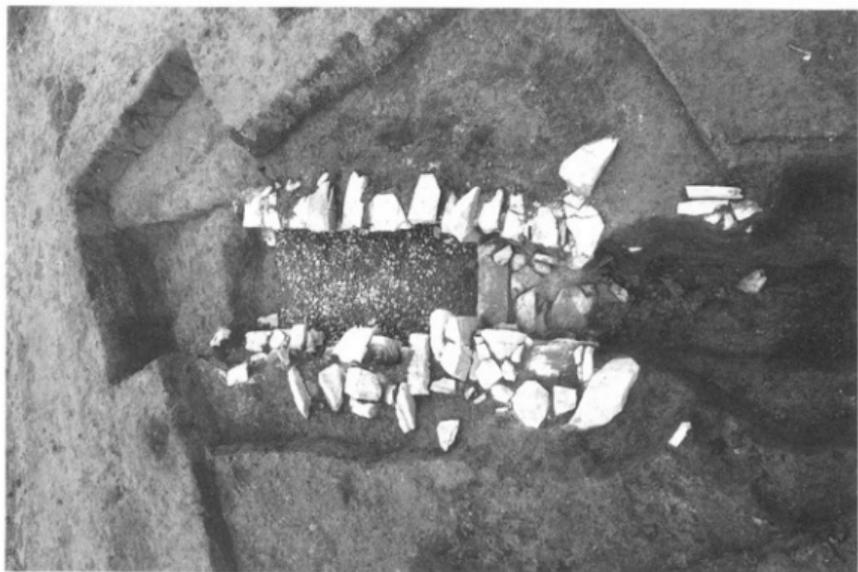
1 周溝(東側)



2 東側周溝内土壌(北より)



1 石室(北より)



2 石室(南より)



1 石室内遺物出土状況(東端部)



2 石室内遺物出土状況(中央付近)



1 石室前庭部(南より)



2 見 返 り



1 石室確認段階(北東より)



2 石室(南より)



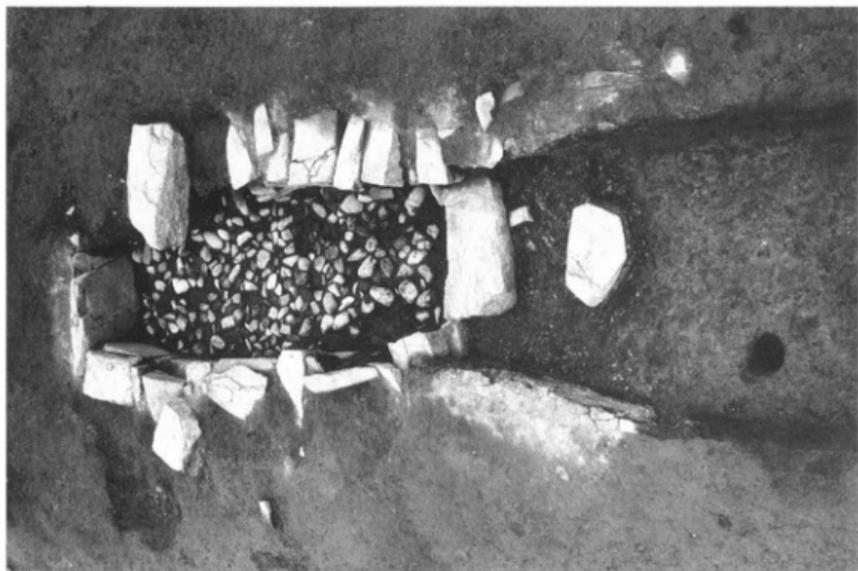
1 見 返 り



2 石室内遺物出土状況(西縦断)



1 石室確認段階(南より)



2 石室(南より)



1 石室床除去後(西より)



2 見返り



1 VI号石棺(南より)



2 VIII号墳石室(東壁と残存御床)



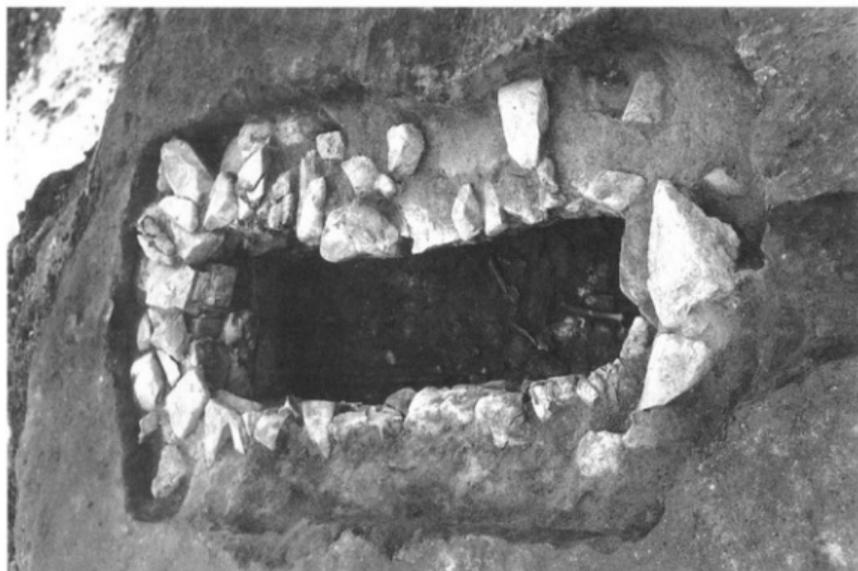
1 石室内遺物出土状況



2 石室内遺物出土状況



1 天井石検出状況(南西より)



2 天井石除去後(南西より)



1 石室内遺物出土状況(北半部)



2 石室内人骨出土状況(南半部)



1 S I - 1 と II 号墳周溝(北より)



2 S I - 2(北より)



1 S I - 4 (南より)



2 S I - 4 罐と土器出土状況



1 五輪塔・礎出土状況



2 集石下層石組遺構



1 藏骨器出土狀況



2 藏骨器出土狀況



1 北東より



2 中央施設



1 北側周溝(西より)



2 南側周溝(東より)



1 S D - 1 (東より)



2 S D - 1 土層状況



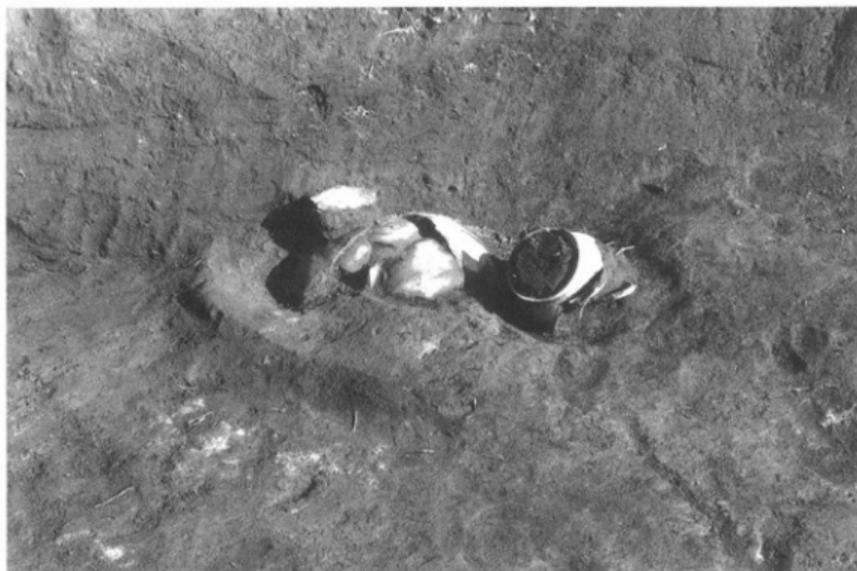
1 S I - 3 (北より)



2 S I - 2 (西より)



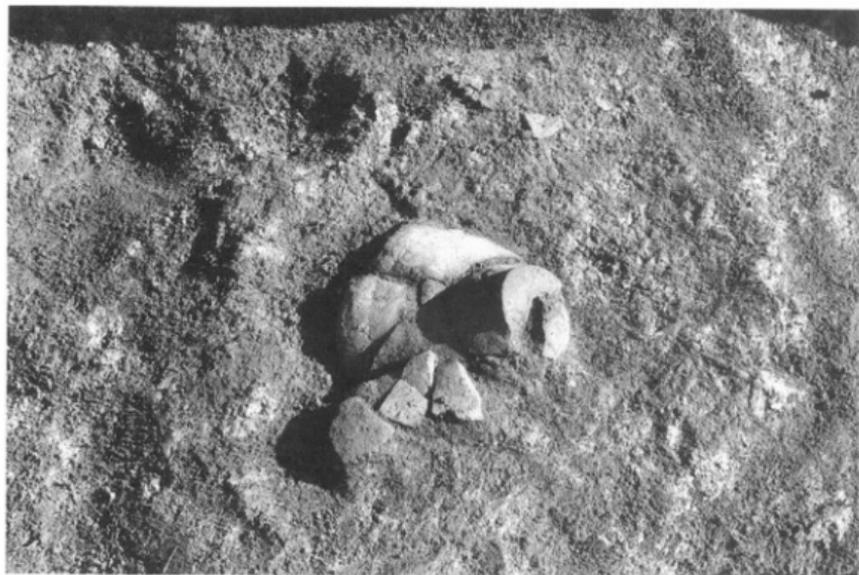
1 S I - 4・5(北より)



2 S I - 4 炉跡



1 土器出土状況



2 土器出土状況



1 No. 12 (北東より)



2 No. 13 (北より)



1 No. 14 (南より)



2 No. 14 南北トレンチ状況(南より)



1 No. 15 (南より)



2 No. 15 南北トレンチ状況(南より)



1 No 18 (供養塚南より)



2 No 23 第1 南北トレンチ状況(北より)



1 No 23 第 1 東西トレンチ状況(西より)



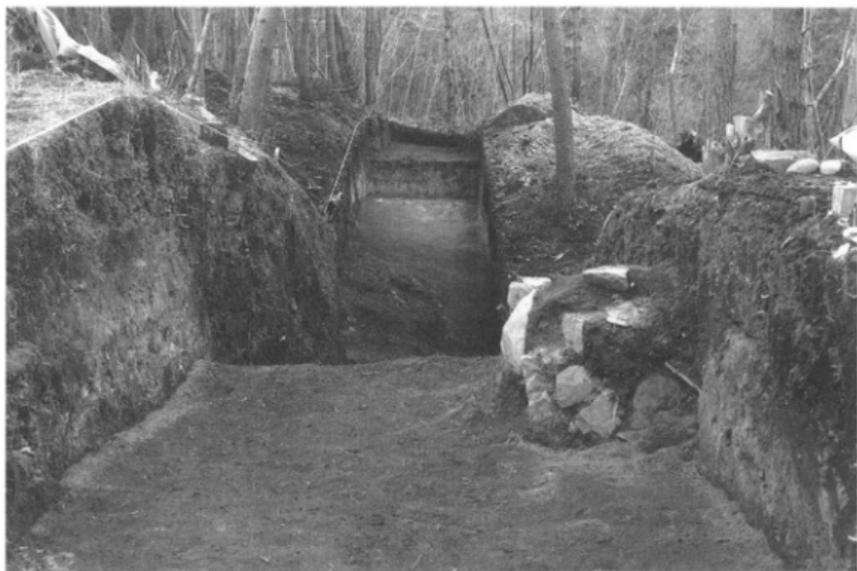
2 No 23 第 2 南北トレンチ状況(北より)



1 No. 20 (北東より)



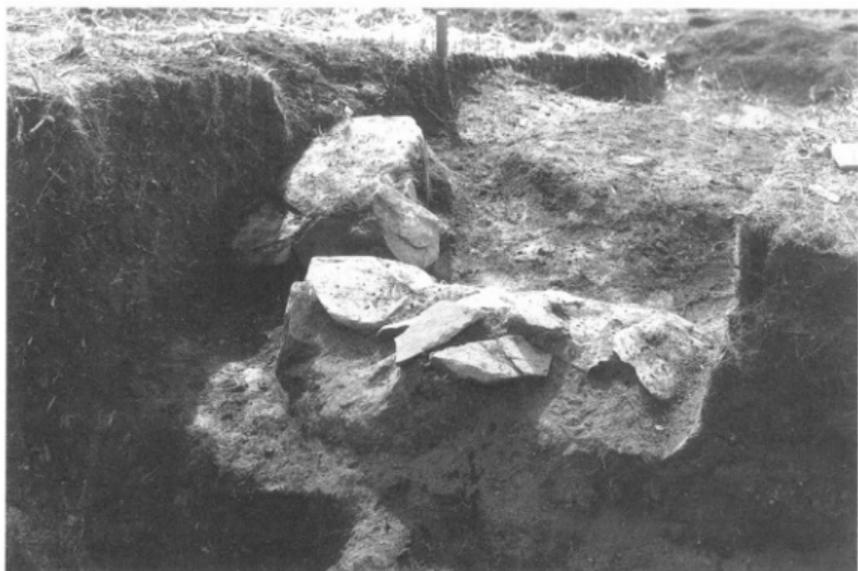
2 No. 20 東トレンチ土層状況(東より)



1 No 20 北トレンチ内 I 号石棺(南より)



2 No 20 北トレンチ内 I 号石棺(西より)



1 No 20 西トレンチ内Ⅱ・Ⅲ号石棺(北東より)



2 No 20 東トレンチ内墳頂直下出土土器(北東より)



1 No 21 (南東より)



2 No 21 北トレンチ内土器出土状況(南より)



1 集石状況(北より)



2 五輪塔出土状況・下層遺構(東より)



1 No. 1 (西より)



2 No. 2 (南西より)



1 No. 7 (北より)



2 No. 8 (西より)



1 No. 9 (南西より)



2 No. 10 (南西より)



1 No. 11 (西より)



2 No. 16 (東より)



1 No. 17 (南西より)



2 No. 25 (北東より)



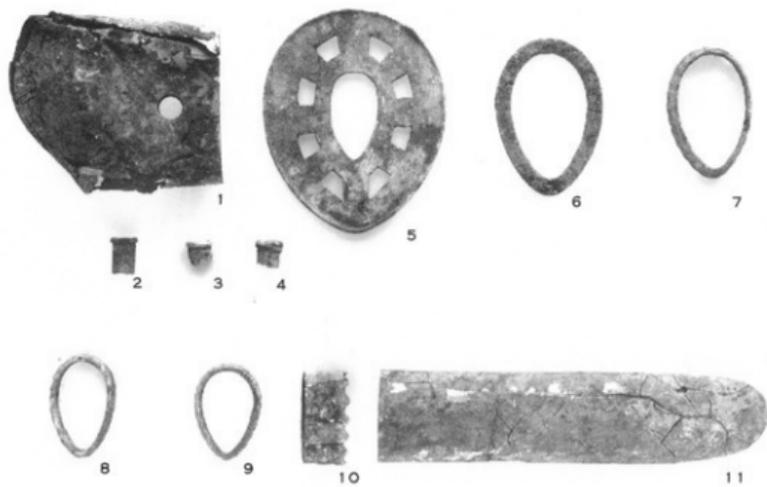
1 No. 24



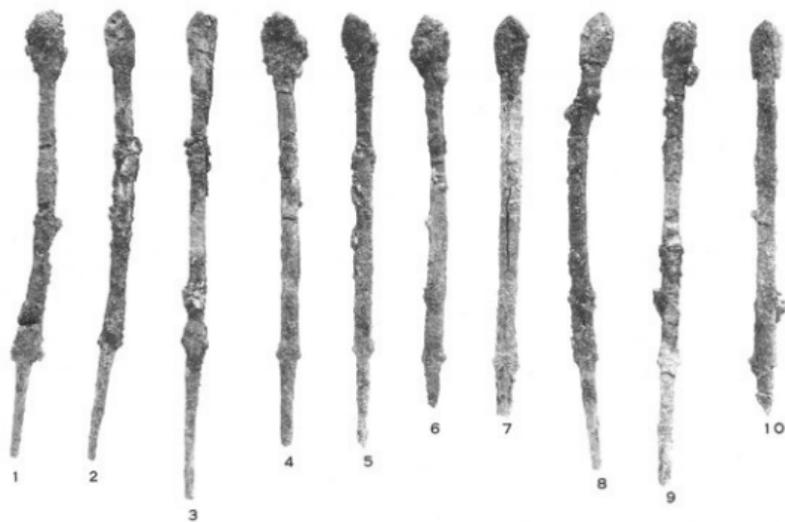
2 No. 22 S I - 5



1 1号墳石室内出土直刀



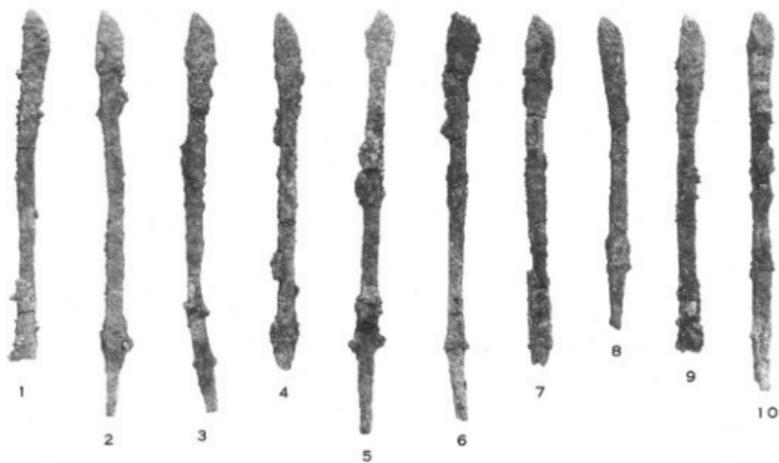
2 1号墳石室内出土刀装具



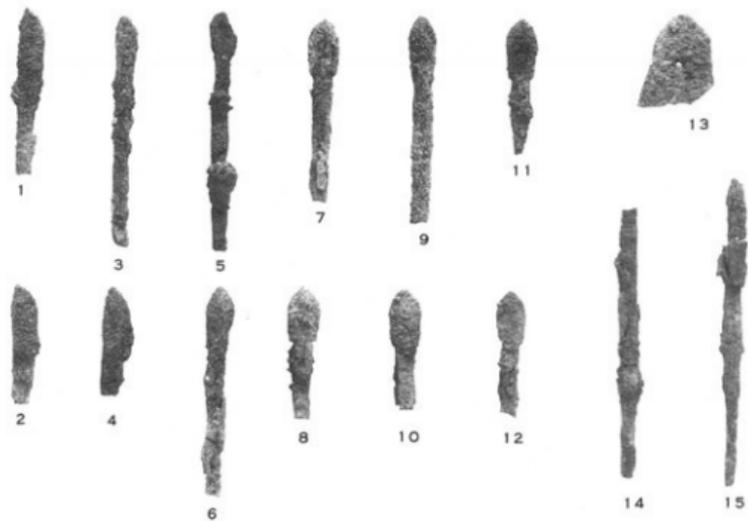
1 I号墳石室内出土鉄鏃(1)



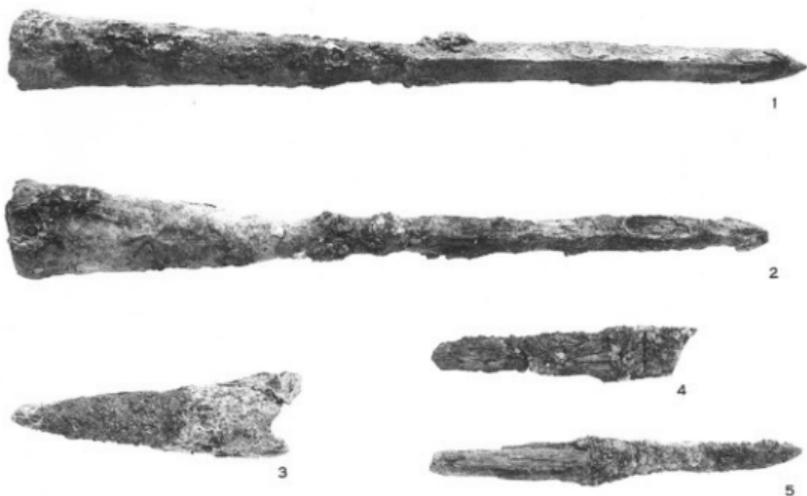
2 I号墳石室内出土鉄鏃(2)



1 1号墳石室内出土鉄鏃(3)



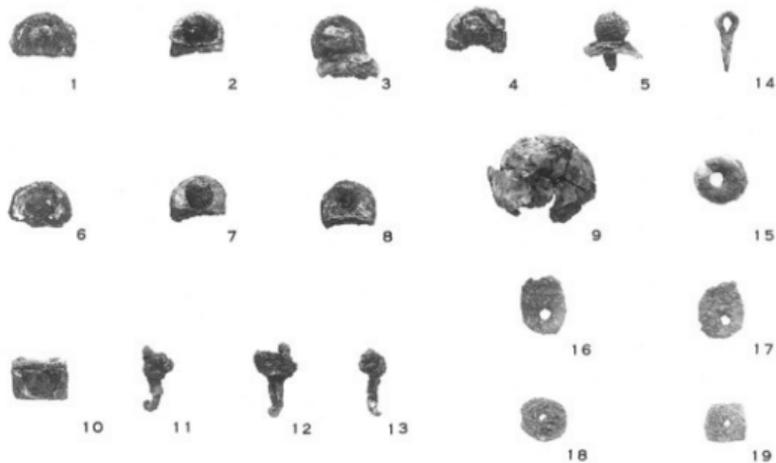
2 1号墳石室内出土鉄鏃(4)



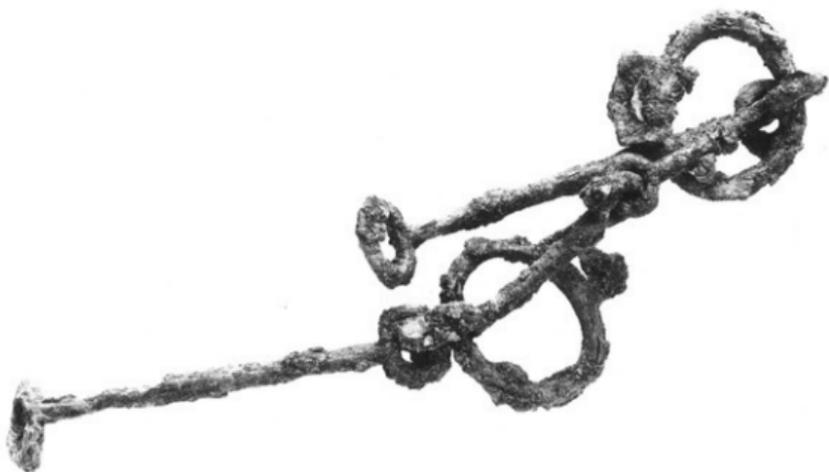
1 I号墳石室内出土鉄鏃・石突・刀子



2 I号墳石室内出土鉄斧・釘かかし・刀装具・「U」字状鉄製品・毛抜き状鉄製品



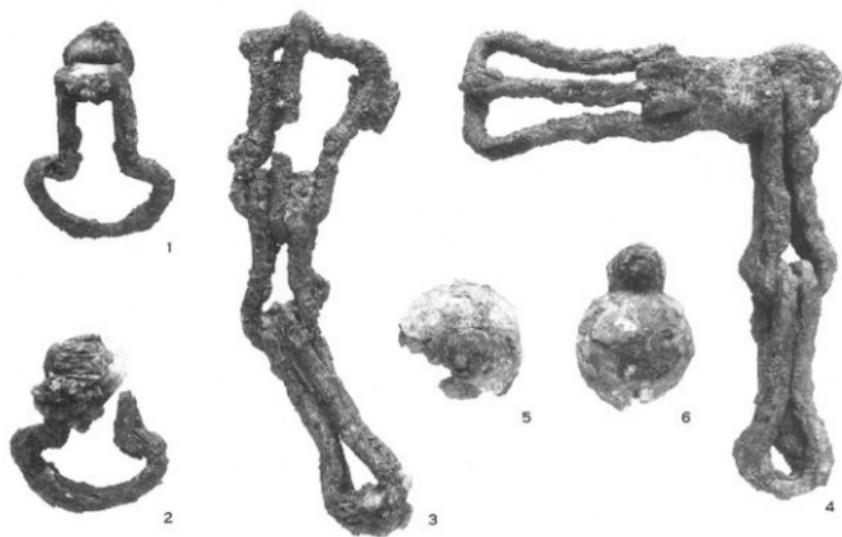
1 I号墳石室内出土馬具・鉄製品



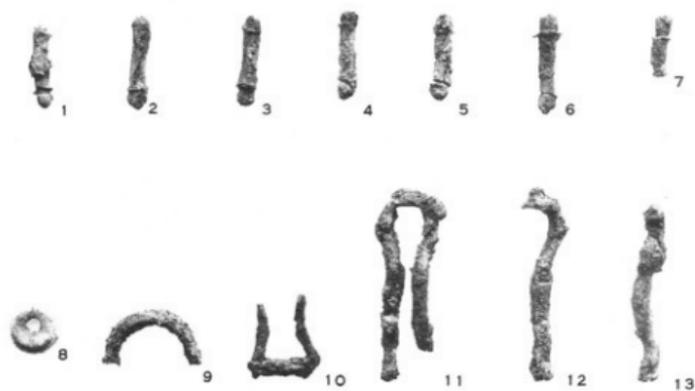
2 I号墳石室内出土馬具(轡)



1 I号墳石室内出土馬具・鉄製鑄先



2 I号墳石室内出土馬具



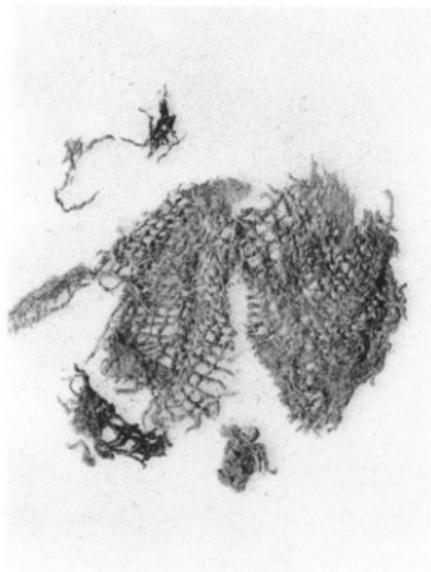
1 I号墳石室内出土両頭金具・馬具



2 I号墳石室内出土毛抜き状鉄製品・馬具(●)部分



1 I号墳石室内出土主頭柄頭(木質部分)



2 I号墳石室内出土主頭柄頭(布部分)

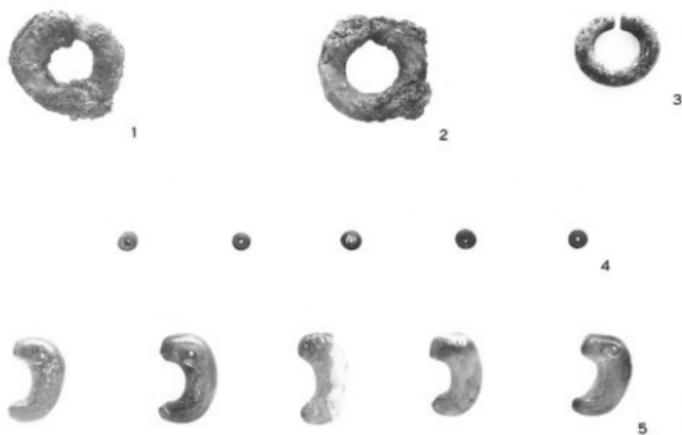




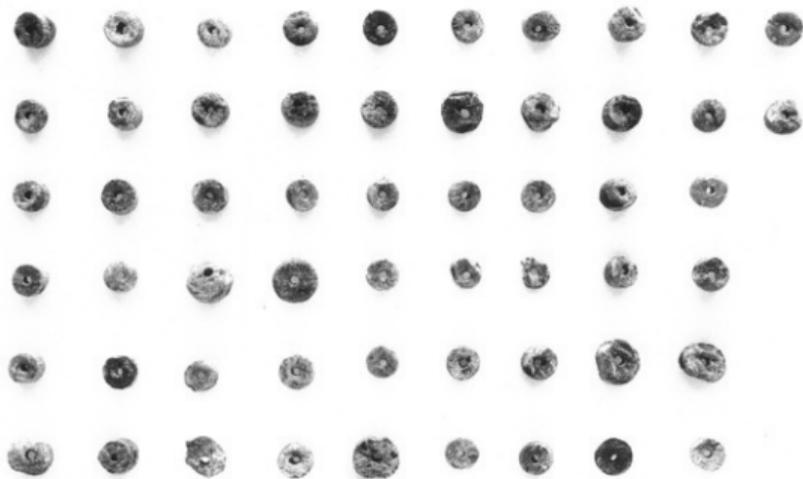
1 I号墳石室内出土刀子(柄部分)



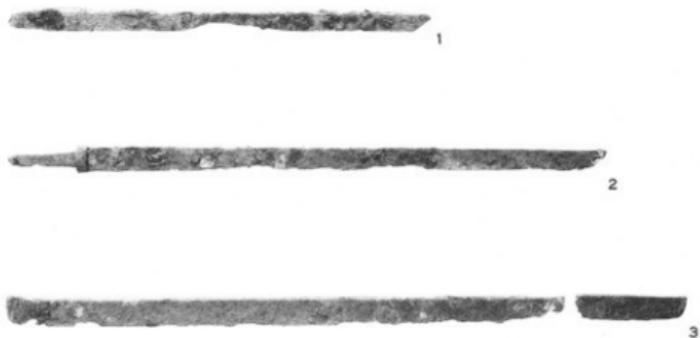
2 I号墳石室内出土鉄鍔・両頭金具(部分)



1 I号墳石室内出土装身具(耳環・小玉・勾玉)



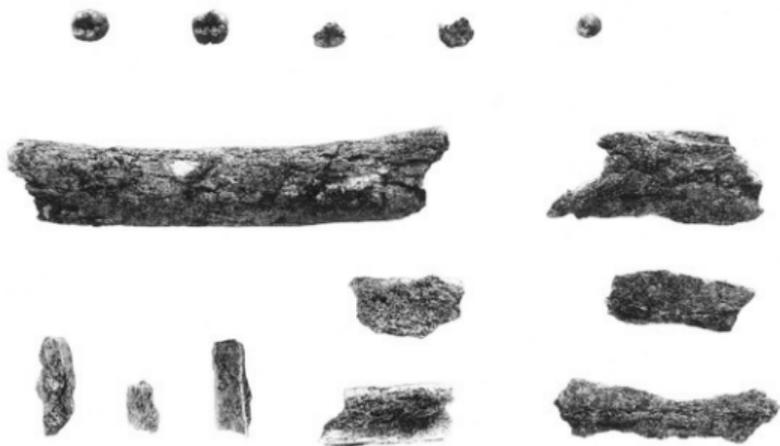
2 I号墳石室内出土装身具(白玉)



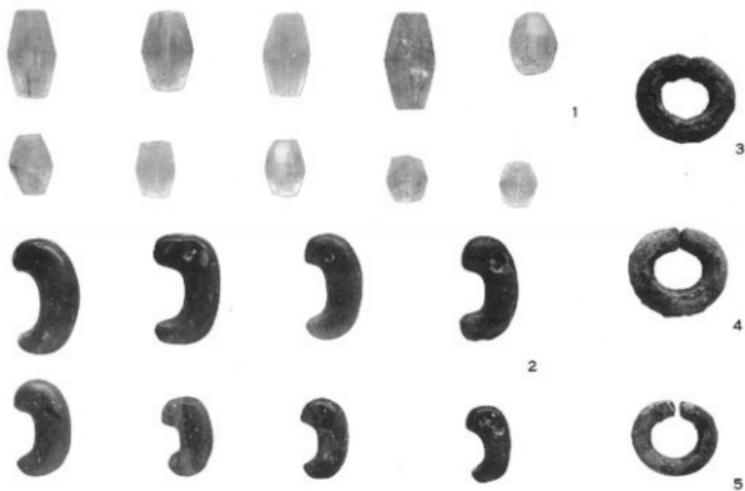
1 Ⅲ号墳石室内出土直刀



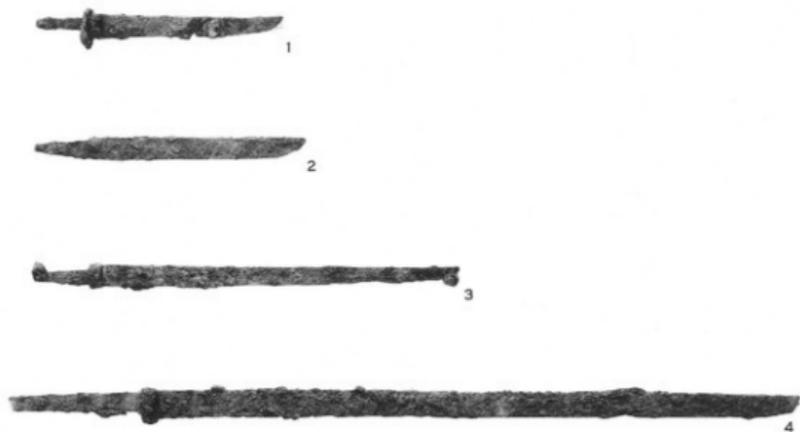
2 Ⅲ号墳石室内出土刀裝具・刀子・鉄鍔



1 Ⅲ号墳石室内出土人骨片・人歯



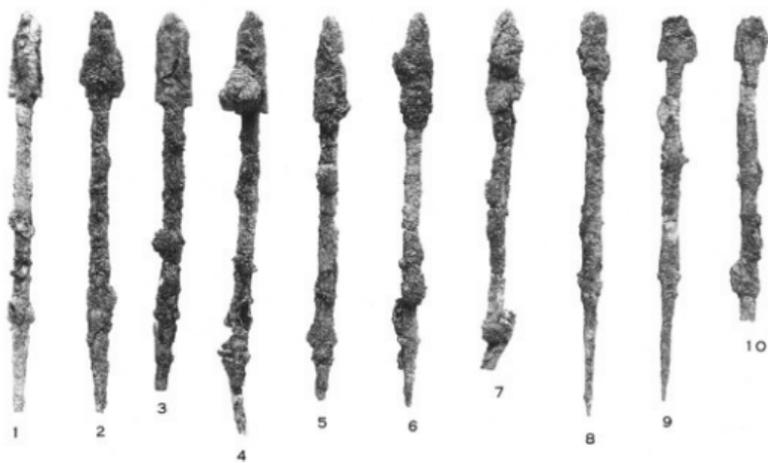
2 Ⅲ号墳石室内出土装身具(耳環・切子玉・勾玉)



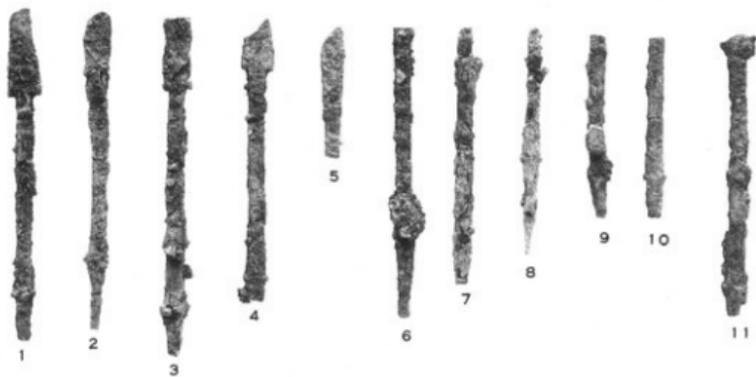
1 IV号墳石室内出土直刀



2 IV号墳石室内出土刀具·刀子



1 IV号墳石室内出土鉄鍔(1)



2 IV号墳石室内出土鉄鍔(2)



1 IV号墳石室内出土馬具(轡)



2 IV号墳石室内出土装身具(耳環・刺刺・並玉)



1 IV号墳石室内出土装身具(小玉)



1

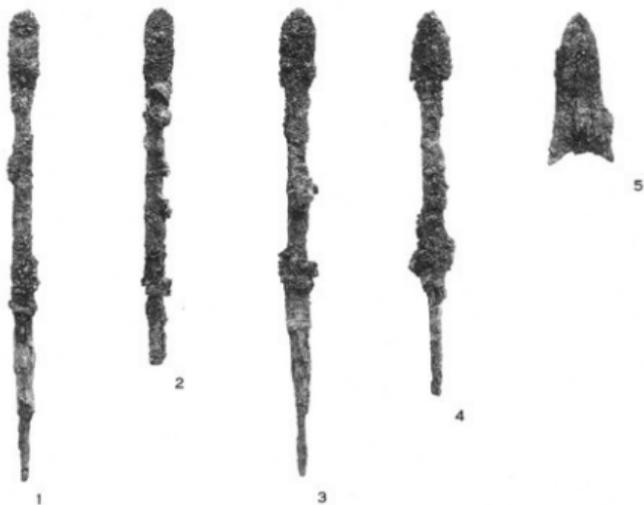


2

2 IV号墳石室内出土馬具(轡)部分



1 V号墳石室内出土直刀



2 V号墳石室内出土鉄鏃



1

1 V号墳石室内出土鉄鏃(部分)



2



3

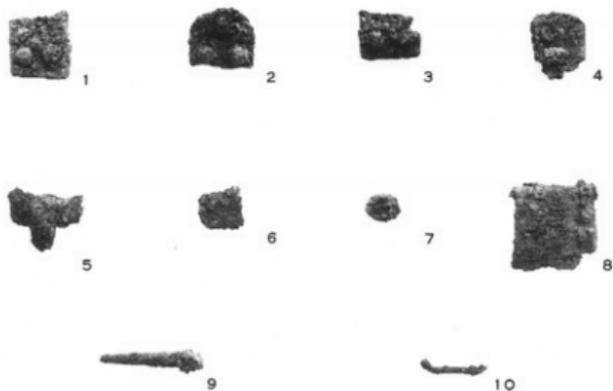
2 V号墳石室内出土鉄鏃(部分)



4



1 Ⅱ号墳石室内出土鉄鏃・刀子・金銅製金具



2 Ⅱ号墳石室内出土金銅製金具・刀装具

1 遺



物



2



3

4

1 Ⅷ号墳石室内出土装身具(切子玉・棗玉・勾玉・耳環)



1

2



3

2 Ⅷ号墳石室内出土装身具(小玉・丸玉・管玉)



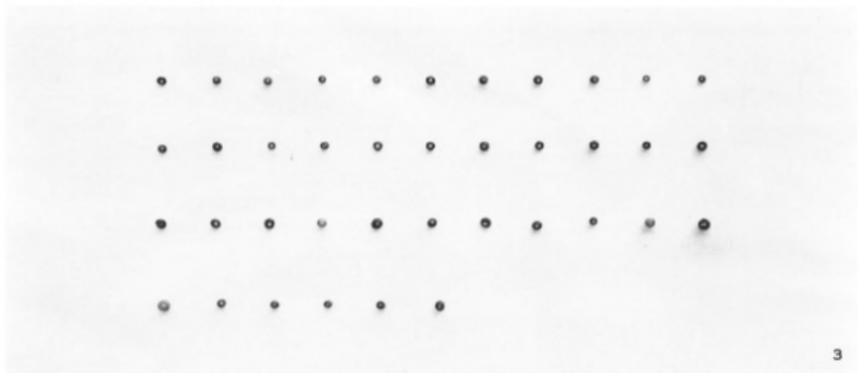
1 IX号墳石室内出土直刀



1

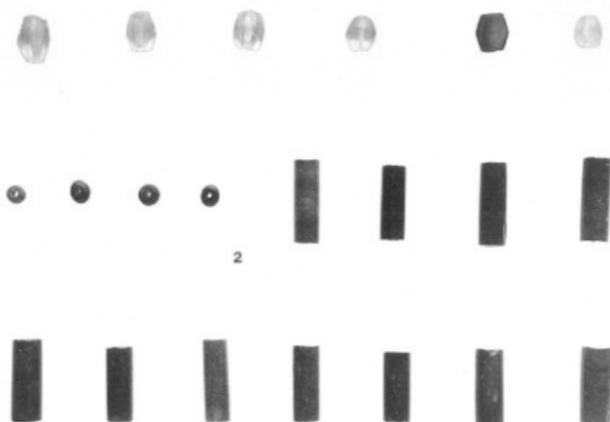


2



3

2 IX号墳石室内出土刀子・装身具(小玉)



2

3

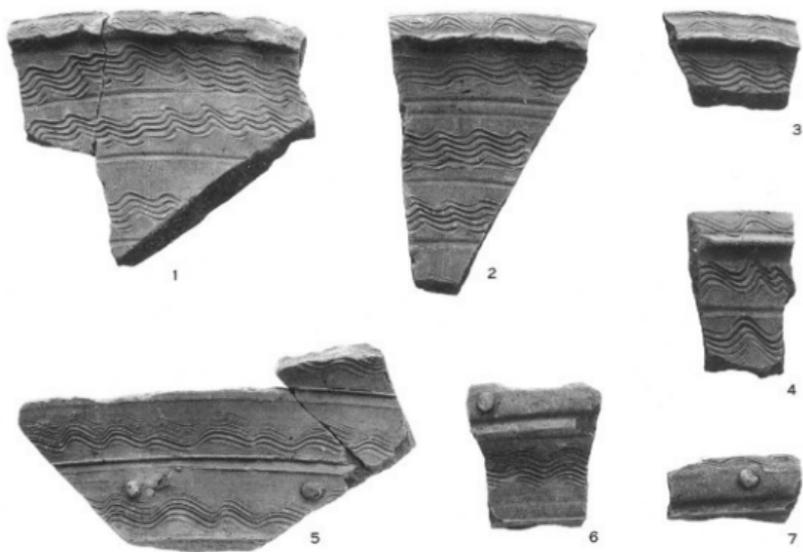
1 Ⅷ号墳石室内出土装身具(切子玉・小玉・管玉)



2 Ⅷ号墳石室内出土人骨片



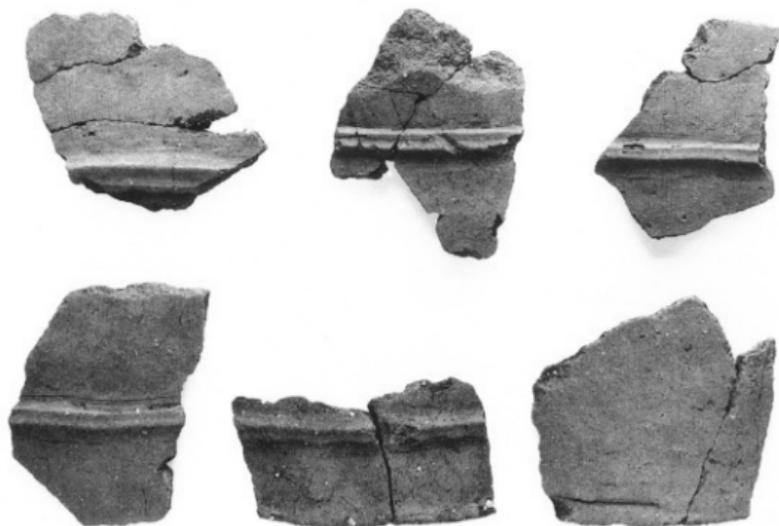
1 No 22 Ⅲ号墳石室周辺出土大甕片



1 No.22 Ⅲ号墳石室周辺出土大甕片



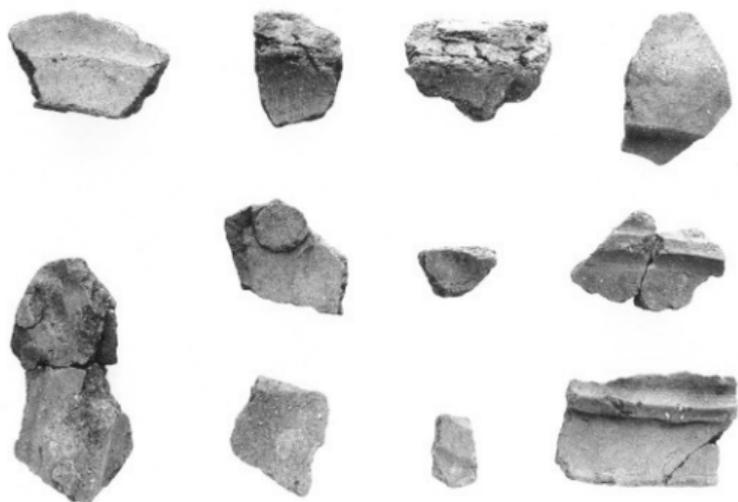
2 No.22 Ⅲ号墳石室周辺出土燈明皿



1 No 22 出土ハニワ片



2 No 22 出土ハニワ片



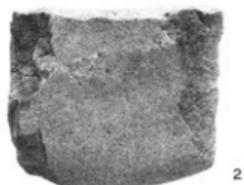
No 22 出土ハニワ片



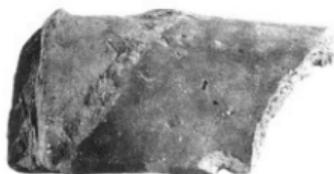
1

2

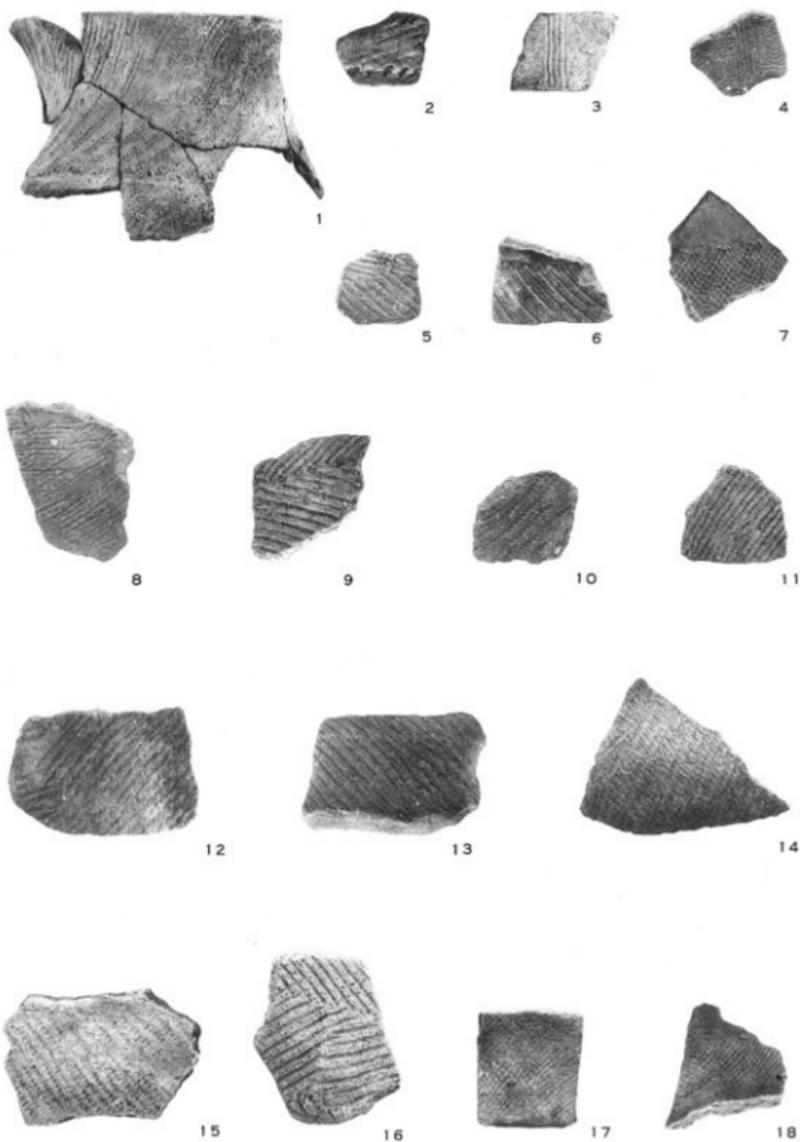
2 No 22 出土土器



1 No. 22 出土石器(サイド・スクレイパー・石斧)



2 No. 22 出土中世瓦・蔵骨器



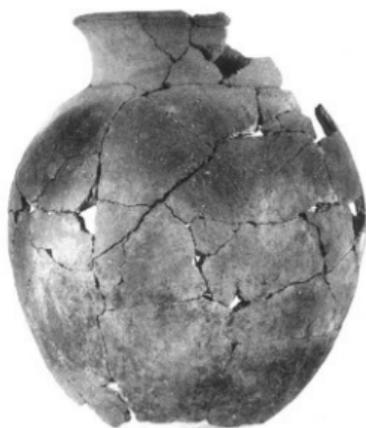
1 № 22 S I - 1 出土土器



1



2

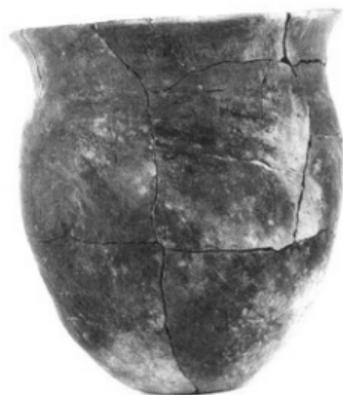


3

1 №22 S I - 2 出土土器



1



2

2 №22 S I - 4 出土土器(1)

2

物

4

6

7



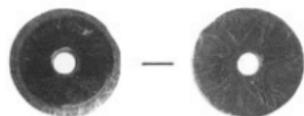
1



3



5



6



I №22 S I - 4 出土土器(2)・紡錘車



1



2



3



4



5

1 №22 S I - 6 出土土器



1



2



3



4

2 №22 S I - 7 出土土器



1



2



3

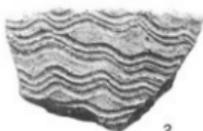


4



5

1 No 22 S I - 8 出土土器(1~3) S I - 9 出土土器(4·5)



2



1



3

2 X号墳石棺周边表探土器



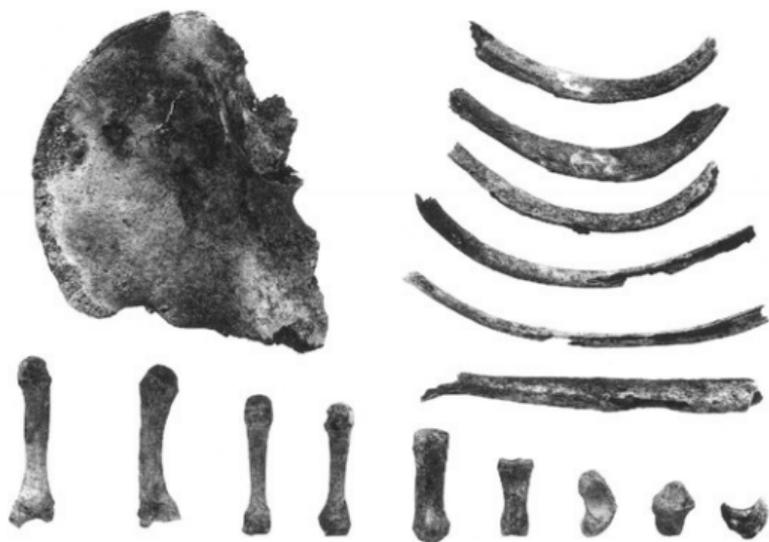
1 X号墳石棺内出土(9)



2 X号墳石棺内出土(8)



1 X号墳石棺内出土



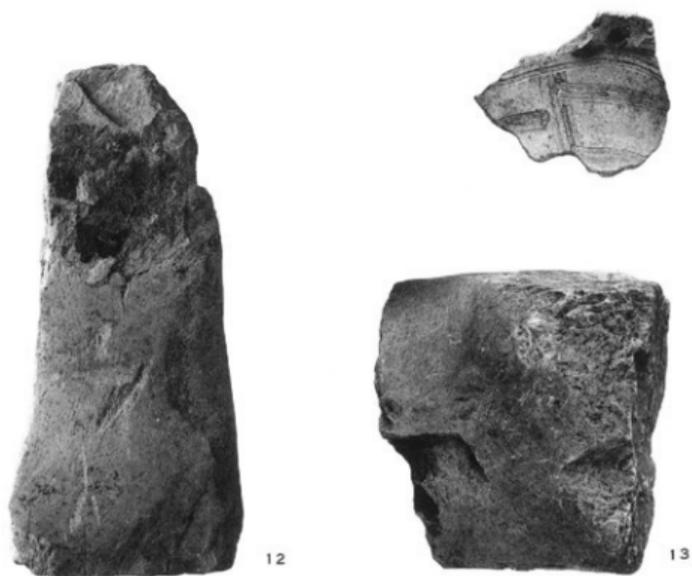
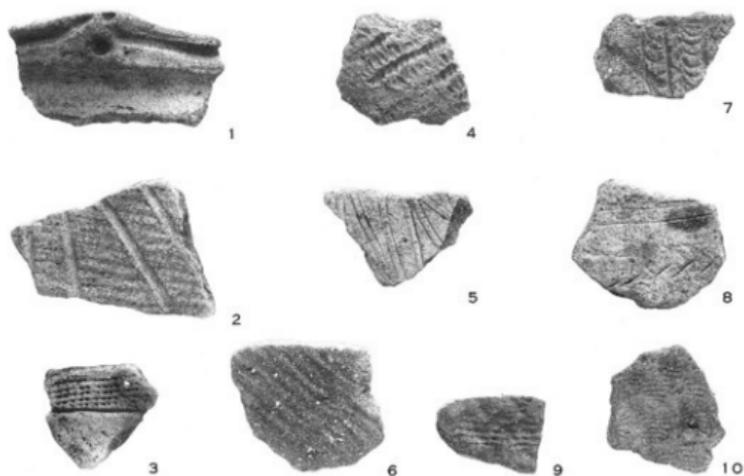
2 X号墳石棺内出土



1 X号墳石棺内出土



2 X号墳石棺内出土





1



2 物



3



4



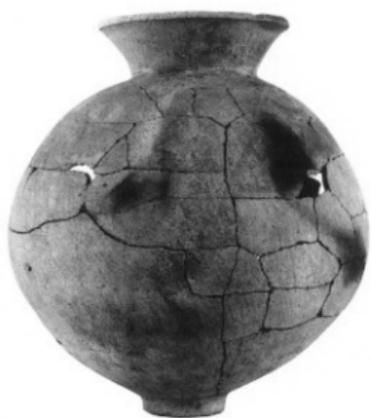
6



5



7



1



2



3



4



1



2



3



4



5



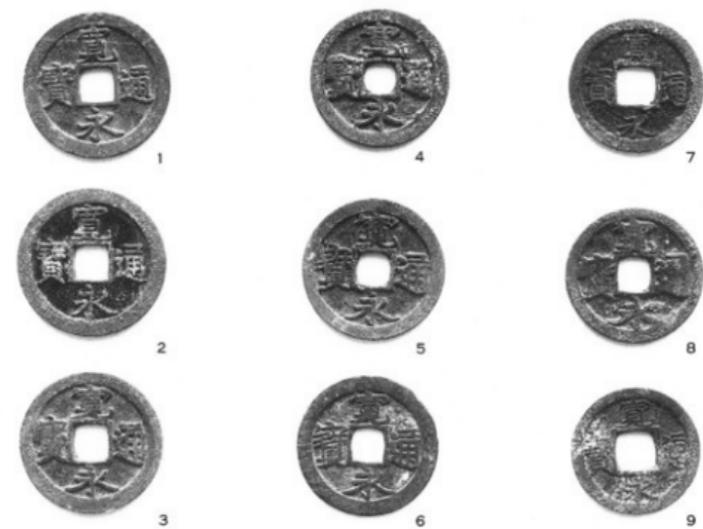
(参考資料)

6

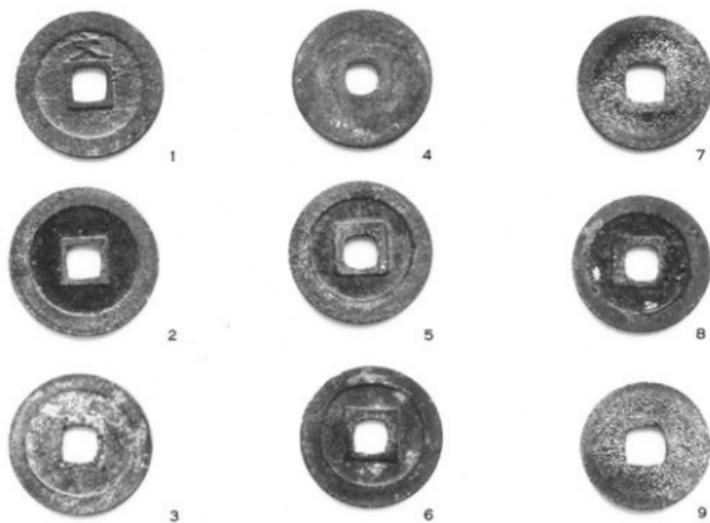


(参考資料)

7



1 No.18 (伊勢塚)出土古銭(表)



2 No.18 (伊勢塚)出土古銭(裏)



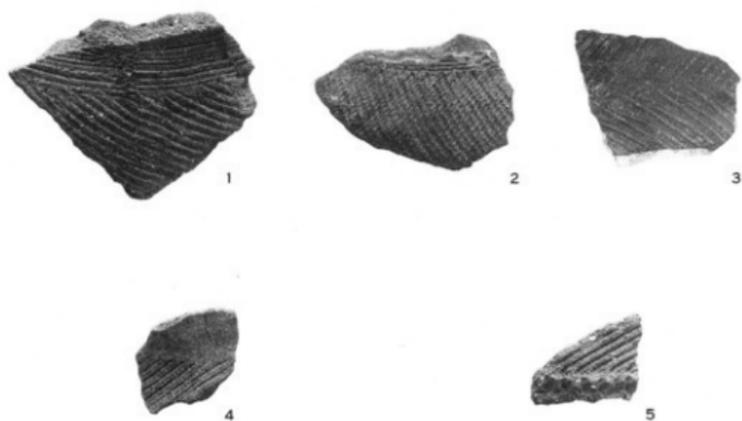
1 No 20トレンチ内出土土器・石斧



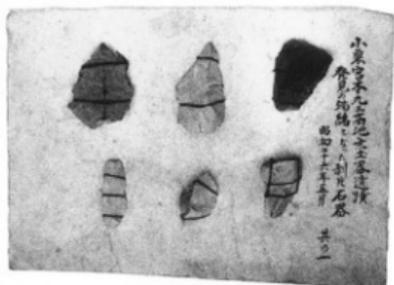
2 No 21トレンチ内出土土器



1 No 21 トレンチ内出土土器



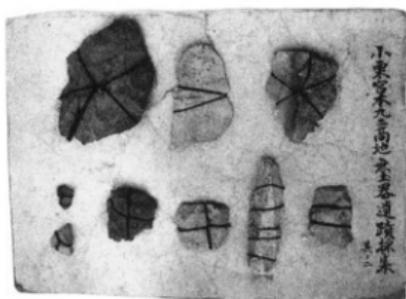
2 No 21 トレンチ内出土土器



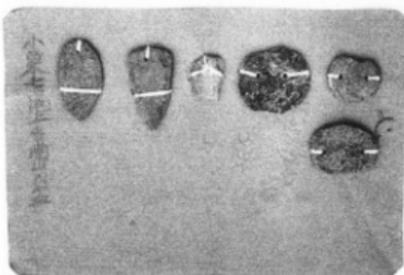
1



4



2



5



3



6

小栗地内出土品(「新治政古蹟」載)



1



2



3



4



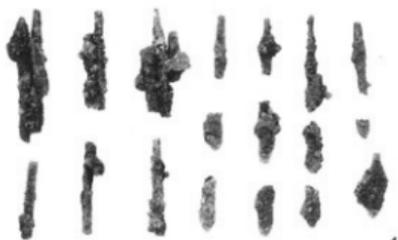
1



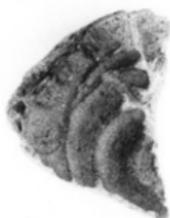
2



3



4



9



5



9



6



10



8



7

茨城県協和町文化財調査報告書 第1集

小栗地内遺跡群発掘調査報告書

発行 昭和 61 年 3 月 31 日

編集 協和町小栗地内遺跡調査会

発行 茨城県真壁郡協和町

印刷 有限会社 平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13
